鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（179）

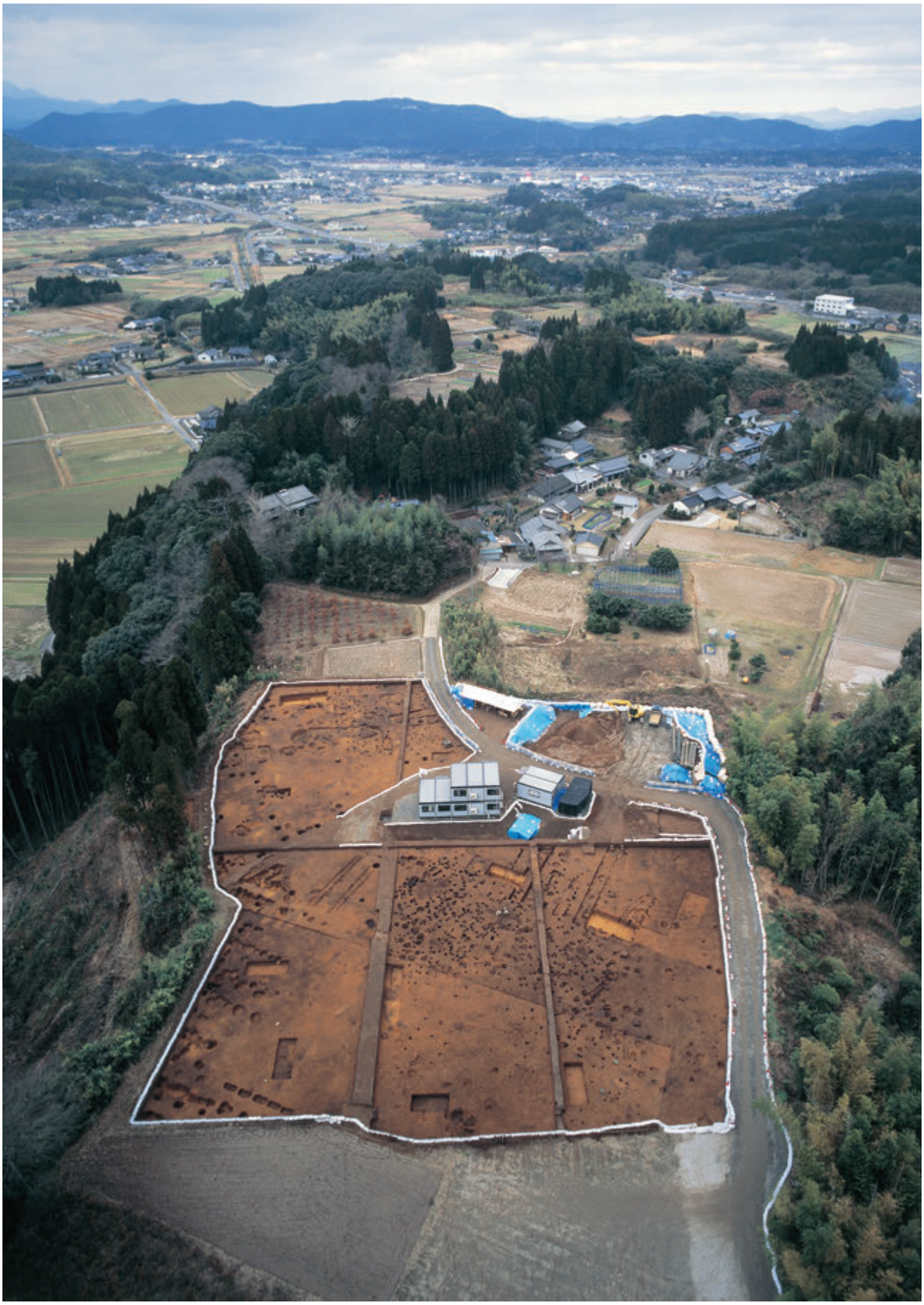
南九州西回り自動車道建設（薩摩川内都IC～高江IC間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（ＸＸＸⅥ）

山口（やまぐち）遺跡

（薩摩川内市都町）

２０１３年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



山口遺跡全景

塞ノ神式土器・耳栓

序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴って，平成21年度から平成23年度にかけて実施した山口遺跡の発掘調査の記録です。

この遺跡は，薩摩川内市都町に所在し，川内川の支流である木場谷川の中流域に広がる丘陵地にあります。調査の結果，旧石器時代から近世までの遺構・遺物が発見されました。

縄文時代草創期の土器と石器が共伴して検出されたことや，中世において掘立柱建物跡と石塔を伴う土坑墓がセット関係で検出されたことが特筆されます。これらは，南九州における当該期の研究を進める上で貴重な資料を提供したものと考えています。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助として大いに活用されることになれば幸いです。

最後に，調査に当たり御協力いただいた国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所，薩摩川内市教育委員会，関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　　長　　寺　田　　仁　志

報 告 書 抄 録

ふりがな	やまぐちいせき
書　　名	山口遺跡
副 書 名	南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	ＸＸＸⅥ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	１７９
編 集 者 名	廣　栄次・鶴田靜彦・稲垣友裕
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL0995-48-5811　FAX0995-48-5821
発 行 年 月	2013年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積（㎡）
山口遺跡 （やまぐちいせき）	鹿児島県 （かごしまけん） 薩摩川内市 （さつませんだいし） 都町 （みやこまち）	46215	6-151	31° 49′	130° 19′	本調査 2010.1.20 ～ 2010.2.12 2010.5.10 ～ 2011.2.24 2011.5.6 ～ 2012.3.9	 304.7 9,600.0 7,016.0

所収遺跡名	種別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物
山口遺跡	散布地	旧石器時代～縄文時代草創期	石器ブロック11基 落し穴５基 礫群５基	細石刃，細石刃核，打製石鏃，削器，土器
		縄文時代早期	石器ブロック４基 落し穴６基 土坑８基 集石８基	前平式土器（志風頭段階），押型文土器，変形撚糸文土器，手向山式土器，平栫式土器，塞ノ神式土器，耳栓，打製石鏃，石銛，石匙，異形石器，削器，掻器，小型両面調整石器，楔形石器，使用痕剥片，石核，石錘，礫器，磨石・敲石，石皿
		縄文時代後・晩期	落し穴１基 土坑２基	市来式土器，粗製深鉢形土器，磨製石斧，打製石鏃，掻器，削器，礫器，磨石・敲石，楔形石器，石核
		弥生・古墳時代	なし	型式不明（弥生時代），東原式土器，磨製石鏃，小玉，不明石製品
	集落	古代	掘立柱建物跡４棟 土坑５基　畝溝２面	土師器，須恵器，越州窯系青磁碗，土錘，土人形，土製不明製品，紡錘車，古銭
		中世	掘立柱建物跡37棟 墓跡４基　土坑263基 溝状遺構４条（道跡含む） 畝溝１面	土師器，須恵器，瓦質土器，龍泉窯系青磁，白磁，青花，中国製陶器，滑石製石鍋，滑石不明製品，刀子，雁股鏃，鉄釘，古銭，金属不明製品，砥石
	散布地	近世	溝状遺構１条（道跡）	薩摩焼，肥前系陶磁器，古銭

要　　約

山口遺跡では，旧石器時代～縄文草創期の細石刃製作に伴う上牛鼻産や霧島系黒曜石のブロックが11基検出され，土器の小片も共伴した。周囲には，落し穴や礫群も検出された。特に，細石刃に伴い土器が出土したことは，旧石器時代終末期～縄文時代草創期の様相が捉えられる貴重な発見である。

縄文時代早期においては，塞ノ神式土器期における打製石鏃を中心とした石器ブロックや落し穴，土坑，集石などが検出され，狩猟生活の一端が捉えられる。口縁部が「く」の字に屈曲する特異な塞ノ神式土器が多数出土したことも特筆され，塞ノ神式土器の編年上，重要な資料である。

縄文後・晩期においても，基数は減少するものの縄文時代早期同様に，落し穴や土坑が検出され，当地における狩猟生活の継続が見いだせる。

弥生・古墳時代には，本遺跡における人間生活の営みを示す遺物等は希薄になるものの，古代において掘立柱建物跡や土坑などが検出され，遺物量も激増し，本遺跡における集落の萌芽が捉えられる。

中世においては，４つのエリアに分かれて，掘立柱建物跡群と墓跡がセット関係で共伴する「屋敷墓」の様相が確認された。木棺墓や再葬墓，石塔墓など異なる形態を有する屋敷墓の複雑な様相は，南九州に於ける屋敷墓の成立の起源を示すだけでなく，中世集落の発生や他地域との交流史研究上，重要な情報を提供するものと思われる。

山口遺跡位置図（S=1:25,000）

例　　言

1　本書は，南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴う山口遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県薩摩川内市都町に所在する。
3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4　発掘調査事業は，平成21年度から23年度に実施し，整理・報告書作成事業は，平成23年度から平成24年度にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
5　一般遺物の掲載番号は通し番号であり，遺構内遺物は，遺構毎に番号を振ってある。なお，本文，挿図，表，図版の遺物番号は一致する。
6　遺物注記等で用いた遺跡記号は「山口」である。また，発掘調査時に呼称・使用した遺構名は，報告書掲載に際し，遺構の性格や位置付け等の見直しやレイアウトの都合上，変更されている。報告書掲載の遺構名と実測原図・遺物の注記等の名称は異なっている可能性がある。なお，発掘調査の中で使用された旧名・旧番号は，各遺構の観察表に記載してある。
7　挿図の縮尺は，挿図毎に示した。
8　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。
9　本書で使用した方位は，すべて磁北である。
10　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は調査担当者が行った。また，空中写真の撮影は，（有）ふじたに委託した。
11　遺構位置図・遺物分布図の作成は廣栄次が担当し，整理作業員の協力を得て行った。
12　出土遺物の実測・遺構・遺物トレースは，廣・稲垣友裕・黒木梨絵・鶴田靜彦・冨田逸郎・玉利浩実が担当し，整理作業員の協力を得て行った。遺物実測の一部を（株）九州文化財研究所，（株）パスコに委託し，廣・冨田・鶴田が監修した。
13　出土遺物の写真撮影及び写真図版のレイアウト等は，鶴田・西園勝彦が行った。
14　本報告に係る自然科学分析は，放射性炭素年代測定・樹種同定を（株）加速器分析研究所に委託し，放射性炭素年代測定・種実同定・リン・カルシウム分析を（株）古環境研究所に委託した。
15　本書の編集は廣・稲垣が担当し，執筆担当は以下のとおりである。

第１章　鶴田・廣・稲垣
第２章　鶴田・稲垣・黒木
第３章　第１節　廣
　　第２節　廣
　　第３節　１　旧石器時代～縄文時代草創期　遺構（石器ブロックを除く）・土器 ……廣
　　石器ブロック・石器……冨田
　　２　縄文時代早期　遺構（石器ブロックを除く）・土器 ……廣
　　石器ブロック・石器……冨田
　　３　縄文時代後・晩期　遺構・土器……廣
　　石器……冨田
　　４　弥生・古墳時代　……廣
　　５　古代　遺構・遺物（土師器・内黒土師器を除く）……廣
　　土師器・内黒土師器……黒木
　　６　中世　遺構・遺物（土師器・青磁・白磁等を除く）……廣
　　土師器・青磁・白磁・青花等……黒木
　　７　近世　古銭……廣
　　陶磁器……黒木
第４章　（株）加速器分析研究所・（株）古環境研究所
第５章　第１節・第２節（３）～（６）・第３節　廣
　　第２節（１）（２）　冨田

16　本報告遺跡に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

凡　　例

1　基準方位は磁北であり，レベル数値は海抜絶対高である。

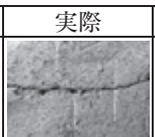
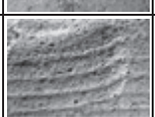
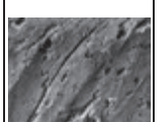
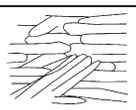
2　使用した土色及び胎土の色調は，『新版標準土色帖　2004年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。ただし，陶磁器の胎土の色調や釉調については，『標準土色帖』を基準としながら，一般的な色調感も加味して表現した。

3　遺構・遺物実測図の縮尺は，挿図中に記した。

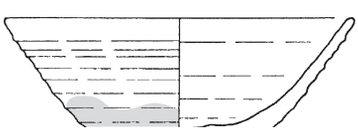
4　本稿中で使用される黒曜石の種類・産地に関する比定は，目視によるものであり，蛍光X線分析を行ったものではない。黒曜石の産地等の比定は，以下の特徴に基づいて行った。

産地	特　　徴
上牛鼻産	不純物を多く含み，漆黒で全く光を通さないもの。
三船産	不純物が不均一に入り，径0.5mm ～ 1 mm程度の石英質の不純物を含むもの。基質はアメ色を呈するものが多いが，まれにオリーブ灰色～黒色を呈する。
桑ノ木津留産	僅かに不純物を含み，アメ色～黒色を呈し，透明度が高い。基質に僅かな白濁や流理が見られるものを含む。
霧島系	僅かに不純物を含むもので，アメ色，オリーブ灰色，黒色を呈する。透明度は，殆どないものや透明度が低いものがある。
日東産	不純物がやや均一で，基質は黒色～アメ色を呈するもの。
針尾産	極僅かに不純物を含み，基質が灰色～オリーブ灰色を呈するもの。

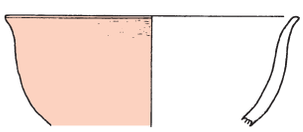
5　本書で用いる弥生～古代の土器における器面調整については，以下のように図示した。

調整	実際	図示例	特　　徴
ナデ			ナデ調整の内，ヘラ状工具の側縁端（幅0.5cm ～ 1㎝程）や始・終点（方形状の工具圧痕）が捉えられるものは，工具痕を図示した。
ハケメ			ヘラ状工具により，胎土に板目を明瞭に残すもの。
ケズリ			土器への押圧が強く，胎土中の鉱物や砂粒の移動が捉えられるものや胎土の削り取りが捉えられるもの。本稿の土師甕の内面ケズリには，ケズリの長さが短いのが多く捉えられた。目視によっては，ケズリと強いナデ，指頭押圧が明瞭に峻別できないのもある。ケズリ後，指頭によりナデ引いたり，指頭押圧を施した可能性もある。
ミガキ			2，3mm幅の工具痕が残され，器面が光沢を発する。本稿では，赤色土器や黒色土器，土師甕の一部で確認される。

6　煤付着については，径の回る土器についてのみ図示した。赤色顔料・黒色顔料の塗布については，小片でも図化した。なお，縄文土器に付着する煤については，本稿では図化していない。



煤付着範囲

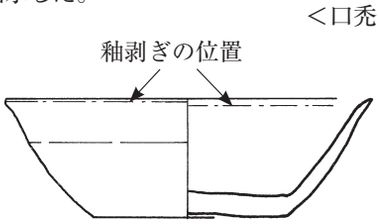


赤色塗布範囲

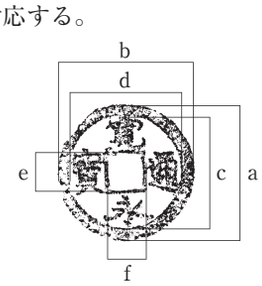
黒色塗布範囲

7　白磁・青磁等の釉剥ぎについては，以下のように図示した。

＜口禿口縁の例＞



8　古銭は以下の箇所を計測した。アルファベットは観察表と対応する。



目　　次

巻頭カラー１　山口遺跡全景
巻頭カラー２　塞ノ神式土器・耳栓
序　　文
報告書抄録
例　　言
凡　　例
目　　次

第１章　発掘調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯と経過 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の経過（日誌抄）…… 2
　第４節　整理・報告書作成作業 …… 3

第２章　遺跡の位置及び環境 …… 4
　第１節　遺跡の位置及び地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　発掘調査の方法と成果 …… 11
　第１節　発掘調査の方法 …… 11
　第２節　層序 …… 11
　第３節　旧石器～縄文時代草創期の調査 …… 16
　　１　調査の概要 …… 16
　　２　遺構 …… 17
　　３　遺物 …… 25
　第４節　縄文時代早期の調査 …… 37
　　１　調査の概要 …… 37
　　２　遺構 …… 38
　　３　遺物 …… 52
　第５節　縄文時代後・晩期の調査 …… 87
　　１　調査の概要 …… 87
　　２　遺構 …… 88
　　３　遺物 …… 88
　第６節　弥生・古墳時代の調査 …… 97
　　１　調査の概要 …… 97
　　２　遺物 …… 97
　第７節　古代の調査 …… 99
　　１　調査の概要 …… 99
　　２　遺構 …… 99
　　３　遺物 …… 106
　第８節　中世の調査 …… 145
　　１　調査の概要 …… 145
　　２　遺構 …… 148
　　３　遺物 …… 218
　第９節　近世の調査 …… 243
　　１　調査の概要 …… 243
　　２　遺物 …… 243
第４章　自然科学分析 …… 245

第５章　総括 …… 252

写真図版 …… 266

あとがき

挿 図 目 次

第１図　地形分類図 …… 5
第２図　周辺遺跡図 …… 10
第３図　遺跡全体図・グリッド図 …… 12
第４図　基本層序 …… 13
第５図　土層断面図(1) …… 14
第６図　土層断面図(2) …… 15
第７図　旧石器～縄文時代草創期遺構位置図 …… 16
第８図　旧石器～縄文時代草創期落し穴１号・２号実測図… 18
第９図　旧石器～縄文時代草創期落し穴３号・４号実測図… 19
第10図　旧石器～縄文時代草創期落し穴５号実測図 …… 20
第11図　旧石器～縄文時代草創期礫群１号・２号実測図 … 22
第12図　旧石器～縄文時代草創期礫群３号・４号実測図 … 23
第13図　旧石器～縄文時代草創期礫群５号実測図 …… 24
第14図　旧石器～縄文時代草創期遺物出土状況図 …… 25
第15図　旧石器～縄文時代草創期出土土器実測図 …… 26
第16図　旧石器～縄文時代草創期第１・２ブロック出土状況図・石器実測図 … 26
第17図　旧石器～縄文時代草創期第３ブロック出土状況図・石器実測図 … 27
第18図　旧石器～縄文時代草創期第４ブロック出土状況図・石器実測図(1) … 28
第19図　旧石器～縄文時代草創期第４ブロック石器実測図(2) … 29
第20図　旧石器～縄文時代草創期第５ブロック出土状況図・石器実測図 … 29
第21図　旧石器～縄文時代草創期第６ブロック出土状況図・石器実測図 … 30
第22図　旧石器～縄文時代草創期第７ブロック出土状況図・石器実測図 … 30
第23図　旧石器～縄文時代草創期第８ブロック出土状況図・石器実測図 … 31
第24図　旧石器～縄文時代草創期第９・10ブロック出土状況図・石器実測図 … 32
第25図　旧石器～縄文時代草創期第11ブロック出土状況図・石器実測図 … 32
第26図　旧石器～縄文時代草創期ブロック外出土石器実測図(1) … 33
第27図　旧石器～縄文時代草創期ブロック外出土石器実測図(2) … 34
第28図　縄文時代早期遺構位置図 …… 37
第29図　縄文時代早期落し穴１号・２号実測図 …… 39
第30図　縄文時代早期落し穴３号実測図 …… 40
第31図　縄文時代早期落し穴４号・５号実測図 …… 41
第32図　縄文時代早期落し穴６号実測図 …… 43
第33図　縄文時代早期土坑１号・２号実測図 …… 43
第34図　縄文時代早期土坑３～６号実測図 …… 44
第35図　縄文時代早期土坑７号・８号実測図・出土遺物実測図… 45
第36図　縄文時代早期集石１号・２号実測図 …… 48
第37図　縄文時代早期集石３～５号実測図 …… 49
第38図　縄文時代早期集石６号・７号実測図 …… 50
第39図　縄文時代早期集石８号実測図 …… 51
第40図　縄文時代早期土器１類実測図 …… 57
第41図　縄文時代早期土器２類実測図 …… 57
第42図　縄文時代早期土器３類実測図 …… 57
第43図　縄文時代早期土器４類実測図 …… 57
第44図　縄文時代早期土器５－１・２類実測図 …… 58
第45図　縄文時代早期土器６類・７－２類実測図 …… 58
第46図　縄文時代早期土器７－２・３類実測図 …… 59
第47図　縄文時代早期土器７－４類実測図 …… 60
第48図　縄文時代早期土器７－４・５類実測図 …… 61
第49図　縄文時代早期土器７－６・７類実測図 …… 62
第50図　縄文時代早期土器７－７・８類実測図 …… 63
第51図　縄文時代早期土器７－８・９類　７類胴部実測図 … 64
第52図　縄文時代早期土器７類底部・土製品実測図 …… 65
第53図　縄文時代早期石器出土状況図 …… 66
第54図　縄文時代早期第１ブロック出土状況図・石器実測図(1) … 67
第55図　縄文時代早期第１ブロック石器実測図(2) …… 68
第56図　縄文時代早期第２・３ブロック出土状況図・石器実測図 … 69
第57図　縄文時代早期第４ブロック出土状況図・石器実測図 … 70
第58図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(1) …… 70
第59図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(2) …… 72
第60図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(3) …… 73
第61図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(4) …… 74
第62図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(5) …… 75
第63図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(6) …… 76
第64図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(7) …… 77
第65図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(8) …… 78
第66図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(9) …… 79
第67図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(10) …… 80
第68図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(11) …… 81
第69図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図(12) …… 82
第70図　縄文時代後・晩期遺構位置図・遺物出土状況図 … 87
第71図　縄文時代後・晩期落し穴１号・土坑１・２号実測図 … 89
第72図　縄文時代後・晩期土器８・９類実測図 …… 90
第73図　縄文時代後・晩期石器実測図(1) …… 91
第74図　縄文時代後・晩期石器実測図(2) …… 93
第75図　縄文時代後・晩期石器実測図(3) …… 94
第76図　縄文時代後・晩期石器実測図(4) …… 95
第77図　弥生・古墳時代土器実測図(1) …… 97
第78図　弥生・古墳時代土器(2)・石器・石製品実測図 …… 98

第79図　古代遺構位置図 …… 99
第80図　古代畝溝１号・２号実測図 …… 101
第81図　古代掘立柱建物跡１号・２号実測図 …… 102
第82図　古代掘立柱建物跡３号・４号実測図 …… 103
第83図　古代土坑１～４号実測図 …… 105
第84図　古代土坑５号位置図 …… 106
第85図　古代土坑５号実測図 …… 106
第86図　古代遺物出土状況図 …… 107
第87図　古代土師器（蓋・埦・坏）実測図(1) …… 111
第88図　古代土師器（坏）実測図(2) …… 112
第89図　古代土師器（坏・皿）実測図(3) …… 113
第90図　古代内黒土師器（埦）実測図(1) …… 117
第91図　古代内黒土師器（埦）(2)・墨書土器実測図 …… 118
第92図　古代土師器（甕）実測図(1) …… 121
第93図　古代土師器（甕）実測図(2) …… 122
第94図　古代土師器（甕）実測図(3) …… 123
第95図　古代土師器（甕）実測図(4) …… 124
第96図　古代土師器（甕・鉢）実測図(5) …… 125
第97図　古代土師器（甕・鉢）実測図(6) …… 126
第98図　古代甑・把手実測図 …… 128
第99図　古代須恵器（蓋・甕）実測図(1) …… 130
第100図　古代須恵器（甕）実測図(2) …… 131
第101図　古代須恵器（甕）実測図(3) …… 132
第102図　古代須恵器（壺）実測図(4) …… 133
第103図　古代須恵器（壺）実測図(5) …… 134
第104図　古代土錘実測図 …… 135
第105図　古代土製品実測図 …… 135
第106図　古代円盤状土製品・紡錘車・古銭実測図 …… 135
第107図　中世遺構位置図 …… 145
第108図　中世Ａ群遺構位置図 …… 146
第109図　中世Ｂ群遺構位置図 …… 147
第110図　中世Ｃ群遺構位置図 …… 148
第111図　中世Ｄ群遺構位置図 …… 149
第112図　中世Ａ群Ⅰ期掘立柱建物跡１号実測図 …… 151
第113図　中世Ａ群Ⅰ期掘立柱建物跡２号実測図 …… 152
第114図　中世Ａ群Ⅰ期掘立柱建物跡３・４号実測図 …… 153
第115図　中世Ａ群Ⅰ期掘立柱建物跡５・６号実測図 …… 154
第116図　中世Ａ群Ⅱ期掘立柱建物跡７号実測図 …… 155
第117図　中世Ａ群Ⅱ期掘立柱建物跡８・９号実測図 …… 156
第118図　中世Ａ群Ⅱ期掘立柱建物跡10号実測図 …… 157
第119図　中世Ａ群Ⅰ・Ⅱ期１号墓実測図 …… 159
第120図　中世Ａ群Ⅲ期掘立柱建物跡11号実測図 …… 160
第121図　中世Ａ群Ⅲ期掘立柱建物跡12・13号実測図 …… 161
第122図　中世Ａ群Ⅲ期掘立柱建物跡14・15号実測図 …… 162
第123図　中世Ａ群Ⅲ期２号墓・出土遺物実測図(1) …… 163
第124図　中世Ａ群Ⅲ期２号墓出土遺物実測図(2) …… 164
第125図　中世Ａ群土坑１～14号実測図 …… 165
第126図　中世Ａ群土坑15～27号実測図 …… 166
第127図　中世Ａ群土坑28～40号実測図 …… 167
第128図　中世Ａ群土坑41～54号実測図 …… 168
第129図　中世Ａ群土坑55～65号実測図 …… 169
第130図　中世Ａ群土坑66～76号実測図 …… 170
第131図　中世Ａ群土坑77～87号・柱穴実測図(1) …… 171
第132図　中世Ａ群柱穴実測図(2) …… 172
第133図　中世Ｂ群Ⅱ期掘立柱建物跡16号実測図 …… 174
第134図　中世Ｂ群Ⅱ期掘立柱建物跡17・18号実測図 …… 175
第135図　中世Ｂ群Ⅱ期掘立柱建物跡19・20号実測図 …… 176
第136図　中世Ｂ群Ⅱ期掘立柱建物跡21・22号実測図 …… 177
第137図　中世Ｂ群Ⅱ期掘立柱建物跡23号・３号墓実測図 … 179
第138図　中世Ｂ群Ⅱ期３号墓出土遺物実測図 …… 180
第139図　中世Ｂ群Ⅲ期掘立柱建物跡24・25号実測図 …… 181
第140図　中世Ｂ群土坑88～99号実測図 …… 182
第141図　中世Ｂ群土坑100～117号実測図 …… 184
第142図　中世Ｂ群土坑118～132号実測図 …… 185
第143図　中世Ｂ群土坑133～147号実測図 …… 186
第144図　中世Ｂ群土坑148～169号実測図 …… 187
第145図　中世Ｂ群土坑170～184号実測図 …… 188
第146図　中世Ｂ群土坑185～200号実測図 …… 189
第147図　中世Ｂ群土坑201～214号実測図 …… 190
第148図　中世Ｂ群土坑215～218号・柱穴実測図 …… 191
第149図　中世Ｃ群Ⅱ期掘立柱建物跡26・27号実測図 …… 192
第150図　中世Ｃ群Ⅱ期掘立柱建物跡28号実測図 …… 193
第151図　中世Ｃ群Ⅱ期４号墓実測図 …… 194
第152図　中世Ｃ群Ⅲ期掘立柱建物跡29・30号実測図 …… 196
第153図　中世Ｃ群Ⅲ期掘立柱建物跡31・32号実測図 …… 197
第154図　中世Ｃ群土坑219～229号実測図 …… 198
第155図　中世Ｃ群土坑230～245号実測図 …… 199
第156図　中世Ｃ群土坑246～248号・柱穴実測図 …… 200
第157図　中世Ｄ群Ⅱ期掘立柱建物跡33号実測図 …… 201
第158図　中世Ｄ群Ⅱ期掘立柱建物跡34・35号実測図 …… 202
第159図　中世Ｄ群Ⅲ期掘立柱建物跡36号実測図 …… 203
第160図　中世Ｄ群Ⅲ期掘立柱建物跡37号実測図 …… 204
第161図　中世Ｄ群土坑249～263号実測図 …… 205
第162図　中世Ｄ群柱穴実測図 …… 206
第163図　中世溝状遺構１・２号実測図 …… 206
第164図　中世溝状遺構３・４号実測図 …… 207
第165図　中世畝溝実測図 …… 208
第166図　中世遺物出土状況図 …… 218
第167図　中世土師器（坏・皿）実測図(1) …… 220
第168図　中世土師器（皿）実測図(2) …… 221
第169図　中世須恵器（甕・壺）・瓦質土器（擂鉢）実測図(1) … 223
第170図　中世瓦質土器（擂鉢・鉢）(2)・焙烙把手実測図 … 224
第171図　中世白磁（碗・坏・皿・水注）実測図(1) …… 227
第172図　中世青磁（碗・皿）実測図(1) …… 228
第173図　中世青磁（碗・皿・香炉・蓋）(2)・中国陶器他実測図 … 229
第174図　中世青花実測図 …… 231
第175図　中世滑石製石鍋他実測図 …… 231
第176図　中世鉄製品他実測図 …… 233
第177図　中世古銭・坩堝・鞴羽口実測図 …… 234
第178図　中世砥石実測図(1) …… 234
第179図　中世砥石実測図(2) …… 235
第180図　近世陶磁器実測図(1) …… 243
第181図　近世陶磁器実測図(2) …… 244
第182図　近世古銭実測図 …… 244
第183図　山口遺跡の種実 …… 248
第184図　山口遺跡の炭化材 …… 249
第185図　プレス試料と元素マッピング図およびポイント分析箇所 … 251
第186図　縄文時代後・晩期の遺構位置図と樹木横転図 …… 252
第187図　剝片素材細石刃核の製作工程 …… 257
第188図　７類（塞ノ神式土器）の編年的位置付け(1) …… 261
第189図　７類（塞ノ神式土器）の編年的位置付け(2) …… 262
第190図　外面にタタキ痕をもつ土師器 …… 263
第191図　山口遺跡出土の火打石 …… 265
第192図　山口遺跡周辺の包含層の残存状況 …… 266

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表(1) …… 8
第２表　周辺遺跡地名表(2) …… 9
第３表　構成礫の重量別点数（礫群１号） …… 21
第４表　構成礫の重量別点数（礫群２号） …… 21
第５表　構成礫の重量別点数（礫群３号） …… 21
第６表　構成礫の重量別点数（礫群４号） …… 21
第７表　構成礫の重量別点数（礫群５号） …… 24
第８表　旧石器～縄文時代草創期落し穴計測表 …… 24
第９表　旧石器～縄文時代草創期礫群計測表 …… 24
第10表　旧石器～縄文時代草創期土器観察表 …… 35
第11表　旧石器～縄文時代草創期石器観察表(1) …… 35
第12表　旧石器～縄文時代草創期石器観察表(2) …… 36
第13表　構成礫の重量別点数（集石１号） …… 46
第14表　構成礫の重量別点数（集石２号） …… 46
第15表　構成礫の重量別点数（集石３号） …… 47
第16表　構成礫の重量別点数（集石４号） …… 47
第17表　構成礫の重量別点数（集石５号） …… 47
第18表　構成礫の重量別点数（集石６号） …… 47
第19表　構成礫の重量別点数（集石７号） …… 52
第20表　構成礫の重量別点数（集石８号） …… 52
第21表　縄文時代早期落し穴計測表 …… 52
第22表　縄文時代早期土坑計測表 …… 52
第23表　縄文時代早期集石計測表 …… 52
第24表　縄文時代早期土坑内遺物観察表（土器） …… 52
第25表　縄文時代早期集石内遺物観察表（石器） …… 52
第26表　縄文時代早期土器分類表(1) …… 53
第27表　縄文時代早期土器分類表(2) …… 54
第28表　縄文時代早期土器観察表(1) …… 83
第29表　縄文時代早期土器観察表(2) …… 84
第30表　縄文時代早期土器観察表(3) …… 85
第31表　縄文時代早期石器観察表(1) …… 85
第32表　縄文時代早期石器観察表(2) …… 86
第33表　縄文時代後・晩期落し穴計測表 …… 88
第34表　縄文時代後・晩期土坑計測表 …… 88
第35表　縄文時代後・晩期土器分類表 …… 90
第36表　縄文時代後・晩期土器観察表 …… 96
第37表　縄文時代後・晩期石器観察表 …… 96
第38表　弥生・古墳時代土器観察表 …… 98
第39表　弥生・古墳時代石器観察表 …… 98
第40表　弥生・古墳時代石製品観察表 …… 98
第41表　古代土師器分類表 …… 108
第42表　古代内黒土師器分類表 …… 108

第43表　古代土師甕・鉢分類表 …… 119
第44表　古代須恵器分類表 …… 129
第45表　古代畝溝計測表 …… 136
第46表　古代掘立柱建物跡計測表 …… 136
第47表　古代土坑計測表 …… 136
第48表　古代土坑内遺物観察表 …… 137
第49表　古代土師器観察表(1) …… 137
第50表　古代土師器観察表(2) …… 138
第51表　古代土師器観察表(3) …… 139
第52表　古代内黒土師器観察表(1) …… 139
第53表　古代内黒土師器観察表(2) …… 140
第54表　古代墨書土器観察表 …… 140
第55表　古代土師甕・鉢観察表(1) …… 141
第56表　古代土師甕・鉢観察表(2) …… 142
第57表　古代甑・把手観察表(1) …… 142
第58表　古代甑・把手観察表(2) …… 143
第59表　古代須恵器観察表(1) …… 143
第60表　古代須恵器観察表(2) …… 144
第61表　古代土錘・土製品観察表 …… 144
第62表　古代紡錘車観察表 …… 144
第63表　古代古銭観察表 …… 144
第64表　中世遺構内遺物観察表（土師器）(1) …… 208
第65表　中世遺構内遺物観察表（土師器）(2) …… 209
第66表　中世遺構内遺物観察表（陶磁器） …… 210
第67表　中世遺構内遺物観察表（土製品） …… 210
第68表　中世遺構内遺物観察表（滑石製品） …… 210
第69表　中世遺構内遺物観察表（鉄製品） …… 210
第70表　中世遺構内遺物観察表（砥石） …… 210
第71表　中世掘立柱建物跡計測表Ａ－Ⅰ・Ⅱ期 …… 211
第72表　中世掘立柱建物跡計測表Ａ－Ⅱ・Ⅲ期・Ｂ－Ⅱ期 … 212
第73表　中世掘立柱建物跡計測表Ｂ－Ⅱ・Ⅲ期 …… 213
第74表　中世掘立柱建物跡計測表Ｃ－Ⅱ・Ⅲ期・Ｄ－Ⅱ期 … 214
第75表　中世掘立柱建物跡計測表Ｄ－Ⅱ・Ⅲ期 …… 215
第76表　中世Ａ群土坑・柱穴計測表 …… 216
第77表　中世Ｂ群墓跡・土坑・柱穴計測表(1) …… 216
第78表　中世Ｂ群土坑・柱穴計測表(2) …… 217
第79表　中世Ｃ群土坑・柱穴計測表 …… 217
第80表　中世Ｄ群土坑・柱穴計測表 …… 217
第81表　中世墓（１～４号）計測表 …… 217
第82表　中世溝状遺構計測表 …… 217
第83表　中世畝溝計測表 …… 217
第84表　中世土師器分類表 …… 219
第85表　中世瓦質土器分類表 …… 222
第86表　中世土師器観察表(1) …… 235
第87表　中世土師器観察表(2) …… 236
第88表　中世土師器観察表(3) …… 237
第89表　中世墨書土器観察表 …… 237
第90表　中世須恵器・瓦質土器観察表(1) …… 237
第91表　中世須恵器・瓦質土器観察表(2) …… 238
第92表　中世白磁観察表(1) …… 238
第93表　中世白磁観察表(2) …… 239
第94表　中世青磁観察表(1) …… 239
第95表　中世青磁観察表(2) …… 240
第96表　中世青白磁観察表 …… 241
第97表　中世中国陶器観察表 …… 241
第98表　中世青花観察表 …… 241
第99表　中世滑石製品観察表 …… 241
第100表　中世鉄製品観察表 …… 242
第101表　中世古銭観察表 …… 242
第102表　中世坩堝・鞴羽口観察表 …… 242
第103表　中世砥石観察表 …… 242
第104表　近世陶磁器観察表 …… 244
第105表　近世古銭観察表 …… 244
第106表　放射性炭素年代測定結果（補正あり） …… 245
第107表　放射性炭素年代測定結果（補正なし） …… 246
第108表　暦年較正結果 …… 246
第109表　試料と方法一覧 …… 246
第110表　放射性炭素年代測定結果 …… 247
第111表　暦年較正結果 …… 247
第112表　山口遺跡から採取された炭化種実の同定結果 …… 248
第113表　山口遺跡から採取されたイネ炭化果実の計測値 … 248
第114表　山口遺跡から採取されたイネの粒形とその大きさ … 248
第115表　山口遺跡の樹種同定結果 …… 249
第116表　山口遺跡４号墓から採取された試料の蛍Ｘ線分析結果 … 250
第117表　山口遺跡４号墓から採取された試料のリン・カルシウム含量 … 251
第118表　古代器種組成比率 …… 254
第119表　旧石器時代～縄文時代後・晩期の器種・石材組成比率 … 259
第120表　二重口縁を呈する塞ノ神式土器出土一覧（鹿児島県内） … 263
第121表　器面に敲き痕を有する土師器出土一覧（鹿児島県内） … 264
第122表　鉄石英（上）とメノウ（下）の重さ別出土点数 … 264

図 版 目 次

遠景 …… 図版１
土層 …… 図版２
旧石器時代～縄文草創期　落し穴１号 …… 図版３
旧石器時代～縄文草創期　落し穴４号(1) …… 図版４
旧石器時代～縄文草創期　落し穴４号(2) …… 図版５
①礫群１号　②礫群２号　③第８号ブロック …… 図版６
縄文早期　落し穴２号 …… 図版７
縄文早期　落し穴４号 …… 図版８
縄文早期　落し穴６号 …… 図版９
縄文早期　土坑２号 …… 図版10
縄文早期　土坑１・５号 …… 図版11
①縄文早期土坑７号　②土坑４号　③土坑８号 …… 図版12
④土坑３号　⑤土坑４号　⑥土坑８号
①縄文時代早期土坑７号　②土坑３号 …… 図版13
③遺構検出風景
①縄文早期集石２号　②同断面 …… 図版14
①②縄文早期ブロック …… 図版15
③④⑤⑥石皿出土状況
①古代畝溝上面プラン検出状況　②③検出状況 …… 図版16
①③古代掘立柱建物跡２号 …… 図版17
②④同２号　⑤同３号
古代焼土遺構及び検出風景 …… 図版18
古代土坑５号（貝殻検出状況） …… 図版19
古代土坑５号完掘状況及び検出風景 …… 図版20
古代遺物出土状況 …… 図版21
中世ピット検出風景及びピット検出状況 …… 図版22
中世ピット検出状況 …… 図版23
①中世掘立柱建物跡15号　②同５号　③同13号 …… 図版24
①中世掘立柱建物跡Ａ群　②同Ｂ群　③同Ａ群 …… 図版25
１号墓 …… 図版26
２号墓(1) …… 図版27
２号墓(2) …… 図版28
２号墓(3) …… 図版29
３号墓 …… 図版30
４号墓 …… 図版31
４号墓平面プランと断面 …… 図版32
中世土坑群(1) …… 図版33
中世土坑群(2) …… 図版34
中世溝状遺構平面プランと完掘状況 …… 図版35
現地説明会(1) …… 図版36
現地説明会(2) …… 図版37
旧石器時代～縄文時代草創期遺物 …… 図版38
縄文時代早期の遺物(1) …… 図版39
縄文時代早期の遺物(2) …… 図版40
縄文時代早期の遺物(3) …… 図版41
縄文時代早期の遺物(4) …… 図版42
縄文時代早期の遺物(5) …… 図版43
縄文時代早期石器(1) …… 図版44
縄文時代早期石器(2) …… 図版45
縄文時代早期石器(3) …… 図版46
縄文時代早期石器(4) …… 図版47
古墳時代の土器・弥生時代の石器 …… 図版48
古代土師器(1) …… 図版49
古代土師器(2) …… 図版50
古代土師器(3) …… 図版51
古代土師器(4) …… 図版52
古代土師器(5) …… 図版53
古代土師器(6) …… 図版54
古代土師器・その他 …… 図版55
古代須恵器(1) …… 図版56
古代須恵器(2) …… 図版57
古代須恵器(3) …… 図版58
古代円盤状土製品・紡錘車・その他 …… 図版59
古代土坑５号出土貝殻 …… 図版60
中世出土遺物(1) …… 図版61
中世出土遺物(2) …… 図版62
中世出土遺物(3) …… 図版63
中世出土遺物(4) …… 図版64
中世出土遺物(5) …… 図版65
中世出土遺物(6) …… 図版66
中世出土遺物(7)・２号墓出土遺物 …… 図版67
近世出土遺物 …… 図版68

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯と経過

国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下鹿児島国道事務所）は「南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設」の施工計画に基づき，事業区内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下文化財課）に照会した。

これを受けて，文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）が平成18年に計画路線の分布調査をしたところ，事業区内に山口遺跡の所在が判明した。

分布調査の結果を受けて鹿児島国道事務所，文化財課，埋文センターの三者で協議を行い，埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため，事業着手前に発掘調査を実施することになった。

発掘調査は，平成22年１月20日から平成22年2月12日の期間に304.7㎡を，また平成22年5月10日（月）から平成23年2月24日（木）の期間に9,600㎡を，さらには平成23年5月6日（月）から平成24年3月9日（金）の期間に7,016㎡を対象とし，合計16,920.7㎡の発掘調査を実施した。

第２節　調査の組織

事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所

〈発掘調査・平成21年度〉

調査主体　鹿児島県教育委員会

調査総括　県立埋蔵文化財センター

	所長	山下　吉美
調査企画	次長兼総務課長	齊藤　守重
	次長兼南の縄文調査室長	青﨑　和憲
	調査第二課長	彌榮　久志
	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	冨田　逸郎
調査担当	文化財主事	抜水　茂樹
	文化財主事	田畑　哲治
	文化財主事	市村　哲二
調査事務	総務係長	紙屋　伸一
	専門員	鳥越　寛晴

〈発掘調査・平成22年度〉

調査主体　鹿児島県教育委員会

調査総括　県立埋蔵文化財センター

	所長	山下　吉美
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	中村　耕治
	調査第二課長	井ノ上秀文
	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	鶴田　靜彦
調査担当	文化財主事	彌榮　久志
	文化財主事	木之下悦朗
調査事務	総務係長	大園　祥子
	専門員	鳥越　寛晴

〈発掘調査・平成23年度〉

調査主体　鹿児島県教育委員会

調査総括　県立埋蔵文化財センター

	所長	寺田　仁志
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	調査第二課長	冨田　逸郎
	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	鶴田　靜彦
調査担当	文化財主事	木之下悦朗
	文化財主事	桑波田武志
調査事務	総務係長	大園　祥子
	主査	岡村　信吾

〈整理作業・報告書作成作業・平成23年度〉

調査主体　鹿児島県教育委員会

調査総括　県立埋蔵文化財センター

	所長	寺田　仁志
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	調査第二課長	冨田　逸郎
	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	鶴田　靜彦
調査担当	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	鶴田　靜彦
	文化財主事	玉利　浩実
調査事務	総務係長	大園　祥子
	主査	岡村　信吾

報告書作成指導委員会

平成23年11月22日　井ノ上次長ほか７名

報告書作成検討委員会

平成23年11月29日　寺田所長ほか10名

企画担当者　鶴田　靜彦，玉利　浩実

〈整理作業・報告書作成作業・平成24年度〉

調査主体　鹿児島県教育委員会

調査総括　県立埋蔵文化財センター

	所長	寺田　仁志
調査企画	次長兼総務課長	新小田　穣
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	調査第二課長	冨田　逸郎
	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	鶴田　靜彦
調査担当	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	鶴田　靜彦
	文化財主事	廣　栄次
	文化財調査員	稲垣　友裕
調査事務	主幹兼総務係長	大園　祥子
	主査	池之上勝太

報告書作成指導委員会

平成24年11月26日　冨田課長ほか６名

報告書作成検討委員会

平成24年11月27日　寺田所長ほか９名

企画担当者　鶴田靜彦，廣　栄次
指導者　元興寺文化財研究所部長　狭川真一
熊本大学文学部教授　小畑弘巳

第３節　調査の経過（日誌抄）

調査の経過は，日誌抄をもって記載する。日単位の記録では煩雑になるため，月毎（一部複数月）にまとめた。

〈発掘調査・平成22年1月20日～平成22年2月12日〉

＜1月＞

調査施設設営準備及び環境整備。先行トレンチ設定，掘下げ開始。

＜2月＞

第４・８先行トレンチ周辺全面調査部分掘下げ。石組列（B-9区）調査。先行トレンチ内土層写真撮影。航空写真撮影，埋め戻し。確認調査終了。

〈発掘調査・平成22年5月10日～平成23年2月24日〉

＜5月＞

調査施設設営の準備及び環境整備。A～J-2～4区，A～C-5・6区Ⅱ～Ⅳ層及び攪乱層掘下げ，柱穴群検出，包含層調査。

＜6月＞

F～J-1～3区のⅣ～Ⅴ層掘下げ，Pit検出，写真撮影。集石3・4号及び掘立柱建物跡（G～J-5区，G・H-6区）実測。

＜7月＞

E～G-5～７区表土剥ぎ，掘下げ（Ⅱ～Ⅴ層），写真撮影，古道検出，コンター図作成。A～E-5～9区Ⅱ層掘下げ，写真撮影，遺構検出，遺物取上げ。旧溝跡（F-6・7区）調査，写真撮影。炭化物サンプル採集（土坑8号）。中世柱穴掘下げ。

＜8月＞

A～E-5～9区Ⅱ～Ⅲb層掘下げ，遺構検出，実測，写真撮影，コンター図作成，環境整備。F～J-5区Ⅴ～Ⅷ層掘下げ，落し穴検出，実測，写真撮影，西側土層断面実測。5区埋め戻し。

＜9月＞

A～E-5～9区及びD～F-3・4区Ⅱa～Ⅲ層掘下げ・遺物取上げ。

＜10月＞

C～E-5・6区Ⅲ層上面にて遺構検出，遺物出土状況写真撮影。

＜11月＞

C～E-5・6区Ⅲ層上面掘下げ，遺構検出，コンター図作成。遺構検出状況（A～E-5～9区）写真撮影。畑畝跡（C-7区）検出，掘下げ，実測，コンター図作成。古石塔墓群（A～E-5・6区）検出，実測。畠跡（A～E-7～9区）実測，掘下げ（Ⅱa・Ⅱb層）。

＜12月＞

A～E-5～9区及びG～J-5・6区掘下げ，遺構検出，遺物取上げ。

＜1月＞

遺跡全体空中撮影。C～E・G～J-5・6区にてPit掘下げ，コンター図作成，西側土層断面図作成。A～E-7～9区，G～J-5・6区にて遺構位置実測，掘下げ，実測，写真撮影。

＜2月＞

A～E-7・8区，F～J-4・5区Ⅳa～Ⅴ層掘下げ・遺構実測，写真撮影，コンター図作成。A～E-7・8区Ⅲa～Ⅴ層掘下げ，実測，写真撮影。土坑墓2号実測，写真撮影。平成23年度発掘調査終了。遺物及び発掘機材搬出，環境整備，一部埋め戻し。

〈発掘調査・平成23年5月6日～平成24年3月9日〉

＜5月＞

環境整備。掘立柱建物跡SB26・SB31掘下げ，土坑墓3号及び木棺墓（D-6区）検出，写真撮影，実測。掘立柱建物跡（A～E-5・6区）検出。A・B-7区，F-7～10区にてⅡb層掘下げ，写真撮影。

＜6月＞

溝状遺構（E-8・9区），木棺墓（D-6区），土坑（D-4区），溶結凝灰岩製構造物（F-8区）掘下げ，写真撮影，実測。円形土坑（A～F-4～6区）平板実測。Pit（C～E-5・6区），円形大型土坑，掘立柱建物跡実測。A～J-3～7区Ⅱb～Ⅶ層掘下げ。

＜7月＞

A～C-5・6区Ⅲa～Ⅲb層，G～J-5区Ⅳ～Ⅶ層掘下げ。土坑（B-6区），Pit（A・B-6・7区，F-8・9区）掘下げ，実測。E-8区，G～J-3・4，H-5区Ⅴ～Ⅷ層掘下げ。SB27・30実測。石塔墓（F-8区）掘下げ，木箱痕跡上部検出，実測，写真撮影。細石器出土状況（G・H-4区），礫群（G-4区），古代遺構検出状況（A-4・5区）写真撮影。

＜8月＞

F-7・8区Ⅱa～Ⅱb層，G～I-3・4区Ⅴ～Ⅷ層，H・I-2区Ⅴ～Ⅶ層掘下げ，遺物取上げ。円形土坑及び石塔墓坑検出，掘下げ，サンプル採取，実測，写真撮影，コンター図作成。B～E-2～6区Ⅲa～Ⅲb層にて古代遺構検出。調査終了状況（H～J-5区）実測。G～I-5区西壁土層断面図作成。

＜9月＞

F～I-2～4区Ⅵ～Ⅶ層掘下げ，コンター図作成，写真撮影，遺物取上げ。I-2区2号集石・6号集石，土坑（G-3区）実測，遺物取上げ，写真撮影。G-2区にて2号礫群検出，実測，写真撮影。土坑（A-4区）完掘。

＜10月＞

G・F-2 ～ 4区Ⅷ層掘下げ，遺物取上げ。G ～ J-5区埋め戻し。落し穴（G-3区），土坑（G-2区），落し穴（F-2区），溝状遺構（F-8・9区）掘下げ，実測，写真撮影。F-8・9区Ⅲ層，A ～ E-5 ～ 6区Ⅵ層掘下げ，遺物取上げ。Pit(C ～ E-5・6区）実測。F-4区表土剥ぎ，Ⅲa層掘下げ。

＜11月＞

A ～ G-2 ～ 5区，G・F-1・2区，C ～ F-8・9区，A ～ D-4 ～ 6区Ⅳ層掘下げ・遺物取上げ。落し穴（F-2区）にて逆茂木跡検出，土坑（C・D-5区），集石（B-6・7区）実測。縄文時代早期遺構（E-5区）及び3号・4号落し穴掘下げ，実測，写真撮影。F-2 ～ 4区南壁土層断面図を作成。

＜12月＞

A ～ E-1 ～ 9区Ⅳ～Ⅷ層，F-1区，E-4 ～ 8区Ⅳ層掘下げ，遺物取上げ。縄文時代早期集石（D-8区，C-4区），土坑（B・C-4 ～ 6区）実測，写真撮影。D-4区落し穴にて逆茂木跡を検出，実測，写真撮影。旧石器時代ブロック（C-3区）写真撮影，取上げ。貝殻廃棄土坑（B-4区）及び礫群（E-3区）検出，掘下げ，実測，写真撮影。遺跡内および周辺環境整備，遺跡全体空中撮影。

＜1月＞

A ～ D-9区表土剥ぎ。落し穴（B-3区）掘下げ，逆茂木跡検出，実測，写真撮影。礫群（E-2区）及び貝殻廃棄土坑（B-4区）実測。C・D-9区Ⅱa ～ Ⅱb層・Ⅳ層，A ～ D-4 ～ 6区Ⅳ～Ⅷ層掘下げ。SB29（D-9区）検出，掘下げ，実測，写真撮影。

＜2月＞

A ～ E-7区Ⅳ層，A ～ C-4区Ⅷ層を掘下げ，遺物取上げ。E・F-9区，G・H-6 ～ 8区Ⅱa ～ Ⅳ層，A ～ C-3・4区，A ～ D-6区Ⅵ層掘下げ。落し穴（A-5区，B-3区，E-3区，E-6区），土坑（E-6区），古代溝状遺構（E-9区）掘下げ，実測，写真撮影。近世道跡（G・H-6・7区）検出，写真撮影。B・C-4 ～ 7区Ⅳ層上面，E・F-4 ～ 6区Ⅲa層上面にて遺構検出。F・G-9区Ⅱb層，Pit掘下げ。中世遺構（G・H-6・7区，F・G-8・9区）実測，Ⅳ～Ⅷ層掘下げ。

＜3月＞

畝溝跡（E-8・9区）実測，写真撮影。E-8区，A ～ F-9区，E・F-10区Ⅲa ～ Ⅳ層掘下げ，古代畝溝跡写真撮影。G・H-6区，F・G-9区Ⅵ層掘下げ。落し穴（E-6区，D-6区，A-5区）半掘，逆茂木跡実測，写真撮影。A-5 ～ 7区南壁土層断面図作成，F・G-9区Ⅳ層掘下げ。環境整備。発掘機器・事務用品撤収。発掘調査終了。

第４節　整理・報告書作成作業

〈整理作業・平成23年4月1日～平成24年3月31日〉

＜４月～６月＞

土器・石器洗い，注記，選別

＜７月～９月＞

選別，土器接合，原稿執筆，土器復元，土器実測

＜10月～11月＞

実測，原稿執筆，復元，遺物・遺構トレース

＜12月～３月＞

実測，原稿執筆，復元，遺物・遺構トレース，拓本

〈整理作業・平成24年4月9日～平成25年3月29日〉

＜4月＞

整理作業開始。遺物選別。石器実測委託準備。石器実測，注記。遺構・遺物トレース。遺構検討。図面整理・図版作成。

＜5月＞

写真整理。注記。石器実測・分類。土器接合・実測。遺構・遺物トレース。石器実測委託準備。炭化物・石塔墓埋土科学分析委託準備。石器使用痕分析。

＜6月＞

実測遺物選別。土器接合・実測・復元。石器実測。遺構・遺物トレース。

＜7月＞

土器・石器実測・拓本。遺構・遺物トレース。レイアウト作成。

＜8月＞

遺物拓本。遺構内出土遺物整理。遺構・遺物トレース。遺構検討。レイアウト作成。遺物分類。原稿執筆。

＜9月＞

遺構・遺物トレース。遺構検討。土器復元・拓本・実測。遺物観察表作成。石器レイアウト。石器接合。原稿執筆。

＜10月＞

遺物整理，土器復元，遺構図・遺構位置図作成，レイアウト，遺構・遺物トレース図修正，観察表作成，原稿執筆，18日・19日元興寺文化財研究部長狭川真一氏指導。

＜11月＞

レイアウト，遺構・遺物トレース図修正，観察表作成，原稿執筆，28日・29日熊本大学文学部教授小畑弘巳氏指導。

＜12月＞

原稿執筆，入札起案。

＜１月～３月＞

図面整理，遺物整理，校正。

第２章　遺跡の位置及び環境

第１節　遺跡の位置及び地理的環境

山口遺跡が所在する薩摩川内市は薩摩半島の北西部（北緯31° 49′，東経130° 19′）に位置する。平成16年度10月12日に川内市・樋脇町・入来町・東郷町・祁答院町・甑島の里村・上甑村・下甑村・鹿島村の１市４町４村が市町村合併した市である。東には標高300mの山々が連なり，南には修験場として古くから有名な冠岳を主峰とする標高500mの山々がある。東シナ海に面し，川内川を有していることから，古代以来，陸上・水上交通の要所であり，現在も北薩地方の経済・商業の中心地である。

地形は，山岳地帯，台地，沖積平野，砂丘に大別される。市の中心地は，三方を山地で囲まれた盆地状の地形を成す。その中央部を流れる川内川は，熊本県白髪岳に源を発し，九州でも有数の長流である。川内川とその支流によって形成された沖積平野は，「川内平野」，「川内盆地」と呼ばれ，山地・台地が多く平野の少ない南部九州において，大口盆地，出水平野，肝属平野などと肩を並べる穀倉地帯である。

山地の麓には，平野を取り巻くように権現原台地や国分寺台地などの低いシラス台地が発達し，宅地や畑地として利用されている。シラス台地は山地からの河川によって浸食を受けるために台地の間には狭小な谷底平野が発達すると共に，台地の縁辺部はシラス台地特有の浸食谷が複雑に発達し，急崖をなして沖積平野へと移行する。標高は低く，平野に面しているこれらの台地上には，薩摩国分寺跡など多くの重要な遺跡が発見されている。

平野の中央部を西流する川内川は，白和町付近で大きく西に流れを変え，東シナ海に注いでいる。その両岸には天辰町から高江町にかけて長さ約８kmに渡って自然堤防が形成され，自然堤防が最も発達した大小路町，向田町周辺は現在の薩摩川内市街地の中心部である。近年の発掘調査では，自然堤防上で多くの遺跡が発見され，古代以来人々の活動の中心地であったことを窺わせる。川内川は，下流で大きく川幅を広げ，河口の両岸には川内砂丘が発達し，薩摩川内市の特徴的な地形の一つとなっている。

川内川によって形成された大小路町，向田町付近の沖積平野の周辺には，北から高城川，平佐川，隈之城川などの支流によって，狭小な谷底平野が発達している。その中の１つに隈之城町，宮崎町，百次町に広がる隈之城平野がある。平野は，薩摩川内市の南部に位置し，東を権現原台地，西を高江山地から延びる平ノ山などの平坦な台地に挟まれ南北に細長く（平野の幅は約800m）川内川方向に開けている。この平野を網流状に流れる百次川，勝目川，木場谷川は，合流して隈之城川となり，さらに下流で平佐川と合流して川内川へと注いでいる。これらの河川によって形成された隈之城平野は，薩摩川内市の中でも有数の米どころであり，平野を望む周辺の台地には旧石器時代から近世にかけての多くの遺跡が発見されている。遺跡の多くは，隈之城平野の開発の歴史と相まって営まれてきたと考えられ，山口遺跡もその中の１つである。

山口遺跡は，薩摩川内市都町に所在し，冠岳山系の西側のシラス台地に位置する。遺跡の標高は約50mで，台地の北側に川内川の支流である木場谷川，南側に都川が流れ，双方の川に挟まれた比高差30mの舌状台地である。同じ台地には，都原遺跡，霜月田遺跡がある。遺跡が所在する都町の西側は，慶長の役で島津義弘の帰陣に際し，朝鮮半島から伴われて渡来した人々の墓（高麗墓）が存在する。都という地名は，建久８年（1197年）の薩摩国建久図田張には，薩摩郡の中に「都浦十町」とあり，室町期には宮古村や都町と呼ばれていた。

第２節　歴史的環境

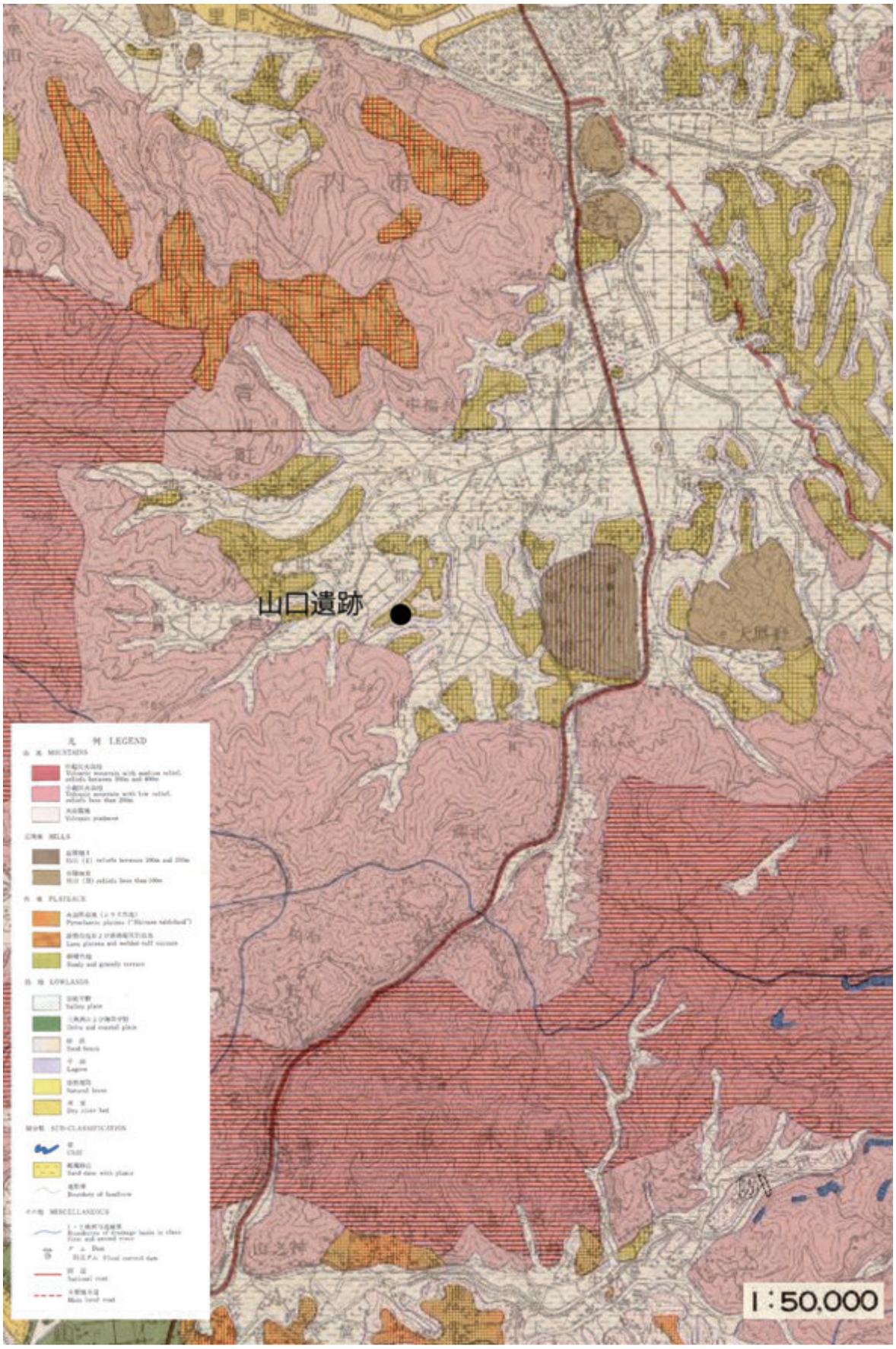
薩摩川内市は肥沃な川内平野を有し，交通の要所でもあるために古代以来北薩地域において，政治，文化，経済の中心地であった。川内という地名は，奈良時代に薩摩国府がおかれた地域が川内川の内側にあるから「川内」，対岸に属する地域を「川外」と呼んだことに由来するといわれ，本県における奈良・平安時代の歴史を知る上で欠かすことのできない地域である。

薩摩川内市教育委員会が1988年～1990年に行った遺跡分布調査では，旧石器から江戸時代の遺跡が確認され，古くから途切れることなく古代人の足跡を知ることができる地である。新幹線関係の発掘調査では，本県で調査例の少ない平野部の遺跡の調査が行われ注目された。以下，時代毎に概略を説明する。

（１）旧石器時代

近年の調査成果により，川内平野における旧石器時代の様相が明らかになりつつあり，ナイフ形石器文化と細石刃文化の両者がみられる。

本県で最初に旧石器時代の尖頭器が発見された楠元町馬立遺跡，ナイフ形石器・細石器が出土した成岡遺跡，剥片尖頭器・ナイフ形石器・細石刃が出土した上野城跡がある。また，成岡遺跡，西ノ平遺跡では，加治屋園型細石刃石核や船野型細石刃核が出土している。成岡遺跡，西ノ平遺跡で出土した石器は，西北九州の石器と極めて類似しており，直接的，または密接な交流があったことを示している。また，南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査においても，近接する堀之内遺跡でも旧石器時代の遺物が発見されており，川内平野における旧石



第１図　地形分類図

器時代の様相が明らかになりつつある。

（2）縄文時代

縄文時代になると，西海岸を介した交流の活発さを示す遺物が多く発見されている。

縄文早期段階では，前畑遺跡，霜月田遺跡，大野原遺跡で中九州系の中原式土器が出土し，上新田遺跡では同じく中九州系の政所式土器が出土している。前畑遺跡では，北陸地域の新崎式も出土しており，広域での交流を示す遺物の発見例が多くみられる。早期前葉では前平式土器や石坂式土器などの円筒形土器，中葉では押型文土器・変形撚糸文土器など，早期後葉の塞ノ神式土器などが出土している。石器では，山仁田遺跡では摘み部が3箇所ある横型の特徴的な石匙が発見されている。

前期・中期段階の遺跡では，大原野遺跡，前畑遺跡で前期の轟B式土器，京田遺跡で前期の曽畑式土器，上野城跡で中期の阿高式土器が出土しているが，出土量は少ない。

後期になると，遺跡数は増加する。増加の背景には，川内川の河道が固定化し，古川内湾が陸地化することで，この時期に川内平野は急速に形成されることが要因の一つとして挙げられる。後期段階の代表的な遺跡では，土坑墓や骨角器が発見された麦之浦貝塚や楠元遺跡がある。両遺跡とも在地の土器である市来式土器に伴って，鐘崎式土器や北久根山式土器が出土しており，東シナ海に面する川内の地理的特徴をよく反映している。

晩期では，遺跡数の増加がみられず，減少する。計志加里遺跡では，黒川式土器・組織痕土器と晩期の壺形土器が出土している事例は重要であり，弥生時代を担う人々の存在を確認できる。

（3）弥生時代

弥生時代になると，川内川下流域の平野部・沼沢地を新たな生活拠点とするようになる。川内川の自然堤防上に立地する大島遺跡では，弥生前期土器や石包丁が出土し，弥生時代前期には水田稲作が行われていたことを示している。石包丁や石鎌は，若宮遺跡でも発見されている。

京田遺跡では中期後半段階の水田跡が発見されており，湿田であったことが確認されている。これらの遺構に伴って，京田遺跡や楠元遺跡では，木製鋤や鍬などの農具を中心に豊富な木製品が出土している。この発見は，水稲耕作の実態を明らかにするだけでなく，南九州における弥生文化の解明に繋がる重要な事例である。

本地域では，中期土器の出土例が目立つ。在地系の土器と伴い，中九州系の黒髪式土器，北部九州の須玖式土器が出土している点は，他地域とは異なる様相を示す。特に上新田遺跡では，黒髪式土器や須玖式土器と在地系土器の折衷土器が出土しており，地域との密接な関わりを知る重要な事例といえる。

後期段階では，遺跡数も増加する。楠元遺跡・川骨遺跡では，中九州系の重弧文をもつ免田式土器が出土している。さらに楠元遺跡では，庄内式土器の模倣品もしくは影響を受けたであろう甕が出土しており，中期～後期にかけて交流が活発であったことが考えられる。後期後半～終末にかけては線刻土器もみられる。川骨遺跡や大島遺跡，楠元遺跡，外川江遺跡，甑島の中町馬場遺跡で発見されている。特に川骨遺跡の事例では，焼成後に線刻されており，祭祀的な性格をもつものと考えられている。外川江遺跡では後期の内向花文鏡が，麦之浦貝塚では後漢鏡片が出土しており，青銅器文化の定着しない南九州弥生社会の中では特異な地域である。

（4）古墳時代

古墳を築造しない本県の中で，川内平野と肝属平野一帯は古墳文化が波及し，定着する注目すべき地域である。特に川内平野は，在地性の強い地下式板石積石室と畿内系の高塚古墳が重複し，古墳文化周辺部の様相をよく現している。

横岡古墳では5世紀～7世紀にかけて築造された7基の地下石積石室が発見されている。蛇行剣，刀子，鉄鏃，銅製鞘口，鉄環，土師器，須恵器などが，副葬されている。5世紀に埋葬され，追葬が7世紀であったとされている。高塚古墳としては陵墓に指定されている宮内町可愛山稜，前方後円墳の可能性がある端稜，円墳の可能性がある安養寺丘古墳，船間島古墳などが知られているが，正式な調査が行われていないために詳細は不明である。御釣場古墳では，古墳時代初頭頃の石蓋土坑墓と箱式石棺墓が残されている。また，平成21年には天辰寺前古墳が発見され，注目されている。大島遺跡では，大刀・剣・金環が副葬された土坑墓が発見されている。集落遺跡は，成岡遺跡で竪穴住居跡が19軒検出されている。他は調査例が少なく，川内地域における集落研究は今後の大きな課題である。

（5）奈良時代・平安時代

大宝元年（701年）大宝律令が制定され，律令制度による政治の仕組みがほぼ整った。それを受けて翌702年には御領下町・国分寺町に広がる台地上に薩摩国府が置かれ，薩摩国が設置された。奈良時代末には，薩摩国府に隣接する形で薩摩国分寺が建立され，薩摩国における政治，文化の拠点となった。1968～1970年の発掘調査によって国分寺跡の寺域，伽藍配置などが明らかとなった。また，平安期，鎌倉期の再建を経たことが判明し，大和川原寺式伽藍配置であることが明らかになった。国分寺創建時の瓦を焼いたロストル式瓦窯の形態をもつ鶴

峯窯跡があり，瓦窯2基と須恵器窯1基が発見された。現在でも条里制の地名が残っている川内平野では，早くから条里地割の存在が指摘されていたが，京田遺跡から条里制の内容を記した「告知札」と呼ばれる木簡が県内で初めて出土し，その存在は決定的なものとなった。木簡には「嘉祥三年（805年）」という年銘と，郡司から在地の有力者に水田の差し押さえを告知する記述が記されていた。古代の地方行政の在り方や，土地支配を考える上で重要な発見となった。また，川骨遺跡出土の墨書土器が，9世紀第3四半期に相当することから，京田遺跡の木簡をほぼ同時期となり，当時の祭祀の様相の一端を示すものとして注目される。

計志加里遺跡では，方形周溝墓や古道跡が発見された。大島遺跡では，高城郡の中心部を構成すると思われる集落跡が発見され，さらに越州窯系青磁や緑釉陶器，風字二面硯，石帯が出土している。

大島遺跡の対岸に立地する鍛冶屋馬場遺跡は，古代から鍛冶が行われ，中世～近世まで継続して行われている。この遺跡からは，鍛冶炉が発見され，多くの鉄製品が出土しているほか，越州窯系青磁や焼塩土器，猿面硯が出土している。これらの周辺遺跡は，薩摩国府と深い関わりをもつ遺跡として注目される。特に，西ノ平遺跡では多数の掘立柱建物跡が検出され，土師器や須恵器の他に硯，墨書土器，刻書土器，焼塩土器，帯金具，輸入陶磁器（越州窯系青磁，荊州窯系白磁）などが出土していることから，薩摩郡の郡衙に比定されている。蔵骨器を使用した墓制としては，土師器を利用した屋形原遺跡，須恵器を利用した都原遺跡などがある。近年では，川内平野全域で調査例が増加し，薩摩国中枢域の様相が明らかになりつつある。

（6）鎌倉時代・室町時代・戦国時代

鎌倉時代から室町時代にかけては，島津氏，渋谷氏などの下向してきた鎌倉武士に，在地領主である武光氏，薩摩氏を加え川内は領地支配をめぐる争いが絶えることがなかった。これらの諸氏は南北朝の動乱を挟んで激しく争い，それに伴って碇山城や二福城（隈之城），高江城，百次城（上野城）などの多くの山城が築かれた。

山城の調査例は少なく，その実態は不明な部分が多かったが，上野氏の居城である上野城跡の発掘調査により，その実態は見えつつある。上野城跡は，河川や低地に囲まれた独立丘を利用し，平坦面を形成している中世城郭であり，近世には百次城と呼ばれた。平坦部に3つの曲輪を形成し，その間に空堀を設けた防備施設を成している。台地の下段には上野氏三代の墓の宝塔，五輪塔が存在する。上野城跡の発掘調査では，多くの掘立柱建物跡や方形竪穴建物跡，土坑墓などが発見されている。その掘立柱建物群には12世紀頃とそれに伴う白磁が多く出土している。大型の建物跡が発見された西ノ平遺跡や隣接する成岡遺跡，霜月田・都原遺跡も同時期の遺構・遺物が出土しており，本地域の先進性が確認できる。上野城跡の成果は，中世山城の解明に繋がることが期待されている。

これらの争乱は戦国時代末期の元亀元年（1570年）に島津氏による三州統一と同時に終息を迎える。その後，天正15年（1587年）豊臣秀吉の島津追討に伴い，平佐城において激しい戦いが繰り広げられた。秀吉軍は薩摩攻めの際に，猫岳をはじめとして周辺の山などに塁を築き，数万の大軍を配置したと言われており，猫岳や猪子岳の頂上には現在も累跡が残っている。この戦いは，豊臣側と島津側の和睦によって終わりを迎え，大小路町泰平寺には和睦石が残されている。このような争乱の歴史も川内地域の地理的な重要性を示しているといえる。

中世の生活遺跡は城下遺跡や成岡遺跡，西ノ平遺跡など，多く発見されており，出土品には広域流通品も多い。青磁・白磁・青花などの中国産の貿易陶磁器や東播磨系の擂鉢などの中世須恵器，長崎県西彼杵半島を産地とする滑石製石鍋などが挙げられる。11世紀～12世紀を流通の主体とする縦耳形石鍋は，大島遺跡，薩摩国分寺跡，成岡遺跡，坂ノ下・後ヶ迫遺跡で出土しており，東シナ海に面する本地域の交流の先進性を表す重要な遺物として注目できる。

（7）江戸時代

江戸時代には薩摩藩のもとで，北郷家がこの地域を治めることとなり，商業が発達した。その中心地は向田町で，水陸交通の要衛として賑わった。川内川河口の久見崎には，船手奉行書が置かれ，藩の造船所があった。この地は，朝鮮の役の際に薩軍が船出した港として知られている。この地は，文禄4年（1596年）の大規模な所領替えにより，都城北郷氏の所領となった。

その支配・保護下で，安永年間（1772-1781年）頃もしくは天明年間（1781-1788年）に開窯されたと考えられている。焼かれた磁器は平佐焼と呼ばれ，製品は白磁・染付・色絵・複数の色釉を使用した「べっこう焼」がある。窯は，北郷窯・大窯・新窯があり，北郷窯が最も古い。平佐焼は，県内各地に流通するなど隆盛を誇った。昭和初期に廃窯となるまで，川内の伝統工芸品を生み出した窯跡は，1967年に市の文化財に指定されている。近年，新窯の調査によって多くの窯道具や窯の形態，作業小屋，石垣の存在が明らかとなっている。

また，近世，近代において鍛冶も盛んに行われており，吉原遺跡，鍛冶屋馬場遺跡では鍛冶に関連する遺構が検出されている。川内川は平佐焼や鍛冶に関わる原料の搬入と製品の搬出にも積極的に利用され，商工業の発展に大きな役割を担っていた。

〈主要参考文献〉

川内郷土史編さん会1976『川内市史　上巻』
川内郷土史編さん会1976『川内市史　下巻』
南方新社2011『鹿児島純心女子大学国際文化研究センター新薩摩学シリーズ８　新薩摩学　中世薩摩の雄　渋谷氏』
川内市教育委員会1991「御釣場古墳（２号墳）」『川内市埋蔵文化財調査報告書』(1)
川内市教育委員会1992『川内市文化財基礎調査報告書（埋蔵文化財）』川内市埋蔵文化財報告書（2）
川内市土地開発公社1987『麦之浦貝塚』
鹿児島県教育委員会1975『薩摩国府跡・国分寺跡』
鹿児島県教育委員会1984『外川江遺跡・横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（30）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1983『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（28）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（38）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（39）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『楠元・城下遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（57）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（68）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（80）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『京田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（81）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008『霜月田遺跡・都原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（131）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011『川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（165）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『上新田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（166）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『山仁田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（174）
渡辺芳郎（編）2007『薩摩川内市平佐焼窯跡群の考古学的研究』鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室

第１表　周辺遺跡地名表（１）

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地		時代	地形	遺物等	備考
1	6	145	上新田	薩摩川内市	青山町上新田	縄文～中世	丘陵	貝殻文・弥生土器・土師器	県埋セ報(166)
2	6	146	堀之内	薩摩川内市	青山町堀之内・焼居	古墳～中世	丘陵	土師器・陶磁器・黒曜石	平成21 ～ 24年度調査
3	6	148	山仁田	薩摩川内市	青山町山仁田	古墳～中世	台地	土師器・陶磁器・黒曜石	県埋セ報(174)
4	6	147	床並	薩摩川内市	青山町床並・岡峯	古墳～中世	台地	土師器・陶磁器・黒曜石	
5	6	144	集	薩摩川内市	中福良町集	縄文～中世	台地	土師器・黒曜石散布	
6	6	142	立石A	薩摩川内市	中福良町立石	縄文～中世	段丘	土器片	
7	6	143	立石B	薩摩川内市	中福良町立石	縄文～中世	段丘	石鏃・内黒土師器・陶磁器	
8	6	150	麦	薩摩川内市	都町麦	縄文～中世	低地	内黒土師器・須恵器・石鏃・黒曜石・鉄滓	
9	6	152	都原	薩摩川内市	都町都原	平安～室町	台地	内黒土師器・青磁・染付	県埋セ報(131)
10	6	151	山口	薩摩川内市	都町山口	旧石器～近世	台地	土師器・陶器・黒曜石	平成21～23年度調査本報告
11	6	152	霜月田	薩摩川内市	都町霜月田	古墳～中世（室町）	台地	土器・染付・青磁	県埋セ報(131)
12	6	149	薗田	薩摩川内市	青山町薗田・薗内	古墳～中世	丘陵	土師器・陶磁器・黒曜石	
13	6	141	成岡	薩摩川内市	中福良町成岡	旧石器～近世	台地	土器片・石器・陶磁器	県埋セ報(28)
14	6	140	西ノ平	薩摩川内市	中福良町西ノ平	旧石器～近世	台地	土器片・石器・陶磁器	県埋セ報(28)
15	6	139	上ノ原	薩摩川内市	中福良町上ノ原	縄文～中世（安土桃山）	台地	縄文・古墳～中世の土器等	県埋セ報(28)

第２表　周辺遺跡地名表（２）

番号	遺跡台張番号		遺跡名	所在地		時代	地形	遺物等	備考
16	6	159	湯之谷	薩摩川内市	隈之城町湯之谷	平安	山腹緩斜面	土師器	
17	6	138	西ノ口	薩摩川内市	隈之城町西ノ口	古墳	台地	土器	
18	6	157	四反畑	薩摩川内市	尾白江町四反畑	平安～中世	低地	内黒土師器・磁器・染付・鉄滓	
19	6	153	瀬戸山	薩摩川内市	木場茶屋町瀬戸山	古墳～近世	台地	土器・須恵器・青磁・白磁	
20	6	156	蕨迫	薩摩川内市	木場茶屋町蕨迫	古墳～中世（室町）	台地	土器・陶器	
21	6	154	木場原A	薩摩川内市	木場茶屋町木場原	縄文～平安	台地	土器片散布	
22	6	155	木場原B	薩摩川内市	木場茶屋町木場原	縄文～室町	台地	土器・磁器・石鏃・黒曜石	
23	6	―	川幡	薩摩川内市	宮里町	古代・近世	丘陵斜面	土師器・須恵器・陶磁器	県埋セ報(165)
24	6	162	堀ノ内	薩摩川内市	宮里町堀ノ内	古墳～中世（室町）	低地	土器・須恵器・青磁・染付	
25	6	161	宮田	薩摩川内市	宮里町宮田	古墳	台地	土器片散布	
26	6	163	日吉	薩摩川内市	宮里町日吉	古墳	微高地	土器・須恵器・鉄刀	
27	6	164	安養寺丘古墳	薩摩川内市	宮里町安養寺2,364番地	古墳	丘陵	土器	石室露出・円墳
28	6	39	別府	薩摩川内市	五代町別府	古墳～中世（室町）	低地	土器・須恵器・青磁・染付	
29	6	165	上高江原	薩摩川内市	高江町峯元・岩崎・藤花崎ほか	古墳～中世（室町）	台地	土器・白磁・染付	
30	6	193	西之城	薩摩川内市	高江町	中世	平地	土師器・陶磁器	県埋セ報(165)
31	6	―	川骨	薩摩川内市	高江町	弥生～近世	自然堤防	弥生土器・土師器・輸入陶磁器・国産陶磁器	県埋セ報(165)

第２図　周辺遺跡図

第３章　発掘調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法

平成22年度は，平成22年５月10日（月）～平成23年２月24日（木）の期間に延べ9,600㎡を調査し，実働155日間であった。

今回，道路建設用センター杭のNo. ６とNo. ７を基準に10m間隔の区画を設定し，西から東へA・B・C・・・列，北から南へ１・２・３・・・列とした。

調査は，調査区内の草払い等の環境整備から行った。その後，表土をバックホウで除去した後，人力（ジョレン，ねじり鎌，移植ごて）で掘り下げ調査を行った。排土は，ダンプにより調査終了地へ移動し，遺物は遺跡外へ搬出した。

本遺跡は，旧石器時代，縄文時代，弥生・古墳時代，古代・中世及び近世の複合遺跡であり，平成22年度は，主に近世から古代・中世の調査を行い，一部，縄文時代早期の調査を実施した。

平成23年度は，平成23年5月６日（月）～平成24年３月９日（金）の期間に，延べ7,016㎡，実働163日間実施した。

基本的調査方法は，平成22年度同様であり，省略する。調査は昨年度に引き続き，古代・中世について実施し，古代・中世の調査終了後，縄文時代早期の調査を，また，縄文時代早期の調査を終了後，旧石器時代の調査を実施した。平成24年１月以降は，調査区内の里道下の調査を実施するため，排土を利用し重機により付け替え道路を敷設し，里道下の調査を実施した。

先行トレンチを設定し，遺構・遺物の検出状況を確認後，調査深度や調査範囲を検討しながら，Ⅱb層（古代・中世包含層）～Ⅵ層下面（旧石器時代包含層）まで段階的に調査を進めた。

各層下面では，遺物の取り上げを行った後，遺構検出を行った。検出した遺構については，掘り下げや出土遺物の取り上げを行った後，写真撮影や遺構図面作成，コンター図作成，土層図作成等を実施した。なお，出土した遺物の取上げにはトータルステーションを使用し，遺構の実測等については平板による測量及び職員による手実測を実施した。実施後，写真撮影による記録保存を行った。遺構の認定と検出方法については，各土層を１枚１枚掘り下げて，下位の土層が露出した段階で層表面を揃えた。その後，周辺土層と異なる色調を有するプランの有無を確認した。遺構が検出された場合は，遺構大小により１／４カットもしくは，１／２カットで埋土の色調や質，周囲の土層との相関関係，床や壁等掘り込み面の状況を確認して，遺構の有無を判断していった。

第２節　層序

山口遺跡は，冠岳山系から北東側に張り出した標高50mほど（比高差30mほど）の舌状台地上に位置し，台地の北方には木場谷川が，南方には都川が流れる。本遺跡周辺は，加久藤カルデラに伴う凝灰岩を基盤層とし，その上にＡＴ火山灰（シラス）が堆積する。山口遺跡は，そのシラスにより形成される台地で，遺跡の東西はシラス台地に特有な崩落による急峻な崖を成し，北側・東側・西側には河川の浸食を受けて形成された谷底平野が広がる。なお，加久藤カルデラに伴う凝灰岩や安山岩が河床を形成し，本遺跡でも，集石遺構や磨石・敲石等で利用されている。

本遺跡の基本層位及び層厚は以下に示すとおりである。地層の横転や後世の撹乱が多く，堆積状況は必ずしも良好とは言えない状況であった。

本遺跡の発掘調査における最下層はⅨ層（ＡＴ火山灰：一次シラス）である。灰白色や淡橙色の火山灰土を基層とし，上位には径数mm ～数cm大の明黄褐色や黄橙色の軽石が無数に含まれる。遺物は包含されない。今回の調査では，本層もしくは上位のⅧ層が検出された時点で調査を終了した。以下数十mに亘って堆積していると思われる。

Ⅷ層は，Ⅸ層に似るが，Ⅸ層より締まりが弱く，数cm大の軽石を含まない。いわゆるＡＴ火山灰土層の二次シラス（風成層）である。

Ⅶ層は，下位のⅧ層（明黄褐色土）と上位のⅥ層（暗茶褐色粘性土）の混土であり，黄褐色を呈する弱粘性土層である。周辺の遺跡では，ナイフ形石器等などが出土する状況が捉えられる。本遺跡では，落ち込みによると思われる上位層包含遺物が散見される。

Ⅵ層は，暗茶褐色を呈する粘性土層である。本遺跡では細石刃等旧石器時代の遺物が出土する。石器のほか縄文時代草創期比定の土器も包含される。本層を埋土とする遺構においては，暗茶褐色粘性土以外に，黒色強粘性土・黒褐色強粘性土・暗茶褐色粘性土等多様な土壌が堆積する事例が捉えられる。現況の地山の土層では，暗茶褐色のみ捉えられるが，本来は複層（黒色・黒褐色・暗茶褐色）で構成される時期が一定期間存在したと思われ，風成・水成作用により混在・均質化したものと推察される。黒色強粘性土は，一部の遺構にのみ捉えられることから，堆積期間が短かったか。黒色強粘性土と暗茶褐色強粘性土の混土化により黒褐色強粘性土と暗茶褐色強粘性土に変化し，更なる変化により現況の暗茶褐色強粘性土となったと推察する。旧石器時代終末から縄文草創期においては，地球的な温暖化が進んだ時期との説が有力である。温暖化に伴う植生の変化や堆積有機物の質や量の急激な変化が土壌変化に影響を与えた可能性があり，Ⅵ層を構成する多様な土壌に垣間見ることができる。

第３図　遺跡全体図・グリッド図

Ⅴ層は，暗褐色を呈する粘性土層であり，桜島起源の火山灰土（11,500年前：薩摩火山灰）である。本遺跡では，Ⅵ層と混在し，暗茶褐色粘性土や黒褐色粘性土の土壌に混じって，ブロック状に捉えられる。

Ⅳ層は，黄褐色の砂壌土であり，縄文時代早期の包含層である。Ⅲa層とは色調や質感がよく似るが，Ⅲa層より僅かに暗い色調である。

Ⅲb層は，鬼界カルデラ起源のいわゆるアカホヤ火山灰の一次堆積層であり，明黄褐色や明黄橙色の軽石層である。本遺跡では層を成さず，部分的にブロック状に確認できるのみである。しかし，倒木による横転箇所においては，横転により本来の層レベルより下位に押し下げられた箇所で10cm程度の明瞭な層を成して残存する。本層は，堆積直後は層を形成していたが，風成・水成作用や樹痕等の撹乱を受け，層を留めなくなったと推察される。

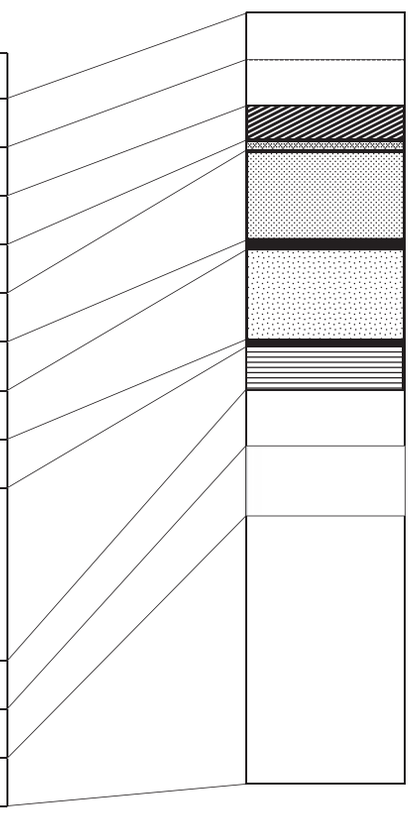
Ⅲa層は，黄褐色土であり，アカホヤ火山灰の二次堆積層である。本遺跡では，30cm程堆積する。縄文時代後・晩期～古墳時代の遺物を包含する。

Ⅱc層は，暗赤褐色砂壌土であり，Ⅱb層とⅢa層の間に僅かな層厚で，極一部の箇所でのみ捉えられた。古代でも，比較的古い時期の包含層と考えられる。本層を主たる埋土とする遺構を，古代に比定した。

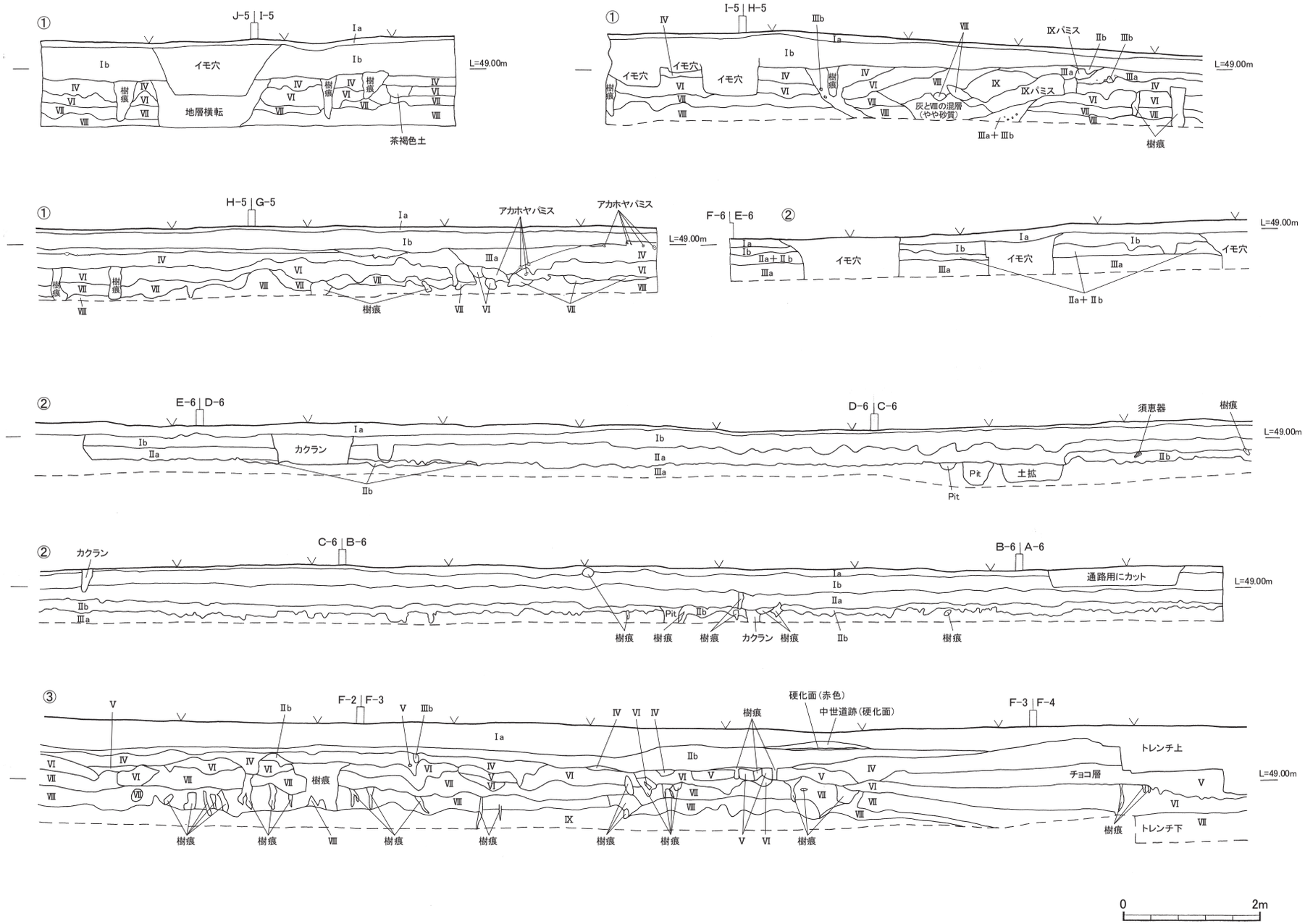
Ⅱb層は，黒褐色砂壌土で軽石の小片を殆ど含まない。古代から中世に比定される遺物包含層である。Ⅱb層とⅡc・Ⅲa層の境が直線的に平坦を成すことから，中世において掘立柱建物等の建設や土地造成，畑地利用に伴う耕作等による土地改変の可能性が高い。古代・中世の遺物がレベル混在して出土する状況も傍証となる。

Ⅱa層は，Ⅱb層に近似するが径数mmほどの軽石を無数に含む褐灰色砂壌土である。近世の包含層である。

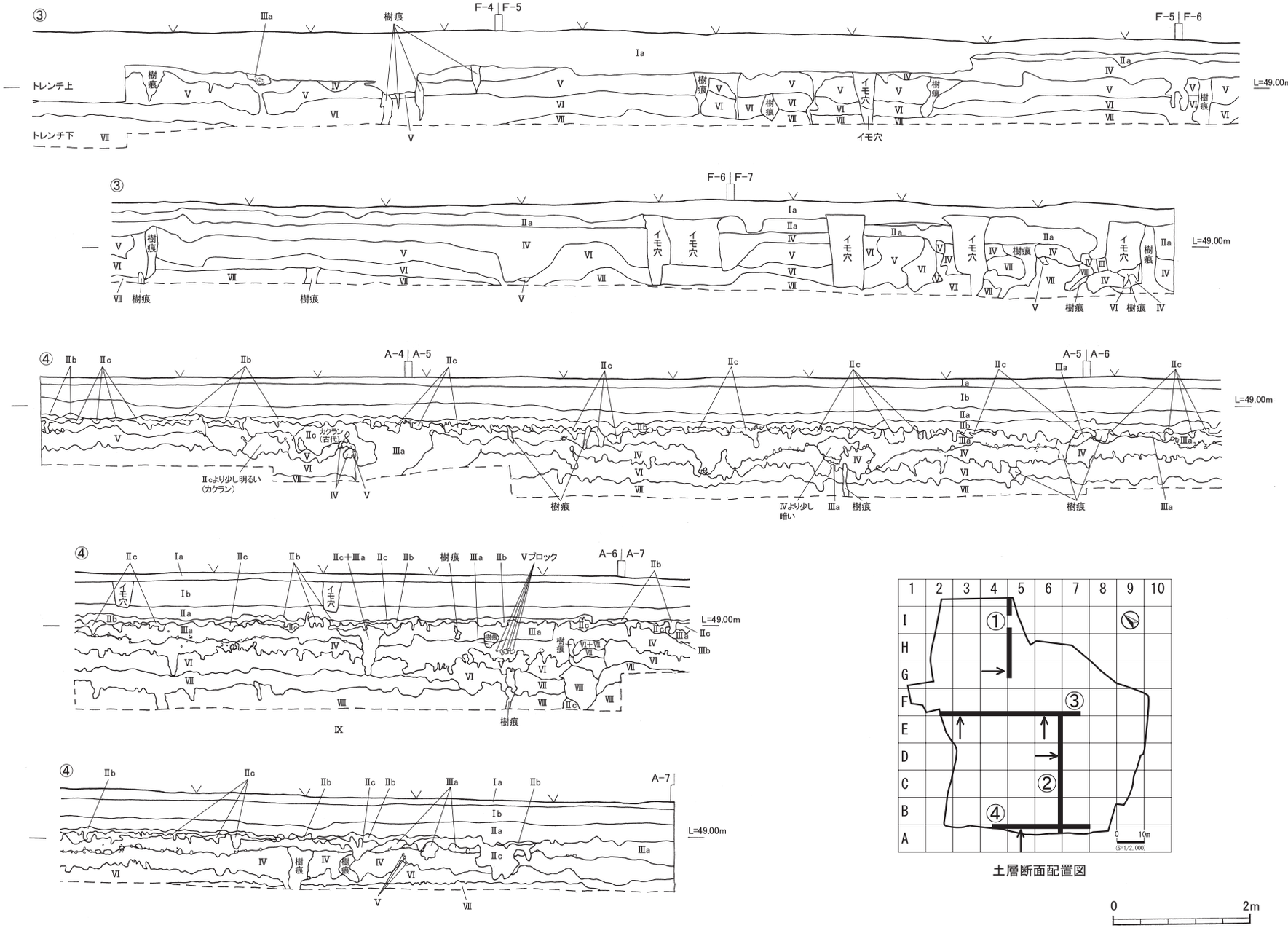
層　名	層　質	内　容	層　厚
Ⅰab層	砂質土	耕作土	30cm
Ⅱa層	褐灰色砂壌土	近世の包含層	15cm
Ⅱb層	黒褐色砂壌土	古代～中世の包含層	10cm
Ⅱc層	暗赤褐色砂壌土	古代の包含層	10cm
Ⅲa層	黄褐色土	アカホヤ火山灰二次堆積層	30cm
Ⅲb層	明黄褐色火山灰	アカホヤ火山灰一次堆積層	ブロック
Ⅳ層	黄褐色砂壌土	縄文時代早期包含層	30cm
Ⅴ層	暗褐色粘性土	薩摩火山灰	ブロック
Ⅵ層	暗茶褐色粘性土	旧石器時代～縄文時代草創期包含層 ※黒色強粘性土と黒褐色強粘性土，暗茶褐色粘性土の混土の可能性	10cm
Ⅶ層	黄茶褐色粘性土		15cm
Ⅷ層	明黄褐色土	二次シラス	20cm
Ⅸ層	明黄褐色火山灰	一次シラス	



第４図　基本層序


①
J-5 | I-5
L=49.00m
Ia
Ib
イモ穴
地層横転
茶褐色土
樹痕
①
I-5 | H-5
L=49.00m
イモ穴
灰とⅧの混層
(やや砂質)
Ⅸパミス
Ⅲa＋Ⅲb
①
H-5 | G-5
L=49.00m
アカホヤパミス
樹痕
①
F-6 | E-6
②
L=49.00m
イモ穴
Ⅱa＋Ⅱb
②
E-6 | D-6
D-6 | C-6
L=49.00m
カクラン
須恵器
樹痕
Pit
土拡
Ⅱb
②
カクラン
C-6 | B-6
B-6 | A-6
L=49.00m
通路用にカット
Pit
樹痕
③
F-2 | F-3
F-3 | F-4
硬化面(赤色)
中世道跡(硬化面)
トレンチ上
チョコ層
トレンチ下
樹痕
L=49.00m
0
2m

第５図　土層断面図(１)


③
F-4 | F-5
F-5 | F-6
トレンチ上
トレンチ下
樹痕
イモ穴
L=49.00m
F-6 | F-7
④
A-4 | A-5
A-5 | A-6
A-6 | A-7
Vブロック
カクラン（古代）
IIcより少し明るい（カクラン）
IVより少し暗い
IX
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
I H G F E D C B A
0 10m
(S=1/2,000)
土層断面配置図
0 2m

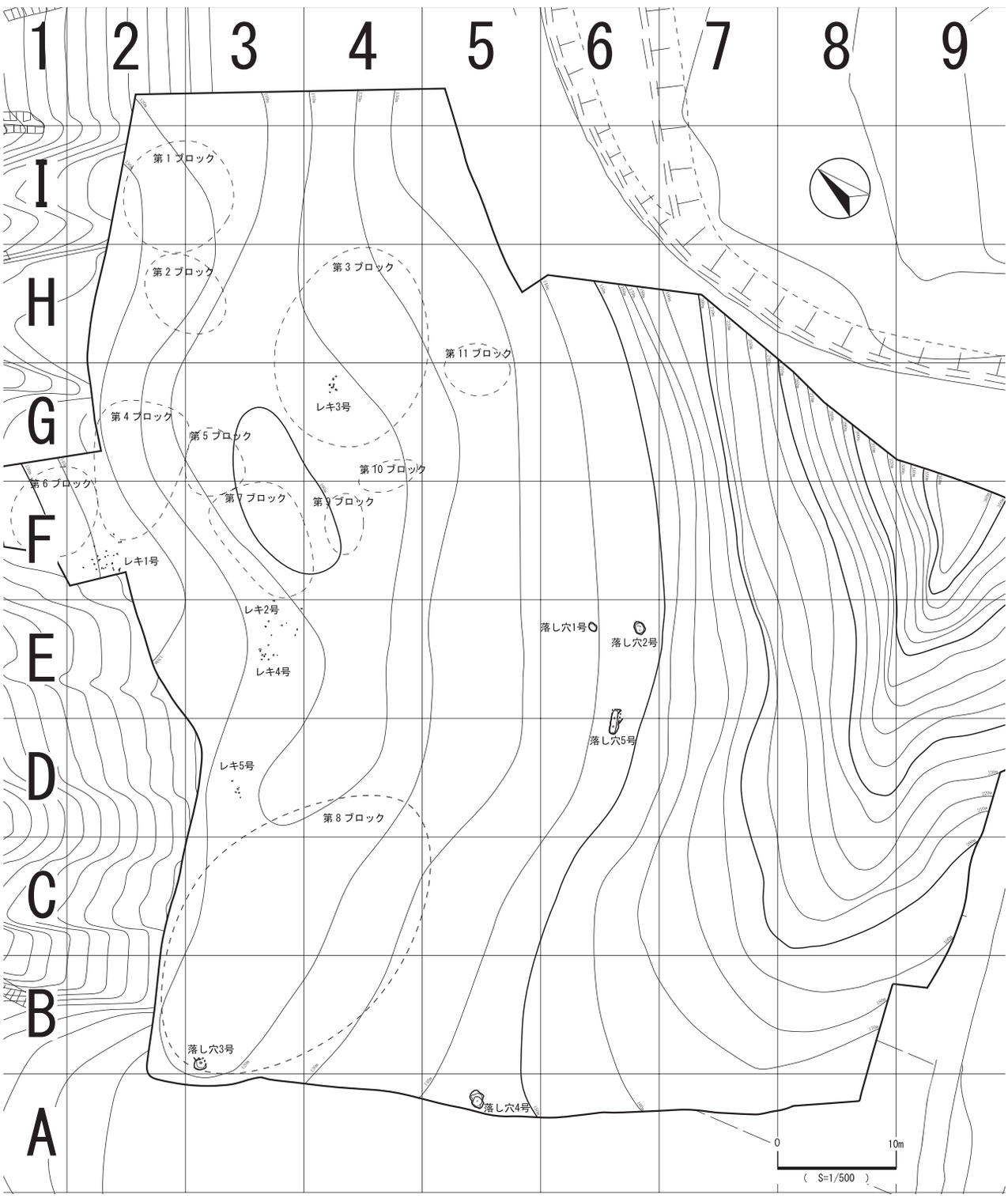
第６図　土層断面図（２）

第３節　旧石器～縄文時代草創期の調査

１　調査の概要

本遺跡の比較的平坦な緩傾斜地一帯を中心に，遺構・遺物が確認された。当該期の包含層は，Ⅵ層である。なお，現況では，本遺跡の西側は急崖であるが，当該期は，現況より台地が西側に広がっていたと推察される。

本層の時代比定を標記のとおりにしたが，遺物としては，細石刃，打製石鏃，土器が共出している。土器が石器ブロック内に集中的に出土するなど，細石刃と打製石鏃，土器の共伴関係が明確に捉えられれば，縄文時代草創期に限定したいところである。細石刃等の遺物に，落し穴等の遺構を含めて，縄文時代草創期の同一時代の可能性が高いと考えるが，本稿では旧石器～縄文時代草創



第７図　旧石器～縄文時代草創期遺構位置図

期と幅をもたせて報告することとした。遺構は落し穴５基，礫群５基，石器ブロック11基を検出した。

礫群は，F－２区・G－４区・D－３区・E－３区等本遺跡の最高位に位置する微高地周辺に比較的まとまって所在し，20～30m程離れた南西側から南側にかけて落し穴が位置する。

落し穴は，３基がE－６区周辺にまとまっており，残り２基がB－３区・A－５区に散在する。巨視的には，礫群や石器ブロックを取り囲むように落し穴が配置されるとも見なしうる。

石器ブロックは，調査区の北側と西側に分布の集中が見られる。上牛鼻産黒曜石や霧島系黒曜石を主体とし，三船産，針尾産の黒曜石や鉄石英などが加わる。石器は，細石刃や細石刃核を中心に，掻器，削器等を伴い，ブロック外には，他に礫器，磨石・敲石等が出土する。注目すべきは，北端のH－３区に，石器に混じって，縄文草創期相当と思われる土器片が５点出土した。内，１点はB地区石器ブロック３内に出土した。細石刃等と打製石鏃，土器が共伴する可能性を示す貴重な事例となる。当該期の遺物総数は，約1,500点に及ぶ。

２　遺構

（１）落し穴

当該期相当の落し穴は，５基検出された。平面観は，楕円形等が４基で，細長い長方形１基に２分される。床面に小ピットを有するタイプが４基（小ピットを床面中央に１基もつ落し穴が２基，小ピットを２基有するものと３つ有するのが各１基ずつ）と小ピットを有さないタイプが１基と，形態的に多種である。

落し穴の埋土中には，黒色強粘性土が含まれることを指摘したい。本章第２節の層序の項で述べたが，Ⅵ層は，現況では暗茶褐色粘性土としか捉えられないが，当該期の落し穴の埋土中には，黒色強粘性土や黒褐色強粘性土，暗茶褐色粘性土が，各々別個に堆積する事例が散見される。そのことは，Ⅵ層内には，本来，黒色強粘性土や黒褐色強粘性土が単独層として存在した可能性を示す。当該期の落し穴は，黒色強粘性土や黒褐色強粘性土が他の土材と混土化し，現況のⅥ層（暗茶褐色粘性土）に均質化する以前の，特定の時期に敷設された可能性を示す事例と見なされる。

①　落し穴１号

本遺構は，E－６区のⅦ層上面で検出された。平面観はややいびつな楕円状を呈する。埋土は，全体的には黒褐色弱粘性土（Ⅵ層）を主とし，Ⅵ層と暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）や黄茶褐色粘性土（Ⅶ層）の混土が堆積し，明黄褐色土（Ⅷ層：二次シラス）のパミスやブロックが包含される。埋土がⅥ層を主とすることから，本来の敷設面はⅥ層面と判断される。下位に堆積するほど，黒褐色強粘性土（Ⅵ層）を中心に，本来の下位層との混土が堆積する点や，二次シラスが大きめのブロック状で多数入り混土化・均質化が進まない埋土が存在することから，落し穴を敷設する際に掘り上げて遺構周囲に盛り上げた土を，比較的時期を空けずに埋め戻した可能性が捉えられる。

数m離れた近隣に床面に小ピットを伴う落し穴が検出されることや，一気に埋め戻したと推定される埋土状況が他の落し穴に類似することから，本遺構も落し穴の可能性が高いと判断した。

②　落し穴２号

本遺構は，E－６区のⅥ層上面で検出された。埋土に含まれる土壌がⅥ層・Ⅶ層を基とすることから，敷設面はⅥ層面と判断される。平面観はややいびつな楕円状を呈する。近接する上述の落し穴１号に形態や埋土状況が似る。

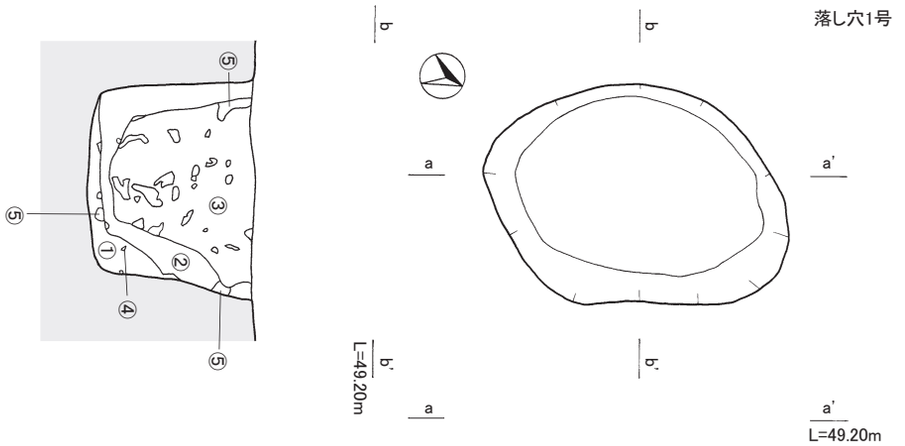
堆積状況が，上位と下位で質を異にする。巨視的には，下位では埋土がレンズ状堆積を成さず，Ⅷ層のパミスが均質化せず包含されるので，一気に埋め戻された可能性を見る。一方，上位の①と②はレンズ状に堆積し，①が単独層，②が均質化する混土層であることから，自然堆積の可能性も否定できない。③～⑤まで一気に埋め戻されてできた凹みに，①・②が雨水等により自然に堆積した可能性も一考である。本遺構は，床面に小ピットが３基敷設され，何れも先端が尖る。小ピットの床面が上場の面に対して外側に中心軸がずれて位置することから，逆茂木はやや内側に倒れ気味に敷設された可能性を見る。なお，Ｐ３の断面観で上場が片側に膨らみを呈するのは，逆茂木の抜き取りや捕獲された獣の暴れ等により逆茂木が壁面に押しつけられた状況が推察される。

③　落し穴３号

B－３区のⅥ層上面で検出された。現況では，本遺構は舌状台地の西側縁端に位置するように思われるが，当時は台地は西側に更に延びていたと推察される。平面観がいびつな五角形状を呈する。

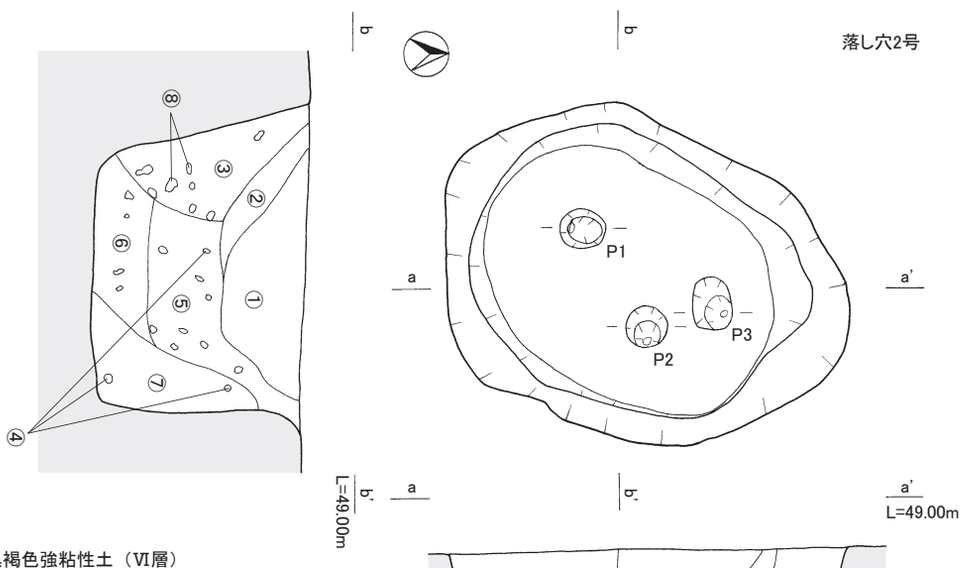
埋土がレンズ状堆積をせず，検出面のⅥ層を中心に，黄茶褐色粘性土（Ⅶ層）・明黄褐色土（Ⅷ層）との混土や明黄褐色（Ⅷ層）のブロックやパミスが埋土中に散在することから，埋め戻した可能性が高い。横断面観で，上場が左側（外側）に膨らむ箇所の埋土状況（①・③・④・⑨）は，③にⅥ層のブロックが浮くように捉えられる。上場の壁面がブロック状に剥落し，壁面にもたれるように擦れ落ちたところに，④の投下が継続され，土塊が保持された状況で堆積したと推察する。

床面の小ピットは，ほぼ中央に１基設けられる。上場



① 明黄褐色のパミス（Ⅷ層）を含む黒褐色強粘性土（Ⅵ層）
② やや灰色がかる褐色粘性土。粘性が強い。黒褐色強粘性土（Ⅵ層）に暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）や黄茶褐色粘性土（Ⅷ層）が均一的に混じる。
③ 黒褐色弱粘性土。やや粘性あり。黒褐色強粘性土（Ⅵ層）に，明黄褐色火山灰土（Ⅷ層）が混じる。
④ 明黄褐色のパミス（Ⅷ層）
⑤ 明黄褐色のブロック（Ⅷ層）

0 2m

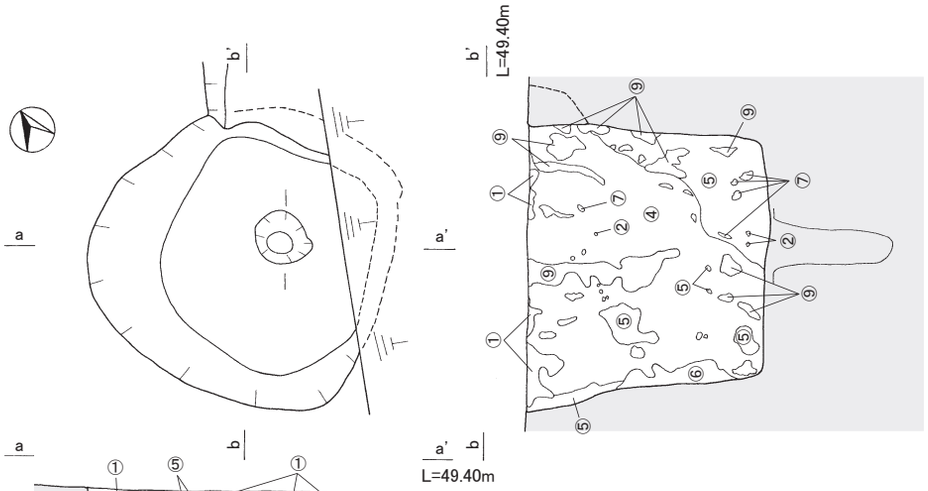


① 黒褐色強粘性土（Ⅵ層）
② 暗灰色粘性土。黒褐色強粘性土（Ⅵ層）と暗茶褐色粘性土（Ⅵ層），黄茶褐色粘性土（Ⅷ層）の混土。
③ 茶褐色粘性土。黒褐色強粘性土（Ⅵ層）に暗茶褐色粘性土（Ⅵ層），黄茶褐色粘性土（Ⅷ層）の混土。
④ 薩摩火山灰パミス（Ⅴ層）
⑤ 暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）
⑥ 暗褐色粘性土。黒褐色強粘性土（Ⅵ層）と暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）の混土。
⑦ 茶褐色粘性土。黒褐色強粘性土（Ⅵ層）に暗茶褐色粘性土（Ⅵ層），黄茶褐色粘性土（Ⅷ層）の混土。
⑧ 明黄褐色のパミス（Ⅷ層）

0 1m

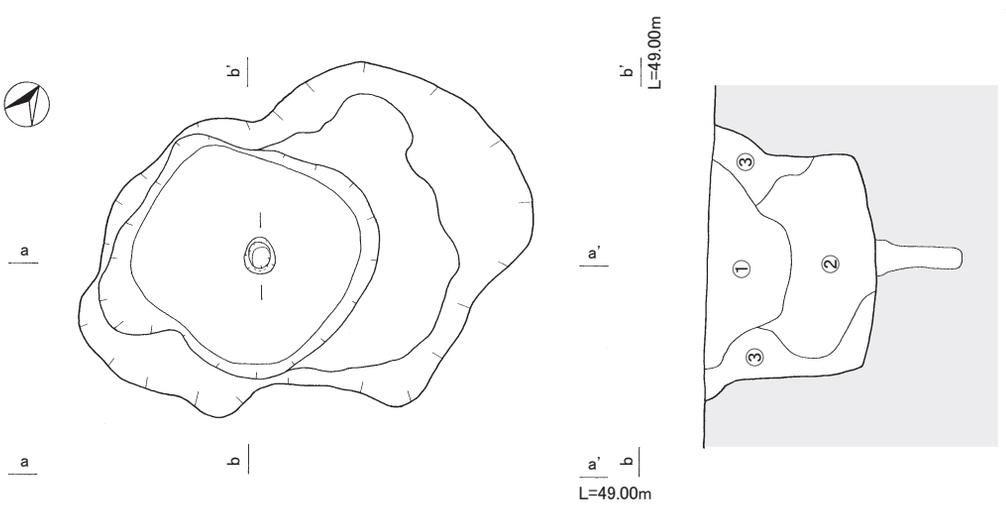
第８図　旧石器～縄文時代草創期落し穴１号・２号実測図

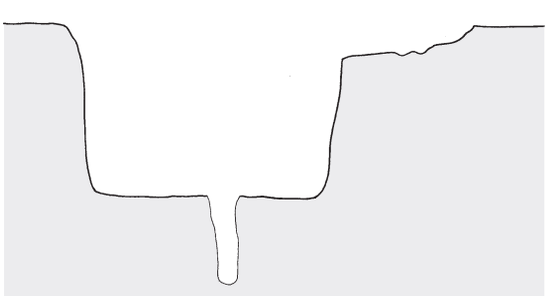
落し穴3号



① 黄褐色砂壌土（Ⅳ層）
② 薩摩火山灰パミス（Ⅴ層）
③ 黄茶褐色弱粘性土。黄褐色砂壌土（Ⅳ層）と黒灰褐色粘性土（Ⅵ層）の混土。
④ 黒色強粘性土（Ⅵ層）
⑤ 黄茶褐色粘性土（Ⅶ層）
⑥ 黄褐色砂質土。黄茶褐色粘性土（Ⅶ層）と明黄褐色土（Ⅷ層）の混土
⑦ 明黄褐色火山灰土（Ⅷ層）のブロック。
⑧ 明黄褐色パミス（Ⅷ層）
⑨ 樹痕

落し穴4号

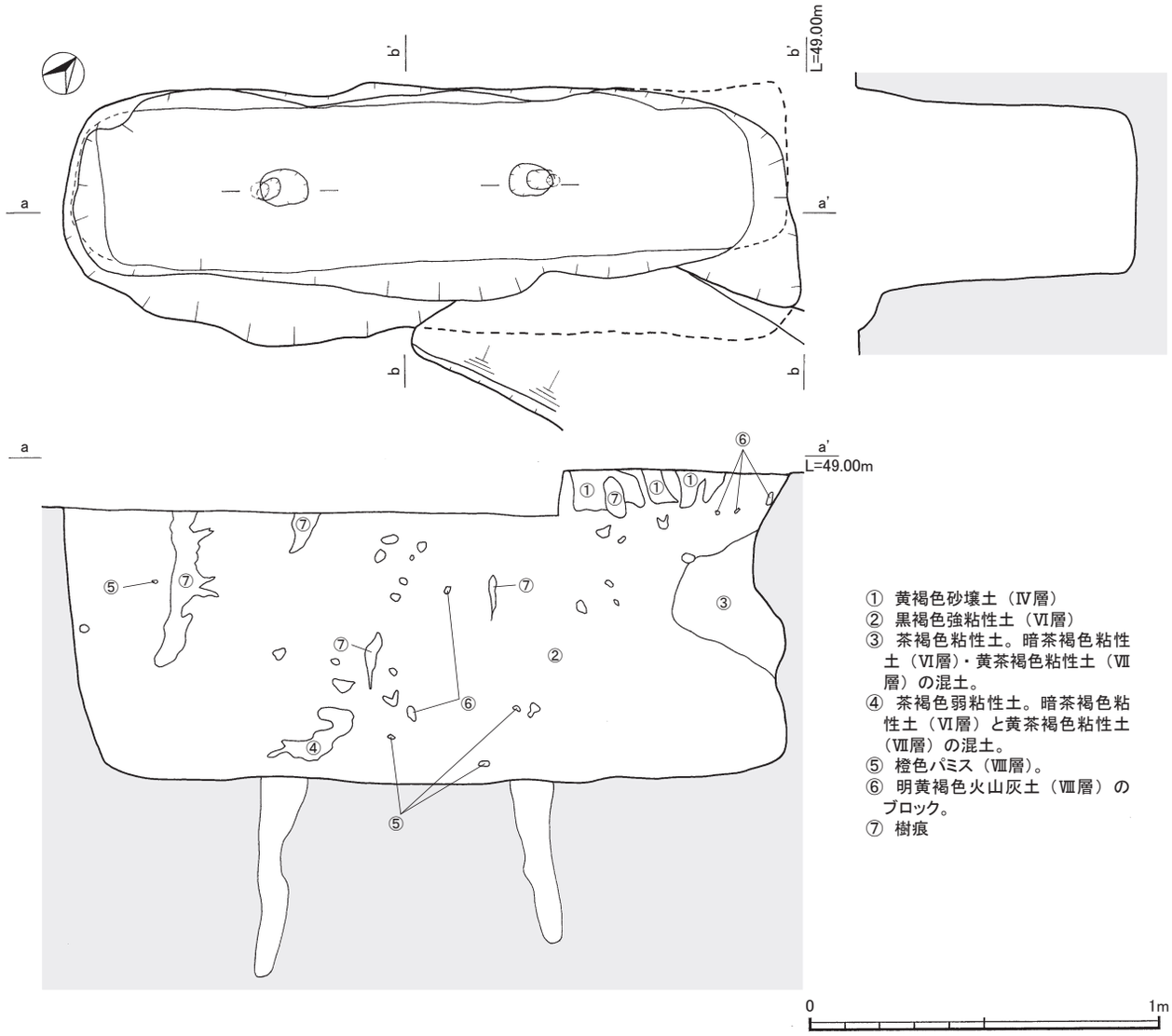




① 黒色強粘性土（Ⅵ層）
② 黒褐色強粘性土（Ⅵ層）
③ 茶褐色粘性土。暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）と黄茶褐色粘性土（Ⅶ層）・明黄褐色土（Ⅷ層）の混土。

0 1m

第９図　旧石器～縄文時代草創期落し穴３号・４号実測図



第10図　旧石器～縄文時代草創期落し穴５号実測図

はやや膨らみ，使用や抜き取り時の逆茂木の押圧により形成されたと思われる。本遺構は，隅丸方形状の平面観や，床面中央に１基設けられる小ピットなど，落し穴４号に近似する。形態の類似性の他，本遺構と落し穴４号のみに，埋土中に黒色強粘性土（Ⅵ層）が単独で堆積する。現況のⅥ層（暗茶褐色粘性土）形成以前（上・下位層との混土が進む以前の単独の黒褐色強粘性土層）に，更に黒色強粘性土が単独層で存在した可能性を示し，この時期に，落し穴３・４号が併設された可能性を見る。

④　落し穴４号

Ⅷ層上面で検出されたが，埋土の中心がⅥ層であることから，Ⅵ層上面で敷設された可能性が高く，本来の敷設面は図面の上場より25cm以上高い位置にあったと推定される。平面観は一見瓢箪状に極めて不定形に捉えられるが，落し穴自体は定形的な隅丸方形状である。

埋土が，上位と下位で質を異にする。下位は，埋土がレンズ状堆積せずブロック状に堆積することから，埋め戻した可能性が捉えられる。上位の①の黒色強粘性土堆積状況は，レンズ状堆積にも捉えうる。本遺構は，北東方向に，15.6cm程の浅めの掘り込み面が，方形状に伸びる。掘り込みは，明黄褐色土中（Ⅷ層）を掘り込むが，単独の明黄褐色土（Ⅷ層）が埋土中に捉えられず，掘り込みの床面の凹凸が顕著であること，掘り込みが定形的な隅丸方形状であることから，人為による掘り込みの可能性が高い。埋め戻し時に，坑に投下する土砂を採取した際の痕跡であると推察した。なお，埋土の土材に含まれるⅥ層と現況のⅥ層上面の高低差から，本来の敷設面は現況より25cm程上位と推定される。

床面に１基敷設される小ピットは，上場がやや膨らみを呈し，捕獲された獲物の暴れや逆茂木の抜き取り時の壁面へ圧がかかったためと思われる。

⑤　落し穴５号

本遺構は，落し穴１・２号に近接するD・E－６区のⅥ層面で検出された。長軸が短軸の４倍ほどに長い隅丸

長方形の平面観を呈し，断面観も定形的な長方形である。この細長いタイプの落し穴は，本遺跡の当該期の落し穴では，この１基のみである。

埋土状況は，黒褐色強粘性土（Ⅵ層）を基に，暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）や黄茶褐色粘性土（Ⅶ層）との混土や明黄褐色土（Ⅶ層）のパミスやブロックが散在的に包含される状況から，一気に埋め戻された可能性が高い。なお，横断面観右壁面が凹凸を呈するのは，③を埋め戻す過程で，投下される土砂が壁面に衝突し，その衝撃で壁面が剥落したと推察され，「一気に」埋め戻した状況が窺える。地山であるⅥ・Ⅶ層が③に相当する点や，③が②に浮く様に堆積する点も，その傍証と言える。

床面には，小ピットが２基敷設される。小ピットの床面の軸が，上場面の軸より外側にずれて位置し，断面観においても，両ピットがやや内側に斜立することから，逆茂木はやや内側に倒れ気味に敷設された可能性を見る。同様な傾向は，落し穴２号にも捉えられる。

（２）礫群

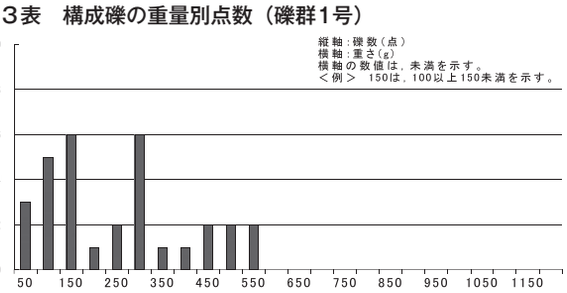
礫の石材は，安山岩や一部凝灰岩であるが，何れも本遺跡のある台地下の谷底平野を流れる河川敷や河床に，主として見られる石材である。何れの礫群にも，明瞭な掘り込み面や焼土は捉えられない。

①　礫群１号

Ｆ－２区のⅥ層上面で検出された。石材は，円礫が安山岩であり，角礫が凝灰岩から成る。礫の多くが被熱により赤化し，一部の礫は，被熱による破砕やひび割れが見られる。

礫は，30ｇ～540ｇの範囲に集中的に収まる。接合される破砕礫が比較的近接して留まることから，原位置をとどめる礫の存在も認められる。

第３表　構成礫の重量別点数（礫群1号）

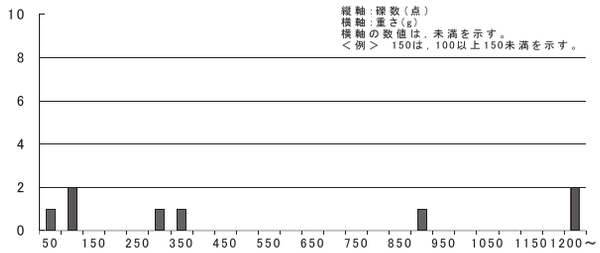


②　礫群２号

Ｅ－３区Ⅵ層上面で検出面された。石材は，全て安山岩である。一部の礫に被熱による赤化が見られ，剥片状の破砕も見られる。

礫は10ｇ～2,000ｇの範囲で，小礫を主とし，一部大礫が含まれる。礫の集中がなく，散在する。近接する礫群４号に礫集中が見られるので，本遺構は礫群４号の礫の一部である可能性もある。

第４表　構成礫の重量別点数（礫群2号）



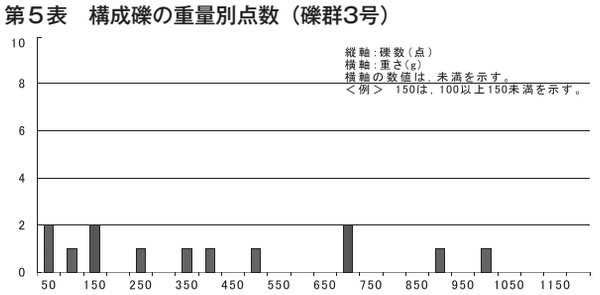
③　礫群３号

Ｇ－４区のⅥ層上面で検出した。石材は，何れも安山岩であり，被熱による表面の赤化が認められる。

礫は30ｇ～990ｇの範囲で，様々な大きさの礫により構成される。後世の樹痕等撹乱により，一部の礫が，検出面より若干浮いて捉えられるが，総体的に，断面上の礫の検出位置が水平であることから，レベル上はほぼ原位置を留めていると思われる。一部の隣接する礫が接合することから，平面上もほぼ原位置を留めている礫があると判断される。

礫中に細石刃核が共伴出土することから，細石刃期の遺構と判断される。

第５表　構成礫の重量別点数（礫群3号）



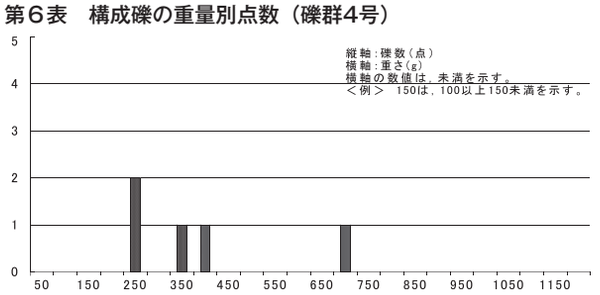
④　礫群４号

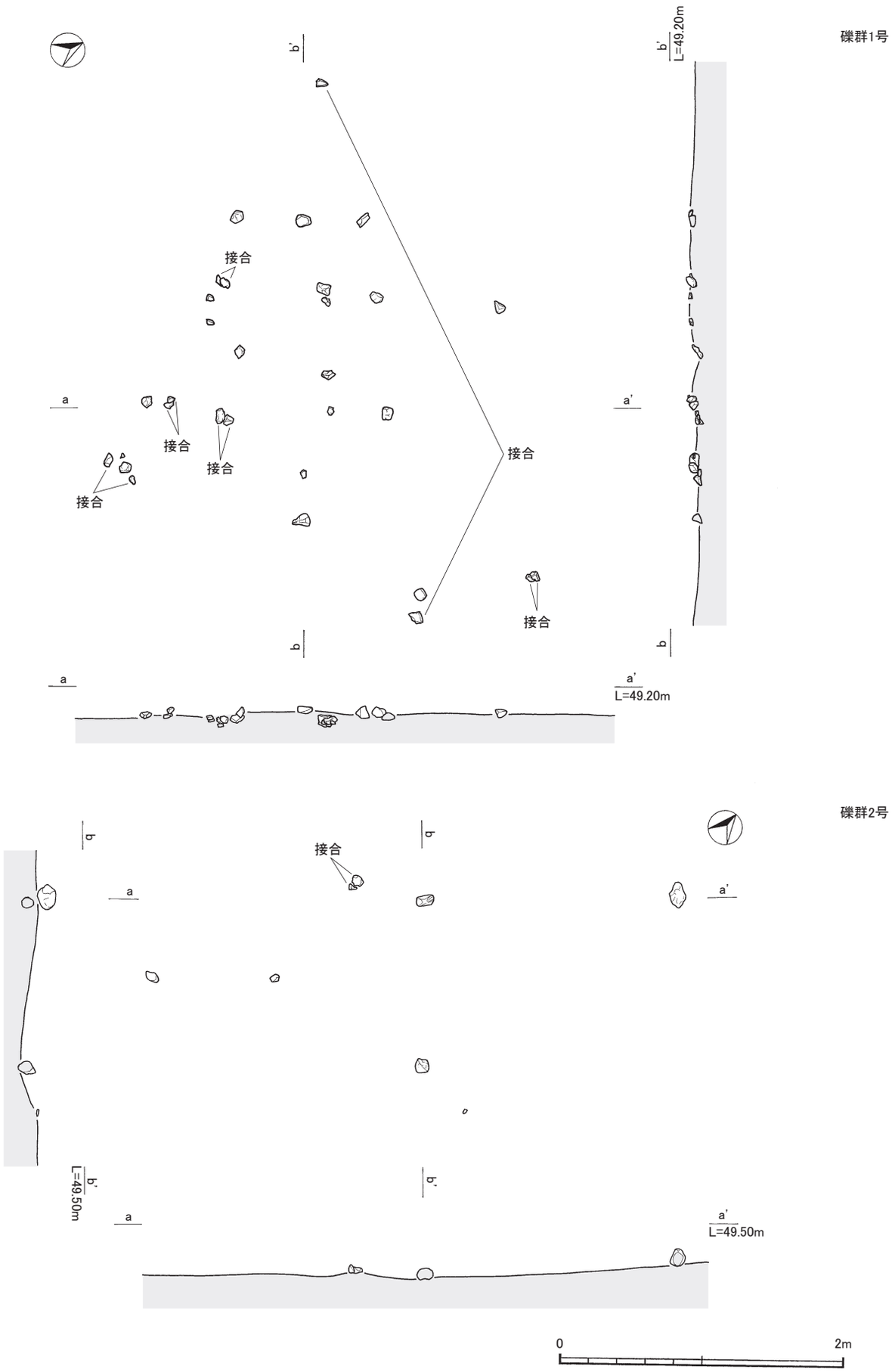
Ｅ－３区のⅦ層上面で検出した。石材は，何れも安山岩であり，被熱による赤化や一部煤の付着も認められる。

礫は238ｇ～680ｇの範囲で，小礫を中心に構成される。礫５個中，２個ずつ接合する。接合する礫の１個ずつは近接し，接合する片割れが離れて位置することから，本来は３個の礫が集中して配置され，被熱による破砕で分割され，礫群の利用後に動いたと推察される。

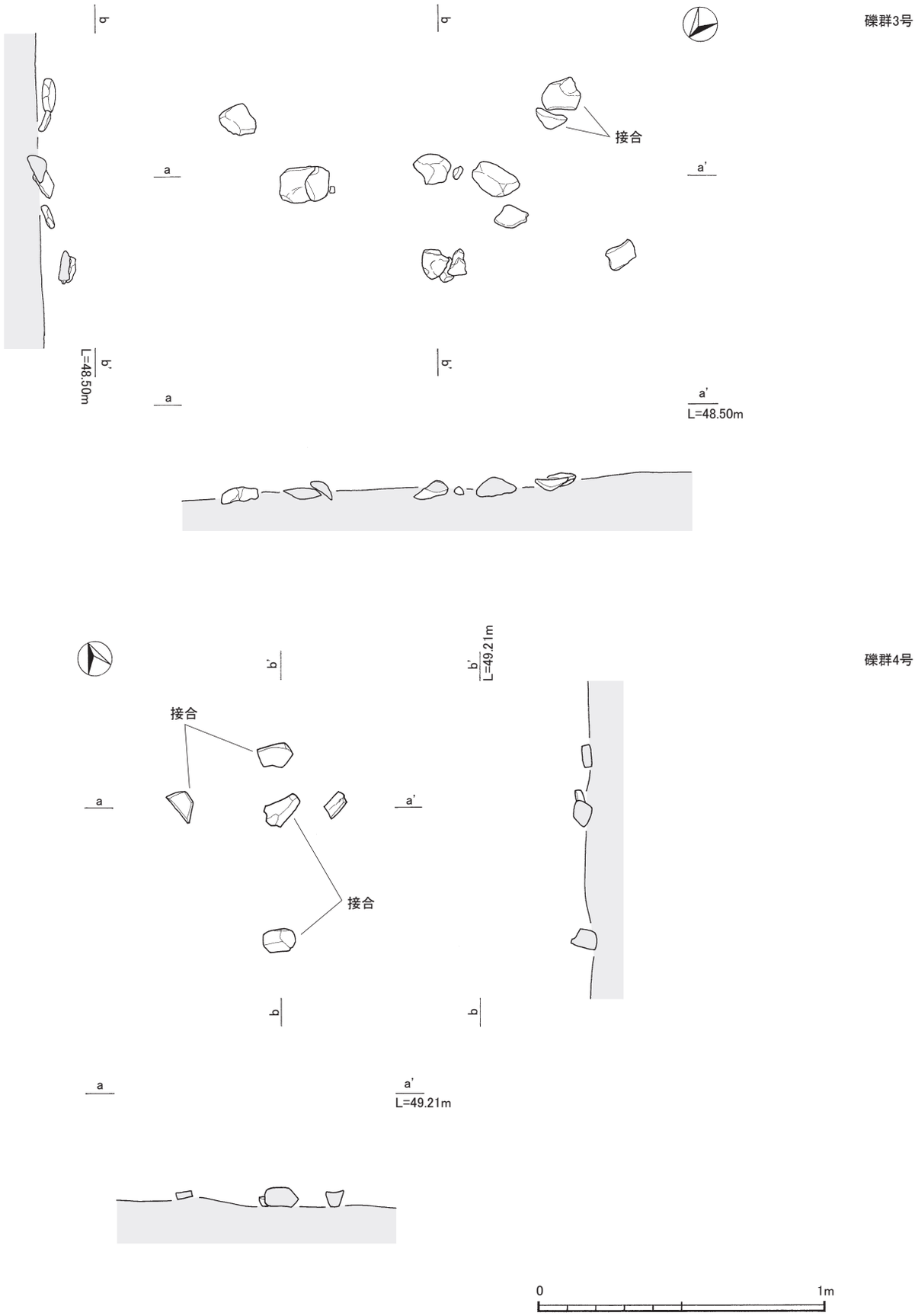
検出面の上位層（Ⅵ層）が10cm程度と層厚が薄いことや細石刃を伴う礫群３号が存在することから，本遺構は，Ⅶ層検出ながら，Ⅵ層上面を生活面とする細石刃期の遺構である可能性が高い。

第６表　構成礫の重量別点数（礫群4号）

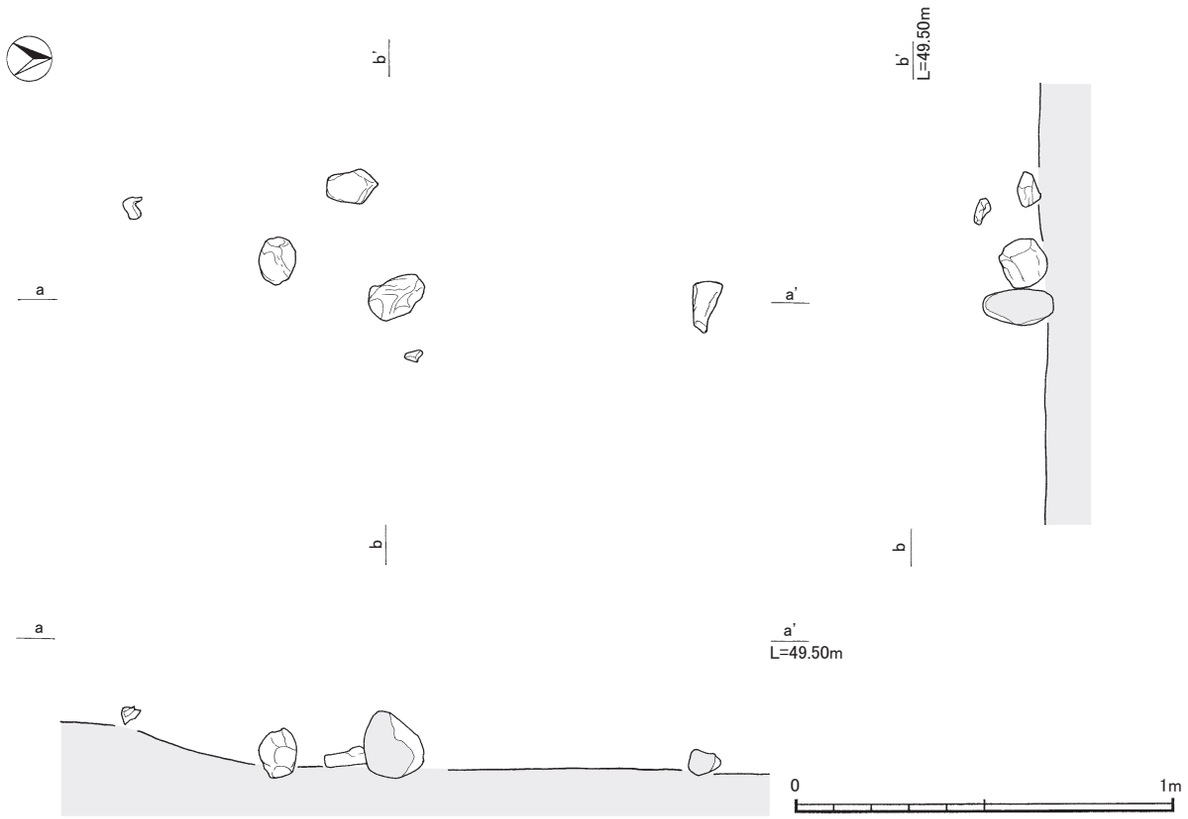




第11図　旧石器～縄文時代草創期礫群１号・２号実測図



第12図　旧石器～縄文時代草創期礫群３号・４号実測図



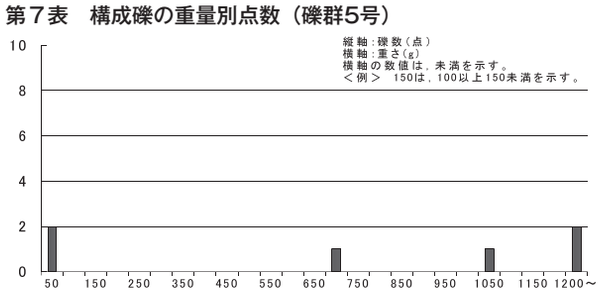
第13図　旧石器～縄文時代草創期礫群５号実測図

⑤　礫群５号

D－３区のⅦ層上面で検出された。石材は，全て安山岩であり，殆どの礫に被熱による赤化が見られる。小片の礫は，被熱による剥片状の破砕礫である。

礫は20ｇ～4,000ｇの範囲で，中程度の大きさの礫により構成される。剥片状の破砕礫を除く４個の礫の内，３個はやや礫集中と捉えうる。

第７表　構成礫の重量別点数（礫群5号）



第８表　旧石器～縄文時代草創期落し穴計測表

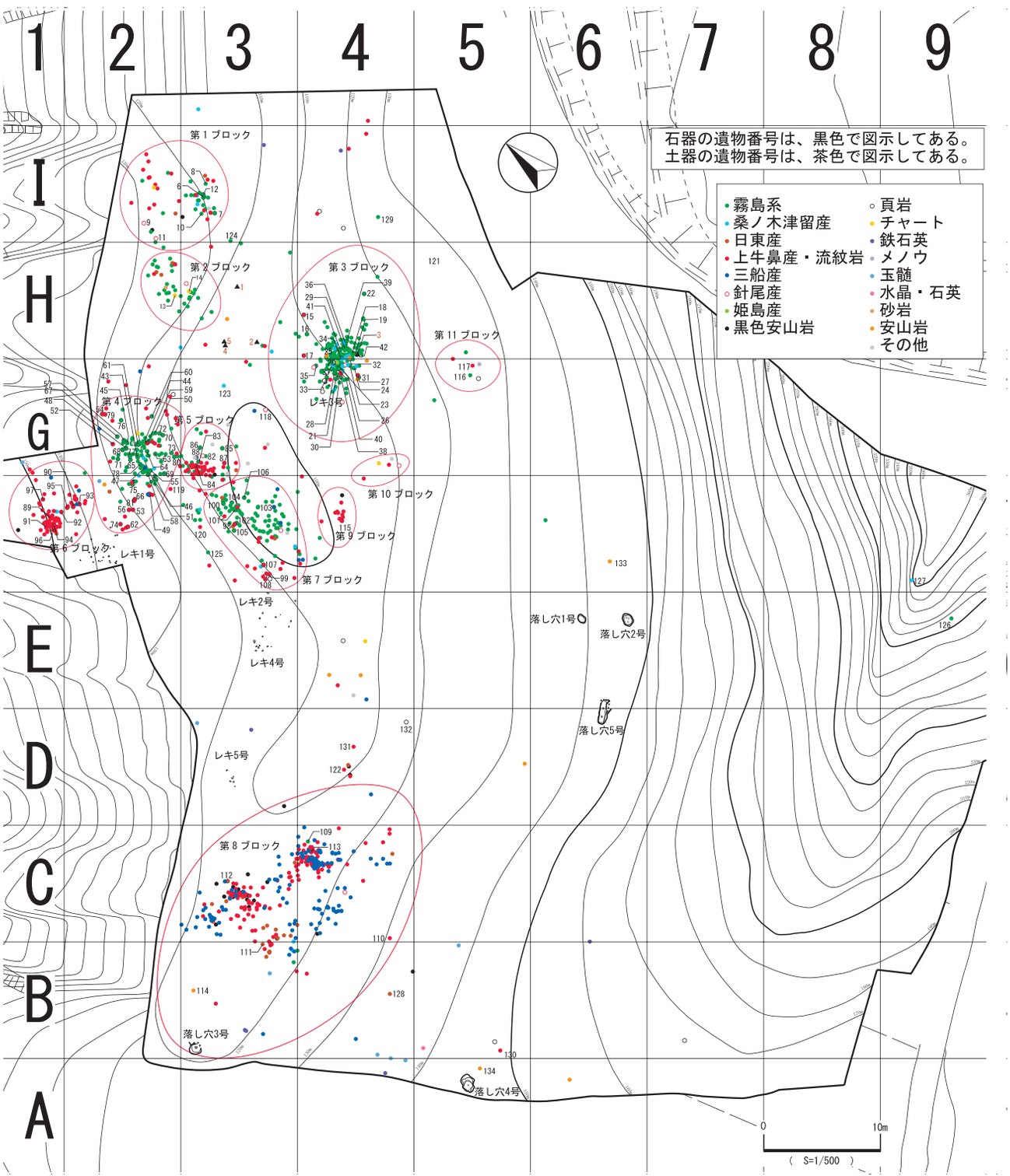
挿図番号	遺構名	検出区	層	上面の径（cm）	底面の径（cm）	深さ（cm）	小穴計測値（cm）			小穴計測値（cm）			備考
				長軸×短軸	長軸×短軸		No.	長径×短径	深さ	No.	長径×短径	深さ	
8	落し穴1号	E-6	Ⅶ	168×115	135×90	100	－	－	－	－	－	－	
	落し穴2号	E-6	Ⅵ	114×80	82×59	56	1	12×10	46	3	19×10	39	
							2	11×11	35	－	－	－	
9	落し穴3号	B-3	Ⅵ	102×88	72×68	83	1	20×17	37	－	－	－	
	落し穴4号	A-5	Ⅶ	154×86	74×66	56	1	12×10	29	－	－	－	
10	落し穴5号	D・E-6	Ⅵ	210×53	186×45	90	1	14×10	57	2	12×9	46	

第９表　旧石器～縄文時代草創期礫群計測表

挿図番号	遺構名	検出区	層	大きさ（cm）	礫数	赤化	備考
				長径×短径			
11	礫群1号	F-2	Ⅵ	380×310	31	あり	
	礫群2号	E-3	Ⅵ	380×170	8	あり	
12	礫群3号	G-4	Ⅵ	142×73	13	あり	
	礫群4号	E-3	Ⅶ	74×63	5	あり	
13	礫群5号	D-3	Ⅶ	161×52	6	あり	

3　遺物

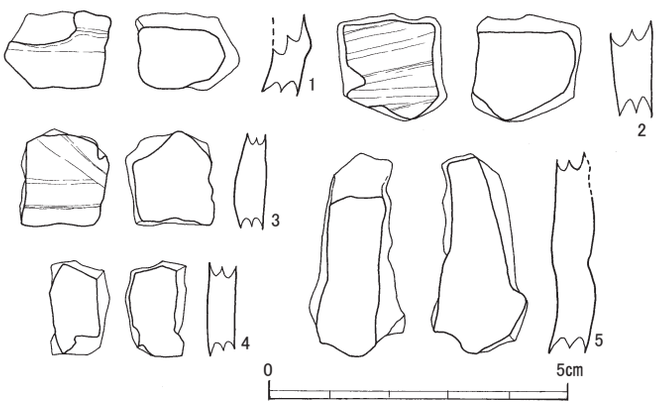
旧石器時代から縄文時代草創期の遺物包含層はⅤ層からⅧ層に亘る。Ⅳ層から出土した少数の細石刃もこの項で扱う。出土状況は下図に示すとおり，木場谷川を望む台地状の尾根の北西崖際に偏った分布を示し，南東側の区域にはほとんど出土が見られない。これらの遺物の出土分布から，粗密に多少の差違はあるものの，石器のまとまりで第１ブロックから第11ブロックに分け，まとまりから外れる物はブロック外出土として扱った。各ブロックは平面分布だけで分けたものであるが，垂直分布をみてもそのまとまり方は妥当であり，上下二つに分割できるまとまり方ではない。土器は，石器のブロックの中に含められないH-３区のブロック２と３の中間に出土しており，ブロックとの関係を示す出土状況ではなかった。



第14図　旧石器～縄文時代草創期遺物出土状況図

土器

総数５点の土器片が第15図に示すように，H－３区を中心に散在して出土している。いずれも小片であり，法量・器形を推定できうるような破片ではない。厚さや器面調整等を示すため，図化し第15図に示す。厚さはいずれも５㎜～７㎜であり，極めて薄手である。１は，器面の上端が微かに盛り上がっており，微隆起線文の一部かと思われる。２は貝殻条痕が残り，Ⅵ層出土ではあるが，草創期の土器片であるか疑問がある。早期前葉の貝殻条痕文土器が沈み込んだ可能性が高い。３にはナデ調整が残る。４と５は色調・胎土はよく似ており，同一個体と思われる。外面は傷みが強く，器面調整は不明であり，内面の器面調整もナデ等は観察できない。



第15図　旧石器～縄文時代草創期出土土器実測図

石器

Ⅴ層～Ⅷ層から総数1,181点の石器が出土しており，その石材は産地の異なる黒曜石を中心に，５種の石材がある。しかしながら，細石刃核や掻器に使われているのは黒曜石がほとんどであり，黒曜石以外の石材は剥片やチップとして残されているだけである。

この石器群は細石刃核・細石刃を主体とするもので，また，２点の石鏃を含んでおり，同一層序から土器片も出土していることを合わせ考えると，細石刃期から縄文時代草創期にかけての石器群であるといえよう。

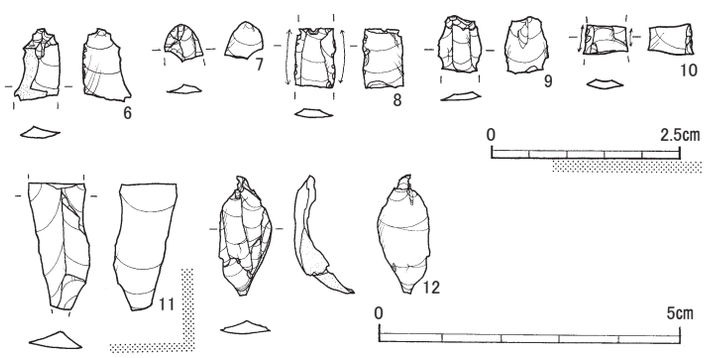
以下，各ブロックごとに叙述する。

第１ブロック

５点の細石刃と２点の作業面調整剥片以外はすべてチップと剥片である。

６は半透明の黒曜石製で，頭部調整が施される細石刃核から剥離されたものであり，右側縁には微細剥離が観察できる。７は漆黒色の黒曜石製であり，６と同様頭部調整が施された細石刃核から剥離されている。８は６と同じ石材で左右両側縁に微細剥離が残る。９は青灰色の黒曜石製で，８と同様の特徴を持つ。10は６と同じ黒曜石を素材としており，頭部と尾部を欠く。左右両側縁に微細剥離が残る。

11は９と同じ黒曜石を素材としており，背面右側は礫

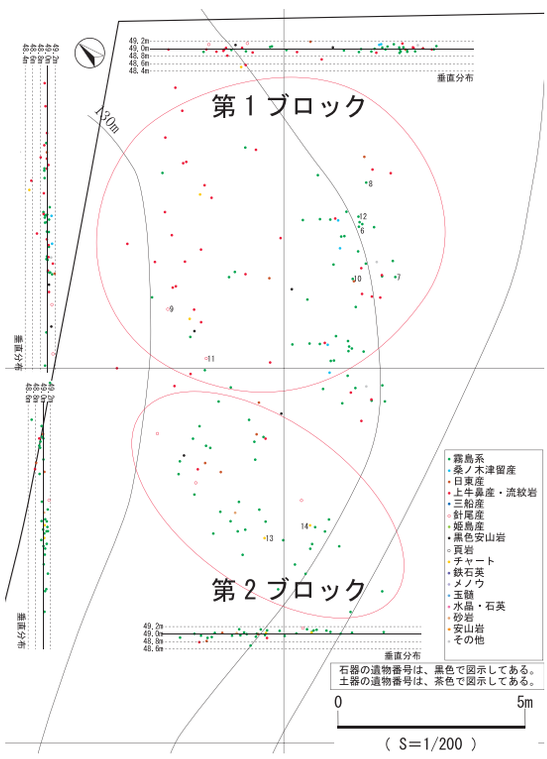


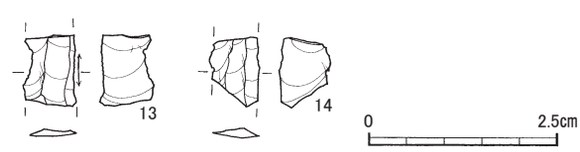
皮面を残しており，細石刃核の側面調整の剥片であろうか。12は６と同じ黒曜石であり，背面に５条の細石刃剥離痕が観察できる。側面観が「し」の字状を呈すること，頭部が砕けていることから，直接加撃による作業面調整剥片であろう。

第２ブロック

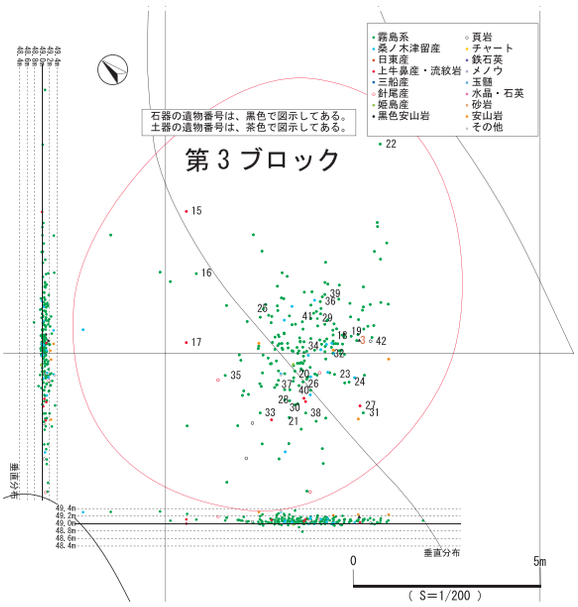
H-2・3区にかけて散漫なまとまりを見せるブロックである。

13・14の細石刃は漆黒色の黒曜石製であり，両方とも頭部・尾部を欠き，両側縁に微細剥離が観察できる。





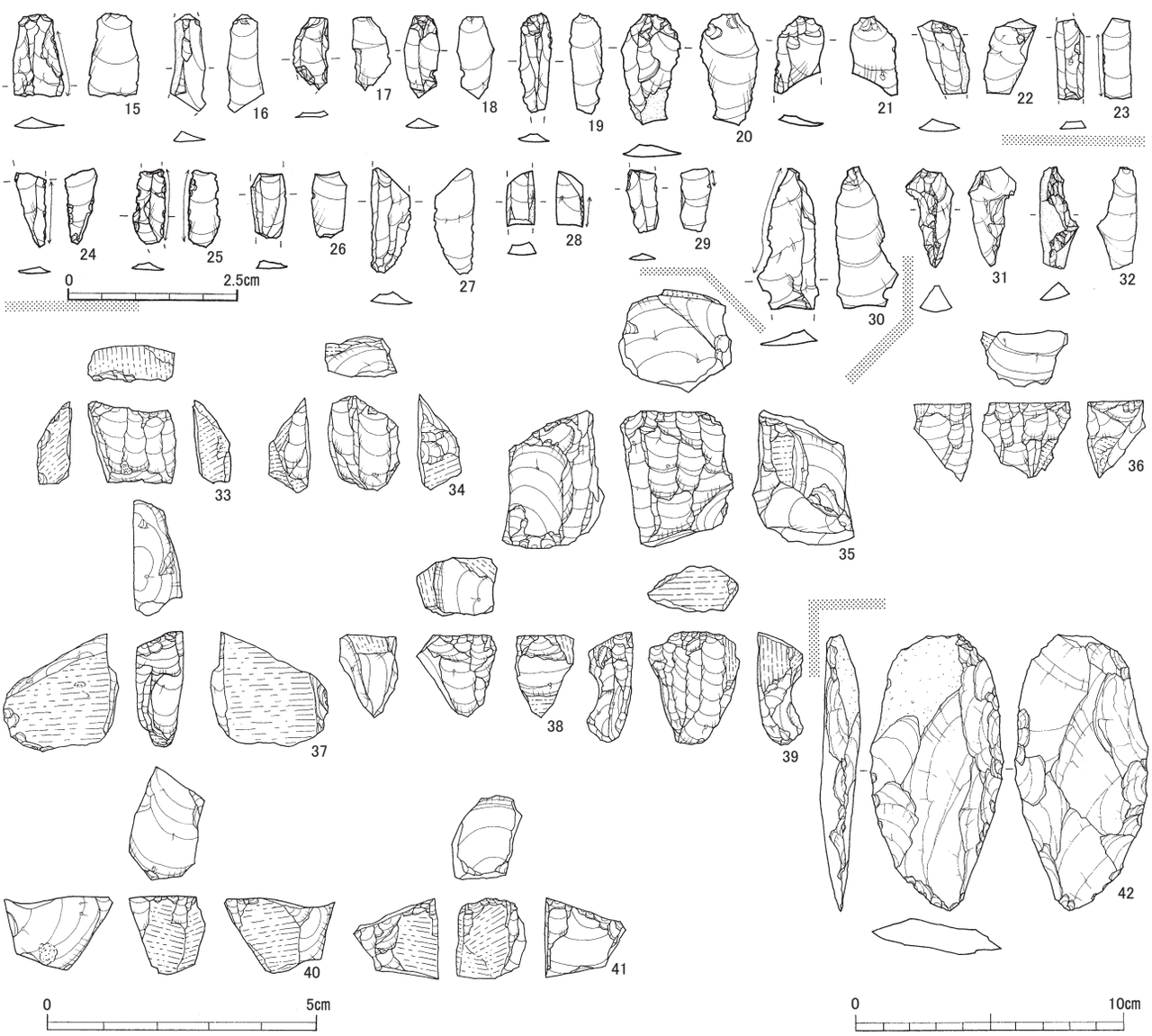
第16図　旧石器～縄文時代草創期第１・２ブロック出土状況図・石器実測図



第３ブロック

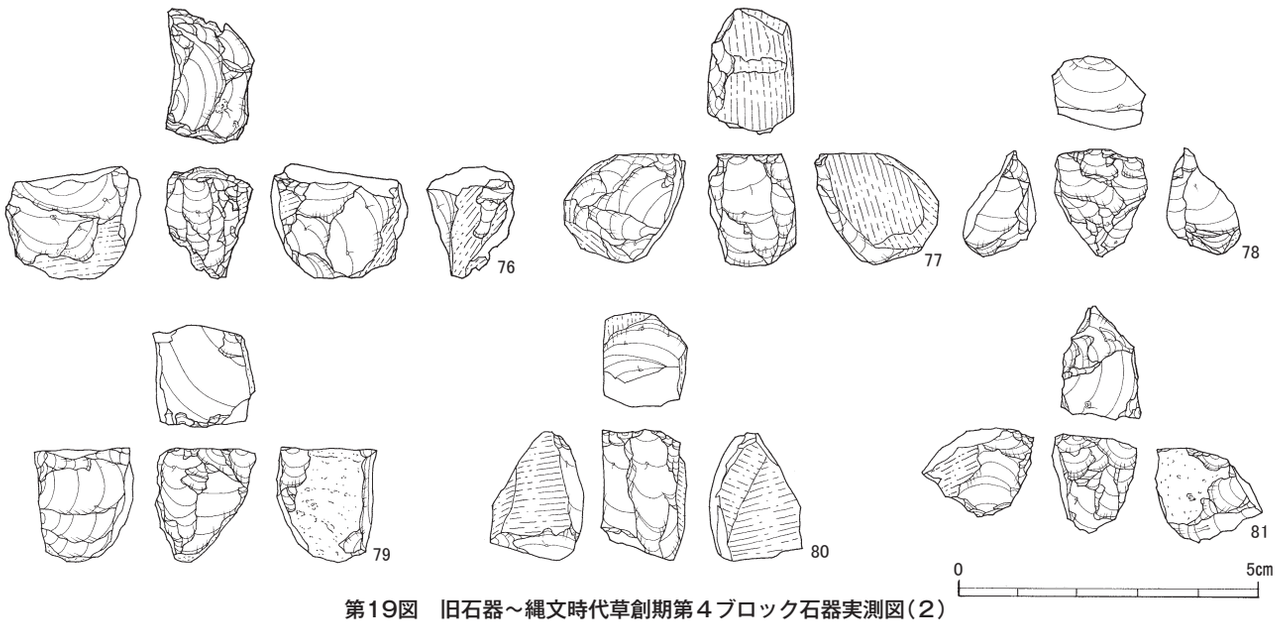
H・G－４区にやや密なまとまりを見せるブロックである。15 ～ 29はいずれも黒曜石製の細石刃であり，完形のものが若干見られるが，ほとんどが頭部もしくは尾部を欠く。頭部が残るものについては，いずれも頭部調整が見られる。側縁の微細剥離は5点の細石刃に残る。

30は第1ブロックの11と同じく側面調整剥片であろう。31，32は背面にスクレイパーエッジ様の交互剥離が見られ，細石刃核のファーストスポールと呼ばれるものであるが，このブロックではそのような工程を経る細石刃核は見られない。33 ～ 39は細石刃核であり，いずれも在地産の小亜角礫を素材とする。いずれも単設打面もしくは礫皮面打面であり，33に打面調整が残るが，他には見られない。また，33の最終細石刃剥離面以外には頭部調整が顕著に残り，細石刃の様相と良く符合する。なお，36と38は背面に残る剥離が作業面を切っており，正確には細石刃核の残欠である。42は頁岩製で，スクレイパーと分類したが，平坦剥離による器面調整



第17図　旧石器～縄文時代草創期第３ブロック出土状況図・石器実測図

第18図　旧石器～縄文時代草創期第４ブロック出土状況図・石器実測図（１）



第19図　旧石器～縄文時代草創期第４ブロック石器実測図（２）

が器体全面に及ぶこと，両側縁には刃部調整があること，下端は右側縁の細かな調整によってやや尖ることから，尖頭器として分類しても良いのかもしれない。

第４ブロック

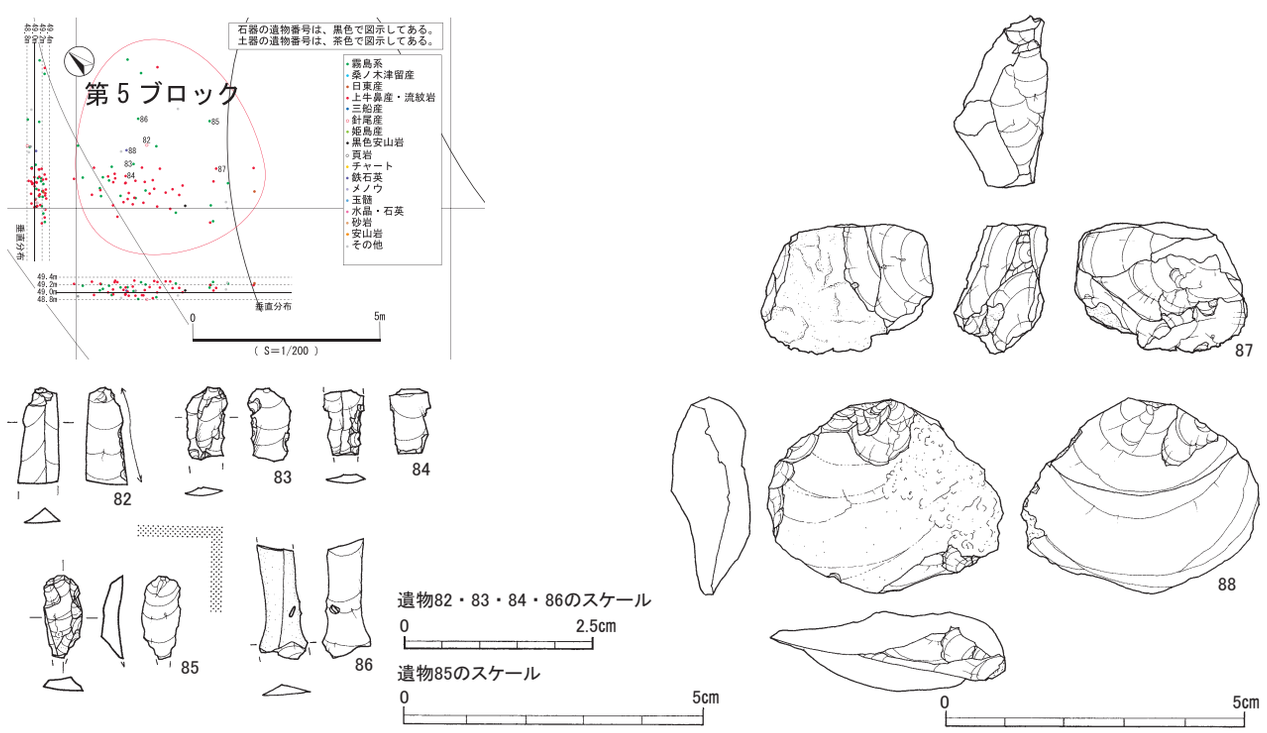
F－２区からG－３，G－３区にかけて濃淡はあるものの石器が集中して出土している。これを特に密に分布する範囲で分け，第4 ～ 7ブロックに分けた。その分け方は発掘現場での出土状況の観察によるものである。

43 ～ 64の細石刃，65・78の掻器，66のスクレイパー，67 ～ 77・79 ～ 81の細石刃核のすべてが黒曜石製であり，ほとんどが在地産であるが，少数の西北九州産の黒曜石が混じる。

65の掻器は礫表皮の残る部厚な縦長剥片を素材とするもので，左側縁の刃部調整を下端の刃部調整が切っており，横長であったものが再加工されて，縦長の掻器になったものである。78は当初細石刃核ブランクとして分類されていたが，正面の剥離はまっすぐな剥離ではなく波打っているので細石刃剥離痕と見なしがたく，左側面上端に残る小剥離は掻器の刃部加工と同じでありかつ刃部のつぶれが掻器そのものの特徴を示す。66はスクレイパーとして分類しているが，器面調整が施されていること，刃部調整が片側からだけ施されていること等から若干躊躇するものである。

第５ブロック

このブロックはF・G－２・３区で特に密な集中を見せる範囲を特定した。５点の細石刃と１点の細石刃核ブラ

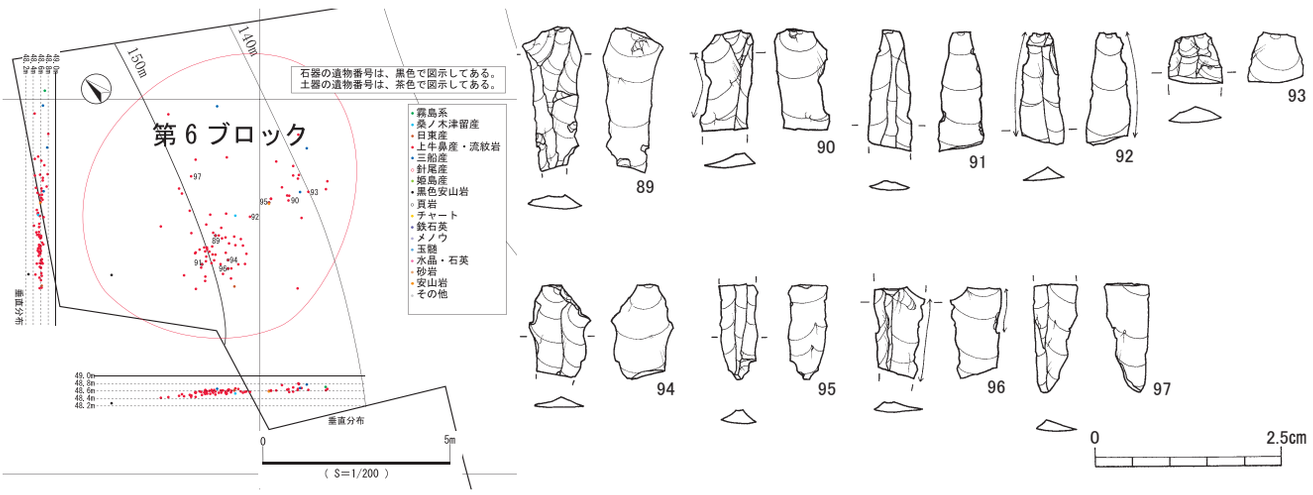


第20図　旧石器～縄文時代草創期第５ブロック出土状況図・石器実測図

ンク，１点のジャスパーの剥片からなる。87の細石刃核母核は図に誤りがある。予定作業面としたものが予定打面であり，予定打面とした面が予定作業面である。そのように見た方が，側面調整と背縁調整とが整合性を持つ。88の剥片は下端に若干の小剥離が見られるが，何らかの刃部調整とは見なしがたい。

第６ブロック

Ｆ－１・２区及びＧ－１・２区にやや散漫なまとまりを見せる，９点の細石刃からなり，木場谷川を臨む崖際のブロックである。

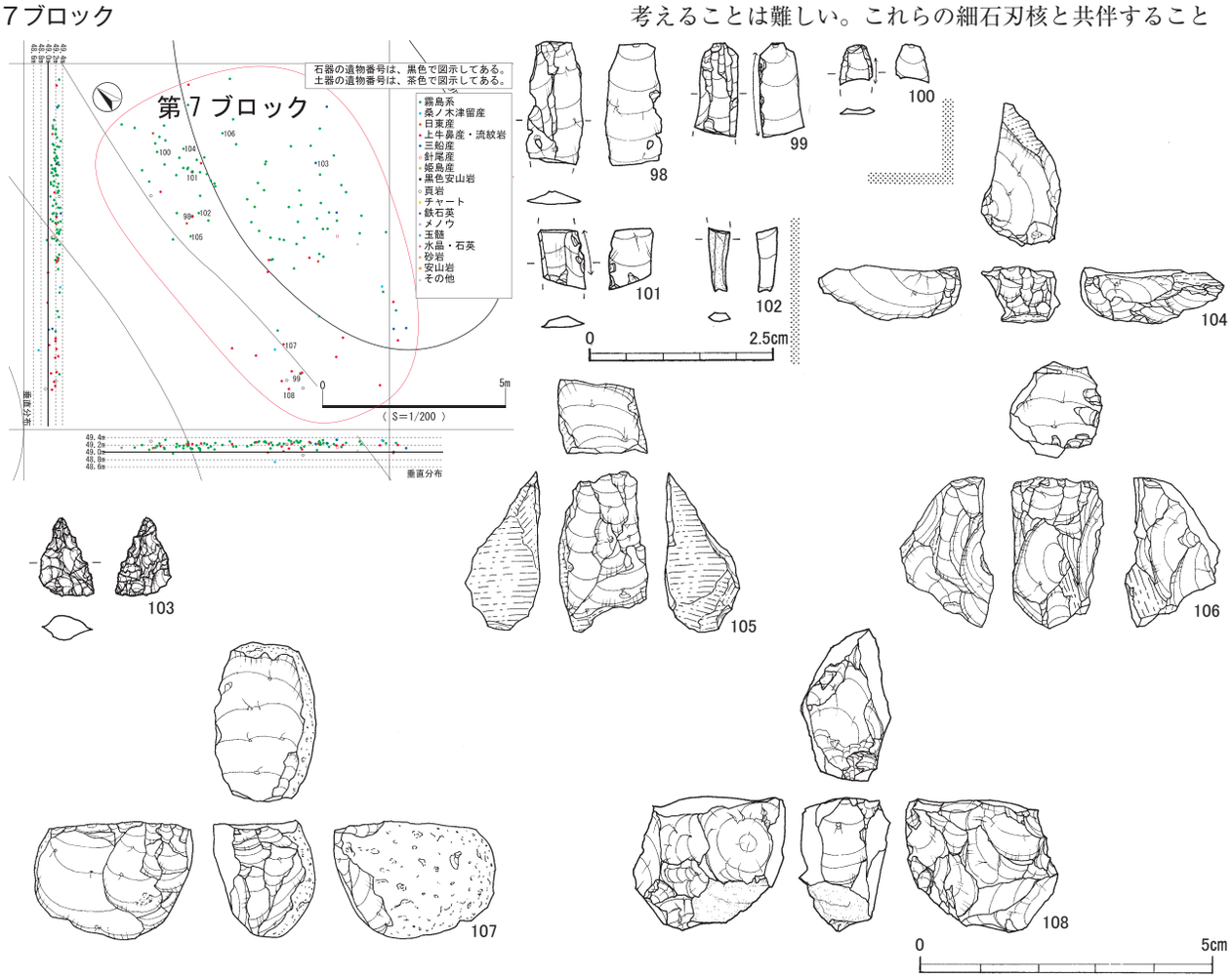


第21図　旧石器～縄文時代草創期第６ブロック出土状況図・石器実測図

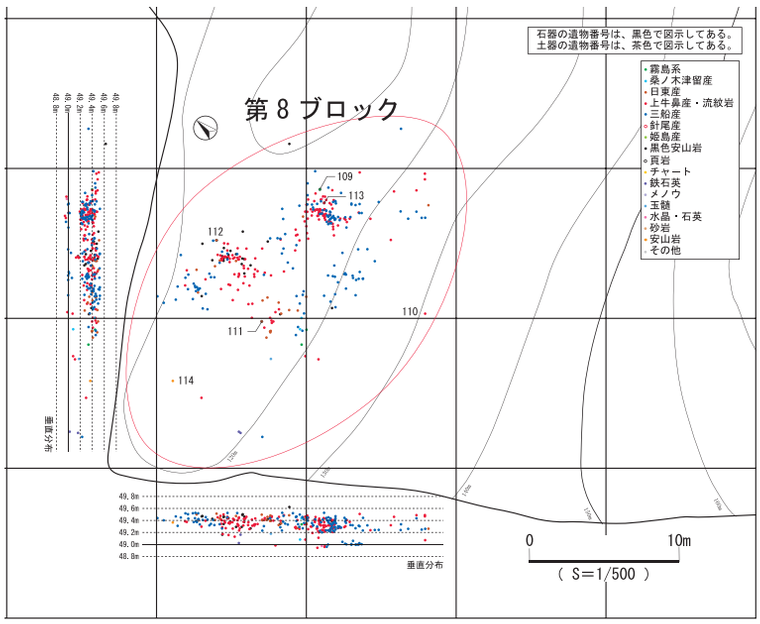
89 ～ 97の細石刃はすべて在地産黒曜石であり，細石刃核は持ち出されている。

第７ブロック

細石刃，細石刃核，細石刃核ブランクと石鏃からなるブロックで，Ｆ－３区にやや散漫なまとまりを見せるブロックである。103の石鏃はこの散漫なまとまりのほぼ中心にあり，垂直分布からもこのブロックと切り離して考えることは難しい。これらの細石刃核と共伴すること



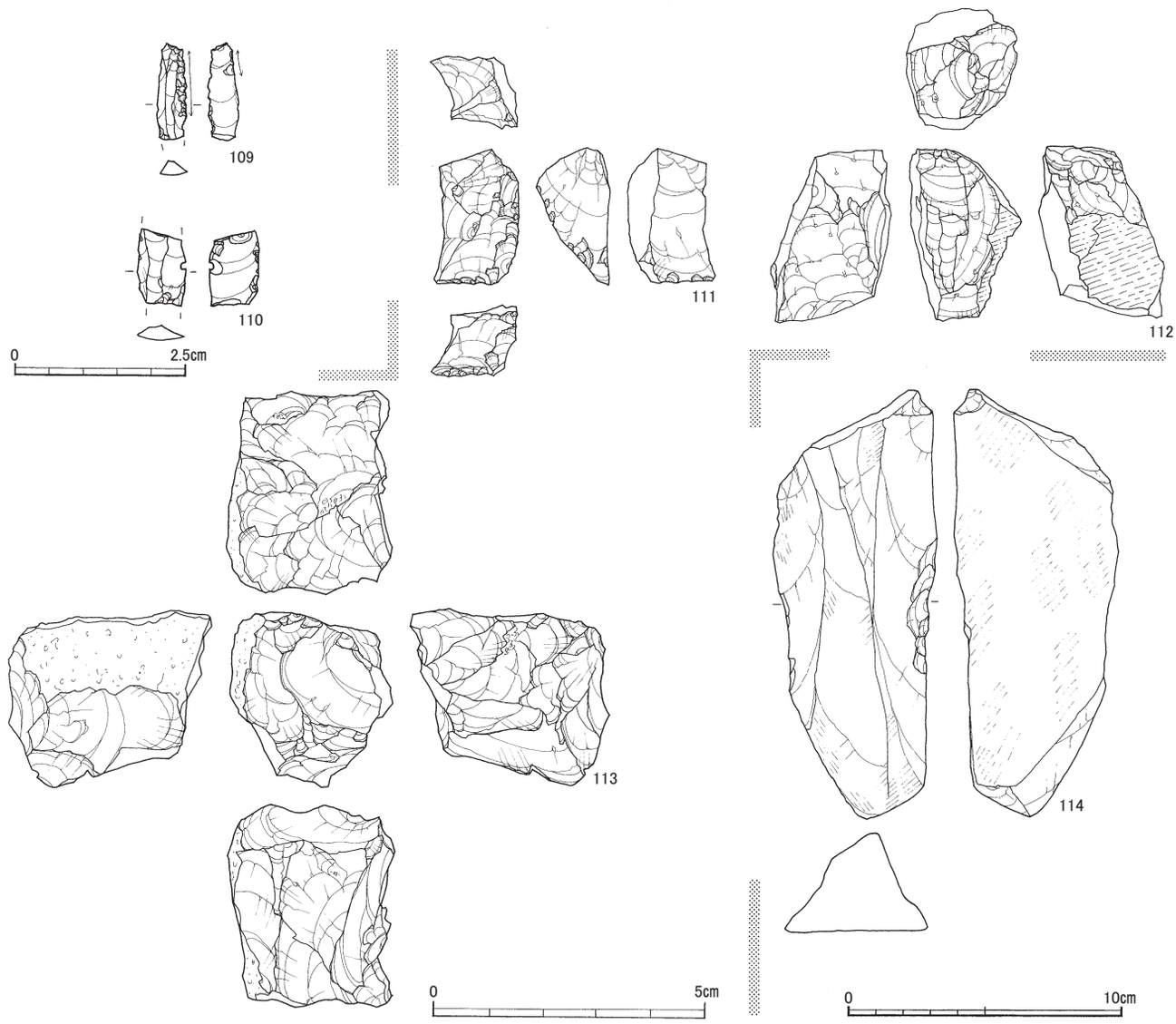
第22図　旧石器～縄文時代草創期第７ブロック出土状況図・石器実測図



を否定できない。ただし，この石鏃だけが三船産と思われる黒曜石であり，他の細石刃等に見られない石材であることには留意しておきたい。

第８ブロック

他のブロックからかけ離れて，B－３・４区及びC－３・４区に位置するブロックである。C－３区のまとまりとC－４区のまとまりとに分けてブロックを形成すると見なす方が妥当性が高いかもしれないが，他のブロックとの距離感であえて一つのブロックとしてみなした。２点の細石刃，１点の掻器，１点の細石刃核，１点の細石刃核ブランク，１点の礫器からなる。111の掻器は折断した分厚い剥片の一縁辺に急斜度の刃部加工を施したものである。112は日東産の黒曜石製であり，極めてまれな例であるが，２条の細石刃剥離が残る。114は断面三角形の安山岩の亜角礫の一片に小剥離が見られる。



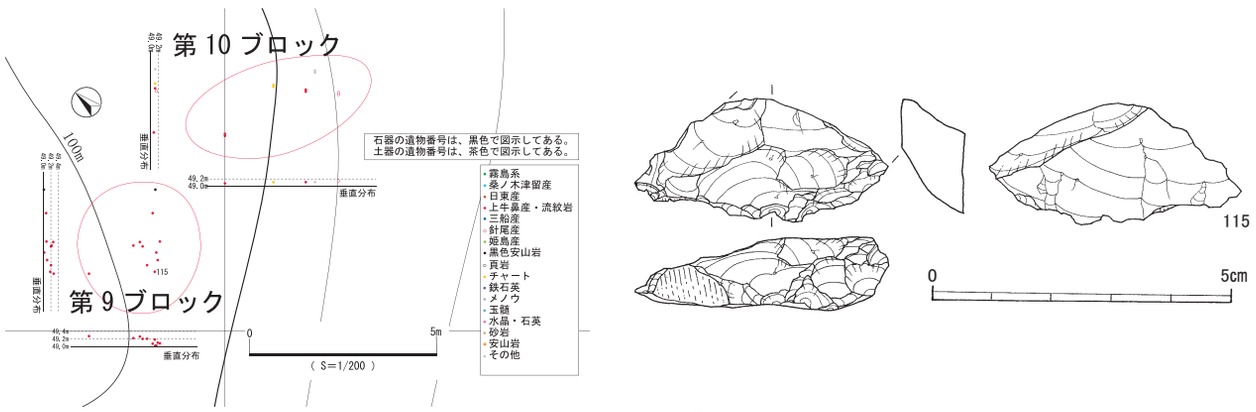
第23図　旧石器～縄文時代草創期第８ブロック出土状況図・石器実測図

第９ブロック

第７ブロックから離れてF－４区に位置するやや散漫なまとまりのブロックで，第10・第11ブロックとともに，点数が多い密なまとまりのブロックの周辺に位置する小ブロックである。115の加工痕剥片のみであり，これは下縁からの二つの器面調整剥離があり，刃部加工は見られないので，スクレイパーにも分類しがたい。

第10ブロック

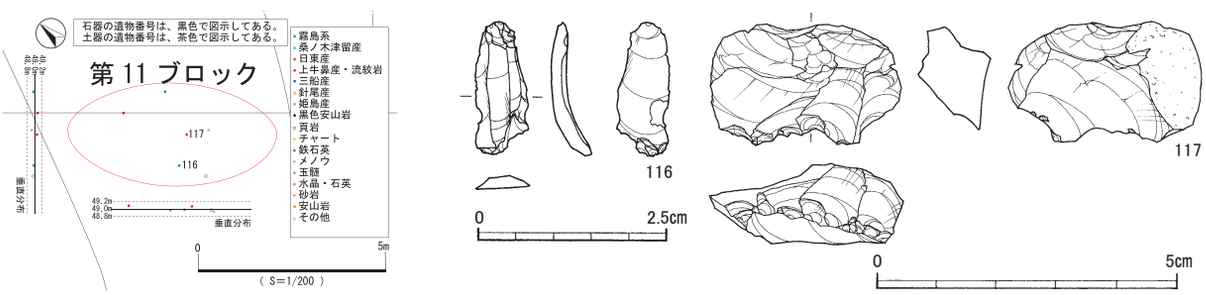
第９ブロックで述べたとおりであり，剥片やチップのみからなるブロックである。



第24図　旧石器～縄文時代草創期第９・10ブロック出土状況図・石器実測図

第11ブロック

H・G－５区に位置する６点からなる散漫なまとまりを見せるブロックであり，１点の細石刃と117のコンケイブドスクレイパーからなる。これはブロック状に割れた剥片の一側縁に内弯する刃部を付けたものであり，内弯する刃部の左右両側も掻器の刃部が形成されている。特に右側の刃部のつぶれは著しく，内弯刃よりもつぶれが顕著である。また，刃部が横長に形成されるのは，65の掻器が縦長に作り替えられる前の姿を想起させる特徴であり，興味が持たれる。



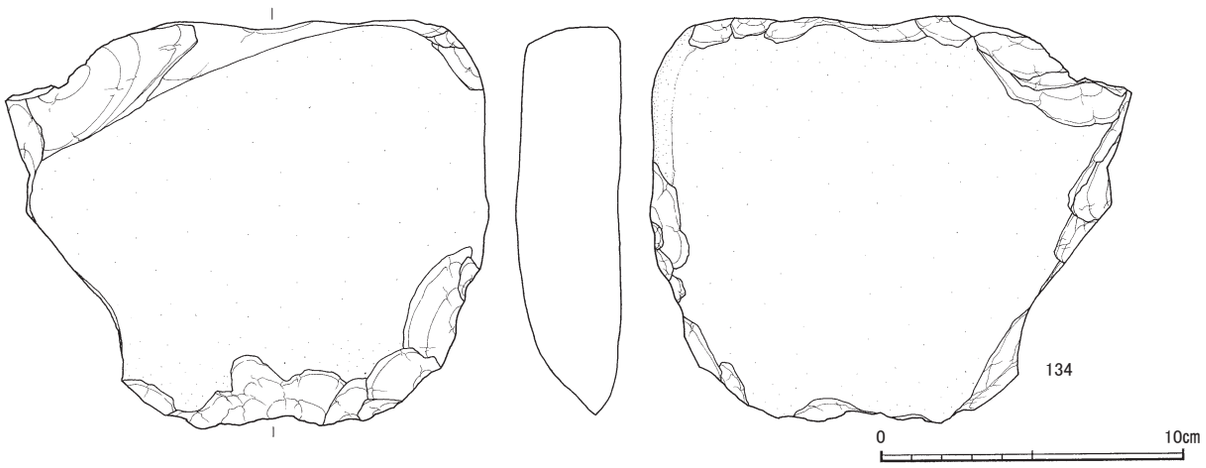
第25図　旧石器～縄文時代草創期第11ブロック出土状況図・石器実測図

ブロック外出土石器

先に述べたように，Ⅴ～Ⅷ層出土の石器を平面的まとまりから第１～11ブロックに分け，それぞれで叙述してきたが，まとまりに含まれることなく，他の石器とは離れた位置で出土している石器もある。これらの石器も，出土層序や器種構成から細石刃期末から縄文時代草創期にかけての所産であることは否定できない。

これらの石器には，細石刃が４点，掻器が１点，石鏃が１点，細石刃核が４点，細石刃核ブランクが２点，剥片石核が２点，敲石，礫器が各１点含まれる。118～121は細石刃であり，ブロック出土のものと同様である。120は他のものと比べて若干，幅広で薄い特徴があり，例えばブロック２の33や34のような細石刃核から剥離されたもののようである。122は掻器であるが，刃部調整剥離は非常に微細なもので，切断された剥片を素材にすることと合わせて，111と同じような特徴を持つ。123はⅥ層出土の石鏃である。Ⅵ層は旧石器から縄文時代草創期にかけての包含層であり，縄文時代早期の石器の沈込みがないとは言い切れないが，草創期の所産であると捉えたい。透明度の高い黒曜石の鱗状剥片を素材とし，腹面には素材剥片の主剥離面を大きく残す。124～127は細石刃核である。127は打面と作業面の成す角度が鈍角であり，通常の細石刃核では考えられないものであるが，打面調整と作業面調整が上手く整合せずに２条の細石刃剥離を試みただけで放棄されたものであろうか。128と129は細石刃核ブランクとして分類した。130，131は剥片石核である。130は厚手の剥片を素材とし，剥片剥離が進んだ結果，このような盤状石核になったものである。131は黒曜石の円礫を素材とし，その一端を落として打面とし，２枚の目的剥片剥離を行ったところで終わっている。132は，頁岩の縦長剥片であり，背面にも縦長剥片剥離が残っており，連続して縦長剥片剥離が行われた石核から剥離されたことが分かる。この石器群の中では異質の存在である。

第26図　旧石器～縄文時代草創期ブロック外出土石器実測図（１）



第27図　旧石器～縄文時代草創期ブロック外出土石器実測図（2）

133は安山岩の亜円礫を素材とする敲石で，両端に敲打痕が残り，正面は平滑な磨痕が残る。134は安山岩の円礫を素材とする礫器であり，下縁にラフな剥離による刃部が形成されている。

細石刃核

各ブロックおよびブロック外出土石器の項で触れなかった細石刃核及び細石刃核ブランクについて，ここでまとめて特徴を記しておきたい。

総数37個のすべてが黒曜石であり，他の石材が用いられていないことが，特徴の一つとして指摘できる。これは，出土している細石刃が，ブロック外で出土した鉄石英製である121の細石刃1点を除き，すべて黒曜石であることと整合する。

次に挙げられる特徴は，礫及び分割礫を素材とするものがほとんどであることで，剥片素材の細石刃核はブロック外で出土した126の１点，細石刃核ブランクは87と108の三点である。この特徴は，細石刃核に利用した原石が，在地の黒曜石原産地（上牛鼻・桑ノ木水流等）のものがほとんどを占めることから来る。これらの原産地では黒曜石は鶉卵大の礫として存在し，鶏卵大の礫はまれに見られるだけである。その小ささ故に，両面加工のブランクを成形できる厚さ１㎝を越える剥片を剥離できない。また，その小ささ故に，礫皮面を丹念に除去して成形する矢出川技法のごとき細石刃核も作成できない。この結果，断面形が逆三角形・逆台形を呈する楔形細石刃核にするため，側面調整や下縁・背縁調整を施さないという特徴が生まれる。原石が小さいがために，側面調整や下縁・背縁調整を施せば，細石刃核が所定の大きさにならないからであろう。更にこの結果，33，34，35のような断面形が方形を呈する細石刃核となる。換言すれば，原石の小ささが「楔形」を形成することを規制するのである。ただし，このような規制があっても，「楔形」への指向が存在する。

例えば，37，67，69，73，76等のように，原石の形状を利用して，断面が楔形になるように打面を設定している例が数多く見受けられるのである。また，側面調整を施す余地のある素材の場合は，76，81，107などのように楔形にこだわるようである。特に107は，礫の分割面から側面調整を行い，断面を逆台形に仕上げる意図が窺えるもので，片側だけではあるが，船野技法と同じ技術である。ブランクである41も同様に分割面からの加撃によって側面調整を施そうとしたものであるが，予定作業面と左側面の調整剥離に失敗して放棄された例であろう。剥片素材の細石刃核は1点，126がある。下縁・背縁調整が丹念に行われ，左側面は礫皮面を残している。右側面上半に残る大きな剥離面はネガティブ面であり，素材剥片を加工した剥離であることが了解される。この剥離面は下縁からの加撃によって切られており，求心的な剥離によって左側面は加工されたことが了解される。また，上半の剥離面と打面は，エッジ部分に小剥離があって直接の切り合いが分からないが，その形状やリングの状況から打面が後から剥離されたようである。つまり，礫皮面を持つ剥片の腹面に周縁からの剥離を加えて片面加工の母核を作り，その一端をスポール状に取り去って打面を作る工程が想定できる。ただし，この打面が，再生された打面であるならば，スポール剥離による打面形成はないことになる。そこで，参考になるのが87，108の母核である。両者とも，断面が楔形になるように，片面を求心的な剥離によって整形されており，素材剥片の折断面もしくは分割面が打面として予定される。これに丹念な下縁・背縁調整が加われば126のような細石刃核になるであろうことが看取できる。87は作業面のファーストスポールになるであろう稜の形成まで施されているが，下端の一部がスによって剥落したため細石刃剥離まで進行しなかったのでないかと思われる。108は下縁にある礫皮面の凸凹を除去できなかった，除去すれば小さくなりすぎるために細石刃剥離まで進行しなかったものであろう。

第10表　旧石器～縄文時代草創期土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他		
15	1	23915	H-3	Ⅵ	深鉢	胴部？	外：ナデ 内：－	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	－	－	－	○	○	○	パミス	良	微隆起線文
	2	23911	H-3	Ⅵ	深鉢	胴部？	外：貝殻条痕 内：ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	明黄褐色 Hue10YR7/6	－	－	－	○	○	○	礫	良	
	3	24006	H-4	Ⅵ	深鉢	胴部？	外：ナデ 内：－	にぶい褐色 Hue10YR6/4	にぶい褐色 Hue10YR6/4	－	－	－	○	○	○	黒色鉱物	良	
	4	23913	H-3	Ⅵ	深鉢	胴部？	外：－ 内：－	にぶい橙色 Hue7.5YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	－	－	－	○	○	○	黒色鉱物	良	
	5	23876	H-3	Ⅵ	深鉢	胴部？	外：－ 内：－	明黄褐色 Hue10YR6/6	明黄褐色 Hue10YR6/6	－	－	－	○	○	○	礫，黒色鉱物	良	

第11表　旧石器～縄文時代草創期石器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	ブロック	器種	石材	産地	計測値				備考
									長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	
16	6	24093	I-3	Ⅵ	1	細石刃	黒曜石	霧島系	（10.0）	6.5	2.0	0.05	
	7	23943	I-3	Ⅵ	1	細石刃	黒曜石	霧島系	（5.0）	5.3	1.3	0.03	
	8	24177	I-3	Ⅵ	1	細石刃	黒曜石	霧島系	（8.0）	6.0	1.1	0.06	
	9	23920	I-2	Ⅵ	1	細石刃	黒曜石	針尾産	（7.6）	6.1	1.3	0.05	
	10	24084	I-3	Ⅵ	1	細石刃	黒曜石	霧島系	（4.0）	5.7	1.1	0.03	
	11	23918	I-2	Ⅳ	1	側面調整剥片	黒曜石	針尾産	（17.2）	8.0	2.3	0.28	
	12	24599	I-3	Ⅵ	1	作業面調整剥片	黒曜石	霧島系	20.0	9.0	2.0	0.49	
	13	24138	H-2	Ⅵ	2	細石刃	黒曜石	－	（10.0）	7.1	1.1	0.08	
	14	24068	H-3	Ⅵ	2	細石刃	黒曜石	－	（9.7）	7.0	1.4	0.06	
17	15	25159	H-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	（12.5）	7.5	1.8	0.17	
	16	25111	H-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	（14.6）	5.5	2.0	0.07	
	17	25112	H-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	10.7	5.7	1.0	0.07	
	18	24782	H-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	12.5	5.4	1.5	0.08	
	19	24645	H-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	（15.0）	5.1	1.2	0.08	
	20	24771	G-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	16.4	8.6	2.0	0.24	
	21	24543	G-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	（11.6）	7.5	2.0	0.08	
	22	23923	H-4	Ⅵ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	（11.1）	8.1	2.0	0.11	
	23	24885	G-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	（12.2）	4.2	1.1	0.07	
	24	24737	G-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	（11.2）	4.5	1.0	0.04	
	25	24881	H-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	（11.5）	5.1	1.0	0.07	
	26	24770	G-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	（9.7）	5.4	1.1	0.08	
	27	24735	G-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	15.8	6.0	2.0	0.13	
	28	24544	G-4	Ⅷ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	（8.3）	4.3	2.0	0.06	
	29	23999	H-4	Ⅵ	3	細石刃	黒曜石	霧島系	（9.7）	5.0	1.0	0.05	
	30	736	G-4	Ⅳ	3	側面調整剥片	黒曜石	霧島系	（21.3）	9.3	2.0	0.33	
	31	24580	G-4	Ⅷ	3	ファーストスポール	黒曜石	霧島系	18.3	9.0	4.9	0.45	
	32	24756	G-4	Ⅷ	3	ファーストスポール	黒曜石	桑ノ木津留産	19.1	7.3	3.2	0.3	
	33	24025	G-4	Ⅵ	3	細石刃核	黒曜石	霧島系	15.8	16.6	7.2	1.18	
	34	24559	H-4	Ⅷ	3	細石刃核	黒曜石	霧島系	17.7	13.5	8.4	1.89	
	35	25260	G-4	Ⅷ	3	細石刃核	黒曜石	霧島系	25.5	20.8	18.9	9.19	
	36	24694	H-4	Ⅷ	3	細石刃核	黒曜石	霧島系	14.3	16.8	10.5	1.62	
	37	24014	G-4	Ⅵ	3	細石刃核	黒曜石	霧島系	21.8	9.4	22.1	3.79	
	38	24733	G-4	Ⅷ	3	細石刃核	黒曜石	霧島系	15.4	15.3	11.2	2.25	
	39	23995	H-4	Ⅳ	3	細石刃核	黒曜石	霧島系	20.8	17.2	9.0	2.96	
	40	24910	G-4	Ⅷ	3	ブランク	黒曜石	霧島系	14.6	14.2	20.4	3.26	
	41	24966	H-4	Ⅷ	3	ブランク	黒曜石	霧島系	15.0	13.2	15.3	3.01	
	42	24877	H-4	Ⅷ	3	削器	頁岩	－	102.2	49.4	14.8	63.27	
18	43	24367	G-2	Ⅵ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	19.3	6.1	2.8	0.2	
	44	25123	G-2	Ⅷ	4	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	（13.3）	4.4	1.3	0.06	
	45	25121	G-2	Ⅷ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（13.6）	5.1	1.5	0.1	
	46	24325	F-2	Ⅵ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（10.7）	4.4	1.1	0.06	
	47	25126	G-2	Ⅷ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（12.0）	5.0	1.0	0.06	
	48	24362	G-2	Ⅵ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（14.4）	6.3	1.5	0.12	
	49	24317	F-2	Ⅵ	4	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	（16.6）	6.7	2.0	0.17	
	50	25166	G-2	Ⅷ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（11.0）	6.8	1.5	0.1	
	51	24324	F-2	Ⅵ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（7.8）	6.7	2.0	0.05	
	52	25173	G-2	Ⅷ	4	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	（12.7）	7.2	1.1	0.17	
	53	25648	F-2	Ⅵ	4	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	（9.6）	7.4	2.1	0.11	
	54	25115	G-2	Ⅷ	4	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	（10.5）	7.0	2.0	0.1	
	55	25129	G-2	Ⅷ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（11.1）	5.0	2.0	0.08	
	56	24315	F-2	Ⅵ	4	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	（11.6）	5.7	1.4	0.08	
	57	24358	G-2	Ⅵ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（14.5）	7.0	1.0	0.14	
	58	24323	F-2	Ⅵ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（10.0）	5.4	1.5	0.07	
	59	25218	G-2	Ⅷ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（8.1）	4.5	1.1	0.02	
	60	25195	G-2	Ⅷ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（7.5）	6.1	1.0	0.04	
	61	24379	G-2	Ⅵ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（13.5）	6.1	1.3	0.1	
	62	25650	F-2	Ⅵ	4	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	（6.7）	6.1	1.4	0.05	
	63	25198	G-2	Ⅷ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（12.0）	5.3	1.4	0.09	
	64	25219	G-2	Ⅷ	4	細石刃	黒曜石	霧島系	（9.3）	5.3	0.9	0.04	
	65	24364	G-2	Ⅵ	4	掻器	黒曜石	霧島系	21.6	15.6	9.8	3.13	
	66	25185	F-2	Ⅷ	4	削器	黒曜石	上牛鼻産	20.2	29.7	14.3	6.45	

第12表　旧石器～縄文時代草創期石器観察表（2）

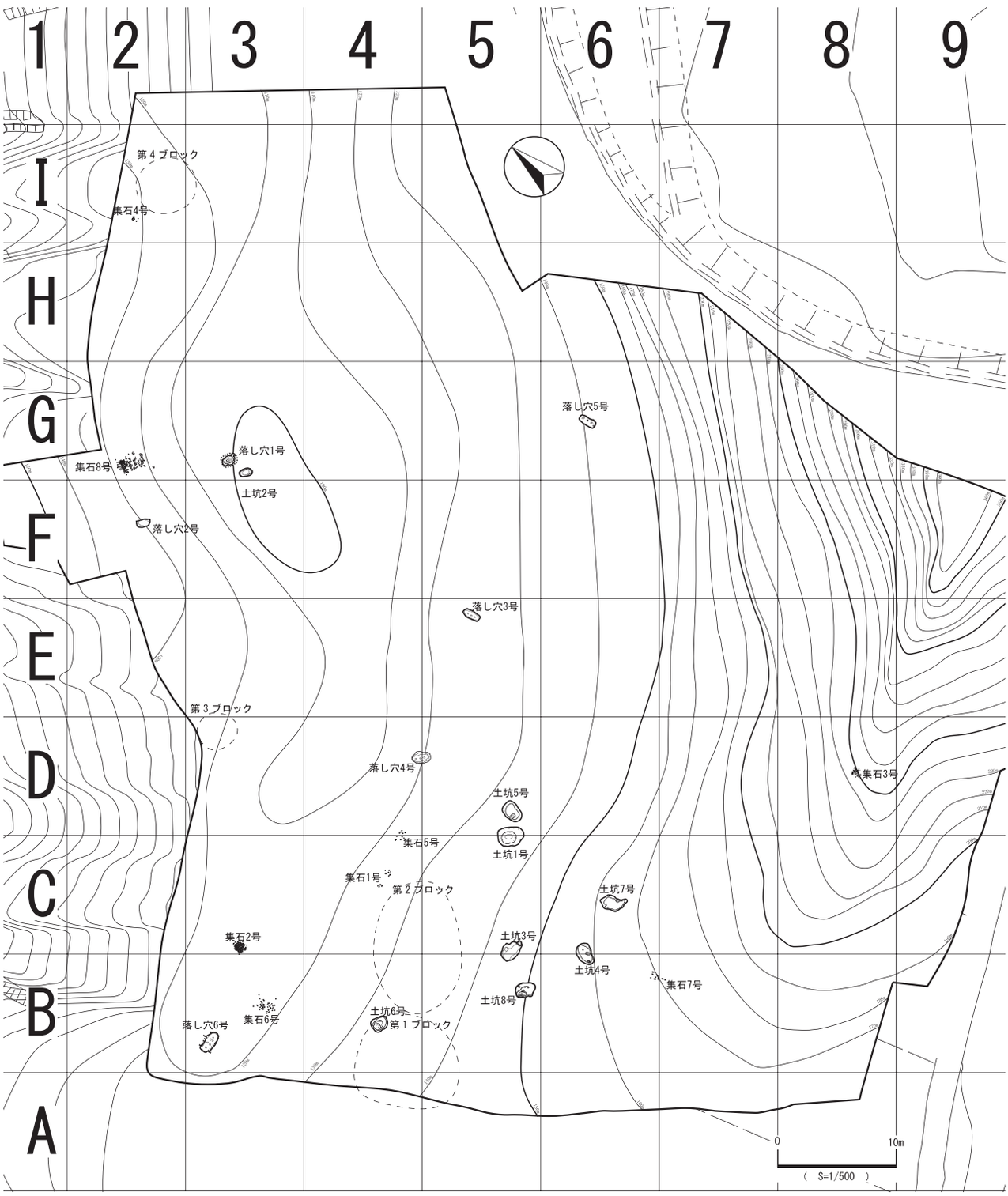
挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	ブロック	器種	石材	産地	計測値(mm,g)				備考
									長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	
18	67	922	G-2	Ⅴ	4	細石刃核	黒曜石	霧島系	18.1	12.0	15.4	2.66	
	68	25120	G-2	Ⅷ	4	細石刃核	黒曜石	霧島系	23.4	13.8	23.2	6.77	
	69	24327	G-2	Ⅵ	4	細石刃核	黒曜石	霧島系	22.8	18.8	15.9	5.38	
	70	24871	G-2	Ⅵ	4	細石刃核	黒曜石	霧島系	20.0	15.5	14.7	4.47	
	71	24349	G-2	Ⅵ	4	細石刃核	黒曜石	霧島系	26.1	13.9	15.0	4.49	
	72	24390	G-2	Ⅵ	4	細石刃核	黒曜石	霧島系	22.0	15.2	11.2	4.07	
	73	25266	G-2	Ⅷ	4	細石刃核	黒曜石	霧島系	16.9	11.0	21.4	3.43	
	74	25446	F-2	Ⅵ	4	細石刃核	黒曜石	上牛鼻産	15.8	14.0	16.4	2.75	
	75	25184	F-2	Ⅷ	4	細石刃核	黒曜石	霧島系	18.3	12.8	13.8	3.25	
19	76	25117	G-2	Ⅷ	4	細石刃核	黒曜石	霧島系	19.0	15.0	23.2	7.37	
	77	24363	G-2	Ⅵ	4	細石刃核	黒曜石	霧島系	17.2	15.2	21.0	6.17	
	78	24340	G-2	Ⅵ	4	掻器	黒曜石	霧島系	18.0	15.8	12.4	2.74	
	79	25116	G-2	Ⅷ	4	細石刃核	黒曜石	上牛鼻産	19.3	17.4	17.2	7.1	
	80	24331	G-2	Ⅵ	4	細石刃核	黒曜石	霧島系	22.2	14.7	15.9	4.86	
	81	882	F-2	Ⅳ	4	細石刃核	黒曜石	上牛鼻産	16.6	14.4	18.8	3.51	
20	82	5163	G-3	Ⅵ	5	細石刃	黒曜石	針尾産	(13.3)	5.8	2.1	0.16	
	83	25088	G-3	Ⅷ	5	細石刃	黒曜石	霧島系	(9.8)	5.8	1.0	0.08	
	84	24984	G-3	Ⅷ	5	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(9.0)	5.4	1.1	0.05	
	85	5181	G-3	Ⅴ	5	細石刃	黒曜石	霧島系	(14.0)	7.0	2.1	0.28	
	86	5168	G-3	Ⅵ	5	細石刃	黒曜石	霧島系	(15.7)	6.6	1.4	0.12	
	87	25490	F-3	Ⅳ	5	細石刃核母核	黒曜石	上牛鼻産	(21.4)	15.8	28.8	8.74	
	88	5160	G-3	Ⅴ	5	掻器	チャートB	－	32.4	39.5	13.5	14.23	
21	89	27160	F-1	Ⅵ	6	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(19.3)	8.3	2.1	0.26	
	90	27137	F-2	Ⅵ	6	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(13.7)	7.4	1.9	0.17	
	91	27153	F-1	Ⅵ	6	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(16.2)	6.2	1.1	0.14	
	92	27076	F-1	Ⅵ	6	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(15.2)	6.2	2.0	0.12	
	93	27133	F-2	Ⅵ	6	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(7.0)	7.4	2.2	0.09	
	94	27097	F-1	Ⅵ	6	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(12.5)	8.5	1.5	0.14	
	95	27078	F-1	Ⅵ	6	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(12.5)	5.3	2.0	0.14	
	96	27095	F-1	Ⅵ	6	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(12.4)	7.9	1.3	0.11	
	97	27149	F-1	Ⅵ	6	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(14.7)	6.1	1.7	0.11	
22	98	24467	F-3	Ⅵ	7	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(17.1)	7.5	2.0	0.24	
	99	24522	F-3	Ⅵ	7	細石刃	黒曜石	霧島系	(13.3)	6.1	1.3	0.12	
	100	24979	F-3	Ⅷ	7	細石刃	黒曜石	霧島系	(5.7)	5.0	1.0	0.02	
	101	25098	F-3	Ⅷ	7	細石刃	黒曜石	霧島系	(8.5)	6.5	1.5	0.09	
	102	25108	F-3	Ⅷ	7	細石刃	黒曜石	霧島系	(9.0)	3.5	1.0	0.03	
	103	24481	F-3	Ⅵ	7	打製石鏃	黒曜石	三船産	13.3	9.5	4.1	0.37	
	104	24978	F-3	Ⅷ	7	細石刃核	黒曜石	霧島系	9.8	13.5	24.7	2.58	
	105	25109	F-3	Ⅷ	7	細石刃核	黒曜石	霧島系	27.4	15.5	13.0	4.81	
	106	24457	F-3	Ⅵ	7	細石刃核	黒曜石	霧島系	26.1	16.3	16.5	5.17	
	107	25136	F-3	Ⅷ	7	細石刃核	黒曜石	上牛鼻産	20.3	17.9	28.0	11.55	
	108	25194	G-3	Ⅵ	7	ブランク	黒曜石	上牛鼻産	22.4	15.3	25.9	7.88	
23	109	28554	C-4	Ⅵ	8	細石刃	黒曜石	霧島系	(14.4)	5.0	2.0	0.14	
	110	28868	C-4	Ⅵ	8	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(11.5)	7.0	2.0	0.18	
	111	27810	B-3	Ⅵ	8	掻器	黒曜石	日東産	25.0	16.4	13.3	4.35	
	112	27812	C-3	Ⅵ	8	細石刃核	黒曜石	日東産	32.0	20.7	23.0	14.86	
	113	28585	C-4	Ⅳ	8	ブランク	黒曜石	上牛鼻産	31.9	29.7	37.5	36.48	
	114	1152	B-3	Ⅴ	8	礫器	安山岩	－	157.4	61.0	35.0	400.00	
24	115	25574	F-4	Ⅵ	9	加工痕剥片	黒曜石	上牛鼻産	20.9	42.5	12.2	7.42	
25	116	23871	G-5	Ⅵ	11	細石刃	黒曜石	霧島系	17.8	7.1	2.1	0.28	
	117	23873	G-5	Ⅵ	11	掻器	黒曜石	上牛鼻産	20.0	32.0	13.5	8.30	
26	118	24410	G-3	Ⅵ	ブロック外	細石刃	黒曜石	針尾産	(19.0)	7.7	2.0	0.3	
	119	25269	F-2	Ⅷ	ブロック外	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	(18.0)	7.7	2.5	0.28	
	120	25106	F-3	Ⅷ	ブロック外	細石刃	黒曜石	上牛鼻産	18.1	10.8	1.7	0.36	
	121	20907	H-5	Ⅲa	ブロック外	細石刃	鉄石英	－	22.3	7.6	3.8	0.48	
	122	25568	G-4	Ⅵ	ブロック外	掻器	黒曜石	上牛鼻産	26.0	17.3	9.2	3.44	
	123	24211	G-3	Ⅵ	ブロック外	打製石鏃	黒曜石	桑ノ木津留産	13.5	12.1	3.0	0.33	
	124	24077	I-3	Ⅵ	ブロック外	細石刃核	黒曜石	霧島系	28.8	18.5	14.2	7.3	
	125	25107	F-3	Ⅵ	ブロック外	細石刃核	黒曜石	霧島系	15.2	15.4	24.2	5.57	
	126	29563	E-9	Ⅳ	ブロック外	細石刃核	黒曜石	霧島系	17.6	10.6	17.3	2.71	
	127	25846	F-9	Ⅲa	ブロック外	細石刃核	黒曜石	桑ノ木津留産	18.0	13.4	15.4	2.97	
	128	29094	B-4	Ⅵ	ブロック外	ブランク	黒曜石	日東産	20.5	19.4	29.5	11.26	
	129	634	I-4	Ⅴ	ブロック外	ブランク	黒曜石	霧島系	26.6	40.8	17.0	16.37	
	130	1880	B-5	Ⅴ	ブロック外	石核	黒曜石	上牛鼻産	36.8	41.0	19.9	27.95	
	131	28641	G-3	Ⅵ	ブロック外	石核	黒曜石	上牛鼻産	30.4	38.8	37.1	52.18	
	132	27904	D-4	Ⅷ	ブロック外	剥片	頁岩	－	47.4	24.5	10.0	8.40	
	133	2428	F-6	Ⅴ	ブロック外	敲石	安山岩	－	97.0	64.0	54.0	400.00	
27	134	28858	A-5	Ⅵ	ブロック外	礫器	安山岩	－	136.0	161.0	35.9	1,200.00	

第４節　縄文時代早期の調査

１　調査の概要

当該期の遺構として，落し穴６基，土坑８基，集石８基，石器ブロックが４基検出された。遺構の多くは，本遺跡の西側の比較的平坦な緩傾斜地に所在する。概して集石を中心に落し穴や土坑が周囲に取り囲むように位置する状況が捉えられ，G－２区の集石を中心とするエリアとＢ・C－３・４区の集石を中心とするエリアに二分できる。特に，南西側のＢ・C－３・４区に遺構の集中が見られる。落し穴は，隅丸長方形のタイプが微高地を囲むように，微高地に軸を向けて配置されるのに対し，楕円形の落し穴は，南西側にまとまる傾向にある。

石器ブロックも，他の遺構同様Ｂ･C－４･５区に集中が



第28図　縄文時代早期遺構位置図

見られ，落し穴や集石と同時性を示す可能性がある。たんぱく石のブロックであり，本遺跡からは同石材使用の打製石鏃が出土しており，打製石鏃製作跡の可能性がある。

2　遺構

（1）落し穴

①　落し穴１号

G－3区のⅥ層上面で検出した。本遺跡の最高地（微高地）に所在する。関連性は不明であるが，２m程南側には土坑２号が同方向に並置する。検出が遅れたため平面形が不明であるが，隅丸長方形を呈すると推定される。Ⅵ層上面で検出したが，埋土中の上位が，①黄褐色砂壌土（Ⅳ層）基調の土壌で占められていたことから，本来の掘込面はⅣ層上面と判断される。

埋土がレンズ状堆積を呈さず，②・③が塊状に入ることや④・⑤のパミスやブロックが散在して包含されることから，埋め戻しの可能性を見る。床面の小ピットは下場が15.5cm×10.0cm程と幅広く，この形態は本遺跡では本遺構のみの特徴である。逆茂木付設のピットであるのか，獣捕獲のための形態的工夫なのかは判断できない。

②　落し穴２号

F－2区のⅥ層上面で検出した。平面観は，定形的な隅丸長方形を呈する。

検出面はⅥ層上面であるが，埋土中の上位に，①黄褐色砂壌土（Ⅳ層）基調の土壌が埋まることから，本来の掘込面はⅣ層上面と判断される。

埋土には，③・④・⑦などブロック状の混土が入ることから，少なくとも②以下については，埋め戻しの可能性が高いと判断される。埋土傾向として，Ⅷ層ブロックを含むⅦ層・Ⅷ層の上位にⅣ層が堆積する。坑の造成の際に掘り上げて周囲に盛り上げられた土壌の層順（下位：Ⅳ層→Ⅵ層→Ⅶ層→Ⅷ層：上位）が，埋め戻しの際に坑に投下されて逆転した状況（下位：Ⅷ層→Ⅶ層→Ⅵ層→Ⅳ層：上位）が，埋土状況から窺える。

部分的に４基の小ピットと推察される痕跡が列状に並ぶのは確認されたが，床面には樹痕が多数食い込んでおり，樹痕と小ピットの判別が困難で図化できなかった。

③　落し穴３号

E－5区のⅥ層上面で検出した。平面観は隅丸長方形で，縦・断面観も定形的な長方形を呈する。埋土中に①黄褐色砂壌土（Ⅳ層）が含まれることから，本来の掘込面はⅣ層上面と判断される。

横断面観では，レンズ状堆積にも捉えられるが，縦断面観で，②が上場付近から下場付近まで大きく食い込み，埋め戻しの可能性を示すと思われる。最上位の①黄褐色砂壌土（Ⅳ層）が凹レンズ状に堆積することから，埋め戻しにより埋土②～⑥が投下され放置された後に，①が自然堆積した可能性も考えうる。

床面には，３基の小ピットが一列に並ぶ。３基の内，両側の２基（P1・P3）の深さは30cmなのに対し，中央のP2深さは55cmと特に長い。また，P1・P2の先端は，鋭く尖る。

④　落し穴４号

D－4・5区のⅥ層上面で検出した。平面観は，長楕円形である。形態や以下に示す埋土状況等，落し穴３号に近似する。埋土中に①黄褐色砂壌土（Ⅳ層）が堆積することから，本来の掘込面はⅣ層上面と判断される。

横断面観では，典型的なレンズ状堆積にも捉えられるが，縦断面観では，②～⑥が北側に偏在し，一方③・⑦が南側に偏在して堆積しており，埋め戻しの可能性を示す。最上位の①黄褐色砂壌土（Ⅳ層）の床面が凹レンズ状を呈することから，埋め戻しにより埋土②～⑧が投下され放置された後に，①が自然堆積した可能性も考えられる。

床面には小ピットが，一列に３基付設される。各小ピットの先端が二叉に分離する。この形態の小ピットを有する落し穴は，他に後述する落し穴６号の計２基である。各小ピットの下位に枝分かれする２つずつのピットは，床面に一列に並ぶ小ピットの方向軸（長軸方向）に一致する。床面付設の小ピットが，獲物捕獲の逆茂木設置用であるとする仮説に従えば，２つずつに分岐する尖端は，少なくとも２本以上の逆茂木を差し込むために設置したことが推察される。P1・P2は，逆茂木が中途で交差して差し込まれた可能性も見えるが，P3の左側先端は直立しており，逆茂木を並列させていた可能性を示す。

⑤　落し穴５号

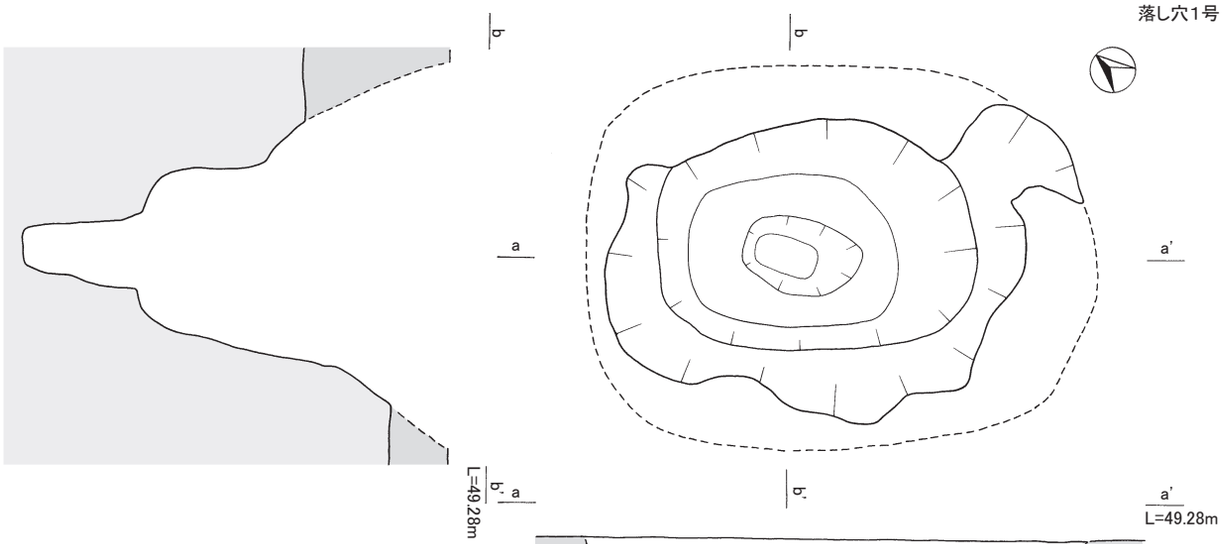
G－6区のⅥ層上面で検出された。平面観は，隅丸長方形である。検出が遅れたため，検出状況が良好ではなく，黄褐色砂壌土（Ⅳ層）の単一埋土を捉えたのみである。本来の掘込面はⅣ層上面であると判断される。

形態的に，落し穴３・４号に類似する。床面の小ピットは一列に４基設置される。小ピットの下場は，何れも尖端を呈する。各小ピットの壁面には，縦方向の筋状の圧痕が残され，繊維が縦方向に伸びる植物素材の逆茂木が差し込まれていた可能性を示す貴重な事例である。

⑥　落し穴６号

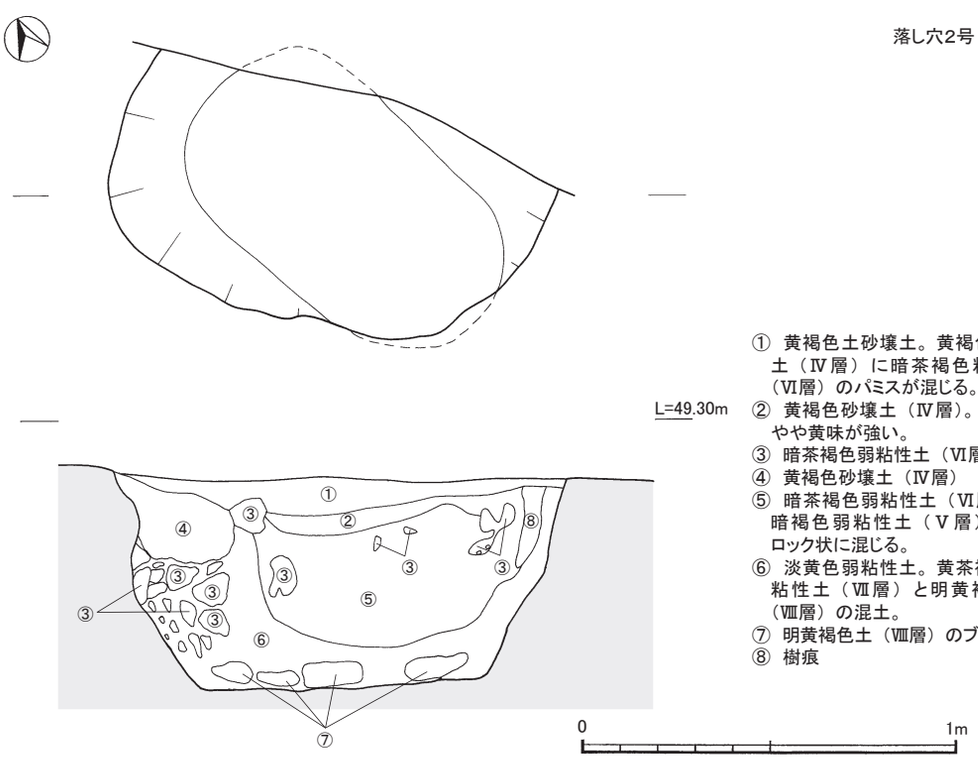
B－3区のⅥ層上面で検出した。平面観は長楕円形である。縦断面観で，上場付近がやや膨らみを呈するが，壁面剥離の可能性がある。直交するように近世比定のイモ穴と思われる土坑の削平を受けている。

落し穴1号



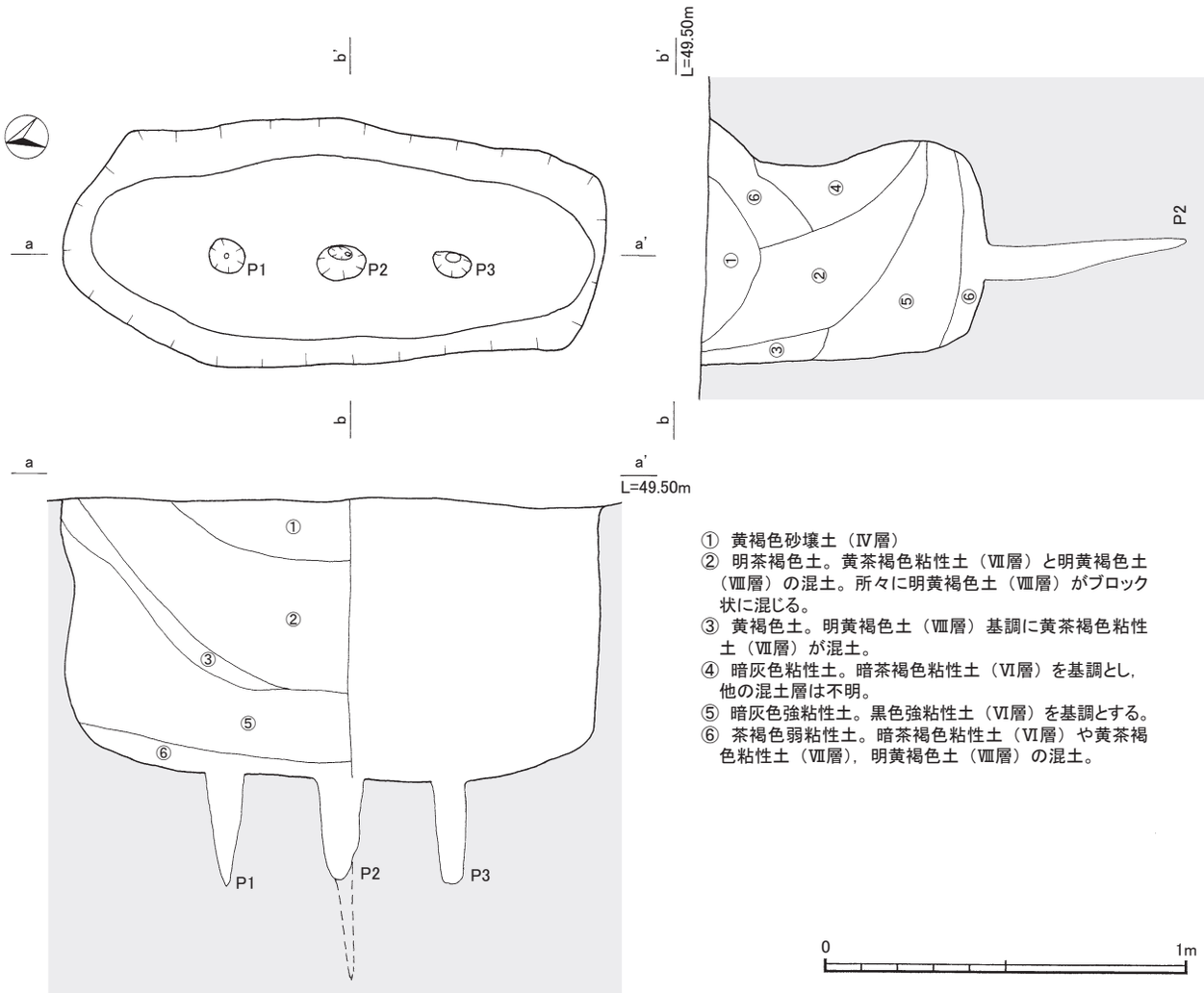
① 茶褐色粘性土。黄褐色砂壌土（Ⅳ層）と暗褐色粘性土（Ⅴ層）と暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）の混土。
② 黄褐色強粘性土。水分を多く含む。黄褐色砂壌土（Ⅳ層）を主体とし，暗褐色粘性土（Ⅴ層）が混じる。
③ 暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）
④ 黄茶褐色粘性土（Ⅶ層）
⑤ 明黄褐色パミス（Ⅷ層）

落し穴2号



① 黄褐色土砂壌土。黄褐色砂壌土（Ⅳ層）に暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）のパミスが混じる。
② 黄褐色砂壌土（Ⅳ層）。①よりやや黄味が強い。
③ 暗茶褐色弱粘性土（Ⅵ層）
④ 黄褐色砂壌土（Ⅳ層）
⑤ 暗茶褐色弱粘性土（Ⅵ層）に暗褐色弱粘性土（Ⅴ層）がブロック状に混じる。
⑥ 淡黄色弱粘性土。黄茶褐色弱粘性土（Ⅶ層）と明黄褐色土（Ⅷ層）の混土。
⑦ 明黄褐色土（Ⅷ層）のブロック。
⑧ 樹痕

第29図　縄文時代早期落し穴１号・２号実測図



第30図　縄文時代早期落し穴３号実測図

埋土中に黄褐色砂壌土（Ⅳ層）を混土とする①暗黄褐色砂壌土が堆積することから，本来の掘込面は，Ⅳ層上面の可能性が高い。

縦断面観では，①・②が北壁側に偏在し，南壁側に傾斜するように堆積する状況が捉えられる。また，①・②の埋土中に，④明黄褐色土（Ⅷ層）がブロック状に散在する点から，埋め戻しの可能性が高いと判断される。なお，共伴性は不明であるが，埋土中には日東産黒曜石や安山岩の礫が包含されている。

床面には，６基の小ピットが設置される。複数の小ピットが１列に並ばない形態は，当該期の落し穴では本遺構１基のみである。P2のみ，先端が二叉に枝分かれし，前述の落し穴４号に共通するが，複数逆茂木を差し込んだためとも捉えられる。小ピットの先端は，尖るもの，平坦なもの，中途に版築様の張り出しを持つもの，上場が膨らむもの，膨らまないものなど，多様性を見せる。

（2）土坑

土坑は，形態的特徴の違いにより，以下の２つに分類される。

＜土坑１類＞

床面に柱穴状の小ピットを持たない一群である。

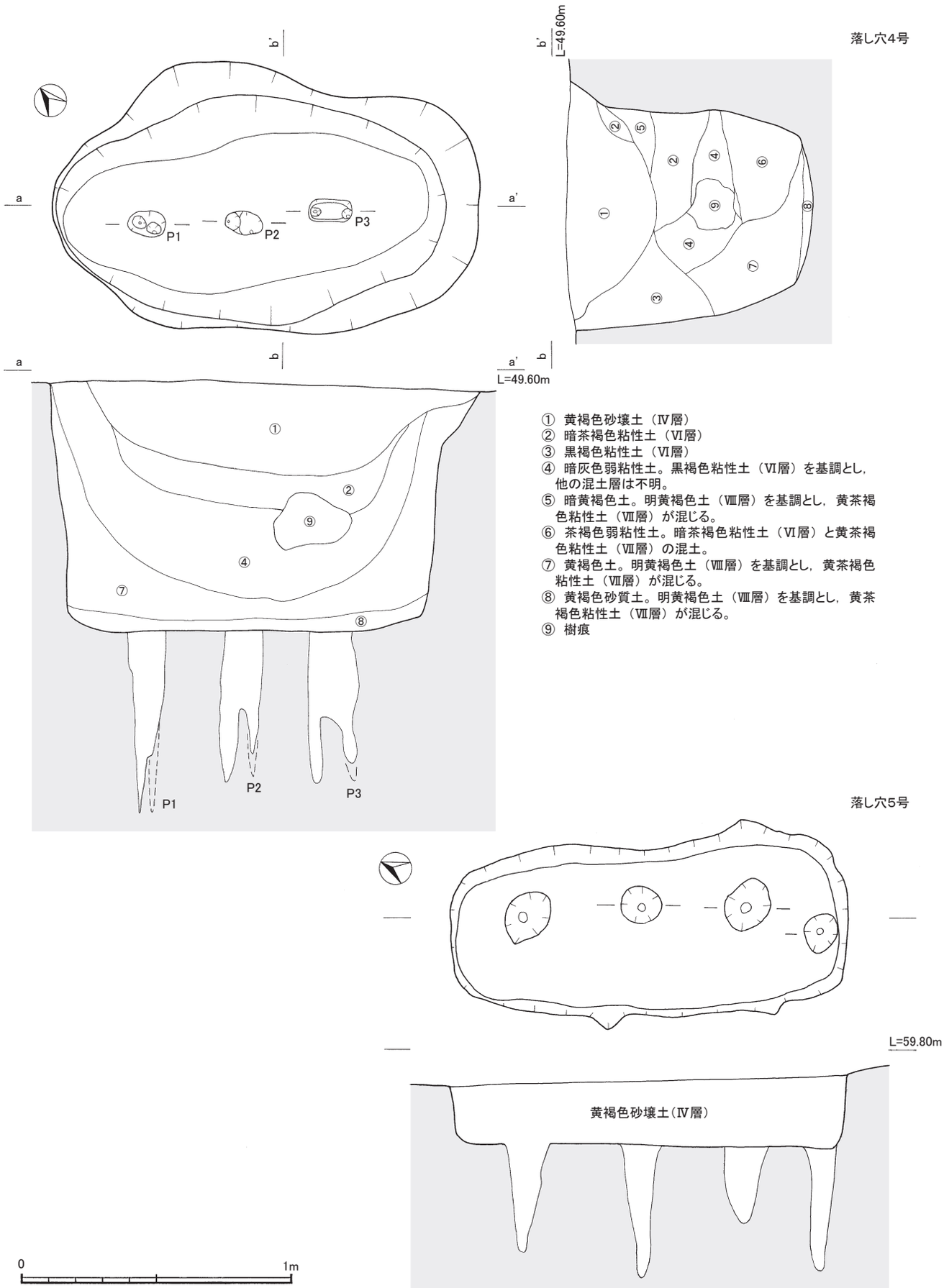
本遺跡では，概して平面観が楕円形を呈し，断面観が擂鉢状，もしくは台形状を呈する。

＜土坑２類＞

土坑の床面に小ピットが構築される一群である。

断面観が，ハイヒールに似た形態を呈することから，「ハイヒール形土坑」と呼称されることもある。概して平面観・断面観が不定形であり，瓢箪状に２孔が連結した形態を有する傾向にある。

床面の小ピットは，床面の片側に偏在し，壁面に隣接して設けられる。直近の壁面は直立気味に立ち上がるのに対し，反対側の壁面は，緩やかに傾斜して上場に至る。樹痕などの自然による形成説の他に，山イモ等根菜類の採集痕跡との説もあり，本遺跡では一定数検出されたことから，遺構の可能性を考慮して報告することとした。



① 黄褐色砂壌土（Ⅳ層）
② 暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）
③ 黒褐色粘性土（Ⅵ層）
④ 暗灰色弱粘性土。黒褐色粘性土（Ⅵ層）を基調とし，他の混土層は不明。
⑤ 暗黄褐色土。明黄褐色土（Ⅷ層）を基調とし，黄茶褐色粘性土（Ⅶ層）が混じる。
⑥ 茶褐色弱粘性土。暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）と黄茶褐色粘性土（Ⅶ層）の混土。
⑦ 黄褐色土。明黄褐色土（Ⅷ層）を基調とし，黄茶褐色粘性土（Ⅶ層）が混じる。
⑧ 黄褐色砂質土。明黄褐色土（Ⅷ層）を基調とし，黄茶褐色粘性土（Ⅶ層）が混じる。
⑨ 樹痕

第31図　縄文時代早期落し穴４号・５号実測図

① 土坑１類

（ア）土坑１号

Ｃ・Ｄ－５区において検出された。平面観は，不整形な楕円形である。横・縦断面観は擂鉢状を呈し，床面が平坦面を形成しない。

Ⅵ層上面で検出されたが，埋土が黄褐色砂壌土（Ⅳ層）で占められるために，本来の掘込面はⅣ層上面の可能性が高いと判断した。

本土坑の床面に平行するように，床面直下の地山に暗茶褐色粘性土（Ⅵ層）のレンズ状の潜り込みが見られたので，本遺構は，樹木転倒に伴う地層横転の結果生じた自然形成の可能性もある

（イ）土坑２号

Ｇ－３区の微高地（本遺跡最高地）において検出された。平面観は，長楕円形である。断面観は台形状で，床面に明瞭な平坦面を形成する。

Ⅶ層上面で検出されたが，埋土が黄褐色砂壌土（Ⅳ層）で占められるために，本来の掘込面はⅣ層上面の可能性が高いと判断した。

埋土中の中位程には，黒曜石製細石刃や黒曜石のチップ，土器片（時期不明）が包含されていたが，前時代遺物の紛れ込みと思われる。北側に落し穴１号が近接し，軸方向が並行することから落し穴の可能性も考えられる

② 土坑２類

（ア）土坑３号

Ｂ・Ｃ－５区において検出された。平面観は，不整形な瓢箪形を呈する。断面観は，基本的に壁面が斜行する形態を示す。ピットが隣接する壁面が直立的に立ち上がり，その他の３面は緩やかに傾斜し上場に至るという土坑２類の特徴的な掘り込み形態を示す。

検出面はⅥ層上面であるが，埋土は黄褐色砂壌土（Ⅳ層）のみで占められるため，本来の掘込面はⅣ層上面の可能性が高い。

ピットが斜めに深く掘り込まれる。樹痕にも捉えうるが，人為の可能性を捉え，図化した。埋土内には，縄文時代早期比定の本項縄文第７類（塞ノ神式土器）の口縁部片１点が出土したが，小片のため図化できなかった。波状口縁を呈し，口唇部に斜位の刻みを施す。残存部が僅かであるためか，口縁部に施文を捉えられない。

（イ）土坑４号

Ｂ・Ｃ－６区において検出された。平面観は，不整形な長楕円状であり，断面観も不整形な台形状を呈する。３基の極浅い小ピットの他，床面右側に深さ50cm弱のピットが掘り込まれる。ピットに隣接する壁面が顕著に立ち上がる一方，反対側の壁面は傾斜が弱い。縦断面観からは，南側壁に明瞭な立ち上がりがあり，北側に向けて緩やかに傾斜する床面形態が捉えられる。

検出面はⅥ層上面であるが，埋土は黄褐色砂壌土（Ⅳ層）のみで占められたため，本来の掘込面はⅣ層上面の可能性が高いと判断した。

埋土内には，２点の土器片と頁岩製の剥片１点，赤化した安山岩(もしくは，凝灰岩)の小礫片が１点包含された。赤化した小礫片は，近接する集石７号に伴う礫が埋土に包含された可能性もあり，共伴性を示す可能性もある。

（ウ）土坑５号

Ｄ－５区において検出された。平面観は，不定形な隅丸長方形状を呈する。横断面観は，左右とも明瞭な立ち上がりを有し斜立する。一方，縦断面観は凹レンズ状に立ち上がりが鈍く，緩やかに傾斜して上場に至る。床面のピットは，左側壁面を貫通して掘り込まれる。

Ⅵ層上面で検出されたが，埋土が黄褐色砂壌土（Ⅳ層）で占められ，本来の掘込面はⅥ層上面と判断される。

埋土内には，風化の激しい頁岩の剥片が１点包含されたが，小片のため図化できなかった。

（エ）土坑６号

Ｂ－４区において検出された。平面観は，瓢箪状にやや中が窄まり，不定形である。断面観は擂鉢状に平坦面を有しない。立ち上がりが弱く，緩やかに傾斜して上場に至る。床面のピットは，左壁側に設けられる。ピットの床面が20.0cm×20.0cmと幅広である。

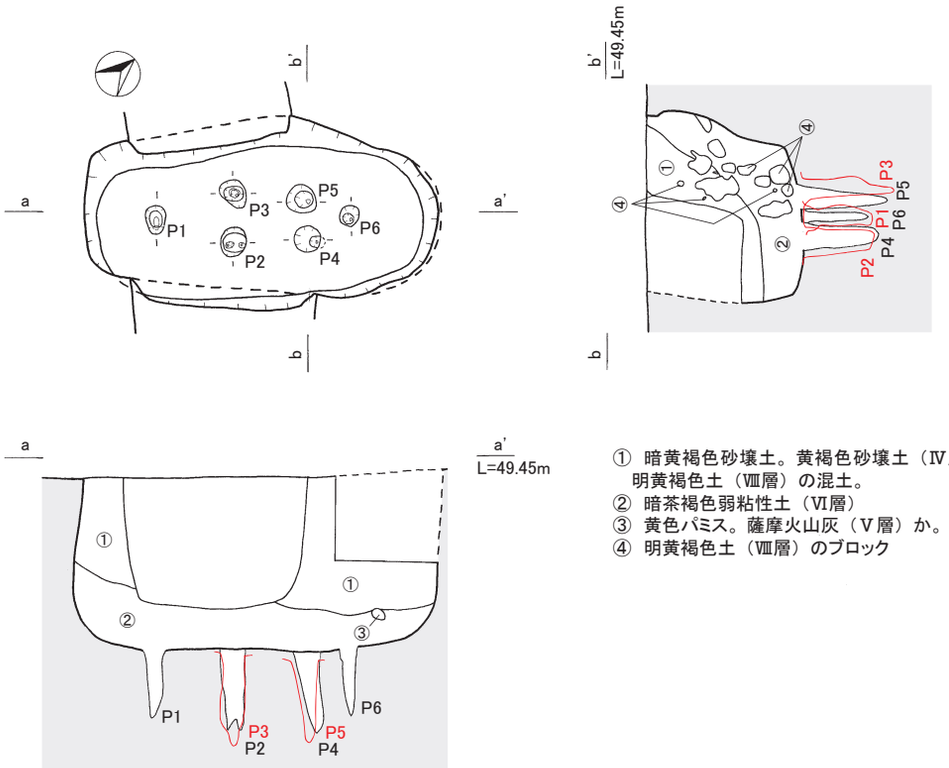
Ⅵ層上面で検出されたが，埋土が黄褐色砂壌土（Ⅳ層）を中心に包含され，その上位層は含まれないことから，本来の掘込面はⅣ層上面の可能性が高いと判断した。

土坑２類の多くが，黄褐色砂壌土（Ⅳ層）の単独を埋土とするのに対して，本遺構は，Ⅳ層を基調に，下位のⅤ～Ⅷ層との混土が堆積する状況にある。レンズ状堆積をせず，混土がブロック状に堆積することから埋め戻しの可能性が高いと判断される。埋土の層位（中心的な土壌母材）が，地山の層位に合致することから，掘り上げた際に土坑周囲に地層と逆転して堆積した土が，土坑に投下され埋め戻されて，堆積が再逆転して地層に沿う状況に合致する。

埋土内には，土器３点が包含される。１点は無文である。１点は外面に条痕が施されることから，縄文土器と推定される。他には，４cm程の間隙を空けて網目撚糸文を施すタイプで，本項縄文土器７類に比定される胴部片も含まれた。

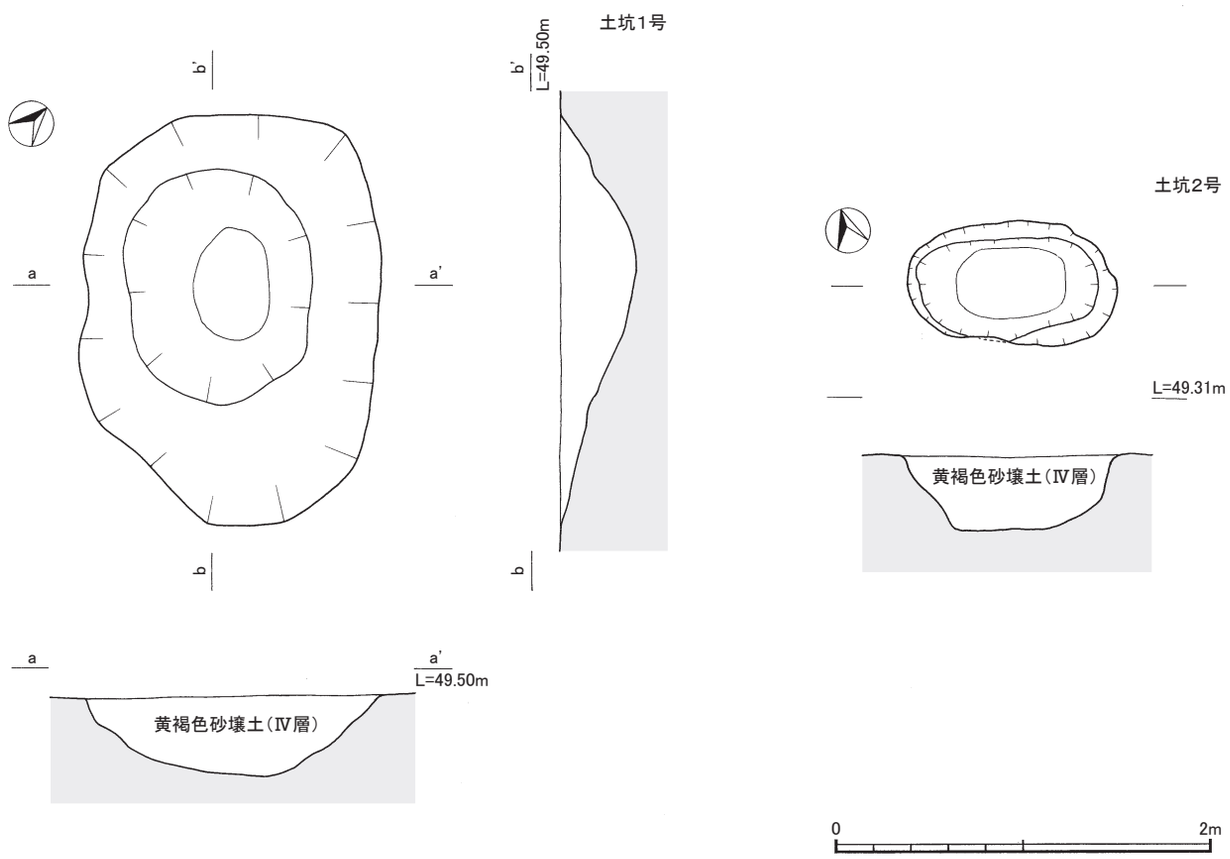
（オ）土坑７号

Ｃ－６区において検出された。平面観は，不定形な多角形状である。断面観は台形状を呈し，壁面４面とも明

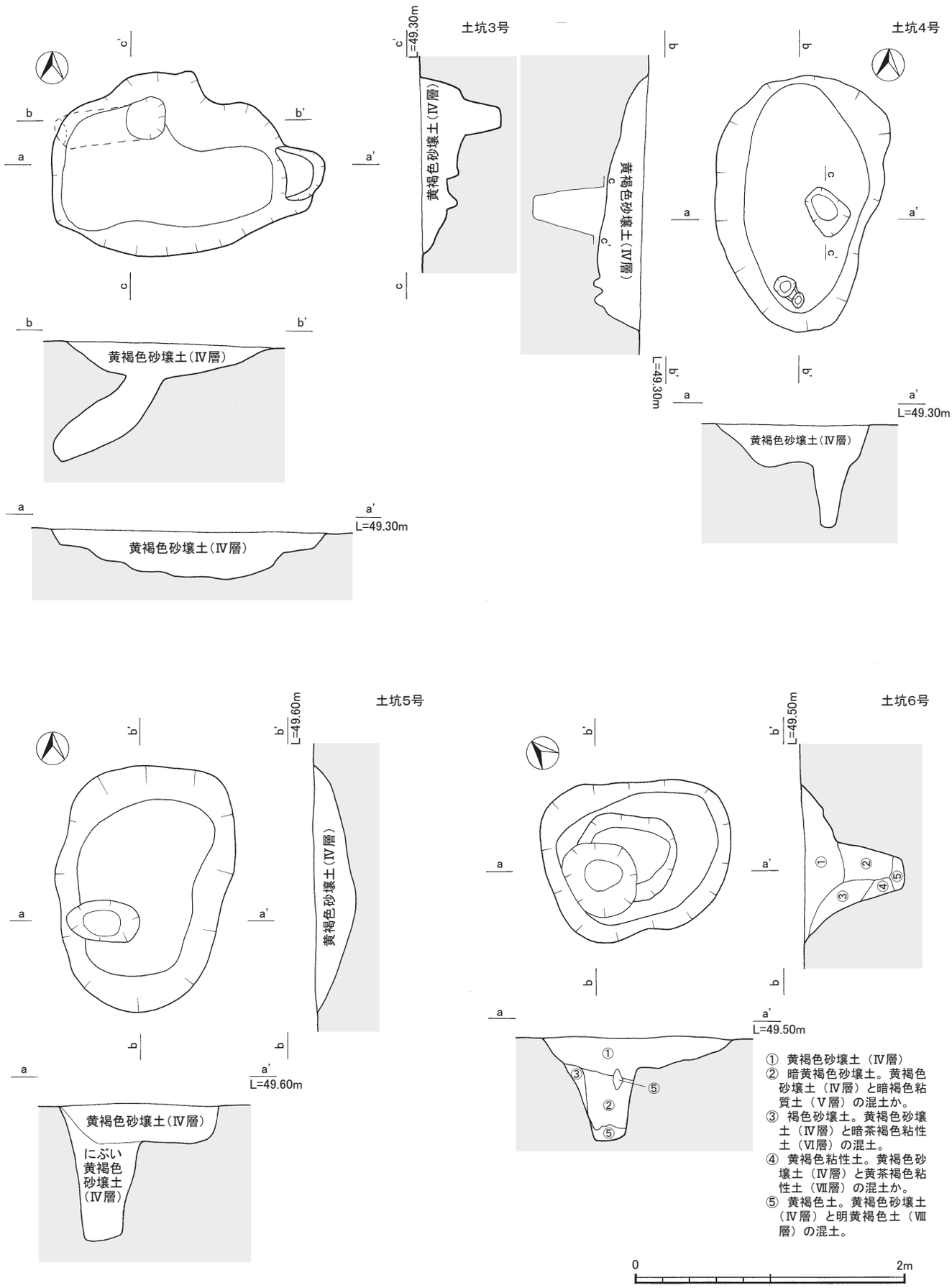


① 暗黄褐色砂壌土。黄褐色砂壌土（Ⅳ層）と
明黄褐色土（Ⅷ層）の混土。
② 暗茶褐色弱粘性土（Ⅵ層）
③ 黄色パミス。薩摩火山灰（Ｖ層）か。
④ 明黄褐色土（Ⅷ層）のブロック

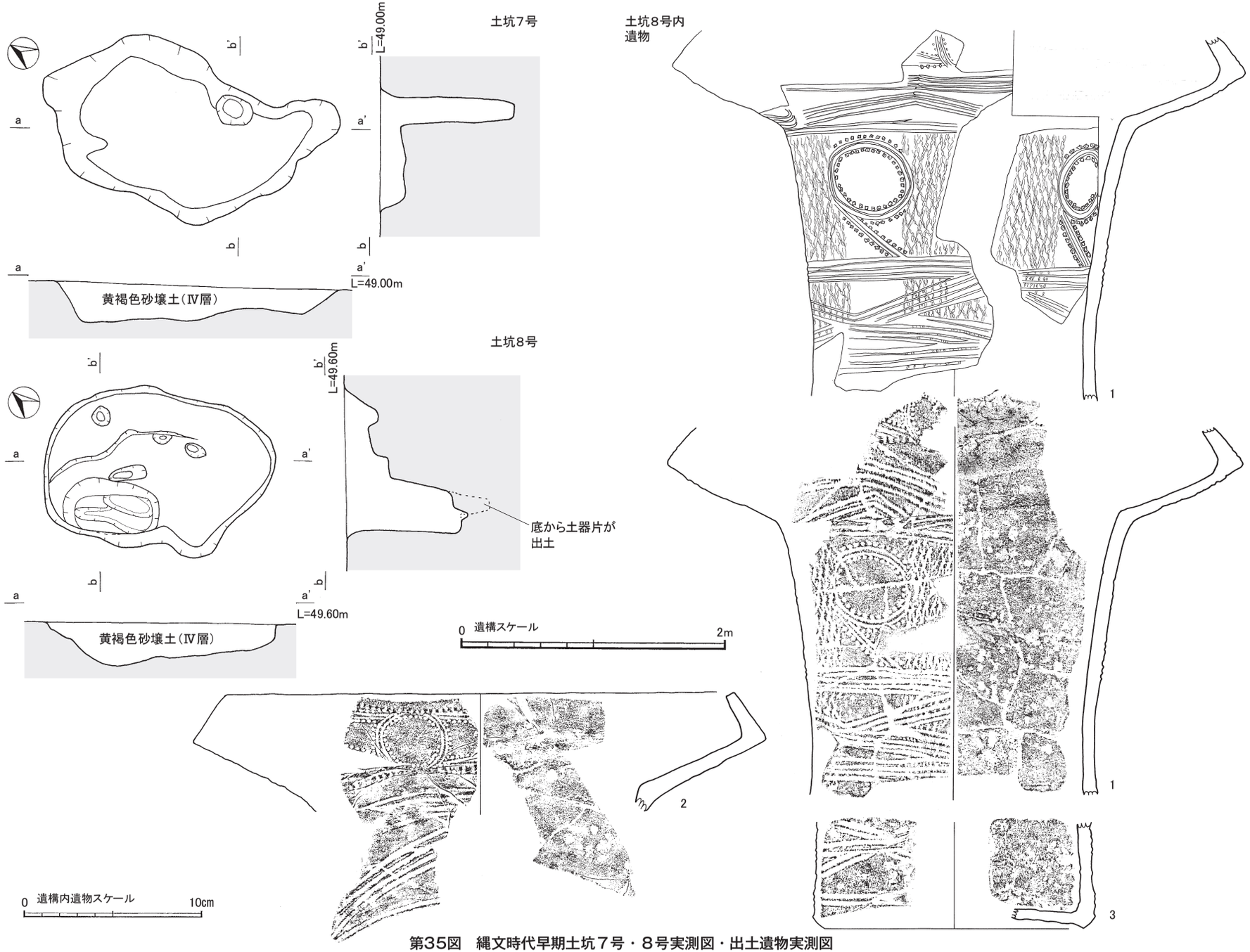
第32図　縄文時代早期落し穴６号実測図



第33図　縄文時代早期土坑１号・２号実測図



第34図　縄文時代早期土坑３～６号実測図



第35図　縄文時代早期土坑７号・８号実測図・出土遺物実測図

瞭な立ち上がりを有し斜立する。床面は平坦面を形成し，ピットは床面の東側（図面右側）壁面を切って掘り込まれる。床面から85cm，上場から１m程の深いピットである。

検出面はⅥ層上面であるが，埋土は黄褐色砂壌土（Ⅳ層）のみで占められ，本来の掘込面はⅣ層上面の可能性が高いと判断した。

埋土内には，縄文土器の胴部片が１点包含された。小片のため図化しなかったが，７mm程の間隙を空けて網目撚糸文帯を施し，並行沈線を数条横走させる。本項縄文土器７類に相当する土器の胴部片と判断される。

（カ）土坑８号

Ｂ－５区において検出された。平面観は，不定形な長楕円状を呈する。横断面観は，床面の大きめのピットが接する左壁は直立する。縦断面観では，下側壁面は直立し，上側壁面は緩やかに傾斜して上場に至る。床面は，ステップフロアを有する２段の平坦面により形成される。一段掘って，更に一段掘り進め，最後に小ピットを掘り進めたと推察される。

ピットは，複数の版築状のステップを有する。最深のピットは，床面から80cm弱，上場から110cm程の深さを測る。概観すると，大きめの土坑の床面の片側に寄せてピットを設け，そのピットの床面（版築状のステップ）の片側に寄せて，更にピットを設けて掘り進めるという，この土坑２類の「より深く掘り進めるための」基本的作業工程が捉えられる。

Ⅶ層上面で検出されたが，埋土が黄褐色砂壌土（Ⅳ層）で占められるために，本来の設置はⅣ層上面の可能性が高い。

ピットの床面から土器片が出土した。本遺構と共伴関係にあると判断される。土器片１点については，接合作業の結果，本来の器体にある程度復元できたので，本遺構との共伴関係を示す可能性が高いと判断し，本項で報告する。１・２は，本項縄文土器７－１類に相当する。接合しなかったが，同一個体の可能性がある。器形や施文形態については，本項縄文土器分類P53を参照いただきたい。３は底部片である。内傾気味に直立し，底部外面はやや上げ底を呈する。胴部外面には，２条の並行沈線が横方向に複数巡らされ，その間隙を山形（鋸歯）文が施される。胎土や色調，器形や施文から，１・２と同一個体の可能性が高いと判断される。

（３）集石

集石の石材は，安山岩を主体とし，凝灰岩が副次的に含まれる。両石材は，本遺跡の周囲に流れる河床に一般的に見られる石材であり，近隣の河川礫の活用が推定される。

①　集石１号

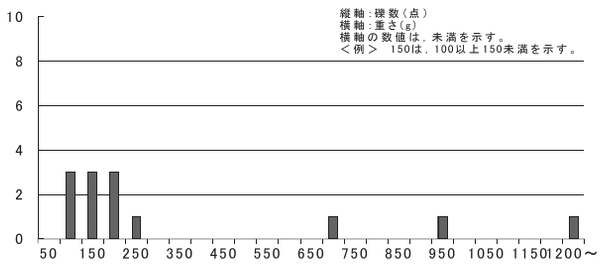
Ｃ－４区のⅣ層上面で検出された。石材は全て安山岩で，扁平礫が多く，一部円礫が使用される。殆どの礫が被熱する。

礫総数は13点であるが，１点は礫器の転用品である。1,200g以上の大礫を主とし，残りは小礫により構成される。掘込面は認められない。

礫は，13点中，10点は50cm四方に収まり，３点は１m程離れて位置する。礫が散在する点や扁平礫の使用が多い点など，本遺構の特徴は，集石７号に類似し，利用目的や利用方法，放置後の経過などに共通性があった可能性がある。

遺構内遺物１は，扁平な凝灰岩の礫を利用する。上縁を２，３箇所から敲打し礫を半割し，割れ口を基部とする。対する下縁は，両面側から剥離を施し，刃部を作出する。

第13表　構成礫の重量別点数（集石1号）

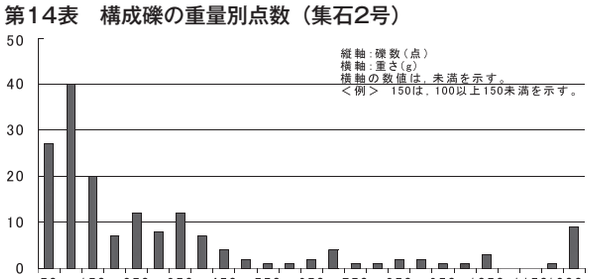


②　集石２号

Ｃ－３区のⅣ層上面で検出された。石材は安山岩を主体とし，一部凝灰角礫岩が含まれる。明確に礫集中が認められる。掘込面を有し，最深は10数cmを測る。礫の多くが被熱により赤化する。

礫は20ｇ～3,000ｇの範囲で，比較的小礫により構成される。概観すると，大きく平坦面を有する礫は，総じて床面に設置され，その上に中小の礫が載る傾向にある。断面上，全体的には凸レンズ状に縁辺から中央にかけて盛り上がるが，集石中央で礫集中が希薄になり凹みを呈するドーナツ状に捉えうる。特に，平面上側に密に中小の礫が載る傾向にある。掘り込みの外側に散在する礫が複数捉えられるが，本遺構の利用後（放置後）における撹乱等による遺構改変は特段見いだせない。ドーナツ状の礫構成のあり方は，利用に伴う意図的形成の可能性もある。

第14表　構成礫の重量別点数（集石2号）



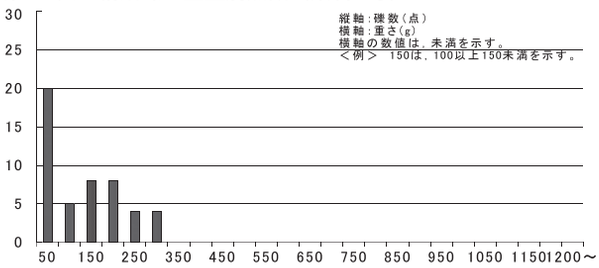
③　集石３号

Ｄ－８区のⅣ層上面で検出された。本集石のみ，東側

に下る傾斜地に所在し，他の遺構とは離れて孤立する。石材は，全て安山岩であり，円礫や角礫が利用される。掘込面は捉えられない。

礫の多くが被熱を受け，被熱による破砕礫やひび割れが多く認められる。礫総数は49個であるが，礫は５ｇ～300gの範囲に収まる小礫が殆どである。礫の集中は概観できるが，間隙も見られる。本遺構の北東及び南側に50cm ～１ｍ程の間隙を置いて，10個程度の礫の散在があったことから，礫の外部への持ち出し等に伴う礫の放散の可能性もある。集石内には，本項縄文第７類（塞ノ神式）の口縁部片が含まれ，縄文早期相当に比定される検出面（Ⅳ層）と共伴遺物の比定時期が合致する。

第15表　構成礫の重量別点数（集石3号）



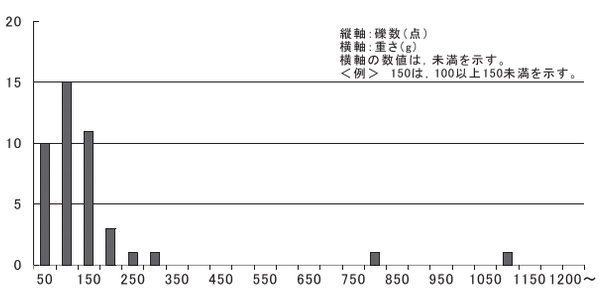
④　集石４号

Ⅰ-２区のⅣ層上面で検出された。当該期の遺構中，最北に所在する。石材は，全て安山岩で円礫が殆どである。

礫総数は43点であるが，内２点は，石皿転用品である。15g ～ 200gの礫が大半を占める。長楕円状の掘込面を有し，最深で４cm程と浅い。40cm四方の狭い範囲に礫集中し，小規模な集石である。掘込面内に礫を伴わない空間があるが，周囲に散在する礫がこの範囲に収まっていたと推察される。

明瞭な掘込面に礫がコンパクトに集中することで，火熱が全般的に礫に及んだ可能性が高く，全ての礫が赤化し，多くに煤が顕著に付着する点に符合する。遺構内遺物には，礫番号２・３が接合した１が含まれる。安山岩製の石皿転用品である。表裏面に，敲打による剥離痕が見られる。磨り面は顕著には捉えられない。

第16表　構成礫の重量別点数（集石4号）

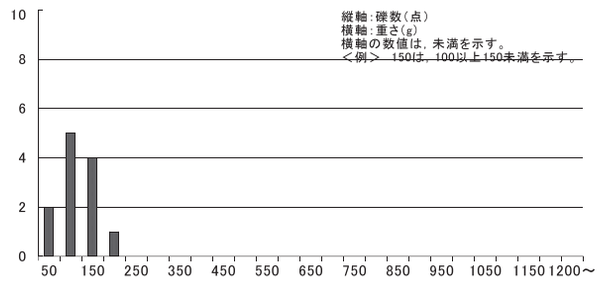


⑤　集石５号

Ｃ・Ｄ-４区のⅣ層上面で検出された。石材は安山岩で，扁平な礫が多く，一部が円礫である。礫の殆どが被熱する。

礫総数は12点で，10 ～ 200gの礫が主体を占める。掘込面は認められない。礫集中を伴わず，礫が散在する。扁平な礫が多い点や掘込面が確認できない点，礫が散在する点など，本遺構の特徴は，集石１・７号に類似し，利用目的や利用方法，放置後の経過などに共通性があった可能性がある。

第17表　構成礫の重量別点数（集石5号）



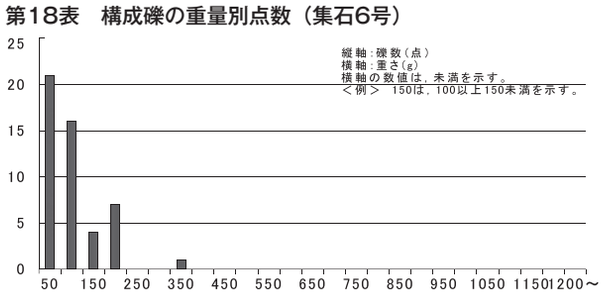
⑥　集石６号

Ｂ-３区のⅣ層上面で検出された。石材は，全て安山岩で，扁平な礫を多く利用する。一部の礫は被熱により赤化する。剥片状の礫片は被熱による破砕礫である。

礫総数は49点であり，200g迄の小礫を中心に構成される。掘込面は捉えられない。礫集中が弱く，散漫に礫が広がり，断面上も，礫の集積は顕著でない。

本遺構は，他の集石と異なる点が捉えられる。構成礫に関して，他が円礫や角礫を中心的に利用していたのに対して，本集石は，顕著に扁平な礫が殆どである。扁平な礫の特徴的な現存状況は，本遺跡の集石１号のように，扁平な礫を床面に設置する事例が一般的に見られることから，少なくとも主体的選択によると判断される。扁平礫に載せられる円礫や角礫が少ない点は，本来存在しなかったのか，再利用に伴い移動して現存を留めないのかは不明である。

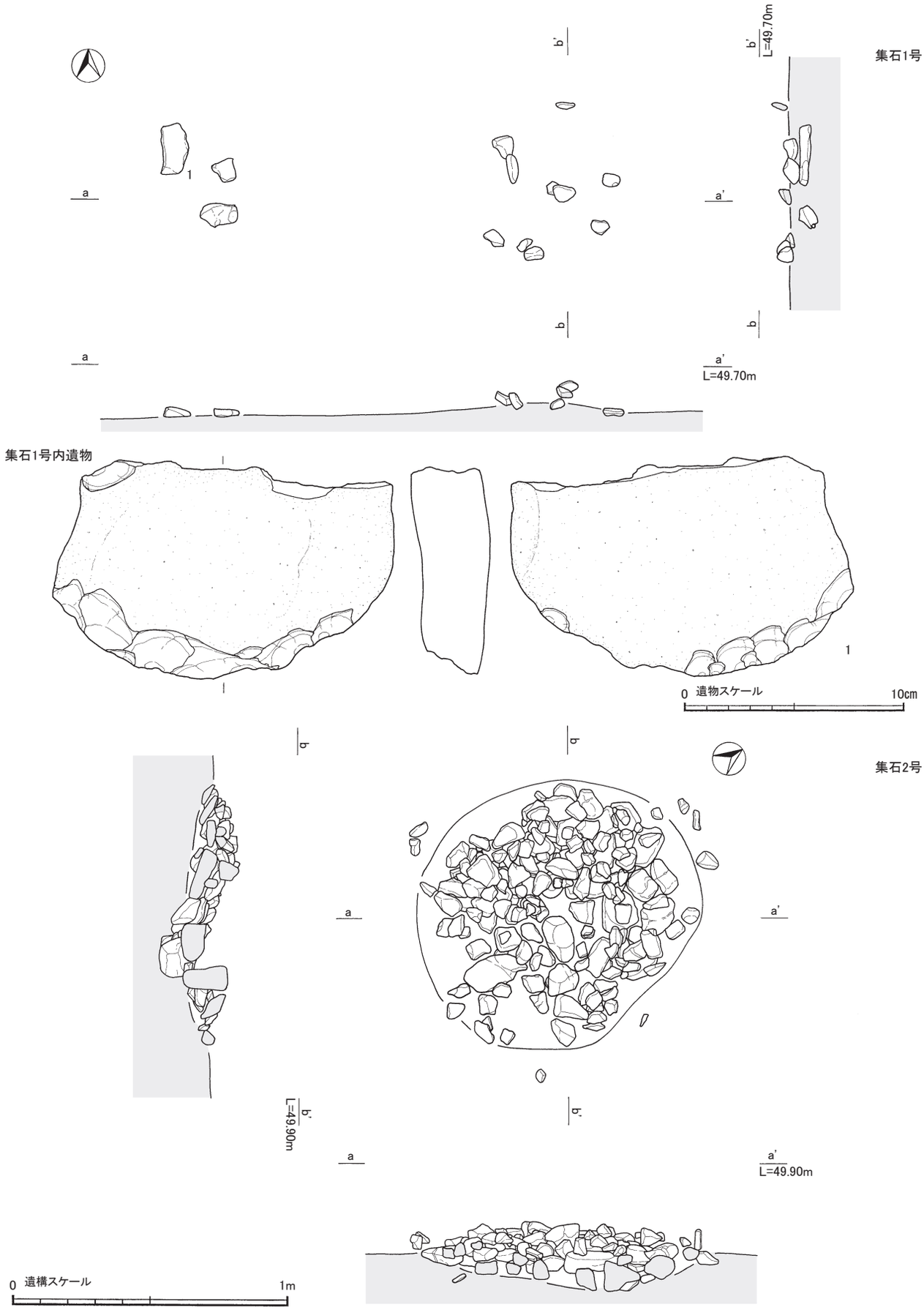
第18表　構成礫の重量別点数（集石6号）



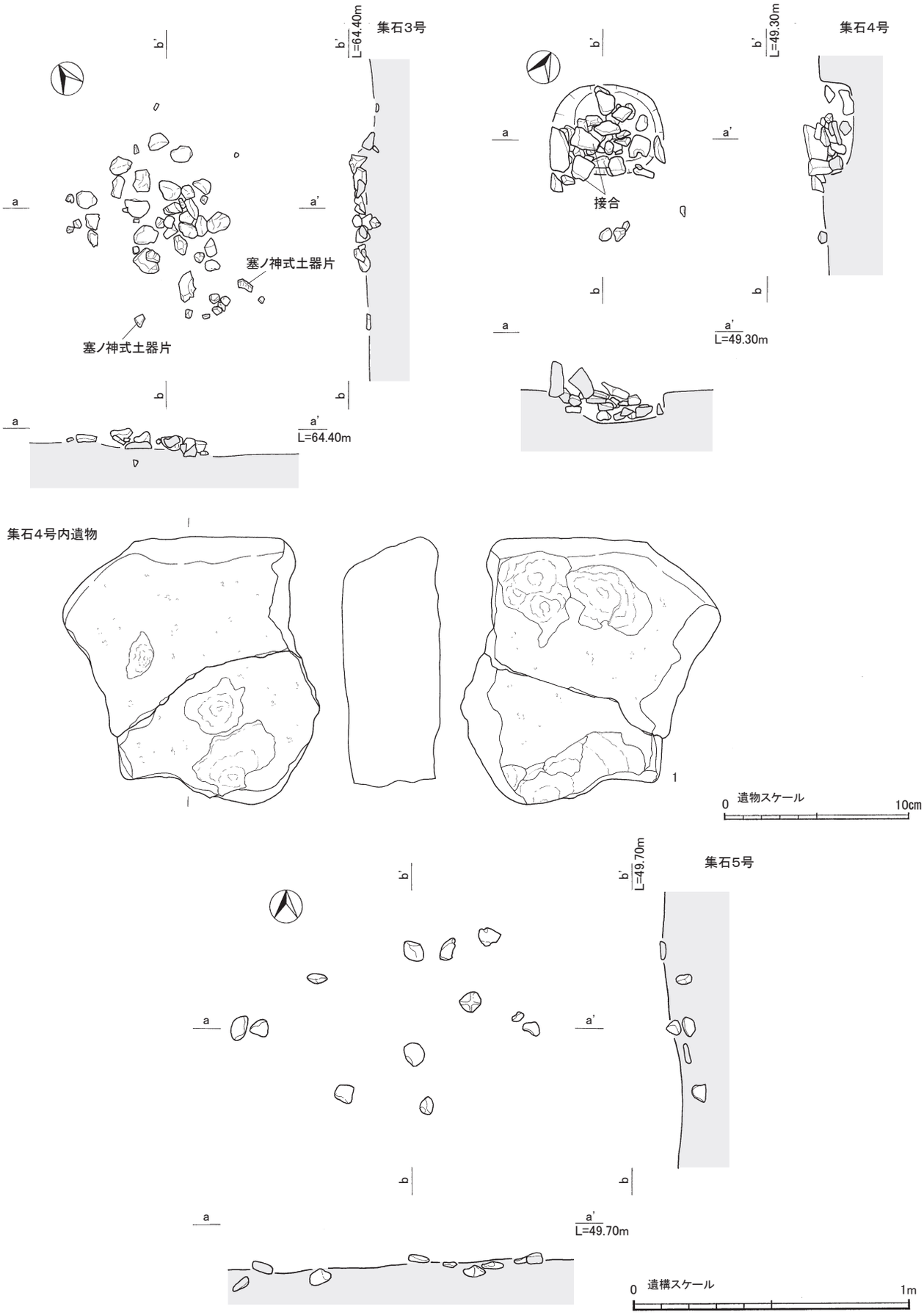
⑦　集石７号

Ｂ-６・７区のⅣ層中位で検出された。石材は，全て安山岩で，円礫と扁平礫を利用する。扁平礫が割合的に多い。被熱による赤化が，数点の礫に見られる。

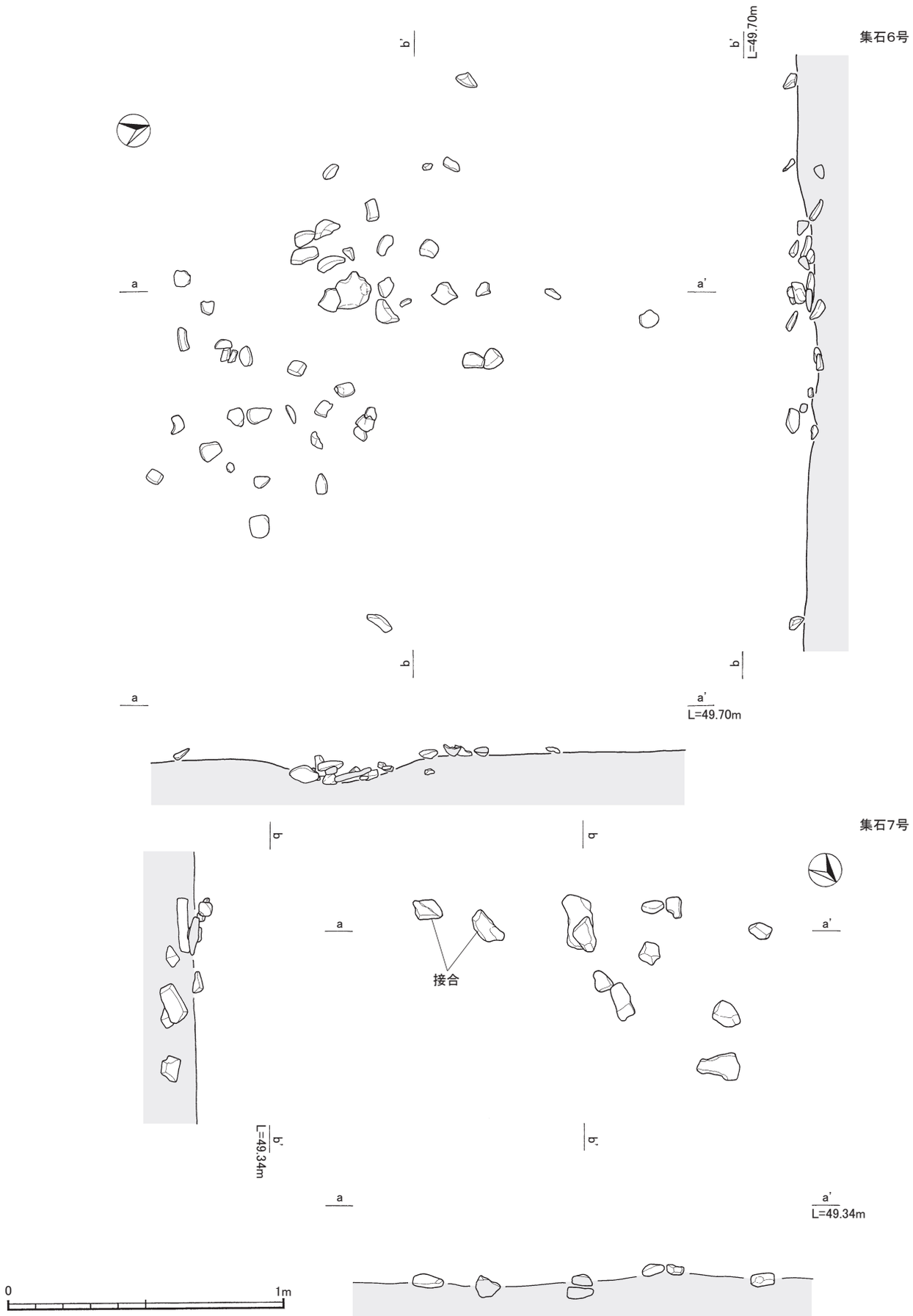
礫総数は12点であるが，内２点は同一個体であり，接合された。小礫・中礫により構成される。掘込面は捉えられない。礫集中は弱く，礫が散漫に広がる。断面上の礫集積も顕著に認められない。散礫状況や扁平礫の使用，掘込面を有さない点など，集石１号の特徴と共通す



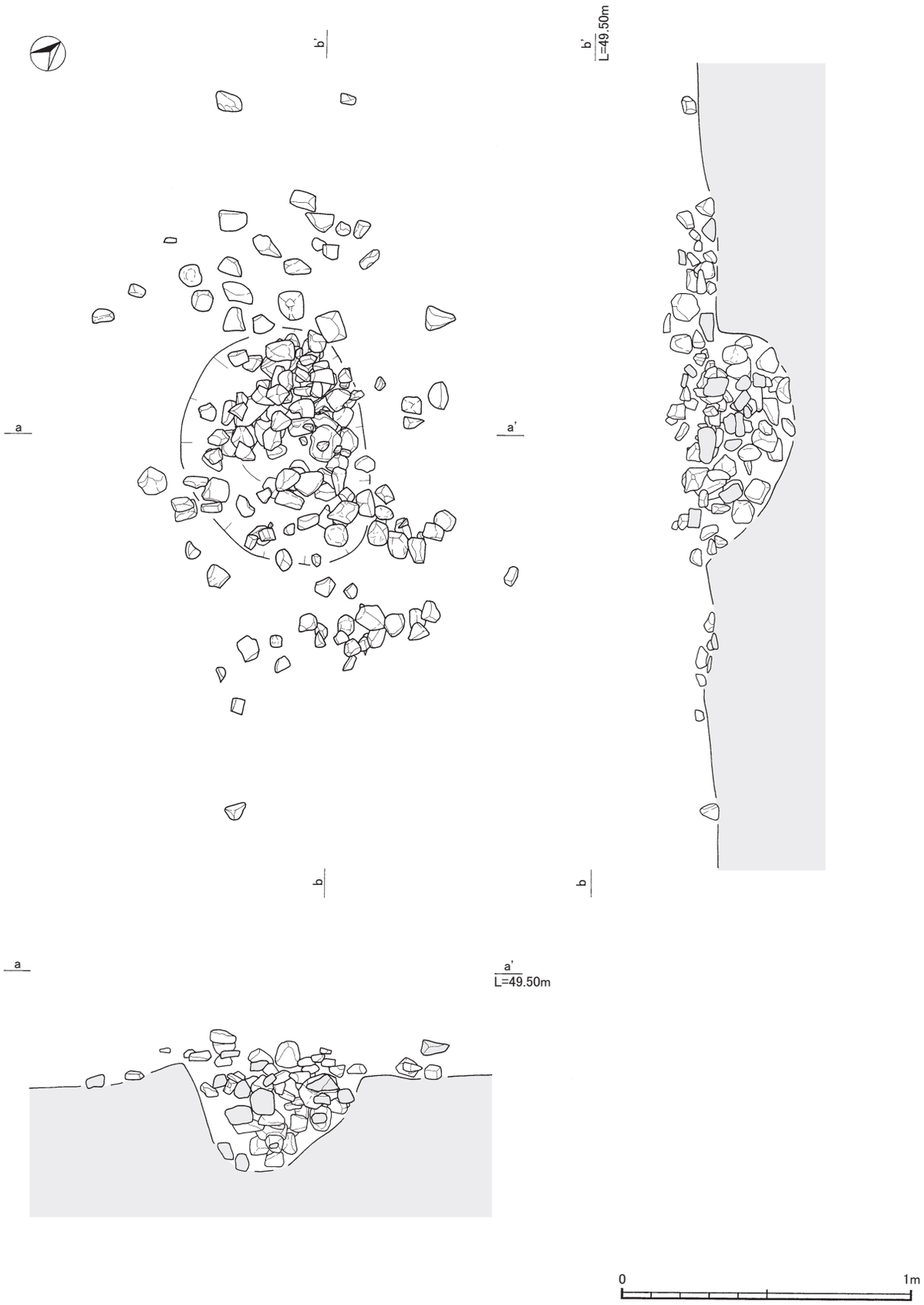
第36図　縄文時代早期集石１号・２号実測図



第37図　縄文時代早期集石３～５号実測図



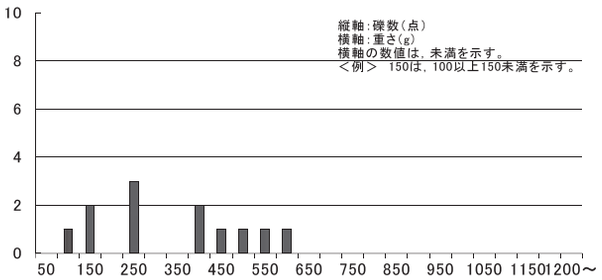
第38図　縄文時代早期集石６号・７号実測図



第39図　縄文時代早期集石８号実測図

る。Ⅳ層中位で検出されたことや礫が集中しない点など，礫の移動等により本来の集石状況を留めない可能性がある。

第19表　構成礫の重量別点数（集石7号）

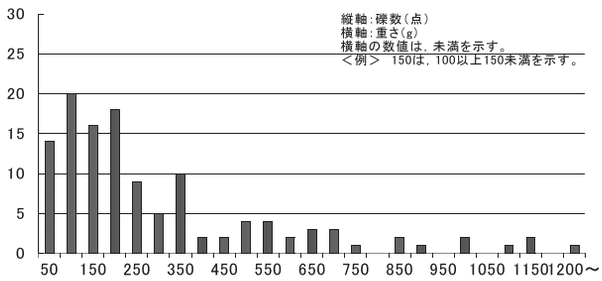


⑧　集石８号

G－２区のⅣ層上面で検出された。本遺跡の微高地に直近する位置に所在する。安山岩の円礫や角礫を利用する。礫の中には，石皿の廃棄品が含まれる。礫の多くが被熱し，破砕礫やひび割れも多く認められる。

礫総数は122点と，本遺跡の集石では最も多く含まれる。礫は400g迄の小礫が主体を占める。掘込面は捉えられない。平面上，中央辺りの礫集中の周囲に散漫な礫の広がりが見られる。断面上，地中での擂鉢状の礫集積が明確に捉えられ，その範囲が，本来の集石の範囲であると推察される。周囲に散在する礫は，使用後（放置後）に移動したと判断される。

第20表　構成礫の重量別点数（集石8号）



３　遺物

（１）土器

当該期の土器は，既知の土器研究に基づく土器型式を基本に，その器形や文様，施文形態により22に分類を試みた。7-1類～ 7-9類に関しては，共伴関係等土器編年が不明である点や，口縁部中位で「く」の字状に屈曲する二重口縁の一群（7-1類～ 7-4類）が，本遺跡で主体を占めることから，7-1類～ 7-4類を先に掲載し，以下7-5類～ 7-9類を後述して報告することとした。

第21表　縄文時代早期落し穴計測表

挿図番号	遺構名	検出区	層	上面の径（cm）	底面の径（cm）	深さ（cm）	小穴計測値（cm）			小穴計測値（cm）		
				長軸×短軸	長軸×短軸		No.	長径×短径	深さ	No.	長径×短径	深さ
29	落し穴1号	G-3	Ⅵ	(136)×(103)	56×41	82	1	32×21	31	－	－	－
	落し穴2号	F-2	Ⅵ	120×65	92×50	55	－	－	－	－	－	－
30	落し穴3号	E-5	Ⅵ	150×68	139×49	77	1	10×9	31	3	10×7	28
							2	14×10	28	－	－	－
31	落し穴4号	D-4・5	Ⅵ	158×95	134×54	91	1	14×10	63	3	16×8	56
							2	14×9	56	－	－	－
	落し穴5号	G-6	Ⅵ	148×62	141×55	26	1	17×17	40	3	17×18	28
							2	16×13	49	4	13×14	45
32	落し穴6号	B-3	Ⅵ	190×95	175×76	92	1	16×8	36	4	14×14	44
							2	16×14	42	5	16×16	44
							3	14×14	48	6	12×10	36

第22表　縄文時代早期土坑計測表

挿図番号	遺構名	検出区	層	上面の径（cm）	底面の径（cm）	深さ（cm）	形状	形態
				長軸×短軸	長軸×短軸			
33	土坑1号	C・D-5	Ⅵ	218×156	60×40	42	楕円	土坑1類
	土坑2号	G-3	Ⅶ	112×60	58×36	40	長楕円	土坑1類
34	土坑3号	B・C-5	Ⅵ	203×130	154×86	35	瓢箪形	土坑2類
	土坑4号	B・C-6	Ⅵ	190×115	170×85	33	長楕円	土坑2類
	土坑5号	D-5	Ⅵ	184×116	128×68	28	隅丸長方	土坑2類
	土坑6号	B-4	Ⅵ	135×107	55×40	22	瓢箪形	土坑2類
35	土坑7号	C-6	Ⅵ	214×75	170×55	30	不定形	土坑2類
	土坑8号	B-5	Ⅶ	175×110	167×100	32	長楕円	土坑2類

第23表　縄文時代早期集石計測表

挿図番号	遺構名	検出区	層	大きさ（cm）	礫数	赤化	備考
				長径×短径			
36	集石1号	C-4	Ⅳ	168×57	13	あり	
	集石2号	C-3	Ⅳ	103×97	168	あり	
37	集石3号	D-8	Ⅳ	82×73	49	あり	
	集石4号	I-2	Ⅳ	41×32	43	あり	
	集石5号	C・D-4	Ⅳ	112×69	12	あり	
38	集石6号	B-3	Ⅳ	204×186	49	あり	
	集石7号	B-6・7	Ⅳ	130×66	12	あり	
39	集石8号	G-2	Ⅳ	251×149	122	あり	

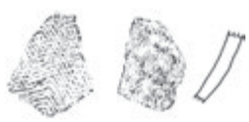
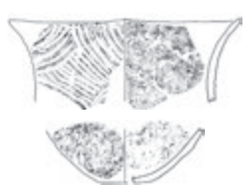
第24表　縄文時代早期土坑内遺物観察表（土器）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	遺構名	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土				焼成	備考
										外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他		
35	1	26503	B-4	Ⅳ	土坑8号	深鉢	7-1	口縁部～胴部	外面：口唇部刻み。口縁部上半：沈線文・刺突連点。口縁部下半：沈線文。胴部：撚糸文・沈線文・刺突連点文。内面：ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	浅黄色 Hue2.5Y7/4	－	－	－	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	2	26253				深鉢	7-1	口縁部	口縁部上半：沈線文・刺突連点。口縁部下半：沈線文，内面：ナデ	黄褐色 Hue2.5YR5/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	28.8	－	－	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	3	27501				深鉢	7-1	胴部～底部	外面：胴部沈線文 内面：ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	14.6	－	○	○	○	白色砂粒・小石	良	

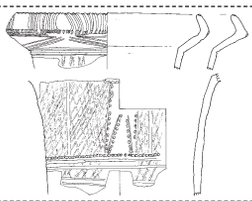
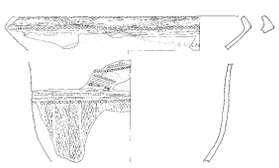
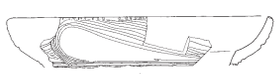
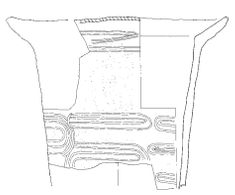
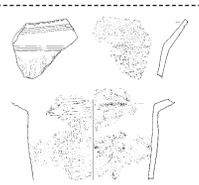
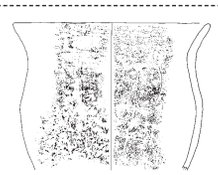
第25表　縄文時代早期集石内遺物観察表（石器）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土地点	層	器種	石材	計測値（cm）			重さ（g）	備考
							最大長	最大幅	最大厚		
36	1	集石1号	C-4	Ⅳ	礫器	凝灰岩？	10.1	15.6	3.6	1,900	
37	1	集石4号	I－２	Ⅳ	石皿	安山岩	14.5	14.1	5.3	1,870	被熱による赤化，煤付着。

第26表　縄文時代早期土器分類表（1）

類	図　面	特　　徴
1類		器形：平面観が，方形を呈する角筒形を呈する。 文様：外面に，隙間なくやや斜走する貝殻条痕文を施す。各面に連続する波状の沈線を３条縦走させる。各面の角には，横位の貝殻復縁による刺突を連点状に施す。 既知の土器研究により，志風頭式土器に比定される。
2類		器形：円筒形を呈する。 文様：口縁部上位に，縦位の貝殻復縁を押し引き状に刺突し，横方向に巡らせる。口唇部には，刻みを巡らせる。胴部全面には，貝殻復縁による押し引きを横走させる。 既知の土器研究により，吉田式土器に比定される。
3類		小片のため，器形や全体の文様形態は不明である。 器形：弯状に膨らむ器形が推定されることから，胴部下半部の破片資料と推察される。 文様：緻密で，やや間延びした大型の山形押型文を横走させる。 既知の土器研究から，狭義の押型文土器の他，手向山式土器などの可能性も含まれる。
4類		器形：深鉢形土器である。胴部下位から中位にかけて外傾し，胴部中位で「く」の字状に屈曲し，内傾に転じる。口縁部にかけて弯曲しながら内傾から外傾に転じ，口縁部で外反する。 文様：撚糸を回転施文具に装着し，縦方向に回転させながら押圧して施文する。縦位の波状文が縦列して形成される。 既知の土器研究から，変形撚糸文土器と判断される。
5-1類		器形：深鉢形の器形である。胴部中位で内屈し，口縁部上端に向けてラッパ状に外反する。口縁部は波状を呈する。 文様：胴部から口縁部にかけて，分割された同心円文を複数の並行沈線により施文する。個々の同心円文は，互いに交錯し，間隙を複数の並行沈線で埋める。他に，外面に回転施文具による山形押型文や菱形文を施すタイプも存在する。一部の資料には，内面の口縁上端に山形押型文や菱形押型文が施される。 既知の土器研究から，手向山式土器の深鉢と判断される。
5-2類		器形：円筒形である。中位の径がやや窄まり，上位にかけてやや広がる。 文様：数条の平行沈線を一つの施文単位として，一定の間隙を空けて一巡させる。 既知の土器研究から，手向山式土器の壺形土器の口縁部から頸部の一部と判断される。
6類		器形：類例や既知の土器研究から，深鉢形の器形と推定される。直立する胴部が口縁部に至って大きく外傾し，中位で屈曲しやや傾きを上げる。いわゆる二重口縁を呈すると推定される。口縁部中位の屈曲部がややくびれ，口縁下半に対して上半はやや肥厚する。 文様：口縁部に，直線や蛇行線などの沈線や微隆起突帯が複数巡らされる。 既知の土器研究における平栫式土器に比定される。
7-1類		器形：深鉢形の器形である。胴部下半から胴部中位にかけてやや内傾し窄まるが，胴部中位から胴部上位にかけては，やや外傾に転じる。口縁部は大きく外反し，中位で「く」の字状に屈曲・内傾するいわゆる二重口縁を形成する。口縁部の「く」の字状屈曲部の頂点がやや外側にコブ状に迫り出し，上面観が多角形状の器形を成す。 文様：口縁部上半には，「く」の字状屈曲部の頂部直上に正円を施す。並列する正円の間隙には，相対する正円文の上下端から２条の斜行沈線が伸び，三角形状の外殻を作出する。それぞれの文様は，２条の並行沈線の内外郭を刺突連点が囲む。口縁上端及び「く」の字の屈曲部には，刺突刻みを１条横走させる。口縁部下半には，上端に２条の並行沈線を巡らし，その下位に３条の並行沈線により横位の山形文（鋸歯文）を巡らせる。胴部最上端には並行沈線が２条巡らされる。胴部は，一定の間隙をあけて，網目撚糸文による施文帯が垂下する。胴部上半の無文帯上には，口縁部上半同様の正円が施される。胴部中位には，４，５条の並行沈線が一定の間隙を空けて巡らされる。並行沈線間には口縁部下半同様の山形文（鋸歯文）が施される。 本類より以下7-9類までは，既研究により塞ノ神式土器に比定される。

第27表　縄文時代早期土器分類表（2）

7-2類		文様：口縁部上半には，並行する数条の沈線や連点を組み合わせて同心円文のモチーフが施文されるが，中心部は正円ではなく鈎状に描かれる。同心円文間の間隙は，相対する同心円文の上下端を対角に２条の斜行沈線でつなぐ。口縁部上半の施文は，連点により外郭を囲む。口縁上端及び「く」の字の屈曲部には，刺突刻みを１条横走させる。口縁部下半には，複数の斜行沈線を施す。胴部最上端には並行沈線が３条ほど巡らされる。胴部は，網目撚糸文による施文帯と，沈線による長方形状の外郭及び，その一対の対角を斜行沈線で結ぶ施文帯と，１cm幅程度の帯状の無文帯が，交互に垂下して施される。胴部中位には，網目撚糸文帯等の上に，４条の並行沈線が巡らされる。
7-3類		文様：「く」の字状屈曲部のコブ状の尖端には，並行する数条の沈線により同心円文のモチーフが施される。相対する同心円文の間隙には，特に文様が施されない。口縁上端及び「く」の字の屈曲部には，刺突刻みを１条横走させる。口縁部下半は，屈曲部のコブ状尖端の下位を基点に，鋭角が背中合わせに相対する三角形状の文様が，２・３条の並行沈線により作出される。
7-4類		文様：口縁部上半及び下半に，「く」の字状屈曲部のコブ状の膨らみを基点に，倒置の三角形を２・３条の沈線（一部刺突連点を含む）により形成し，横方向に並立させる。巨視的には鋸歯状のモチーフが作出される。口縁部上端及び屈曲部には１・２条の刺突連点を巡らす。胴部には，網目撚糸文の施文帯上に，数条の並行沈線を横走させ，その間に鋸歯状の並行沈線を斜走させる。これらの外郭には，刺突連点を並行させる。
7-5類		器形：7-5類～7-9類までは，二重口縁を呈しない一群で，深鉢形の土器と思われる。 文様：口縁部上半には，横位の玉縁状のモチーフが相対して横方向に並列させる。玉縁が直に背中合わせに相対する他，その間隙を複数の縦位の沈線で埋める箇所も見られる。玉縁は，３・４条の並行沈線で施文される。口縁部上端及び屈曲部には１・２条の刺突連点を巡らす。口縁部下半は，中位程に２条の並行沈線を横走させる。なお，7-1類～7-4類の多くは，口縁部の「く」の字状屈曲部にコブ状の迫り出しや，突起状の角が形成されるが，本群には施されない。胴部には，縦位の網目撚糸文が捉えられるが，欠損により詳細は判然としない。
7-6類		器形：胴部下半から胴部上端にかけて，やや外傾気味に直立する。口縁部で大きく屈曲し外反するが，弯状に傾きを徐々に上げながら，口縁部でほぼ直立する。口縁部が「く」の字状に屈曲しない点が，上述の7-1類～7-5類との最大の相違点である。残存片からは，横位の玉縁状のモチーフが捉えられるが，全体的モチーフは不明である。7-4類などの類例から，基本的には３条ほどの沈線により施文される横位の玉縁状のモチーフを相対させて，背中合わせに並列させると推定される。玉縁の文様の間隙には，複数の並行沈線により埋められる。胴部の残存状況が悪く，胴部の施文形態等は不明である。
7-7類		器形：やや外傾する胴部上半が口縁部に至り屈曲して大きく外反する。口縁部は，やや弯状に膨らみを呈する。４つの頂部を有する波状口縁である。口縁部には，２条の並行沈線により，倒置する三角形を横方向に並列させるが，隣り合う２つの三角形の境が，頂部の下位に位置するように，配置される。胴部には，幅広の網目撚糸文の施文帯間を垂下させ，無文帯と交互に並列する。胴部中位には，４条の並行沈線により長楕円弧状の文様が，仲違いに施される。
7-8類		器形：直立ないしやや斜立する胴部上半が口縁部に至り，大きく屈曲して外反する。口縁部は直線的に斜立するものや，弯状にやや膨らみを呈するものがある。波状口縁を呈するものもある。 文様：口縁部は，無文や中位に２条の並行沈線が横走する。口唇部外端には，刺突連点が１条施されるのもある。胴部には，一定の間隙を空けて，網目撚糸文帯が垂下する。胴部中位に，並行沈線が複数巡らされるタイプもある。
7-9類		器形：胴部下半から中位にかけて弯状に膨らみ，胴部上半にかけて内傾し窄まる。胴部上端で屈曲し，口縁部に至って外傾に転じる。 文様：内外面共に施文がなされない，無文土器である。

① 1類 135・136

135・136は同一個体の可能性が高く，一辺が10.5cm程を測る角筒土器であり，外面がやや膨らみを呈する。胎土には，3.0mm ～ 7.0mm程の乳白色の小石や一部に安山岩（凝灰岩）の小石が無数含まれる。

② 2類 137・138

137は，口縁部片であり，器形については小片のため，円筒形・角筒形の何れかは判断できない。口縁部上位に，貝殻刺突を横方向に密に施して巡らす。口唇端部には，微細で極浅の刻みが，数mm間隔で施される。小片で胴部の文様形態等不明であるが，既知の土器の類例から，本類に属する可能性があると判断し含めた。

138は，口縁部上端に，密な押し引きにより沈線状の刺突を横方向に１条巡らせる。その下位には，貝殻復縁による1.0cm幅の縦位の押し引き状の刺突を左方向へ巡らせる。胴部には，貝殻復縁により縦位の押し引き状の刺突を左方向へ巡らせるが，連続刺突がほぼ条痕状を呈している。口唇端部には，器面に直交する極細・極浅の刻みを3.0mm程の間隙を空けて施す。内面には，幅1.0cm強の工具痕の縁端が複数捉えられ，器面調整にヘラ状工具の使用が窺える。工具痕が何れも，左上から右下への斜位の沈線状（幅1.0cm強）に残されることから，左下から右上方向に工具ナデもしくはケズリを施したと推察される。

③ 3類 139・140

２点は同一個体の破片資料と思われる。外面の山形押型文は，幅2.6cm×高さ1.5cm程と山が低く間延びする。施文原体を横位に回転させることから，胴部下半の破片資料と推察される。胎土中には，数mmの乳白色の砂粒の他，金雲母が無数に含まれる。

④ 4類 141 ～ 147

141・142は，口縁部片である。共に，1.0cm程の間隙を空けて撚糸による施文原体を縦方向に回転させて，縦位の波状を呈する撚糸文を施す。

143・144は，断面が「く」の字状を呈し，胴部中位から上半に相当すると思われる。内面には，条痕状の工具痕が明瞭に残され，器面調整に貝殻もしくは板状工具の正目部分の使用が窺える。141 ～ 143は，色調や文様形態等の類似し，出土地点も近接することから同一個体の可能性が高い。何れも，外面に煤が付着する。144も胴部中位から上位の部位と思われる。撚糸による施文原体を斜方向に回転させる。

145・146も143・144同様に胴部中位から上位の部位と思われるが，断面が「く」の字状を呈さず弯状に膨らむ。撚糸文が，1.0cm ～ 1.5cmの間隙を空けて，横方向に施文される。縦位の波状文が密に接しながら原体を縦方向に回転して施文される141 ～ 143と，施文方向や施文密度が異なる。146の文様形態は，縦方向に間延びした「S」字状もしくは「８」の字状に捉えられるが，判然としない。147は，明瞭に波状タイプの連弧文状の施文が捉えられる。

⑤ 5-1類（口縁部）148 ～ 151

何れの資料も，浅黄橙色気味の色調を呈し，他の縄文土器片とは色調を異にする。

148は小片のため判然とせず，平口縁で図化したが，波状口縁の可能性もある。外面には，施文原体を斜方向に回転させて，菱形押型文を施す。一部施文が錯綜し綾杉状を呈する。口縁部内外面は，菱形押型文を縦方向に回転させる。

149は，胴部片である。外面に山形押型文や菱形文を施し，施文形態が148と類似し，同一個体の可能性がある。

150・151は，同一個体の可能性がある。何れも，数条の沈線が並走する同心円を背中合わせに相対させるモチーフを描く。各同心円文の間隙も，弧状の並行沈線文で埋められる。口縁部は，波状口縁である。151は，胴部上位から口縁部にかけての資料である。胴部が「く」の字に屈曲する。僅かに捉えられる頸部の下位には，施文が捉えられない。

⑥ 5-1類（底部）152

平底を呈し，胴部下位から中位にかけて弯状に膨らむ器形が想定される。内外面に施文は捉えられない。色調が5-1類の浅黄橙色気味の色調を呈することから，それらの底部と考えられる。器面には煤が付着する。

⑦ 5-2類 153

壺形土器の円筒形を呈する頸部片である。5-1類と同じ浅黄橙色気味の色調を呈する。上・下端の復元外径が10cmと9.0cmで，中位が8.8cmを測る。外面の並行沈線は４条ずつの２段に施され，１条ずつを反時計回りに巡らす。

⑧ 6類 154 ～ 156

154 ～ 156の３点の出土である。154・155は，口縁部片であるが，器形や施文形態，色調が酷似することから同一個体の可能性が高い。大きく外反する口縁部下半が，中位で屈曲し口縁部上半で緩やかな外傾に転じる二重口縁の口縁部上半に相当すると推定される。口縁部上端及び上半下端（口縁部中位の屈曲部）に，微隆起突帯を巡らす。口縁部上半には，波状に蛇行する数条の並行沈線を描く。口唇部外端には，ヘラ状工具の側縁により

半月状の刻みが施される。

156は，口縁部下半に相当すると思われる。３条の微隆起突帯が巡らされる。微隆起突帯の間隙には，波状の沈線が１条巡らされる。微隆起突帯の刻みは，極細のヘラ状工具の側縁により施される。

⑨　７類

（ア）7-1類

本類に属する資料は土坑８号の埋土内に出土し，第35図土坑７・８号実測図にて掲載済みである。

（イ）7-2類　157 ～ 161

157・158は色調や文様構成，煤の付着状況等が酷似することから，同一個体の可能性が高いが，口縁部や胴部の復元器形がかなりいびつであり復元に至らなかった。口縁部下半には，極浅の１条の斜行沈線が施されるが，特徴的な文様形成には捉えられない。

159の施文形態は，157・158同様に，同心円文を中心にその間隙を対角線でつなぐモチーフが共通することから，本類に含めた。沈線や連点が比較的微細に施され，丁寧に施文される点など，7-1類に属する可能性もある。157・158・159が，口縁部下半が基本的に無文であるに対して，159の口縁部下半には，４条の斜行沈線が施される。　160・161は胴部片である。網目撚糸文の施文帯の間隙に，２条の並行沈線により長方形（一部三角形状）及び対角線を作出する点で，157に共通する点から本類に含めた。他の資料が長方形であるのに対し，160は網目撚糸文の施文帯の間隙が三角形状を呈する点が特徴的である。160は網目撚糸文の間隔が密であるのに対し，161は間隔が広い。161は網目撚糸文の施文帯上に，蛇行する２条の並行沈線が施されるなどの違いも見られる。

（ウ）7-3類　162 ～ 167

162・163及び164 ～ 166は，器形や色調，文様構成，煤の付着状況等が酷似し，同一個体の可能性が高い。

162は，「く」の字状屈曲部の一部がコブ状に迫り出し，上面観が多角形状の器形を成す。「く」の字状屈曲部のコブ状の尖端には，並行する数条の沈線により同心円文のモチーフが施される。相対する同心円文の間隙には，文様が施されない。口縁部下半は，屈曲部のコブ状尖端から左斜行方向に３条の並行沈線が胴部に向けて伸びる。163は，網目撚糸文による施文帯の間隙を沈線により長方形状の外郭を描き，一対の対角を斜行沈線で結ぶ。164は，口縁部上半の文様は162に同様であるが，「く」の字状屈曲部にコブ状の尖端が施されない。

167は胴部片である。網目撚糸文の施文帯の間隙が長方形を呈し，一対の対角線を斜走させる点で163に共通するが，163が外郭線及び一対の対角線全てに刺突連点を並行させるのに対して，167は２条の並行沈線で作出した対角線の間隙のみに刺突連点を施す。

（エ）7-4類　168 ～ 177

168 ～ 170及び171 ～ 173は，色調や器形他，煤の付着状況等が酷似し，それぞれ同一個体の可能性が高い。何れも，口縁部の「く」の字状屈曲部の複数箇所が，やや突起状に角を成す。168 ～ 170及び171 ～ 172の何れも，口縁部上半及び下半に，上下に反転する三角形を横方向に並立させて鋸歯状のモチーフを，２・３条の沈線により施文する。168 ～ 170の復元口径が32 ～ 33cmを測り，171・172の復元口径は36.0cmと34.6cmで，他の器種より大きめである。

174 ～ 177は胴部片であるが，本類の他の資料に類を見ない淡黄橙色の特徴的な色調や細かい胎土の質感も含めて，171・172と同一個体の可能性があると判断し，本類に含めた。174 ～ 176は，撚糸幅が細く，原体への撚糸の右巻き・左巻きの間隔も一定で，器面に定形的な菱形が網目状に施される。胴部上位と中位に３条の並行沈線を横走させ，その間隙に３条の並行沈線を斜行させる。並行沈線の上下端（外郭）には，丁寧な円形の刺突連点を施す。

177も，胎土や色調，施文形態は174 ～ 176に類似するが，撚糸幅が太めであり，刺突連点が施されない点で相違がある。

（オ）7-5類　178

１点のみの出土である。口縁部の復元外径は，23.3cmである。胴部の網目撚糸文の施文帯幅が１cm程と狭く，１cm幅の無文帯と交互に並列させる。

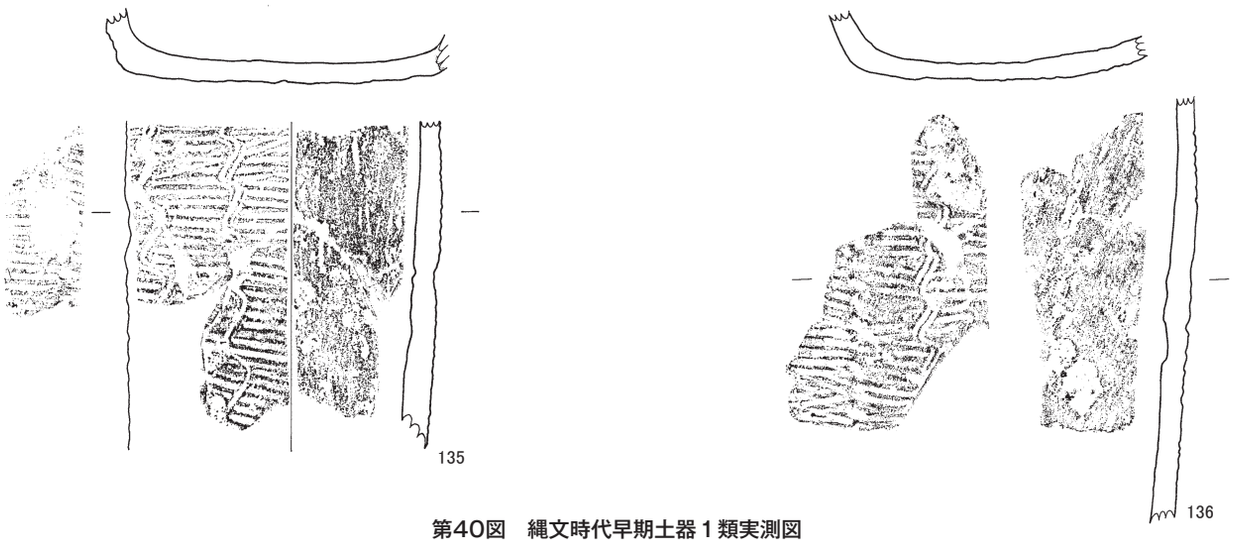
（カ）7-6類　179 ～ 182

179 ～ 182は，色調がにぶい黄褐色を呈し，胎土に乳白色の砂粒が多く混入する。本遺跡の同種の資料に見られない特徴的な色調や文様が共通することから，同一個体の可能性が高い。

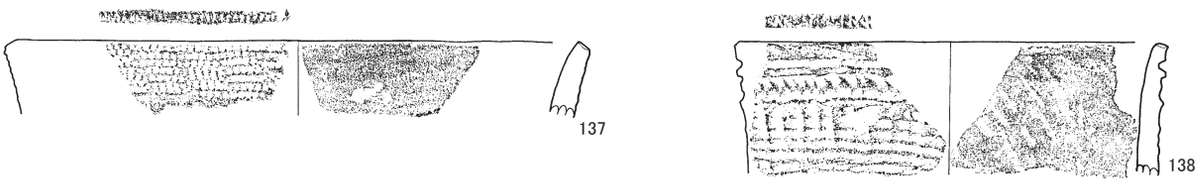
（キ）７-7類　183・184

183・184は，文様形態や色調等酷似し，同一個体の可能性が高い。波状口縁である。胴部の上端に，２条の並行沈線を横走させる。胴部には，１cm幅の網目撚糸文の施文帯と0.5cm幅及び4.0cm幅の無文帯が交互に並列する。胴部中位には，４条の並行沈線により，5.0cm幅と2.0cm幅の２種類の長楕円状のモチーフが，仲違いに施される。

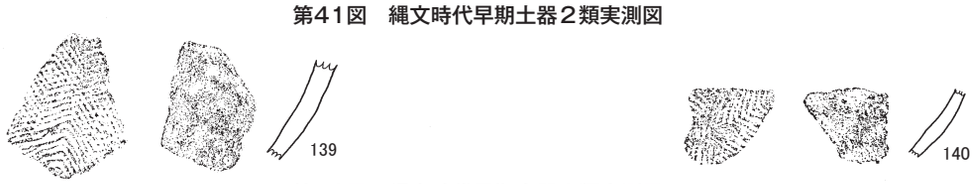
（ク）7-8類　185 ～ 191



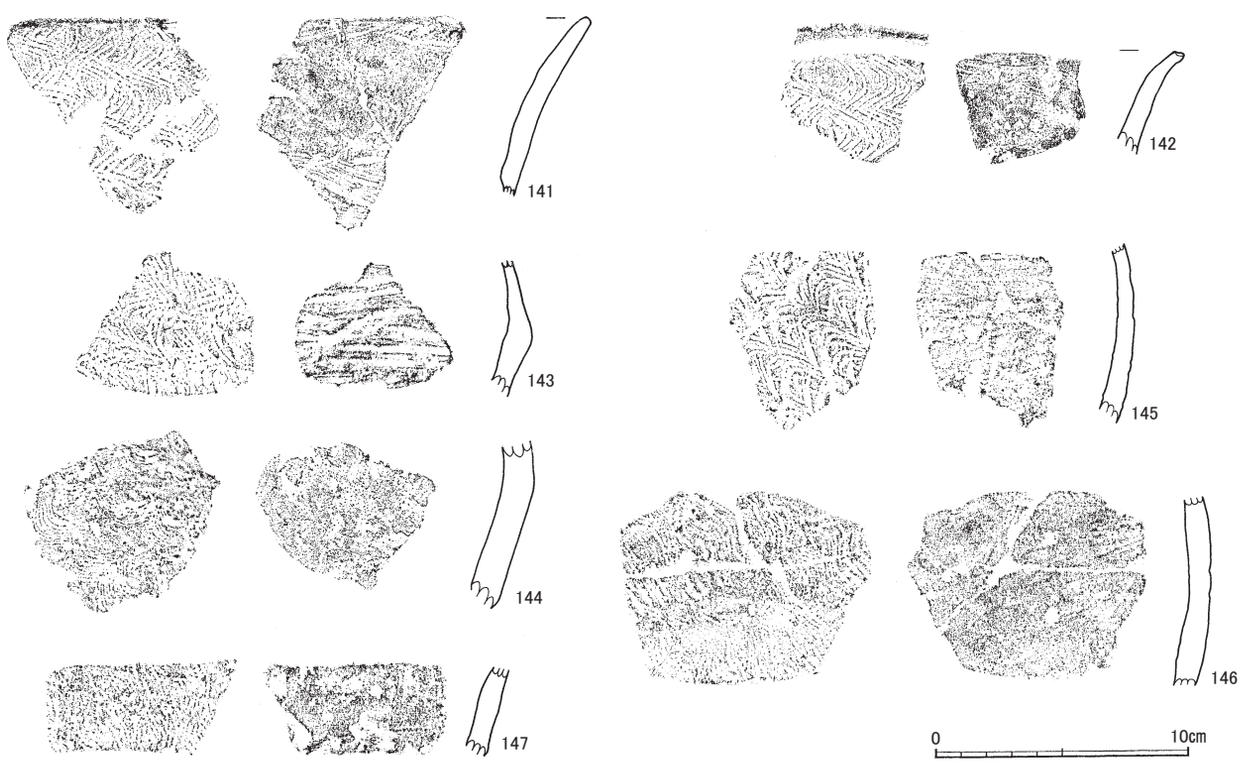
第40図　縄文時代早期土器１類実測図



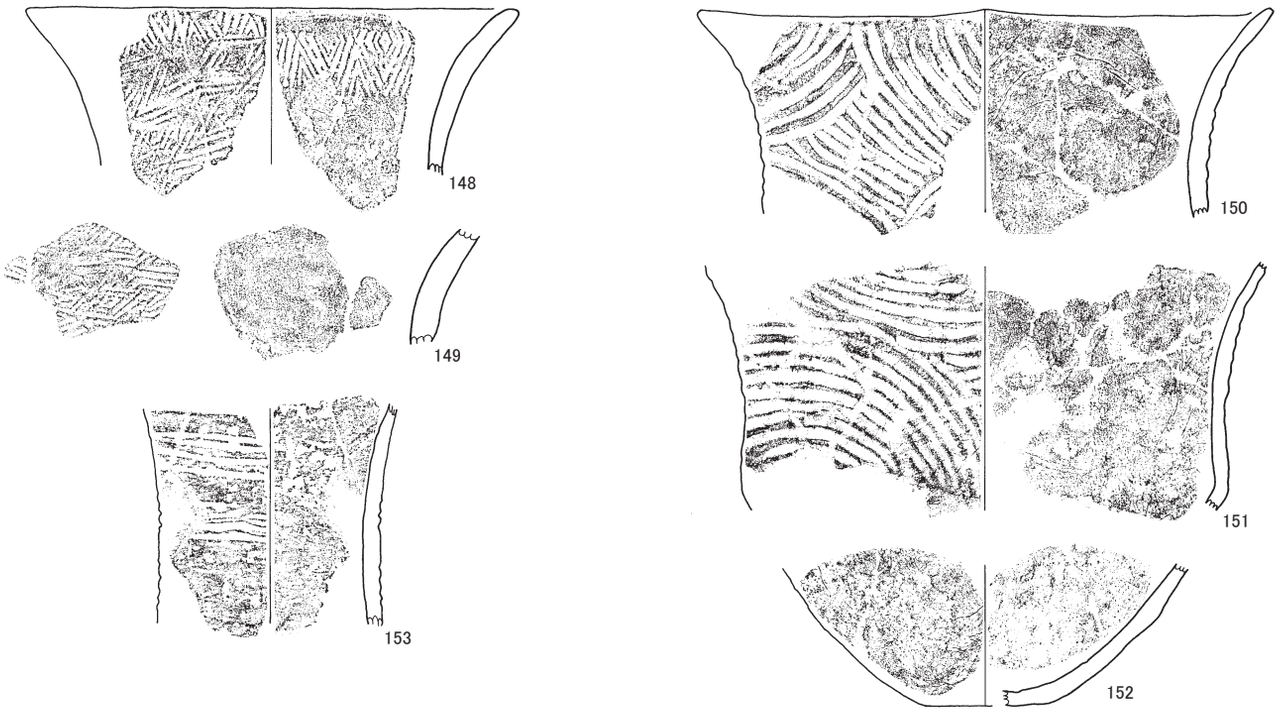
第41図　縄文時代早期土器２類実測図



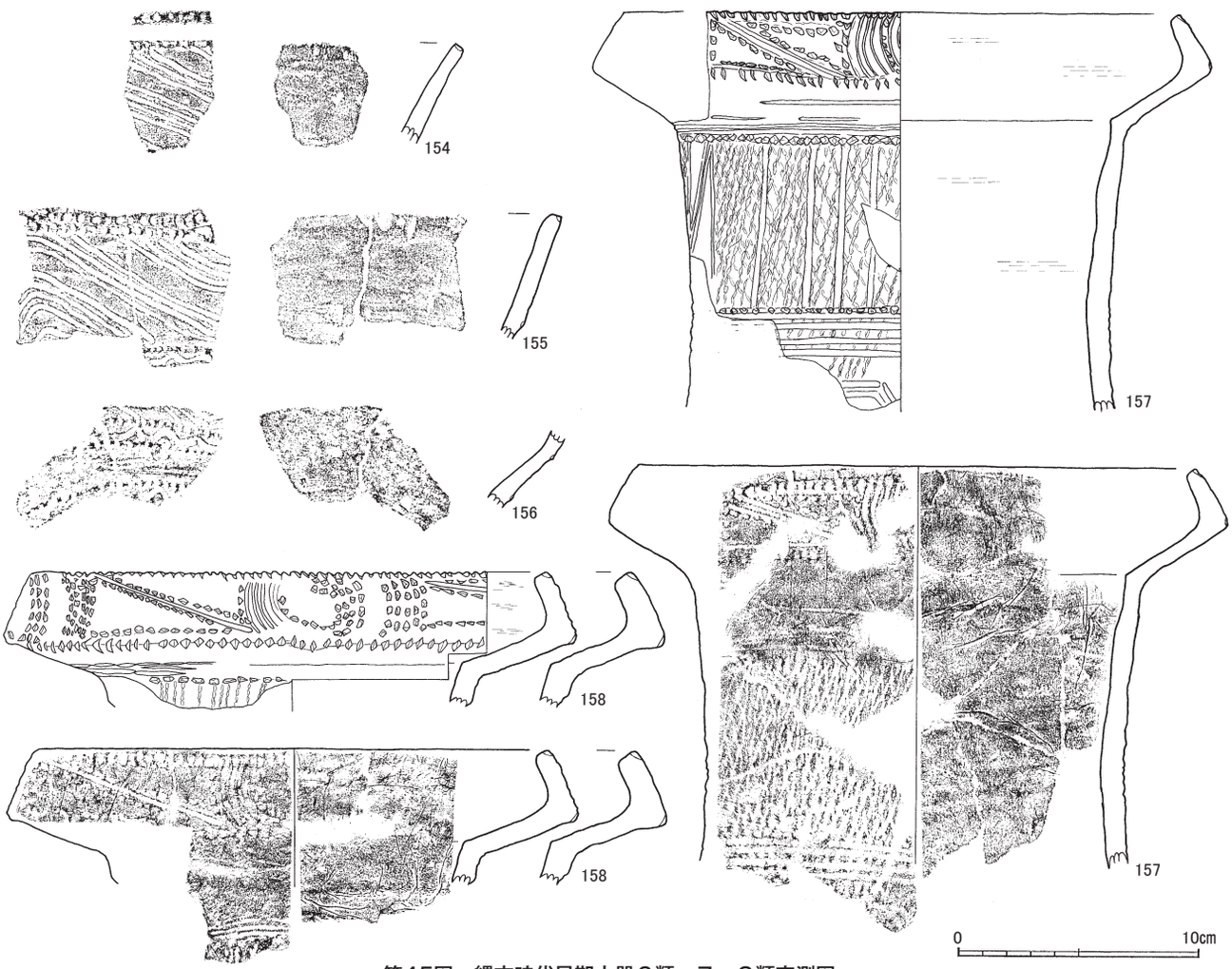
第42図　縄文時代早期土器３類実測図



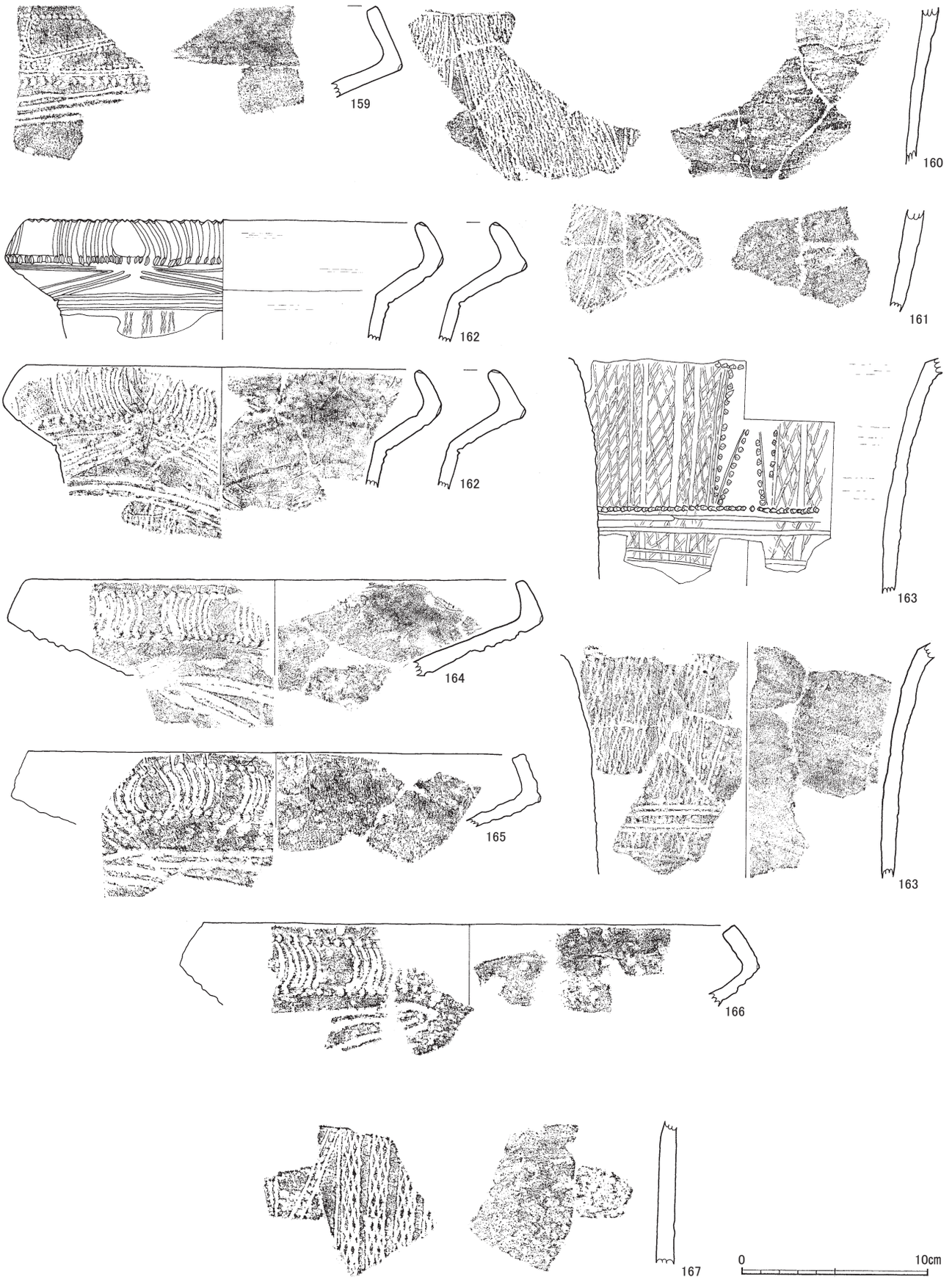
第43図　縄文時代早期土器４類実測図



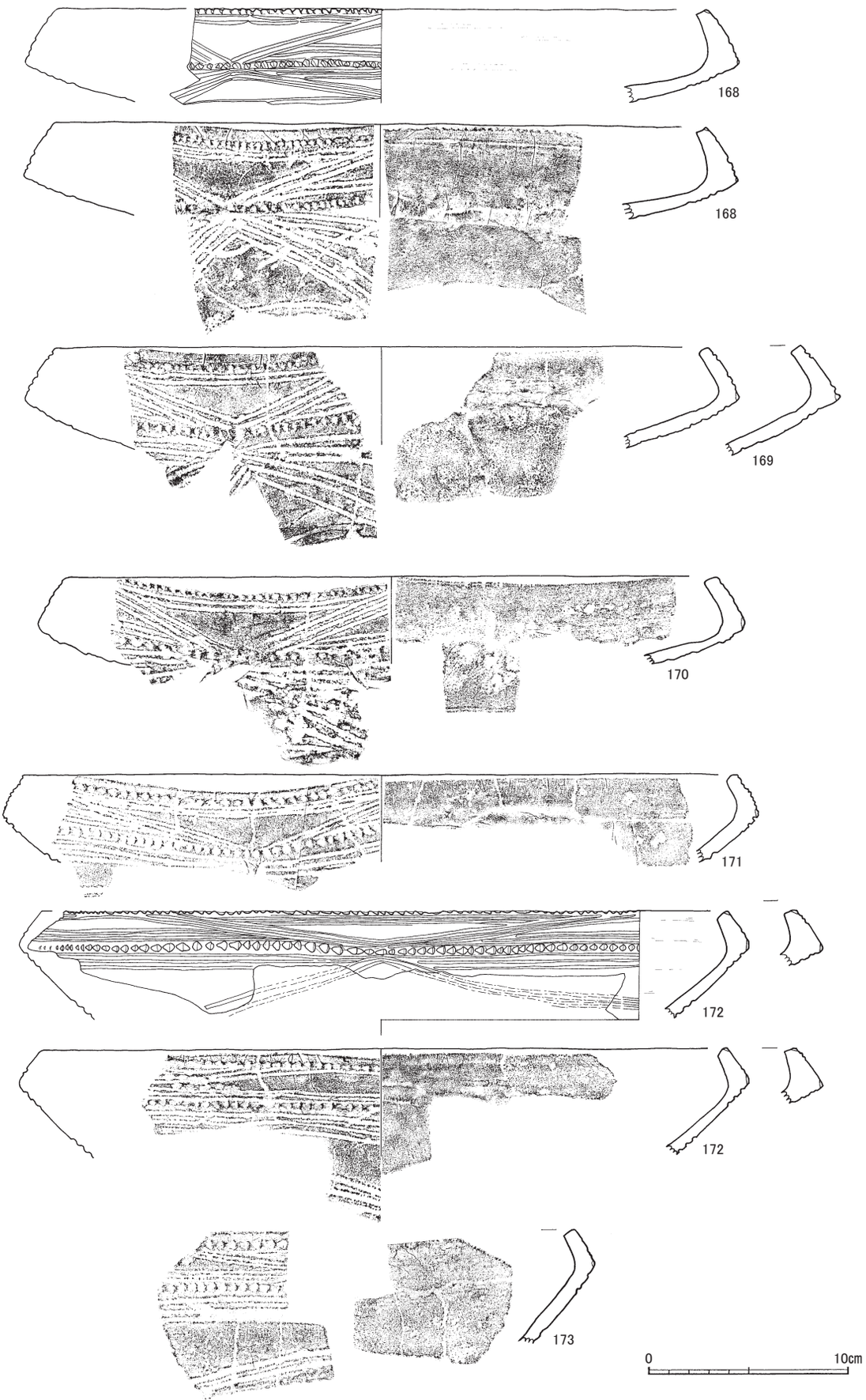
第44図　縄文時代早期土器５－１・２類実測図



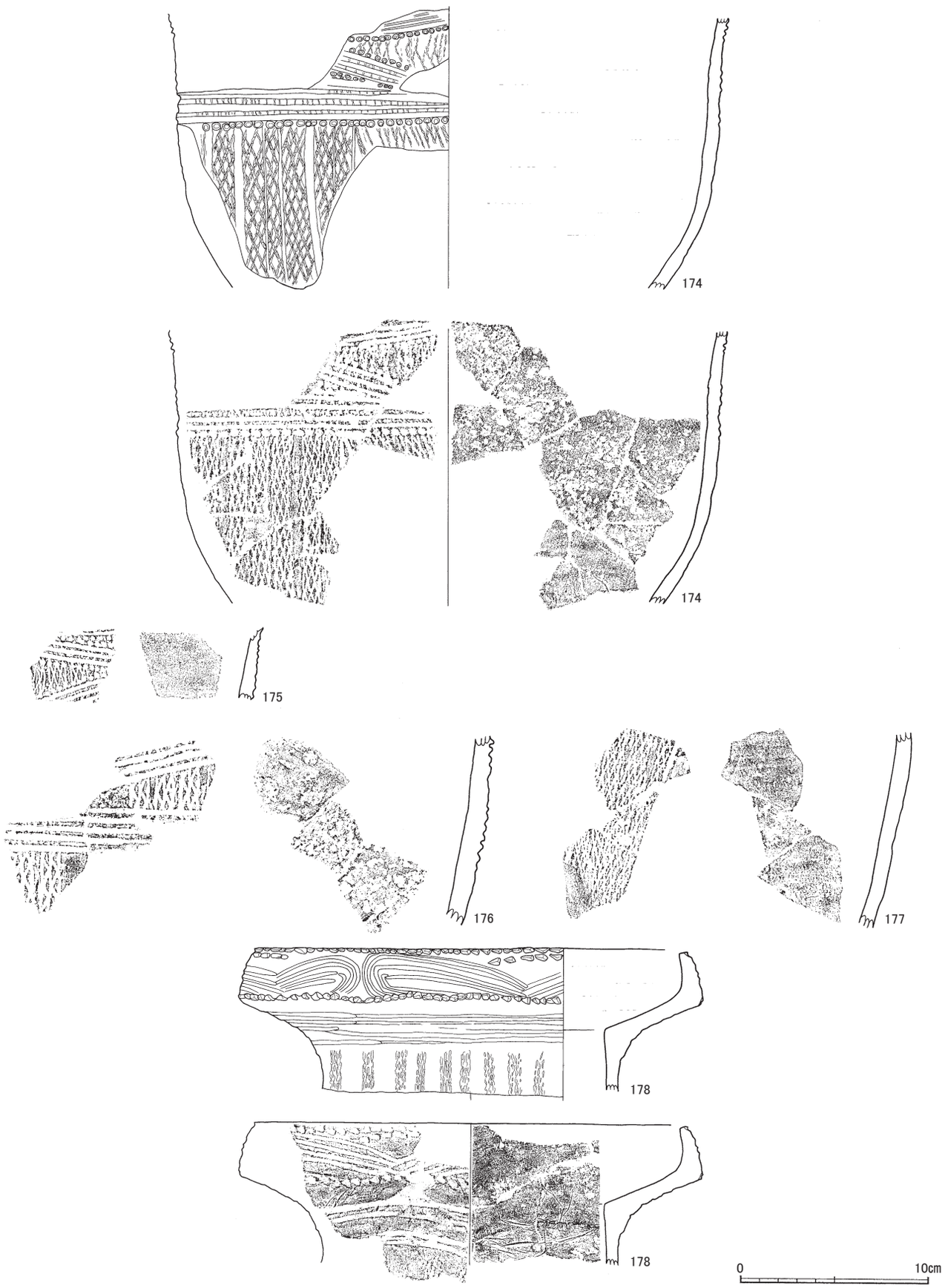
第45図　縄文時代早期土器６類・７－２類実測図



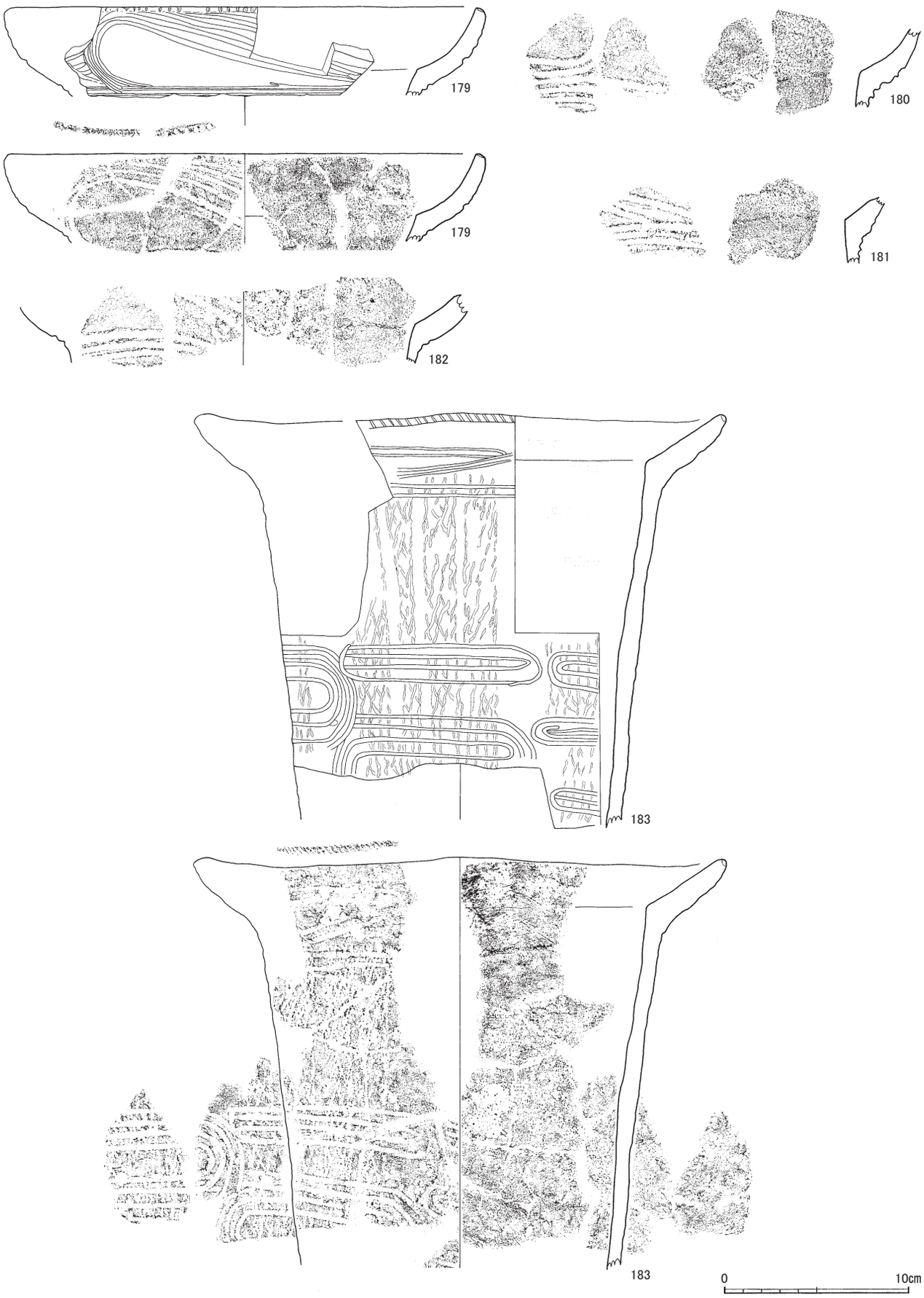
第46図　縄文時代早期土器７－２・３類実測図



第47図　縄文時代早期土器７－４類実測図



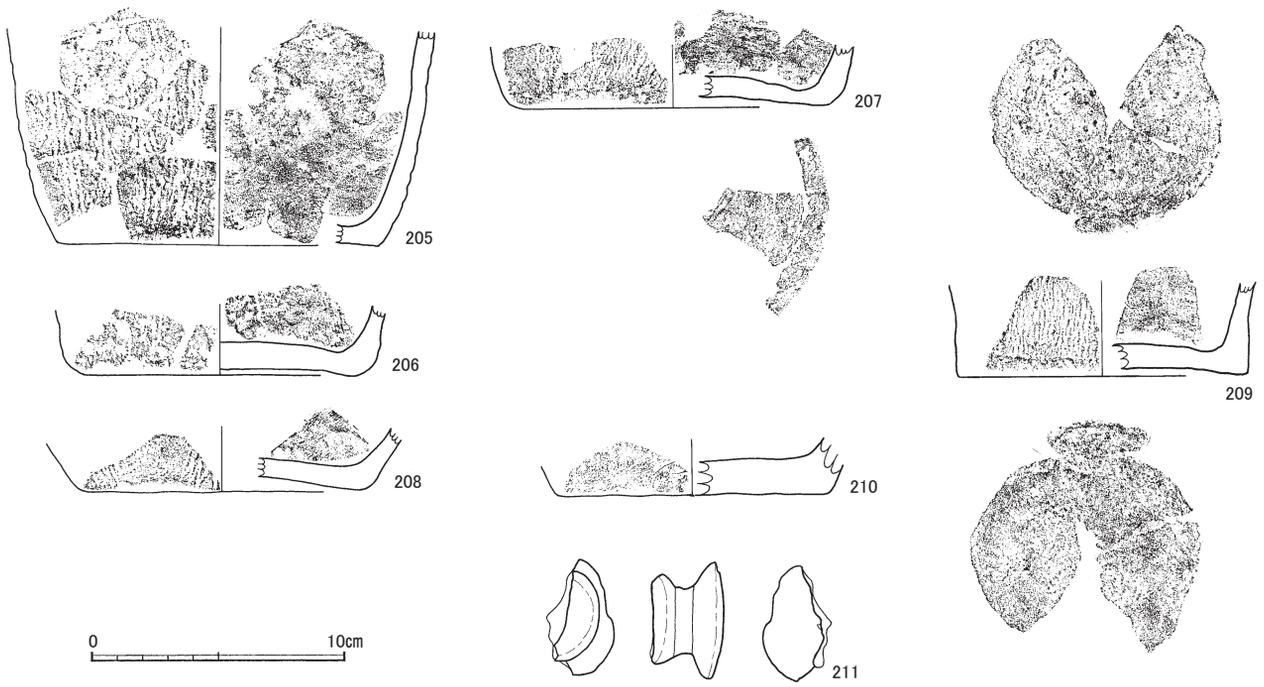
第48図　縄文時代早期土器７－４・５類実測図



第49図　縄文時代早期土器７－６・７類実測図

第50図　縄文時代早期土器７－７・８類実測図

第51図　縄文時代早期土器7－８・９類，７類胴部実測図



第52図　縄文時代早期土器７類底部・土製品実測図

185 ～ 187は，口縁部中位に２条の並行沈線が横走する。胴部には，１cm幅の網目撚糸文の文様帯の間隙を，0.5cm幅の無文帯が縦走する。

188・189は，口縁部の器形や施文，器厚等酷似し，同一個体の可能性が高い。尖端を呈する口唇部に刻みを施し，口縁部は無文である。口縁部幅が3.5cm程と他より幅が狭く，器厚も薄手である。

189は188に施文形態が似るが，器壁がやや厚い。口唇端部には，丁寧な刻みが施される。僅かに口縁部下端に沈線が１条ほど捉えられることから，本類に含めた。

190は口縁部上・中位に２条の沈線が巡らされ，187に似ることから，本類に含めた。胴部上端には，２条の並行沈線が施され，沈線間に僅かに網目撚糸文が捉えられる。

（ケ）7-9類　192・193

外面の器面調整が，192はナデ調整なのに対し，193は，内外面共に，貝殻条痕が無数に捉えられる。縄文晩期の土器の可能性もある。192は，口縁部の復元外径は，25.2cm程である。全体的な器形は7-8類に似る。器面調整が比較的雑で，凹凸が見られる。頸部周辺には，僅かに煤が付着する。

（コ）胴部　194 ～ 204

194 ～ 198は，縦位の網目撚糸文による施文帯と無文帯が，帯状に交互に施される。

199は，３条程の並行沈線が横位や斜位に施され，部分的に交錯・連結され，菱形状のモチーフが作出される。本資料は，土坑８号内出土遺物の１～３と文様形態や色調，器形等極めて類似性が高く，他に類似資料が確認されないことから，同一個体の可能性が高い。

201は，口縁部下位から胴部上半の資料であり，円形の文様の内側を網目撚糸文で埋める。202も，網目撚糸文の施文帯上に並行沈線による円形の文様が施される。

203・204は，２条の並行沈線により山形・菱形状の文様が構成され，網目撚糸文は捉えられない。202 ～ 204は，胎土の粒子が細かく質感が滑らかで，異質である。

（サ）底部　205 ～ 210

205 ～ 209には，外面に網目撚糸文帯及び無文帯が施される。205 ～ 208の器形が，底部から胴部中位にかけて，やや膨らみを呈するのに対して，209は底部から胴部中位にかけて直立する。何れも，底部外面が僅かに上げ底を呈する。7-1 ～ 7-8類の何れかに繋がる資料と判断される。

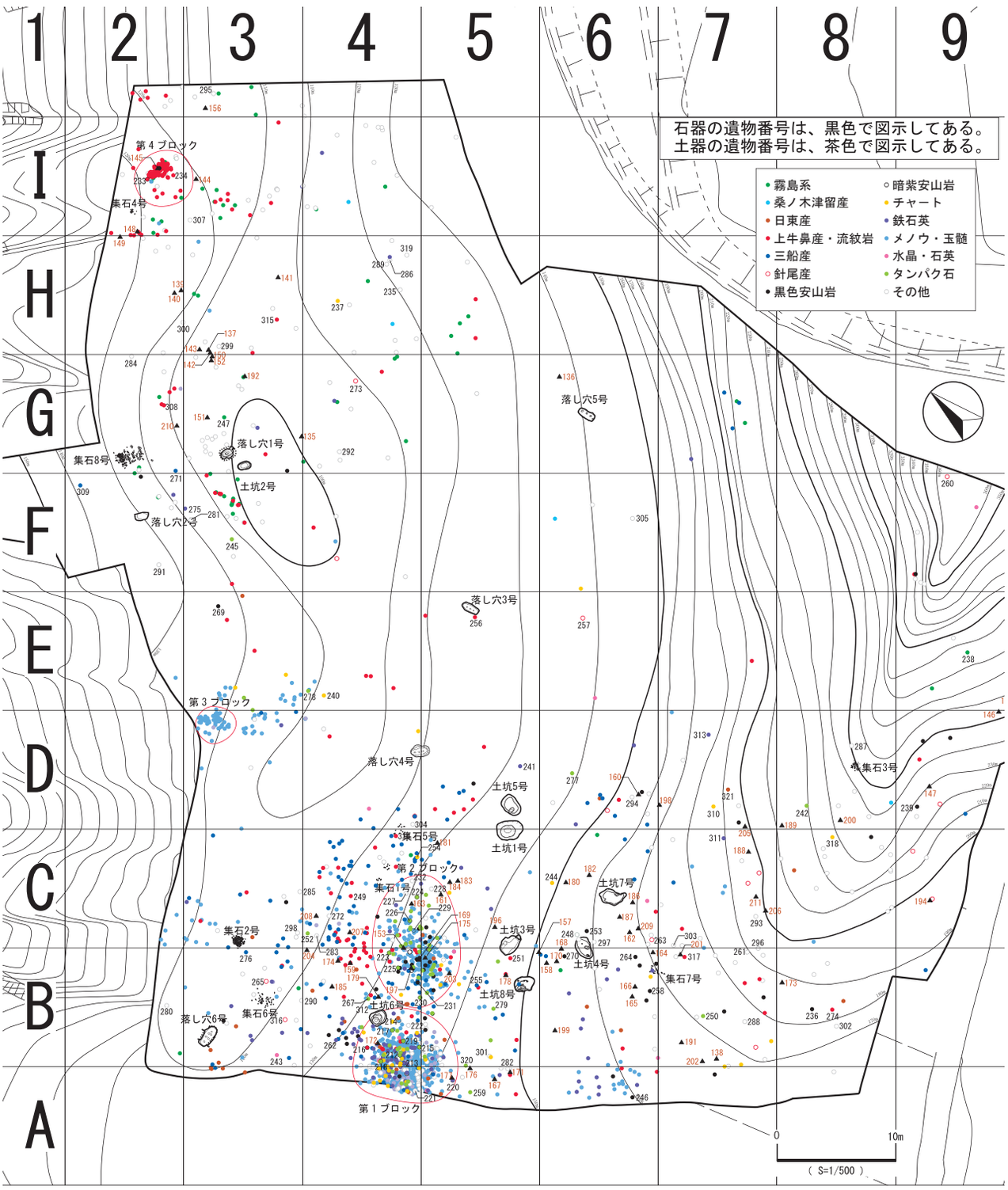
210は，胴部の残存が不良で施文は捉えられない。205 ～ 209と比べて，底部の器厚がやや厚い。

⑩　土製品　211

211は，半欠する耳栓状土製品である。多くの遺物が出土した７類に伴う可能性が高いと判断した。

（2）石器

縄文時代早期の石器は下の図に示すように，D～J-3～5区にかけて分布するグループとA～D-2～9区にかけて分布するグループに分かれ，更にA・B-4・5区に集中するブロックとB・C-4・5区に集中するブロックがある。同様にD-3区とI-2区にもそれぞれ密に集中するブロックが形成されていた。この項では，先にそれぞれのブロックの石器について述べ，次にブロック外で出土した石器について述べていきたい。なお，早期の土器は円筒条痕文土器，押型文土器，塞ノ神式土器等が出土しているが，個々の石器がそれぞれどの土器形式に帰属するかは出土状況等からは判断できないため，一括して扱うこととする。

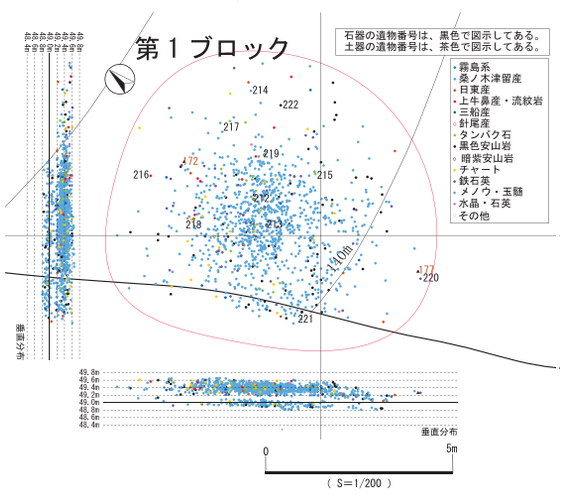


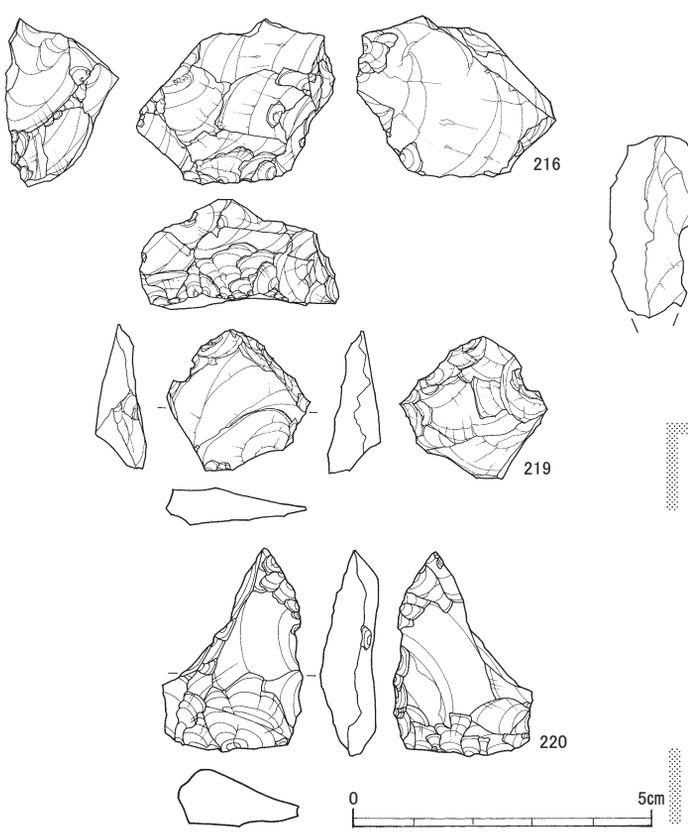
第53図　縄文時代早期石器出土状況図

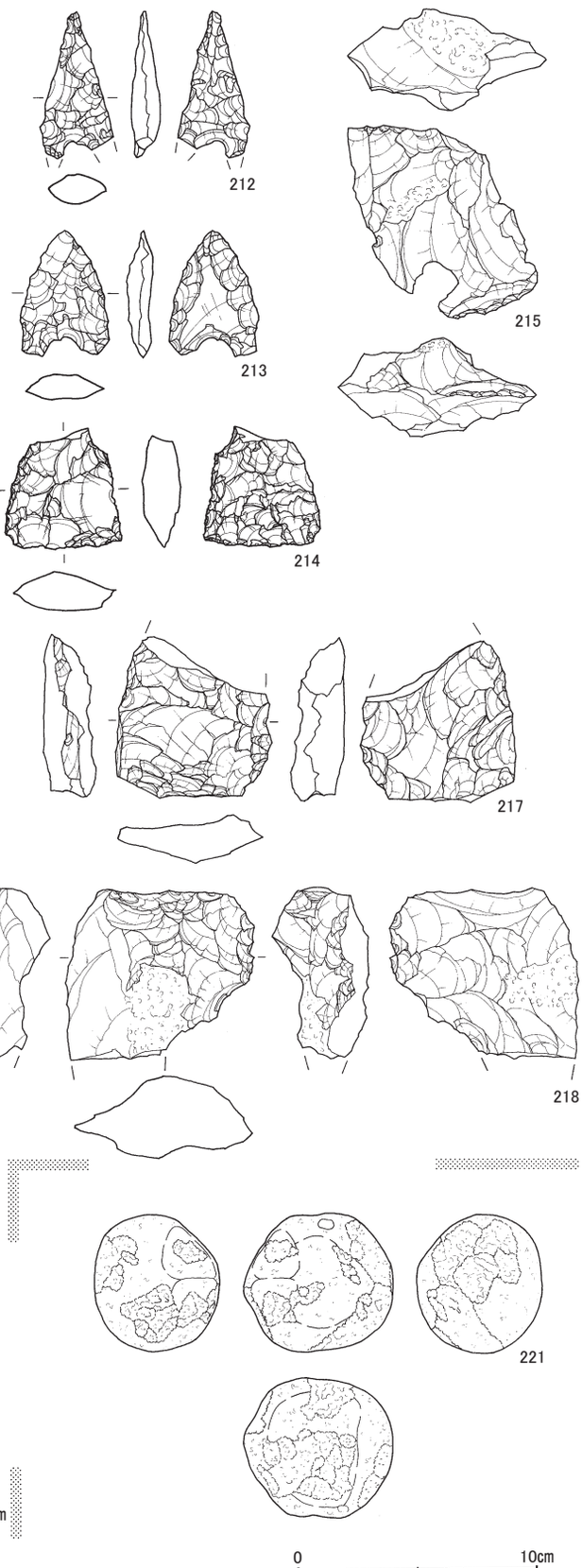
第１ブロック

このブロックはＡ・Ｂ－４・５区の交点を中心に集中するブロックで，南西の発掘範囲外にも広がるであろうと思われる分布状況である。

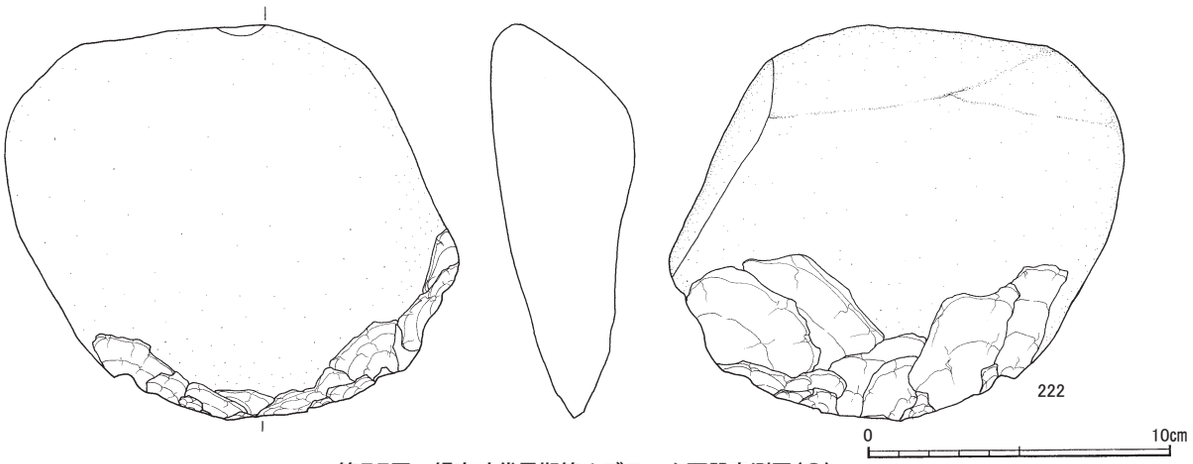
212は両脚を欠くものの均整のとれた石鏃である。タンパク石製である。213は玉髄の鱗状剥片を素材とするもので，裏面にその主剥離面を残す。裏面左上部に素材剥片のポジティブバルブがあり，それを除去し切れていないためややねじれが残っている。214は先端部を欠くものの，平坦剥離による器面調整で薄く作られた美麗な平基式石鏃である。220はメノウの不定形剥片を用いたもので，背面の平坦剥離による器面調整と裏面の周縁加工によって形成されているが，右側縁が仕上がっていな







第54図　縄文時代早期第１ブロック出土状況図・石器実測図（１）



第55図　縄文時代早期第１ブロック石器実測図（２）

いことや，裏面の素材剥片のポジティブバルブが除去し切れていない点を考えると，製作途中での欠損品ではないかと考えられる。

215はタンパク石の不定形剥片を用いた彫器である。小さな水晶を内包する空隙の多い剥片を用いており，その折断面を打面にしてグレィーヴーファシットが入る。また，下縁の飛び出した部分には裏面から急斜度の剥離が入り掻器としての刃部が作られている。

216は在地産の黒曜石を用いた掻器である。折断された分厚い剥片を素材としており，下縁と左側縁に急斜度の刃部が作られ，掻器特有のつぶれも見られる。刃部調整以外の調整剥離は見られない。

217 ～ 219はタンパク石の不定形剥片を素材とする小型両面調整石器で，平坦剥離による器面調整によって，図に示したような形態にそれぞれ仕上げてある。器形に斉一性は認められず，刃部も削器の刃部とはだいぶ異なる。特に，217の左側縁と基部（下縁）は素材剥片の折断面が残ったままであり，機能・用途が推定しがたい。218・219も同様である。

221は安山岩の円礫を用いた敲石であり，各所に敲打痕が残る。

222は安山岩の扁平な円礫を用いた礫器である。下縁にラフな剥離による刃部が付けられ，刃縁にはつぶれも観察できる。平栫式期の礫器によく見られる特徴である。礫面のままである上縁には敲打の痕跡は見られない。

第２ブロック

このブロックは，Ｂ・Ｃ－４・５区の交点を中心とし，第１ブロックに近接しており，その間は遺物の分布が薄い。中間の遺物の帰属については任意である。

223はタンパク石の不定形剥片を素材とする石鏃である。素材剥片の形状が分からなくなるほど，平坦剥離によって丁寧な器面調整が施されている。左側縁はやや鋸歯縁状になっており，右側縁とは異なっている。また，抉りが歪になっているため左右の脚の形状が異なっている。先端部を微かに欠いている。224と226はいわゆる石鉇の先端部を欠いたものか。平坦剥離による器面調整が表裏両面に施され，断面凸レンズ状に仕上げてある。ただ，224は両側縁が外弯しており，このような石鉇は類例がないように思われる。

225はつまみ部と下端を欠く縦型の石匙ではないかと考えられる。左右両側縁は削器様の刃部を呈し，断面凸レンズ状に作られている。上部はつまみを作り出す抉りの部分で折れており，体部下半も折れたようである。

229は玉髄の折れた不定形剥片を素材とする掻器で，下縁の飛び出した部分に弧状の刃部を作っている。このような特異な刃部形状の掻器は上野原遺跡に例があり，塞ノ神式期が共通していることから，この時期特有のものかと思われる。刃部のつぶれはさほど顕著ではない。

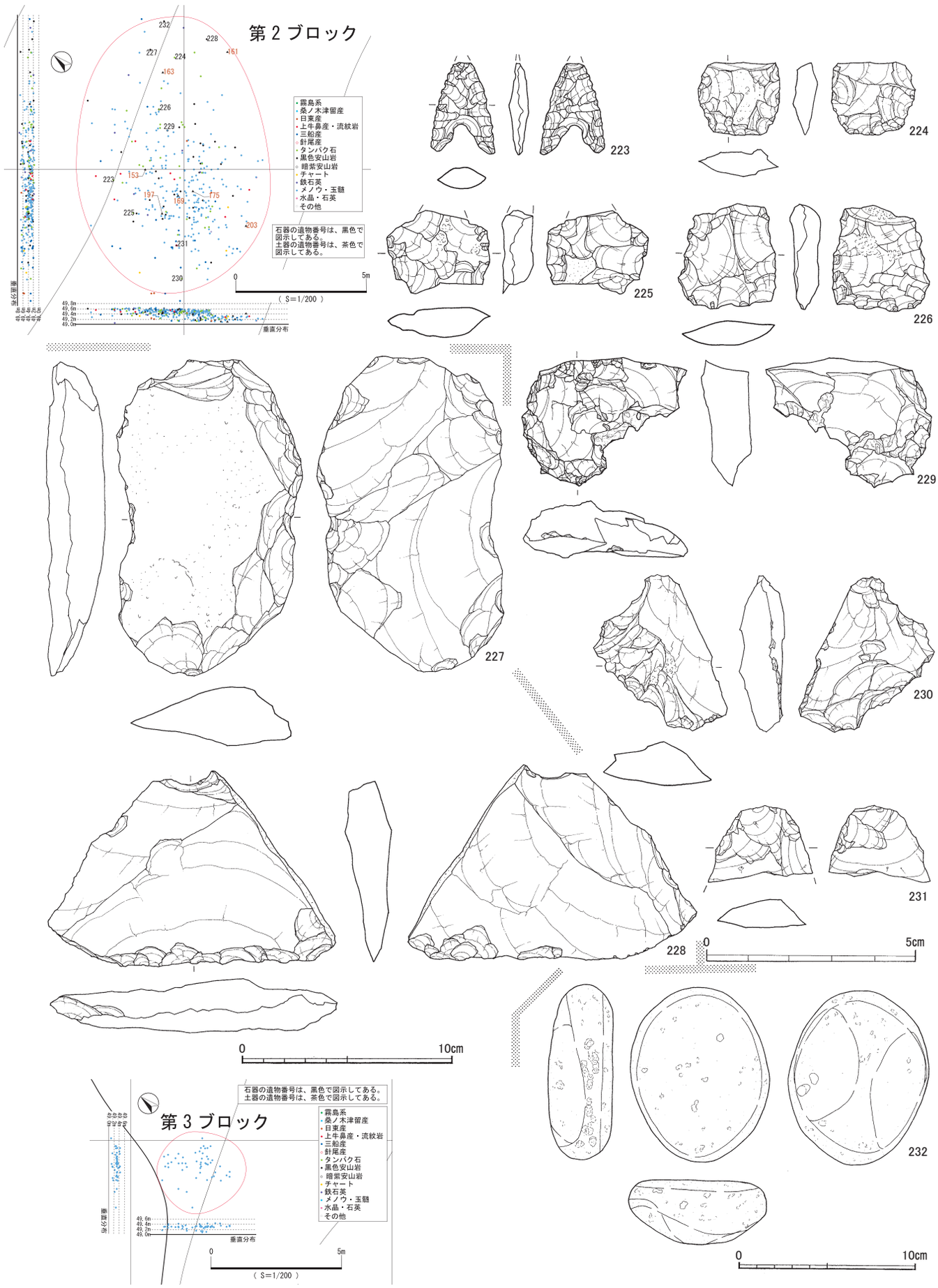
230はメノウの不定形剥片を用いた削器であり，左側縁に刃部加工が施され，下端は平坦剥離で調整されている。刃部加工よりは下端の調整の方が丁寧であり，刃部は素材の堅さや鋭さのためにさほど調整が必要でなかったかと思われる。背面上端の折れも意図的な調整か。

231は黒色安山岩製で，おそらくは縦長剥片ではなかったかと思われる。下半分を欠損しているが，背面頭部に平坦剥離の調整があり，腹面頭部左側にはバルブを除去するような調整剥離が入っている。どのような器種の製作途中であるか，想定できない。

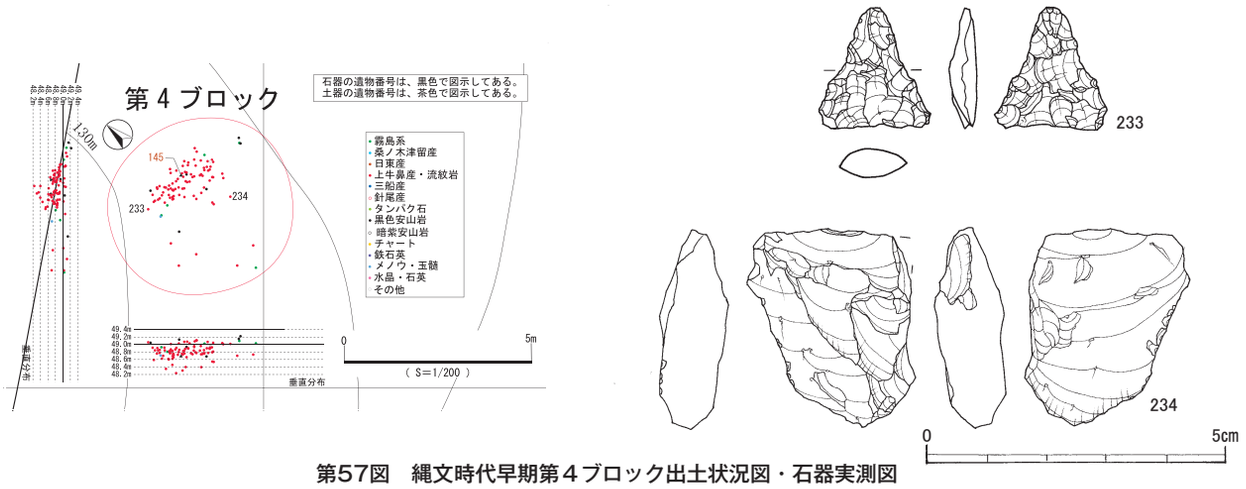
227は頁岩の礫皮面の残る剥片を利用した粗製削器である。腹面は素材剥片の主剥離面を残さないほど大きな平坦剥離で調整されており，ポジティブバルブも完全に除去されている。その部分の背面に刃部調整は栗が入り刃部を形成している。また，左側縁にも刃部が形成されている。228は安山岩の扁平な角礫を素材とする礫器で，柱状節理の発達した岩塊から剥落した礫を素材とする。下縁に刃部が作られ，三角に尖っていたであろう上縁は割れている。

第３ブロック

このブロックはD－３区にある小さなブロックであり，遺物量も多くない。遺物は砕片がほとんどで，232の安山岩の円礫を利用した磨石だけが図化できた。正面は非常に平滑になっており，使い込まれた印象を受ける。



第56図　縄文時代早期第２・３ブロック出土状況図・石器実測図



第57図　縄文時代早期第４ブロック出土状況図・石器実測図

第４ブロック

このブロックはI-2区で検出されたもので，やや密な集中を見せるが，遺物量はさほど多くない。

233は上牛鼻産の黒曜石を使っており，器面調整の平坦剥離がきれいに施され素材剥片の形状は分からない。先端はさほど鋭利ではなく，両側縁の調整も内弯気味で器体全体にもややねじれが見られる。

234も上牛鼻産の黒曜石製であり，頭部がはじけた不定形剥片である。左側縁には微細剥離痕が連続し，背面左上部の稜には使用痕であろうか磨痕が顕著である。

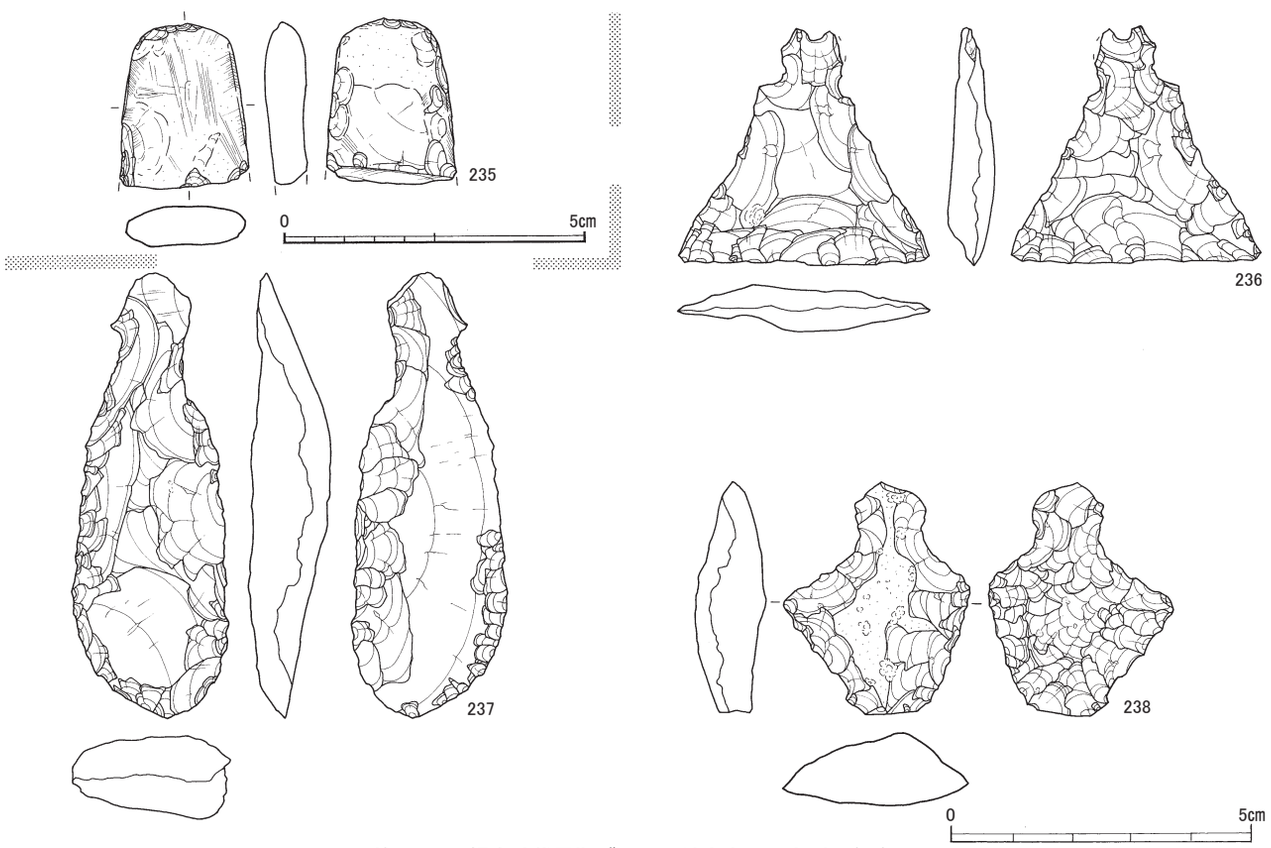
ブロック外の石器

磨製石斧

235は頁岩製の中型磨製石斧の破損品であろう。風化しているものの，全面が良く研磨され，器面調整剥離や敲打痕がほとんど残っていない。側面や頭部の研磨も丁寧である。使用中に破損し，ソケット内に残った頭部のみが遺跡内に持ち込まれたものか。

石匙

236は黒色安山岩製の上野原型石匙である。正面に礫皮面と素材剥片背面の剥離面を残し，裏面はポジティブバルブを完全に取り去っているため定かではないが，その形状からつまみ部分が素材剥片の打点であったようである。このことから，素材剥片は求心的な剥離を行う盤状石核から剥離されたものと推測できる。上野原型石匙



第58図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（１）

は，黒色安山岩製以外のものがほとんど見あたらないほど，この石材と強い相関があり，この236もそれに違わない。また，つまみ部分の頂部に抉りを入れ，三叉のつまみを作る例もこの236に止まらない。この236は器面調整が上手くいっていないために体部が凸レンズ状に仕上がっておらず，その点では他の上野原型との違いがある。特に正面は刃部からの調整剥離がほとんどが階段状剥離になっているし，右側縁からの調整剥離の一部も階段状剥離になって，器面がなめらかに仕上がっていない。そのため，右側縁の刃は波打ち，つまみを作る抉入も強く入れられなかったようで，つまみの形がやや歪である。さらに，左側縁が内弯しているのも器面調整の影響であろう。ただ，下縁の刃部調整は非常にきれいで見事な直線の刃部に仕上がっている。

237はチャートの横長剥片を用いた縦型の石匙である。これに用いられた素材剥片も剥離面の構成等を考えると求心的な目的剥片剥離を行う盤状石核から得られたものであったと考えられる。この石匙は器面調整はほとんど施されていないが，素材剥片の打面部とポジティブバルブの除去には相当こだわったようで，この部分に調整剥離が集中している。にもかかわらず，打面部分は何とか除去できても，バルブの除去には成功していない。そのために，右側縁は大きく波打ち，刃部調整もままならなかったようである。それに比べ，弧状をなす下縁と左側縁はきれいな刃部が形成されている。また，つまみを作り出す抉入も強く入れていない。これは，素材剥片のこの部分が極端に薄かったためであろうか。

238は黒曜石の礫皮面が残る剥片を用いた石匙で体部が三角形をなすものであろう。腹面が平坦剥離によって見事に調整されているため，素材剥片の形状は分からない。背面の器面調整も丁寧で，礫皮面を除去していないが，器体はほぼ凸レンズ状をなす。刃部調整も上手で左右両側縁とも直線的な刃部に仕上がっている。その両側縁で形づくられる体部は左右非対称で，意図的に左側縁を突出させており，特異な形状である。下端を若干欠損している。

石鏃

239は凸基式の石鏃でこの遺跡では1例だけである。黒色安山岩の薄い剥片を用いており，器面調整が上手で，特に上半分は見事な斜行平行剥離が施されており，やや外弯する両側縁もきれいな対称形になっている。240は平基式で，これも１点だけである。チャート製で平坦剥離による器面調整で薄く作ってあり，先端を僅かに欠く。241 ～ 243は浅い凹基式で，それぞれ鉄石英，熱変成を受けたシルト岩，石英でできている。242が器面調整が上手く行かず分厚い作りになっているが，他の2点は薄く仕上げてある。244から265は凹基式のもので，数はこれが一番多い。使われている石材も在地産黒曜石，西北九州産黒曜石，黒色安山岩，タンパク石，チャート，頁岩，鉄石英と多岐にわたり，基部の抉りの入れ方も多様である。なお，この中に，鋸歯縁鏃（250）と剥片鏃（256）が1点ずつ含まれており，多様性に富む。262・264・265は製作途中での破損品であると思われる。265は基部の抉りを入れる小剥離が残る。266・267はラフな剥離によって器面調整を行ういわゆる石鉇型の石鏃である。266は鉄石英, 267は玉髄製であり, 266は未製品, 267は製作途中の破損品である。

削器

268はメノウの不定形剥片素材の削器であり，右側縁から下縁にかけて刃部が作られる。下端が僅かにかけており，本来は鋭利な尖端が作られたものか。270は黒色安山岩の頭部がはじけた不定形剥片を用いて，左側縁と下縁に刃部が作られている。272は頁岩の礫皮面の残る大きな剥片を用いた粗製の削器である。素材剥片を折断し，その折断面から，腹面左側を裁ち切る様な縦の剥離を加えてフェザーエンドの縁辺を作り出し，背面への刃部調整を行って刃部を形成している。また，右側縁下半から下縁にかけても刃部調整を行っており，基部以外のほぼ全周が刃部となる。縦の裁断する剥離の頂部はつぶれており，かつその剥離の縁辺をも刃部とするという様な彫器と同じ特徴を持つが，果たしてこの特徴を捉えて大型の彫器として分類すべきであろうか。対象物を想定しにくいので，削器として分類しておく。273は西北九州産黒曜石の不定形剥片を素材とするもので，左側縁に細かな刃部調整を加えている。274は在地産黒曜石の不定形剥片を素材とするもので，下縁に両刃の刃部が付く。背面の器面調整に見える剥離は，素材剥片が剥離された際の頭部の弾けであり，加工は刃部加工のみであり，早期後葉段階の特徴的作り方である。

掻器

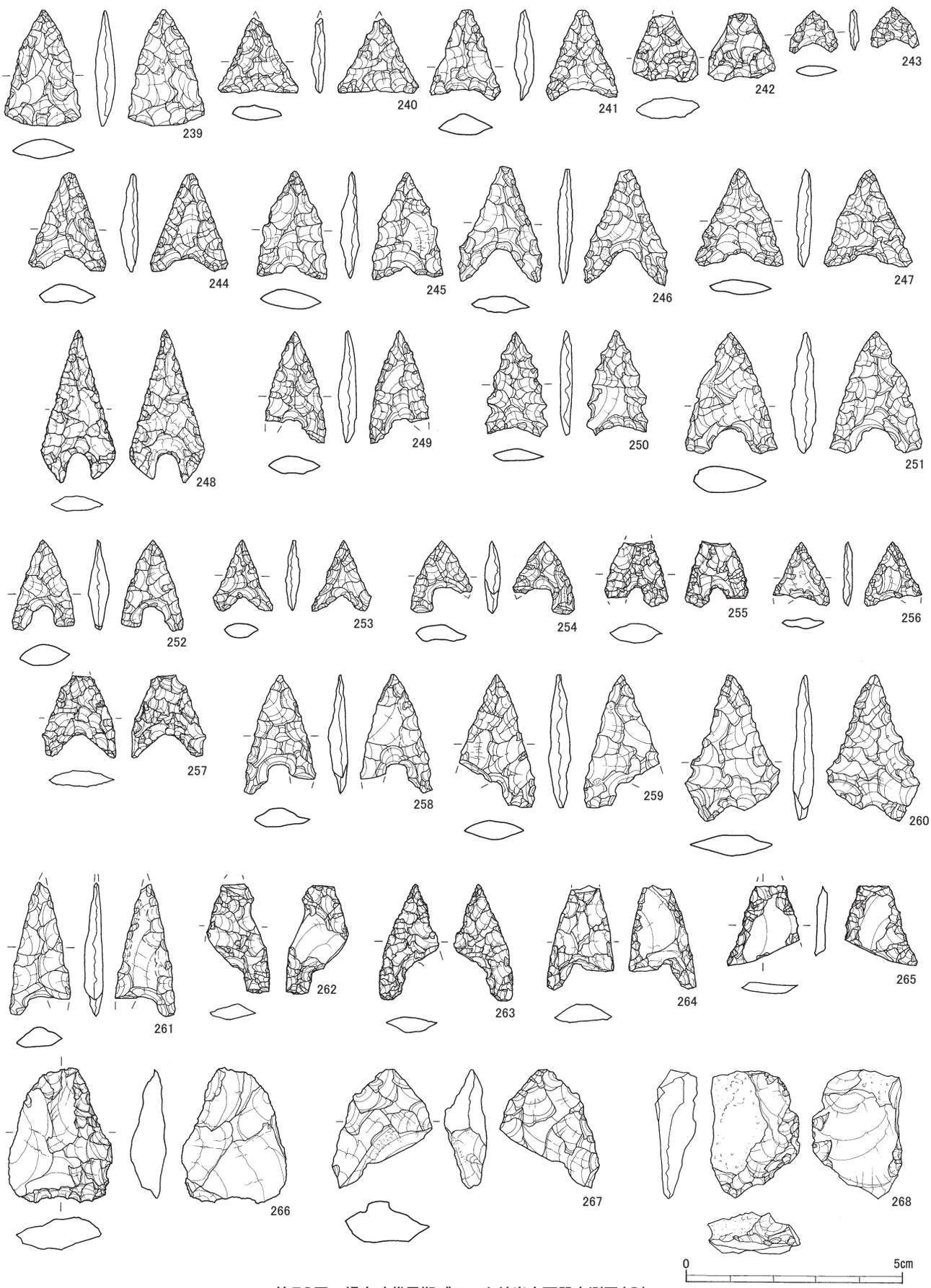
269は黒色安山岩の礫皮面が残る分厚い剥片を素材とする掻器で，下縁に急斜度の刃部が付けてある。下縁右側が欠損しており，本来は左右対称となる外弯する刃部を持っていたと思われる。271は在地産黒曜石の分厚い鱗状剥片を素材とする拇指状掻器である。下縁に急斜度の刃部が付き，刃には掻器特有のつぶれが見られる。

楔形石器

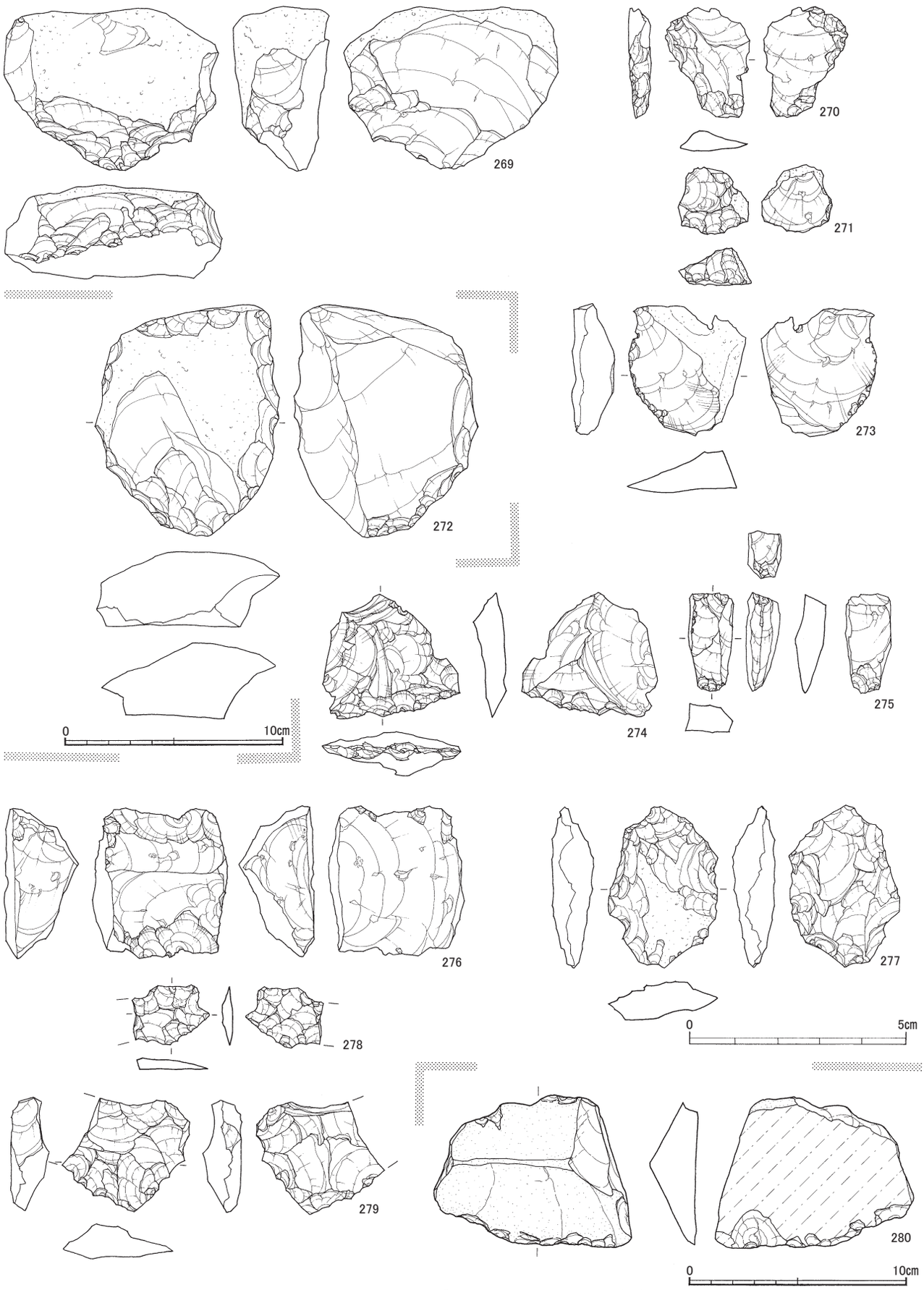
275は鉄石英製であり，細石刃剥離に似た裁断面を持つ。図化していないが，その反対面は両極打法による裁断面であり，下端のつぶれもあることから楔形石器に分類する。276は在地産黒曜石の折断された縦長剥片を素材とするもので，折面の反対側は裁断面であり，上下両縁に対向する剥離が連続する。

小型両面調整石器

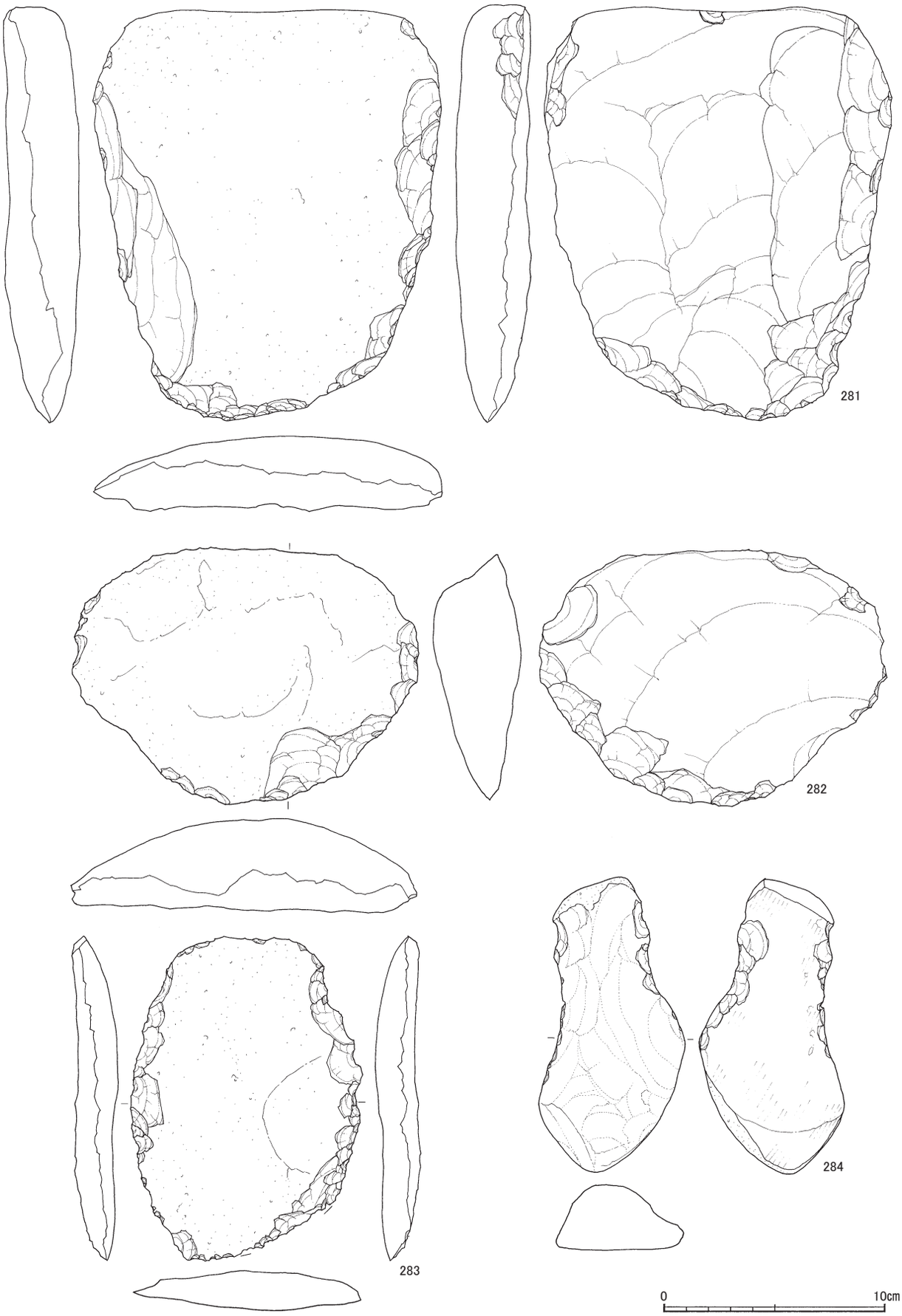
277はタンパク石の不定形剥片素材で，両面を平坦剥離によって器面調整し，断面凸レンズ状に作り，平面形



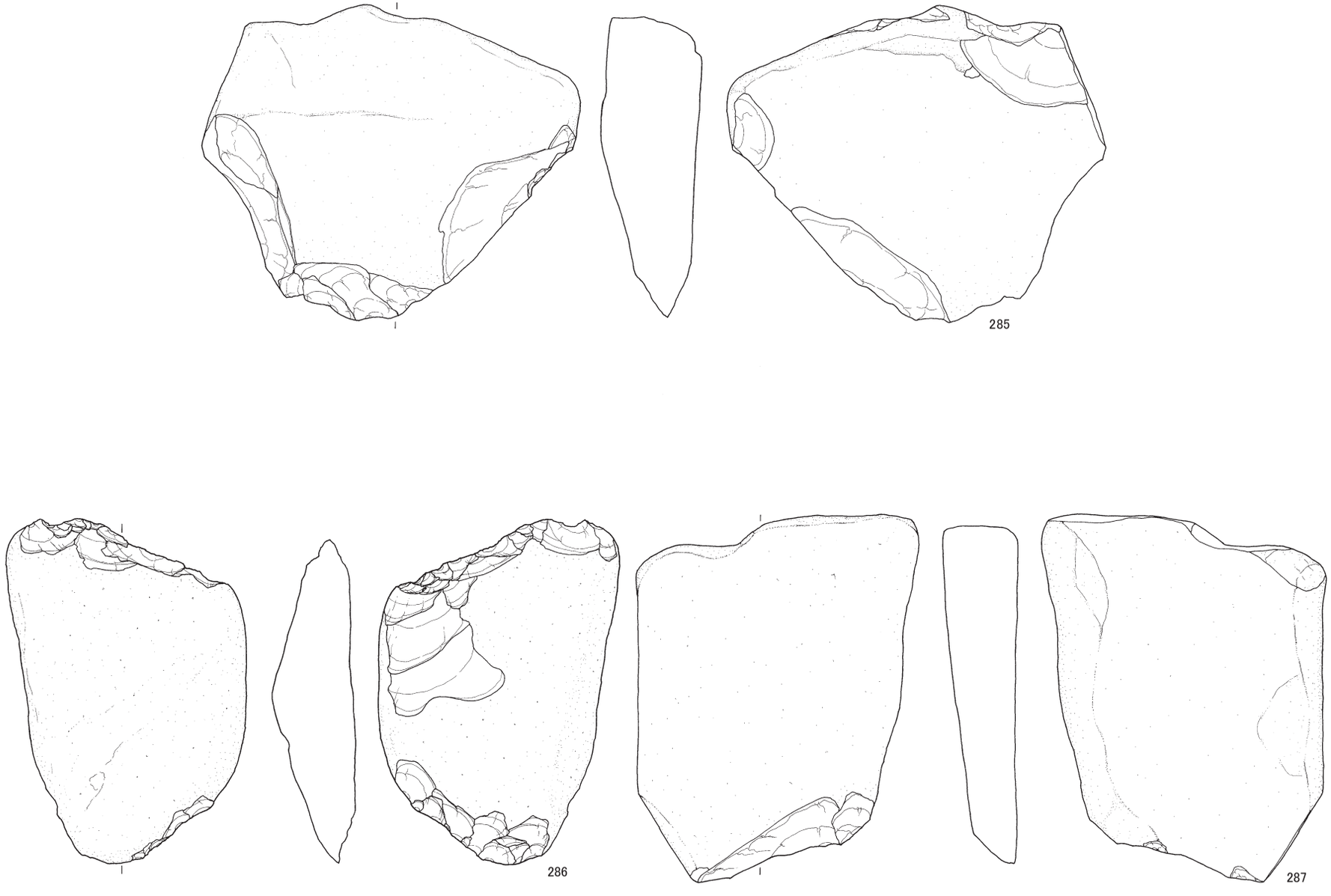
第59図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（2）



第60図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（3）



第61図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（4）



第62図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（5）

は楕円形を呈する。周縁は削器等の刃部とは言い難い調整である。279も同様で，表裏両面を平坦剥離によって器面調整しているものの，周縁が刃部とは言い難い作りである。

異形石器

278はタンパク石を素材としており，平坦剥離によって極めて薄く作ってある。その平面形状から，異形石器の叉状部もしくは体部から尾部にかけての破片であろうと思われる。それは，折れている部分はノッチ状に窄まり，先端にもノッチが入り叉状になっていることである。ただし，通常の異形石器は黒色安山岩製のものが多く，タンパク石のものは類例がない。上野原型石匙と同様に異形石器も黒色安山岩と強い相関があり，異例ともいえる例である。

礫器

280から294は礫器である。使われている石材は安山岩がほとんどであり，280が熱変成を受けたシルト岩，281が頁岩で，この2点だけが異なった石材が用いられている。

280は亜角礫が摂理面で割れたものを用いており，その上下両縁にラフな剥離による刃部が付けられる。刃縁には強い摩耗が観察できる。

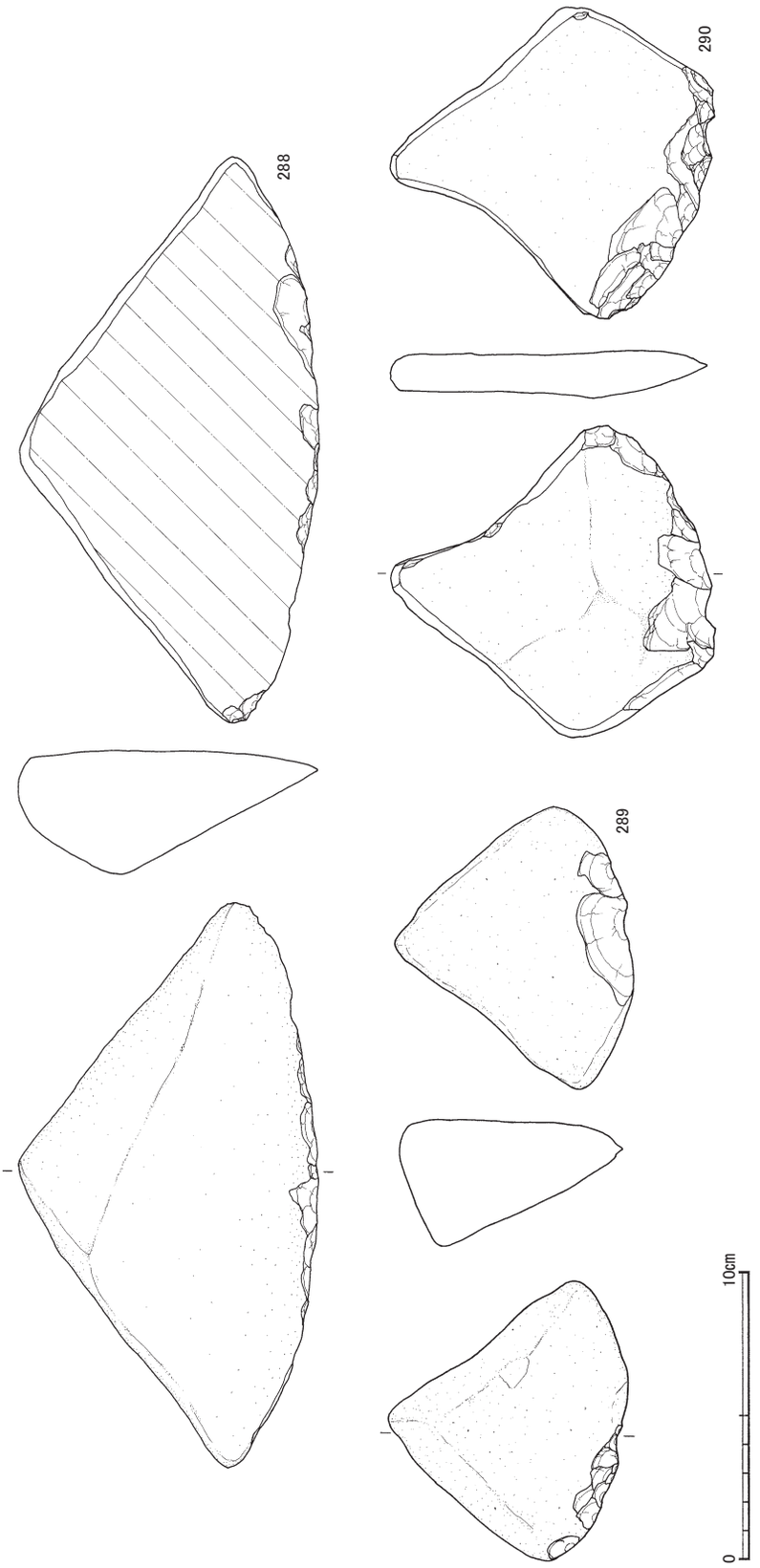
281は頁岩の大型剥片を素材とするものであり，その三縁辺にラフな剥離の刃部が作られる。刃縁は全体的に摩耗しているが，摩耗が見られない個所もあり，摩耗が使用によって付く可能性を示唆している。重量が1.2kgにもなるが，着柄の痕跡は観察できない。

282 ～ 294はすべて安山岩であり，柱状節理から剥落した角礫か川床等から採集したであろう円礫，亜円礫を素材とする。282は略三角形を呈し，底辺を除く二辺に刃部が作られており，刃縁の摩耗はさほど顕著ではない。283は楕円形を呈し，ほぼ全周に刃部が作られており，刃縁の摩耗は観察できない。

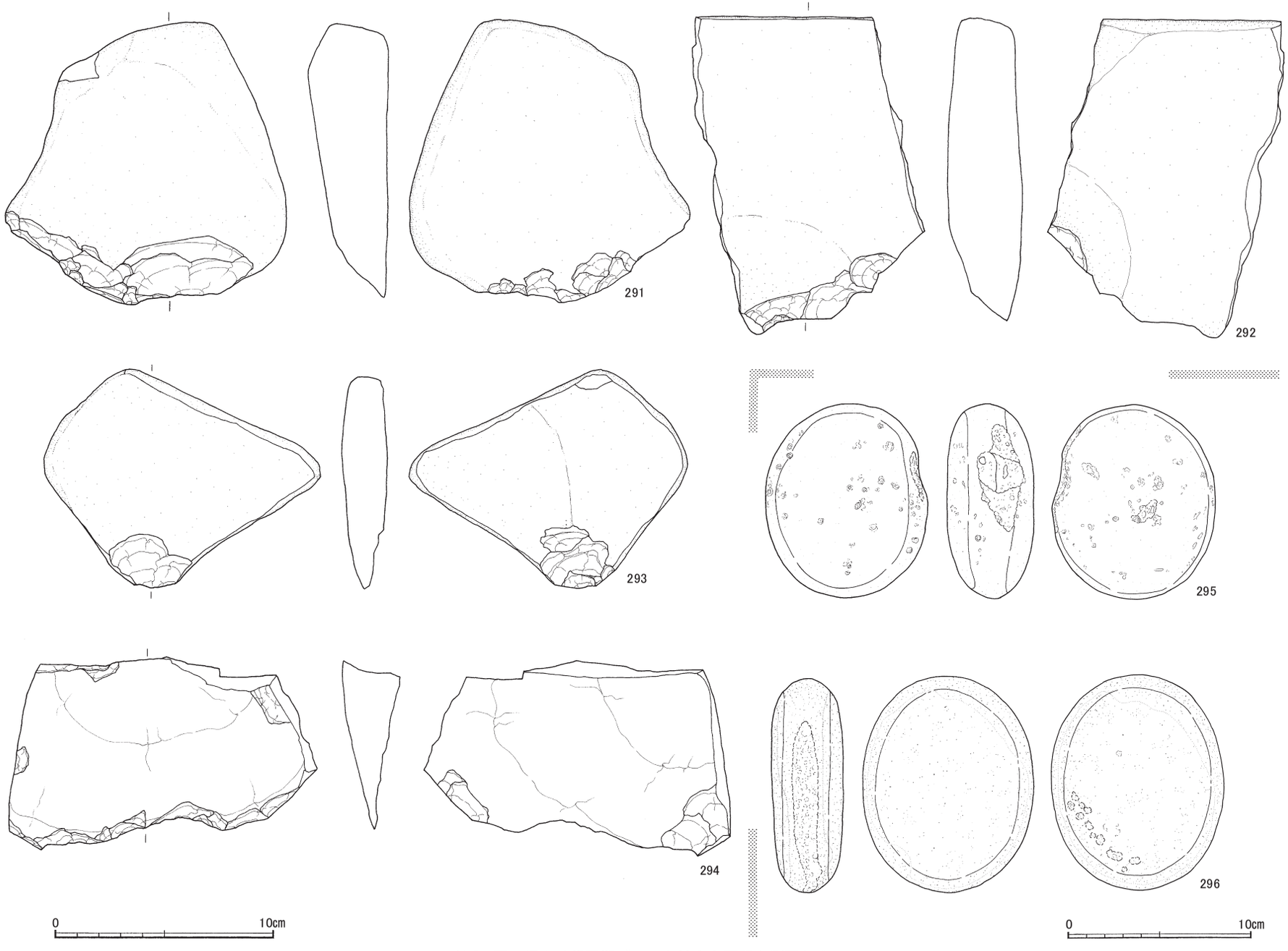
284は断面三角形の棒状の礫であり，側縁に敲打状の小剥離が残る。285は略三角形を呈し底辺を除く二辺にラフな交互剥離があり，刃縁の摩耗は観察できない。

286は上下両縁に刃部が作られ，刃縁は若干摩耗しているようである。287は下端に2枚の剥離で刃部が作られており，その左右両端に強い摩耗が見られる。

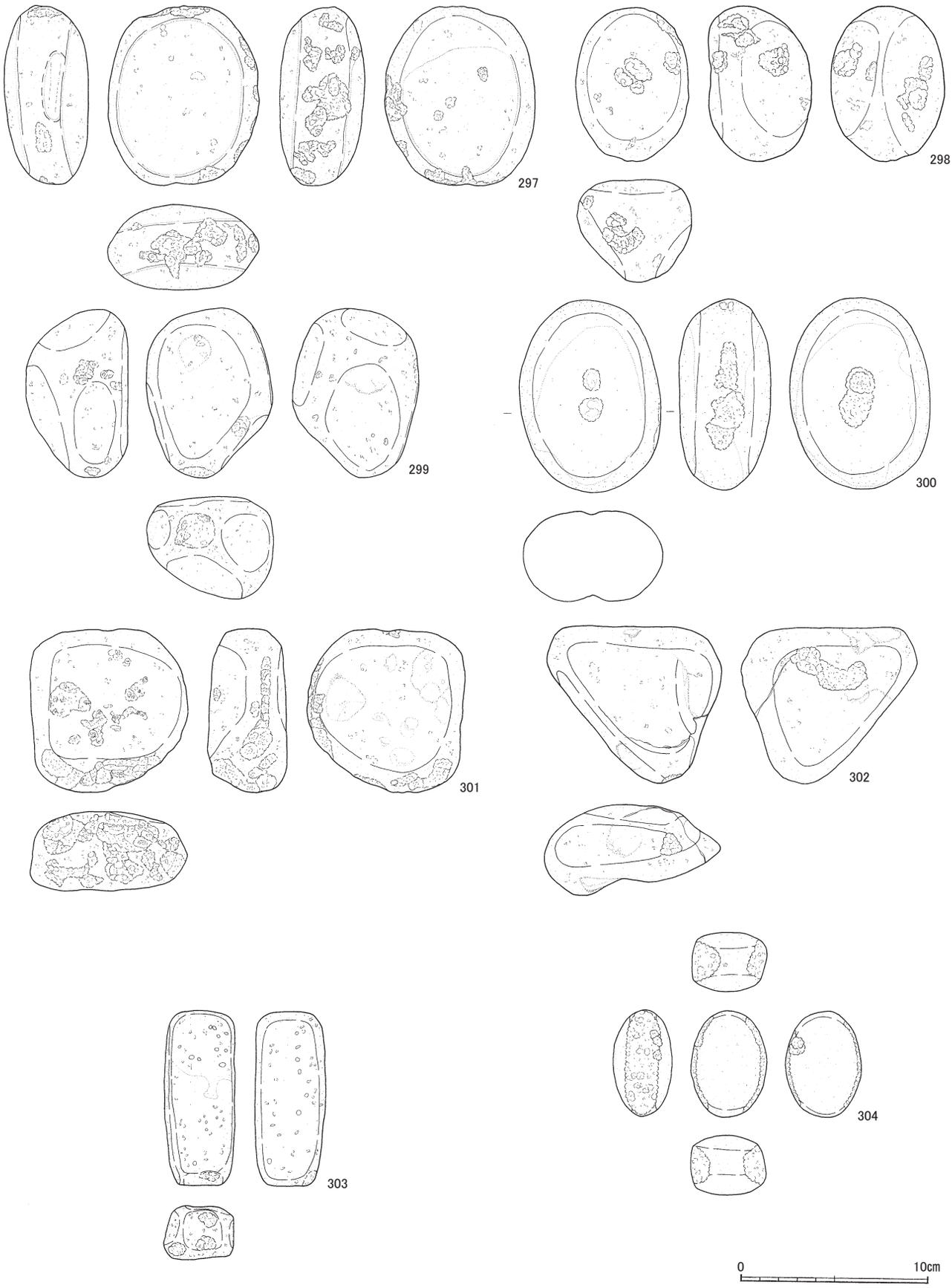
288は略三角形を呈し，その底辺に敲打状の小剥離が見られる。これは刃部加工をせ



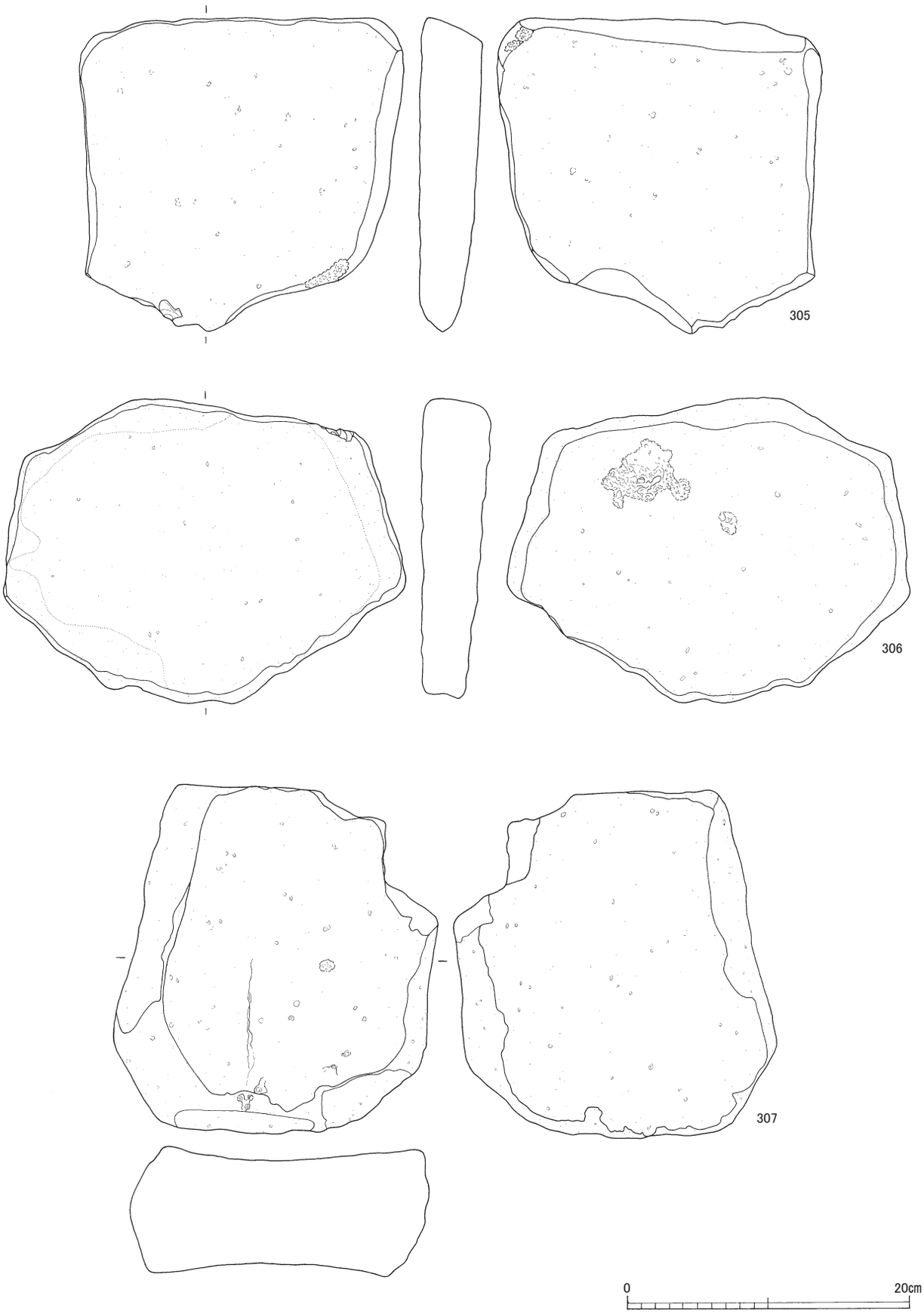
第63図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（6）



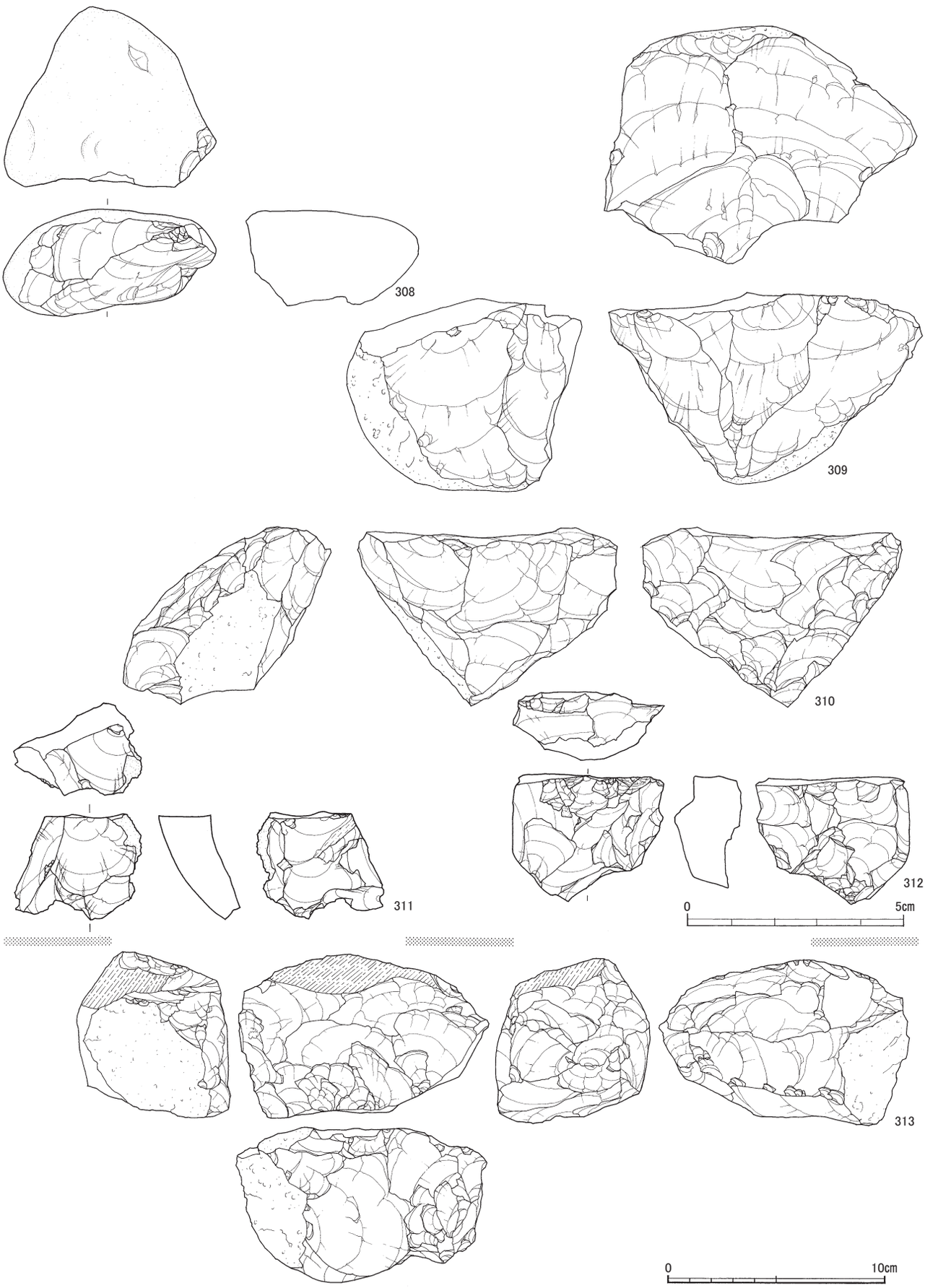
第64図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（7）



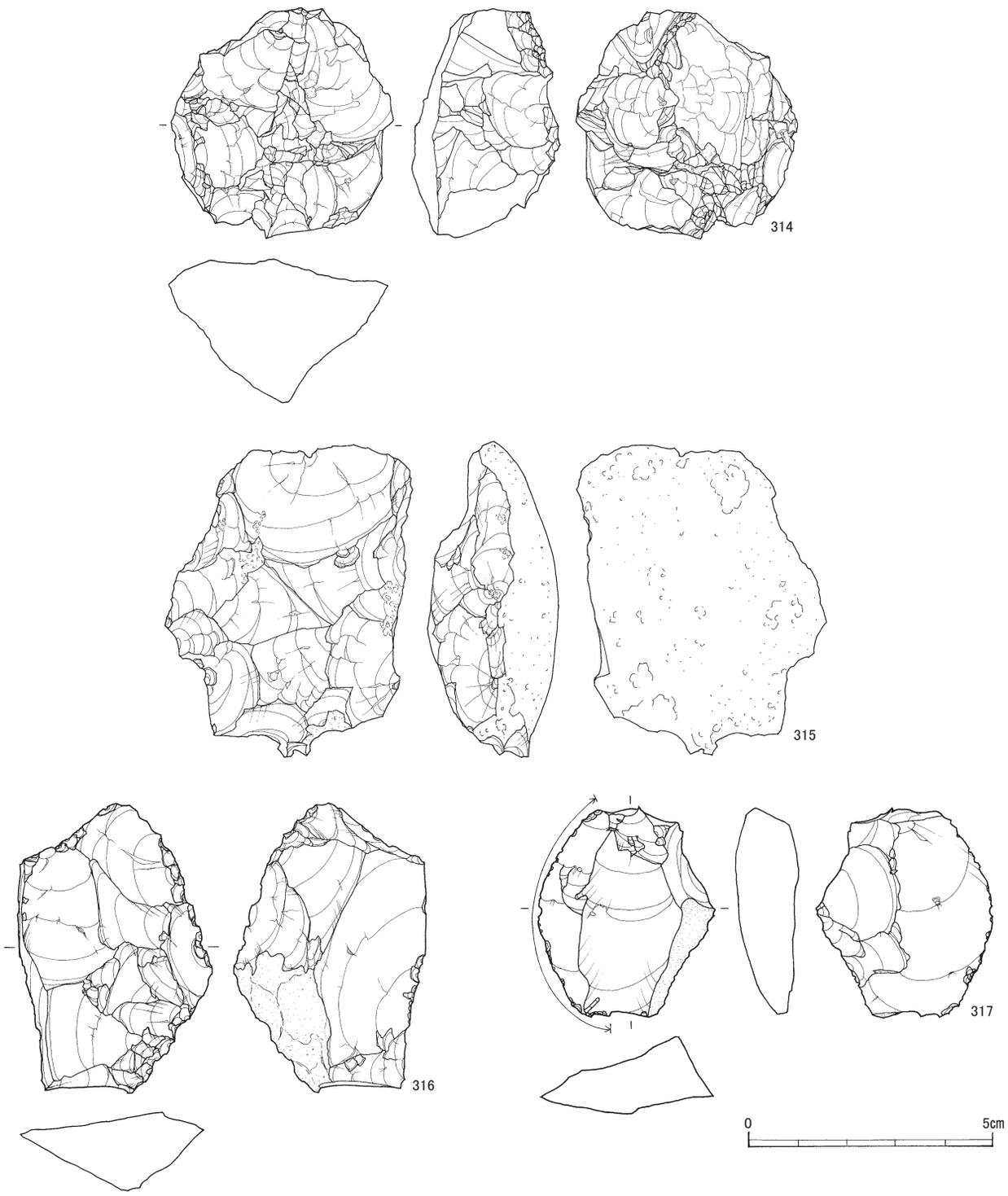
第65図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（8）



第66図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（9）



第67図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（10）



第68図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（11）

ずとも素材礫の縁辺が刃として利用可能であり，使用によってこのような小剥離が生じたものか。

289も略三角形の底辺に刃部が付くもので，刃部の摩耗が強い。290は略方形であり，その一辺に削器様の刃部が付けてあり，他の礫器にはない鋭さである。しかし，その刃縁も摩耗しており，その様相は他の礫器と変わらない。291・292・295も290と同様な特徴を持つ。293は略方形の頂点の一つに刃部が作られており，他の礫器とは異なっている。しかし，刃縁が強く摩耗しており，この点では他の礫器と同様である。

磨石・敲石・凹石

295 ～ 304は磨石・敲石等である。安山岩や砂岩の円礫，亜円礫を用い，平滑な擦り面や敲打痕を持つ。303・304は小型であり，石器製作用の敲石である。

石皿

305 ～ 307は安山岩の柱状節理から剥落した大型の岩

塊を利用した平型の石皿で，使用による凹みはさほど強くない。307は素材の形状から来る断面形である。

石核

308は上牛鼻産黒曜石の石核で，扁平な礫の一端を小さく打ち欠いて打面を作り，そこから縦に剥ぎ取ろうとしたけれども，砕けてしまい，以後の剥片剥離を断念したものの様である。正面に示した剥離面はその砕けた剥離である。

309は三船産黒曜石の石核で，礫の分割面を打面とし，寸詰まりの縦長剥片が目的剥片となる。しかしながら，今まで見てきたどの器種にもこのような剥片から作られた製品は見あたらない。細かな打面調整や頭部調整は見られない。

310はチャートの石核であり，正面からは寸詰まりの縦長剥片を生産し，背面は求心的な剥片剥離を行うものである。正面の剥片剥離が進行すると両面ともに求心的な剥片剥離となる円盤状石核になると思われる。

311は鉄石英の厚手の剥片素材であり，方形もしくは鱗状剥片を目的剥片とする石核である。正面を打面として左側面にも剥離がされており，横長で断面台形の剥片生産もなされている。

312は玉髄の剥片素材の石核で，求心的な剥片剥離が進行している。得られる剥片は小さいものであり，おそらく石鏃等に利用されるものか。

313は鉄石英の大きな礫から作られた母核であり，石核整形が終わった段階のようである。正面下縁の稜が丁寧に整形されており，おそらくここがファーストスポールになるものであり，この稜から打面作出のための加撃が加わるのであろうと思われる。

314は上牛鼻産黒曜石の礫素材の石核で，目的剥片剥離が進行して盤状石核になりつつある。裏面の稜からの剥片剥離がそれを物語る。

315は上牛鼻産黒曜石の盤状石核である。求心的な剥離が行われ平たい不定形剥片が得られたであろうと思われる。

316は西北九州，針尾島産黒曜石の剥片素材の石核である。薄い不定形剥片を目的剥片とするものの様で，求心的な剥片剥離が進行している。

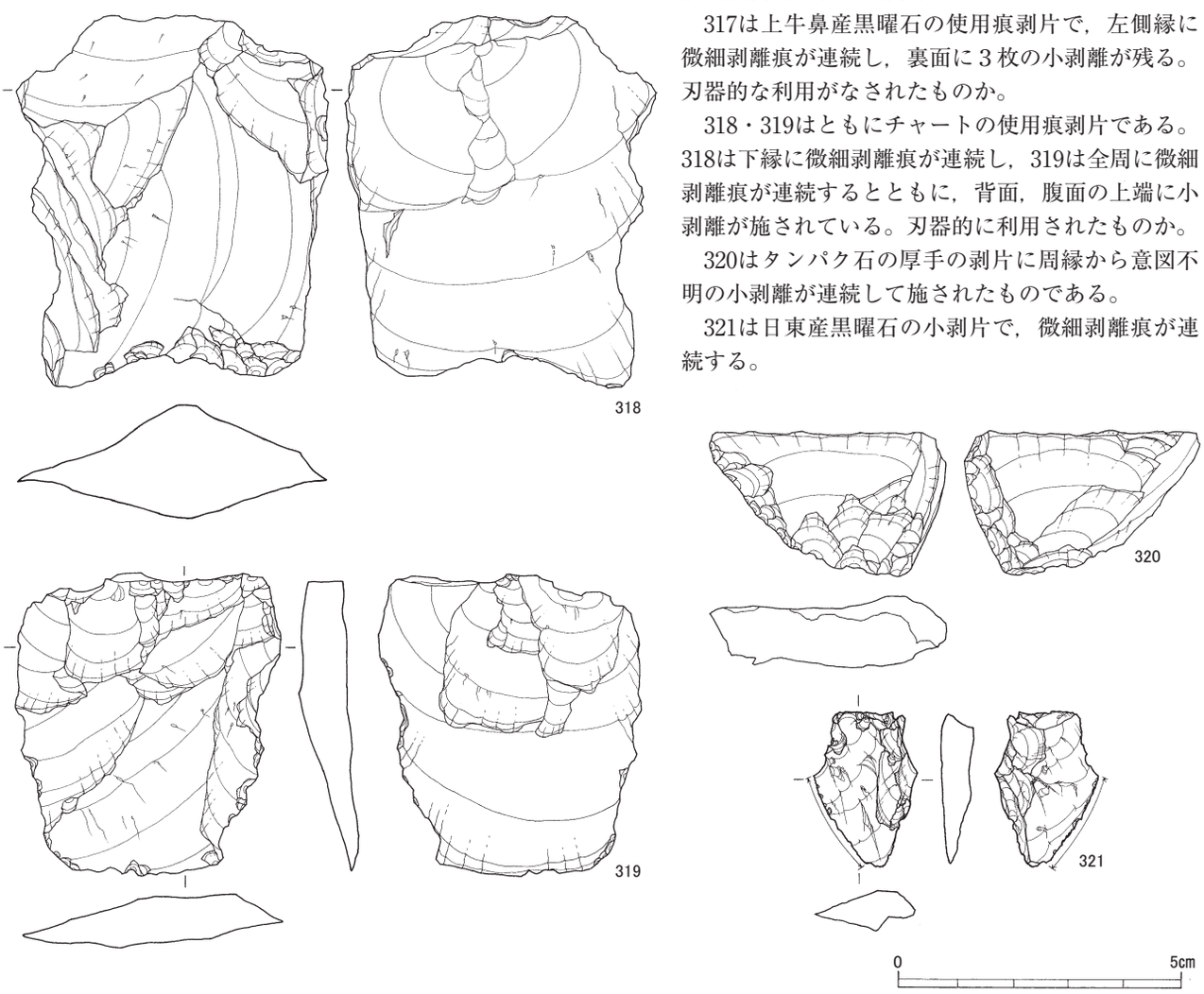
使用痕剥片・加工痕剥片

317は上牛鼻産黒曜石の使用痕剥片で，左側縁に微細剥離痕が連続し，裏面に３枚の小剥離が残る。刃器的な利用がなされたものか。

318・319はともにチャートの使用痕剥片である。318は下縁に微細剥離痕が連続し，319は全周に微細剥離痕が連続するとともに，背面，腹面の上端に小剥離が施されている。刃器的に利用されたものか。

320はタンパク石の厚手の剥片に周縁から意図不明の小剥離が連続して施されたものである。

321は日東産黒曜石の小剥片で，微細剥離痕が連続する。



第69図　縄文時代早期ブロック外出土石器実測図（12）

第28表　縄文時代早期土器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土				焼成	備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他		
40	135	746	G-4	Ⅳ	深鉢	1	胴部	外：貝殻条痕文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	志風頭。 24294・24991と接合。
	136	4290	G-6	Ⅱa	深鉢	1	胴部	外：貝殻条痕文 内：ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	手向山・押型文。 5079他と接合
41	137	811	G-3	Ⅳ	深鉢	2	口縁部	外：口唇部刻目・口縁上位貝殻刺突 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	明黄褐色 Hue10YR7/6	22.4	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	煤付着
	138	25979	B-7	Ⅳ	深鉢	2	口縁部～胴部	外：口唇部刻み・口縁部上位貝殻刺突文 下位貝殻押し引き文，胴部貝殻押し引き文 内：工具ナデもしくはケズリ後ナデ	橙色 Hue6/6 7.5YR	橙色 Hue6/6 7.5YR	17.4	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
42	139	652	H-2	Ⅳ	深鉢	3	胴部	外：山形押型文 内：ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	140	23927	H-2	Ⅳ	深鉢	3	胴部	外：山形押型文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
43	141	698	H-3	Ⅳ	深鉢	4	口縁部～胴部	外：変形撚糸文 内：ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	赤褐色 Hue5YR4/6	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	695・5146と接合。
	142	666	H-3	Ⅳ	深鉢	4	口縁部	外：変形撚糸文 内：ナデ	褐色 Hue7.5YR4/6	明赤褐色 Hue5YR4/6	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	143	664	H-3	Ⅳ	深鉢	4	胴部	外：変形撚糸文 内：ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/6	赤褐色 Hue5YR4/6	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	144	575	I-3	Ⅳ	深鉢	4	胴部	外：変形撚糸文 内：ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	暗灰黄 Hue2.5Y5/2	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	145	24939	I-2	Ⅳ	深鉢	4	胴部	外：変形撚糸文 内：ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	明黄褐色 Hue10YR7/6	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	24929・24931他と接合。
	146	29558	D-9	Ⅳ	深鉢	4	胴部	外：変形撚糸文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	147	28999	D-9	Ⅳ	深鉢	4	胴部	外：変形撚糸文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
44	148	24799	I-2	Ⅳ	深鉢	5-1	口縁部～胴部	外：貝殻条痕後ナデ，菱形押型文 内：工具ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	19.8	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	149	640	H-2	Ⅳ	深鉢	5-1	胴部	外：貝殻条痕後ナデ，山形押型文，菱形文 内：工具ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	黄灰色 Hue10YR4/1	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	642と接合。
	150	813	G-3	Ⅳ	深鉢	5-1	口縁部～胴部	外：沈線による同心円文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	23.0	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	151	804	G-3	Ⅳ	深鉢	5-1	胴部	外：沈線による同心円文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	5061・21102と接合。
	152	816	G-3	Ⅳ	深鉢	5-1	胴部～底部	外：ナデ（無文） 内：ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	浅黄橙色 Hue10YR8/4	—	5.4	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	5075・23845他と接合。煤付着
	153	26387	B-4	Ⅳ	壺形	5-2	頸部	外：沈線文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3 暗灰色 Hue2.5Y5/2	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	5503・2878・ 989・988・909・ 26053他と接合。
45	154	7	I-3	Ⅲ	深鉢	6	口縁部	外：微隆起突帯文及び沈線 内：ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	橙色 Hue7.5YR6/6	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	155	11	I-2	Ⅲ	深鉢	6	口縁部	外：微隆起突帯文及び沈線 内：ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	黒褐色 Hue7.5YR3/1	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	12と接合。
	156	557	I-2	Ⅳ	深鉢	6	胴部	外：微隆起突帯文及び沈線 内：ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	157	4684	B-5	Ⅱ	深鉢	7-2	口縁部～胴部	外：口縁部沈線や連点による同心円文，胴部撚糸文及び沈線・連点文， 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2 にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	23.4	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	25759・28779・ 23609・23610・ 23612・25570・ 6786他と接合。
	158	25782	B-6	Ⅳ	深鉢	7-2	口縁部	外：口縁部沈線による同心円文，胴部撚糸文及び沈線・連点文，内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	21.5	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	23548・23687他と接合。
46	159	26735	B-4	Ⅳ	深鉢	7-2	口縁部	外：口縁部沈線や連点による同心円文，胴部撚糸文及び沈線・連点文， 内：ナデ	黄橙色 Hue7.5YR7/8	明黄褐色 Hue10YR7/6	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	27692と接合。
	160	25432	D-6	Ⅳ	深鉢	7-2	胴部	外：撚糸文及び沈線文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	29517-1・29517-2 他と接合。
	161	1840	C-5	Ⅲ	深鉢	7-2	胴部	外：撚糸文及び沈線文 内：ナデ	明黄褐色 Hue10YR6/6	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	1289・1314と接合。
	162	25609	B-6	Ⅳ	深鉢	7-3	口縁部～胴部	外：口縁部沈線による同心円文，胴部撚糸文及び沈線・連点文，内：ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	明黄褐色 Hue10YR7/6	21.4	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	25525・27916と接合。
	163	22642	C-4	Ⅱb	深鉢	7-3	胴部	外：撚糸文及び沈線・連点文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	27668・1245・ 6784他と接合。
	164	23431	B-6	Ⅱb	深鉢	7-3	口縁部～胴部	外：口縁部沈線による同心円文・胴部沈線，内：ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	27.1	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	155・23431・ 22982他と接合。
	165	23589	B-6	Ⅲa	深鉢	7-3	口縁部～胴部	外：口縁部沈線による同心円文・胴部沈線，内：ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	27.1	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	3558・23174・ 23184他と接合。
	166	23587	B-6	Ⅲa	深鉢	7-3	口縁部～胴部	外：口縁部沈線による同心円文・胴部沈線，内：ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	明黄褐色 Hue10YR6/6	29.0	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	22986・25607と接合。
	167	3414	A-5	Ⅱ	深鉢	7-3	胴部	外：撚糸文及び沈線・連点文 内：ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	明黄褐色 Hue10YR6/6	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	25779と接合。
47	168	23613	B-6	Ⅲa	深鉢	7-4	口縁部	外：沈線による鋸歯状文 内：ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4 黒褐色 Hue2.5Y3/2	オリーブ色 Hue5Y3/1	32.7	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	25580・25581・ 23540・23710と接合。

第29表　縄文時代早期土器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土				焼成	備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他		
47	169	26173	B-4	Ⅳ	深鉢	7-4	口縁部	外：沈線による鋸歯状文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	明黄褐色 Hue10YR7/6 灰黄褐色 Hue10YR4/2	33.0	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	25038・23637・25557・6823と接合。
	170	25582	B-6	Ⅳ	深鉢	7-4	口縁部	外：沈線による鋸歯状文 内：ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	暗灰黄色 Hue2.5Y4/2 灰黄色 Hue2.5Y6/2	32.8	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	28974・23345・25787と接合。
	171	25711	A-5	Ⅳ	深鉢	7-4	口縁部	外：沈線による鋸歯状文 内：ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	淡黄色 Hue2.5Y8/4	36.0	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	26254・26367・26397他と接合。
	172	27243	B-4	Ⅳ	深鉢	7-4	口縁部	外：沈線による鋸歯状文 内：ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	灰色 Hue2.5Y8/2	34.6	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	26341・26715・23524他と接合
	173	20678	B-8	Ⅲa	深鉢	7-4	口縁部	外：口縁部沈線による長舌状文 内：ナデ	淡黄色 Hue2.5Y7/6 黄灰色 Hue2.5Y5/1	淡黄色 Hue2.5Y8/3 黄灰色 Hue2.5Y6/1	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	20679・20684・21534と接合。
48	174	26398	B-4	Ⅳ	深鉢	7-4	胴部	外：撚糸文・沈線文・刺突連点文， 内：ナデ	淡黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	26203・26734・1112他と接合。
	175	26478	B-5	Ⅳ	深鉢	7-4	胴部	外：撚糸文・沈線文・刺突連点文， 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue16YR7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	176	2890	A-5	Ⅱ	深鉢	7-4	胴部	外：撚糸文・沈線文・刺突連点文， 内：ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	405・23499と接合。
	177	4653	A-5	Ⅳ	深鉢	7-4	胴部	外：撚糸文・沈線文・刺突連点文， 内：ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	26232・25726と接合。
	178	5431	B-5	Ⅱ	深鉢	7-5	口縁部～胴部	外：撚糸文・沈線文・刺突連点文， 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	23.3	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	27504・23731・18080他と接合。
49	179	26365	B-4	Ⅳ	深鉢	7-6	口縁部	外：沈線による釣り針状文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	25.4	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	1133・1215・23699他と接合。
	180	25278	C-6	Ⅱb	深鉢	7-6	口縁部～胴部	外：沈線による釣り針状文 内：ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	—	—	—	○	○	○	赤色・白色砂粒，小石	良	23559と接合。
	181	1303	C-5	Ⅱ	深鉢	7-6	口縁部～胴部	外：沈線による釣り針状文 内：ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	—	—	—	○	○	○	赤色・白色砂粒，小石	良	
	182	25298	B-5	Ⅲa	深鉢	7-6	口縁部～胴部	外：沈線による釣り針状文 内：ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	—	—	—	○	○	○	赤色・白色砂粒，小石	良	23526・23537と接合。
	183	1290	C-5	Ⅳ	深鉢	7-7	口縁部～胴部	外：沈線による釣り針状文，胴部撚糸文，内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	明黄褐色 Hue10YR6/6	28.6	—	—	○	○	○	赤色・白色砂粒，小石	良	542④・25758他と接合。
50	184	1292	C-5	Ⅳ	深鉢	7-7	口縁部～胴部	外：沈線による釣り針状文，胴部撚糸文，内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	明黄褐色 Hue10YR6/6	28.5	—	—	○	○	○	赤色・白色砂粒，小石	良	1315・29059・14154他と接合。
	185	26274	B-4	Ⅳ	深鉢	7-8	口縁部～胴部	外：口縁部並行沈線文，胴部撚糸文，内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	—	—	—	○	○	○	赤色・白色砂粒，小石	良	
	186	25517	C-6	Ⅳ	深鉢	7-8	胴部	外：胴部撚糸文・並行沈線文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	灰黄褐色 Hue10YR4/2	—	—	—	○	○	○	赤色・白色砂粒，小石	良	27776・23350・23560と接合。
	187	23713	C-6	Ⅳ	深鉢	7-8	口縁部～胴部	外：口縁部並行沈線文，胴部撚糸文・並行沈線文，内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	灰黄褐色 Hue10YR4/2	—	—	—	○	○	○	赤色・白色砂粒，小石	良	21551と接合。
51	188	21496	C-7	Ⅳ	深鉢	7-8	口縁部～胴部	外：口縁部並行沈線文，胴部撚糸文，内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	21.6	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	21286と接合。
	189	21161	D-8	Ⅳ	深鉢	7-8	口縁部～胴部	外：口縁部並行沈線文，胴部撚糸文，内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	190	一括	B-4	Ⅳ	深鉢	7-8	口縁部	外：口縁部並行沈線文，胴部撚糸文，内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	191	266	B-7	Ⅱ	深鉢	7-8	口縁部	外：口縁部横位沈線 内：ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	にぶい黄色 Hue10YR6/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	3804と接合。
	192	5063	G-3	Ⅳ	深鉢	7-9	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	25.2	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	831・850・861・842他と接合。
	193	29561	一括	Ⅳ	深鉢	7-9	口縁部～胴部	外：貝殻条痕 内：貝殻条痕	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4 褐灰色 Hue7.5YR5/1	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	29.2	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	29238・29220・29201と接合。
	194	28889	C-9	Ⅳ	深鉢	7	胴部	外：撚糸文・沈線文 内：ナデ	灰褐色 Hue7.5YR4/2	褐色 Hue7.5YR4/6	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	28900.28901と接合。
	195	一括	C-9	Ⅳ	深鉢	7	胴部	外：撚糸文・沈線文 内：ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	明黄褐色 Hue10YR7/6	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	196	23532	C-5	Ⅲa	深鉢	7	胴部	外：撚糸文・沈線文 内：ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	27666と接合。
	197	26380	B-4	Ⅳ	深鉢	7	胴部	外：撚糸文・沈線文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄色 Hue10YR8/3 黒褐色 Hue10YR3/1	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	198	25496	D-7	Ⅳ	深鉢	7	胴部	外：撚糸文・沈線文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	21442・21249と接合。
	199	25780	B-6	Ⅳ	深鉢	7	胴部	外：沈線文 内：ナデ	明黄褐色 Hue10YR6/6	明黄褐色 Hue2.5Y6/6	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	27477・27765と接合。
	200	25063	D-8	Ⅳ	深鉢	7	胴部	外：撚糸文・沈線文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	201	7031	B-7	Ⅲ	深鉢	7	胴部	外：撚糸文・沈線文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	202	23131	B-7	Ⅲa	深鉢	7	胴部	外：撚糸文・沈線文 内：ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	203	23516	B-5	Ⅲa	深鉢	7	胴部	外：沈線文 内：ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue10YR8/3	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	204	26403	B-4	Ⅳ	深鉢	7	胴部	外：沈線文 内：ナデ	灰黄色 Hue2.5Y7/2	浅黄色 Hue2.5Y7/3	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	1115と接合。

第30表　縄文時代早期土器観察表（3）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃	胎土 他	焼成	備考
52	205	25687	D-7	Ⅳ	深鉢	7	底部	外：沈線文 内：ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	—	12.7	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	25914・26418・21267他と接合。
	206	21547	C-7	Ⅳ	深鉢	7	底部	外：沈線文 内：ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/8	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	—	10.8	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	23277・23276・20618他と接合。
	207	23314	C-4	Ⅲb	深鉢	7	底部	外：沈線文 内：ナデ	橙色 Hue5YR6/6 灰褐色 Hue5YR6/2	黄橙色 Hue10YR6/4	—	12.2	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	26419・26441・26435と接合。
	208	26879	C-3	Ⅳ	深鉢	7	底部	外：沈線文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4	—	11.0	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	209	25051	C-6	Ⅳ	深鉢	7	底部	外：沈線文 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	—	11.2	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	25522・25524・25938と接合。
	210	908	G-2	Ⅴ	深鉢	7	底部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	—	10.7	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	211	21510	C-7	Ⅳ	耳栓	－	—	外：ナデ 内：ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4	—	—	—	○	○	○	白色砂粒・小石	良	

第31表　縄文時代早期石器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	ブロック	器種	石材	産地	計測値 長（mm）	計測値 幅（mm）	計測値 厚（mm）	計測値 重量（g）	備考
54	212	27575	B-4	Ⅳ	1	打製石鏃	タンパク石	－	(25.6)	13.0	5.3	1.2	
	213	27411	B-4	Ⅳ	1	打製石鏃	玉髄	－	22.0	15.8	4.6	1.4	
	214	26966	B-4	Ⅳ	1	打製石鏃	メノウ	－	21.3	20.6	6.7	3.2	平基式。
	215	27212	B-4	Ⅳ	1	彫器	タンパク石	－	33.9	35.0	18.0	9.9	
	216	26326	B-4	Ⅳ	1	掻器	黒曜石	上牛鼻産	28.0	33.5	18.6	14.0	
	217	28227	B-4	Ⅳ	1	小型両面調整石器	タンパク石	－	(29.0)	28.3	9.6	6.8	
	218	27308	B-4	Ⅳ	1	小型両面調整石器	タンパク石	－	(30.2)	33.7	17.0	13.9	
	219	27258	B-4	Ⅳ	1	小型両面調整石器	タンパク石	－	23.8	23.9	9.4	3.5	
	220	25706	A-5	Ⅳ	1	石錐	チャートB	－	34.0	23.2	9.7	5.5	
	221	28029	A-4	Ⅳ	1	敲石	安山岩	－	58.7	63.0	53.0	266.5	
55	222	27357	B-4	Ⅳ	1	礫器	安山岩	－	133.0	152.0	48.0	1,100	
56	223	26196	B-4	Ⅳ	2	打製石鏃	タンパク石	－	(22.0)	15.3	4.9	1.2	
	224	26687	C-4	Ⅳ	2	石錐	タンパク石	－	17.4	19.7	6.6	2.6	
	225	26775	B-4	Ⅳ	2	石匙	タンパク石	－	20.0	24.7	7.5	3.7	
	226	26122	C-4	Ⅳ	2	石錐	タンパク石	－	25.5	23.3	7.5	4.1	
	227	26515	C-4	Ⅳ	2	削器	頁岩	－	150.7	89.0	28.4	400.0	
	228	26281	C-4	Ⅳ	2	礫器（削器）	安山岩	－	93.0	138.0	25.0	261.1	
	229	26128	C-4	Ⅳ	2	掻器	玉髄	－	30.7	40.0	13.6	10.9	
	230	26360	B-4	Ⅳ	2	削器	タンパク石	－	37.6	32.5	10.6	8.3	
	231	26226	B-4	Ⅳ	2	加工痕剥片	黒色安山岩	－	(18.5)	26.6	－	2.9	
	232	26282	C-4	Ⅳ	3	磨石	安山岩	－	10.0	8.0	3.7	400.0	
57	233	572	I-2	Ⅳ	4	打製石鏃	黒曜石	上牛鼻産	20.4	18.8	4.7	1.3	
	234	24154	I-2	Ⅳ	4	使用痕剥片	黒曜石	上牛鼻産	33.6	28.3	12.2	8.1	
58	235	717	H-4	Ⅳ	ブロック外	磨製石斧	頁岩	－	(54.6)	43.0	－	49.4	
	236	21098	B-8	Ⅳ	ブロック外	石匙	黒色安山岩	－	39.6	42.0	8.0	8.3	
	237	700	H-4	Ⅳ	ブロック外	石匙	チャートA	－	74.3	26.4	14.3	20.4	
	238	29562	E-9	Ⅳ	ブロック外	石匙	黒曜石	霧島系	38.6	31.0	11.9	10.1	
59	239	25400	D-9	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒色安山岩	－	26.8	17.6	4.6	1.6	
	240	26699	E-4	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	チャートA	－	17.2	18.7	3.1	0.7	平基式。
	241	27847	D-5	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	鉄石英	－	21.0	16.4	4.6	1.1	
	242	27508	D-8	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	タンパク石	－	(15.4)	15.5	4.7	0.8	
	243	27869	B-3	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	石英	－	9.4	11.1	2.2	0.2	
	244	25536	C-6	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	チャートA	－	22.9	18.1	4.3	1.2	
	245	768	F-3	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	タンパク石	－	25.0	16.2	4.5	1.3	
	246	25771	A-6	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒色安山岩	－	26.8	19.7	3.7	1.2	
	247	802	G-3	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒曜石	霧島系	22.7	20.3	3.5	1.1	
	248	23711-②	C-6	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	頁岩	－	35.2	17.6	3.3	1.5	
	249	27844	C-4	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒曜石	針尾産	26.0	13.8	4.2	1.2	
	250	27846	B-7	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	タンパク石	－	24.1	14.4	3.0	1.0	
	251	25040	B-5	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒曜石	上牛鼻産	28.0	21.3	6.0	2.5	
	252	26404	C-4	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	タンパク石	－	20.8	14.4	4.8	0.9	
	253	29152	C-6	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒色安山岩	－	16.4	13.7	3.4	0.5	
	254	26435	C-4	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	チャートA	－	16.7	14.1	3.7	0.6	
	255	25743	B-5	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒曜石	三船産	(15.4)	14.6	4.7	0.8	
	256	25359	E-5	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒曜石	上牛鼻産	14.6	13.0	2.3	0.4	
	257	25365	E-6	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒曜石	針尾産	(19.1)	17.5	3.6	0.8	
	258	27496	B-6	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒色安山岩	－	27.4	16.7	4.3	1.3	
	259	27358	A-5	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	タンパク石	－	30.9	17.6	5.0	1.7	
	260	29591	G-9	Ⅳ	ブロック外	石鏃（石錐）	黒曜石	針尾産	33.9	22.0	4.8	2.6	

第32表　縄文時代早期石器観察表（2）

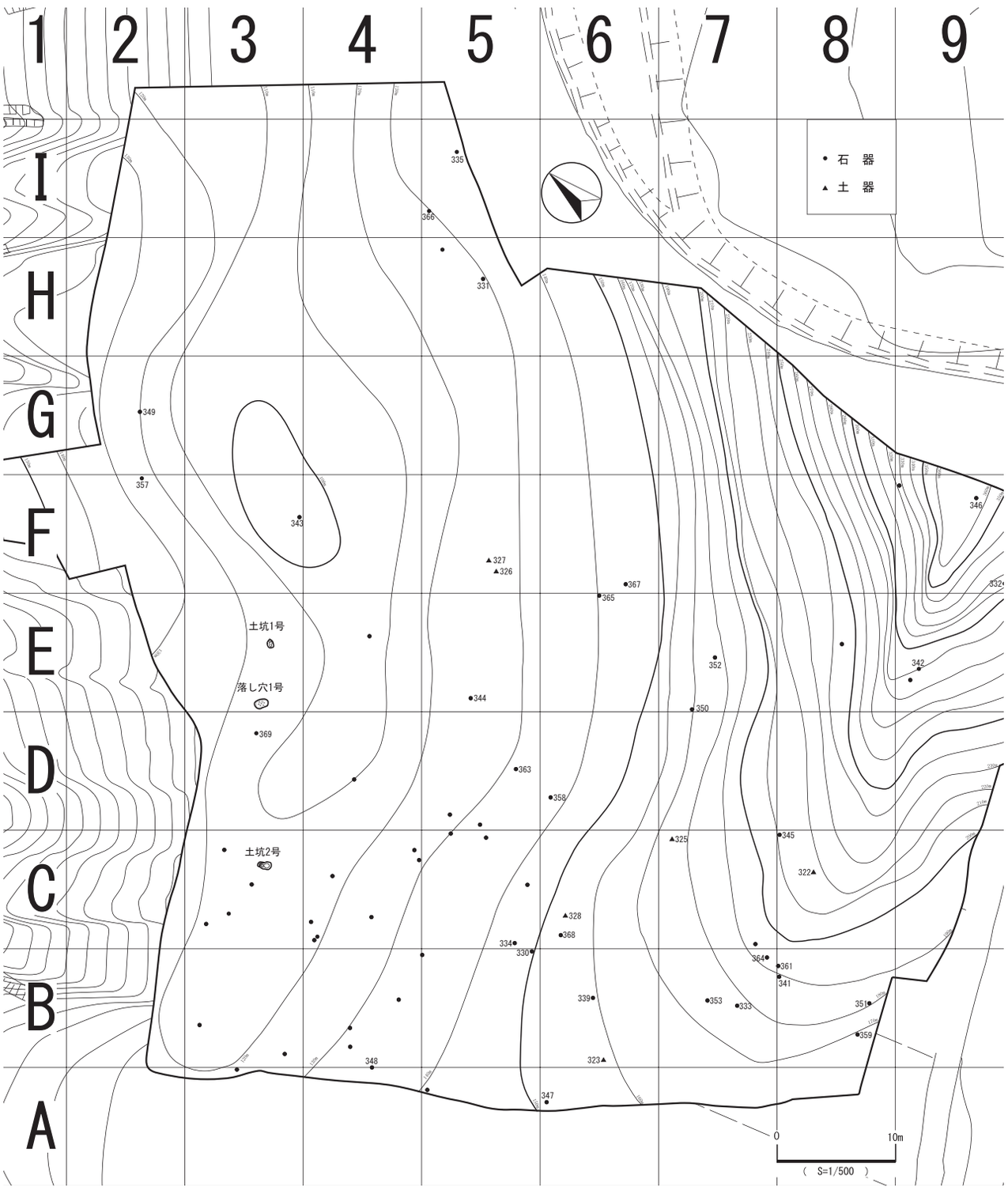
挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	ブロック	器種	石材	産地	計測値				備考
									長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	
59	261	25062	B-7	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	頁岩	－	(30.8)	14.1	4.4	1.4	
	262	26655	B-4	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	鉄石英	－	(25.5)	(14.6)	3.4	1.2	
	263	25519	C-6	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒曜石	針尾産	26.7	13.8	3.5	0.9	
	264	25591	B-6	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃	黒色安山岩	－	(24.3)	15.6	3.8	1.3	
	265	26504	B-3	Ⅳ	ブロック外	打製石鏃未製品	黒曜石	針尾産	(18.7)	16.9	2.4	0.8	
	266	一括	A-4	古代土坑埋土	ブロック外	打製石鏃未製品	鉄石英	－	31.0	24.3	7.4	5.7	
	267	26258	B-4	Ⅳ	ブロック外	石鏃（石銛）	玉髄	－	27.5	23.1	10.0	3.9	
	268	一括	F-7	Ⅳ	ブロック外	削器	瑪瑙	－	29.6	21.0	9.8	5.0	
60	269	25012	E-2	Ⅳ	ブロック外	掻器	黒色安山岩	－	37.0	49.4	22.0	44.5	
	270	25788	B-6	Ⅳ	ブロック外	削器	黒色安山岩	－	25.3	19.4	5.2	2.1	
	271	896	G-2	Ⅳ	ブロック外	掻器	黒曜石	三船産	15.6	16.3	8.8	1.7	
	272	28274	C-4	Ⅳ	ブロック外	削器	頁岩	－	107.0	85.2	35.5	400.0	粗製。
	273	24284	G-4	Ⅳ	ブロック外	削器	黒曜石	針尾産	29.7	27.0	10.4	6.0	
	274	21120	B-8	Ⅳ	ブロック外	削器	黒曜石	上牛鼻産	28.5	31.3	10.5	5.4	
	275	771	F-3	Ⅳ	ブロック外	楔形石器	鉄石英	－	22.7	10.5	8.0	2.6	
	276	1208	B-3	Ⅳ	ブロック外	楔形石器	黒曜石	三船産	35.0	31.3	17.5	5.8	
	277	27818	D-6	Ⅳ	ブロック外	小型両面調整石器	タンパク石	－	37.0	25.4	10.0	7.3	
	278	27941	E-3	Ⅳ	ブロック外	異形石器	タンパク石	－	14.5	18.0	2.3	0.7	
	279	27662	B-5	Ⅳ	ブロック外	小型両面調整石器	タンパク石	－	26.4	(29.3)	9.2	5.8	
	280	1161	B-2	Ⅳ	ブロック外	礫器	シルト岩	－	70.0	92.0	21.5	142.1	熱変成を受けている。
61	281	769	F-3	Ⅳ	ブロック外	礫器（削器）	頁岩	－	184.0	157.0	34.0	1,200.00	
	282	29173	A-5	Ⅳ	ブロック外	礫器（削器）	安山岩	－	115.0	156.0	42.0	800.0	
	283	1218	C-4	Ⅴ	ブロック外	礫器（削器）	安山岩	－	146.0	104.6	20.0	286.9	
	284	660	G-2	Ⅳ	ブロック外	礫器（石錘）	安山岩	－	132.3	66.0	129.0	316.5	
62	285	26876	C-3	Ⅳ	ブロック外	礫器	安山岩	－	142.0	169.0	45.4	1,400.00	
	286	708	H-4	Ⅳ	ブロック外	礫器	安山岩	－	154.0	108.0	37.1	700.0	
	287	27793	D-8	Ⅳ	ブロック外	礫器	安山岩	－	164.0	127.0	34.0	1,000.00	
63	288	27523	B-7	Ⅳ	ブロック外	礫器	安山岩	－	105.0	197.0	43.2	700.0	
	289	5072	H-4	Ⅳ	ブロック外	礫器	安山岩	－	84.0	98.0	44.7	321.9	
	290	26752	B-4	Ⅳ	ブロック外	礫器	安山岩	－	114.0	109.0	16.9	217.2	
64	291	869	F-2	Ⅳ	ブロック外	礫器	安山岩	－	130.0	130.0	36.8	800.0	
	292	24242	G-4	Ⅳ	ブロック外	礫器	安山岩	－	146.0	109.0	34.7	900.0	
	293	27782	C-7	Ⅳ	ブロック外	礫器	安山岩	－	102.0	129.0	21.0	252.2	
	294	25895	D-6	Ⅳ	ブロック外	礫器	安山岩	－	90.0	142.0	26.5	400.0	
	295	561	J-3	Ⅳ	ブロック外	磨石	安山岩	－	108.0	90.0	48.0	500.0	
	296	21579	B-7	Ⅳ	ブロック外	磨石	砂岩	－	119.0	95.0	40.0	700.0	
65	297	25388	C-6	Ⅳ	ブロック外	磨石	安山岩	－	96.0	81.0	46.0	500.0	
	298	26294	C-3	Ⅳ	ブロック外	敲石	安山岩	－	83.0	60.0	55.0	326.0	
	299	672	H-3	Ⅳ	ブロック外	磨石	安山岩	－	91.0	68.0	55.0	400.0	
	300	676	H-2	Ⅳ	ブロック外	凹石	砂岩	－	103.0	75.0	49.0	500.0	
	301	514	B-5	Ⅳ	ブロック外	敲石	安山岩	－	88.0	85.5	43.0	400.0	
	302	21121	B-8	Ⅳ	ブロック外	敲石	安山岩	－	84.0	94.0	50.0	400.0	
	303	29133	C-7	Ⅳ	ブロック外	敲石	安山岩	－	93.0	38.0	29.0	172.9	
	304	26784	D-4	Ⅳ	ブロック外	敲石	砂岩	－	57.0	41.0	32.0	104.5	
66	305	2436	F-6	Ⅳ	ブロック外	石皿	安山岩	－	223.0	230.0	45.0	4,200.00	
	306	－	D-4	Ⅵ	ブロック外	石皿	安山岩	－	216.0	286.0	48.0	4,400.00	
	307	24158	I-2	Ⅳ	ブロック外	石皿	安山岩	－	246.0	230.0	90.0	8,200.00	
67	308	919	G-2	Ⅳ	ブロック外	石核	黒曜石	上牛鼻産	42.0	48.9	25.0	52.4	
	309	27125	F-2	Ⅵ	ブロック外	石核	黒曜石	三船産	44.4	72.5	55.0	131.7	
	310	21268	D-7	Ⅳb	ブロック外	石核	チャートA	－	41.3	60.4	48.3	87.2	
	311	21521	C-7	Ⅳ	ブロック外	石核	鉄石英	－	24.6	29.5	21.5	11.1	
	312	26262	B-4	Ⅳ	ブロック外	石核	玉髄	－	29.6	35.9	15.6	16.5	
	313	29188	D-7	Ⅳ	ブロック外	石核	鉄石英	－	77.0	117.0	71.4	700.0	
68	314	28503	C-4	Ⅵ	ブロック外	石核	黒曜石	上牛鼻産	47.2	46.1	30.8	52.9	
	315	693	H-3	Ⅳ	ブロック外	石核	黒曜石	上牛鼻産	64.2	51.0	26.8	71.3	
	316	26496	B-3	Ⅳ	ブロック外	石核	黒曜石	針尾産	59.6	39.6	11.9	36.5	
	317	29078	B-7	Ⅳ	ブロック外	使用痕剥片	黒曜石	上牛鼻産	43.2	36.3	16.4	19.2	
69	318	25064	B-8	Ⅳ	ブロック外	使用痕剥片	チャートA	－	66.2	55.8	19.9	63.2	二次加工剥片？
	319	712	H-6	Ⅳ	ブロック外	使用痕剥片	チャートA	－	53.8	47.6	9.1	24.0	
	320	25746	B-5	Ⅳ	ブロック外	加工痕剥片	タンパク石	－	25.6	42.0	12.8	13.8	
	321	21578	D-7	Ⅳ	ブロック外	使用痕剥片	黒曜石	日東産	27.5	18.3	7.3	3.1	

第５節　縄文時代後・晩期の調査

１　調査の概要

当該期の遺構は落し穴が１基，土坑が２基で，何れもＣ～Ｅ－３区内で検出された。落し穴が検出され，当該期の可能性をもつ樹木横転が多数検出されたことから，本遺跡は森林であった可能性が高く，狩猟・採集生活の痕跡を残すものと捉えられる。

遺物は，土器が13点，石器が66点出土したが，調査区西側を中心に散在する。土器は，既知の土器研究から，後期の市来式土器及び晩期の粗製深鉢形土器（入佐式・黒川式土器）に該当し，既述の遺構は，これらの時期に伴う可能性が高いと判断される。



第70図　縄文時代後・晩期遺構位置図・遺物出土状況図

2　遺構

（1）落し穴

①　落し穴１号

平面観は，隅丸長方形である。Ⅵ層上面で検出されたが，①の埋土中に黄褐色土（Ⅲa層）や明黄褐色火山灰（Ⅲb層）を含むため，本来の掘込面は，Ⅲa層上面と判断される。

埋土①がⅢa層とⅥ層を主とする混土，②がⅣ層とⅥ層を主とする混土で，土質が顕著に分層される。埋土傾向として，坑の造成の際に掘り上げて周囲に盛り上げられたであろう土壌の層順（Ⅵ層-Ⅳ層-Ⅲa層）が，埋め戻しの際に逆に坑に投下されて逆転した状況（Ⅲa層-Ⅳ層の層にⅥ層が混土する）が窺える。以上の状況から埋め戻しの可能性を見る。

床面には，中央の小ピットの周縁を囲むように６基のピットが並ぶ。小ピットの断面状況は，中央が顕著に深く，他はそれより浅めである。P4 ～ P6のように，瓢箪状に中位が窄まり，上位・下位が膨らむ形態の小ピットと，上場が膨らむP1 ～ P3・P7のような形態の２つが捉えられる。床面の小ピットを逆茂木敷設用途の可能性で見れば，逆茂木の上位・下位が瓢箪状に膨らむのは，複数の逆茂木が×状に交差して差し込まれていた可能性を示し，上場が膨らむタイプは，下場を軸に，上場に向けて広がるように逆茂木が敷設されていたと推察される。

（2）土坑

当該期における土坑の形態の特徴は，縄文時代早期で報告した土坑２類（ハイヒール形土坑）に類似する。この形態の土坑については，人間活動に伴う遺構と見なすか疑問視する説もあるが，根菜類等の採集痕跡との説があることも鑑み，本項では，遺構として報告する。

①　土坑１号

平面観は，略楕円形である。長軸長が70cm弱と短く，土坑自体も小さい。

床面に掘り込まれるピットは，北側の壁面に設けられ，床面より23cm，検出面より85cm弱の深さを測る。ピット先端が平面を呈する。

Ⅵ層上面で検出されたが，埋土が黄褐色土（Ⅲa層）で占められ，本来の掘込面はⅢa層上面と思われる。

②　土坑２号

平面観は，瓢箪状の不定形である。土坑１号同様に，四方に明瞭な壁面を有し，縄文時代早期のハイヒール形土坑の，床面に掘り込まれる小ピット近接の壁面のみ直立する形態と特徴が同じである。

床面に掘り込まれる小ピットは，北壁面に設けられ，床面より23cm，検出面より95cm弱の深さを測る。ピット先端が平面を呈する。

Ⅶ層上面で検出されたが，埋土が黄褐色土（Ⅲa層）で占められ，本来の掘込面はⅢa層上面と思われる。

3　遺物

市来式土器や晩期粗製深鉢形土器，磨製石斧や打製石鏃，掻器，削器，磨石・敲石，石核等が出土した。

土器については，既知の土器研究を基に当該期の遺物として報告し，石器については，縄文前期～後・晩期の層であるⅢa層（Ⅲ層）内出土石器を，当該期の土器に共伴する可能性で捉え報告する。

（1）土器

①　８類　322 ～ 324

何れも，口縁部片である。322の口縁部が，幅広で断面が大きく「く」の字状に肥厚し二重口縁を呈するのに対して，323は，肥厚面が小さく典型的な断面三角形状を呈する。口縁部には斜行凹線や刺突連点が捉えられる。

324の口縁部内面には，３条の沈線が横走する。口縁部の肥厚は捉えられない。外面には，凹線による長楕円状の文様が捉えられる。

②　９類　325 ～ 329

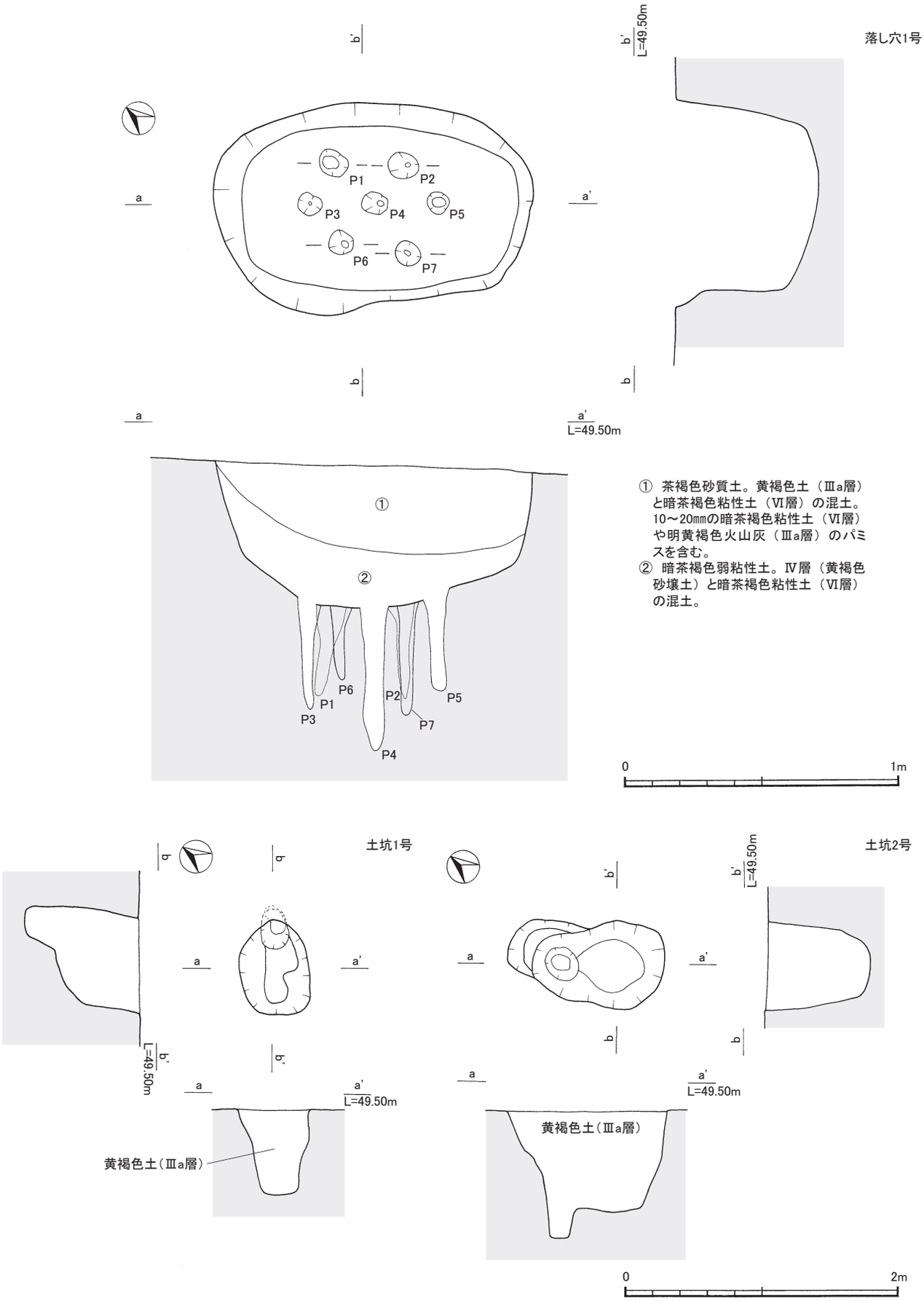
325・326は，胴部片である。325は，外面に貝殻条痕を施した後，ナデ消す。内面は，貝殻条痕が残される。

第33表　縄文時代後・晩期落し穴計測表

挿図番号	遺構名	検出区	層	上面の径（cm）	底面の径（cm）	深さ（cm）	小穴計測値（cm）			小穴計測値（cm）			備考
				長軸×短軸	長軸×短軸		No.	長径×短径	深さ	No.	長径×短径	深さ	
71	落し穴1号	E-3	Ⅵ	117×72	110×60	52	1	11×9	34	5	9×8	27	
							2	9×7	38	6	8×8	32	
							3	11×9	34	7	10×8	40	
							4	9×7	53	－	－	－	

第34表　縄文時代後・晩期土坑計測表

挿図番号	遺構名	検出区	層	上面の径（cm）	底面の径（cm）	深さ（cm）	形状	備考
				長軸×短軸	長軸×短軸			
71	土坑1号	E-3	Ⅵ	70×51	45×15	90	楕円形	
	土坑2号	C-3	Ⅶ	115×65	17×37	82	瓢箪形	



第71図　縄文時代後・晩期落し穴１号・土坑１・２号実測図

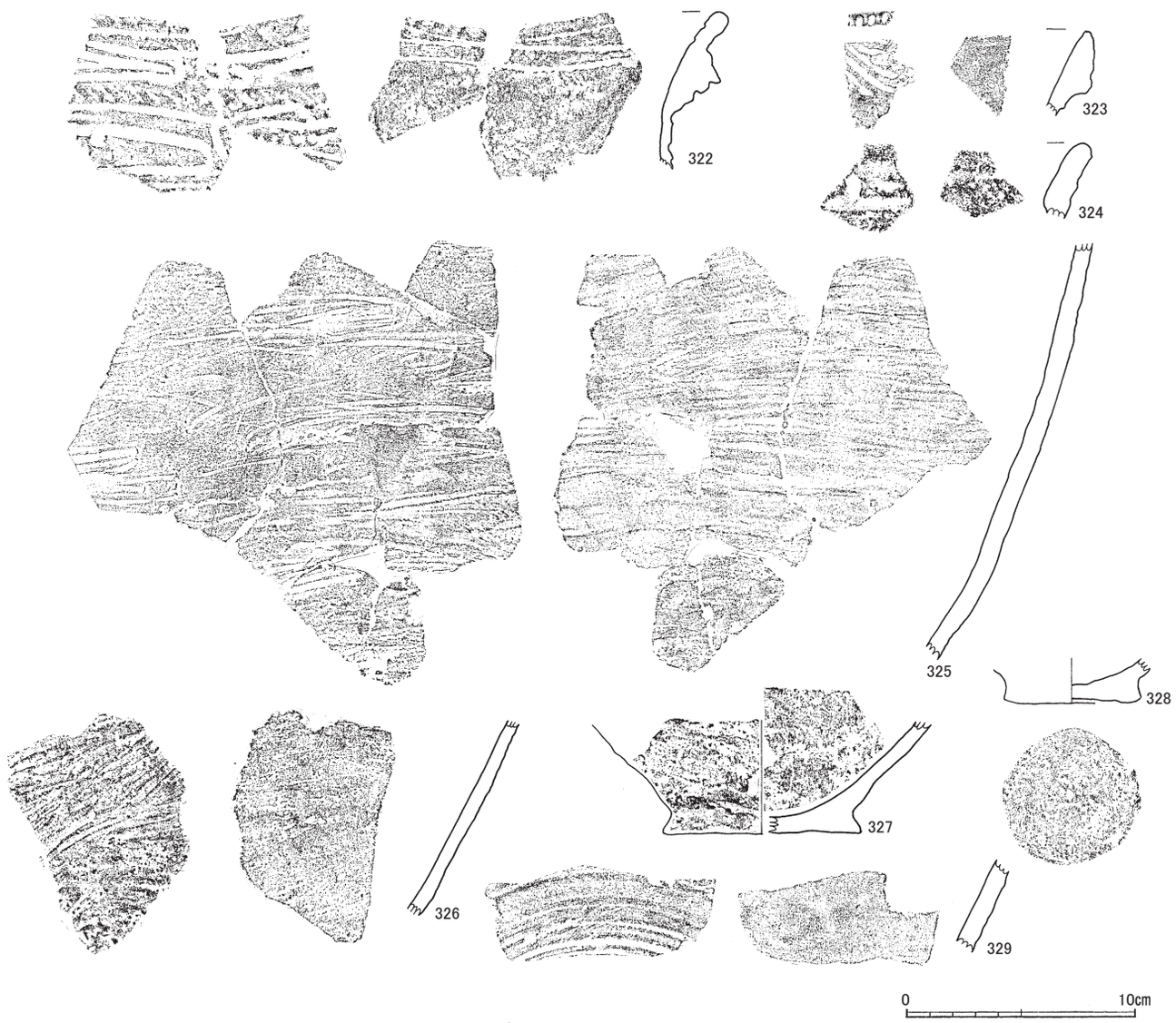
第35表　縄文時代後・晩期土器分類表

		特　　徴
8類		器形：胴部上半から口縁部にかけて外反する。口縁部が「く」の字形に肥厚し，断面観が三角形状を呈する。波状口縁である。 文様：胴部は並行凹線と刺突連点により，長方形状の文様が作出される。口縁部の断面三角形状の頂部には，斜行沈線が刺突連点状に刻まれる。口縁部上半にも，胴部同様に凹線による方形状の文様が施される。 既知の土器研究より，市来式土器に比定される。
9類		器形：底部は平底であり，底部外端が外に張り出す。胴部下半から外側に伸び，胴部中位で徐々に立ち上がる器形を呈する。 調整：粗い貝殻条痕が内外面共に施される。 既知の土器研究より，晩期粗製深鉢形土器に比定される。

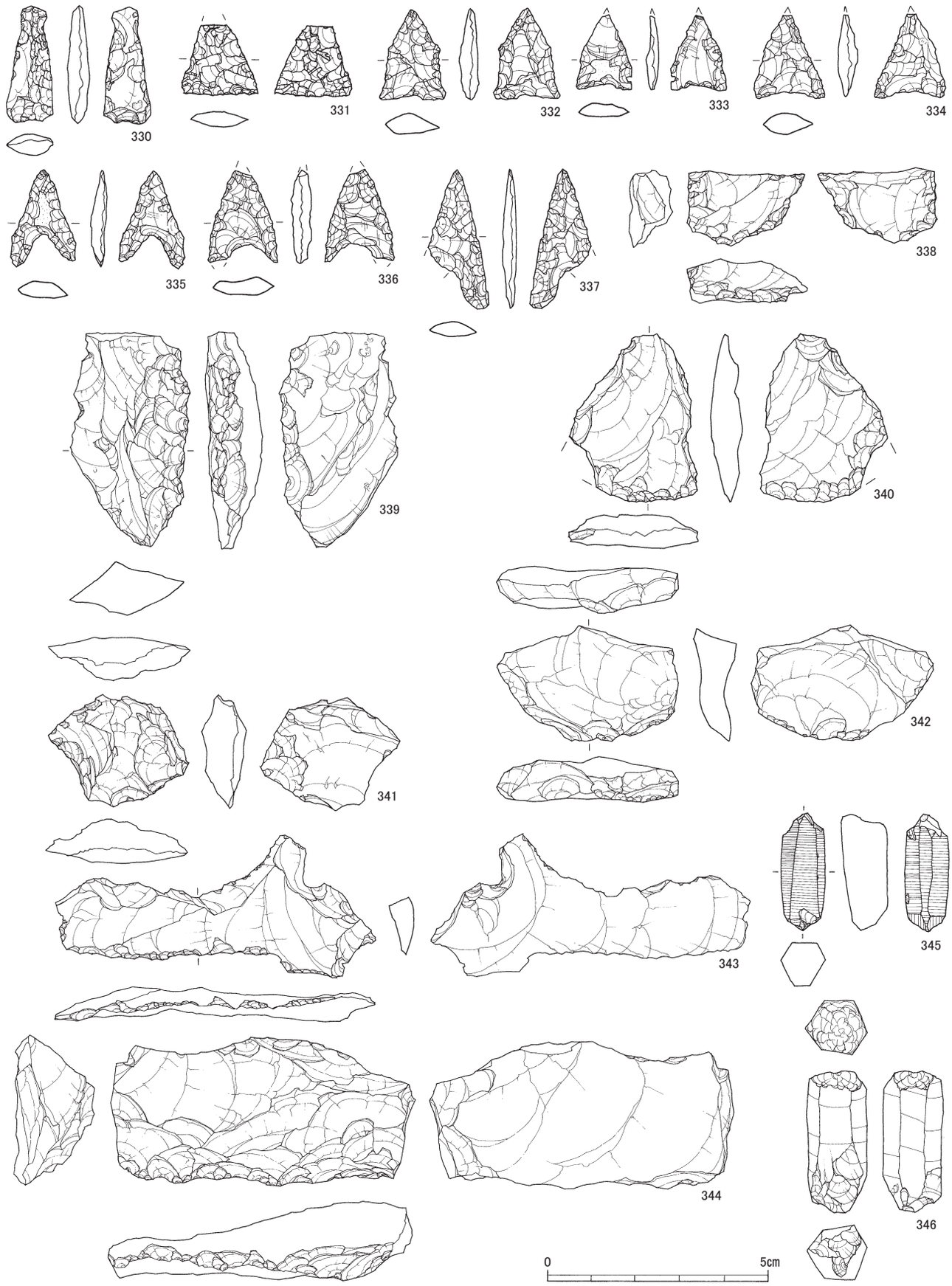
326は，内外面共に貝殻条痕を施した後，ナデ消す。

327・328は，深鉢形土器の底部片である。底部外面が外側に張り出すことから，黒川式土器に比定され，上述の胴部片に繋がる可能性がある。

329は，精製浅鉢の胴部片と思われる。外面には，４本程の沈線が巡らされるが，上位の２本は，ほぼナデ消される。内面は，いわゆる黒色磨研によりミガキが入る。外面には，顕著に煤が付着する。



第72図　縄文時代後・晩期土器８・９類実測図



第73図　縄文時代後・晩期石器実測図（1）

（2）石器

Ⅱ層及びⅢ層から出土した石器のうち40点を図化して以下に示す。これらの40点の石器は，その出土層序から縄文時代後・晩期の所産であろうが，一部の石器については，古代・中世の土坑や掘立柱建物の造営の際に縄文時代早期の石器が紛れ込んだ可能性もある。

石匙

330は頁岩の横長剥片を用いた小型の石匙である。体部が台形を呈し，つまみを作り出す抉りが小さい。器面調整，刃部調整とも丁寧な作りで，縄文時代早期後葉平栫式期に多い上野原型の石匙であり，後・晩期には類例が少なく，早期の遺物の紛れ込みか。

石鏃

331は素材剥片の形状が全く分からないほどに平坦剥離による器面調整が施されている。332はチャート製でいわゆる五角形族であり，側縁中程の張出しが突起状になる特徴を持つ。333は礫皮面を持つ鱗状剥片を素材とし，左側縁上半は未加工である。製作途中のものか。334は黒色安山岩製で素材剥片の厚みを減ずることができなかったため，右側縁が緩く外弯する。335は鉄石英製の礫皮面を持つ鱗状剥片素材であり，抉りの深いタイプである。336は珪質頁岩の不定形剥片を素材とし，先端と左右両脚を欠損する。337は西北九州産黒曜石製で，器面調整・刃部調整ともに秀麗である。331・333は在地の黒曜石を用いている。

削器

339は日東産黒曜石の横長剥片を素材としている。この素材剥片の背面に残る剥離方向は主剥離面の剥離方向と対向もしくは90度に交わっている。これは，求心的な剥片剥離を行う盤状石核の存在を意味する。右側縁に両刃の刃部加工が施されている。340はチャートの不定形剥片を素材とし，下縁に細かな刃部調整を加えて，鋭い刃部を作り出している。

掻器

338は鉄石英の折れた剥片を素材とし，その折れ面に片刃の刃部加工を施したものである。342も同じく鉄石英の不定形剥片を素材とする。裏面の左側に素材剥片の厚みを減じるための調整剥離を加えた後に，分厚い頑丈な刃部を形成している。343はチャートの不定形剥片を上手に利用したもので，下縁全体に直線的な刃部を付けたものである。突起した部分にも刃部加工を施してあることが特異である。344は342と同じ鉄石英製で，横長剥片素材である。338・342・344は同一母岩かと思われる。これにも下縁に直線的な刃部加工が施してある。365も鉄石英の不定形剥片を素材とするもので，下縁右側に刃部が付けてあり，早期特有の刃部のつぶれも見られる。368は日東産黒曜石の横長剥片を素材とするもので，下縁に直線的な刃部を付けてある。

小型両面調整石器

341は黒色安山岩の不定形剥片を素材とするもので，表裏両面に器面調整剥離が加わる。裏面の調整剥離は部分的であり，半両面調整石器である。347は日東産黒曜石の礫皮面を持つ横長剥片を素材とし，平坦剥離を加えて半両面調整加工を行った石器である。上端は欠損しており，本来は槍先形に尖った石器ではなかったか。348はタンパク石の不定形剥片素材で表裏両面に平坦剥離を加え，このような形状に仕上げてある。左側縁は，素材剥片の折れ面がそのまま残り，刃部様のエッジは作られていない。右側縁は器面調整剥離によって削器様の刃部が作られている。

楔形石器

345・346ともに水晶をそのまま用いたもので，上下両端につぶれ及び小剥離が観察できる。内部のヒビはさほど深くないので，対象物は硬くなかったと思わせる。

粗製削器

349は頁岩の横長剥片を用いた粗製削器である。器面調整は施さずに，剥片のほぼ全周に刃部加工を加えており，両刃の刃部を付けている。特に，素材剥片のポジティブバルブを除去するためもあって，その部分には表裏両面とも加工が丁寧である。

磨製石斧

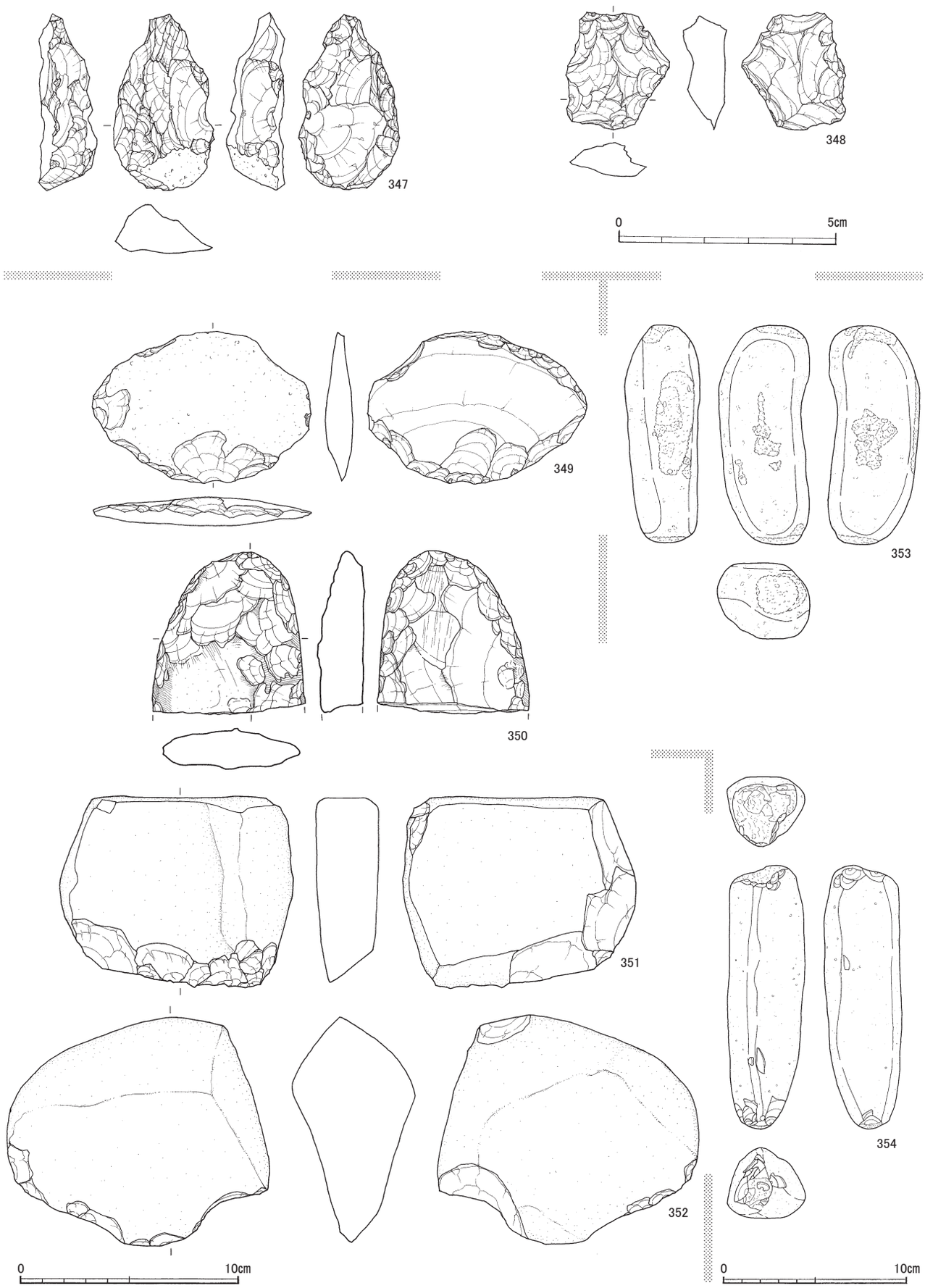
350は頁岩製の磨製石斧の頭部であり，ラフな剥離による器面調整を施した後，側縁を敲打し，全面を研磨して仕上げている。側面の研磨と器面全体に見える研磨は丁寧である。使用中に破損し，柄に残った頭部のみが遺跡に持ち帰られたものか。

敲石・磨石

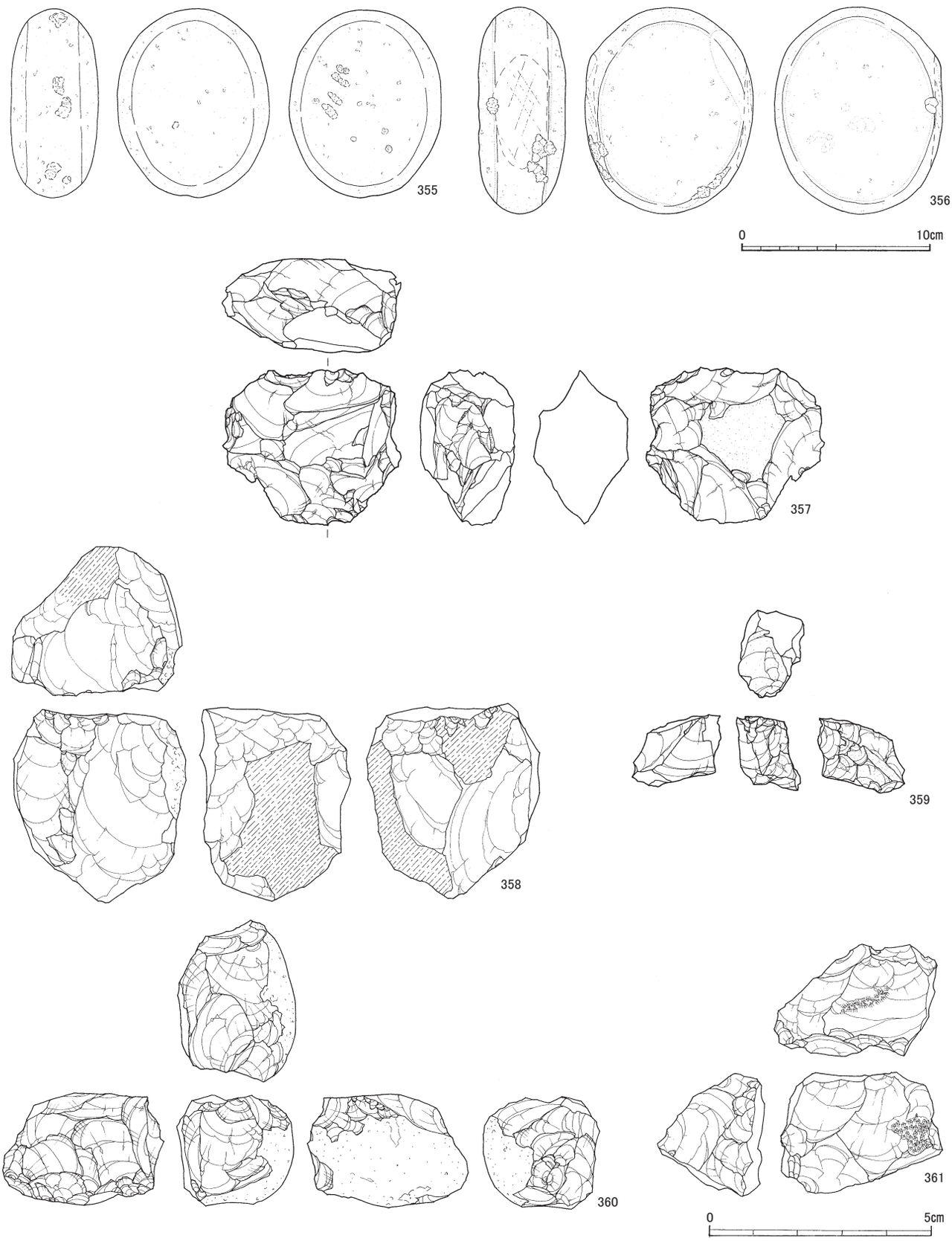
353・354は安山岩の棒状の円礫を用いた敲石である。長軸両端に顕著な敲打痕が残る。355・356は安山岩の円礫を使った磨石で，表裏両面に平滑な面を形成し，側面には若干の敲打痕がある。

石核・加工痕剥片・使用痕剥片

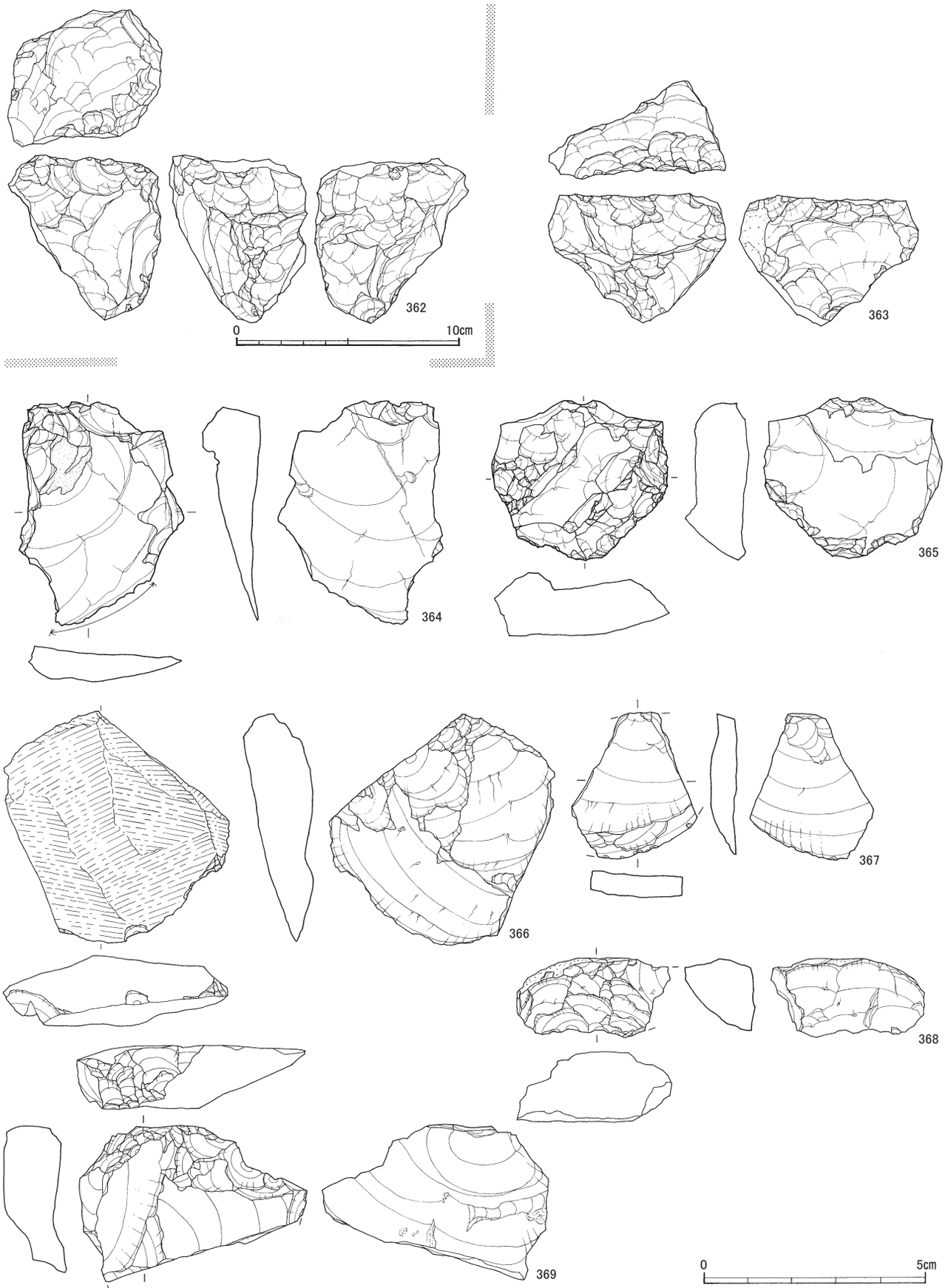
357は黒色安山岩の盤状石核であり，表裏両面に求心的目的剥片剥離が残る。また，左右両端には鱗状剥片を目的とする剥片剥離も観察できる。早期の遺物の混入か。358は鉄石英の石核であり，縦長剥片が得られたようである。359は黒曜石の厚手の剥片素材で，鱗状剥片が目的剥片となる石核である。360は黒曜石の円礫素材で，横長剥片や鱗状剥片を目的剥片とする石核である。361・363は石英の不定形剥片を目的剥片とする石核である。362は鉄石英の大型石核であるが，稜につぶれがあったり，目的剥片剥離が判然としないことを考えると，中世以降の火打石の可能性が高い。364・366・367は不定形剥片の一側縁に微細剥離痕の残る使用痕剥片である。369は鉄石英の分厚い剥片で，調整剥離が複数残されており，下端は折れている。



第74図　縄文時代後・晩期石器実測図（2）



第75図　縄文時代後・晩期石器実測図（3）



第76図　縄文時代後・晩期石器実測図（4）

第36表　縄文時代後・晩期土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土				焼成	備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他		
72	322	20738	C-8	Ⅲa	深鉢	8	口縁部～胴部	外：凹線文・刺突連点文，内：ナデ・沈線文	明褐色 Hue7.5YR5/6	橙色 Hue5YR6/6	－	－	－	○	○	○	白色砂粒・小石	良	20470と接合。
	323	25793	B-6	Ⅳ	深鉢	8	口縁部	外：凹線文・刺突連点文，内：ナデ	明赤褐色 Hue5YA5/6	明赤褐色 Hue5YR5/6 明灰黄色 Hue2.5Y4/2	－	－	－	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	324	一括	D-8	Ⅳ	深鉢	8	口縁部	外：凹線文 内：ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/6	明赤褐色 Hue5YR5/6	－	－	－	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	325	18731	C-7	Ⅱb	深鉢	9	胴部	外：貝殻条痕後ナデ 内：貝殻条痕	橙色 Hue5YR6/6	灰黄褐色 Hue10YR4/2	－	－	－	○	○	○	白色砂粒・小石	良	1567・18591・18625・17401他と接合。
	326	2420	F-5	Ⅱ	深鉢	9	胴部	外：貝殻条痕後ナデ 内：工具ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4 褐灰色 Hue10YR4/1	黄灰色 Hue10YR4/1 にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	327	2415	F-5	Ⅳ	深鉢	9	胴部～底部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4 黒色 Hue10YR2/1	－	8.6	－	○	○	○	白色砂粒・小石	良	2414と接合。
	328	23347	C-6	Ⅱb	深鉢	9	胴部～底部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	暗灰黄色 Hue2.5Y5/3	－	5.0	－	○	○	○	白色砂粒・小石	良	
	329	一括	D-7	Ⅱb	浅鉢	9	胴部	外：ナデ 内：ミガキ（黒色磨研）	黄橙色 Hue10YR7/3 褐灰色 Hue10YR5/1	黒色HueN2/0	－	－	－	○	○	○	白色砂粒・小石	良	

第37表　縄文時代後・晩期石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	石材	産地	計測値				備考
								長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	
73	330	6712	B-5	Ⅲ	石匙	頁岩	－	26.3	10.7	5.2	1.2	
	331	21620	H-5	Ⅲa	打製石鏃	黒曜石	上牛鼻産	(16.3)	17.1	3.5	0.7	
	332	29359	F-9	Ⅲa	打製石鏃	チャートA	－	20.7	14.9	4.5	1.2	
	333	23448	B-7	Ⅲa	打製石鏃	黒曜石	桑ノ木津留産	(17.1)	12.7	2.7	0.5	
	334	8107	C-5	Ⅲ	打製石鏃	黒色安山岩	－	(18.8)	16.0	4.6	0.9	
	335	21632	I-5	Ⅲb	打製石鏃	鉄石英	－	22.0	14.8	3.8	0.8	
	336	一括	C-7	Ⅲa	打製石鏃	頁岩	－	(20.8)	15.8	4.7	1.3	
	337	一括	D-8	Ⅲ	打製石鏃	黒曜石	針尾産	31.6	(13.6)	3.2	1.0	
	338	一括	E-5	Ⅲ	掻器	鉄石英	－	17.0	27.0	10.0	4.1	
	339	23621	B-6	Ⅲa	削器	黒曜石	日東産	49.0	27.2	13.3	14.2	
	340	一括	D-9	Ⅲ	削器	チャートA	－	38.0	29.0	8.0	8.4	
	341	20977	B-8	Ⅲa	小型両面調整石器	黒色安山岩	－	25.4	32.0	10.0	6.0	
	342	16009	E-9	Ⅲb	掻器	鉄石英	－	26.6	41.4	11.0	10.9	
	343	764	F-3	Ⅲ	掻器	チャートA	－	33.0	72.0	8.0	8.5	
	344	19855	E-5	Ⅱb	掻器	鉄石英	－	33.5	68.7	18.0	33.9	
	345	25680	C-8	Ⅱb	楔形石器	水晶	－	26.7	10.0	10.3	3.4	
	346	29346	F-9	Ⅱb	楔形石器	水晶	－	32.0	13.5	12.4	7.0	
74	347	6832	A-6	Ⅲ	小型両面調整石器	黒曜石	日東産	40.8	23.8	13.6	10.5	
	348	23291	A-4	Ⅲa	小型両面調整石器	タンパク石	－	27.4	24.4	10.0	6.0	
	349	920	G-2	Ⅲ	削器	頁岩	－	70.4	100.7	13.3	98.5	粗製。
	350	21085	E-7	Ⅲa	磨製石斧	頁岩	－	(75.3)	70.6	18.9	151.7	
	351	20662	B-8	Ⅲa	礫器	安山岩	－	88.0	108.0	29.7	500.0	
	352	20832	E-7	Ⅲa	礫器	安山岩	－	105.2	121.5	57.0	700.0	
	353	20980	B-7	Ⅱb	敲石	安山岩	－	120.0	51.0	41.0	400.0	
	354	一括	D-7	Ⅱb	敲石	安山岩	－	146.0	43.0	38.5	400.0	
75	355	一括	D-7	Ⅲ	磨石	安山岩	－	10.1	8.2	4.7	600.0	
	356	一括	D-7	Ⅲ	磨石	安山岩	－	11.1	9.1	4.7	700.0	
	357	24307	F-2	Ⅳ	石核	黒色安山岩	－	35.0	40.3	21.5	30.1	
	358	14883	D-6	Ⅱb	石核	鉄石英	－	43.5	39.1	34.0	61.7	
	359	20658	B-8	Ⅲa	石核	黒曜石	上牛鼻産	16.4	14.7	19.6	3.6	
	360	一括	I-3	Ⅲ	石核	黒曜石	上牛鼻産	25.3	26.5	37.0	26.4	
	361	一括	D-8	Ⅱb	石核	石英	－	27.0	37.0	24.4	23.2	
76	362	一括	D-5	Ⅱb	石核	鉄石英	－	75.0	70.0	61.8	307.4	
	363	9157	D-5	Ⅱb	石核	石英	－	29.1	40.0	22.0	19.3	
	364	23445	B-7	Ⅲa	使用痕剥片	玉髄	－	50.6	37.3	13.0	16.6	
	365	29437	E-6	Ⅲa	掻器	鉄石英	－	36.4	40.2	13.3	21.0	
	366	21628	I-5	Ⅲb	使用痕剥片	黒曜石	上牛鼻産	52.6	51.3	16.3	29.8	
	367	2430	F-6	Ⅲ	使用痕剥片	チャートA	－	33.5	29.0	5.7	6.1	
	368	19767	C-6	Ⅲa	掻器	黒曜石	日東産	18.0	35.0	16.0	8.2	
	369	27990	D-3	Ⅵ	使用痕剥片	鉄石英	－	35.6	52.0	14.4	24.0	

第６節　弥生・古墳時代の調査

１　調査の概要

弥生時代から古墳時代に比定される遺構は確認されなかった。弥生時代の遺物は１点，古墳時代の遺物は342点出土した。なお，石器中，磨製石鏃については弥生・古墳の何れの時代か特定できなかったので，本項では古墳時代に含めて報告する。古墳時代の遺物については，調査区南側に偏在して出土するが，古墳時代以降の何れの時代についても同様な傾向にある。その理由については，自然地形が傾斜し下ることによる雨水等による流れ込みにより生じた可能性を考える。

２　遺物

（１）土器

弥生時代相当の遺物と判断した資料は，壺形土器１点である。小片資料のため，土器型式や弥生時代の詳細な時期は不明である。古墳時代相当の遺物は342点中12点を図化した。何れも，既知の土器研究における東原式土器に比定される。東原式土器の中でも，胴部上位に明瞭な縦・斜位のハケメを施し，顕著にカキアゲを施す一群に限定されることから，ある一時期の人の活動の痕跡を示す資料群である。

①　弥生時代

（ア）壺形土器　370

弥生時代相当の遺物は，本点１点のみの出土である。壺形土器で，頸部に断面三角形状の突帯を巡らす。内外面共に，丁寧なヘラ状工具ナデを施す。外面には，横位の工具痕が残され，内面にも，斜位の工具痕が捉えられる。頸部に断面三角形状の突帯が２条巡らされるが，縁端が摩滅により潰れている。

②　古墳時代

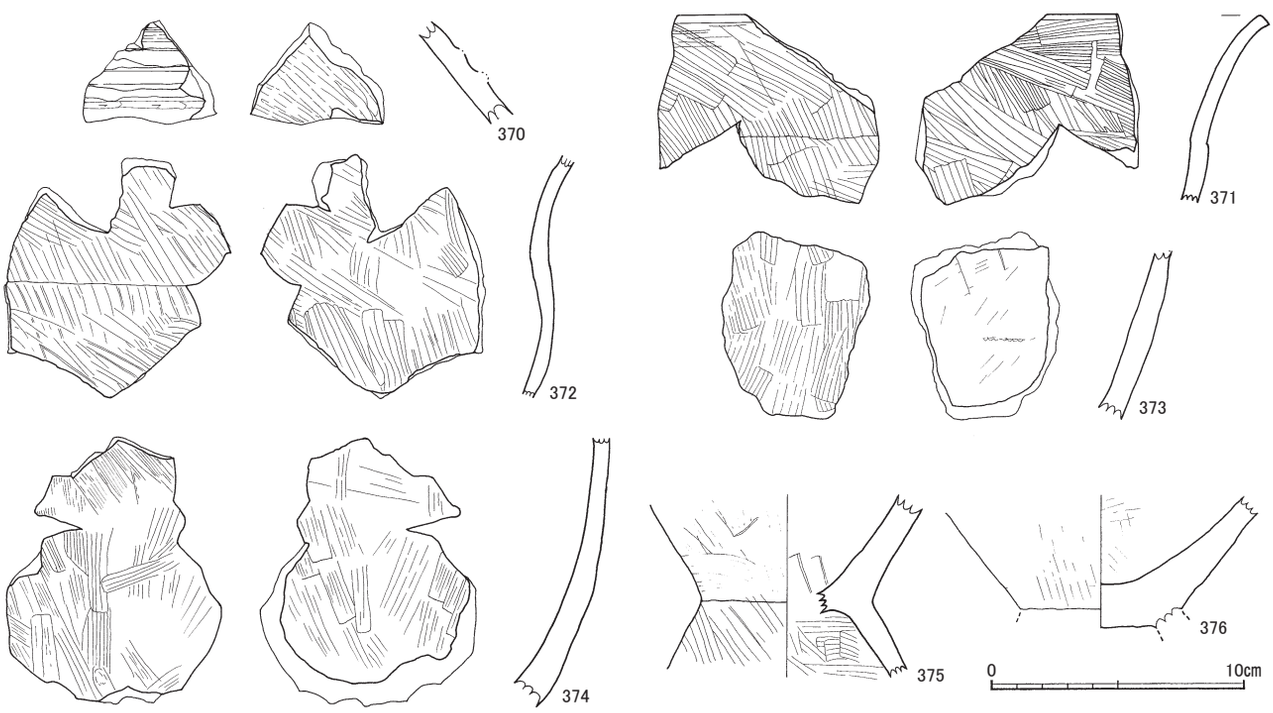
（ア）甕形土器　371 ～ 377

本群は，底部から胴部中位にかけて膨らみ，胴部上位で内弯に転じ窄まるが，口縁部に至り外反する。内外面ともに，ハケメを縦・斜走させる。外面の胴部上位では，いわゆるカキアゲを施す。東原式土器に比定される一群である。

371・372は，内外面共に条線状の微細なハケメを施す。基本的に，下位から上位へ，右から左方向へハケメ調整を行う。器厚が４，５mmと薄い。

373・374は，胴部片資料である。器厚や色調，器面調整の違いから，371・372とは別個体である。373の外面調整は条線状で，374は条痕状である。

375 ～ 377は，底部資料で，ハケメ調整を施す。胴部下位から中位に向けて直線的に伸びる器形を呈し，脚の径も375は折損部径が9.6cmとスマートである。375 ～ 377の底部外面は平坦に成形される。これらの内外面のハケメ調整やスマートな器形など，371・372等に見られる底部の特徴を有しており，同一個体と思われる。377は，胴部中位のハケメを除き，指頭による凹みが胴部下位から上位に向けて放射状に伸び，胴部中位には指頭押圧が複数捉えられる。僅かに脚をもち，畳付の縁端を鋭く尖らせる。胎土中に，乳白色の砂粒が多量に含まれ



第77図　弥生・古墳時代土器実測図（１）

る。外面には，煤が付着する。

（イ）ミニチュア土器　378

１点のみの出土である。器面には指頭押圧やナデが施されるが，整形が粗雑なため，器面には，粘土紐の輪積み痕が明瞭に残される。

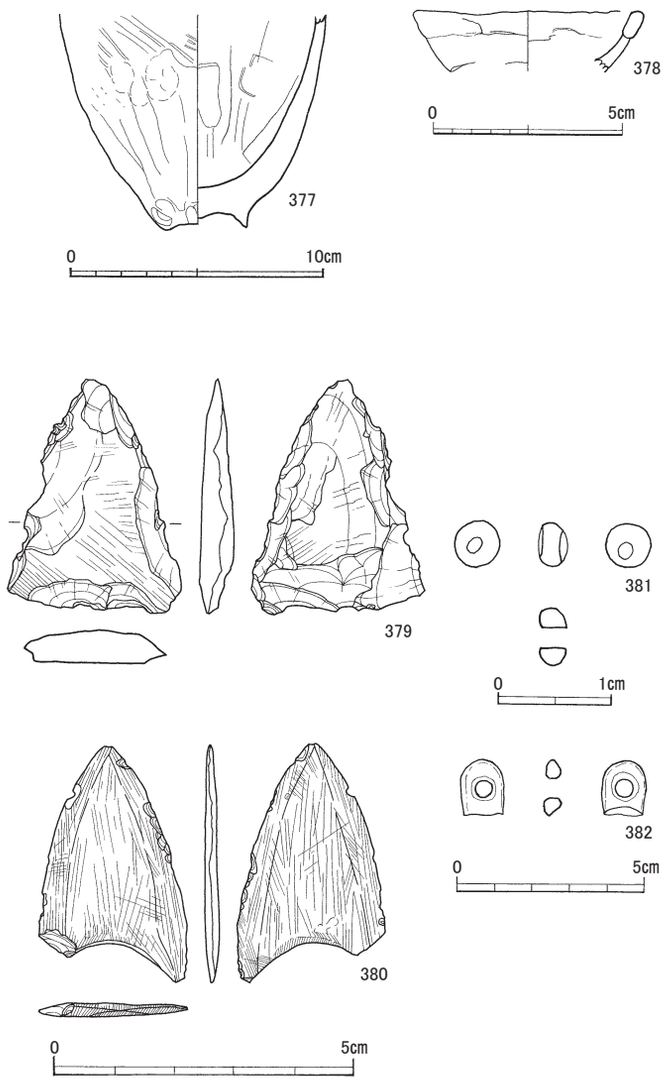
（２）石器・石製品　379 ～ 382

379は，頁岩製である。側縁部に粗い剥離を施し，二等辺三角形の器形を作出する。380とほぼ同形・大きさを呈し，器面に部分的な削痕が捉えられることから，今後ミガキにより整形を施す中途の磨製石鏃未製品と考えられる。

380は，頁岩性の磨製石鏃である。器形は，二等辺三角形状である。器面には，長軸方向の削痕が無数に入り，一方側縁部には，表裏面と直交方向に削痕が入る。

381は，小玉である。本遺跡で１点のみの出土である。古代・中世相当のⅡb層出土であり，本来の包含層及び時代は不明であるが，弥生・古墳時代に含めて報告する。鮮やかな緑色を呈している。

382は，器種不明の石製品である。平面形は舌状を呈しているが，欠損しており，本来の器形や用途は不明である。直径５mmの穿孔が，表裏両面側から穿たれている。Ⅱb層は古代・中世相当であるが，石製品であることから古墳時代に含めて報告することとした。



第78図　弥生・古墳時代土器（２）・石器・石製品実測図

第38表　弥生・古墳時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃	胎土 他	焼成	備考
77	370	11278	C-9	Ⅱa	壺形	胴部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい橙色 Hue5YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	－	－	－	○	○	○		良	
	371	398	B-5	Ⅱ	甕形	口縁部～胴部	外：ハケメ 内：ハケメ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	灰黄褐色 Hue10YR6/2	－	－	－	○	○	○		良	1591と接合。
	372	509	B-5	Ⅱ	甕形	胴部	外：ハケメ 内：ハケメ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	灰黄色 Hue2.5YR7/2	－	－	－	○	○	○		良	1598と接合。
	373	14399	E-8	Ⅱb	甕形	胴部	外：ハケメ 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	黄褐色 Hue2.5Y5/3	－	－	－	○	○	○		良	
	374	22683	F-9	Ⅱb	甕形	胴部	外：ハケメ 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	－	－	－	○	○	○		良	22678・22685と接合。
	375	17347	E-8	Ⅱb	甕形	底部	外：ハケメ後ナデ 内：ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	－	－	－	○	○	○		良	内面に煤付着。 17344と接合。
	376	3235	A-5	Ⅱ	甕形	底部	外：ハケメ後ナデ 内：ハケメ後ナデ	黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	－	－	－	○	○	○		良	外面に煤付着。 5618他と接合。
78	377	5095	I-4	Ⅳ	甕形	胴部～底部	外：胴部中位ハケメ，胴部下位指頭押圧によるナデ 内：ハケメ後指頭押圧によるナデ	橙色 Hue7.5YR7/6 にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	橙色 Hue5YR6/6	－	3.4	－	○	○	○		良	
	378	一括	B-7	Ⅱ	ミニチュア土器	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	褐色 Hue10YR4/4	褐色 Hue10YR4/4	6.0	－	－	○	○	○	乳白色砂粒	良	

第39表　弥生・古墳時代石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器別	計測値(mm，g) 長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
78	379	1487	B-5	Ⅱ	打製石鏃	39.5	20.9	5.5	3.61	頁岩	
	380	22319	F-8	Ⅱb	磨製石鏃	40.0	24.9	2.5	5.94	頁岩	

第40表　弥生・古墳時代石製品観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	種別	色調	計測値（mm，g） 外径	穿孔径	重さ	石材	備考
78	381	14038	D-9	Ⅱb	小玉	明るい緑色	4	1.5	0.07	不明	
	382	－	－	表土	不明石製品	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	11.5	5	0.55	不明	

第７節　古代の調査

１　調査の概要

本遺跡における古代比定遺構は，畝溝が２面，掘立柱建物跡が４棟，土坑が５基である。

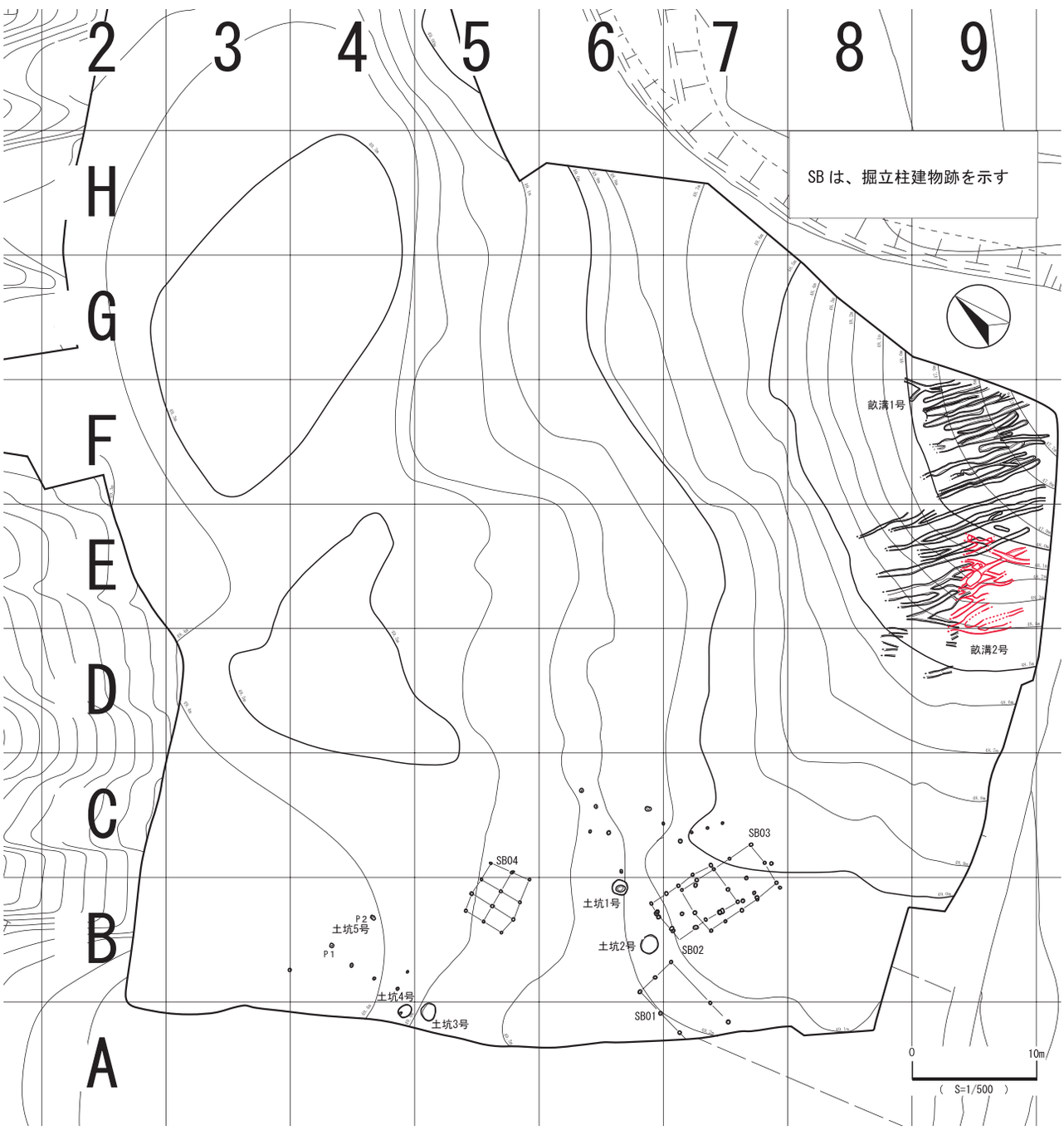
遺構数に比して，遺物点数が8699点と多い点に特徴がある。主な遺物は，土師器の埦・坏・皿が3464点（内黒土師器を含む。），土師器の甕が4485点，甑等が13点，須恵器の蓋・甕・壺が696点が出土した。他に，越州窯系青磁Ⅰ類が５点出土したが，青磁の編年上，中世の輸入陶磁器の項目で報告してある。

２　遺構

古代比定の遺構は，Ⅲa層（黄褐色土）で検出された。Ⅱc層（暗赤褐色砂壌土）を埋土とする遺構を古代に比定し，Ⅱb層主体を中世相当と判断した。

Ａ～Ｃ－４～７区を中心に，掘立柱建物跡が４棟，土坑が５基検出された。掘立柱建物跡は，１棟が南北方向に軸を据え，残る３棟が東西方向に軸を向ける。３棟は庇を有さず，残る１棟は総柱を構成し，10m程離れて所在する。庇を有さないタイプの内，２棟は切り合うが，切り合い関係は捉えられない。

建物群の周囲には，土坑が５基検出されており，建物に伴う土坑との位置付けで捉えた。土坑の多くは，大きさや



第79図　古代遺構位置図

円形の平面形，深さ等を共通し，一部の土坑に焼土域が確認される。B－４区で検出された土坑５号は，２基の柱穴状のピットで構成され，片方のピット内上位には，二枚貝と巻き貝の２種類の貝殻が多量に包含される。廃棄の結果か，祭祀的行為によるものかは不明である。

D～F－８～10区には，畝溝が２面切り合って検出された。掘立柱建物跡群等と畝溝の時期差については判然としないが，深さの浅い畝溝が，極薄いⅡc層（暗赤褐色砂壌土）を埋土として検出されたことや，周囲に多量に出土したにも関わらず古代比定の土師器小片２点しか埋土中に含まれないことから，畝溝が掘立柱建物跡等より時期が古い可能性があると捉えた。

なお，掘立柱建物跡群周囲の土坑内には古代の遺物が多量に包含され，包含層中の遺物の多くは掘立柱建物跡群に伴うと考えられる。

以上のような検出状況の考察から，古代で最も古い時期の可能性もある畝溝を先に掲載し，その後に，共伴性の高い掘立柱建物跡や土坑を掲載することとした。

（１）畝溝

畝溝が同一地域に，切り合って２面検出された。切り合い関係が錯綜することから，ほぼ同時期と思われるが，畝溝１号がより広範囲に検出されたことから，基本的に畝溝１号が古く，畝溝２号が新しい溝形成と捉える。

畝溝の埋土は，暗赤褐色砂壌土（Ⅱc層）の単一土質であり，Ⅱc層の面的な検出により古代比定のⅡc層の土層の存在が顕現した。

埋土中には，土師器の小片が２点包含されるが，図化は不可能であった。第86図古代遺物出土状況図では，畝溝を中心とした地点に多量の古代遺物の出土が捉えられるが，殆どはⅡb層出土遺物であり，Ⅱb層内における検出位置の計測値である。なお，古代比定のⅡc層は，現況では調査区の一部に極薄くしか捉えられない。

畝溝周辺に古代比定の遺物が多数出土する状況は，流れ込みの可能性の他に，地形が低い畝溝検出の地点周辺に，より高位置にあるA・B－１・２区周辺の土砂を持ち込んで整地した可能性も一考である（P107第86図参照。）。古代畝溝周辺は，中世においては，掘立柱建物跡C群が形成されており，掘立柱建物跡建築時の土地改変（整備）に伴う可能性を考えた。

①　畝溝１号

D～F－８～10区のⅢa層上面で検出された。畝間が東西方向に揃っており，畝の単位も16.0m～24.0mと長い。主軸がN40° Wを示す。深さは，30cm程度である。

②　畝溝２号

E－９区のⅢa層上面で検出された。畝溝１号の上面に重なるように検出された。畝溝１号が，東西方向に揃っているのに対して，本遺構は１号と同じ東西方向を主にしながら，一部南北方向に延びる溝も捉えられ，切り合い関係も，上下に錯綜する。

（２）掘立柱建物跡

A～C－５～７区の範囲内に柱穴が検出され，掘立柱建物跡の復元を試みた。この遺構群の周囲に確認された柱穴数は少なく，何れも定形的な掘立柱建物跡に復元されたことから，建物群の蓋然性が高く，復元の錯誤の可能性は小さいと思われる。

庇をもたない掘立柱建物跡（１～３号）が３棟と，総柱の掘立柱建物跡（４号）が１棟検出された。総柱の掘立柱建物跡（４号）は東西方向を軸とし，他の建物群から10数m離れて位置する。他の掘立柱建物跡は南北方向に１棟（１号），東西方向に２棟（２・３号）あり，東西方向の２棟は切り合う。なお，掘立柱建物跡４号の西側には柱穴の並びが「L」字状に捉えられ，掘立柱建物跡１・２号の北隣に柱穴が複数検出されたが，掘立柱建物跡の復元には至らなかった。

①　掘立柱建物跡１号

A・B－６・７区のⅢa層上面で検出され，暗赤褐色砂壌土（Ⅱc層）を埋土とする。

規格は２間×３間の建物で，大きさは3.5m×6.8mである。主軸は，Ｎ０° Wを示し，古代比定の掘立柱建物跡で唯一南北方向に主軸を成す。３基の柱穴の抜けがあるが，左上の柱穴２基の推定地点は調査区外に位置するため，検出できなかった。

②　掘立柱建物跡２号

B－６，B・C－７区のⅢa層上面で検出され，暗赤褐色砂壌土（Ⅱc層）を埋土とする。

西側には庇が付いていた可能性もあるが，復元に至らず，２間×４間の規格の建物の可能性で報告したい。一部，柱穴の抜けが見られる。大きさは3.7m×5.8mである。主軸は，N23° Wを示し，東西方向を向く。

③　掘立柱建物跡３号

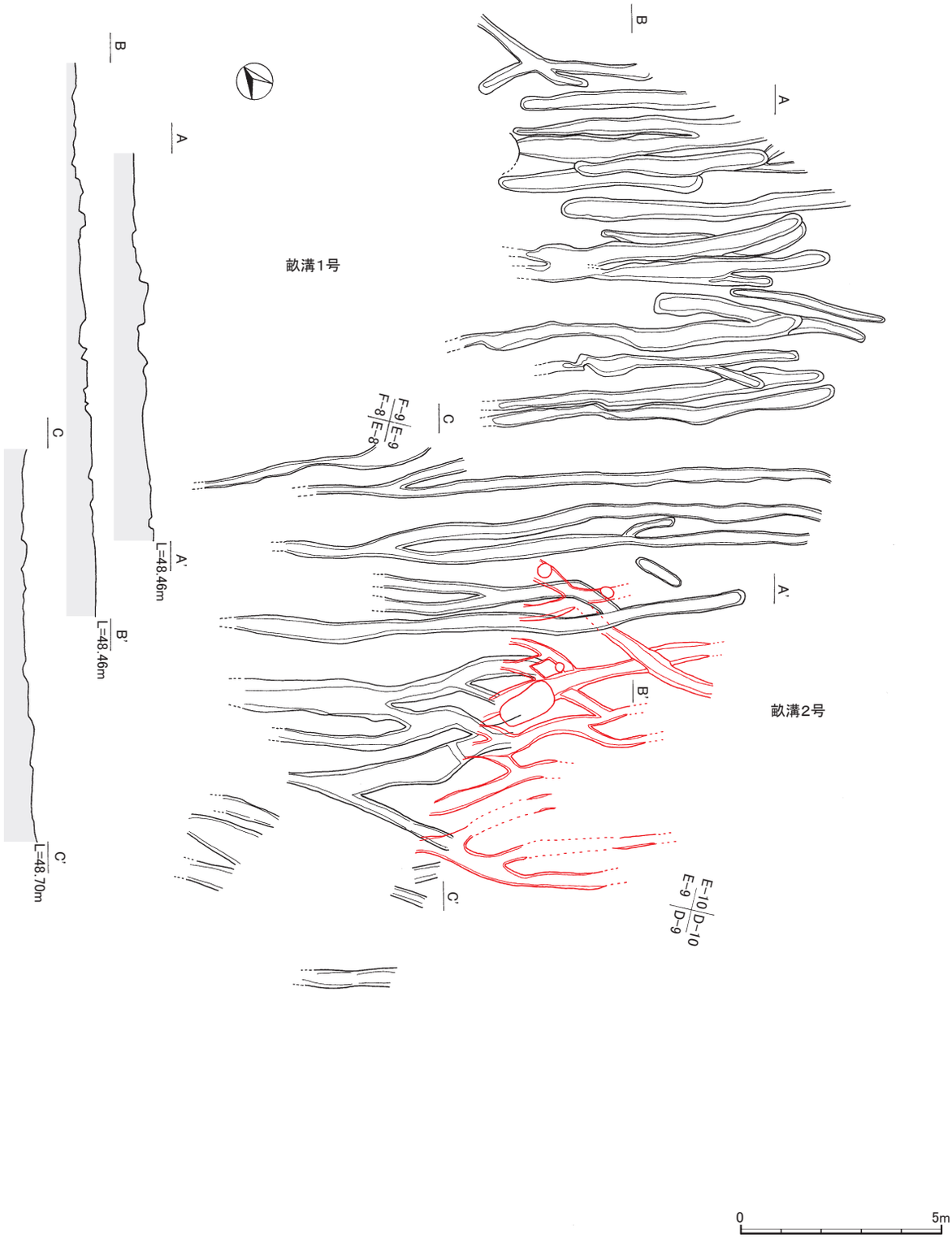
B・C－７区のⅢa層上面で検出され，暗赤褐色砂壌土（Ⅱc層）を埋土とする。

規格は２間×４間の建物で，大きさは4.2m×6.7mである。主軸は，N18° Wを示し，東西方向に向く。

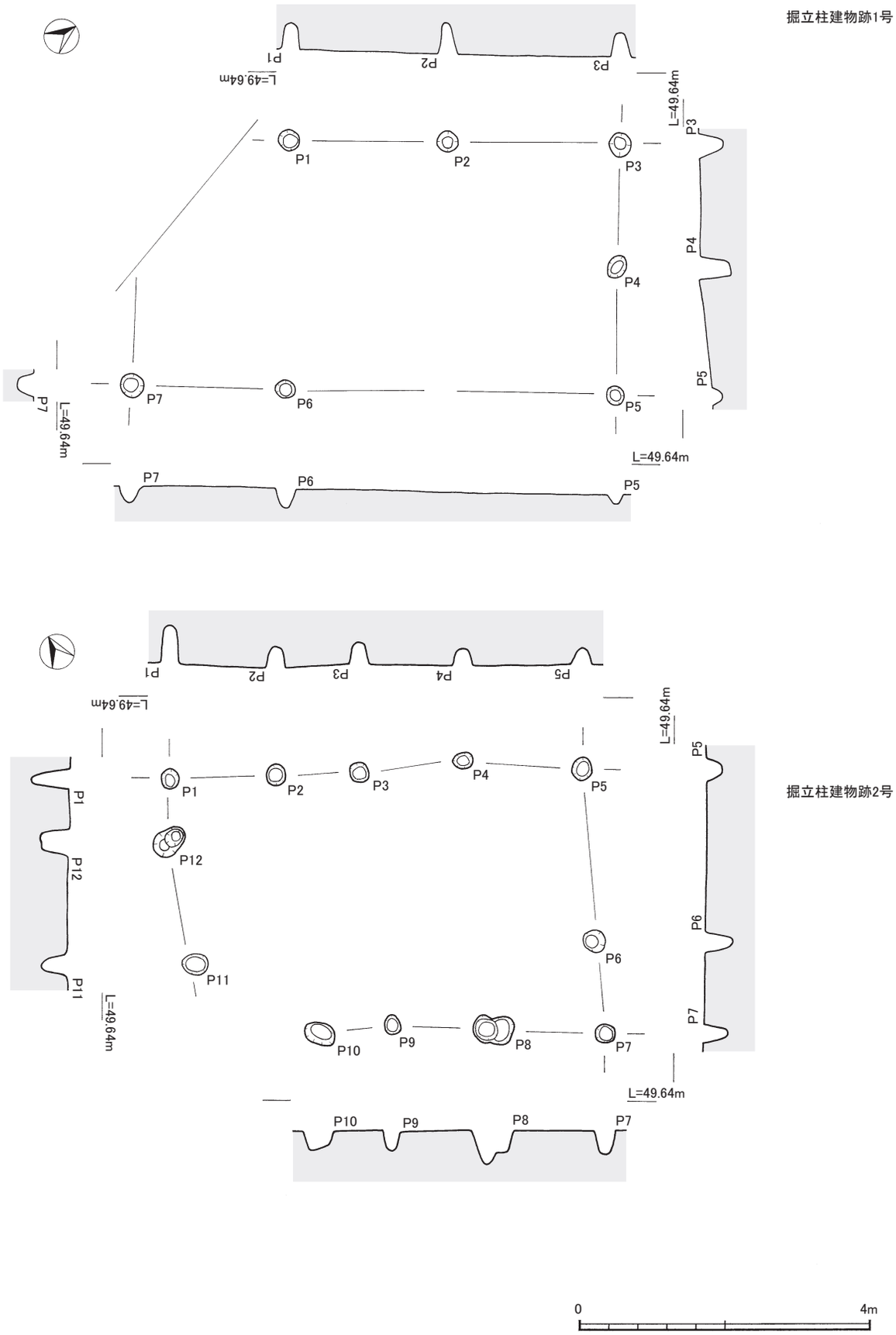
④　掘立柱建物跡４号

B・C－５区のⅢa層上面において検出され，暗赤褐色砂壌土（Ⅱc層）を埋土とする。

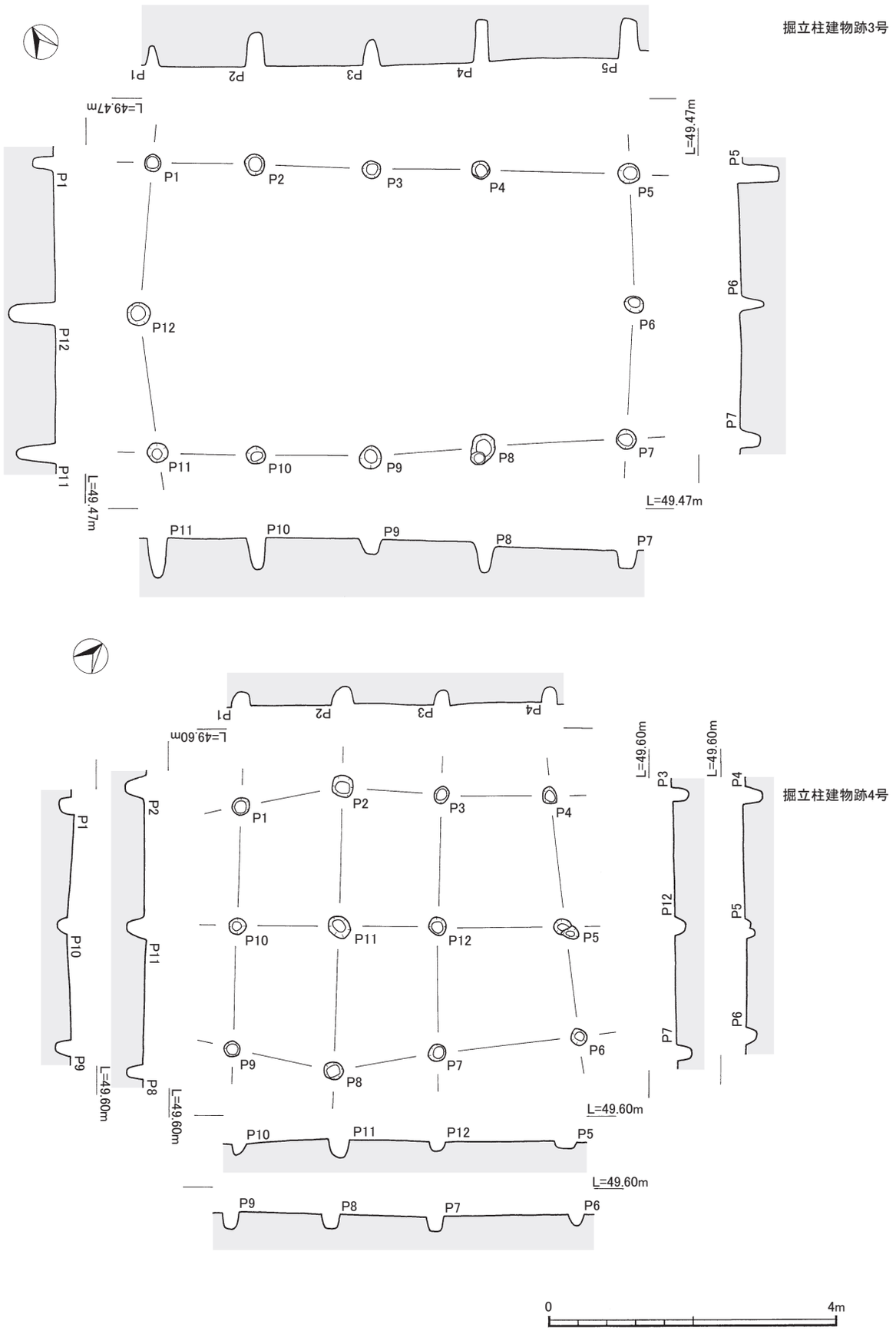
規格は，２間×３間で，大きさは3.3m×4.8mであ



第80図　古代畝溝１号・２号実測図



第81図　古代掘立柱建物跡１号・２号実測図



第82図　古代掘立柱建物跡３号・４号実測図

る。主軸はN ４° Ｅを示し，東西方向を向く。古代比定で唯一の総柱の建物跡である。

（３）土坑

①　土坑１号

Ｂ－６区のⅢa層上面で検出した。平面観は円形で，中央に更に円形の小ピットが掘り込まれる。断面観は，２段の段差を有し，床面は平坦である。規模は1.25m×1.3m，検出面からの深さは最大で23cmである。

埋土は，茶褐色砂壌土であり，部分的に暗赤褐色砂壌土（Ⅱc層）との混土が見られる。埋土内に，比較的残存状況がよい土師甕が出土したことから，古代比定の可能性が高いと判断した。なお，埋土内には，土師器13点（埦・坏等４点，甕９点）が包含される。

図化した１は土師甕である。口縁部及び底部の一部を欠くものの，器体の多くが潰された状況で，本土坑の中央の凹み部分で出土した。残存部の復元から短胴で底部が丸底を呈すると推定される。胴部最大径28.2cmを測る。外面には，胴部中位を中心にヘラナデが巡らさせる。器体には，ヘラ状工具の側縁の工具痕が凹み状に残される。内面には，横位を中心に部分的に斜行するケズリが施される。その後，底部先端を中心として放射状に指頭押圧で強いナデを密に施し，1.5cm ～ 2.5cm幅の縦位の凹みが並列して密に残される。底部を中心に煤が顕著に付着する。腰部外面には，器面剥離が３箇所に集中的に捉えられ，煮炊き時に竈や礫などに据え付けした際の傷である可能性を見る。

本土坑中には炭化木片が包含され，放射性炭素年代測定を行った結果，3780±30yrBP（縄文時代後期前葉頃）の値が出た。埋土から古代比定の判断は揺るぎないと考えられ，縄文時代後期の炭化物の紛れ込みと判断した。

②　土坑２号

平面観は円形で，断面観は平坦な床面を呈し，壁面３面は明瞭に立ち上がり，１面はなだらかに斜立する。規模は，1.35m×1.5mを測り，深さは19cmである。

黄褐色土（Ⅲa層）と暗赤褐色砂壌土（Ⅱc層）を混土とする茶褐色砂壌土を埋土とする。床面の一部には地山が赤化した焼土域が確認される。

埋土中には，遺物が多数包含されるが，小片資料が殆どで，図化したのは４点である。１は，土師器の埦の口縁部から体部の破片である。体部から口縁部に直線的に伸び，口縁部上端で僅かに端反る。２は，土師器の甕の口縁部片である。内面下位に僅かに縦位のケズリが捉えられる。３・４は，土師器の甕・鉢の胴部片である。内面に斜位のケズリが捉えられる。煤が著しく付着する。他の小片資料は，土師器の埦，内黒土師器の埦，土師甕で占められる。

③　土坑３号

Ａ－５区で検出された。平面観は，不定形な楕円形である。断面観は，平坦ながら部分的に凹凸が見られる。1.07m×1.45mを測り，深さは25cmである。

埋土①の黒褐色砂壌土（Ⅱb層）を含みながらも，主体となる②・③が暗赤褐色土（Ⅱc層）であることから，古代に比定される。

埋土中に砥石が１点含まれるが，小片のため図化しなかった。火山ガラスを含む砂岩製である。

④　土坑４号

Ａ－４区で検出された。平面観は，定形的な楕円形である。断面観は，床面が凹凸を呈する。南面は直立し，他の３面は緩やかに斜立する。0.9m×1.12mを測り，深さは22cmである。

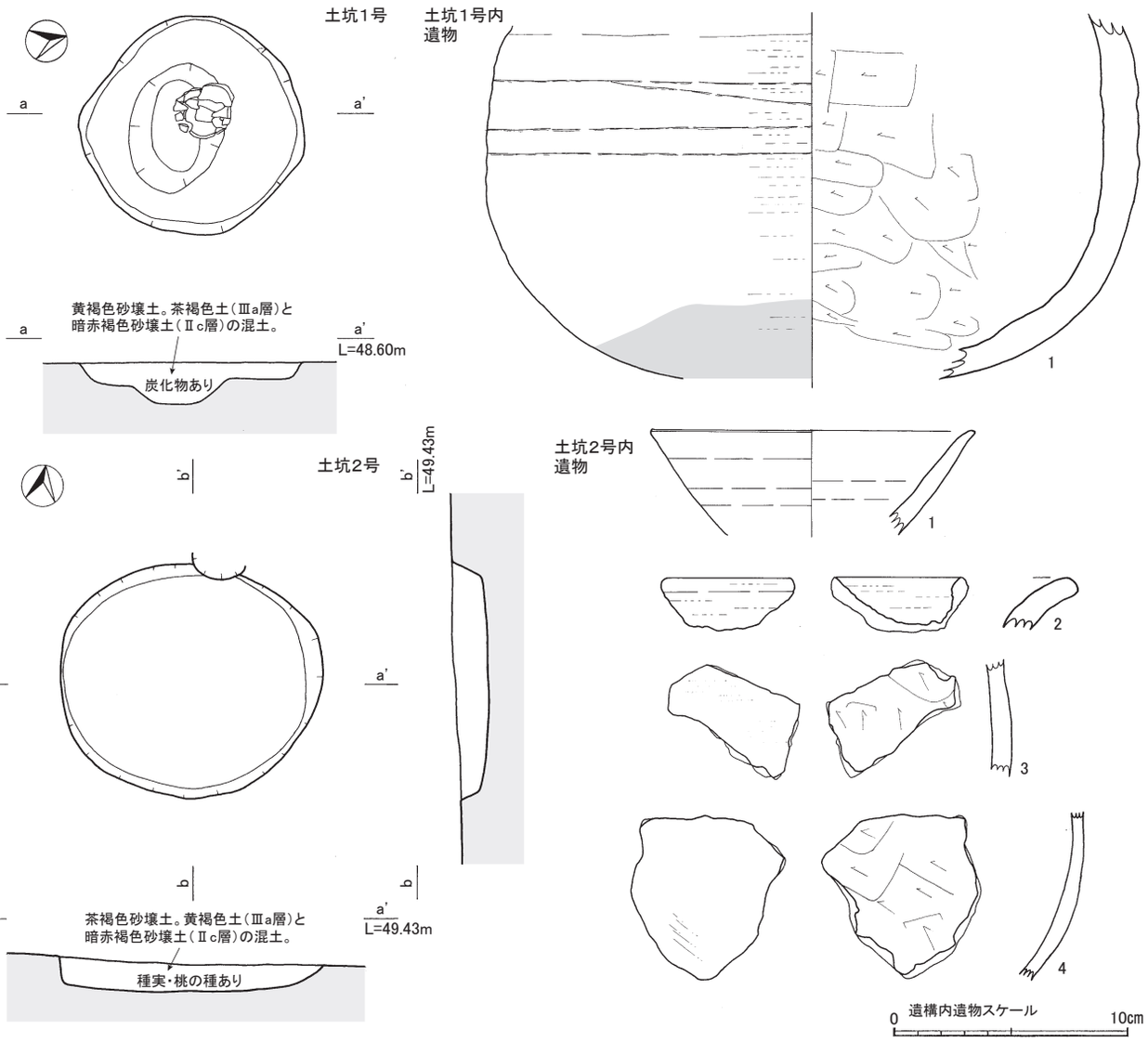
埋土上位の一部は被熱し，埋土が赤化・硬化する焼土域を有する。焼土域の厚さは８cm程である。顕著な赤化は図示したが，弱い赤化の範囲は縁端が判然としないので図化できなかった。土坑の西側には，黒褐色砂壌土（Ⅱb層）を埋土とする中世の柱穴が掘り込まれ，古代との層位的切り合い関係が顕著に捉えられる。

⑤　土坑５号

Ｂ－４区のⅥ層上面で検出されたが，共にⅡc層を埋土とする。P1・P2の二つの柱穴状ピットにより構成され，Ｐ１は深さが1.4m，Ｐ２が深さ1.16mである。本遺跡では，深さ１m超のピットは類を見ず，両ピットが近在することから，両基はセット関係にあると捉えた。なお，２基を結ぶ軸は，掘立柱建物跡２・３・４号と同様な東西方向を向き，関連性がある可能性もある。

Ｐ２の上位には，カワニナ（最大長2.8 ～ 3cm程）が180点，マツカサガイ（最大長4.5cm程）が294点，幅15cm，深さ20cm程の範囲で，まとまって出土した。尚，マツカサガイは，概して貝内面側が上向きに置かれている。貝殻には赤化等焼いた痕跡は認められず，本遺構及び周囲に炭化物や赤化は見られない。県内では，黒川洞穴内において出土し，少なくとも縄文時代には食用にされていたと考えられる。本遺構の貝の大きさは，一定程度の大きさを有しており，意図的選択が窺え，食用と見なされる。なお，カワニナやマツカサガイは，清流ながら枯れ葉などが堆積する河川に好んで生息する。マツカサガイは環境省のレッドリスト準絶滅危惧種NTに位置づけられており，本県の現況ではいちき串木野市の高松川周辺のみで生息が確認される希少種となっている。一方，Ｐ１内には，遺物等含まれない。

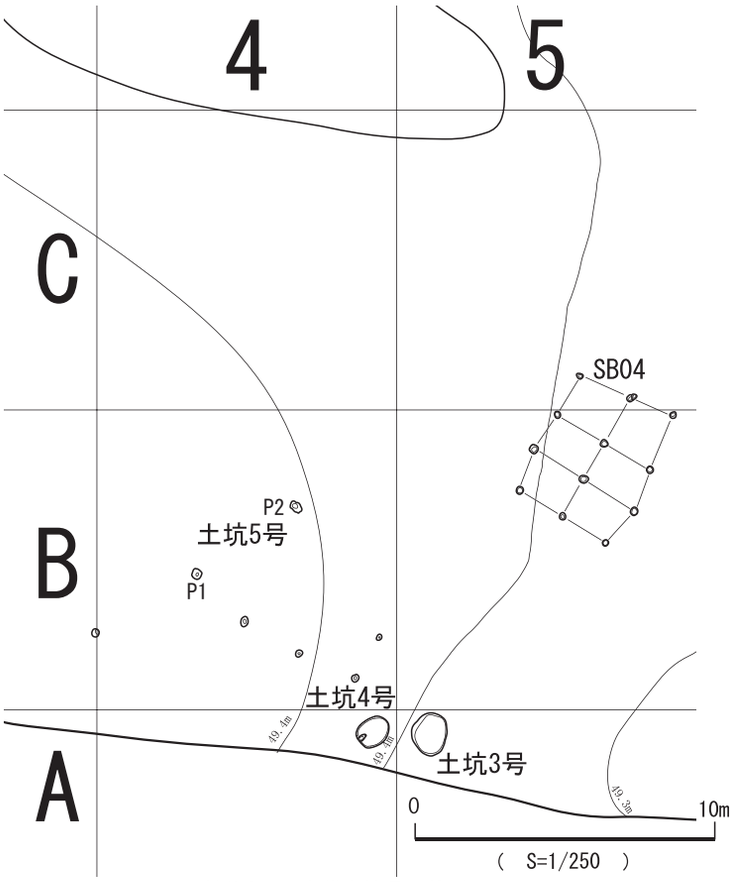
柱穴状土坑の上位に２種類の貝殻のみを多量に包含する点や，他に類を見ない１ｍを越える深さを有する点で特徴的であり，祭祀に係る遺構の可能性もある。



① 黒褐色砂壌土（Ⅱb層）。
② 暗茶褐色砂壌土。黒褐色砂壌土（Ⅱb層）と暗赤褐色土（Ⅱc層）の混土。
③ 茶褐色砂壌土。暗赤褐色砂壌土（Ⅱc層）と茶褐色土（Ⅲa層）の混土。

① 赤褐色砂壌土。焼土である。
② 茶褐色砂壌土。暗赤褐色砂壌土（Ⅱc層）と茶褐色土（Ⅲa層）の混土。
③ 黒褐色砂壌土（Ⅱb層）。

第83図　古代土坑１～４号実測図



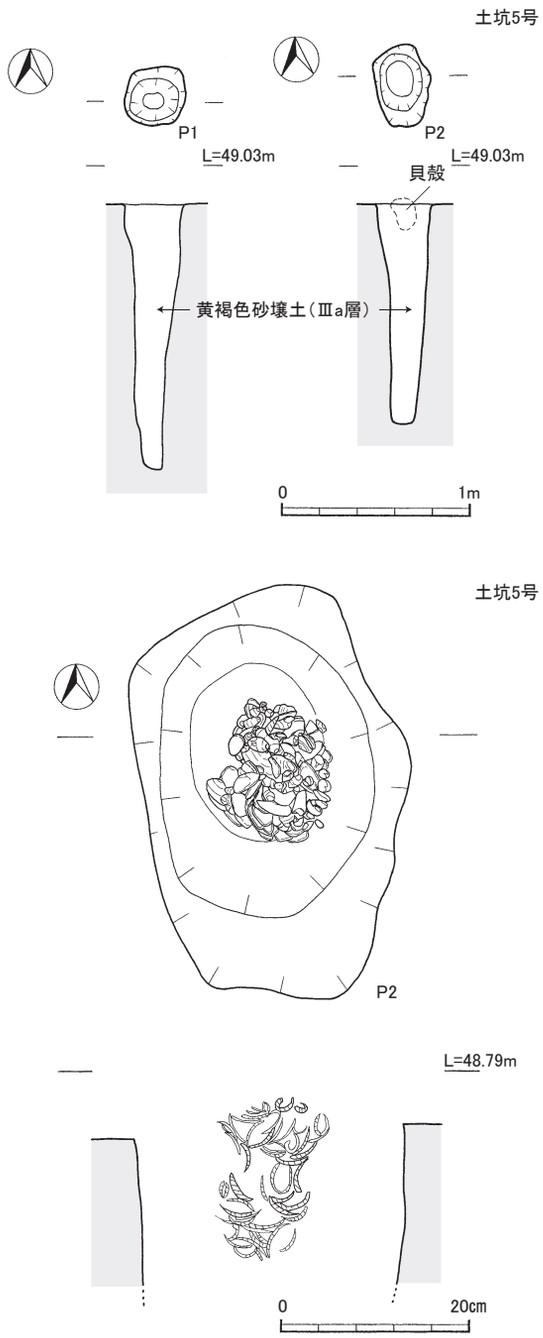
第84図　古代土坑５号位置図

貝殻を伴う古代・中世の遺構が検出された遺跡には，本遺跡から直線距離数100mの霜月田遺跡が挙げられる。霜月田遺跡では，落し穴の埋土中位程に，貝殻が集中して出土した（霜月田2008）。貝殻の種類等についての報告がなく，詳細は不明であるが，埋め戻しの際に，投下されたと考えられる。

県内では，古代の３基の柱穴に，中世の2基の土坑に，それぞれ貝殻が入っていた事例の報告がある（安茶ヶ原2007）が，土坑の性格等は不明である。ハマグリ等海産貝類を主体として多種に及び，ヤマトシジミ他一部カワニナ等の淡水産貝類も一定量出土した。「同時不変的に食されていたのか，それとも何らからの目的をもって特別に採取されたのか」については，特段の状況説明はない。「（安茶ヶ原遺跡出土の貝と同類の）貝は川上貝塚からも出土しているため，普遍的に食されていた」（安茶ヶ原2007）と推定している。

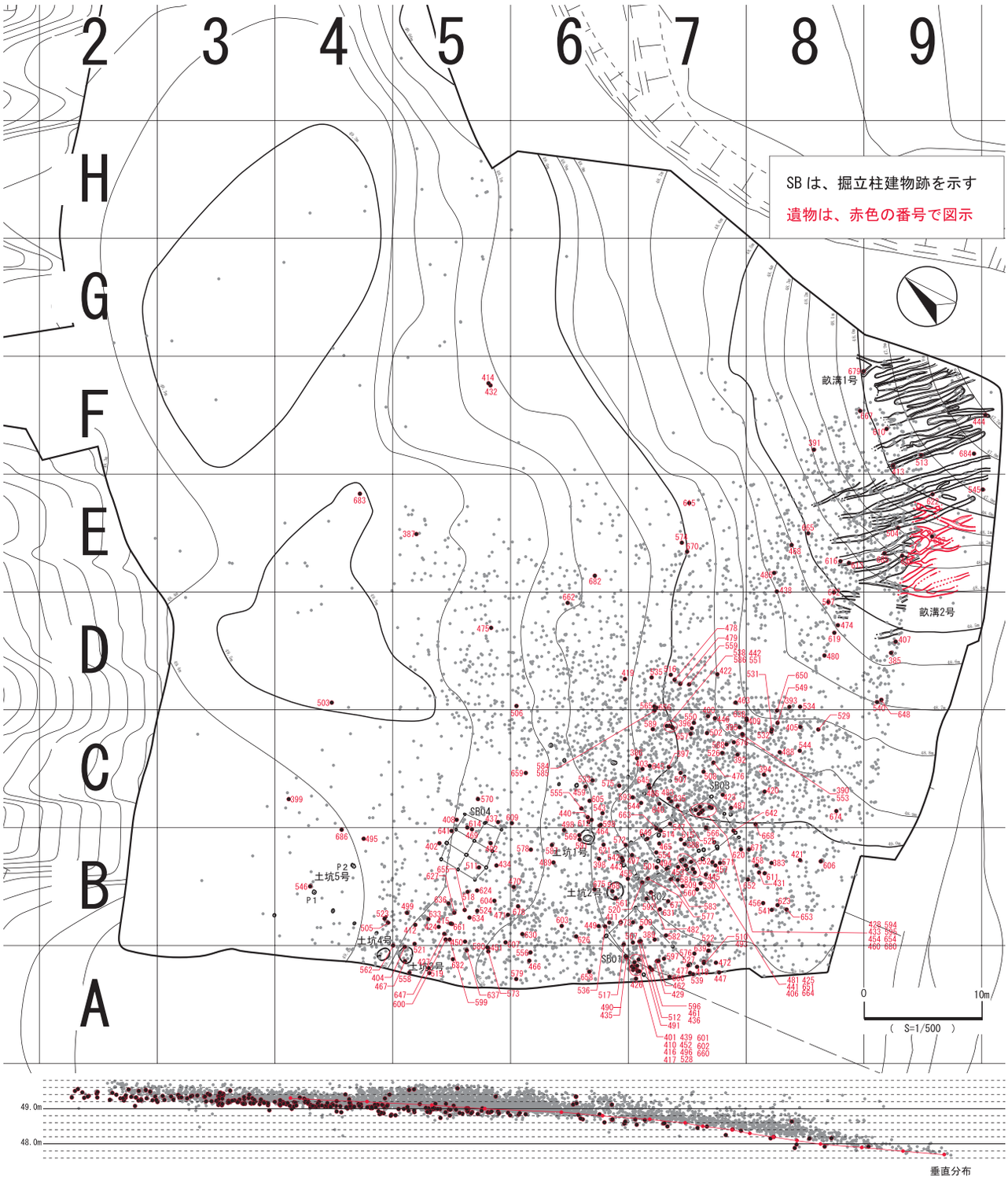
３　遺物

古代の包含層はⅡb層・Ⅱc層であるが，本遺跡の古代比定の遺物の殆どは，Ⅱb層を中心に出土する。なお，Ⅱc層は，現況では遺跡の一部に15cm程の層厚でしか残存しない。層厚の希薄さや色調の類似性から，Ⅱb層との分層が困難であり，下位のⅡc層と上位のⅡb層が混在・一体化している可能性，Ⅱb層の撹乱を受けた可能性等が考えられる。



第85図　古代土坑５号実測図

総点数8699点の内，土師器坏等が2220点，内黒土師器埦等が1262点，墨書土器，土師甕・鉢が4485点，甑等が13点，須恵器甕・壺等が696点，土錘が18点，土製品等が５点である。掘立柱建物跡等が検出された調査区南西側から，畝溝が検出された南東側にかけて多数の遺物が出土した。第86図より，掘立柱建物跡群周辺の遺物と畝溝周辺の遺物の出土レベルを比較してみた。畝溝周辺の遺物は，掘立柱建物跡群周辺の遺物より上位に出土する傾向にあり，畝溝周辺遺物は，流れ込み等の可能性を示す。



第86図　古代遺物出土状況図

（1）土師器

土師器は埦・坏・皿・蓋に器種分類し，それらの形態分類を行った。以下各類を記す。土師器埦と内黒土師器については，全体の形態が分かる個体が欠如しているため，高台の形態的特徴で分類を行った。

① 蓋　383 ～ 385

383は大型の蓋である。つまみ部には指頭圧痕がみられ，上面には指頭押圧による凹みを成す。器面はナデ調整であり，内面のナデは粗い。

384・385は蓋の端部である。384は緩やかに下方に伸びる。器面調整は，内外面ともに回転ナデである。天井部は僅かにすり減りがみられる。

385は端部が屈曲するもので，屈曲部に稜を成す。内外面ともに回転ナデ後，横方向のミガキが施される。

本類は，須恵器の模倣形態を成していることから，８世紀後半～９世紀前半段階のものと考えられる。

② 椀

（ア）椀Ⅰ類　386・387

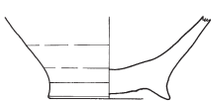
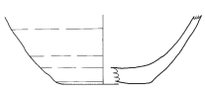
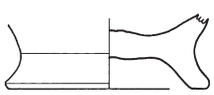
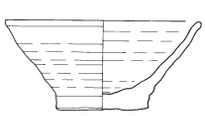
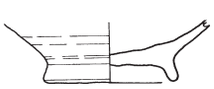
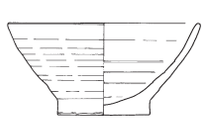
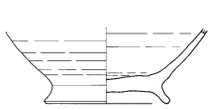
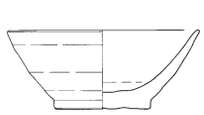
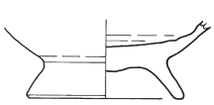
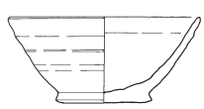
386は，外方に直線的に立ち上がる体部形態をもつ。高台が低く，器壁が厚い。内外面ともに回転ナデ調整である。高台内面は凸状を呈す。ヘラ切り痕を丁寧にナデ消す。

387は高台端部が丸みをもつ。器面調整は外面が回転ナデ，内面はナデである。高台内面の中心部が凸状に強く張り出しているため，高台が浮き，安定しない。

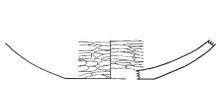
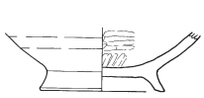
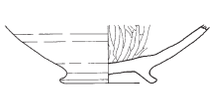
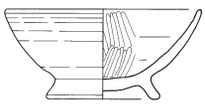
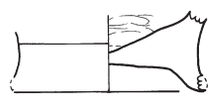
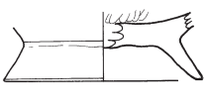
（イ）椀Ⅱ類　388 ～ 390

388は，高台端部をナデで角を成し，明瞭な面を形成

第41表　古代土師器分類表

	特　　徴			特　　徴
椀Ⅰ類		器形：高台が低く，端部がやや丸みを帯び，高台内面が凸状に張り出す。立ち上がりが直線的である。	坏Ⅰ類		器形：平底で体部最下部をヘラケズリで成形する。立ち上がりは直線的である。底部切り離しはヘラ切りである。
椀Ⅱ類		器形：高台が低く，高台断面が方形を呈す。高台内面が平坦で，高台端部は方形を成す。	坏Ⅱ類		器形：高台に厚みがあり，円盤状の底部を持つ，いわゆる充実高台である。口縁端部が丸く直口形である。体部立ち上がりが立ち気味で，直線的に伸びる。体部は僅かに内弯する。
椀Ⅲ類		器形：高台が低く，下方に垂直に伸びる。高台内面が平坦を成し，丁寧なヨコナデを施す。体部立ち上がりは緩く広がる。	坏Ⅲ類		器形：高台がやや厚みをもち，円盤状である。口縁端部が丸くやや細く窄まる。体部の立ち上がりが外方に開き，緩やかに内弯する。高台が垂直に立ち，器壁が厚い。Ⅱ類と比して，底部と体部の境が明瞭ではない。
椀Ⅳ類		器形：高台は高く，端部が丸みを帯び，ハの字状に広がる。体部の立ち上がり，体部はやや丸みを帯びる。内面底が回転ナデにより，凹むものもある。	坏Ⅳ類		器形：高台が厚く，円盤状の高台である。口縁端部はヘラケズリにより先細りになり，僅かに外反する。体部立ち上がりは直線的なものと，丸みを帯びるものがある。強い回転ナデにより，内面底中心部が薄くなり，やや凹む形態をもつ。
椀Ⅴ類		器形：足高高台である。ハの字状に広がり，高台内面に横方向の指ナデを明瞭に残す。高台と体部の境は明瞭である。立ち上がりは僅かに張り出し，直線的に伸びる形態を持つ。	坏Ⅴ類		器形：高台は低く，外方に張り出す。体部形態は直線的なものと，やや丸みを帯びるものがある。立ち上がりは外方に開く。口縁部は緩く外反するものと，直口形がある。

第42表　古代内黒土師器分類表

	特　　徴			特　　徴
椀Ⅰ類		器形：底部が平底である。体部は大きく外方に開き，丸みを帯びる。	椀Ⅳ類		器形：高台付の椀である。体部形態はⅡ類と類似する。高台はやや低く，ハの字状に開き，端部が方形を呈すが，稜はない。
椀Ⅱ類		器形：高台付の椀である。高台は低く，ハの字状に開く。端部はやや方形に近く，先端部に稜を持つ。体部は外方に大きく開く。	椀Ⅴ類		器形：高台が高く，端部は方形を成す。高台内面が凸状に張り出す。体部は丸みを帯び，内弯する形態をもつ。
椀Ⅲ類		器形：高台付の椀である。高台が垂直に立ち上がり，内面には平坦を成す。内面中心部が凹み，薄い。	椀Ⅵ類		器形：高台付の椀である。高台が高く，端部が細く窄まる。高台内面には横方向の指ナデを明瞭に残す。

し，端面は方形を成す。内外面は回転ナデ調整である。

389は，内面の摩滅が著しく，内外面ともに回転ナデを施す。高台も丁寧なヨコナデ調整である。

390の器面調整は内外面ともに回転ナデである。高台内面の中心部は，僅かに凹む。胎土は黄橙色を呈する。

（ウ）埦Ⅲ類　391・392

391は，立ち上がりが外方に開く。外面を回転ヨコナデ後に横方向のミガキを施し，ナデとミガキの境が明瞭に確認できる。内面もミガキである。胎土は大粒（φ3㎜大）の赤色鉱物を含むためか，全体的に橙色に発色し，硬質である。内面中心部には煤の付着がみられる。

392は器壁が薄く，高台内面まで丁寧なナデ調整を施す。外面のケズリ痕を丁寧にナデ消す。高台と体部の境には，高台の接合痕が確認できる。

（エ）埦Ⅳ類　393 ～ 396

393は，直線的な体部形態をもち，内面中心部が強いナデにより薄くなる。器壁が薄く，硬質である。器面調整は，外面が回転ヘラケズリ後に回転ヨコナデ，内面は回転ヨコナデである。高台内面のヘラ切り痕をナデ消す。内面全体に煤が薄く付着する。

394は体部の立ち上がりが強く，立ち気味になる。全体的に摩滅が著しく，内外面ともにナデ調整が確認できる。

395は高台内面が僅かに凸状になる。高台の接合部分がヒビ割れており，接合痕が確認できる。外面は回転ヨコナデ，内面は摩滅しており調整は判別できない。

396は，他と比して低い。高台内面には回転ヨコナデが施され，僅かに凸状になる。内面は摩滅し調整は判別できない。

（オ）埦Ⅴ類　397 ～ 399

397は，外面が回転ヘラケズリで成形後，回転ナデを行い，器壁を薄く仕上げる。内面調整は回転ナデである。高台内面は回転ナデにより，凸状に張り出す。内面中心部は強い回転ナデにより，凹む。焼成は良く，硬質である。体部の立ち上がりは緩く外方に直線的に伸びる。

398はハの字状に大きく開く。体部の立ち上がりは直線的である。器面調整は，内外面ともに回転ナデである。高台内面は丸く凸状になる。内面の一部に薄く煤が付着する。

399は足高高台である。下方に直線的に伸び，端部は丸くなる。やや丸みを帯びる体部形態をもつ。表面は摩滅するが，外面は回転ヘラケズリの後に回転ナデ，内面は回転ナデが確認できる。高台内面の中心部が凸状になる。外面及び高台内面は橙色を呈する。

（カ）その他　400

400は，高台端部が回転ナデにより面を成形し，明瞭な稜をもつ。立ち上がりは丸みを帯びる。内外面は丁寧な回転ナデが施され，高台の接合痕を丁寧にナデ消す。胎土は精緻で焼成も良く，硬質である。成形法や形態的特徴，焼成等から須恵器の高台坏の模倣形態である可能性が高い。

③　坏

（ア）坏Ⅰ類　401 ～ 413

何れも平底で体部最下部をヘラケズリし，成形する。

401は，底部はすり減り痕が顕著に残る。外面体部下位にケズリ痕がみられ，その後ヨコナデを施す。内面調整もヨコナデである。

402は，外面をヘラケズリ後にヨコナデを施し，丁寧にナデ消す。底部・内面もヨコナデ調整である。

403は，底部が黒色化する。器面調整は，底部・外面に横方向のミガキを施し，内面はヘラケズリである。底部の端部を削り，丸く仕上げる。器面調整は，内外面ともにヨコナデである。底部には「十」の字の線刻がある。内面中心は僅かに凹み，器壁が薄くなる。

404は外面をヘラケズリ後にヨコナデ調整を行い，ケズリ痕をナデ消す。内面は摩滅し，調整は判別できない。

405は，外面はヨコナデ調整だが，体部下位にヘラケズリはナデ消さず，明瞭に残る。内面中心部は，反時計回りの回転ナデを施す。内面体部はヨコナデ調整である。底部には切り離しの際の粘土が付着し，ナデ調整等は施されない。また，切り離しの際のヘラ切り痕（1.2 ～ 1.4㎝）が２箇所残る。底部の観察から，切り離しのために２回ヘラを入れたと考えられる。

407は内外面をヘラケズリで成形し，丁寧な回転ナデで調整を施す。底部の切り離し痕がみられず，ナデで丁寧に消される。内面中心部は凹む。

408は体部最下位のヘラケズリが明瞭に残る。器面調整は内外面ともにヨコナデである。

409の外面は体部最下位のヘラケズリが明瞭に残る。底部・内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。内面には使用痕が思われる擦過痕が残る。

410は体部形態がやや丸みを帯びる。体部の器壁は薄く仕上げる。外面はヘラケズリ後に丁寧な回転ナデ，内面は回転ナデで調整する。

411は底部全面に細かな工具痕が多く残る。内面には反時計回りに渦巻状の強い指ナデがみられる。

412，413は，坏の底部である。表面が磨滅し，調整は判別できない。412の底部は赤く焼けている。

（イ）　坏Ⅱ類　414 ～ 420

414は，内外面ともに回転ヘラケズリにより成形し，

丁寧な回転ナデで器面全体を調整する。内面は中心部から反時計回りに強い回転ナデが施される。底部にはヘラ切り痕が残らない。高台から体部の境付近には深いヘラ痕が残る。

415は，体部が僅かに丸みを帯び，器形には歪みがみられる。底部にはヘラ切り痕がみられ，切り離しの際の粘土が底部端部に付着する。内外面は回転ヘラケズリで成形後に，丁寧な回転ナデで調整する。内面は，時計回りの強いナデが施される。外面に比して，内面の摩滅が著しい。

416 ～ 420は口縁部から体部片である。416・417は回転ヘラケズリで成形後，丁寧な回転ナデで調整するが，外面のヘラケズリ痕は明瞭に残る。

419は，口縁部の外反が強く，体部が丸みを帯び，やや浅い形態を持つ。内外面ともに回転ナデであり，外面には赤色顔料が塗布される「外赤（朱）土器」である。

420は，表面が磨滅する。器面調整は，内外面ともに回転ナデである。胎土がやや粗い。

（ウ）坏Ⅲ類　421 ～ 429

421は，内外面を回転ヘラケズリにより成形し，回転ナデで調整し，ヘラ痕が明瞭に残る。外面に比して，内面の表面は粗く，摩滅する。内面は平坦面を形成せずに，中心部が凹む。底部切り離しはヘラ切りだが，丁寧にナデ消している。

422 ～ 429は，口縁部から体部片である。422は口縁部が丸く，端部が僅かに窄まる。体部形態は丸みを帯び，内弯する。内外面ともに回転ヘラケズリで成形し，回転ナデで調整する。外面と比して，内面の表面はやや粗い。

423は内外面ともに回転ヨコナデで調整する。口縁部の内外面に赤色顔料の塗布がみられる。また内外面に煤が付着する。表面の色調のムラ等から二次焼成を受けた可能性が高いと考えられる。内面下位の磨滅が著しい。

424は，口縁部に向かうほど器壁は薄くなる。内外面のヘラケズリを回転ナデで丁寧にナデ消す。

425は，口縁端部が先細りになる。体部下位には，底部との接合面で剥がれた痕がみられる。その割れ口は平坦である。内外面ともに回転ヘラケズリ後に回転ナデで調整する。

426は口縁端部が丸みをもつ。内外面ともに回転ヘラケズリで成形するが，ケズリ痕を回転ヨコナデで丁寧にナデ消す。内面には僅かに斜方向の擦過痕がみられる。

427は，器壁が薄く，口縁端部が先細りである。内外面ともに丁寧なヨコナデである。内面には薄く煤が付着する。

428は内外面が黒色化する。器面調整は内外面ともに丁寧な回転ヨコナデでヘラケズリをナデ消す。

429は，口縁端部が丸くなる。内外面ともに丁寧なヨコナデ調整である。口縁部の内外面に煤が付着する。

（エ）坏Ⅳ類　430 ～ 442

430は，底部がやや低いが，底部の器壁は厚い。内面は平坦面を成す。外面は回転ヘラケズリ後に，回転ナデを施す。内面は全体的にやや赤く発色し，外面とは色調が異なる。底部はヘラ切り痕が明瞭に残る。外面体部下位には煤が付着する。

431は，体部は強く外方に向かって直線的に伸びる。内外面ともに，回転ヘラケズリ後に，回転ナデを施す。内面は反時計回りの強いナデが施され，煤が厚く付着する。底部にはヘラ切り痕が残る。432・434は，底部が欠損しているため，切り離し痕は確認できない。体部は直線的に伸び，口縁部が細く窄まる。外面の回転ヘラケズリ痕は明瞭に残る。内外面ともに丁寧な回転ナデで調整しており，内面には時計回りのナデがみられる。外面には赤く焼けた痕があり，二次焼成を受けたと考えられる。433 ～ 442は，口縁部から体部片である。いずれも内外面ともに回転ヘラケズリ後，回転ナデで調整する。433は，他と比してやや口径が大きい。体部下位はケズリにより強い稜をもち，僅かに段を成す。

434は，高台もしくは底部接合面で割れており，割れ口が平坦である。

435は，回転ヘラケズリ後の回転ナデで，ケズリ後を丁寧にナデ消す。内面にはナデ後が明瞭に残る。高台または底部の接合面で割れており，接合面が明瞭に確認できる。

436の回転ナデ方向は内外面ともに反時計回りである。内面には僅かに煤が付着する。

437は内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。

438は，器壁はやや厚い。胎土は粗く，粉っぽい。

439の器面調整は内外面ともに回転ナデだが，表面が磨滅する。外面体部，内面には煤が厚く付着する。外面は帯状に付着する。

440は，器壁が薄く，強く外斜する。外面のヘラケズリ痕により，体部が僅かに段を成す。

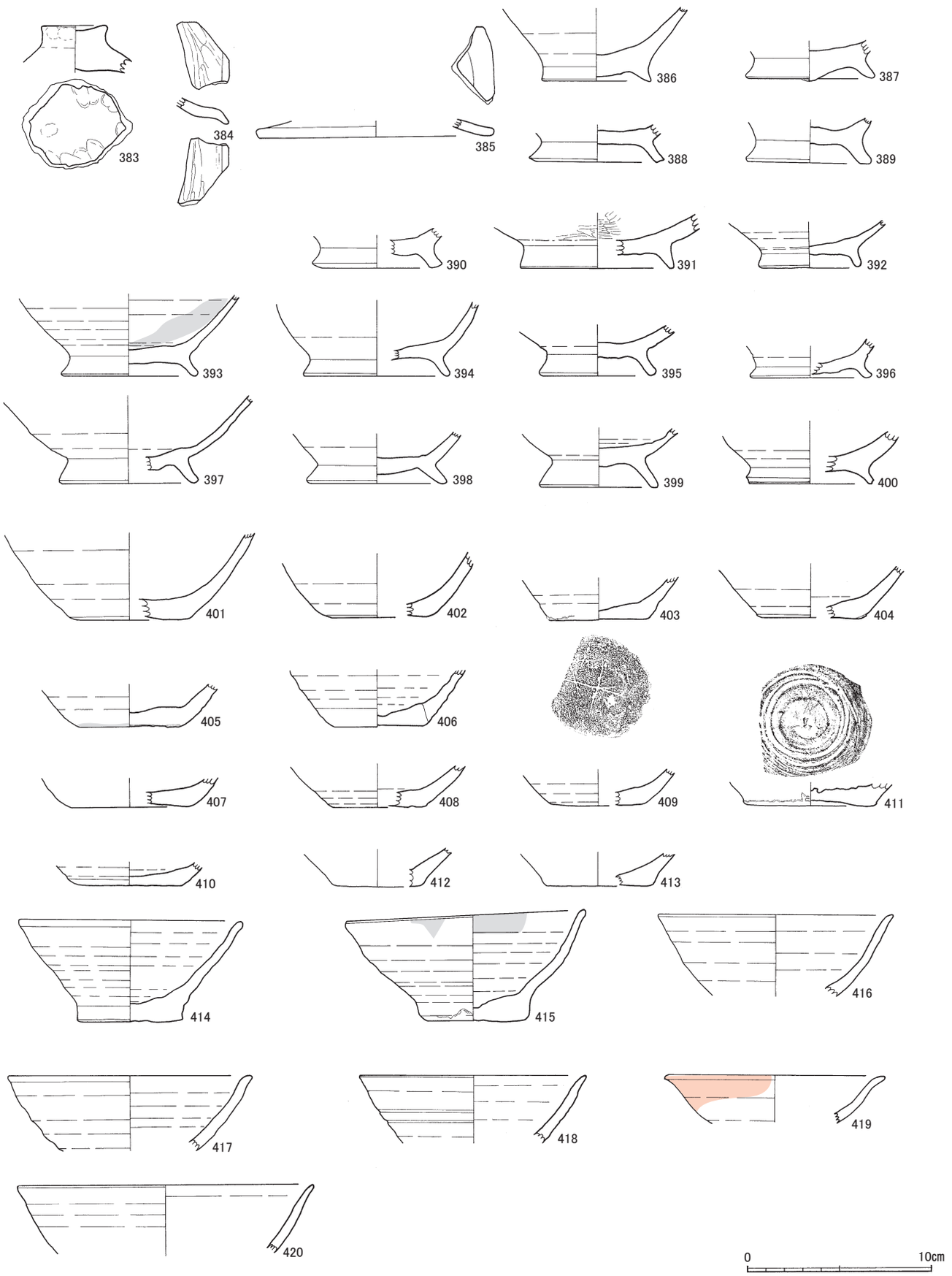
441・442は，内面に赤色顔料の塗布が薄く残り，「内赤（朱）土器」と考えられる。442は，内面には横方向のミガキが施され，僅かに煤の付着がみられる。

（オ）坏Ⅴ類　443 ～ 448

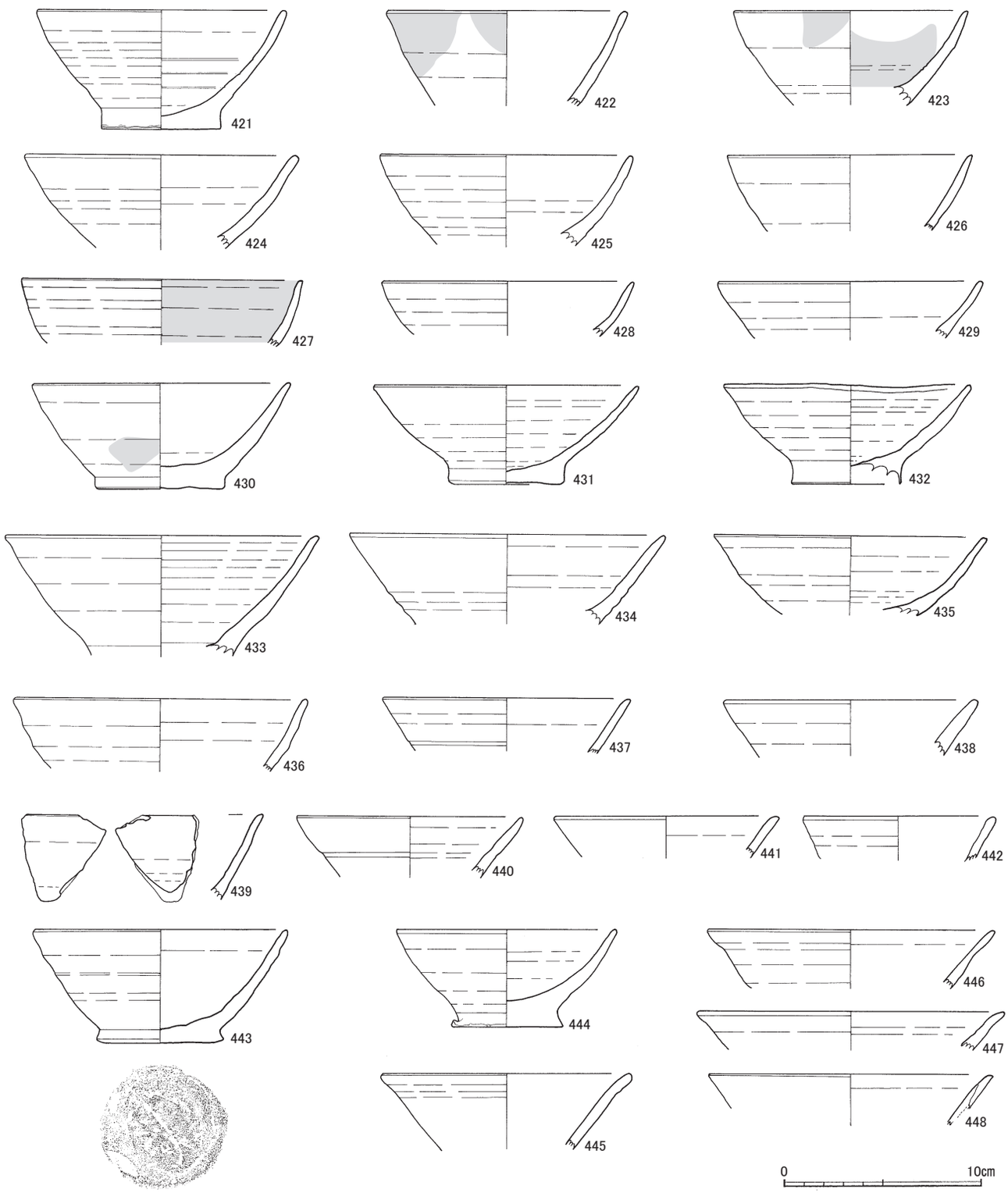
443・444の底部には，約2㎝の深い「一」の字状のヘラ痕が残る。443の体部は丸みを帯び，内弯する形態をもつ。底部は，切り離しの際に生じた粘土の捲れによって歪む。内面には強いナデによる凹みはみられない。

445 ～ 447は，口縁部が外反し，外方に大きく開く形態を持つ。

445は立ち上がりが直線的な体部形態を持つ。外面口



第87図　古代土師器（蓋・埦・坏）実測図（１）



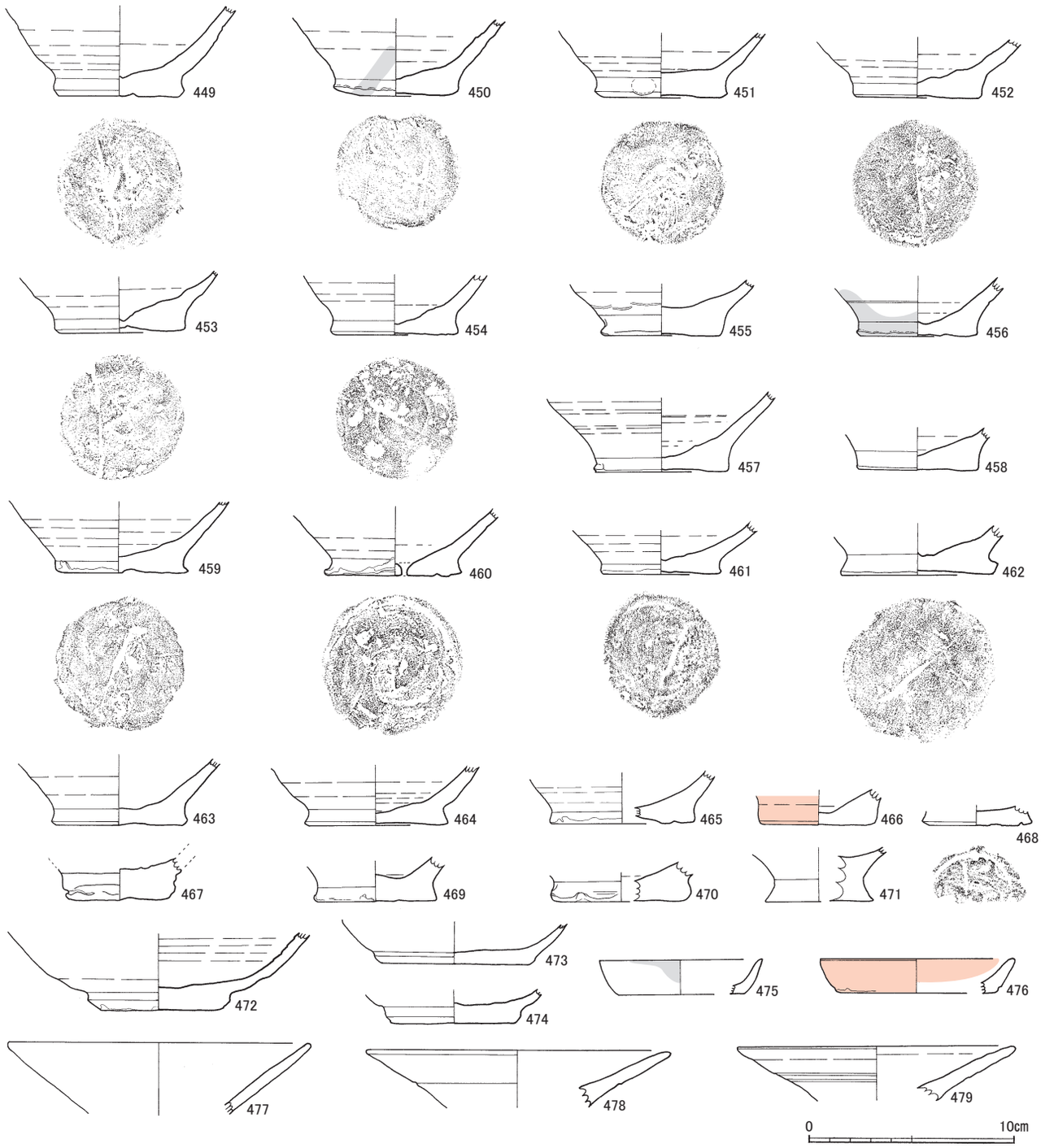
第88図　古代土師器（坏）実測図（2）

縁部に横方向のミガキ，内面には斜方向のミガキが施される。

446は口縁屈曲部の器壁が非常に薄く，器形が歪んでいる。内外面ともに回転ナデ調整である。

447は，内面には回転ヘラケズリによる工具痕が，沈線状に2条みられる。

448は直口形である。粘土帯接合部で表面が剥落し，断面には接合痕が確認できる。外面には墨書らしき痕跡が残る。



第89図　古代土師器（坏・皿）実測図（3）

（カ）底部　449 ～ 474

何れも，内外面ともに回転ヘラケズリ後に，回転ナデで調整する。

449 ～ 458は，充実高台の中でも，底部が垂直になるものである。底部は厚く，内面は平坦を成すものと，強い回転ナデによって中心部が凹み，底部が薄くなるものがある。底部には約2 ～ 4cm程度の「一」の字状の深いヘラ痕が残るものが多い。これは，底部切り離しの際についたものと考えられる。内外面ともに回転ヘラケズリで成形後，回転ナデで調整する。坏Ⅱ～Ⅳ類に相当するものである。

449・450は，体部立ち上がりは直線的である。底部のヘラ切り痕を指ナデでナデ消す。

449は，底部に約4cmの「一」の字状のヘラ痕が残る。内外面は丁寧な回転ナデを施すが，底部の調整は粗雑でヘラ切りの痕を明瞭に残す。

450は，判然とせず図化しないが，体部下位に外側から穿孔を施した痕が確認できる。煤の付着もみられる。

451は，底部には約3㎝の「一」の字状のヘラ痕が残る。全体的に摩滅するが，回転ヘラケズリ後，回転ヨコナデが確認できる。

452の内面は磨滅するが，時計回りの強い回転ナデがみられる。外面体部には煤が付着する。

453は，底部に沈線状の工具痕が残る。内面は時計回りの強い回転ナデが施され，中心部が凹み器厚が薄い。

454は，底部径が6.4㎝とやや小さい。底部には約2㎝の深い「一」の字状のヘラ痕が残る。少量の赤色顔料が付着する。内面は反時計回りの強いナデにより，内面中心部が凹む。外面は，やや赤色に焼けてる。

455の表面は，全体的に磨滅する。底部切り離しの際の粘土が，底部側面に付着する。

456は，底部が低い。反時計回りの回転ナデにより，内面は凹み，器厚が薄い。体部には煤が付着する。

457の内面には反時計回りの強い回転ナデが明瞭に残り，中心部は凹む。

458にも底部に3cm程度のヘラ切り痕が残るが，丁寧にナデ調整を行う。内面は時計回りで回転ナデが施される。また底部から外面には赤色顔料が薄くかかる。

459 ～ 464は，底部がやや外方向に張り出す。底部はやや低く，内面は強い回転ナデにより中心部が凹む。これらにも底部には約2 ～ 3cm程度の「一」の字状の深いヘラ痕が残るものが多い。底部切り離しの際に底部側面から体部最下位にかけて粘土が付着するものが多い。坏Ｖ類に相当するものである。

459は，底部には約3㎝の深い「一」の字状のヘラ痕が残り，切り離しの際の粘土の捲れがみられる。内面は反時計回りの回転ナデが確認できる。

460は，切り離しによる粘土の捲れがみられ，切り離し痕が指ナデが粗雑である。内面中心部は強いナデにより底部を貫通し，小さな穿孔が開く。体部は直線状に外方に伸びる形態を呈す。

461は底部には約2㎝の深い「一」の字状のヘラ痕が残る。内面表面は粗く，摩滅する。回転ナデにより内面中心部が凹む。

462は，円盤状で器壁が厚い底部をもつ。底部と体部の境は，ヨコナデにより明瞭になる。底部には約2㎝の深い「一」の字状のヘラ痕が残る。内面中央は，強いナデにより凹む。

463は底部が低く，体部は直線的に伸びる。底部の切り離し痕は確認できない。内面の摩滅が著しい。

464は，高台と体部の境をナデで明瞭にし，高台は外方に伸びる。外面はヘラケズリ後，丁寧なナデで調整する。内面中央付近は，強いナデにより凹み，器壁が薄くなる。

465は，底部が低く，底部の調整が粗雑である，内面は凹むが強いナデ調整はみられず，丁寧なナデ調整を施す。

466 ～ 471は底径が小さく，円柱状を成す。底部側面には底部切り離しの際の粘土が付着するものと丁寧にナデを施すものがある。

466は内外面ともにナデ調整であり，内面の中心部がやや凹む。底部から体部外面にかけて赤色顔料が厚く塗布される。内面は磨滅し，器面調整が判別できないが，僅かに赤色顔料の付着がみられる。

468は低い円盤状の底部で，曲線状（円状）の工具痕が残る。内面は磨滅し，器面調整は判別できない。

469は，底径5.6㎝で径が小さく，器壁が厚い。内面中心部はやや凸状に膨らむ。底部にはヘラ切り痕がある。

470は，底部切り離しの際の粘土が底部側面に多く付着する。

471は，特に底部が厚く，円柱状になる。器面調整は丁寧な回転ナデである。

472は，円盤状の底部を持つ。体部がやや丸みを帯び，外方に広がる形態を呈する。器面調整は内外面ともに回転ナデである。内面には反時計回りのナデ痕が確認できる。内面には4 ～ 6㎝程度の間隔で4条の沈線がみられる。回転ヘラケズリの際についた痕跡と考えられるが，ほぼ対面の内面にはみられない。底部の切り離し痕は丁寧なナデにより，確認できない。また，底部端部には面を形成する。

473は，円盤状の低い底部である。底部端部にはナデを施し，面を成形する。底部の切り離し痕がみられずに，丁寧なナデによりナデ消す。内面はナデ調整を施すが，摩滅する。

474は円盤状の低い底部で，6.2㎝と底径がやや大きい。底部の切り離し痕はナデ消される。底部と体部の境があまり明瞭ではない。内外面ともに煤が付着するが，内面の底には煤が付着しない。

④　皿　475 ～ 479

475は体部が丸みを帯び，僅かに外斜する。口縁端部は細く窄まる。底径6.3cm，口径8.1cm，器高1.8cmを測る。内外面に赤色顔料の塗布がみられる。

476は，底径7.8cm，口径9.6cm，器高1.7cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整だが，外面は磨滅が著しい。外面には煤と赤色顔料が付着するが，変色しており，二次焼成を受けた可能性が高い。いわゆる「両赤（朱）土器」である。

477 ～ 479は，高台付の皿である。高台部分が欠損しており，高台との接合面で割れている。皿部の口径が15cm程度である。

477は壁が薄く，やや深目の皿部をもつ。

478・479の皿部の深さは約2.8cmと深めである。内外面ともに丁寧なヨコナデを施す。

（2）内黒土師器

① 埦

（ア）内黒土師器Ⅰ類　480・481

480・481は底部が平底で，体部は大きく外方に開く形態をもつ。

480は，内外面共に横方向のミガキが施され，底部はヘラ切り後に丁寧なナデが施される。

481は全体的に器壁が薄いが，特に内面中心部が薄く成形される。内面は縦方向のミガキ，外面と底部は横方向のミガキが施される。

（イ）内黒土師器Ⅱ類　482

482は高台付の埦である。高台は低くハの字状に開き，脚部断面がやや方形で端部に稜を持つ。外面に回転ヨコナデが施される。内面には縦方向のミガキが施される。

（ウ）内黒土師器Ⅲ類　483

483は高台付の埦である。高台内面が平坦で，脚部が垂直に立ち上がる。内面中心部が大きく凹み，底部の器壁が薄くなる。内面には横方向のミガキ，底部にはヨコナデが施され，ヘラ切りの痕跡を残す。

（エ）内黒土師器Ⅳ類　484 ～ 495

484 ～ 490は高台付の埦である。高台はやや低くハの字状に開き，脚部断面がやや方形を呈す。体部は大きく開く。外面は回転ヨコナデである。

484は内面に横方向のミガキが施される。高台内面に細かな工具痕が円状に残っており，高台を張り付ける際についたものと考えられる。

485は全体的に摩滅する。外面は回転ヨコナデが施される。内面には中央付近に縦方向のミガキ，体部は横方向のミガキが施される。

486は内面を縦方向にミガキが施される。

487・490・491・494は内面に縦方向のミガキが施される。487は丸みを帯びる体部形態を持つ。器壁に焼成による細かい剥落が多くみられる。

488は内面に縦方向のミガキを施す。高台内面はナデが施され，棒状工具による刺突の痕跡を残す。

490は，高台内面がやや凹む。体部立ち上がりは回転ヘラケズリによって僅かに段を成す。

492は脚部が大きくハの字状に開く。内面を縦方向にミガキが施される。

493は，高台脚部の器壁が薄く，端部は面を成す。高台端部がやや先細りになり，内面中心部が多く含む。体部内面には縦方向のミガキが施される。

494は，内面中央から底部にまで及ぶ亀裂が入っている。高台内部には，焼成前に先が尖った工具による線刻がみられる。

495は内面が摩滅し，一部にミガキの痕跡がみられるが，方向などは判別できない。高台端部に沈線状の窪みがみられる。

（オ）内黒土師器Ⅴ類　496 ～ 499

496は高台付の埦で，高台内面が凸状に張り出し，体部が丸みを帯び内弯する。高台は高く端部が方形をなす。高台内面には棒状工具による刺突痕が残る。

497 ～ 499は，内面にミガキ痕を残す。

（カ）底部片　500 ～ 502

501は高台の脚部が欠損する。内面に縦方向のミガキが丁寧に施され，光沢がある。底部には，「十字」と「矢印」のような記号の線刻がみられる。内面の炭素の吸着にムラがあり，灰色の部分が残る。

502は底部片である。高台脚部が欠損する。全体的に摩滅する。内面中央部に「十字」の線刻が刻まれる。

（キ）内黒土師器Ⅵ類　503

503は，高台付の埦である。高台が高く，先端が窄まる。高台内面には強い指ナデが施され，渦巻き状の痕跡を残す。内面には縦方向のミガキが施され，内面に光沢を残す。

② 底部　504 ～ 506

504 ～ 506は厚みがある円柱状の底部である。体部が残存しておらず，内面は摩滅が著しい。

506は特に底径が小さい。

③ 口縁部～体部片　507 ～ 526

いずれも，外面は回転ヘラケズリ後，ナデ調整を施し，内面はミガキを施す。

507 ～ 510は直口口縁で口縁端部が丸くなり，体部形態が丸みを帯びる。

507・508は体部が丸みを持って立ち上がり，やや内弯する。内外面は横方向にミガキが施される。

507は外面にも横方向のミガキが施され，煤が付着する。内面に光沢を残す。

509・510は体部が直線的に伸び，内面の器面調整は口縁部付近が横方向，体部が縦方向のミガキである。

510は内面に光沢を残す。

511・513は口縁部が丸く，やや窄まる。いずれも内面に丁寧なミガキを施す。口縁部から体部中位が横方向，体部が縦方向のミガキを施す。厳密な範囲は異なるが，

部位ごとのミガキ方向には規格性がみられる。

511・512は体部が丸みを持ち，緩やかに立ち上がる形態をもつ。

511は内面が磨滅する。

512の外面はミガキのような回転ヨコナデが施され，やや光沢をもつ。内面にも光沢が残る。

514は口縁部が先細りになる。

515は，器壁が口縁部に向かうにつれ薄くなる。内面ミガキは体部下位の縦ミガキが口縁部から体部中位のヨコミガキを切っている。

516 ～ 518は口縁端部が細く窄まり，僅かに外反する。体部は直線的にのびる形態をもつ。

516は外面に回転ヘラケズリの後に回転ヨコナデを施し，一部ケズリの痕跡を残す。内面は口縁部付近に横方向，体部は不定方向のミガキが施される。

517・518は，外面は回転ナデが施される。内面は口縁部に横方向のミガキと，体部に縦方向のミガキが施される。

519 ～ 523は，立ち上がりがやや開き気味で，口縁部が外反する。

519は内黒土師器ではない。しかし，調整が類似していることから，内黒土師器として掲載する。形態は，立ち上がりが立ち気味に内弯し，口縁部が僅かに外弯する。調整は，内面中央部を縦方向に，内外面は横方向にミガキを施す。

520は，外面がヨコナデ調整で，ヘラケズリ痕をナデ消す。内面には縦方向のミガキが施される。

521は，内外面ともに横方向のミガキを施す。外面もやや黒色化する。

522は内外面に丁寧な横方向のミガキを施し，内面は光沢が残る。

523は，体部が立ち気味で，口径が他と比して小さい。外面口縁部付近まで黒色化する。外面は回転ナデであり，回転方向は反時計回りである。内面のミガキは斜方向に施すが，表面はやや磨滅する。

524 ～ 526は体部片である。524は器壁が薄く，体部は立ち気味である。内外面に横方向のミガキを施す。

525・526は内外面に丁寧なミガキが施され，光沢を残す。

（3）墨書土器　527 ～ 529

527は，内黒土師器の埦の口縁部から体部片である。内面には横方向のミガキと縦方向のミガキが施される。外面には「火」の字の墨書が確認できる。

528は体部片である。外面には二重丸状の墨書がみられるが，文字の判読はできない。

529は坏Ⅰ類の底部である。内外面ともに丁寧な回転ナデで調整する。外面に墨書が確認できるが，文字の判読はできない。

（4）土師甕・鉢

土師甕の分類は，高篠遺跡報告書（高篠2004）の分類を参考に掲載した。高篠遺跡報告書は，全体器形や内外面の調整を基に分類を試みている。しかし，本遺跡資料は小片が多く，全体器形が捉えられない資料が多いため，主に内外面の調整を分類基準に据えた。

なお，甕・鉢の器種分類については，口縁部から胴部下半までの残存が捉えられて分類可能となるため，一部の残存状況からは正確に分類できない点も含まれる。

数量的に甕が多いと捉えられたので，甕・鉢の分類が判然としない資料については，甕に含めて報告した。

①　甕

（ア）甕１類　530

530は，土師甕の一般的な甕形より，口縁部が窄まり頸部を形成する点で，壺形に近い。器厚は８mm程度と，他の土師甕と同様な厚さである。

外面の回転ナデには，工具痕と思われる条線が無数に捉えられることから，ヘラ状工具の使用を認める。内面のケズリは，切り合いが不規則的である。ケズリ上端に指頭押圧を施し，その上位をナデ整形する。鋭い切っ先の削痕が３条捉えられる。ケズリ時の痕跡と思われる。

（イ）甕２類　531・532

531は，外面調整に縦位のハケメが明瞭に捉えられる。

532は，胴部上位に縦位の工具痕と微細なハケメが捉えられたことから，本類に含めた。口縁部上端が屈曲外反し，本項248 ～ 250等の須恵器の甕の口縁部形態に似る。

（ウ）甕３類　533 ～ 544

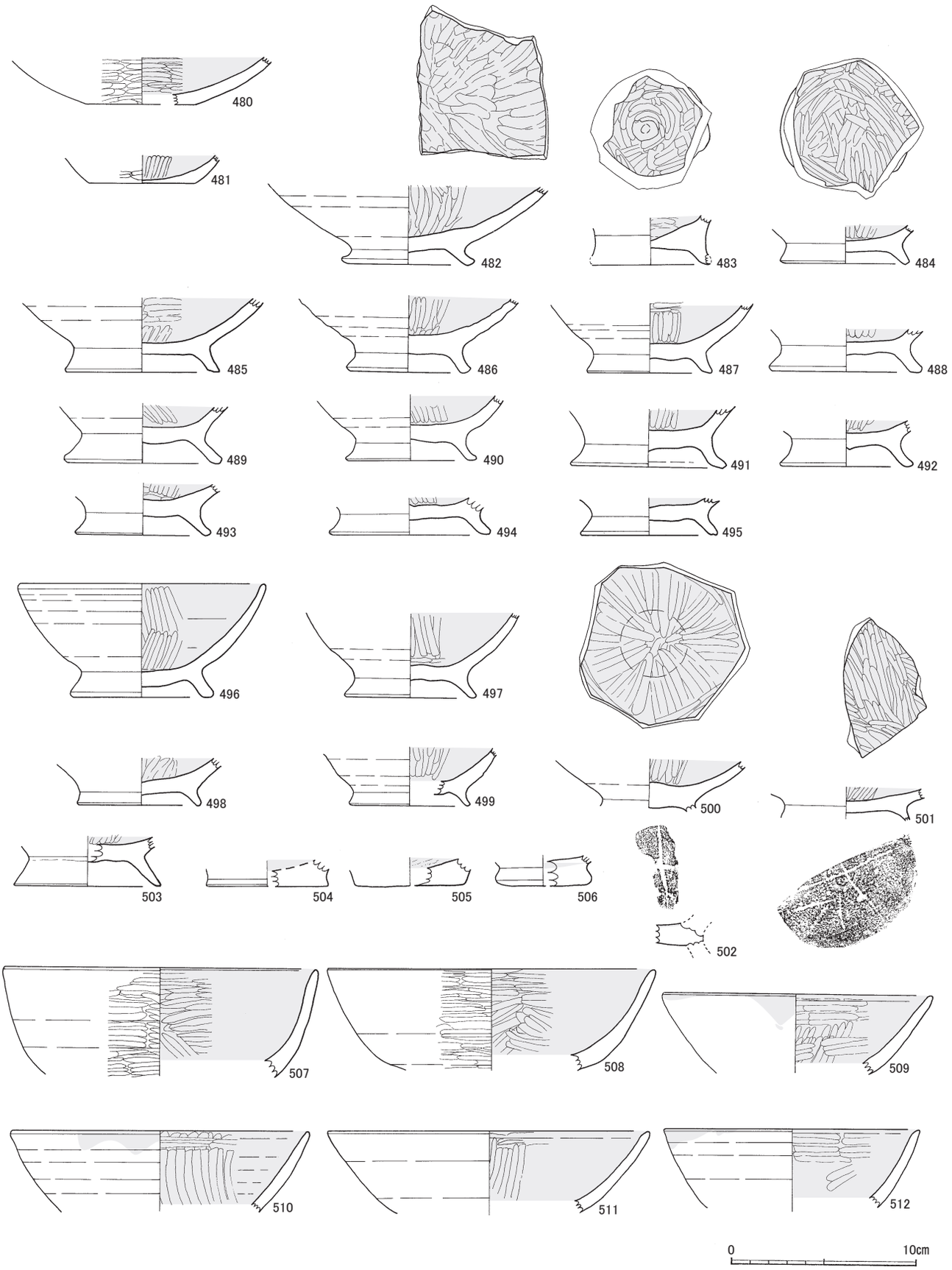
533は，内面のケズリが深く，明瞭に残される。下から上方向へのケズリを右側から左側に施した後，調整範囲を上位に転移し，下位同様に右側から左側へ規則的に施す。このケズリによる調整パターンは，本遺跡の土師甕の内面ケズリに共通して見られる。

533・534は，外反する口縁部内面に形成される稜線の位置とケズリ上端の位置は一致するが，上端を意図的に水平に揃えてはいない。

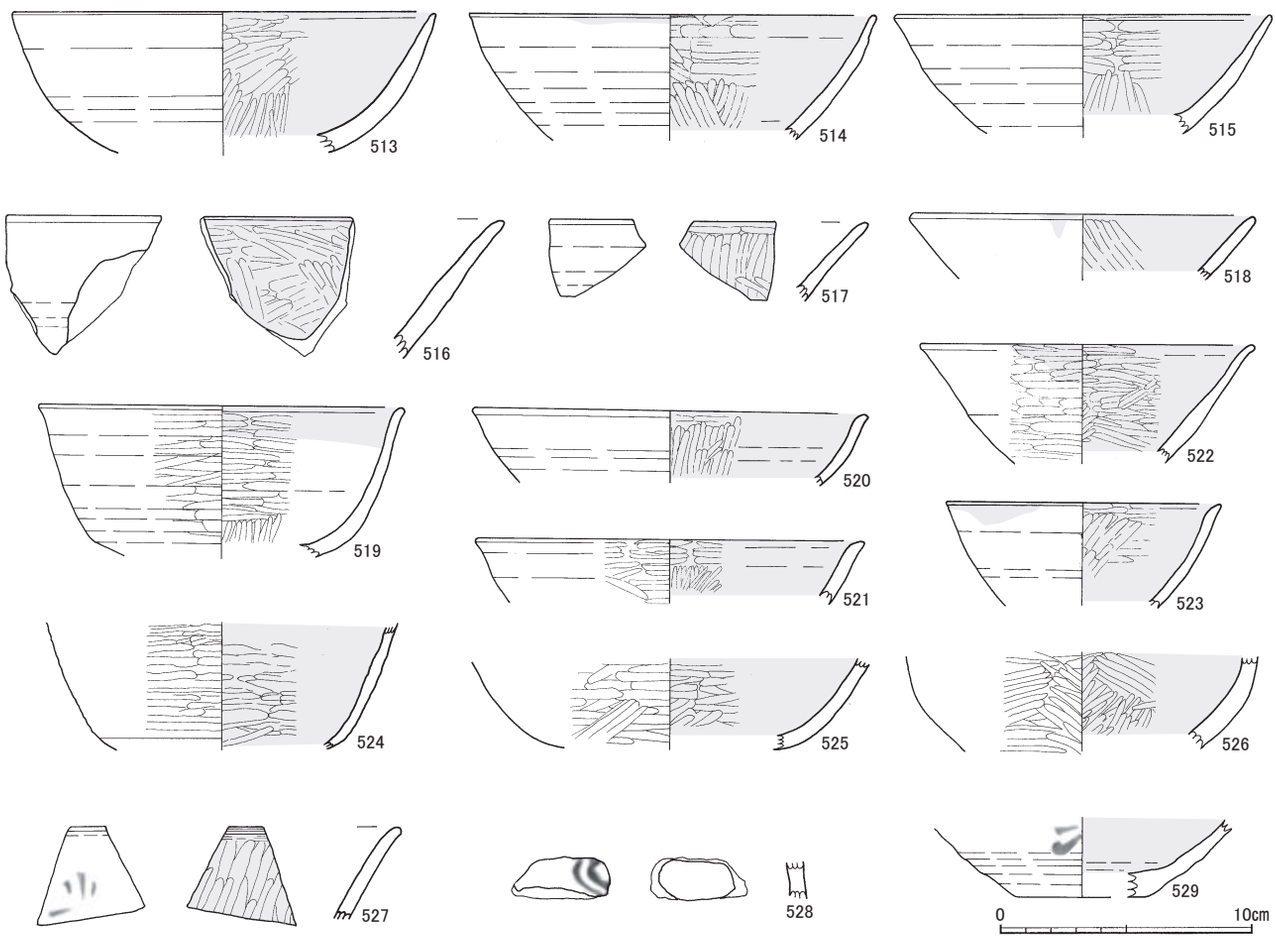
534の外面の口縁部上位には，焼成前に生じた亀裂に粘土補填した補修痕が認められる。

534・537・538・543・544の内面のケズリ上端には工具の側縁の削痕やケズリ終点の工具痕が捉えられる。

536 ～ 544は，内面のケズリの上端の位置が，内面の稜線よりも下位に位置する。つまり，ケズリが胴部中途に留まる一群である。



第90図　古代内黒土師器（埦）実測図（1）



第91図　古代内黒土師器（埦）（2）・墨書土器実測図

539の口縁部内面には，横位のケズリ後，横位のミガキが施される。内面にミガキが施されるため，鉢の可能性がある。

542・543はケズリが浅く，ケズリ前のナデ調整がケズリ周辺にも捉えられる。542は，内面全体に煤が付着する。543は，口縁内面のケズリ上端に，僅かに横位のミガキが捉えられる。煤が，口縁部内面に回り込んで付着する。

544は，僅かに縦・斜位のヘラ状工具のケズリ痕が捉えられる。

（エ）甕４類　545

胴部から口縁部にかけて直線的に斜立し，口縁部が外反しない。口縁部上端は，僅かに内弯する。

外面の器面調整が粗雑で，器面が均されないため，粘土の貼り付け痕や斜・横位の凹線状の工具痕，指頭押圧痕が明瞭に残される。口縁部上端には，指頭押圧が施される。内面は，深い斜位のケズリが右側から左側に施される。深いケズリ調整により，胴部の器厚が最薄4mmと極薄に仕上げられる一方，口縁部が肥厚する。

（オ）甕５類　546

外面の縦位のハケメは，右側から左側に切り合いながら施される。内面のケズリは，基本的に右下から左上方向に施す。内面の稜線の位置より下位に，内面ケズリの上端が位置する。

（カ）甕６類　547 ～ 554

何れも，内面調整は右下から左上方向に向けてケズリを施す。

547も，本類の分類基準に包含されるが，内面ケズリが深く，一見，上端が稜線に揃わないように錯誤される。稜線の位置に揃って，水平方向のナデによりケズリ上端を揃える。口縁部内面に回り込む煤の縁端が，直線的に付着することから，蓋の使用を窺わせる。

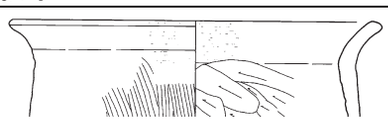
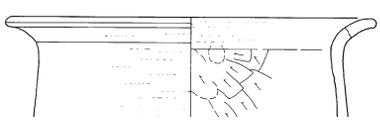
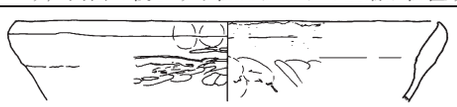
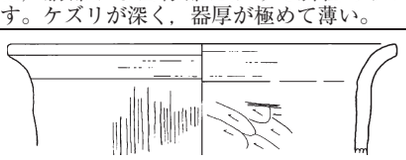
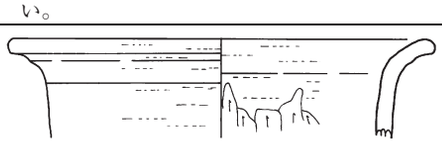
547・551は，口縁部縁端の玉縁状の器形や，口縁部外面に回転ナデによる整形等，本項619 ～ 622の須恵器の器形に類似しており，須恵器の影響を見る。

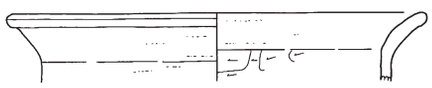
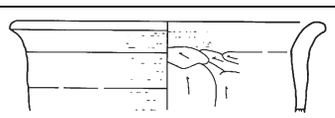
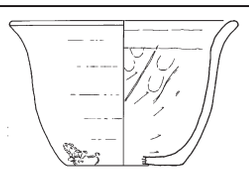
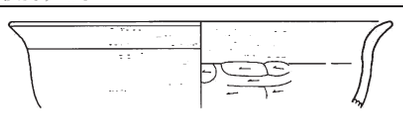
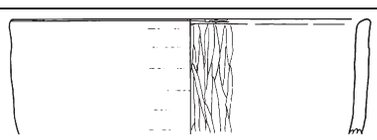
（キ）甕７類　555 ～ 566

555は，煤が口縁内面にも及ぶ。

557・563は，外面に指頭押圧が施される。特に，557

第43表　古代土師甕・鉢分類表

	特　徴
甕1類	 器　　形：胴部が大きく張り出し，丸みを呈する。口縁部にかけて大きくすぼまり頸部を形成し，口縁部上端で外反する。甕に分類したが，器形的には壺に近い。 調整技法：外面は，回転ナデを施す。内面調整には，斜位のケズリを施す。ケズリの上位をナデ整形するが，ケズリの上端を水平に揃える意図は捉えられない。
甕2類	 器　　形：胴部中位が張り出さず，真っ直ぐに下半に至る。 調整技法：外面には，胴部に縦位のハケメが施され，胴部上位から口縁部にかけては回転ナデが施される。内面には，回転ナデを施した後，胴部から口縁部にかけて斜位のケズリを施す。ケズリの上端は水平に揃わない。ケズリの上端と内面の稜は，同位置である。
甕3類	 器　　形：胴部中位が張り出さず，真っ直ぐに下半に至る。 調整技法：外面には，回転ナデが施される。内面には，回転ナデを施した後，胴部から口縁部にかけて斜・縦位のケズリを施す。ケズリの上端は水平に揃わない。ケズリの上端と内面の稜の間に間隙があり，内面の稜より下位にケズリの上端が位置する。
甕4類	 器　　形：口縁部が，外側に直線的に延び，外反しない。 調整技法：外面には，工具や指頭により粗雑なナデが施される。器面が均されず，凹凸が顕著である。内面は，胴部から口縁部にかけて斜位のケズリを施す。ケズリが深く，器厚が極めて薄い。
甕5類	 器　　形：胴部中位が張り出さず，真っ直ぐに下半に至る。 調整技法：外面には，胴部に縦位のハケメが施され，胴部上位から口縁部にかけては回転ナデが施される。内面には，胴部に縦・斜位のケズリを施した後，ケズリの上端を横ナデにより水平に揃える。ケズリの上端は，内面の稜より下位に位置し，揃わない。
甕6類	 器　　形：胴部中位が張り出さず，真っ直ぐに下半に至る。 調整技法：外面には，回転ナデを施す。内面には，胴部に縦・斜位のケズリを施した後，ケズリの上端を横ナデにより水平に揃える。ケズリの上端は，内面の稜より下位に位置し，揃わない。

	特　徴
甕7類	 器　　形：胴部中位が張り出さず，真っ直ぐに下半に至る。 調整技法：外面には，回転ナデを施す。内面には，胴部は縦・斜位のケズリを施す。その後，その上端に横位のケズリを施し，ケズリ上端を水平に揃え，明瞭な稜を形成する。
甕8類	 復元口径（外径）20cm以内の一群である。 器　　形：胴部中位が張り出さず，真っ直ぐに下半に至る。全体器形は，甕形が想定される。 調整技法：外面には，回転ナデを施す。内面には，回転ナデを施した後，胴部から口縁部にかけて縦・斜位のケズリを施す。ケズリの上端は水平に揃わない。
鉢1類	 器　　形：口縁部が外反する。胴部中位が張り出さず，胴部下半にかけて内傾する。底部が平底である。 調整技法：外面には，回転ナデを施す。内面には，胴部には斜位のケズリを施す。その後，その上端に横位のケズリを施し，上端を水平に揃え，明瞭な稜を形成する。
鉢2類	 器　　形：口縁部が外反する。胴部から下半にかけて内弯する。底の形態は不明である。 調整技法：外面には，回転ナデを施す。内面には，器面全体に横位のケズリを施す。ケズリにより上端を揃えるもの，揃えないものの何れも含む。
鉢3類	 器　　形：口縁部が直行する。口縁部から胴部下半にかけて椀状に内弯し，底部に至る。 調整技法：外面には，丁寧な回転ナデを施す。内面には，縦・斜位のケズリを施した後，ミガキ（丁寧なナデ）によりナデ消す。
鉢4類	 器　　形：底部から胴部にかけて僅かに外傾し，胴部中位から口縁部にかけて直行する。 調整技法：外面には，胴部下位には，ミガキ状の横位のケズリを施す。胴部中位から上半にかけては回転ナデを施す。内面には，縦位のミガキを施す。内黒土師器である。

は外面のナデ調整が粗雑で，指頭押圧が随所に捉えられる。他の資料は，外面調整が，丁寧な回転ナデを横走させる。

（ク）口縁部片（類不明） 567 ～ 578

これらは，胴部のケズリが捉えられない口縁部の小片である。器厚等甕１～７類の破片の可能性が高い。

567 ～ 573は，外反する口縁部が一定程度（２cm程）の長さを有する一群である。

567は，器厚が0.5cm程と極めて薄く仕上げられる。

570は，器形的には甕・鉢に分類される特徴を有するが，埦・坏に似て胎土の肌理が細かく，作りが丁寧である。埦・坏・鉢・高坏等の可能性もある。

573は，器厚が1.7cmと厚い。

574 ～ 578は，外反が弱く，直立（斜立）する一群である。鉢の可能性もある。

573は，内面調整が丁寧で，ややミガキ様に光沢を呈する。

578は，胴部内面に僅かに斜位のケズリが捉えられる。丁寧に内面調整を施し，ミガキ様に光沢を呈する。

（ケ）甕８類 579 ～ 581

579の外面には，横位の条線状の工具痕が明瞭に捉えられる。内面に斜位のケズリを施した後，ケズリ上端に横ナデを施すが，水平には揃えない。内面口縁部の調整及び稜形成の形態は甕６類に含まれる。

580は，復元口径（外径）が20cmを測る。内面のケズリ上端を水平に揃えない。581は，復元口径が21.6cmを測る。内面に縦位にケズリを施すが，上端は横・斜位のケズリにより水平に揃え，明瞭な稜を形成する。器面調整は，甕７類に含まれる。

（コ）胴部・底部 582 ～ 589

582は，頸部片である。外面に，幅３cm弱のヘラ状工具のナデの始点（終点）が捉えられる。内面には，胴部に縦位のケズリが捉えられるが，上端を揃えず，明瞭な稜線が形成されない。調整等は，甕３類に含まれる。内面にモミの圧痕が残される。

583～589は，丸底を呈する胴部下半の土器片である。

583の外面には，密にハケメが施されるが，切り合いに規則性は捉えられない。外面には煤が付着する。内面にはケズリが見られるが，ケズリの単位や切り合い等は不明瞭である。

584 ～ 586は，外面に底部下端から放射状に上方向へのハケメが施される。外面に煤が付着する。内面には，縦位のケズリが施され，右側から左側へ，下位から上位への調整手順が捉えられる。

584・583の胴部下位には，部分的に集中的な器面剥離が捉えられ，竈や据え付け石等との接触や摩擦による生じた可能性を見る。

586は，器厚が0.4cmと薄い。

587・589の外面調整は，ナデである。内面調整は，584 ～ 585同様に，右側から左側へ，下位から上位へのケズリの調整手順を踏襲する。

② 鉢

（サ）鉢１類 590

590は，胴部内面のケズリは不鮮明で，ヘラ状工具の側縁が斜位の沈線状に２条ほど捉えられる。胴部上位には指頭押圧が残される。底部は平底で，底部下位には，集中的・部分的な器面の剥離が捉えられ，煮炊きの際の竈や据え付けの礫の摩擦によるものと考えられる。

（シ）鉢２類 591・592

591・592の復元口径（外径）はそれぞれ，29.4cmと27.4cmを測り，甕と同程度の径をもつ。内面ケズリが横位である。２点とも器高の浅い鉢であり，器高に低い鉢には，横方向へのケズリが適している為と思われる。

591は，内面のケズリ上端が水平には揃わないが，592は，ケズリの上端が水平に揃い，稜線も明瞭に形成される。大島遺跡（2005）のP230で鍋と紹介される一群の内，鍋３類に分類される748～751に類する資料である。

なお，591の外面胴部下半には，器面剥離が捉えられ，竈や礫等への据え付け時の傷の可能性がある。

（ス）鉢３類 593

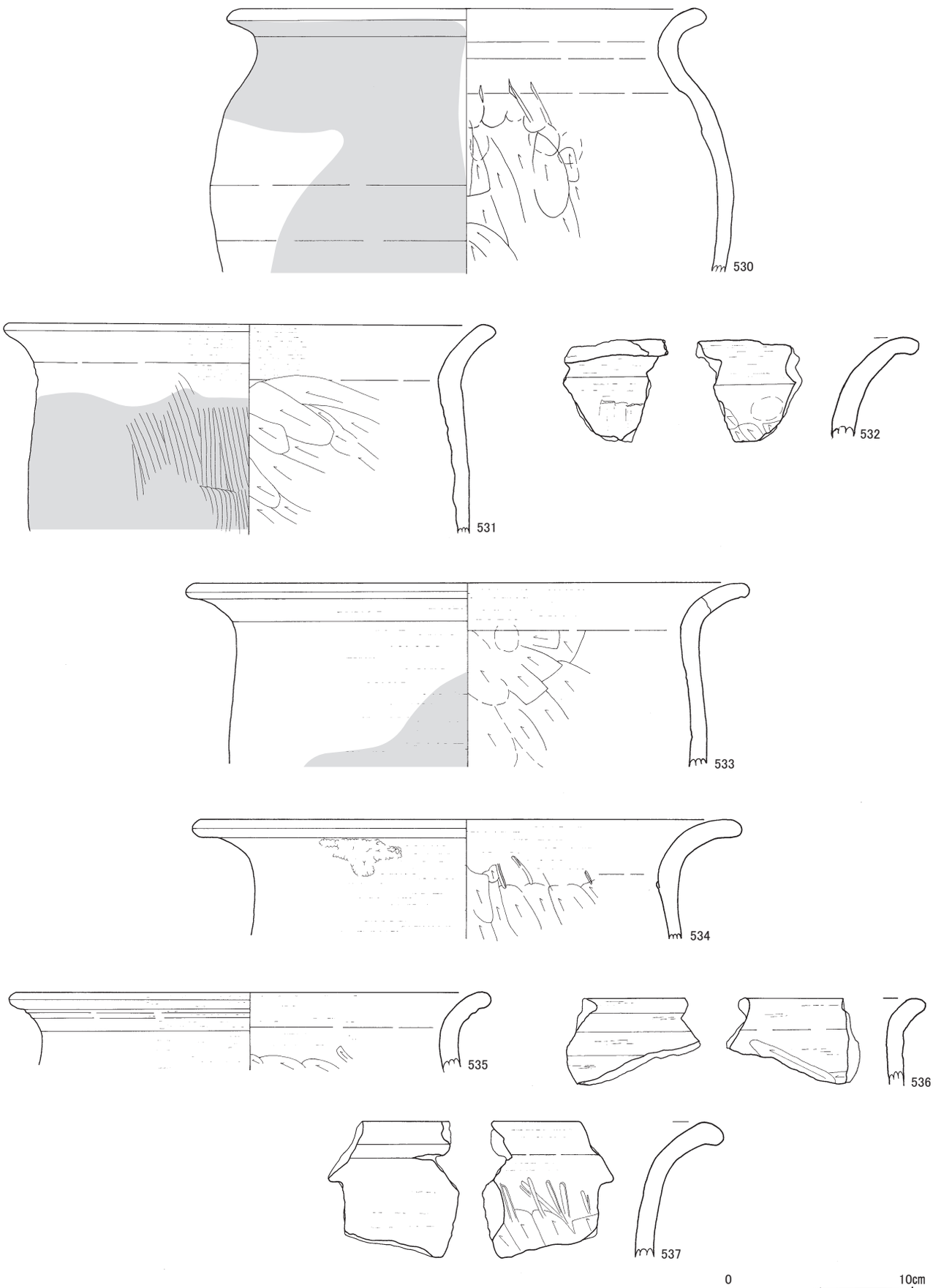
593は，外面に回転ナデの条線状の工具痕が明瞭に残される。内面には，砂粒の左上方向への移動痕が僅かに残されることから，斜位のケズリを施したと思われ，土師甕・鉢類に含めた。内面のナデが丁寧で，ミガキに似た光沢を有する。復元口径（外径）が19cmである。胎土が暗赤褐色を呈する。

（セ）鉢４類 594・595

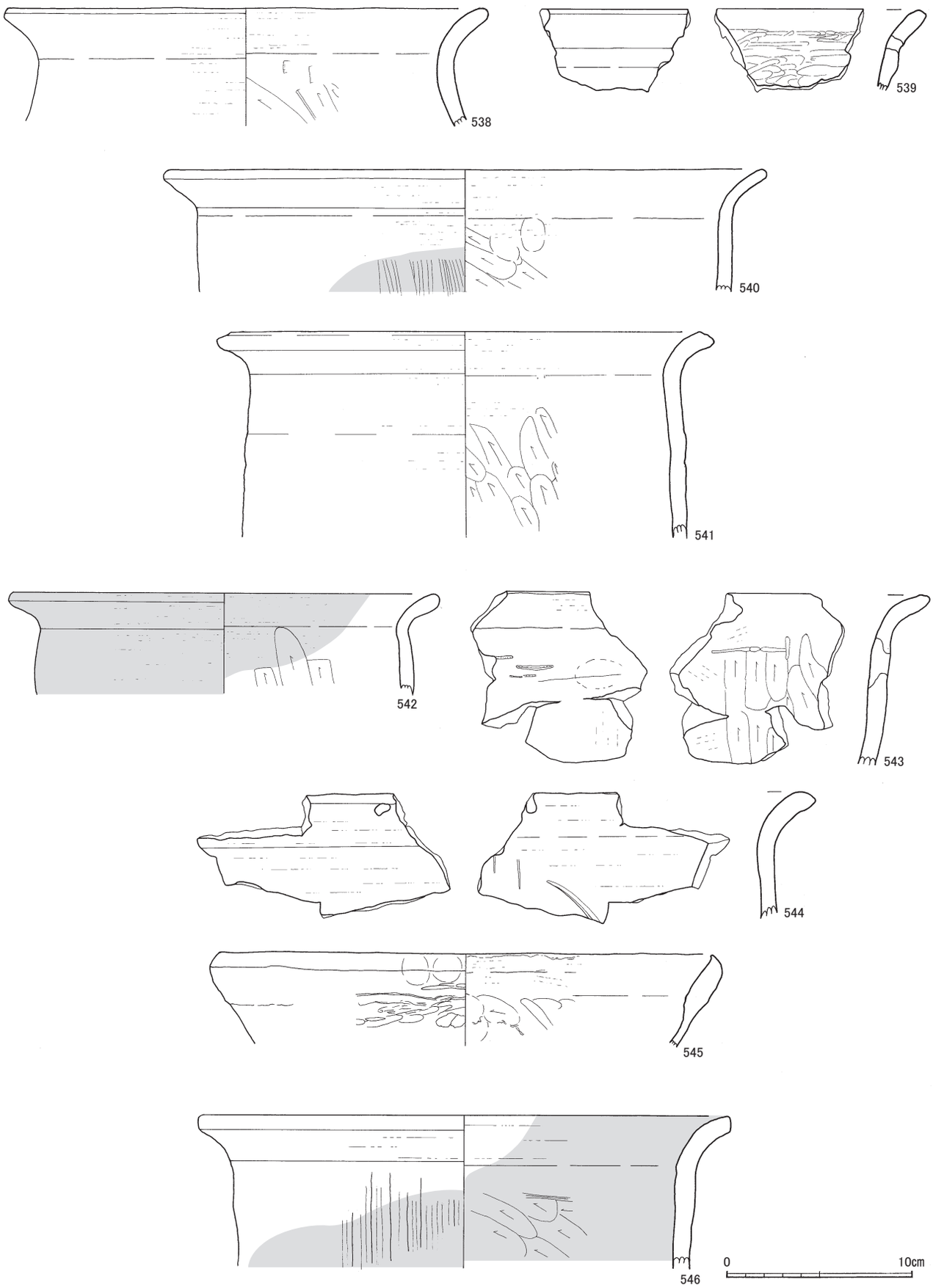
２点は，同一個体と思われる内黒土師器である。

594は，復元口径（外径）が22.2cm程である。外面の回転ナデには，微細な条線が密に残される。内面には，縦位のミガキが丁寧に施される。

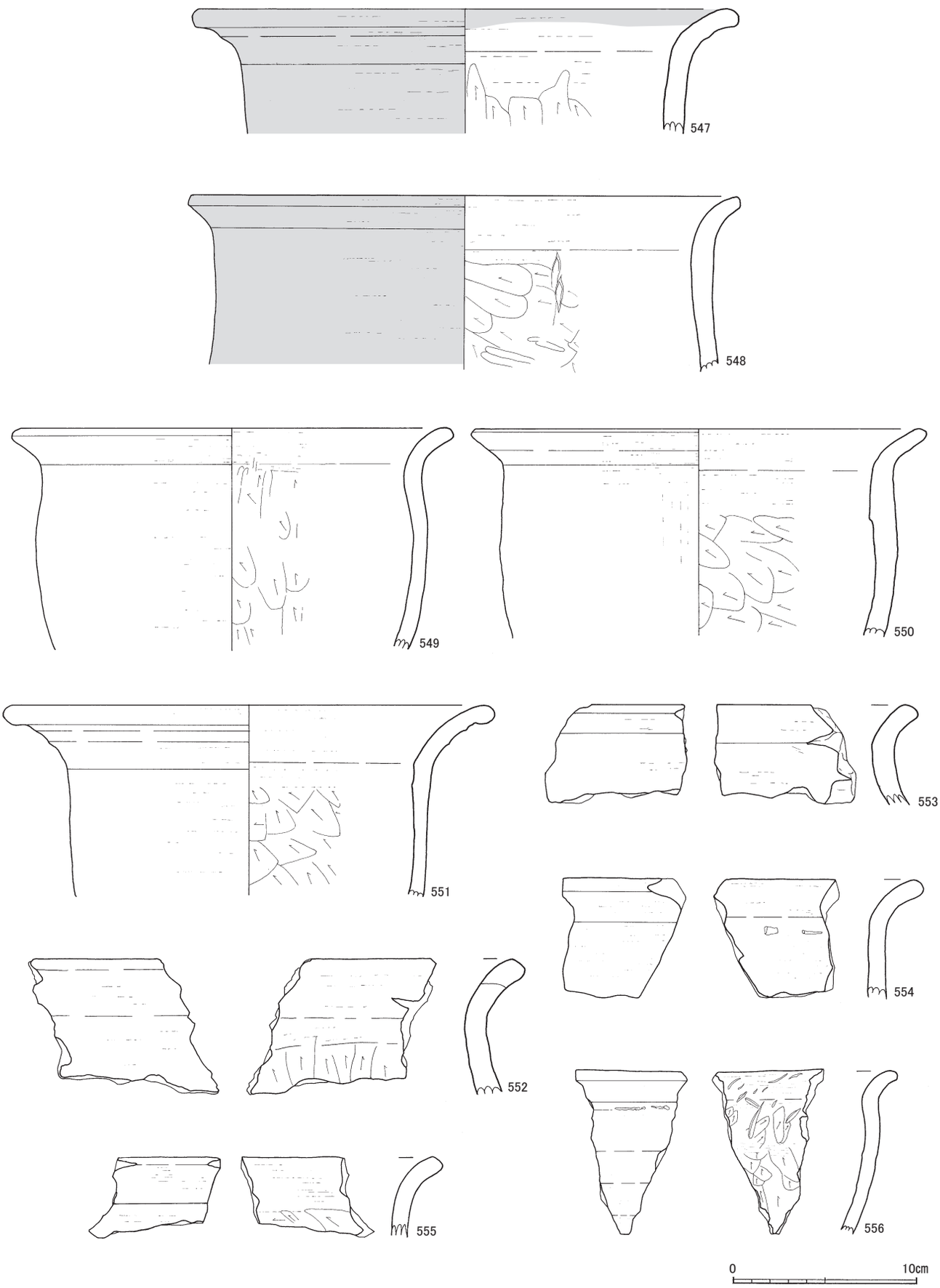
595は胴部から底部に至る資料で平底である。幅広の横方向のミガキ（指頭によるか。）が施される。内面には，縦位のミガキが丁寧に施される。胴部下半は，ミガキ状の横ナデにより光沢を呈する。底部から胴部への立ち上がりが，明瞭に屈曲をもつ。底部外面は，使用によると思われる器面剥離が顕著である。内黒土師器の鉢で，平底の土師甕の器形を呈する資料は，市ノ原遺跡（市ノ原2008）等に類例が出土する。



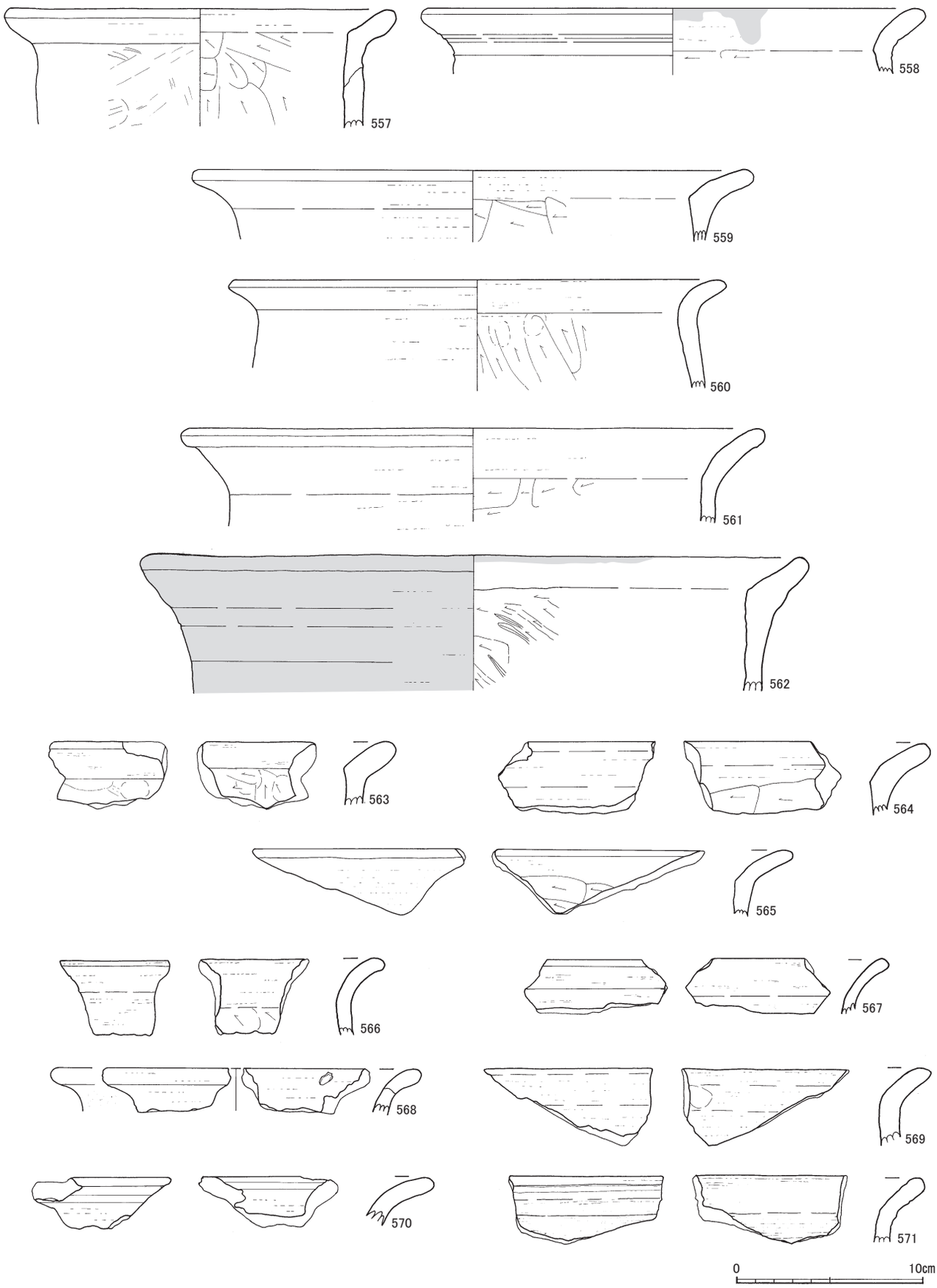
第92図　古代土師器（甕）実測図（1）



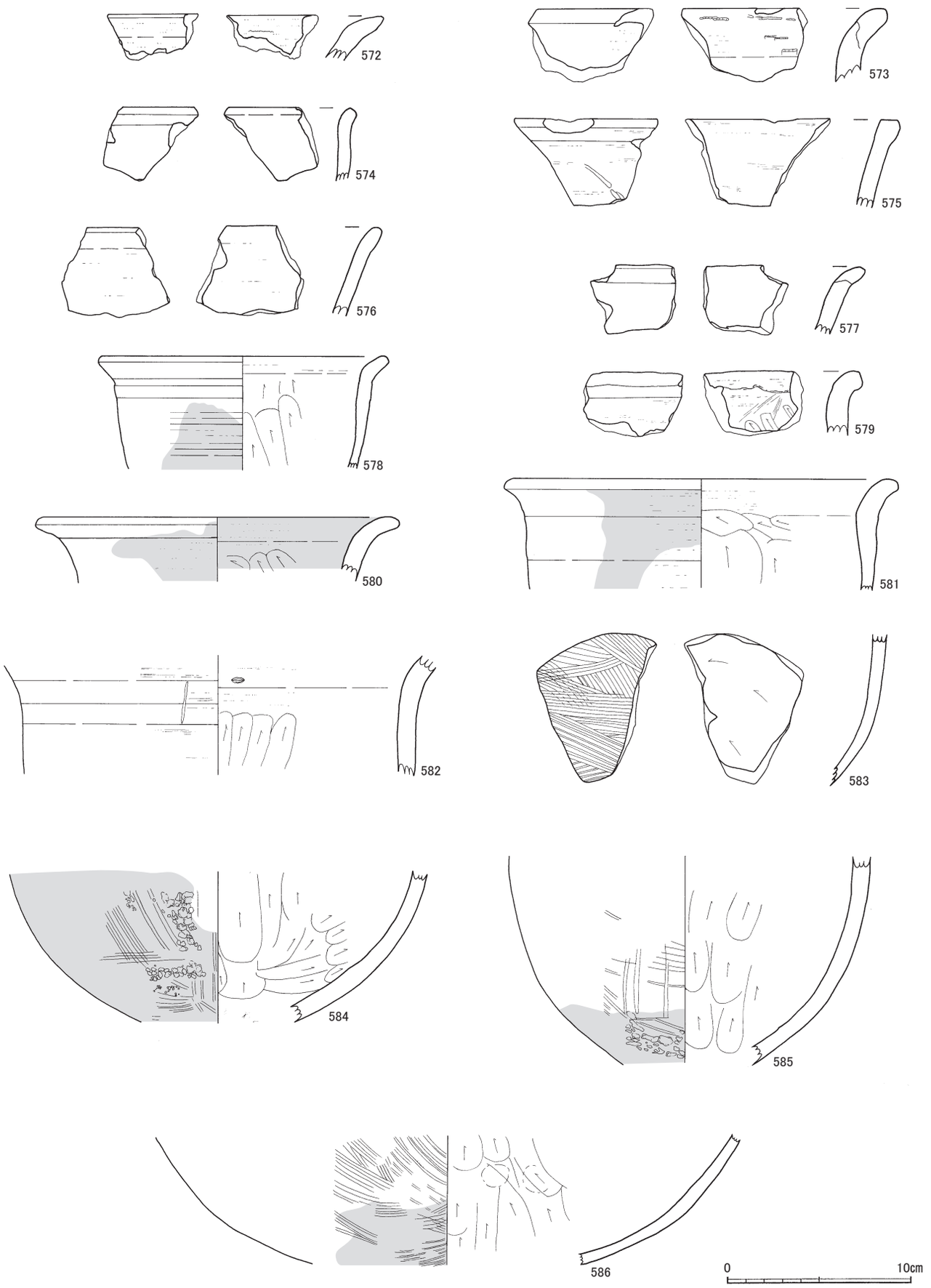
第93図　古代土師器（甕）実測図（2）



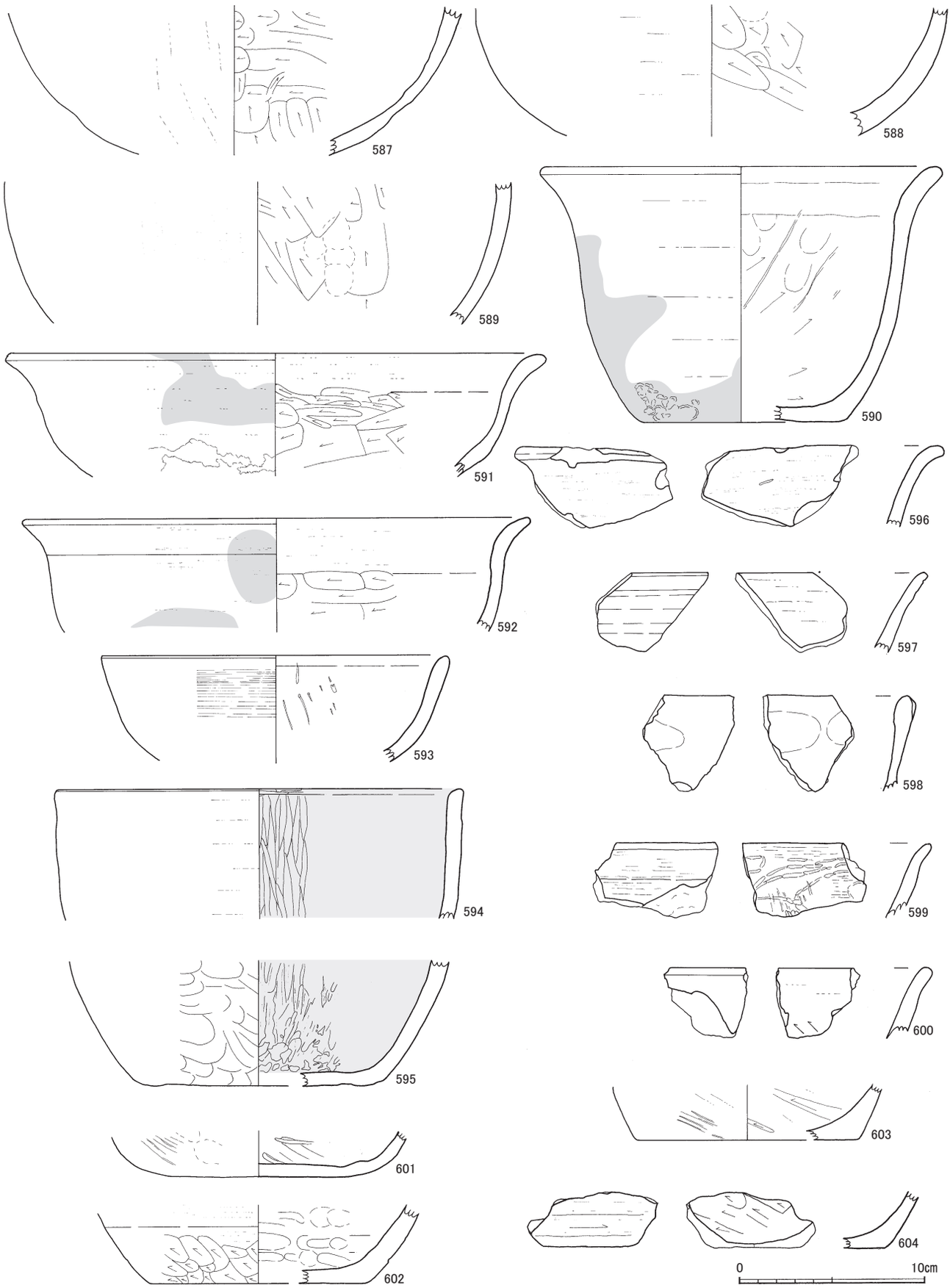
第94図　古代土師器（甕）実測図（3）



第95図　古代土師器（甕）実測図（4）



第96図　古代土師器（甕・鉢）実測図（5）



第97図　古代土師器（甕・鉢）実測図（6）

（ソ）口縁部小片（類不明）596 ～ 600

596・597は埦・坏に似た丁寧な器面調整であり，胎土も粒子が細かい。

596は口縁内面の深くに煤が及ぶ。

598は，片口の鉢と思われる。大島遺跡（2005）のP231で鉢１類に分類される一群に類する。

599・600は，内面に，部分的にミガキが施される。内面に，ヘラ状工具のケズリによると思われる削痕が捉えられる。

（タ）底部　601 ～ 604

何れも，器形が平底を呈する。

601は，底部から胴部への立ち上がりが丸みを呈し，器面調整が雑である。

602・603は，底部と胴部の境が明瞭に屈曲を持る。

602の外面には，ヘラ工具もしくは指頭による左上方向へのケズリ状の調整痕が捉えられる。胴部内面には，左斜め上方へのケズリ後，指頭による強いナデによる右斜め上方への凹みが残される。

（５） 甑

①　底部　605 ～ 610

何れも，胴部から底部に至る破片資料である。大島遺跡（2005）では，同様な資料をカマド形土器として移動式カマドに分類して報告されているが，本項では甑の可能性が高いと判断し掲載する。その理由は，内外面共に煤の付着や二次焼成の痕跡が捉えられないことによる。

605 ～ 608は，器面全体の整形や調整は，比較的丁寧に施されるが，内外面の胴部下端の整形及び調整が粗雑で，凹凸が顕著である。内外面の胴部下位に帯状のケズリが巡らされる他，粘土の貼付痕が付着する。胴部下位に鍔が貼付され巡らされており，その鍔が剥離した可能性もある。

605は，復元底径が22cmを測る。

606は，復元底径が19.6cmを測る。２点とも，器形や調整等酷似し，同一個体の可能性がある。

606 ～ 608は，内面の胴部下端から１.5cm幅で，内側に鈎状に迫り出す。この胴部下端の鈎状の側面には，横方向に「V」字状の抉りが施される他，横ナデにより側面調整がなされる。外面の鍔同様に，内面の胴部下端にも，鍔状の貼付が巡らされていたのが剥離した可能性もある。

609・610は，上述の605 ～ 608と異なり，外面全体に丁寧なナデやケズリが施される。内面の胴部下端が，内側に鈎状に迫り出す。迫り出し部分の器厚及び底部幅は，609は器厚0.8cm程で底部幅は２cm強，610の器厚は1.5cmで底部幅は２cm程である。特に609の底部外面の器面には，使用によると思われる摩耗が捉えられる。

②　把手　611 ～ 615

何れも，甕もしくは甑の把手と推定される。指頭押圧気味のナデにより成形される。形態的には，上面が側面より幅広でやや扁平な611と，上面及び側面幅が同程度で厚みのある612 ～ 614，把手が短く，縦方向に１孔を穿つ615に分類できる。

大島遺跡には，把手の断面観で，縁端が牛角状を呈する形態が多く報告されている（大島2005）が，本遺跡の資料は把手の縁端が僅かに上に反る程度で相違がある。

（６） 須恵器

遺物包含層から出土した須恵器は，蓋・甕・壺の３種類であり，器形により以下に分類を試みた。

①　蓋

（ア）蓋１類　616

616の１点のみの出土である。復元径が14.6cmを測る。中心から外側に向けて外反する天井部が外縁端で屈曲・斜立する。天井部内外面共に回転ナデを施す。天井部に輪状のつまみが剥落した痕跡が捉えられる。

（イ）蓋２類　617

617の１点のみが出土する。外反する天井部が外縁端で僅かに屈曲し接地面に平行する。外縁端にかえりが巡る。天井部内外面共に回転ナデ調整を施す。

（ウ）蓋３類　618

618の１点のみの出土である。復元径が7.9cmを測る。天井部がドーム状を呈し，外縁端で「L」字状に屈曲し鍔を巡らす。天井部内外共に回転ナデを施す。

②　甕

（ア）甕１類　619 ～ 622

何れも，口縁部の器形が近似する。

619・621には，胴部上半部には格子目文タタキが見られる。口縁部はナデ調整を行う。

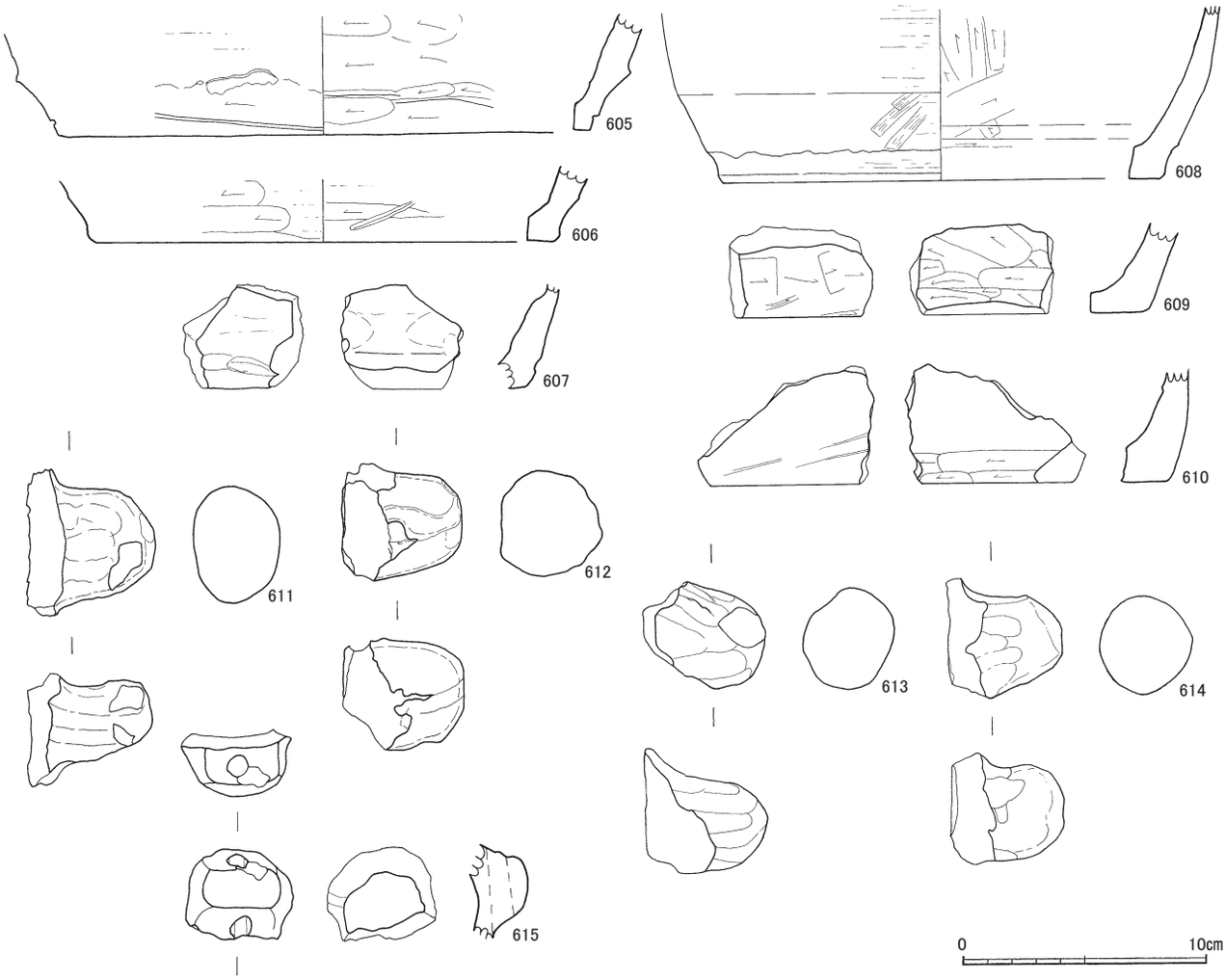
619は胴部との境に僅かに接合痕が捉えられる。

619・621の２点ともに内面の胴部上半部には同心円文当て具痕がみられるが，619の当て具痕は左から右方向への切り合いが捉えられる。

622は，胴部上半部に平行文タタキが見られる。胴部内面の同心円文当て具痕は，619同様に左から右方向への切り合いを示す。

（イ）甕２類　623

623は口径（外径）の復元には至らなかったが，かなり大型と思われる。口縁部上位に櫛描波状文を２条施



第98図　古代甑・把手実測図

す。その切り合いは，上位を横走させた後，下位を巡らす。口縁部下半には，格子目文タタキをナデ消した痕跡が捉えられる。

（ウ）頸・胴部　624 ～ 645

624・625は，頸部片である。

624の外面には平行文タタキを主とし一部格子目文タタキが，内面には同心円文当て具痕が見られる。

625も624と同様であるが，外面には格子目文タタキが捉えられない。

626 ～ 637は，胴部上半の資料である。

626 ～ 628・630・631は，外面には格子目文タタキが見られる。内面の胴部上位に同心円文当て具痕，下位に平行文タタキの使い分けが認められる。

629は，小片である。土師質で外面には格子目文タタキを施し，内面には縦位のケズリ（平行文タタキ？）を施す。煎熬土器や甑の可能性もある土師器であるが，本項で扱った。本遺跡では，３点程同様なタイプが小片が出土しており，詳細は，P263に特記した。

632 ～ 644は，胴部片で，外面に平行文タタキを施す。

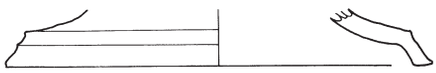
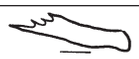
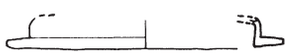
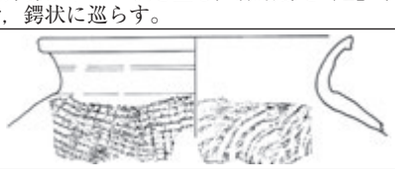
632 ～ 634は，色調やタタキなどから同一個体の可能性が高い。何れも外面は，平行文タタキである。同一個体と仮定すると，内面の胴部上位には同心円文当て具痕，胴部中位には平行文タタキの使い分けがなされていると判断される。

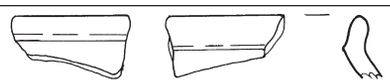
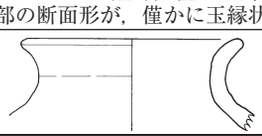
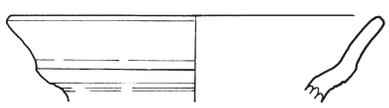
636・638は，色調やタタキの形態から同一個体の可能性がある。

639・640は，内外面共に平行文タタキによる整形がなされる。

639は，内面の胴部上位と中位で，平行文タタキの向きに違いが捉えられ，整形時の姿勢や須恵器の抱え方に違いがある可能性が見いだせる。また，判然とせず図化しないが，焼成後穿孔らしき孔が１孔，内外面から穿たれているように捉えられる。穿孔には部分的に使用によるか潰れが捉えられる。土器胴部（体部）への穿孔は，縄文時代から古墳時代の土器には散見されるが，須恵器への焼成後穿孔は，特異と思われる。

第44表　古代須恵器分類表

	特　徴
蓋1類	 器形：天井部の縁端部を大きく屈曲させ，接地面に斜行させる。
蓋2類	 器形：扁平で，天井部の縁端部を接地面に平行になるように僅かに折り曲げる。
蓋3類	 器形：天井部がドーム状を呈し，縁端部を「L」字状に屈曲させ，鍔状に巡らす。
甕1類	 器形：口縁部の外径が22cm未満の，比較的小型の甕である。

	特　徴
甕2類	 器形：口縁部の外径が22cm以上の，大型の甕である。
壺1類	 器形：口縁部が１cmほどと短く，僅かに外反気味に直行する。口唇端部の断面形が，僅かに玉縁状である。
壺2類	 器形：口縁部が外反する。口唇端部の断面形は丸みを帯びる。
壺3類	 器形：頸部から口縁部にかけて大きく外反し，口縁部中位で屈曲を呈し，更に口縁部上半で外反する。いわゆる二重口縁となる。

③　壺

（ア）壺１類　646

646の１点の出土である。焼成が甘く，外面の色調は灰黄褐色を呈する。

（イ）壺２類　647

647は胴部上位に，僅かに平行文タタキが捉えられる。器面に，自然釉の釉垂れが付着する。器面や胎土の色調，平行文タタキの類似性から，651や661と同一個体の可能性がある。復元口径（外径）が9.8cm，復元頸部（内径）が6.8cmを測る。

（ウ）壺３類　648・649

648・649は口縁部内面に，かえりが巡る。外面には煤が付着する。649は焼きが甘く，剥離面がにぶい橙色を呈する。

（エ）胴部　650 ～ 659

650は頸部片である。内外面共に，回転ナデを施す。

651 ～ 656は，頸部から胴部上半に至る資料である。

651は，647・661と同一個体の可能性がある。外面は平行文タタキにより，右から左方向への切り合い関係が捉えられる。内面は，ナデの後，指頭押圧による成形が見て取れる。

652は，外面に部分的格子目文タタキが，内面にはナデ後指頭押圧による調整が施される。内外面には，気泡状の膨らみが見られ，胎土中の空気の抜けが不十分なためと思われる。

653・654は，外面に部分的格子目文タタキ，内面に指頭押圧が施される。共に，内面に粘土紐による接合痕が明瞭に残され，下位から巡らせ，上位にかけて貼りしろを被せつつ接合する製作過程が捉えられる。

653は，粘土痕幅が２cm弱，654は１cm弱～１．5cmである。653は，655と同一個体の可能性があり，654は657・660と同一個体の可能性が高い。

655・658・659は，胴部中位の資料である。

655は，内外面共にタタキや接合痕が，ほぼナデ消される。内面には，指頭押圧による調整が施されるが，接合痕の痕跡が僅かに捉えられる。653と同一個体であろう。

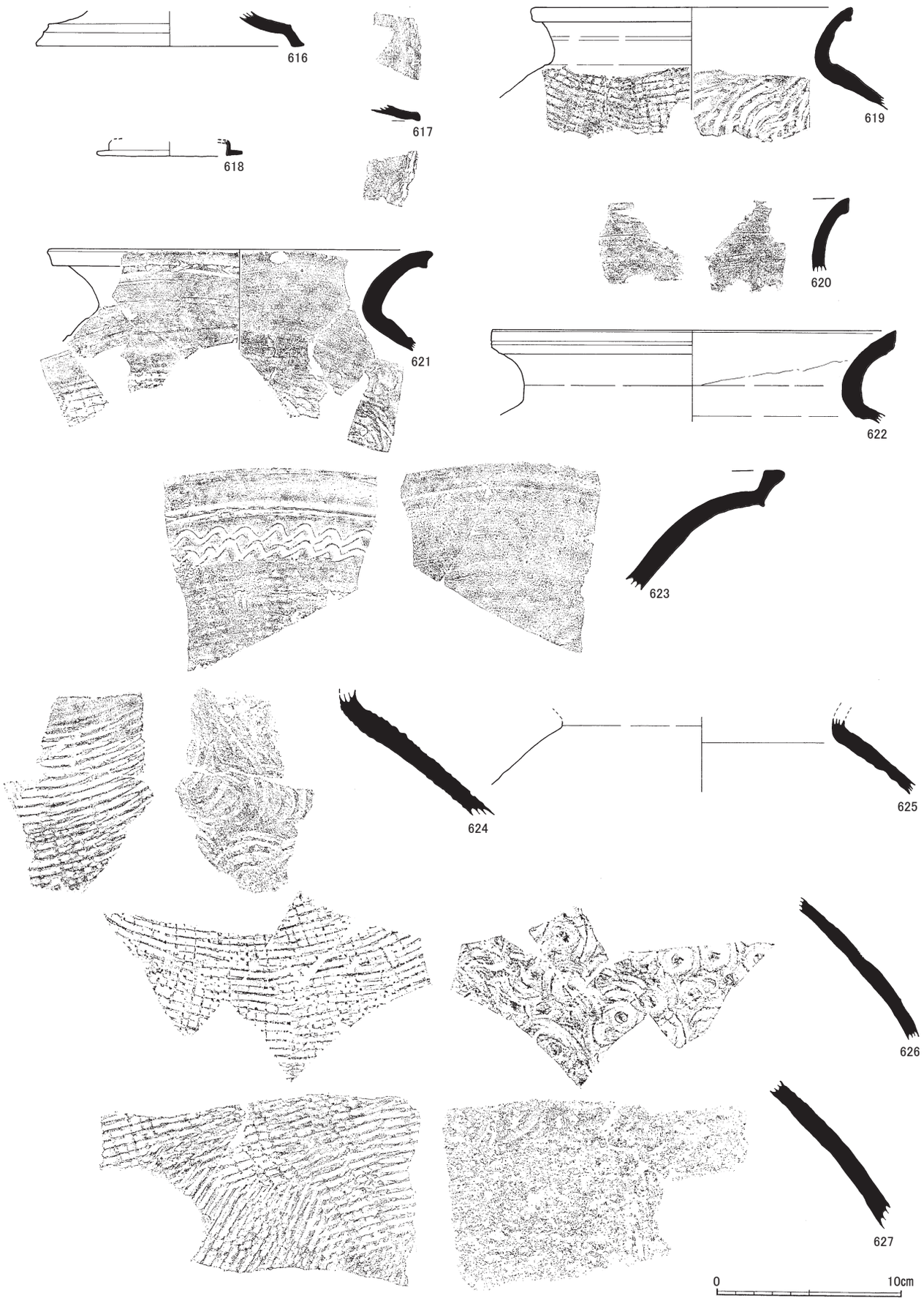
656は，外面を部分的格子目文タタキで成形後回転ナデによりタタキをナデ消す。内面は，ナデによる成形後指頭押圧で調整を行う。

657の外面は，斜位の平行文タタキ後，ストライプ状にナデを巡らせる。内面には，粘土紐による２cm幅の接合痕が残される。下位から上位にかけて貼りしろを被せつつ接合する製作過程は，先述の653・657と同様である。657は654・660と同一個体の可能性が高い。

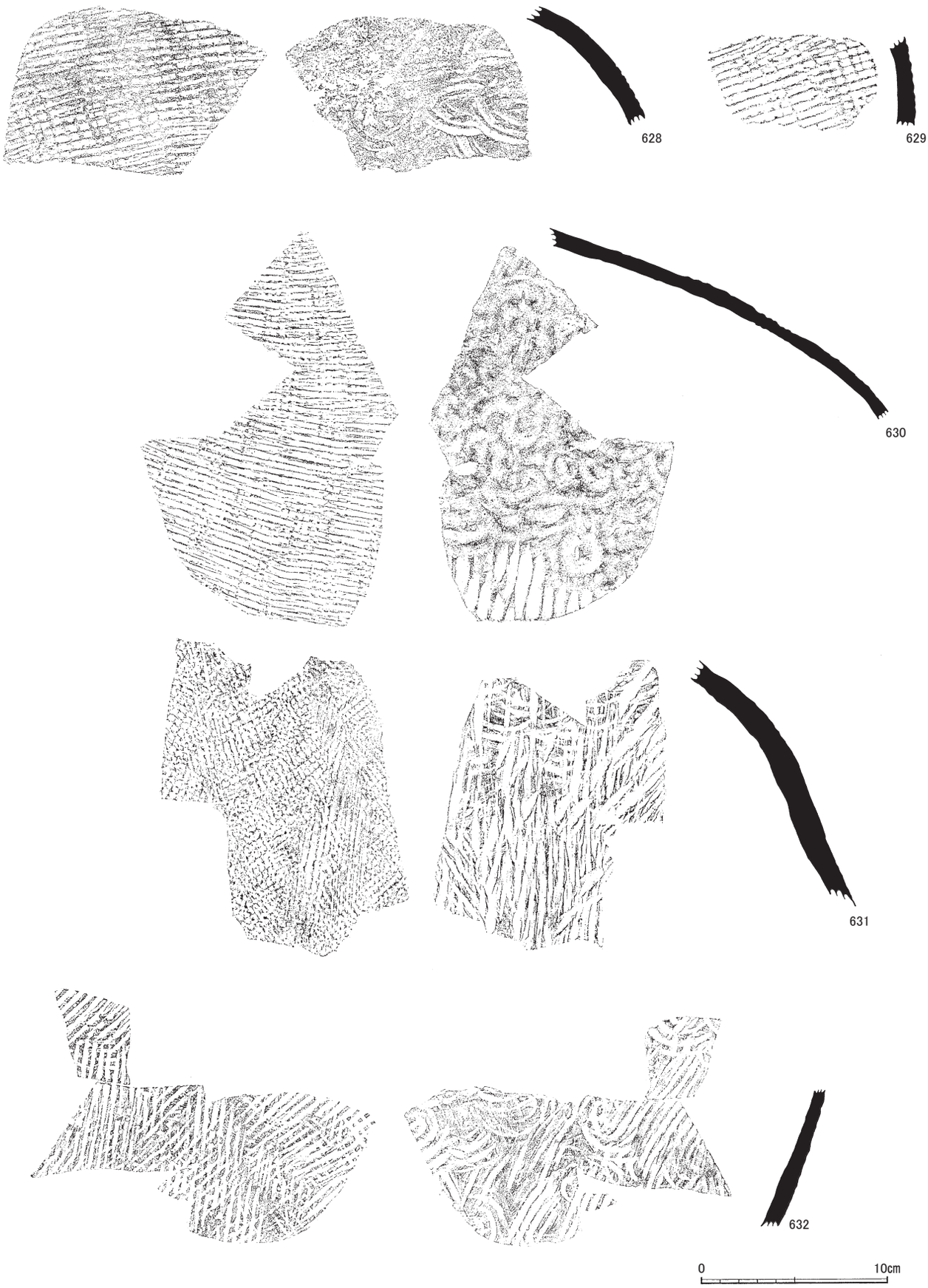
658・659は，同一個体と思われる。共に，外面は，部分的格子目文タタキにより成形を行い，部分的にナデが見られる。内面はナデ後指頭押圧による調整痕が見られるが，重なり合う粘土紐の接合痕が部分的に捉えられる。

（オ）底部　660 ～ 662

660は，先述の654・657と同一個体の可能性が高く，内外面の成形や調整手法は同一である。本資料には，円盤状の底部の側縁に胴部を形成する粘土紐を重層させる

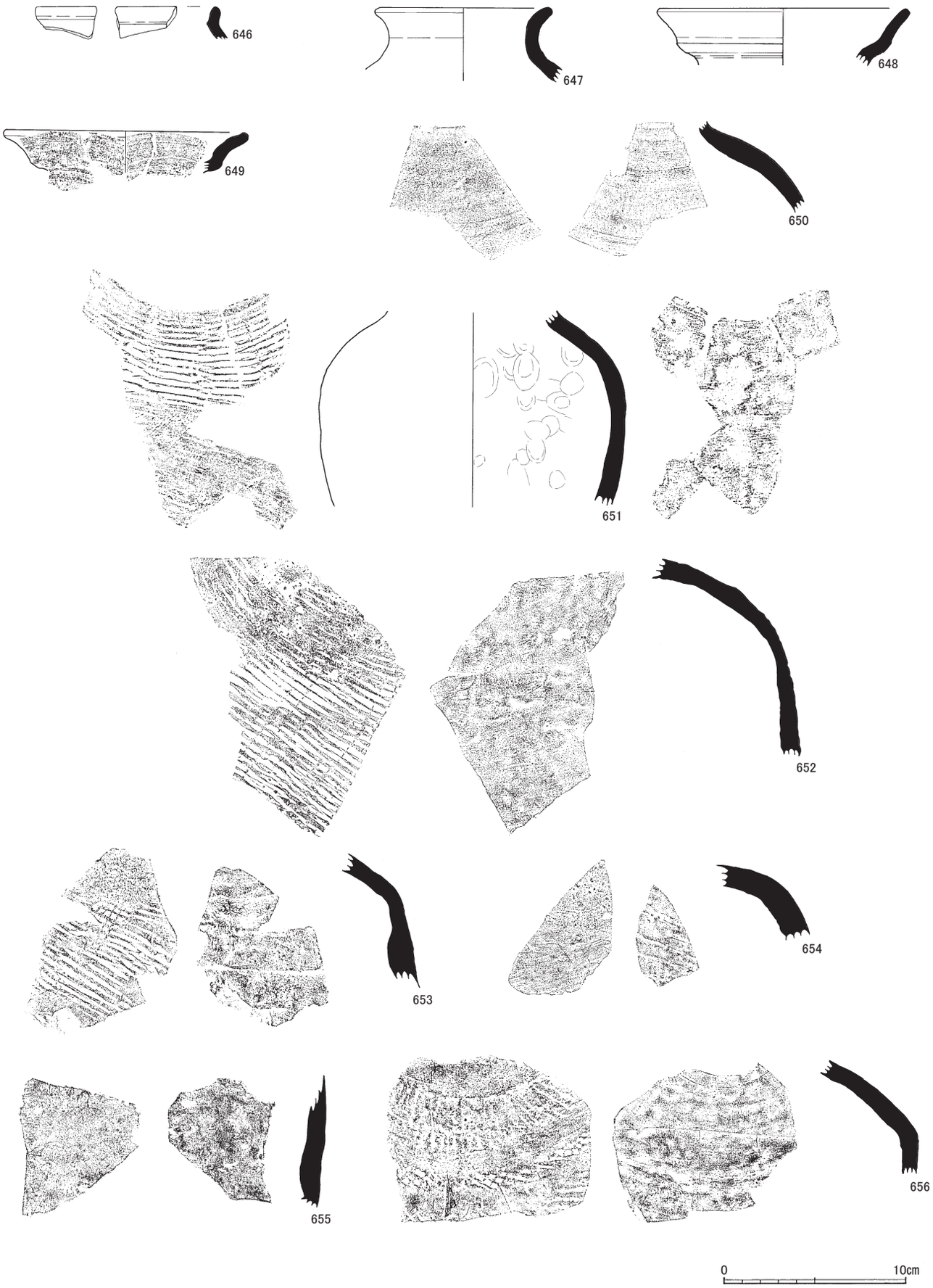


第99図　古代須恵器（蓋・甕）実測図（1）

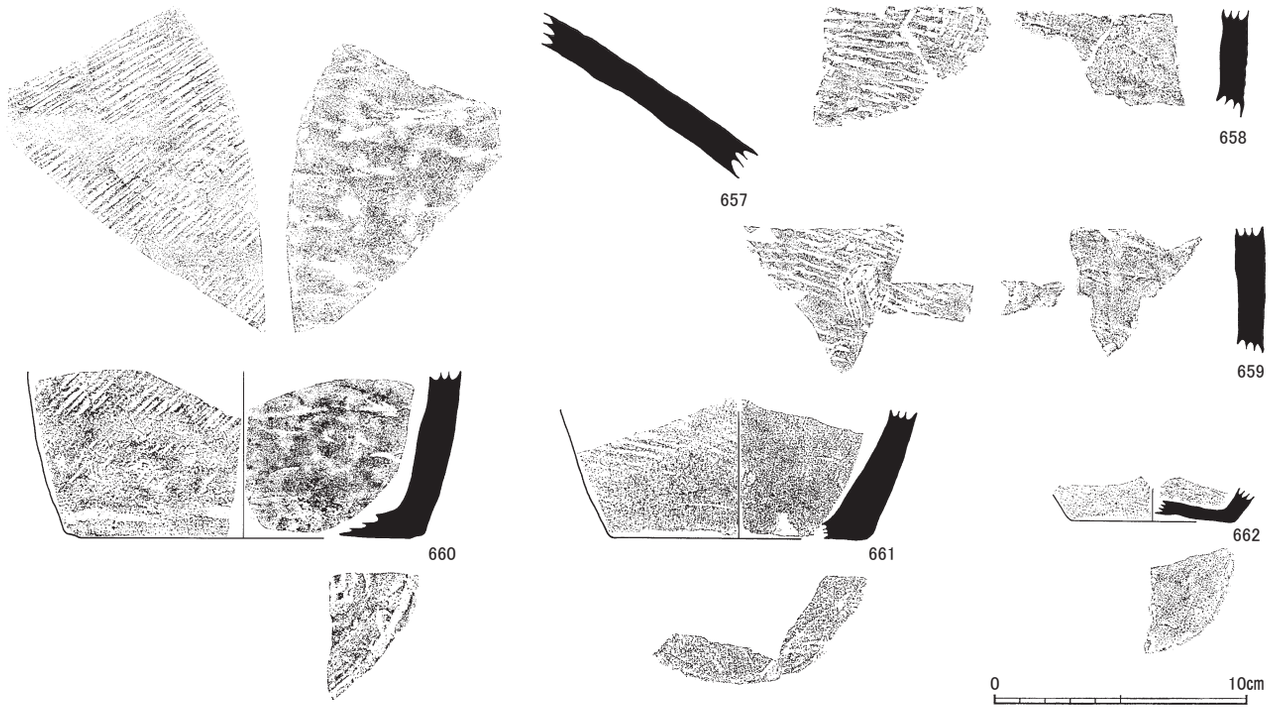


第100図　古代須恵器（甕）実測図（2）

第101図　古代須恵器（甕）実測図（3）



第102図　古代須恵器（壺）実測図（4）



第103図　古代須恵器（壺）実測図（5）

製作手順が捉えられる。底部外面には，僅かに同心円文当て具痕が見られる。

661は，先述の通り，647・651と同一個体の可能性が高く，成形や調整等共通する。胴部下位には，1cm程のナデを一巡させる。内面には，底部と胴部の屈曲する接合部を中心に，接合強化を意図する数mmの粘土の塗り合わせが捉えられ，厚めの器厚を呈する。

662は，復元底径が6.6cmと小さめで，底部の器厚も4mm程と薄い。内外面共に，ナデ調整のみ捉えられる。

（7）土錘　663 ～ 680

土錘・土製品に関しては，出土層が黒褐色砂壌土であることから古代・中世の何れの時期の可能性も考え得るが，貝殻を集積する古代比定の柱穴が存在すること，同市内の大島遺跡（2005）で，古代の多数の土錘が出土することから，本項では古代の時期で報告する。

663 ～ 670は，平面観が隅丸方形の器形である。

663・665のみ完形を保ち，他は穿孔の穿たれる両縁端の内，片側の孔口に欠損が見られる。長軸の長いスマートな器形を呈する。

672・673は，平面観が楕円状のやや膨らみの強い器形を呈する。

673は，穿孔の直径が1.5mmであり，他の資料と比較しても小さい。

674 ～ 678は，平面観が算盤玉状を呈する。

677は，両孔口が平坦面を成す程に摩耗している。

算盤玉状の器形資料中，678のみ孔口の欠損が捉えられる。

679は，一見やや大振りの土錘に似る。焼成前穿孔が穿たれるが，貫通直前で止まる。

680は，ほぼ球状を呈する。両側から穿孔が穿たれるが，片側からは奥深くに穿たれる一方，もう片側からは数mm程の極浅にとどまり，貫通しない。器面には，微細な刺突連点状の刻みが縦横に交錯する。

（8）土製品　681 ～ 683

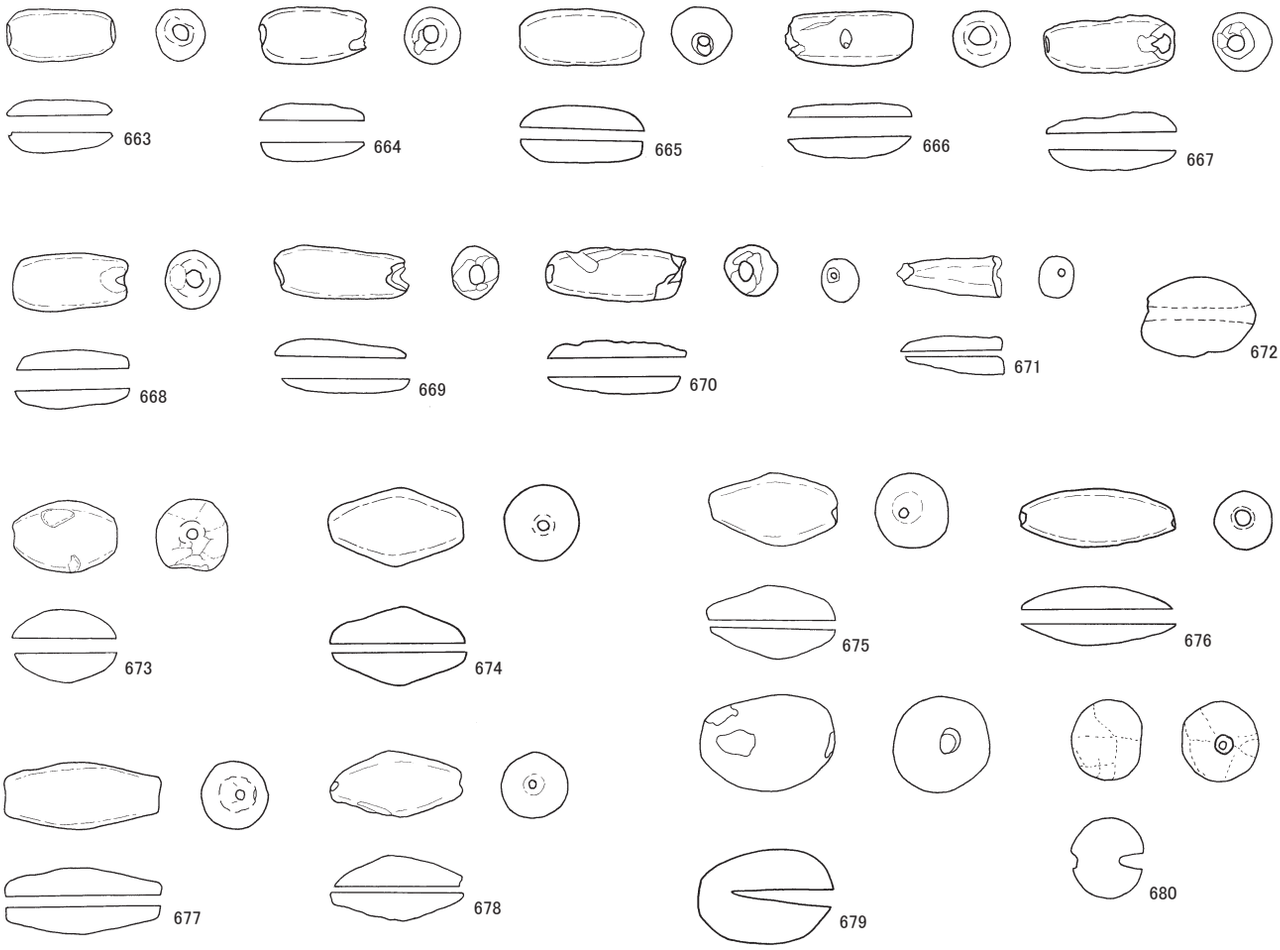
681 ～ 683は，手捏ね成形による人形・獣形の土製品と考えられる。比較的硬質で，窯による焼成と思われる。681は表土中の資料であるが，682・683は，Ⅱb層（古代・中世包含層）出土である。3点とも古代に含めて報告する。

681は，耳が短く，尾が直立することから犬形土製品と判断した。

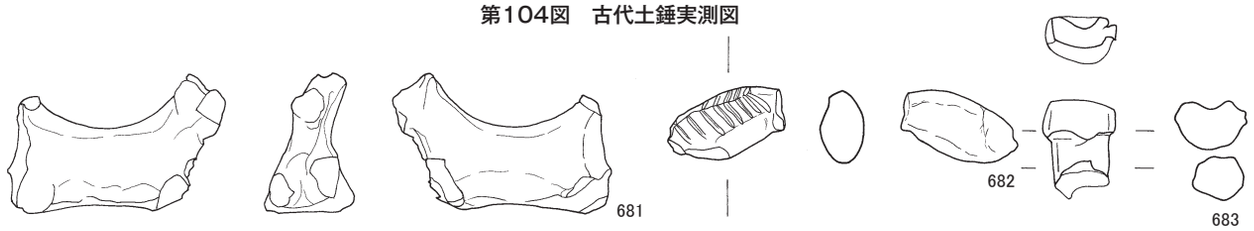
682は，器面の一部にハケメ状の工具痕が施され，装飾の一部か。片方の縁端に指頭押圧による平坦面の作出が捉えられ，人形等の胴部への粘着接合の剥離と認識でき，人形等の腕・足の欠損品と判断した。

大島遺跡（2005）の第169図1124の双孔棒状土錘が，「両端を外へ張り出すほど指で押して平らに」する点，「胴部中央に横位の工具痕が0.3cm間隔で8本残る」点など，本資料と共通する特徴が捉えられるが，682には穿孔が確認されない。

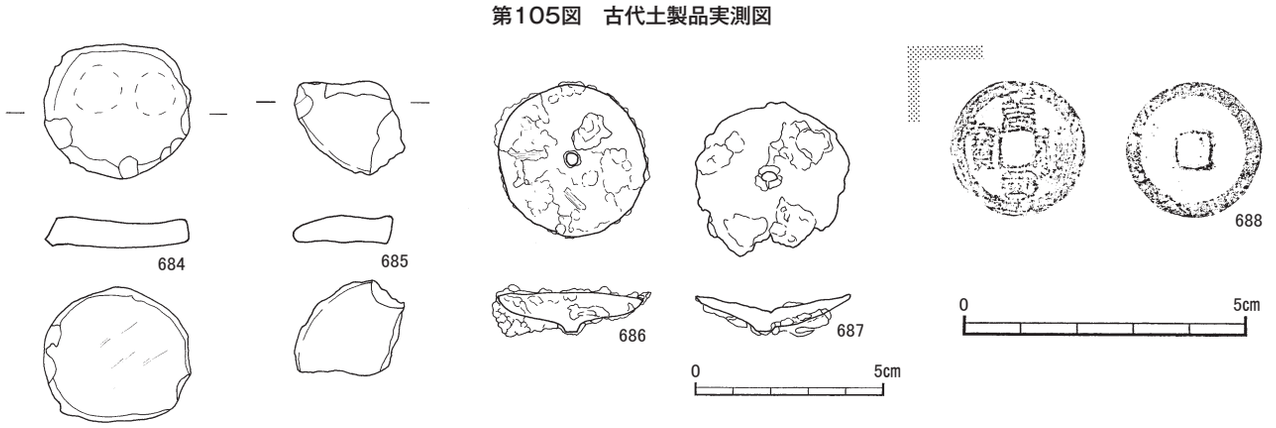
683は焼成前穿孔が施される筒状の器形を呈する。人形等の腕・足の可能性もあるが，判然としない。



第104図　古代土錘実測図



第105図　古代土製品実測図



第106図　古代円盤状土製品・紡錘車・古銭実測図

（9）円盤状土製品　684・685

684・685は，（復元）直径が3.9cmとほぼ同形の円盤状土製品である。

684は，焼成前に成形がなされる一次製品である。側面を上下左右の４分割で捉えた際の相対する２面に剥離が集中し，用途に係る痕跡の可能性もある。

685は，焼成後に側面を摩耗及び剥離により成形した二次加工品と考えられる。

（10）鉄製品　686・687

紡錘車の出土は，この２点のみである。

本遺跡で多く出土する鉄製の刀子や釘は，掘立柱建物跡等の遺構が数多く検出された中世に含めたが，鉄製紡錘車に関しては，「古代に200点近く出土した紡錘車は，中世になると激減し，転用品が殆どを占める」（持躰松2007-P256）との指摘もあり，古代に含めて報告する。

本遺跡では，一般的に，鉄製より多く出土する土製転用の紡錘車は確認されない。

686は復元直径が3.9cm，687は復元直径が4.2cm程の笠状を呈する紡輪の破片資料である。紡輪中心には直径3mmの穿孔が穿たれ，紡茎は確認されない。

（11）　古銭　688

688は，南唐の古銭「唐國通寶」である。959年の鋳銭で，書体は篆書である。

第45表　古代畝溝計測表

挿図番号	遺構名	検出区	層	東西（m）	南北（m）	深さ（cm）	方位	面積（㎡）	備考
80	畝溝1号	D ～ F-8 ～ 10	Ⅲa	16	24	30	N40° W	384.0	
	畝溝2号	E-9	Ⅲa	6	8	－	－	48	

第46表　古代掘立柱建物跡計測表

挿図番号	遺構名	掘立柱建物1	検出区	A・B-6・7	方位	N0° W
81	梁×桁	2×3	種類		面積（㎡）	23.8

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	28	34	P1 ～ P3	(4.6)	P3 ～ P5	3.5	
P2	28	38	44	P5 ～ P7	6.8			
P3	36	30	32	P1 ～ P2	2.2	P3 ～ P4	1.7	
P4	34	24	44	P2 ～ P3	2.4	P4 ～ P5	1.8	
P5	26	26	16	P5 ～ P6	4.6			
P6	26	24	16	P6 ～ P7	2.2			
P7	34	32	22					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物2	検出区	B-6 B・C-7	方位	N23° W
81	梁×桁	2×4	種類		面積（㎡）	21.4

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	28	24	52	P1 ～ P5	5.8	P5 ～ P7	3.7	
P2	30	28	30	P7 ～ P10	(3.9)	P11 ～ P1	(2.6)	
P3	32	28	30	P1 ～ P2	1.5	P5 ～ P6	2.4	
P4	28	22	24	P2 ～ P3	1.2	P6 ～ P7	1.3	
P5	32	28	22	P3 ～ P4	1.4	P11 ～ P12	1.7	
P6	34	30	40	P4 ～ P5	1.7	P12 ～ P1	0.9	
P7	28	24	34	P7 ～ P8	1.5			
P8	56	34	48	P8 ～ P9	1.4			
P9	26	22	28	P9 ～ P10	1.0			
P10	46	30	28					
P11	38	30	38					
P12	48	24	42					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物3	検出区	B・C-7	方位	N18° W
82	梁×桁	2×4	種類		面積（㎡）	28.1

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	24	22	28	P1 ～ P5	6.7	P5 ～ P7	3.8	
P2	30	36	48	P7 ～ P11	6.2	P11 ～ P1	4.2	
P3	26	24	36	P1 ～ P2	1.4	P5 ～ P6	1.9	
P4	26	26	60	P2 ～ P3	1.7	P6 ～ P7	1.9	
P5	30	28	54	P3 ～ P4	1.5	P11 ～ P12	2.0	
P6	28	22	30	P4 ～ P5	2.1	P12 ～ P1	2.2	
P7	28	26	28	P7 ～ P8	1.6			
P8	44	26	42	P8 ～ P9	1.6			
P9	32	28	22	P9 ～ P10	1.6			
P10	26	23	42	P10 ～ P11	1.4			
P11	28	26	58					
P12	32	32	64					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物4	検出区	B・C-5	方位	N 4° E
82	梁×桁	2×3	種類	総柱	面積（㎡）	15.8

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	28	24	20	P1 ～ P4	4.3	P4 ～ P6	3.3	
P2	32	30	26	P6 ～ P9	4.8	P9 ～ P1	3.3	
P3	24	20	22	P1 ～ P2	1.4	P4 ～ P5	1.8	
P4	24	18	22	P2 ～ P3	1.4	P5 ～ P6	1.5	
P5	40	16	12	P3 ～ P4	1.5	P9 ～ P10	1.7	
P6	24	22	14	P6 ～ P7	1.9	P10 ～ P1	1.6	
P7	24	24	20	P7 ～ P8	1.5	P2 ～ 11	1.9	
P8	28	26	22	P8 ～ P9	1.4	P11 ～ P8	2.0	
P9	23	22	22	P10 ～ P11	1.4	P3 ～ P12	1.8	
P10	24	22	16	P11 ～ P12	1.4	P12 ～ P7	1.7	
P11	34	28	26	P12 ～ P5	1.8			
P12	28	24	12					

第47表　古代土坑計測表

挿図番号	遺構名	検出区	層	上面部径（cm）		底面の径（cm）	深さ（cm）	形状	備考
				長軸×短軸		長軸×短軸			
83	土坑1号	B-6	Ⅲa	130×125		52×37	23	円形	
	土坑2号	B-6	－	150×135		139×123	19	円形	
	土坑3号	A-5	－	145×107		129×95	25	楕円形	
	土坑4号	A-4	－	112×90		100×82	22	楕円形	
85	土坑5号	B-4	Ⅵ	1	32×30	10×8	140	楕円形	
				2	45×30	19×14	116	楕円形	

第48表　古代土坑内遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土地点	種別	器種	部位	器面調整	色調		法量(cm)			胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他		
83	1	土坑1号	B-6	土師器	甕	胴部	外：回転ナデ，内：ケズリ	にぶい橙色 Hue5YR6/4	にぶい赤褐色 Hue2.5YR5/4	－	－	－	○	○	○		良	
	1	土坑2号	B-6	土師器	埦	口縁部～体部	外：回転ナデ，内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	14	－	－	○	○	○		良	
	2	土坑2号	B-6	土師器	甕	口縁部	外：回転ナデ，内：口縁部回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	明黄褐色 Hue10YR7/6	－	－	－	○	○	○		良	
	3	土坑2号	B-6	土師器	甕・鉢	胴部	外：ナデ，内：ケズリ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4	－	－	－	○	○	○		良	内外面煤付着。
	4	土坑2号	B-6	土師器	甕・鉢	胴部	外：ナデ，内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	明黄褐色 Hue10YR7/6	－	－	－	○	○	○		良	内外面煤付着。

第49表　古代土師器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
87	383	4568	B-8	Ⅱ	蓋	―	つまみ部	外：指頭押圧→ナデ 内：ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	3.6	－	－	○	○	○		赤色鉱物	
	384	81	D-8	Ⅱ	蓋	―	天井部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○		黒色鉱物	
	385	15332	D-9	Ⅱb	蓋	―	天井部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	13.0	－	－	○	○	○		黒色鉱物	
	386	18414	C-7	Ⅱb	埦	Ⅰ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	－	6.0	－	○	○	○		黒色鉱物	
	387	5831	E-5	Ⅱa	埦	Ⅰ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	－	7.2	－	○	○	○		黒色鉱物	
	388	4184	B-7	Ⅱ	埦	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白色 Hue10YR8/2	灰白色 Hue10YR8/2	－	7.4	－	○	○	○			
	389	284	B-7	Ⅱ	埦	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	6.8	－	○	○	○		赤色鉱物	
	390	19177	C-7	Ⅱb	埦	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	黄褐色 Hue2.5Y5/3	－	7.0	－	○	○	○		黒色鉱物	
	391	22368	F-8	Ⅱb	埦	Ⅲ	体部～底部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	明黄褐色 Hue5YR5/8 にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	－	8.4	3	○	○	○		赤色鉱物	内面煤付着。
	392	18573	C-7	Ⅱb	埦	Ⅲ	体部～底部	外：回転ヘラケズリ→回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	5.6	－	○	○	○		赤色鉱物	
	393	16123	D-8	Ⅱb	埦	Ⅳ	体部～底部	外：回転ヘラケズリ→回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	－	7.5	－	○	○	○		火山ガラス	内面に煤付着。
	394	16097	C-8	Ⅱb	埦	Ⅳ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	8.0	－	○	○	○			
	395	20509	C-7	Ⅱb	埦	Ⅳ	体部～底部	外：回転ナデ 内：―	灰白色 Hue10YR8/2	灰白色 Hue10YR8/2	－	6.4	－	○	○	○		黒色鉱物	
	396	18743	C-7	Ⅱb	埦	Ⅳ	体部～底部	外：回転ナデ 内：―	灰黄色 Hue2.5Y6/2	灰黄色 Hue2.5Y6/2	－	6.8	－	○	○	○		黒色鉱物	
	397	21561	C-7	Ⅱb	埦	Ⅴ	体部～底部	外：回転ヘラケズリ→回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	－	7.4	－	○	○	○			
	398	2287	B-6	Ⅱ	埦	Ⅴ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	－	7.6	－	○	○	○			内面に煤付着。
	399	1008	C-4	Ⅲ	埦	Ⅴ	体部～底部	外：回転ヘラケズリ→回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	6.4	－	○	○	○			
	400	19993	C-7	Ⅱb	埦	―	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	－	6.6	－	○	○	○			硬質。須恵器模倣形態。
	401	20591	A-7	Ⅱb	坏	Ⅰ	体部～底部	外：回転ヘラケズリ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	6.8	－	○	○	○		黒色鉱物	
	402	5430	B-5	Ⅱ	坏	Ⅰ	体部～底部	外：回転ヘラケズリ→回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	－	5.0	－	○	○	○		火山ガラス	
	403	18409	C-7	Ⅱb	坏	Ⅰ	体部～底部	外面・底部：ミガキ 内：回転ヘラケズリ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	－	5.5	－	○	○	○		黒色鉱物	底部：「十」字の線刻。
	404	22545	A-5	Ⅱb	坏	Ⅰ	体部～底部	外：回転ナデ 内：―	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	－	5.6	－	○	○	○		黒色鉱物	
	405	20464	C-8	Ⅱb	坏	Ⅰ	体部～底部	外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	浅黄橙色 Hue10YR8/4	－	5.6	－	○	○	○			底部：ヘラ切り痕2箇所。
	406	4198	B-7	Ⅱ	坏	Ⅰ	体部～底部	外：回転ヘラケズリ→回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	5.0	－	○	○	○			
	407	15964	D-9	Ⅱb	坏	Ⅰ	体部～底部	外：回転ヘラケズリ→回転ナデ 内：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	－	6.6	－	○	○	○		赤色鉱物	
	408	1393	C-5	Ⅱ	坏	Ⅰ	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	5.0	－	○	○	○			
	409	18010	C-7	Ⅱb	坏	Ⅰ	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	－	5.4	－	○	○	○			内：擦過痕あり。
	410	23110	A-7	Ⅱb	坏	Ⅰ	体部～底部	外：回転ヘラケズリ→回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	5.6	－	○	○	○			
	411	2837	B-6	Ⅱ	坏	Ⅰ	底部	外：回転ヘラケズリ→回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	－	7.0	－	○	○	○		黒色鉱物 火山ガラス	体部下位：工具（ヘラ）痕。
	412	1718	B-5	Ⅱ	坏	Ⅰ	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/4	淡黄色 Hue2.5Y8/4	－	5.0	－	○	○	○		黒色鉱物	
	413	22817	F-9	Ⅱb	坏	Ⅰ	体部～底部	外：― 内：―	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3	－	6.0	－	○	○	○			
	414	2405	F-5	Ⅲ	坏	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ヘラケズリ 内：回転ヘラケズリ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	12.2	5.8	5.6	○	○	○			
	415	1660	B-5	Ⅱ	坏	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ヘラケズリ→回転ナデ 内：回転ヘラケズリ→回転ナデ	灰白色 Hue2.5YR8/2	淡黄色 Hue2.5YR8/3	13.2	6.0	5.8	○	○	○			409他と接合。煤付着。

第50表　古代土師器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
87	416	3905	A-7	Ⅱ	坏	Ⅱ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	13.0	－	－	○	○	○			
	417	6868	A-7	Ⅲ	坏	Ⅱ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	13.4	－	－	○	○	○		黒色鉱物 赤色鉱物	
	418	6900	A-7	Ⅲ	坏	Ⅱ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3	12.4	－	－	○	○	○		火山ガラス	
	419	21704	D-7	Ⅱb	坏	Ⅱ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	12.0	－	－	○	○	○		赤色鉱物	外面に赤色顔料。「外赤土器」
	420	15495	C-8	Ⅱ	坏	Ⅱ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	明黄褐色 Hue10YR7/6	16.2	－	－	○	○	○		砂礫	
88	421	20043	B-8	Ⅱb	坏	Ⅲ	口縁部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	12.8	6.2	6.1	○	○	○		黒色鉱物	
	422	19134	D-7	Ⅱb	坏	Ⅲ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	12.4	－	－	○	○	○		黒色鉱物	外：煤付着。
	423	20056	C-7	Ⅱb	坏	Ⅲ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	12.0	－	－	○	○	○		砂礫	口縁部：赤色顔料の塗布。内外：煤付着。
	424	1662	B-5	Ⅱ	坏	Ⅲ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	14.0	－	－	○	○	○			
	425	4930	B-7	Ⅱ	坏	Ⅲ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	13.0	－	－	○	○	○		黒色鉱物 赤色鉱物	
	426	21864	A-7	Ⅱa	坏	Ⅲ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3	12.4	－	－	○	○	○	黒		内：擦過痕あり。
	427	3195	A-5	Ⅱ	坏	Ⅲ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	14.4	－	－	○	○	○		火山ガラス	内：煤付着。
	428	21502	C-7	Ⅲa	坏	Ⅲ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	13.0	－	－	○	○	○			
	429	22964	A-7	Ⅱb	坏	Ⅲ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	13.6	－	－	○	○	○			口縁部内外：煤付着。
	430	21032	D-7	Ⅱb	坏	Ⅳ	口縁部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/3	13.2	6.4	5.4	○	○	○			内：二次焼成。外面体部下位：煤付着。
	431	4962	B-8	Ⅱ	坏	Ⅳ	口縁部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	にぶい黄橙色 Hue7.5YR7/4	13.6	6.0	5.1	○	○	○			内：煤が厚く付着。
	432	2406	F-5	Ⅲ	坏	Ⅳ	口縁部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	12.7	5.7	5.2	○	○	○			外：二次焼成。
	433	21479	C-7	Ⅲa	坏	Ⅳ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	16.0	－	－	○	○	○		黒色鉱物	
	434	1495	B-5	Ⅱ	坏	Ⅳ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	16.2	－	－	○	○	○		黒色鉱物 赤色鉱物	
	435	6861	A-6	Ⅲ	坏	Ⅳ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色H ue10YR8/3	14.0	－	－	○	○	○		黒色鉱物	
	436	6876	A-7	Ⅲ	坏	Ⅳ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	15.0	－	－	○	○	○			内：煤付着。
	437	5538	C-5	Ⅲa	坏	Ⅳ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR5/3	12.8	－	－	○	○	○			
	438	14412	E-8	Ⅱb	坏	Ⅳ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	明黄褐色 Hue5YR7/6	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	13.0	－	－	○	○	○		砂礫 赤色鉱物	
	439	22219	A-7	Ⅱb	坏	Ⅳ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○			外面・内：煤付着。
	440	4760	C-6	Ⅱ	坏	Ⅳ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	11.6	－	－	○	○	○			
	441	20280	B-7	Ⅲa	坏	Ⅳ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	11.6	－	－	○	○	○		火山ガラス	内：赤色顔料塗布。「内赤土器」
	442	21457	C-7	Ⅲa	坏	Ⅳ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	10.0	－	－	○	○	○			内：赤色顔料塗布。「内赤土器」
	443	5403	B-6	Ⅱ	坏	Ⅴ	口縁部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	13.0	6.6	5.8	○	○	○		黒色鉱物	底部：「ー」の字のヘラ痕あり。5403と接合。
	444	29351	F-10	Ⅲa	坏	Ⅴ	口縁部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄色 Hue2.5Y8/3	浅黄色 Hue2.5Y8/3	11.2	5.7	5.0	○	○	○			底部：「ー」の字のヘラ痕あり。29213と接合。
	445	4458	B-7	Ⅱ	坏	Ⅴ	口縁部～体部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3	12.8	－	－	○	○	○		火山ガラス	
	446	25986	C-7	Ⅱa	坏	Ⅴ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	14.8	－	－	○	○	○			
	447	20266	A-7	Ⅲa	坏	Ⅴ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	15.8	－	－	○	○	○			内：2条の沈線状の工具痕。
	448	19	J-4	Ⅱ	坏	Ⅴ	口縁部～体部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	14.6	－	－	○	○	○			外：墨書？
89	449	2605	B-6	Ⅱ	坏	－	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	－	6.4	－	○	○	○			底部：「ー」の字状のヘラ痕。
	450	403	B-5	Ⅱ	坏	－	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	－	6.2	－	○	○	○			底部：「ー」の字のヘラ痕．外：穿孔痕あり．1862他と接合。
	451	2971	A-5	Ⅱ	坏	－	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	－	6.6	－	○	○	○		赤色鉱物 砂礫	底部：「ー」の字状のヘラ痕。
	452	6865	A-7	Ⅲ	坏	－	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	6.4	－	○	○	○			底部：「ー」の字状のヘラ痕。
	453	4153	B-7	Ⅱ	坏	－	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	6.4	－	○	○	○		火山ガラス	底部：「ー」の字状のヘラ痕。4030と接合。

第51表　古代土師器観察表（3）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
89	454	21376	C-7	Ⅱb	坏	−	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/6	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	−	6.4	−	○	○	○		赤色顔料	底部：「一」の字状のヘラ痕。
	455	2769	B-6	Ⅱ	坏	−	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	−	5.6	−	○	○	○			
	456	4601	B-8	Ⅱ	坏	−	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	−	6.0	−	○	○	○			
	457	4449	B-7	Ⅱ	坏	−	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	−	6.6	−	○	○	○			
	458	4555	B-8	Ⅱ	坏	−	底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	−	6.0	−	○	○	○			
	459	2670	C-6	Ⅱ	坏	−	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	−	6.6	−	○	○	○			底部：「一」の字状のヘラ痕。
	460	21387	C-7	Ⅱb	坏	−	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	灰白色 Hue2.5Y8/2	淡白色 Hue2.5Y8/4	−	6.8	−	○	○	○		砂礫	底部：穿孔あり。
	461	3925	A-7	Ⅲ	坏	−	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	灰白色 Hue7.5YR8/2	灰白色 Hue7.5YR8/2	−	5.8	−	○	○	○			底部：「一」の字状のヘラ痕。
	462	6881	A-7	Ⅲ	坏	−	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4	−	7.4	−	○	○	○		砂礫	底部：「一」の字状のヘラ痕。
	463	18842	D-7	Ⅱb	坏	−	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	−	6.2	−	○	○	○		赤色鉱物	
	464	4869	C-6	Ⅱ	坏	−	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	−	7.0	−	○	○	○			
	465	147	B-7	Ⅱ	坏	−	体部～底部	内・外：回転ヘラケズリ→回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	−	7.2	−	○	○	○		黒色鉱物 火山ガラス	
	466	3423	A-6	Ⅱ	坏	−	体部～底部	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	明黄褐色 Hue2.5YR5/6	浅黄橙色 Hue10YR8/4 橙色 Hue5YR6/6	−	6.0	−					火山ガラス	外面・内面：赤色顔料の塗布。
	467	23214	A-5	Ⅱb	坏	−	底部	外：ヨコナデ，内：ヨコナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/4	淡黄色 Hue2.5Y8/3	−	5.0	−	○	○	○		黒色鉱物	
	468	15127	E-8	Ⅱb	坏	−	底部	外：ヨコナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	−	5.4	−	○	○	○		黒色鉱物	
	469	1418	B-5	Ⅱ	坏	−	底部	外：ヨコナデ，内：ヨコナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	−	5.6	−	○	○	○		黒雲母	
	470	1533	B-5	Ⅱ	坏	−	底部	外：ヨコナデ，内：ヨコナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	−	6.8	−	○	○	○			
	471	1566	B-5	Ⅱ	坏	−	底部	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	−	5.4	−	○	○	○		黒色鉱物 砂礫	
	472	25629	A-7	Ⅲb	坏	−	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白色 Hue10YR8/2	灰白色 Hue10YR8/2	−	5.8	−	○	○	○			内：4条の沈線。
	473	40	D-8	Ⅱ	坏	−	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	−	7.4	−	○	○	○		黒色鉱物 砂礫	外面・内面：煤付着。
	474	15295	D-8	Ⅱb	坏	−	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	−	6.2	−	○	○	○		黒色鉱物 火山ガラス	17951と接合。
	475	12287	D-5	Ⅱb	皿	−	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	8.1	6.3	1.8	○	○	○			外：赤色顔料・煤付着。二次焼成？
	476	20124	C-7	Ⅱb	皿	−	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	赤橙色 Hue10YR6/7	橙色 Hue7.5YR7/6	9.6	7.8	1.7	○	○	○		赤色鉱物	外面・内面：赤色顔料塗布。「両赤土器」
	477	6897	A-7	Ⅲ	皿	−	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	15.0	−	−	○	○	○			高台付皿。
	478	18860	D-7	Ⅱb	皿	−	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄色 Hue2.5Y8/3	15.0	−	−	○	○	○			高台付皿。
	479	18858	D-7	Ⅱb	皿	−	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3	13.6	−	−	○	○	○			高台付皿。

第52表　古代内黒土師器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
90	480	8700	D-8	Ⅱb	埦	Ⅰ	体部～底部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	黒色 Hue10Y2/1	−	5.8	−	○	○	○			
	481	4189	B-7	Ⅱ	埦	Ⅰ	体部～底部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	黒色 Hue10Y2/1	−	6.0	−	○	○	○			4216他と接合。
	482	351	B-7	Ⅱ	埦	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	黒色 Hue10Y2/1	−	7.2	−	○	○	○		赤色鉱物	
	483	18756	C-7	Ⅱb	埦	Ⅲ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	黒色 Hue10Y2/1	−	(6.6)	−	○	○	○			
	484	94	D-9	Ⅲ	埦	Ⅳ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	黒色 Hue10Y2/1	−	7.1	−	○	○	○			
	485	15079	E-8	Ⅱb	埦	Ⅳ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	黒色 Hue10Y2/1	−	8.3	−	○	○	○			15076と接合。
	486	19249	C-7	Ⅱb	埦	Ⅳ	体部～底部	外面：回転ヘラケズリ 内面：回転ヘラケズリ後ミガキ	淡黄色 Hue2.5Y8/4	黒色 Hue10Y2/1	−	6.8	−	○	○	○			
	487	20054	C-7	Ⅱb	埦	Ⅳ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	黒色 Hue10Y2/1	−	6.8	−	○	○	○		赤色鉱物	
	488	20739	C-8	Ⅲa	埦	Ⅳ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	黒色 Hue10Y2/1	−	8.2	−	○	○	○			
	489	2105	B-6	Ⅱ	埦	Ⅳ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/2	黒色 Hue10Y2/1	−	8.6	−	○	○	○			
	490	3353	A-6	Ⅱ	埦	Ⅳ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	黒色 Hue10Y2/1	−	7.2	−	○	○	○			
	491	3807	C-7	Ⅱ	埦	Ⅳ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	黒色 Hue10Y2/1	−	8.4	−	○	○	○		火山ガラス	
	492	1455	B-5	Ⅱ	埦	Ⅳ	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	黒色 Hue10Y2/1	−	7.3	−	○	○	○			

第53表　古代内黒土師器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
90	493	6910	A-7	Ⅲ	埦	Ⅳ	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	黒色 Hue10Y2/1	－	7.4	－	○	○	○			
	494	4121	B-7	Ⅱ	埦	Ⅳ	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	黒色 Hue10Y2/1	－	8.8	－	○	○	○			
	495	961	B-4	表土	埦	Ⅳ	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	黒色 Hue10Y2/1	－	7.5	－	○	○	○			
	496	21651	A-7	Ⅱb	埦	Ⅴ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	黒色 Hue10Y2/1	13.4	7.6	6.2	○	○	○			
	497	23171	B-7	Ⅱb	埦	Ⅴ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	橙色 Hue7.5YR6/6	黒色 Hue10Y2/1	－	7.2	－	○	○	○			
	498	1785	C-6	Ⅱ	埦	Ⅴ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	黒色 Hue10Y2/1	－	6.7	－	○	○	○			
	499	1697	B-5	Ⅱ	埦	Ⅴ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	黒色 Hue10Y2/1	－	6.6	－	○	○	○			
	500	3607	A-5	Ⅱ	埦	Ⅴ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	黒色 Hue10Y2/1	－	－	－	○	○	○			
	501	4123	B-7	Ⅱ	埦	Ⅴ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	黒色 Hue10Y2/1	－	－	－	○	○	○			「十字」，「矢印」のような線刻。
	502	12617	C-7	Ⅱb	埦	Ⅴ	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	黒色 Hue10Y2/1	－	－	－	○	○	○			内面に「十字」のヘラ痕あり。
	503	1062	D-4	Ⅱ	埦	Ⅵ	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	黒色 Hue10Y2/1	－	8.0	－	○	○	○			
	504	19464	E-9	Ⅱb	埦	Ⅵ	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	黒色 Hue10Y2/1	－	6.7	－	○	○	○			
	505	22589	B-4	Ⅱb	埦	Ⅵ	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	黒色 Hue10Y2/1	－	6.0	－	○	○	○			
	506	9173	D-6	Ⅱb	埦	Ⅵ	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	黒色 Hue10Y2/1	－	5.2	－	○	○	○			
	507	20190	C-7	Ⅱb	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	黒色 Hue10Y2/1	17.2	－	－	○	○	○			20137他と接合。
	508	19336	C-7	Ⅱb	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/2	黒色 Hue10Y2/1	17.8	－	－	○	○	○			19615，20242と接合。
	509	4044	B-7	Ⅱ	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	黒色 Hue10Y2/1	14.7	－	－	○	○	○			4393と接合。
	510	8122	A-7	Ⅲ	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	黒色 Hue10Y2/1	16.2	－	－	○	○	○			
	511	1489	B-5	Ⅱ	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	黒色 Hue10Y2/1	17.6	－	－	○	○	○			2884と接合。
	512	3806	C-7	Ⅱ	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	黒色 Hue10Y2/1	14.0	－	－	○	○	○		赤色鉱物	
91	513	22501	F-9	Ⅱb	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	黒色 Hue10Y2/1	17.0	－	－	○	○	○			29379と接合。
	514	21490	B-7	Ⅲa	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい橙色 Hue5YR7/4	黒色 Hue10Y2/1	16.4	－	－	○	○	○			
	515	4937	B-7	Ⅱ	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	黒色 Hue10Y2/1	15.0	－	－	○	○	○			4197と接合。
	516	19097	D-7	Ⅱb	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	黒色 Hue10Y2/1	－	－	－	○	○	○			
	517	2851	B-6	Ⅱ	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	黒色 Hue10Y2/1	－	－	－	○	○	○		火山ガラス	
	518	1611	B-5	Ⅱ	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	黒色 Hue10Y2/1	13.8	－	－	○	○	○		火山ガラス	
	519	3197	A-5	Ⅱ	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	黒色 Hue10Y2/1	14.6	－	－	○	○	○			3342と接合。
	520	25055	B-7	Ⅱ	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	黒色 Hue10Y2/1	15.8	－	－	○	○	○			
	521	3181	B-5	Ⅱ	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	黒色 Hue10Y2/1	15.6	－	－	○	○	○			
	522	3920	A-7	Ⅱ	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	黒色 Hue10Y2/1	13.4	－	－	○	○	○		火山ガラス	
	523	22586	B-4	Ⅱb	埦	Ⅵ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ→ミガキ	明黄褐色 Hue10YR7/6	黒色 Hue10Y2/1	11.0	－	－	○	○	○		火山ガラス	23260，23261と接合。
	524	1603	B-5	Ⅱ	埦	Ⅵ	体部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	灰黄褐色 Hue10YR5/2	黒色 Hue10Y2/1	－	－	－	○	○	○			2512と接合。
	525	19295	C-7	Ⅱb	埦	Ⅵ	体部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	黒色 Hue10Y2/1	－	－	－	○	○	○			19296，18382と接合。
	526	20130	C-7	Ⅱb	埦	Ⅵ	体部	外：回転ナデ→ミガキ 内：回転ナデ→ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	黒色 Hue10Y2/1	－	－	－	○	○	○			

第54表　古代墨書土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
91	527	22956	A-7	Ⅱb	埦	－	口縁部～体部	外：回転ヘラケズリ 内：回転ヘラケズリ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	黒色 Hue10Y2/1	－	－	－	○	○	○			外：「火」の字。
	528	23118	A-7	Ⅱb	－	－	体部	―	にぶい褐色 Hue7.5YR5/8	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	－	－	－	○	○	○			外：二重丸状の墨書。
	529	13850	C-8	Ⅱb	坏	Ⅰ	体部～底部	外：回転ヘラケズリ 内：回転ヘラケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	－	5.6	－	○	○	○			

第55表　古代土師甕・鉢観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
92	530	4078	B−7	Ⅱ	甕	1	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	橙色 7.5YR7/6	26.1	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。 150・4077・4394と接合。
	531	16110	C−8	Ⅱb	甕	2	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ，胴部ハケメ→ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	27.0	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。 15534・16688・18007と接合。
	532	16687	C−8	Ⅱb	甕	2	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ，胴部ハケメ→ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	−	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	533	14821	C−6	Ⅱb	甕	3	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	30.8	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	534	16067	C−8	Ⅱb	甕	3	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	30.0	−	−	○	○	○		小石	内外面に煤付着。 348と接合。
	535	17682	D−7	Ⅱb	甕	3	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR5/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	26.6	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	536	2610	B−6	Ⅱ	甕	3	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	橙色 Hue5YR6/6	にぶい橙色 Hue5YR7/8	−	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	537	17946	D−8	Ⅱb	甕	3	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	−	−	−	○	○	○		小石	内面に煤付着。 22688と接合。
93	538	19212	C−7	Ⅱb	甕	3	口縁部～胴部	外：ナデ，内：口縁部～胴部上位ナデ，胴部中位ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/6	明黄褐色 Hue10YR7/4	26.4	−	−	○	○	○		小石	43と接合。
	539	6898	A−7	Ⅲ	甕	3	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	−	−	−	○	○	○		小石	内外面に煤付着。
	540	22935	D−9	Ⅱb	甕	3	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	33.0	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。 15311・15117と接合。
	541	12730	B−8	Ⅱb	甕	3	口縁部～胴部	外：ナデ，内：口縁部～胴部上位ナデ，胴部中位ケズリ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	27.0	−	−	○	○	○		小石	3341と接合。
	542	2744	B−6	Ⅱ	甕	3	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	23.4	−	−	○	○	○		小石	6766と接合。
	543	4751	C−6	Ⅱ	甕	3	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ→指頭押圧，胴部ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	黒褐色 Hue7.5YR3/1	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	−	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。 3751と接合。
	544	16071	C−8	Ⅱb	甕	3	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	−	−	−	○	○	○		小石	内外面に煤付着。 15446・19111と接合。
	545	29280	E−9	Ⅱb	甕	4	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ→指頭押圧，胴部ナデ（一部横ケズリ），内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい橙色 Hue7.5YR4/5	にぶい橙色 Hue7.5YR4/5	28.0	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。 29450と接合。
	546	5033	B−4	Ⅱ	甕	5	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ，胴部ハケメ，内：口縁部～胴部上位ナデ，胴部中位ケズリ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	29.0	−	−	○	○	○		小石	内外面に煤付着。
94	547	4860	C−7	Ⅱ	甕	6	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ，胴部ハケメ，内：口縁部～胴部上位ナデ，胴部中位ケズリ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6//4	30.0	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。 4162と接合。
	548	90	D−9	Ⅲ	甕	6	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ，胴部ハケメ，内：口縁部～胴部上位ナデ，胴部中位ケズリ	明黄褐色 Hue10YR7/6	明黄褐色 Hue10YR7/6	30.0	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。 87・113・20751と接合。
	549	16682	C−8	Ⅱb	甕	6	口縁部～胴部	外：ナデ，内：口縁部ナデ，口縁部下位～胴部上位ケズリ→ナデ，胴部ケズリ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR7/6	24.2			○	○	○		小石	16122と接合。
	550	21438	C−7	Ⅲa	甕	6	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ，胴部ハケメ，内：口縁部～胴部上位ナデ，胴部中位ケズリ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	25.0	−	−	○	○	○		小石	21420・21522・21571と接合。
	551	19213	C−7	Ⅱb	甕	6	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ，胴部ハケメ，内：口縁部～胴部上位ナデ，胴部中位ケズリ	赤橙色 Hue10R6/6	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	27.0	−	−	○	○	○		小石	21445と接合。
	552	4446	B−7	Ⅱ	甕	6	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ，胴部ハケメ，内：口縁部～胴部上位ナデ，胴部中位ケズリ	にぶい橙色 Hue10YR7/4	にぶい橙色 Hue10YR7/4	−	−	−	○	○	○		小石	
	553	19178	C−7	Ⅱb	甕	6	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ，胴部ハケメ，内：口縁部～胴部上位ナデ，胴部中位ケズリ	鈍い橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	−	−	−	○	○	○		小石	20148・20864と接合。
	554	157	B−7	Ⅱ	甕	6	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ，胴部ハケメ，内：口縁部～胴部上位ナデ，胴部中位ケズリ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/8	−	−	−	○	○	○		小石	
	555	1801	C−6	Ⅱ	甕	7	口縁部～胴部	外：口縁部ナデ，胴部ハケメ，内：口縁部～胴部上位ナデ，胴部中位ケズリ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	−	−	−	○	○	○		小石	内外面に煤付着。
	556	3019	A−6	Ⅱ	甕	7	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい橙色 Hue7/5YR5/4	にぶい橙色 Hue5YR6/4	−	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。
95	557	一括	C・D−8・9	Ⅱ	甕	7	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	21.4	−	−	○	○	○		小石	内外面に煤付着。
	558	3434	A−5	Ⅱ	甕	7	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	浅黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄橙 Hue10YR7/3	27.4	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	559	21270	D−7	Ⅳb	甕	7	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	30.4	−	−	○	○	○			18853と接合。
	560	4059	B−7	Ⅱ	甕	7	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	橙色 Hue5YR1/6	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	27.2	−	−	○	○	○		小石	4057と接合。
	561	2792	B−6	Ⅱ	甕	7	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	31.6	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	562	23816	A−5	Ⅱb	甕	7	口縁部～胴部	外：ナデ→指頭押圧 内：口縁部ナデ・指頭押圧，胴部ケズリ	橙色 Hue7.5YR1/6	橙色 Hue7.5YR7/6	36.0	−	−	○	○	○		小石	
	563	一括	C・D−8・9	Ⅱ	甕	7	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい橙色 Hue10YR7/4	にぶい橙色 Hue10YR7/3	−	−	−	○	○	○		小石	内外面に煤付着。
	564	一括	C・D−8・9	Ⅱ	甕	7	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	明黄褐色 Hue10YR7/4	−	−	−	○	○	○		小石	
	565	19632	D−7	Ⅱb	甕	7	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	−	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	566	18251	C−7	Ⅱb	甕	7	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄色 Hue7.5YR8/4	−	−	−	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	567	21814	B−7	Ⅱa	甕	−	口縁部	外：ナデ，内：ナデ	にぶい橙色 Hue10YR7/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	−	−	−	○	○	○		小石	
	568	2784	B−6	Ⅱ	甕	−	口縁部	外：ナデ，内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	19.6	−	−	○	○	○		小石	内外面に煤付着。

第56表　古代土師甕・鉢観察表（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
95	569	19756	B-6	Ⅲa	甕	－	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	570	1362	C-5	Ⅱ	甕	－	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○		小石	
	571	4451	B-7	Ⅱ	甕	－	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7.4	－	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。
96	572	2716	B-6	Ⅱ	甕	－	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	573	3416	A-5	Ⅱ	甕	－	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	－	－	－	○	○	○		小石	
	574	16593	E-7	Ⅱb	甕	－	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	－	－	－	○	○	○		小石	
	575	14684	C-6	Ⅱb	甕	－	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	576	3846	B-7	Ⅱ	甕	－	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	－	－	－	○	○	○		小石	
	577	306	B-7	Ⅲ	甕	－	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/3	黄橙色 Hue10YR7/3	－	－	－	○	○	○		小石	内外面に煤付着。
	578	1440	B-5	Ⅱ	甕	－	口縁部～胴部	外：ナデ，内：口縁部ナデ，口縁部下位～胴部上位ケズリ→ナデ，胴部ケズリ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	15.6	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	579	6831	A-6	Ⅲ	甕	8	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	明黄褐色 Hue10YR7/6	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	－	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	580	2970	A-5	Ⅱ	甕	8	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3	20.0	－	－	○	○	○		小石	内外面に煤付着。2964と接合。
	581	4102	B-7	Ⅱ	甕	8	口縁部～胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい橙色 Hue10YR7/4	浅黄色 Hue2.5YR7/3	21.6	－	－	○	○	○		小石	内外面に煤付着。41と接合。
	582	276	B-7	Ⅱ	甕	－	胴部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	－	－	－	○	○	○		小石	内面：モミ痕
	583	4113	B-7	Ⅱ	甕	－	胴部	外：ナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	－	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。355と接合。
	584	21447	C-7	Ⅲa	甕	－	胴部	外：ナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	－	－	－	○	○	○		小石	19631と接合。
	585	21516	C-7	Ⅱb	甕	－	胴部	外：ナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	－	－	－	○	○	○		小石	20988と接合。
	586	21455	C-7	Ⅲa	甕	－	胴部	外：ナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	－	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。21509・21501と接合。
97	587	2085	B-6	Ⅱ	甕	－	胴部	外：ナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。1784・20590と接合。
	588	20144	C-7	Ⅱb	甕	－	胴部	外：ナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。20145・14219他と接合。
	589	21519	C-7	Ⅱb	甕	－	胴部	外：ナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。19971と接合。
	590	20989	C-7	Ⅱb	鉢	1	口縁部～底部	外：ナデ 内：ケズリ	橙色 Hue5YR6/6	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	22.0	10.6	13.8	○	○	○		小石	煤付着。4761と接合。
	591	4776	B-6	Ⅱ	鉢	2	口縁部～底部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	浅黄橙色 Hue10YR7/3	浅黄橙色 Hue10YR8/4	29.4	－	－	○	○	○		小石	外面に煤付着。
	592	322	B-7	Ⅱ	鉢	2	口縁部～底部	外：ナデ 内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	浅黄橙色 Hue10YR7/3	浅黄橙色 Hue10YR8/4	27.4	－	－	○	○	○		小石	外面・胴部内面に煤付着。
	593	23434	C-7	Ⅱb	鉢	3	口縁部～胴部	外：ナデ，内：口縁部ミガキ，胴部ケズリ→ナデ	にぶい橙色 Hue5YR6/4	暗褐色 Hue10YR3/4	19.0	－	－	○	○	○		小石	
	594	21484	C-7	Ⅲa	鉢	4	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ミガキ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	黒色 HueN2/0	22.2	－	－	○	○	○		小石	内黒。4603・18497・18572他と接合。
	595	20159	C-7	Ⅱb	鉢	4	胴部～底部	外：ナデ 内：ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	黒色 HueN2/0	－	13.4	－	○	○	○		小石	内黒。18780・19315・18497他と接合。
	596	3464	A-7	Ⅱ	鉢	－	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	－	－	－	○	○	○		小石	肌理の細かい胎土。口縁部内面に煤付着。
	597	3912	A-7	Ⅱ	鉢	－	口縁部～胴部	外：ナデ 内：ナデ	橙色 Hue5YR5/6	橙色 Hue7.5YR7/6	－	－	－	○	○	○		小石	
	598	4747	C-6	Ⅱ	鉢	－	口縁部～胴部	外：ナデ，内：口縁部ミガキ，胴部ケズリ→ナデ	にぶい赤褐色 Hue5YR5/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	－	－	－	○	○	○		小石	
	599	408	B-5	Ⅱ	鉢	－	口縁部～胴部	外：回転ナデ 内：ミガキ	明赤褐色 Hue2.5YR5/8	黒色 Hue10YR7/1	－	－	－	○	○	○		小石	内黒。
	600	411	B-5	Ⅱ	鉢	－	口縁部～胴部	外：回転ナデ 内：ミガキ	橙色 Hue2.5Y6/6	橙色 Hue2.5Y6/6	－	－	－	○	○	○		小石	内黒。
	601	23119	A-7	Ⅱb	鉢	－	胴部～底部	外：ナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	10.0	－	○	○	○		小石	内外面に煤付着。
	602	23114	A-7	Ⅱb	鉢	－	胴部～底部	外：胴部中位ナデ，胴部下位ケズリ 内：ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	12.0	－	○	○	○		小石	底部内面に煤付着。
	603	2199	B-6	Ⅱ	鉢	－	胴部～底部	外：ナデ 内：ケズリ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	橙色 Hue1.5YR6/6	－	12.0	－	○	○	○		小石	
	604	2516	B-5	Ⅱ	鉢	－	胴部～底部	外：胴部中位ナデ，胴部下位ケズリ 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○		小石	

第57表　古代甑・把手観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
98	605	2666	C-6	Ⅱ	甑	－	胴部～底部	外：胴部中位ナデ，胴部下位ケズリ，内：ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	橙色 Hue7.5YR6/6	－	22	－	○	○	○			3721と接合。
	606	11474	B-8	Ⅱa	甑	－	胴部～底部	外：胴部中位ナデ，胴部下位ケズリ，内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	19.6	－	○	○	○			

第58表　古代甑・把手観察表（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
98	607	2521	B-5	Ⅱ	甑	－	胴部～底部	外：胴部中位ナデ，胴部下位ケズリ 内：ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	－	－	－	○	○	○			
	608	一括	H-4	Ⅲa	甑	－	胴部～底部	外：胴部中位ナデ，胴部下位ケズリ 内：ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	明黄褐色 Hue10YR6/6	－	18.2	－	○	○	○			
	609	4793	C-6	Ⅱ	甑	－	胴部～底部	外：ナデ 内：ナデ（一部ケズリか）	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	－	－	－	○	○	○			
	610	22524	F-9	Ⅱb	甑	－	胴部～底部	外：ケズリ，内：胴部中位ケズリ 胴部下位ナデ	にぶい橙色 Hue10YR7/4	橙色 Hue5YR7/6	－	－	－	○	○	○			
	611	4562	B-8	Ⅱ	甕・甑	－	把手	外：指頭押圧によるナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○			
	612	1794	C-6	Ⅱ	甕・甑	－	把手	外：指頭押圧によるナデ 内：ケズリ	にぶい橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○			
	613	15886	E-8	Ⅱb	甕・甑	－	把手	外：指頭押圧によるナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue7.5YR6/4	橙色 Hue5YR6/6	－	－	－	○	○	○			
	614	1416	B-5	Ⅱ	甕・甑	－	把手	外：指頭押圧によるナデ 内：ケズリ	橙色 Hue5YR6/6	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	－	－	－	○	○	○			
	615	17164	E-7	Ⅱb	甕・甑	－	把手	外:ナデ	灰色 Hue5YR4/1	灰色 Hue5YR4/1	－	－	－	○	○	○			

第59表　古代須恵器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
99	616	15237	E-8	Ⅱb	蓋	1	天井部	外：回転ナデ，内：回転ナデ	灰色Hue5Y5/1	灰色Hue5Y5/1	14.6	－	－	○	○	○			
	617	一括	B-7	Ⅱ	蓋	2	天井部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰オリーブ色 Hue5Y6/2	灰オリーブ色 Hue5Y6/2	－	－	－	○	○	○			
	618	13	E-9	－	蓋	3	天井部	外：回転ナデ，内：回転ナデ	暗赤灰色 Hue2.5Y3/1	暗赤灰色 Hue2.5Y3/1	7.9	－	－	○	○	○			
	619	20811	D-8	Ⅲa	甕	1	口縁部～胴部	外：格子目文タタキ，内：口縁部回転ナデ・胴部同心円文当て具痕	灰黄色 Hue2.5Y6/2	黄灰色 Hue2.5Y4/1	17.6	－	－	○	○	○			胴部外面・口縁部内面に自然釉。15985と接合。
	620	4534	B-7	Ⅱ	甕	1	口縁部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○			
	621	2728	B-6	Ⅱ	甕	1	口縁部～胴部	外：格子目文タタキ，内：口縁部回転ナデ・胴部同心円文当て具痕	にぶい赤褐色 Hue5YR5/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	21.0	－	－	○	○	○			2633・18389・20208・4975他と接合。
	622	29273	E-9	Ⅱb	甕	1	口縁部～頸部	外：平行文タタキ，内：口縁部回転ナデ・胴部同心円文当て具痕	オリーブ黄色 Hue5YR6/3	オリーブ黄色 Hue5Y6/3	22.0	－	－	○	○	○			口縁部～胴部外面・口縁部内面に自然釉。29285と接合。
	623	12745	B-8	Ⅱb	甕	2	口縁部	外：格子目文タタキ後ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	浅黄色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○			口縁部外面に自然釉。14686・14586と接合。
	624	1609	B-5	Ⅱ	甕	－	頸部	外：平行文タタキ（一部格子目文） 内：同心円文当て具痕	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○			1658と接合。
	625	一括	C-6・7	―	甕	－	頸部	外：― 内：同心円文当て具痕	灰黄色 Hue2.5Y6/2	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	－	－	－	○	○	○			胴部上位に自然釉。
	626	5410	B-6	Ⅱ	甕	－	胴部	外：格子目文タタキ，内：同心円文当て具痕・平行文タタキ	淡黄色 Hue2.5Y8/4	灰黄色 Hue2.5Y6/2	－	－	－	○	○	○			胴部上位に自然釉。4091・2695他と接合。
	627	1654	B-5	Ⅱ	甕	－	胴部	外：格子目文タタキ，内：同心円文当て具痕・平行文タタキ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○			1656と接合。
100	628	1654	B-5	Ⅱ	甕	－	胴部	外：格子目文タタキ，内：同心円文当て具痕・平行文タタキ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○			
	629	1654	B-5	Ⅱ	甕	－	胴部	外：格子目文タタキ 内：縦位のケズリ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○			
	630	1962	B-6	Ⅱ	甕	－	胴部	外：部分的格子目文タタキ，内：胴部上位同心円文当て具痕・胴部中位平行文タタキ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	にぶい黄褐色 Hue10YR8/3	－	－	－	○	○	○			1360・18741・23089と接合。
	631	364	B-7	Ⅱ	甕	－	胴部	外：格子目文タタキ，内：胴部上位同心円文当て具痕・胴部中位平行文タタキ	黄灰色 Hue2.5Y5/1	黄灰色 Hue2.5Y4/1	－	－	－	○	○	○			2753・3544と接合。
	632	4659	A-5	Ⅱ	甕	－	胴部	外：平行文タタキ，内：胴部上位同心円文当て具痕・胴部中位平行文タタキ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○			5235と接合。
101	633	1702	B-5	Ⅱ	甕	－	胴部	外：平行文タタキ 内：同心円文当て具痕	灰黄褐色 Hue10YR6/2	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	－	－	－	○	○	○			
	634	6725	B-5	Ⅲ	甕	－	胴部	外：平行文タタキ 内：同心円文当て具痕	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	－	－	－	○	○	○			
	635	19290	C-7	Ⅱb	甕	－	胴部	外：部分的格子目文タタキ 内：同心円文当て具痕	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	－	－	－	○	○	○			
	636	1642	B-5	Ⅱ	甕	－	胴部	外：平行文タタキ，内：平行文タタキ	灰色 Hue7.5Y6/1	灰色 Hue7.5Y6/1	－	－	－	○	○	○			
	637	2937	A-5	Ⅱ	甕	－	胴部	外：平行文タタキ，内：胴部上位同心円文当て具痕・胴部中位平行文タタキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい褐色 Hue7.5YR6/3	－	－	－	○	○	○			2892・3260と接合。
	638	14244	C-8	Ⅱb	甕	－	胴部	外：平行文タタキ，内：胴部上位同心円文当て具痕・胴部中位平行文タタキ	灰色 Hue10Y5/1	灰色 Hue7.5Y6/1	－	－	－	○	○	○			
	639	3917	A-7	Ⅱ	甕	－	胴部	外：平行文タタキ 内：平行文タタキ	橙色 Hue7.5YR7/6	にぶい黄橙色 Hue10YR7/ 4	－	－	－	○	○	○			胴部に焼成後穿孔あり。6902・14842他と接合。
	640	19259	C-7	Ⅱb	甕	－	胴部	外：平行文タタキ 内：平行文タタキ	灰褐色 Hue7.5YR5/1	灰褐色 Hue7.5YR6/2	－	－	－	○	○	○			17520・20141・20152と接合。
	641	1413	B-5	Ⅱ	甕	－	胴部	外：部分的格子文タタキ 内：平行文タタキ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○			
	642	18234	B-7	Ⅱb	甕	－	胴部	外：平行文タタキ 内：平行文タタキ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○			
	643	19244	C-7	Ⅱb	甕	－	胴部	外：平行文タタキ 内：平行文タタキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	－	－	－	○	○	○			
	644	18396	C-7	Ⅱb	甕	－	胴部	外：平行文タタキ 内：平行文タタキ	オリーブ灰色 Hue5GY6/1	オリーブ灰色 Hue5GY5/1	－	－	－	○	○	○			

第60表　古代須恵器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
101	645	19248	C-7	Ⅱb	甕	－	胴部	外：平行文タタキ 内：平行文タタキ	灰褐色 Hue7.5YR4/2	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	－	－	－	○	○	○			
102	646	16004	E-9	Ⅱb	壺	1	口縁部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰黄褐色 Hue10YR6/2	灰黄褐色 Hue10YR5/2	－	－	－	○	○	○			口縁部外面・口縁部内面上端に自然釉。
	647	5229	B-5	Ⅱ	壺	2	口縁部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	9.8	－	－	○	○	○			
	648	15313	D-9	Ⅱb	壺	3	口縁部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰黄褐色 Hue10YR5/2	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	14	－	－	○	○	○			
	649	288	B-7	Ⅱ	壺	3	口縁部	外：回転ナデ，内：回転ナデ	褐灰色 Hue10YR5/5	褐色 Hue7.5YR4/3	13.2	－	－						15395と接合。
	650	16121	C-8	Ⅱb	壺	－	頸部～胴部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	淡黄色 Hue2.5yy8/3	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	－	－	－	○	○	○			
	651	4221	B-7	Ⅱ	壺	－	頸部～胴部	外：平行文タタキ 内：回転ナデ後指頭押圧	浅黄色 Hue2.5Y7/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○			胴部全体に自然釉。2918・21755他と接合。
	652	4585	B-8	Ⅱ	壺	－	頸部～胴部	外：胴部上位格子目タタキ文 内：回転ナデ後指頭押圧	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	褐灰色 Hue7.5YR4/1	－	－	－	○	○	○			胴部上位に自然釉。139と接合。
	653	12740	B-8	Ⅱb	壺	－	頸部～胴部	外：胴部上位格子目タタキ文後ナデ，胴部中位格子目文タタキ 内：ナデ後指頭押圧	にぶい褐色 Hue7.5YR/3	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	－	－	－	○	○	○			胴部上位に自然釉。4586と接合。
	654	21480	C-7	Ⅲa	壺	－	頸部～胴部	外：平行文タタキ後ナデ 内：ナデ後指頭押圧	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	－	－	－	○	○	○			胴部上位に自然釉。
	655	1621	B-5	Ⅱ	壺	－	頸部～胴部	外：ナデ 内：ナデ後指頭押圧	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	灰黄褐色 Hue10YR5/2	－	－	－	○	○	○			胴部に自然釉。
	656	21253	D-7	Ⅳa	壺	－	頸部～胴部	外：格子目文タタキ後回転ナデ 内：回転ナデ後指頭押圧	灰白色 Hue2.5Y7/1	灰オリーブ灰色 Hue5Y6/2	－	－	－	○	○	○			
103	657	19222	C-7	Ⅱb	壺	－	胴部	外：平行文タタキ後部分的にナデ 内：ナデ後指頭押圧	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	－	－	－	○	○	○			
	658	3333	A-6	Ⅱ	壺	－	胴部	外：格子目文タタキ後部分的にナデ 内：ナデ後指頭押圧	にぶ褐色 Hue7.5YR5/3	褐灰色 Hue7.5YR5/1	－	－	－	○	○	○			8860と接合。
	659	1746	C-6	Ⅱ	壺	－	胴部	外：格子目文タタキ後部分的にナデ 内：ナデ後指頭押圧	灰褐色 Hue7.5YR5/2	褐灰色 Hue7.5YR5/1	－	－	－	○	○	○			23893と接合。
	660	23121	A-7	Ⅱb	壺	－	胴部～底部	外：平行文タタキ後ナデ 内：ナデ後指頭押圧	にぶい赤褐色 Hue5YR5/3	にぶい橙色 Hue5YR6/4	－	14.4	－	○	○	○			胴部に自然釉。
	661	1659	B-5	Ⅱ	壺	－	胴部～底部	外：平行文タタキ後部分的にナデ 内：回転ナデ後指頭押圧	暗灰黄色 Hue2.5Y4/2	褐灰色 Hue10YR5/1	－	10.2	－	○	○	○			胴部に自然釉。2916と接合。
	662	5928	D-6	Ⅱa	壺	－	胴部～底部	外：ナデ 内：ナデ	黄灰色 Hue2.5Y6/1	灰黄褐色 Hue10YR5/2	－	6.6	－	○	○	○			胴部に自然釉。

第61表　古代土錘・土製品観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	器面調整	色調		計測値(cm)		胎土				焼成	備考
							外面	内面	最大長	最大幅	石英	長石	角閃	他		
104	663	4641	C-7	Ⅱ	土錘	外：ナデ	黒褐色Hue7.5YR3/2	－	2.9	1.4	○	○	○		良	
	664	4395	B-7	Ⅱ	土錘	外：ナデ	にぶい褐色Hue7.5YR5/4	－	2.9	1.5	○	○	○		良	
	665	15142	E-8	Ⅱb	土錘	外：ナデ	灰黄色Hue2.5Y7/2	－	3.3	1.5	○	○	○		良	
	666	3476	A-7	Ⅱ	土錘	外：ナデ	にぶい黄橙色Hue10YR7/3	－	3.4	1.5	○	○	○		良	
	667	21073	F-8	Ⅱa	土錘	外：ナデ	灰黄色Hue2.5Y7/2	－	3.5	1.6	○	○	○		良	
	668	20052	C-8	Ⅱb	土錘	外：ナデ	にぶい橙色Hue7.5YR6/4	－	3.1	1.6	○	○	○		良	
	669	Pit437	B-7	Ⅱ	土錘	外：ナデ	浅黄橙色Hue10YR8/4	－	3.6	1.5	○	○	○		良	
	670	16590	E-7	Ⅱa	土錘	外：ナデ	にぶい橙色Hue7.5YR7/4	－	3.8	1.4	○	○	○		良	
	671	16784	B-8	Ⅱb	土錘	外：ナデ	にぶい橙色Hue7.5Y7/4	－	2.8	1.0	○	○	○		良	
	672	14606	E-8	Ⅱb	土錘	外：ナデ	黄灰色Hue2.5Y6/1	灰白色Hue2.5Y6/1	3.0	2.1	○	○	○		良	
	673	21799	B-7	Ⅱa	土錘	外：ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4	－	2.8	2.0	○	○	○		良	
	674	20109	C-8	Ⅱb	土錘	外：ナデ	淡黄色Hue2.5Y8/3	－	3.7	2.1	○	○	○		良	
	675	2584	B-6	Ⅱ	土錘	外：ナデ	淡黄色Hue2.5Y8/3	－	3.5	2.0	○	○	○		良	
	676	18580	C-7	Ⅱb	土錘	外：ナデ	浅黄橙色Hue10YR8/4	－	4.2	1.6	○	○	○		良	
	677	360	B-7	Ⅱ	土錘	外：ナデ	にぶい黄橙色Hue10YR6/3	－	4.2	1.8	○	○	○		良	
	678	1931	B-6	Ⅱ	土錘	外：ナデ	淡黄色Hue2.5Y8/3	－	3.6	1.8	○	○	○		良	
	679	29318	F-9	Ⅱb	土錘	外：ナデ	橙色Hue7.5YR1/6	－	3.6	2.5	○	○	○		良	
	680	10425	C-7	Ⅱb	土錘	外：ナデ	赤褐色Hue5YR4/6	－	1.9	2.1	○	○	○		良	
105	681	一括	E・F-4・5	表土	土製品	外：ナデ	にぶい橙色Hue9.5YR9/4	－	5.9	3.3	○	○	○		良	
	682	13363	E-6	Ⅱb	土製品	外：ナデ	にぶい褐色Hue7.5YR5/4	－	3.1	2.0	○	○	○		良	
	683	6575	E-4	Ⅱb	土製品	外：ナデ	にぶい橙色Hue5YR6/4	－	2.8	1.9	○	○	○		良	
106	684	29281	F-9	Ⅱb	円盤状土製品	外：ナデ	橙色Hue7.5YR6/6	－	3.9	3.6	○	○	○		良	
	685	16011	E-9	Ⅱb	円盤状土製品	外：ナデ	橙色Hue7.5YR6/6	－	2.7	2.5	○	○	○		良	

第62表　古代紡錘車観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	部位	紡茎計測値（cm）		備考
							最大幅	最大厚	
106	686	963	B-4	Ⅲ	紡錘車	紡輪	3.9	1.1	
	687	29216	E-9	Ⅱb	紡錘車	紡輪	4.2	0.9	

第63表　古代古銭観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	計測値（cm）						分類	備考
						a	b	c	d	e	f		
106	688	116	H-5	Ⅲ	古銭	2.4	2.4	1.9	1.9	0.7	0.7	唐國通寶	

第８節　中世の調査

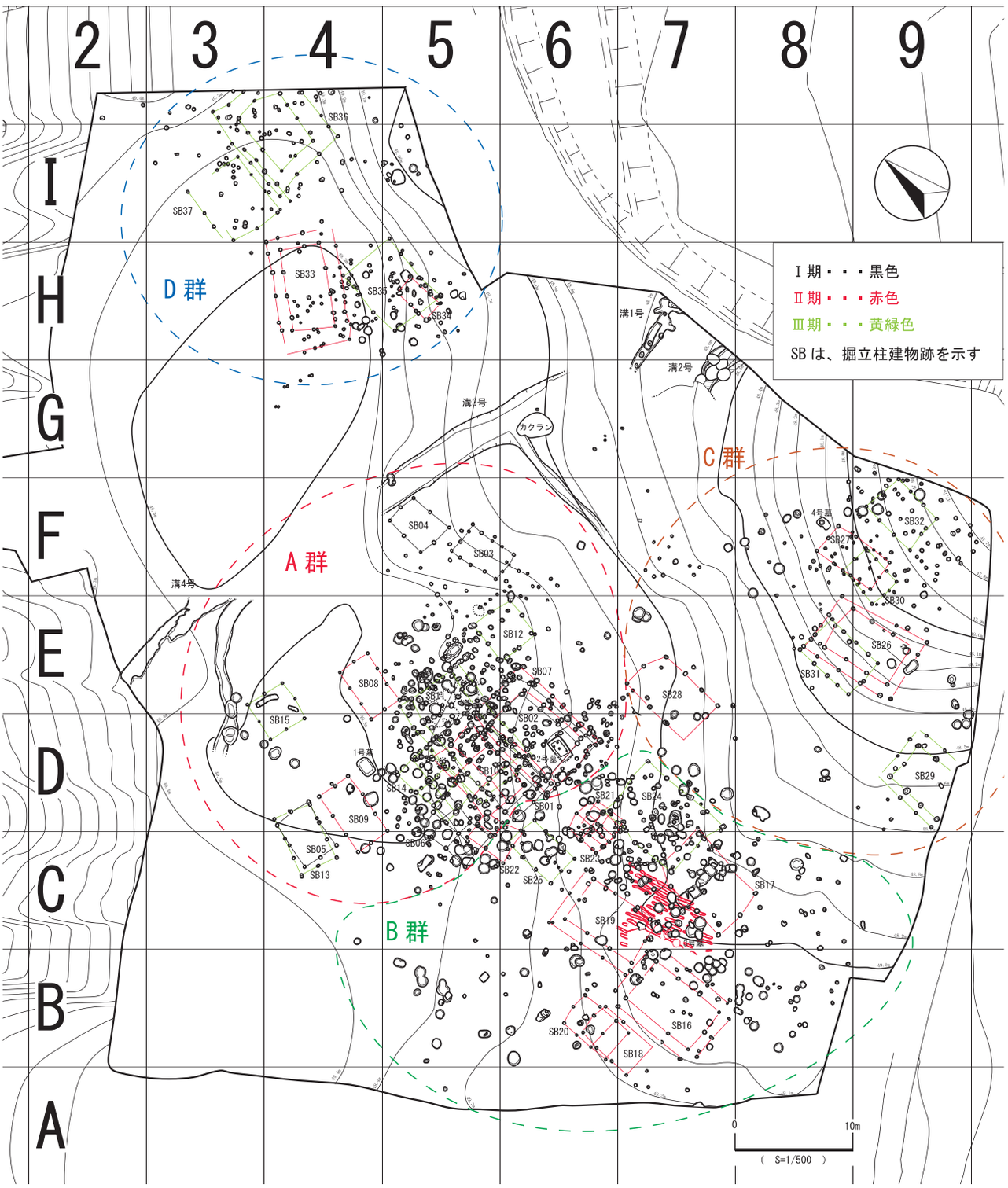
１　調査の概要

中世における遺構検出状況は，以下のとおりである。中世の遺構は，主に調査区北側と南側に分けられ，その境に溝状遺構が横断する。

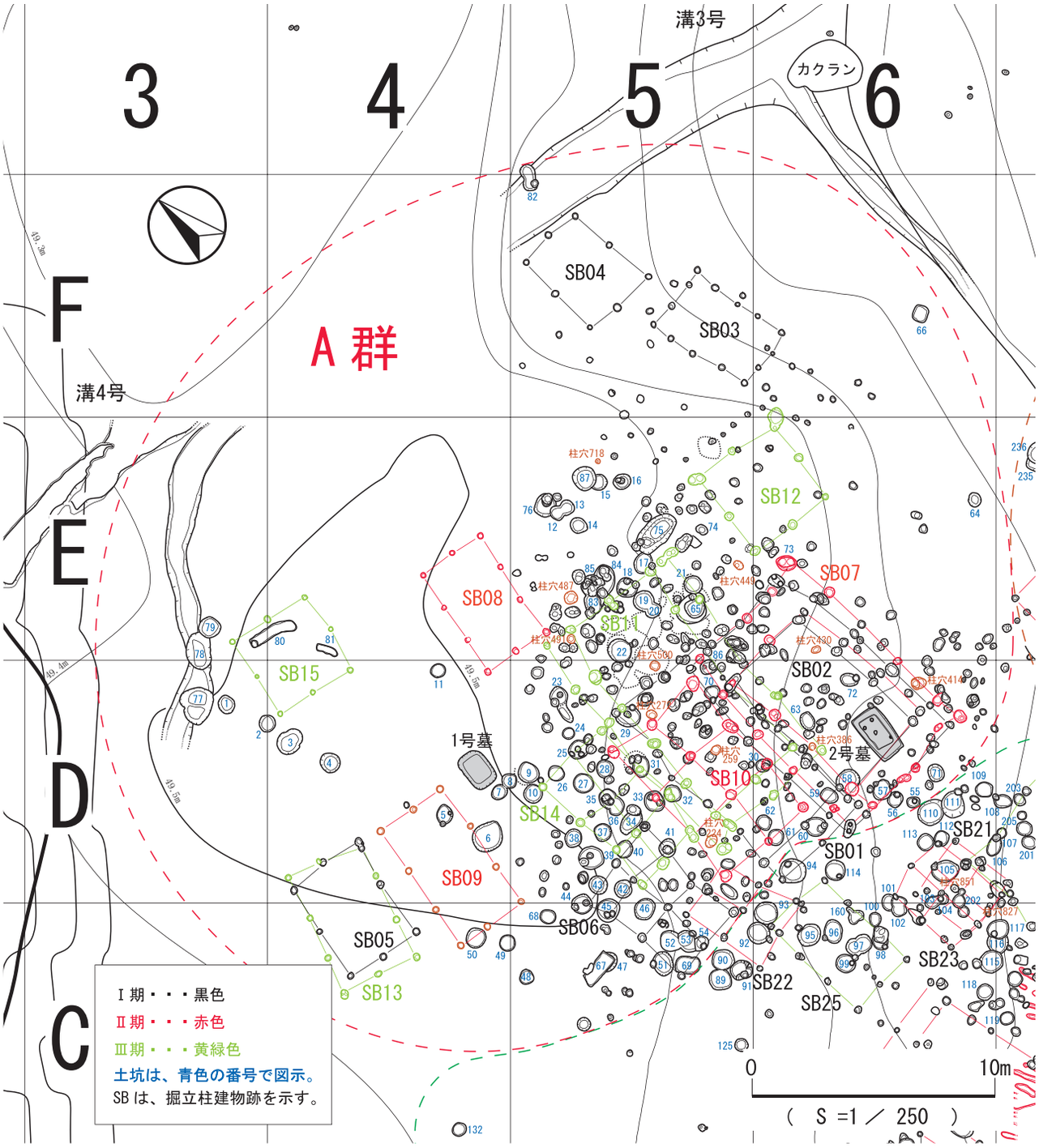
北側には掘立柱建物跡が５棟と土坑が15基確認された。復元はできなかったが，多数の柱穴が検出された。

南側は，中央と東側に二分できる。掘立柱建物跡が計32棟，土坑が248基，墓跡が４基，焼土域が24基，他に無数の柱穴群が検出された。

本遺跡では，主軸を南北方向に向ける掘立柱建物跡の復元を試みたところ，柱穴の切り合い関係や主軸の僅かな向きの違いなどから，庇付きの掘立柱建物跡を中心に，庇を有さない建物跡や総柱の建物が周囲に立ち並び，近接して墓跡が存在する状況が捉えられた。



第107図　中世遺構位置図



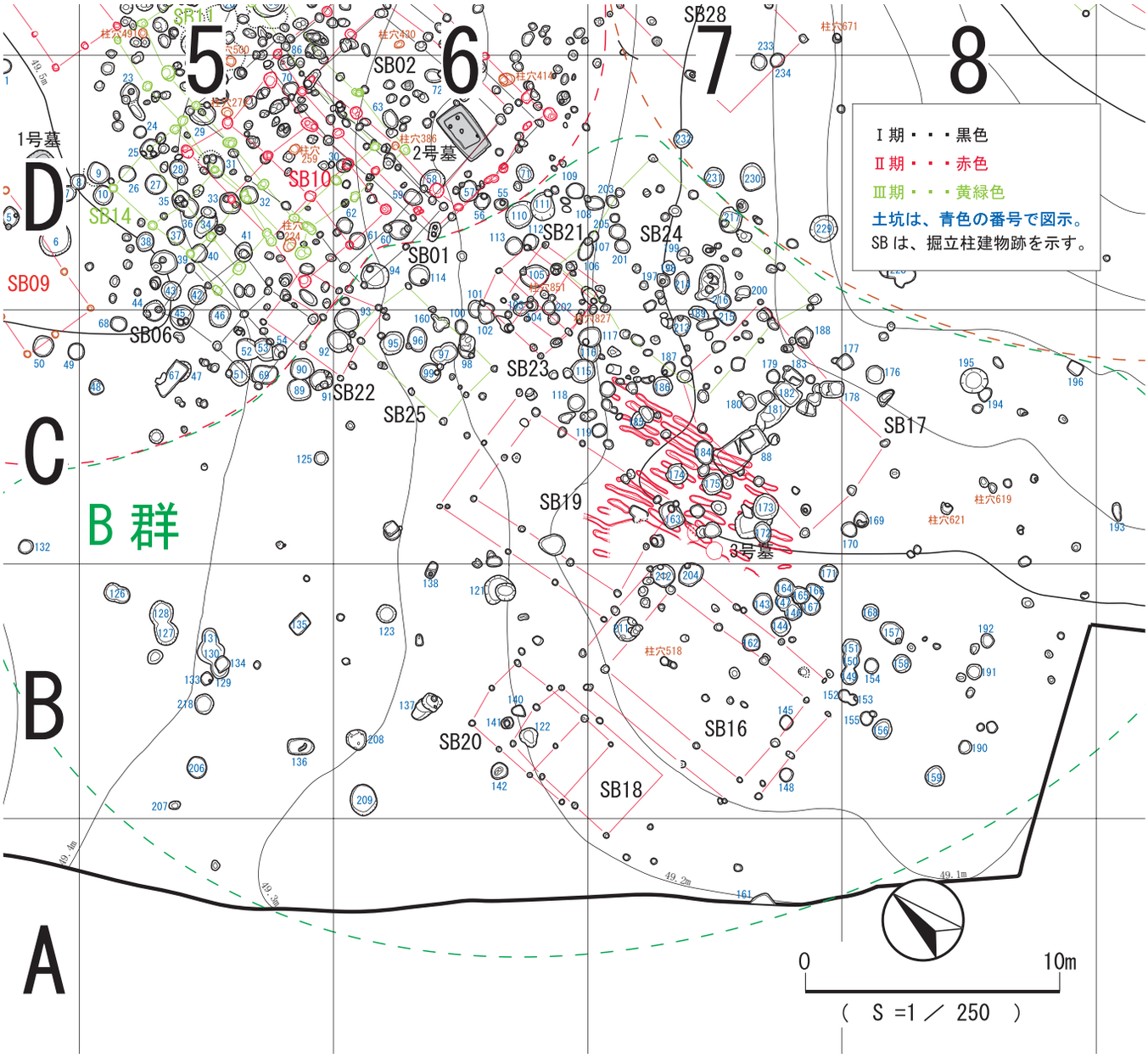
第108図　中世Ａ群遺構位置図

建物群の復元や柱穴の切り合い関係から時期差を捉える過程を通して，建物群が４つのエリアに分かれるという本遺跡の中世の概況を見いだすことができたので，本項では，建物群のエリア毎に，時期毎のセット関係で遺構を報告することとする。ただし，土坑については，各土坑と掘立柱建物跡との共伴関係を捉えることができなかったので，エリア毎にまとめて掲載することとする。

なお，C-7区の畝溝跡は，これらの遺構群の後に形成された畑跡と判断されたので，後述することとした。

掘立柱建物跡を中心とする建物群を，Ａ～Ｄの４群に分類を行った。

Ａ群は，３時期に細分を試みた。Ⅰ期は，掘立柱建物跡１～６号により構成され，Ⅱ期が掘立柱建物跡７～10号・１号墓，Ⅲ期が掘立柱建物跡11～15号・２号墓により構成される。Ｂ群は，２時期に細分した。Ⅱ期は，掘立柱建物跡16～23号・３号墓である。Ⅲ期が，



第109図　中世Ｂ群遺構位置図

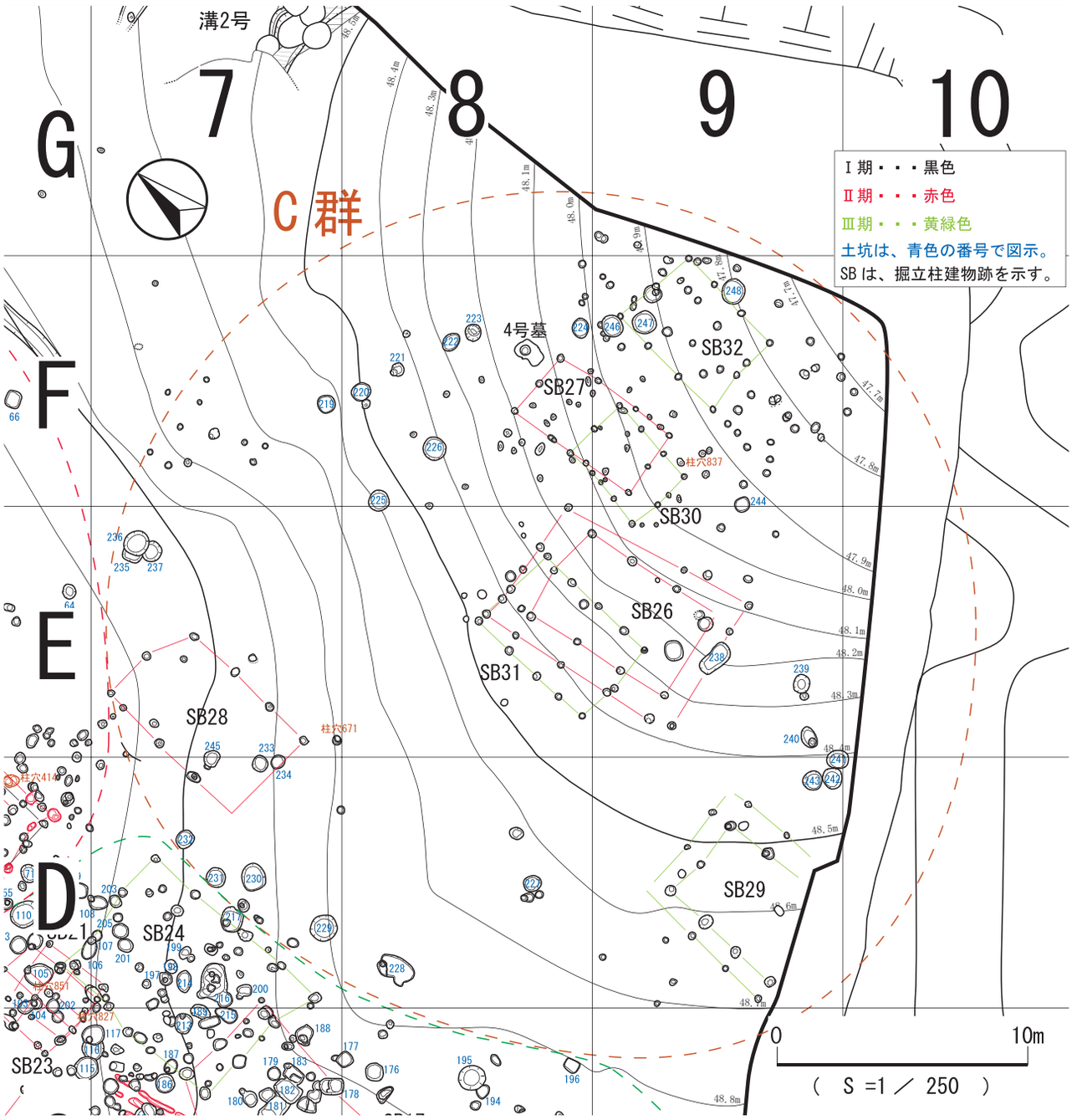
掘立柱建物跡24・25号である。Ｃ群も，２時期に細分される。Ⅱ期は，掘立柱建物跡26 ～ 28号・墓跡４号である。Ⅲ期は，掘立柱建物跡29 ～ 32号である。D群も２時期に細分した。Ⅱ期は，掘立柱建物跡33・34号である。Ⅲ期は，掘立柱建物跡35 ～ 37号である。掘立柱建物跡その周囲に多数所在する土坑は，建物跡内に含まれない時期との共伴関係が推察される。

全ての掘立柱建物跡については，基本的規格や方向，大きさ，埋土内遺物（古代の紛れ込みと思われる遺物を含める。）のみを報告する。

土坑については全て掲載するが，柱穴については，特徴的な遺物や図化可能な大きさを有する遺物を埋土内に包含する柱穴のみ図化した。なお，掘立柱建物跡や土坑の規格や埋土内遺物（中世相当のみ記載し，古代の紛れ込みと思われる遺物については基本的に省略する。）については，別表にて掲載する。

また，壁面や床面等に明瞭な赤化等捉えられた焼土土坑については，特段土坑に区別せず含めて掲載した。

なお，埋土内遺物については，本遺跡は古代相当の遺物が多量に出土し，中世遺構の検出区と重なるために，中世遺構の埋土にも多数包含される。中世遺構内に包含される古代遺物は後世の撹乱遺物として取り扱わない。しかし，掘立柱建物跡を構成する柱穴内遺物については，土師器の底部の切り離し痕により古代・中世の比定がなされるため，底部切り離し痕が不明な土師器を含めて記載した。



第110図　中世C群遺構位置図

2　遺構

（1）掘立柱建物跡A群　Ⅰ期

①　掘立柱建物跡

（ア）掘立柱建物跡1号

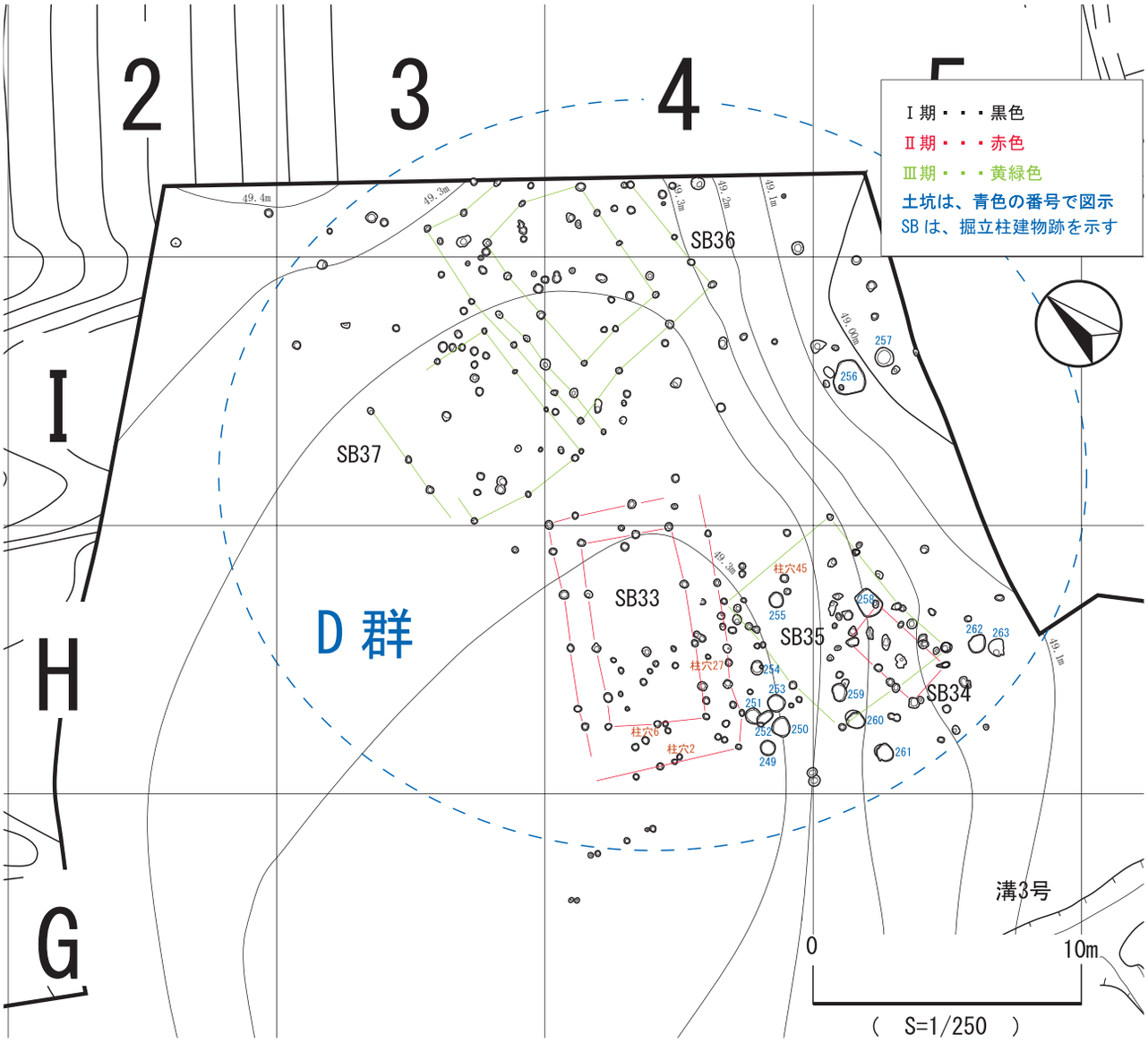
D-5・6区・E-5区のⅢa層上面で検出された。規格は2間×5間で，主軸はN 0° Wを示す。大きさは，4.5m×8.7mである。

埋土内には，P 3に青白磁の合子の蓋1点，P16に白磁皿1点，P 5に土師器片4点（切り離し痕不明の埦・坏片1点，内黒土師器1点，甕2点），滑石製石鍋片1点が含まれる。P 7には土師甕片1点，P11に土師器埦・坏片1点（切り離し痕不明）が包含される。

図化したのは，以下の3点である。1は，P 5内遺物の滑石製品である。左右の側面は欠損（破損）するが，上・下面は比較的丁寧に切られている。内面に煤が付着することから滑石製石鍋の転用品である。

2は，P16内遺物である。白磁の皿である。底部は，板状の工具で釉をのばしている。口縁部は欠損するが，口禿口縁をもつものである。復元底径は6.2cmを測る。大宰府分類白磁皿Ⅸ類：F期に相当する。

3は，P 3内遺物で，合子の蓋である。天井部と側面の縁端に沿って稜が巡り，直交して天井部中央に向けて



第111図　中世D群遺構位置図

花弁の稜が縦位に延びる。天井部の花弁の稜に並行して，側面にも稜が縦位に延びる。

（イ）掘立柱建物跡２号

D・E- ５・６区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，4.1m×6.9mである。柱穴の埋土内に，遺物は包含されない。

（ウ）掘立柱建物跡３号

F- ５・６区のⅢa層上面で検出された。規格は３間×４間で，主軸はN ５° Wを示す。大きさは，3.0m×4.7mである。柱穴の埋土内に，遺物は包含されない。

（エ）掘立柱建物跡４号

F- ５区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×２間で，主軸はN ５° Wを示す。大きさは，3.2m×4.0mである。柱穴の埋土内に，遺物は包含されない。

（オ）掘立柱建物跡５号

C・D- ４区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×２間で，主軸はN ５° Wを示す。大きさは，3.3m×4.4mである。柱穴の埋土内には，遺物は包含されない。

（カ）掘立柱建物跡６号

C・D- ５区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ３° Wを示す。大きさは，3.9m×5.2mである。

埋土内には，P10に土師皿が３点包含され，内２点を掲載した。１は，糸切り底の皿である。１／３程残存する。復元口径8.6cm，復元底径7.7cm，器高1.2cmを測

る。器体にやや歪みが見られる。

２も底部に糸切り痕を有する土師器の皿である。２点が接合するが，２／５程が残存する。復元口径8.8cm，復元底径7.8cm，器高1.2cmを測る。底部から腰部への立ち上がりの整形が一部雑で，底部縁端が外側に張り出す。残存状態が比較的よい土師皿２個体（もしくは３個体）が柱穴内に含まれることから，地鎮祭等祭祀的行為に係る遺物である可能性が高いと思われる。

（２）掘立柱建物跡Ａ群　Ⅱ期

①　掘立柱建物跡

（ア）掘立柱建物跡７号

Ｄ・Ｅ－５・６区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，4.2ｍ×6.6ｍである。柱穴の埋土内に，遺物は包含されない。

（イ）掘立柱建物跡８号

Ｄ－４，Ｅ－４・５区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，2.9ｍ×4.8ｍである。柱穴の埋土内に，遺物は包含されない。

（ウ）掘立柱建物跡９号

Ｃ・Ｄ－４・５区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，3.1ｍ×5.8ｍである。柱穴の埋土内に，遺物は包含されない。

（エ）掘立柱建物跡10号

Ｄ－５・６区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ３° Wを示す。大きさは，4.3ｍ×7.1ｍである。

Ｐ２の埋土内に土師器片１点，Ｐ３に白磁の坏１点，Ｐ４に青磁碗１点，P12に土師器１点（糸切り底の皿）が包含される。

図化したのは，以下の３点である。１は，Ｐ２内遺物である。土師器の皿片で，底部に糸切りの切り離し痕を有する。体部の成形にやや歪みが見られる。外面には，極浅のハケメ状のナデ痕が巡る。内面復元口径8.9cm，復元底径6.9cm，器高1.3cmを測る。

２は，Ｐ３内遺物である。口禿の白磁の皿片で，大宰府分類白磁皿Ⅸ類：Ｆ期に相当する。復元口径は10cmを測る。

３は，Ｐ４内遺物である。龍泉窯系青磁の碗で，蓮弁文が明瞭に施される。大宰府分類Ⅱb類：Ｅ期に相当する。復元口径16cmを測る。

②　墓跡

（ア）１号墓

Ｄ－４区のⅢa層上面で検出された。埋土①に黒褐色砂壌土（Ⅱb層）の混土が含まれることから，設置時期は中世の可能性が高い。

平面観は，極めて定形的な隅丸長方形を呈し，大きさは1.12ｍ×1.62ｍである。縦断面観は，床面を平坦に仕上げ弯状に緩やかに立ち上がる。横断面観では，床面が平坦を成さず，エッジを形成せずに緩やかに立ち上がる。最深で，20cmを測る。主軸は，Ｎ ０° Wを示す。

埋土中では，③の敷き詰められた木炭層が特筆される。③の埋土中には，南側に集中的に炭化材が検出された。平面図には，材質等明瞭に捉えられる特に残存状態のよい木炭のみ抜粋して図化した。小片等含めると，炭化物は床面から10cm程の厚さで埋土③全体に及ぶ。炭化材の繊維の方向は，縦軸・横軸の両方向を中心としており，縦・横に交錯して配置される状況が窺える。土坑壁に赤化が見られないことから，本遺構内で直に燃やした可能性は低いと考えられ，木炭を床面に敷き詰めた可能性を見る。主たる埋土である②と③の境界が凹凸を成す状況や水成堆積に散見される流砂が捉えられないことから，埋め戻しの可能性が高いと思われる。

なお，本遺構には，人骨及び副葬品に類される遺物等包含されないが，本遺跡中に屋敷墓と捉えうる墓跡が存在することやそれらの墓跡の規模と本遺構の規模が類似することなどから，本遺構も墓跡の可能性があると捉えた。なお，土坑の深さが比較的浅いことから，検出面がかなり下位であった可能性がある。木棺墓の可能性を検討するには，埋土状況から得られる情報が希薄であるが，縦断面観で，埋土③と④の境に立ち上がりが捉えうることや，当該期の一般的な埋葬形態が木棺墓であることから，本遺構も木棺墓の可能性を見る。

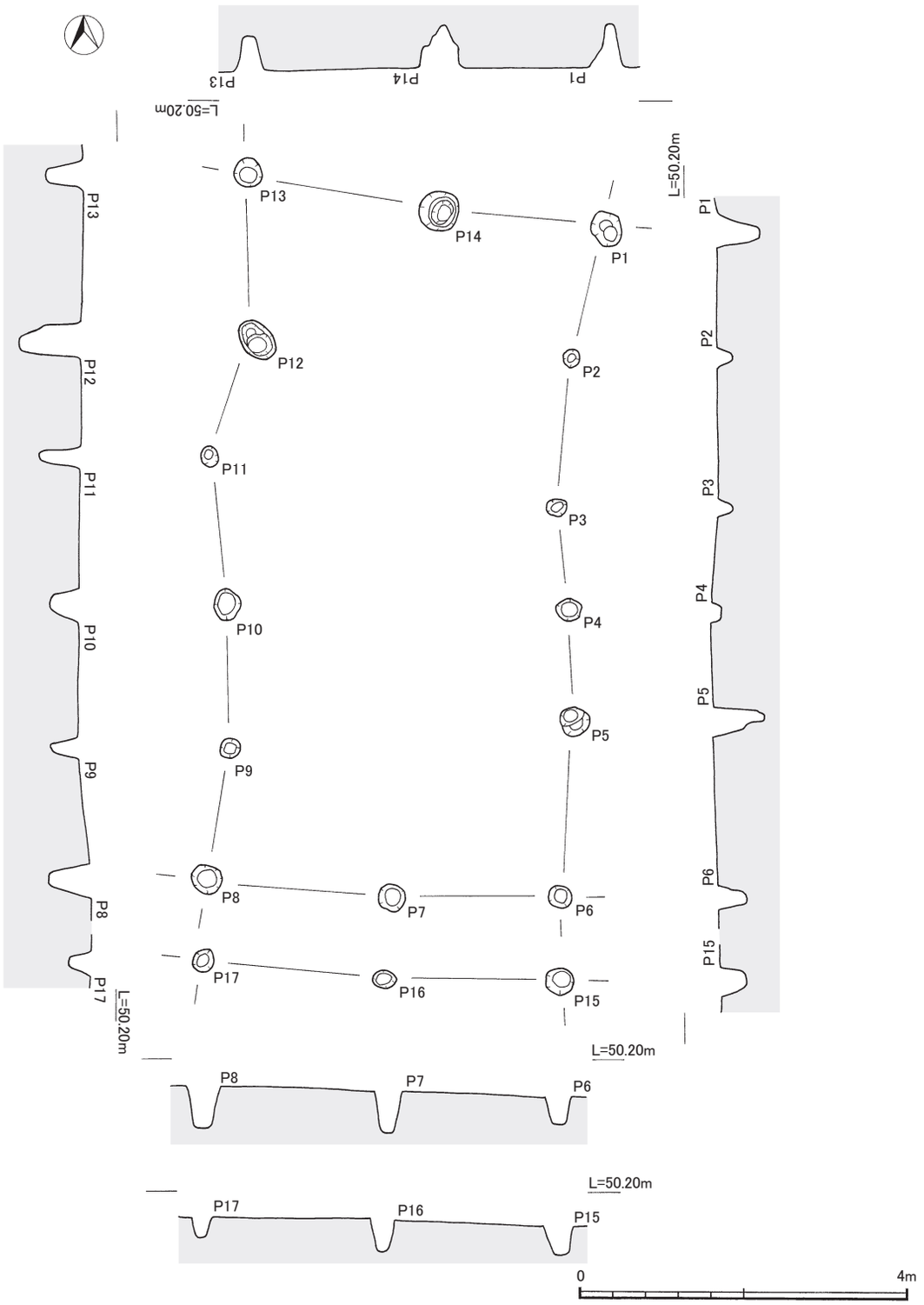
（３）掘立柱建物跡Ａ群　Ⅲ期

①　掘立柱建物跡

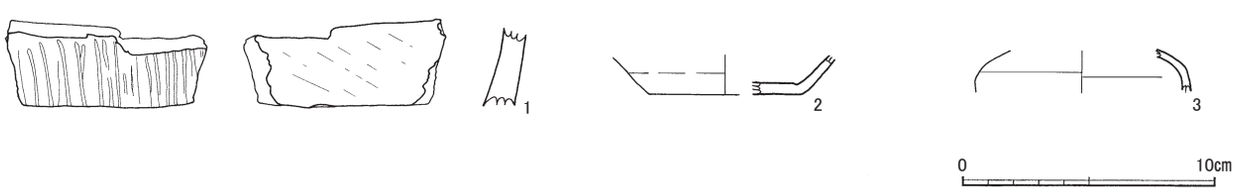
（ア）掘立柱建物跡11号

Ｄ－５・６区・Ｅ－５区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×５間で，主軸はN10° Wを示す。大きさは，4.2ｍ×9.8ｍである。

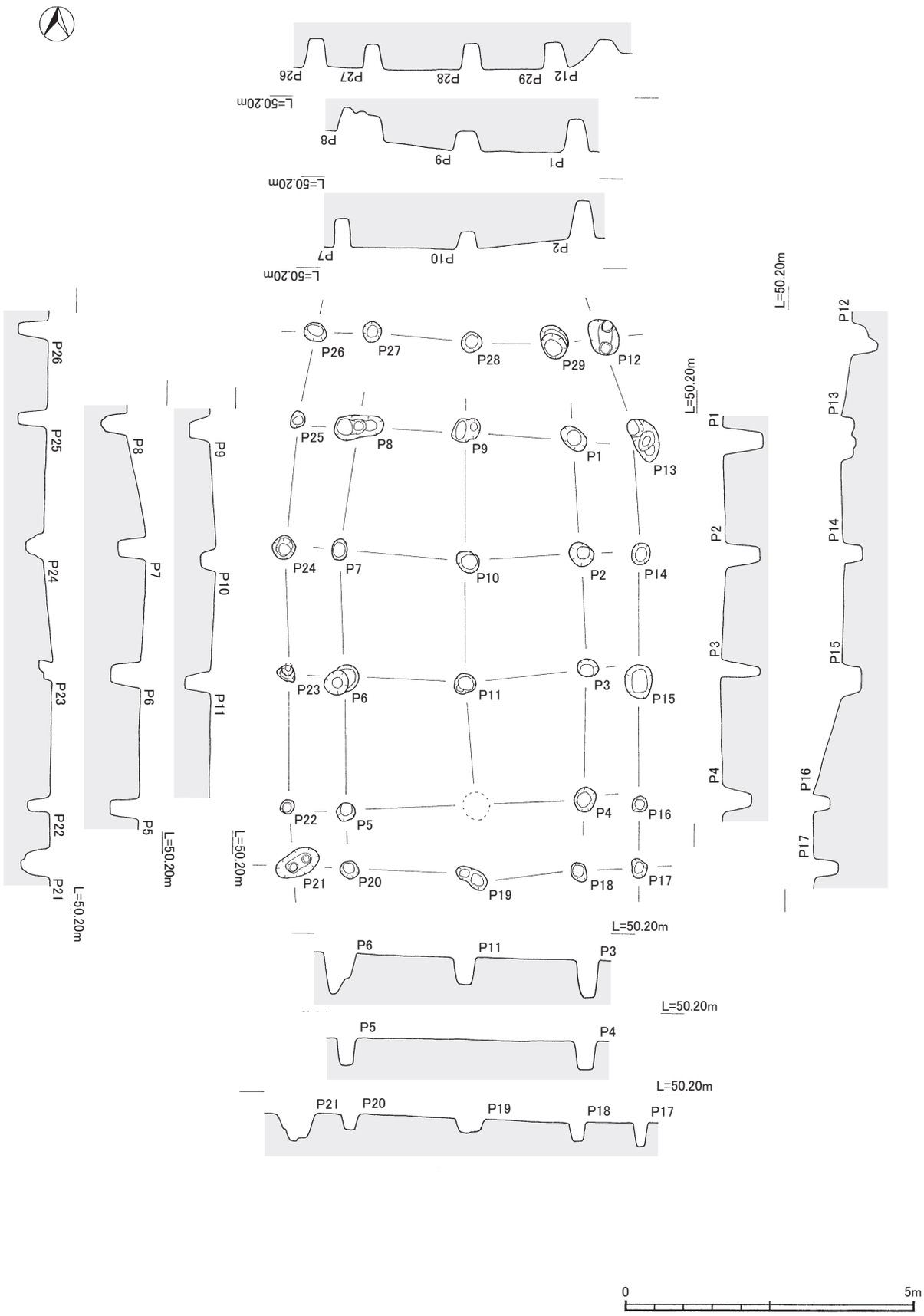
埋土内には，多量の遺物が包含される。Ｐ６に青磁碗の体部片が１点，Ｐ８に中世須恵器の胴部片が５点，Ｐ９に中世須恵器の胴部片が２点，P10に土師器片が３点（糸切り底の皿片２点，器種不明品１点）含まれる。P12には内黒土師器片１点，中世須恵器片２点，P15に土師器片１点（切り離し痕等不明），青磁碗の高台１点，白磁の器種不明品１点，粘土塊１点が含まれる。P16には土師器（埦・坏体部片３点，時期不明），P25に中世須恵器の胴部片１点，滑石製品の破片１点，P26に土師器片３点（糸切り底の底部片１点，甕の胴部片１点，器種



掘立柱建物跡1号内遺物

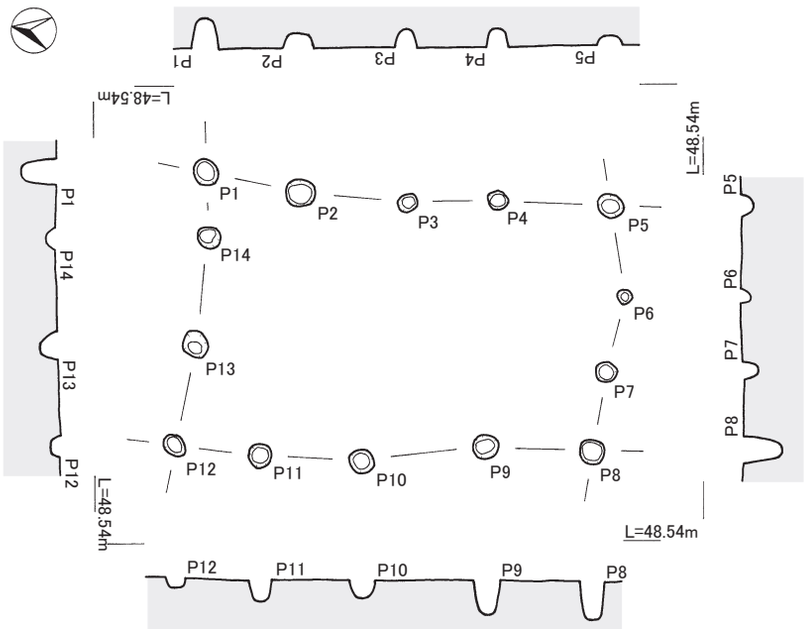


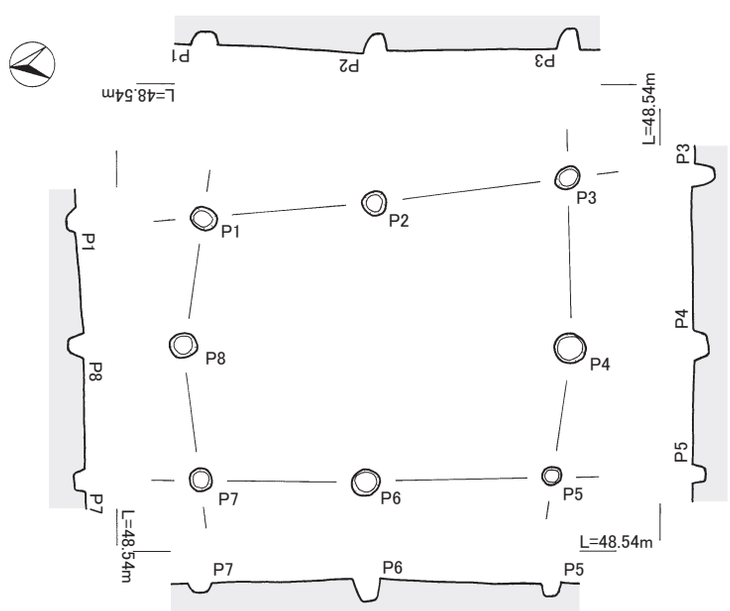
第112図　中世Ａ群Ⅰ期掘立柱建物跡１号実測図



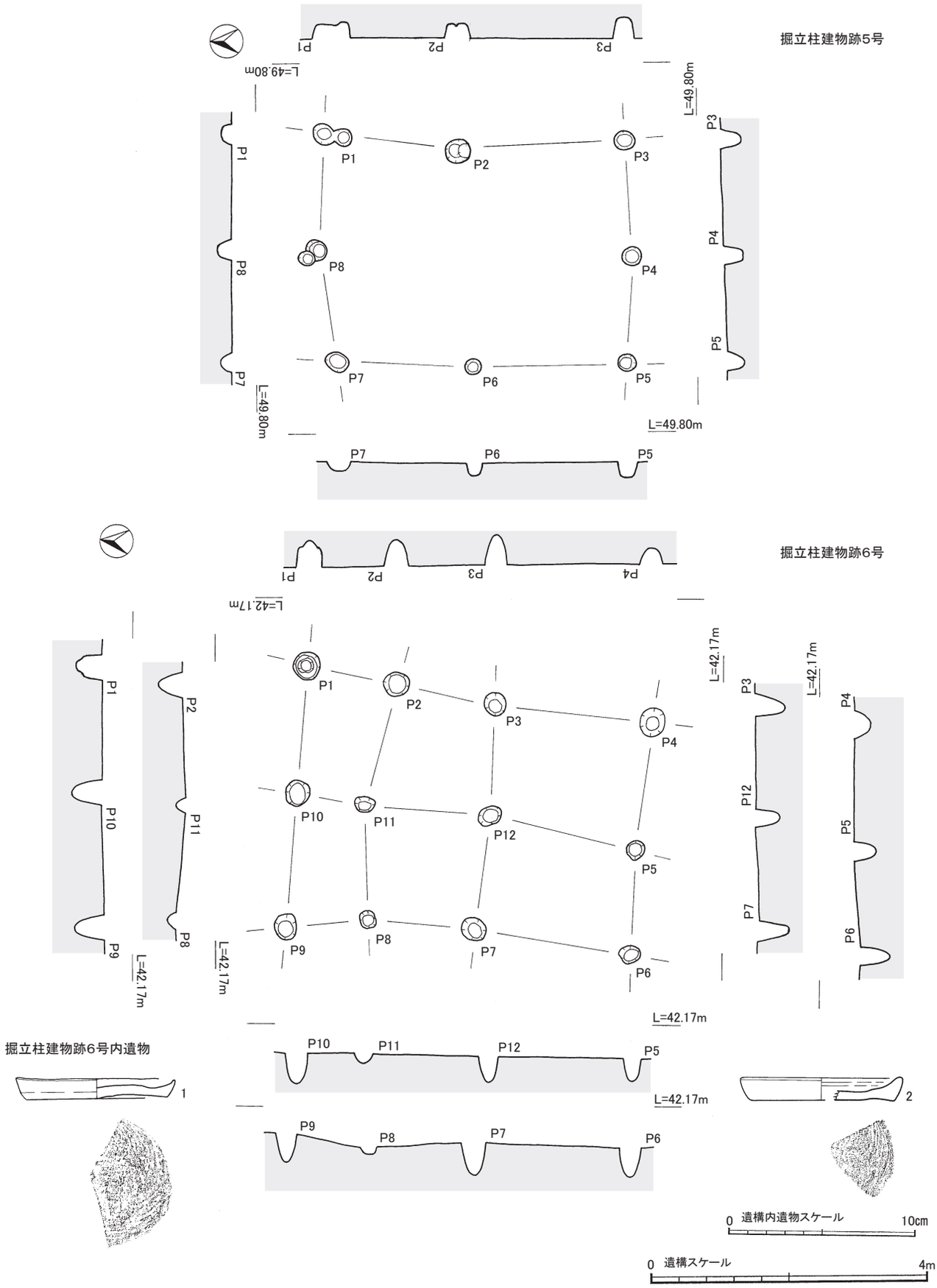
0 5m

第113図　中世Ａ群Ⅰ期掘立柱建物跡２号実測図

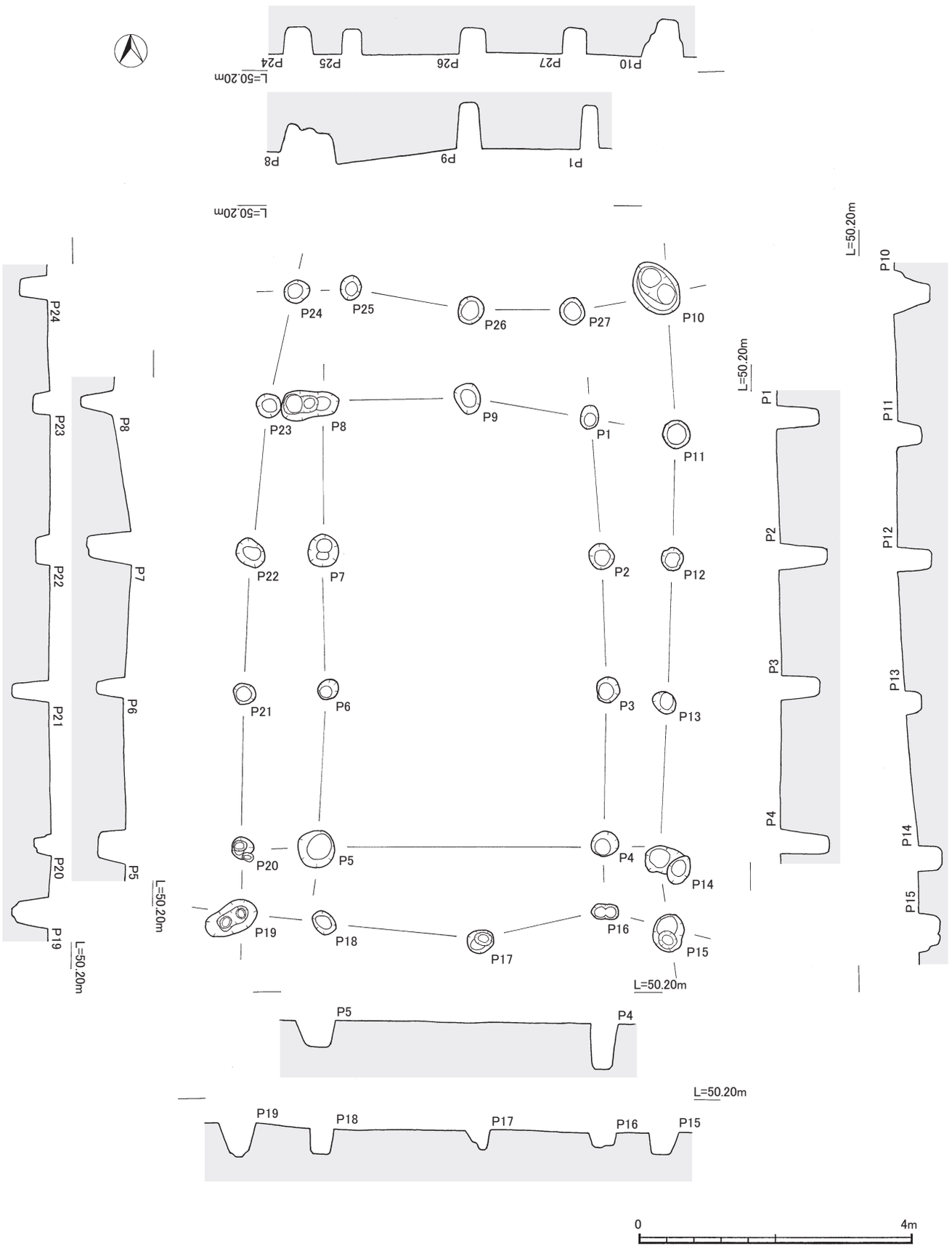




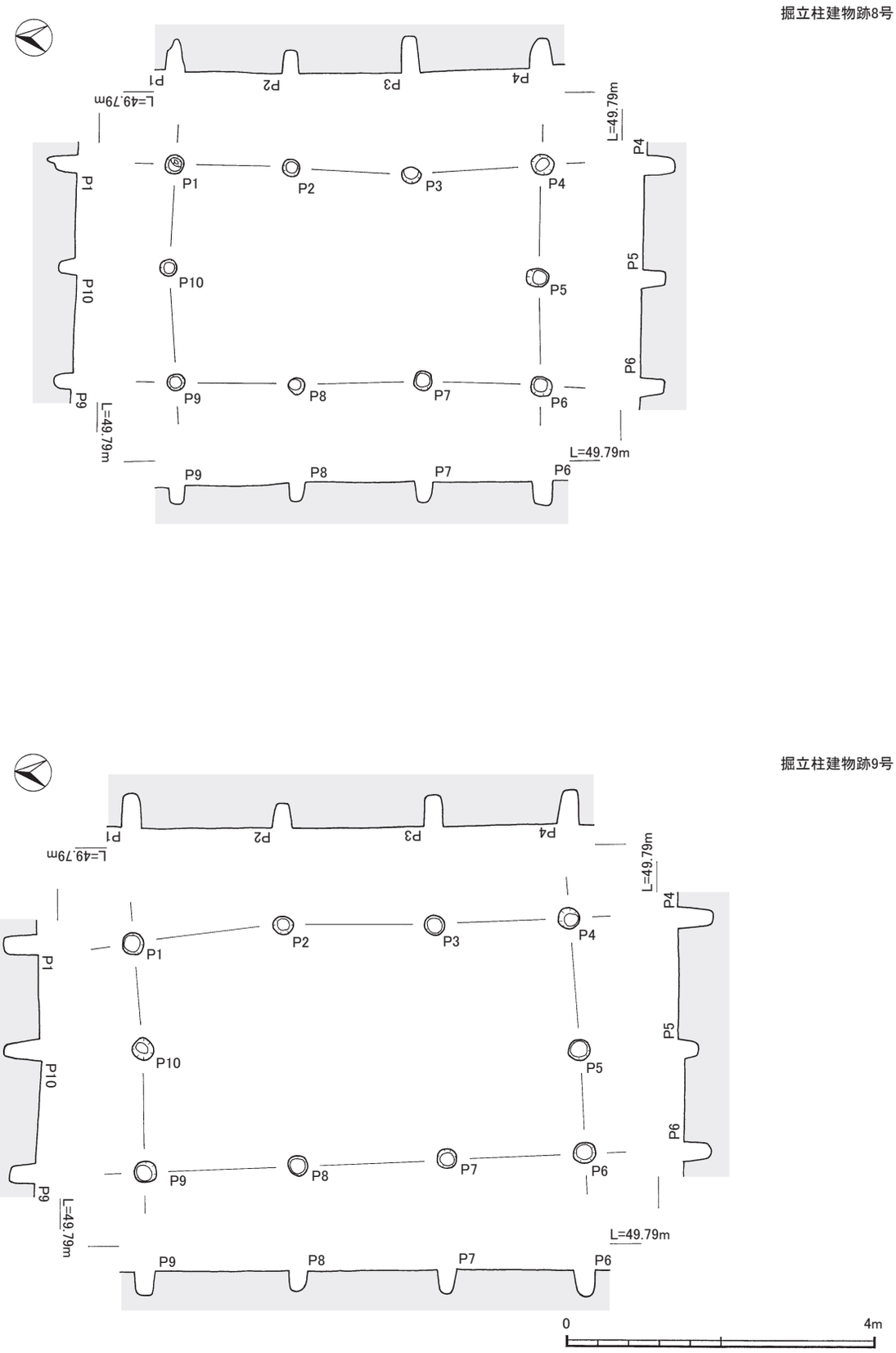
第114図　中世Ａ群Ⅰ期掘立柱建物跡３・４号実測図



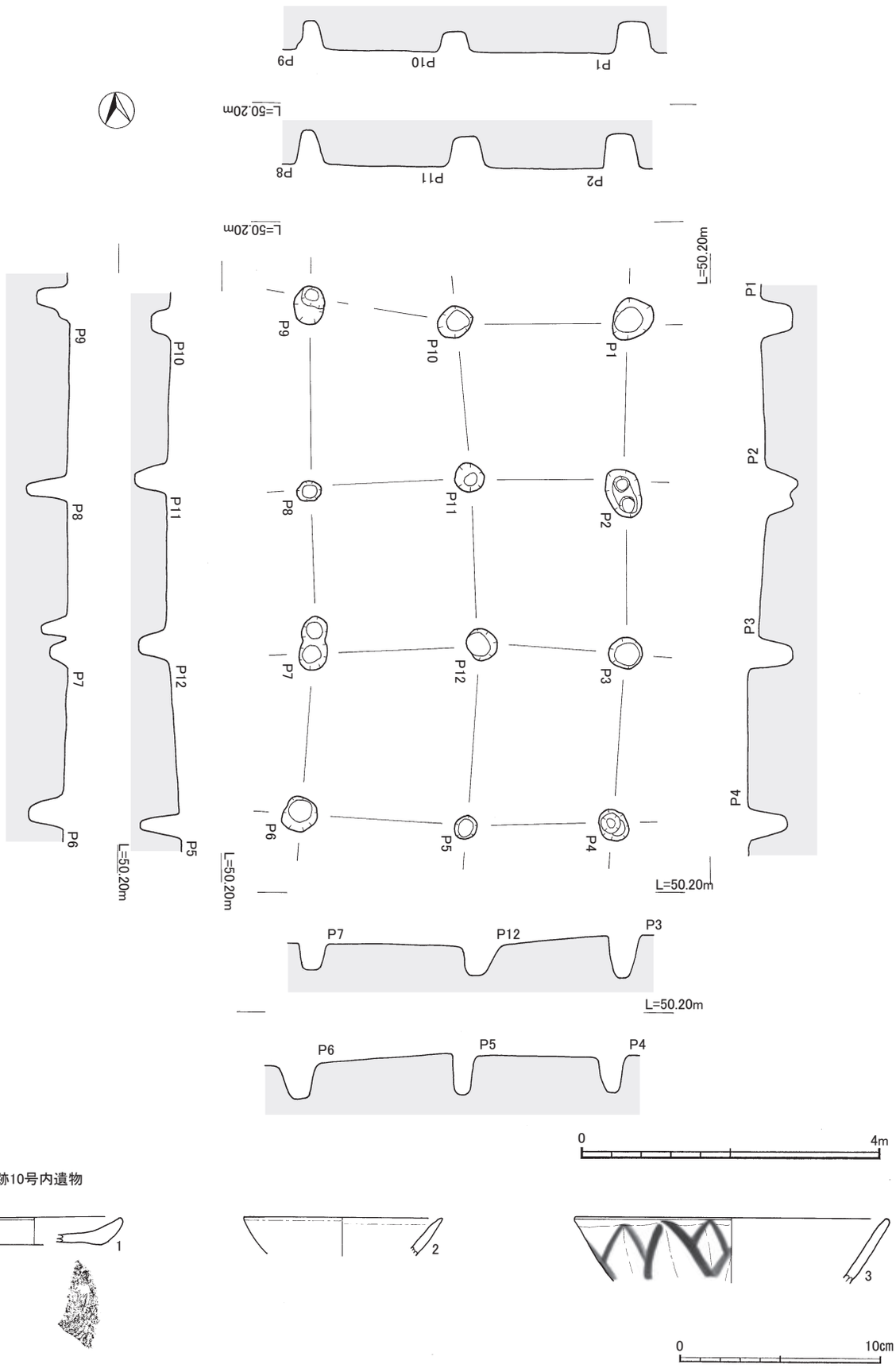
第115図　中世Ａ群Ⅰ期掘立柱建物跡５・６号実測図



第116図　中世Ａ群Ⅱ期掘立柱建物跡７号実測図



第117図　中世Ａ群Ⅱ期掘立柱建物跡８・９号実測図



第118図　中世Ａ群Ⅱ期掘立柱建物跡10号実測図

不明品１点）含まれる。

図化したのは，以下の３点である。１は，P10内遺物である。底部は糸切り底である。復元底径9.4cmを測る皿の底部片であり，１／６程が残存する。色調が，橙色を帯びる。底部から腰部への立ち上がりにナデ整形を施さないため，底部外端に円盤状の粘土が１mm程浮いて外に張り出す。

２は，Ｐ９内遺物である。外面に格子目文タタキを施し，内面には回転ナデを施す。内面の回転ナデは，極浅いハケメ状を呈する。

３は，P15内遺物である。龍泉窯系青磁碗の高台である。畳付から高台内面は，露胎する。内面に見込みには，草花文の印刻が見られる。大宰府分類の青磁碗Ⅱｃ類：Ｅ期に相当する。

（イ）掘立柱建物跡12号

Ｅ－５・６区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×２間で，主軸はN15° Wを示す。大きさは，3.7m×3.9mである。

埋土内には，Ｐ８に土師甕の口縁部片が１点，ヘラ切り痕の坏が１点包含されるが，図化できなかった。

（ウ）掘立柱建物跡13号

Ｃ・D－４区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN15° Wを示す。大きさは，3.3m×5.3mである。柱穴の埋土内に，遺物は包含されない。

（エ）掘立柱建物跡14号

D-5区のⅢa層上面で検出された。規格は2間×3間で，主軸はN20° Wを示す。大きさは，3.3m×5.8mである。

埋土内には，Ｐ４に土師器片が４点（ヘラ切り痕の坏底部１点，埦・坏片１点，甕２点），中世須恵器の甕の胴部片が２点包含される。Ｐ５には土師甕の口縁部片が１点，Ｐ７には土師器片が５点（糸切り痕の坏底部片１点，切り離し痕不明の坏・皿底部片２点，土師甕片１点，中世須恵器の胴部片１点）が包含される。何れも小片のため，図化できなかった。

（オ）掘立柱建物跡15号

Ｄ・Ｅ－３・４区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×２間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，3.5m×3.6mである。埋土内には，遺物は包含されない。

②　墓跡

（ア）２号墓

D-6区のⅢa層上面で検出された。埋土に，黒褐色砂壌土（Ⅱb層）が主として含まれることや埋土中に中世相当の遺物が包含されることから，中世の時期に比定される。

平面観は，定形的な長方形を呈し，大きさは1.26m×2.16mである。断面観は，床面から壁面に明瞭なエッジを成してやや広がり気味に斜立する。最深で42cmを測る。主軸は，N10° Ｅを示す。本遺構も，４号墓に似て，土坑の上に扁平に成形された溶結凝灰岩が載る状況にある。石塔は捉えらず，直方体状の礫を墓標とする墓跡の可能性で考えたい。

土坑の主体に埋土①が堆積し，①を切って中央に②の埋土が堆積する。①に暗茶褐色砂壌土（Ⅵ層）や明黄褐色土（Ⅶ層）のブロックが混在することから，特に①は土坑を掘り上げた土を，時間をおかずに埋め戻した状況を示す。一方，②は極めて定形的な直方体状を呈することから，②の埋土は木棺の所在を示すと推察される。0.74×1.34m程の形態は，当該期の一般的な木棺の形態にも符合する。なお，枕状の土塊が床面の片側に偏在するが，木棺の支えや裏込めの可能性がある。

②の埋土が均質的であることから，生活面の土壌が，その下に埋葬された木棺内に自然に陥没し入り込んだものと推定される。土坑の上に配置される扁平礫は，平面上の位置は散在するものの，レベル上は礫の下面がほぼ一定の高さで水平を保っており，木棺の崩落の顕著な影響を受けていないと判断される。これは，埋葬直後に据えられたのではなく，埋葬数年経過後（木棺崩落後），墓域の土壌が安定した後に据え置かれた可能性を示すと思われる。なお，土坑の中央にかけて，礫がやや落ち込む状況は，扁平礫が据え置かれた後の若干の地面の陥没の影響を受けたと見られ，４号墓に類似する。

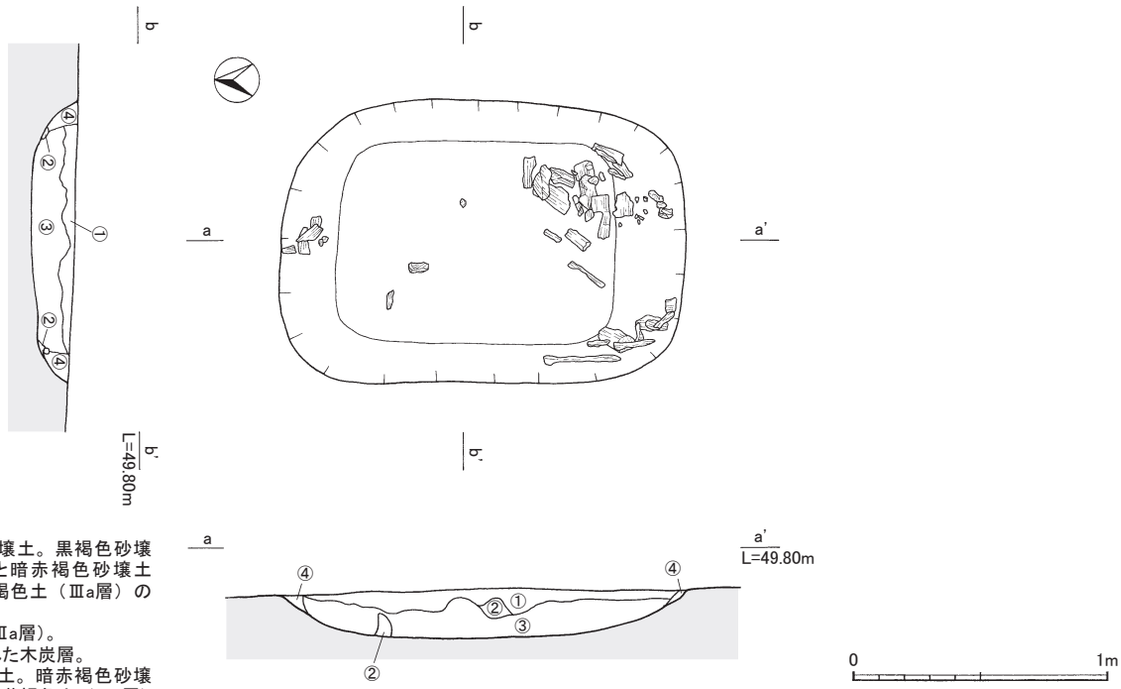
本遺構の埋土状況からは木箱等の納骨等再葬を示す状況は捉えられなかったが，角礫の標識施設を伴う点や角礫下の地面が僅かに陥没する点から，本遺構も，石塔墓同様に再葬墓であった可能性も視野に入れる必要があると思われる。

本土坑の４隅付近には，４本の柱穴が検出された。何れの柱穴も深さが28cm ～ 54cmを測り，上屋を有していた可能性が高い。上屋を持ち，礫の墓標を有していた特徴的な墓であった可能性がある。土壙埋土内には，土師器の坏，青磁碗，滑石製品の他，図化していないが，内黒土師器の埦や土師甕の破片，安山岩の礫が包含される。

１は，土師器の坏である。底部が円盤状の充実高台である。畳付外面から腰部にかけて回転ナデを巡らし，整形する。本製品のみ古代に比定される製品である。

２・３は，何れも完形品で北側に近い位置の床面近くから出土し，供膳具と思われる。底部は，糸切り痕を有する。２は，内外面ともに丹塗りである。３は，ひび割れを生じているが，祭祀行為に伴うかは不明である。

４は，土師埦（坏）の口縁部片である。



第119図　中世Ａ群Ⅰ・Ⅱ期１号墓実測図

５は，糸切り底の皿である。復元底径の直径は，7.2cm程である。体部は指頭により整形し，器形にやや歪みが見られる。器面がやや赤化し，二次焼成を受けている。

６・７は，龍泉窯系青磁碗大宰府分類Ⅱb類：E期に比定される。

８は，滑石製石鍋の破片で，胴部に鍔が巡らされ，鍔の下面には煤が付着する。

９は鉄製の和釘で，長軸長6.4cmである。鉄製付着物が捉えられるが，錆び膨れか判然としない。

（４）掘立柱建物跡Ａ群その他

①　土坑

（ア）土坑10号

埋土内からは，内外面ともにミガキを施す内黒土師器片2点と内側のみミガキがある内黒土師器の口縁部1点，片彫の鎬蓮弁文を有する青磁碗片が出土した。１の青磁碗は，大宰府分類の青磁碗Ⅱb類：Ｅ期に相当する。

（イ）土坑18号

埋土内に炭化物が多量に含まれるほか，土師皿片6点，鍔をもつ滑石製石鍋の把手片1点，須恵器片1点，焼土塊が出土した。

１・２は土師皿である。１は，糸切り底で，内面が全体的に黒色化し，二次焼成を受けた可能性を見る。

２は，底部に僅かに糸切り痕が残される。内面には布状のものでナデられた痕跡が明瞭に残る。

（ウ）土坑25号

埋土内から，雁股鏃が1点出土した。柱穴619内出土の懐刀同様，これらの武具の出土は，当該期の集団が武士集団である可能性を示す。また，土坑内出土であることから，祭祀的行為に伴う埋納遺物の可能性もある。

（エ）土坑32号

埋土内から，青磁碗が１点出土した。１は，鎬蓮弁文を有する龍泉窯系青磁碗Ⅱb類：E期である。

（オ）土坑33号

埋土内遺物１・２は，糸切り底の土師皿である。１は復元底径が5.8cmである。

２は復元口径8.4cm，復元底径6.6cm，器高1.3cmを測る。煤が内外面及び外底に付着する。

（カ）土坑34号

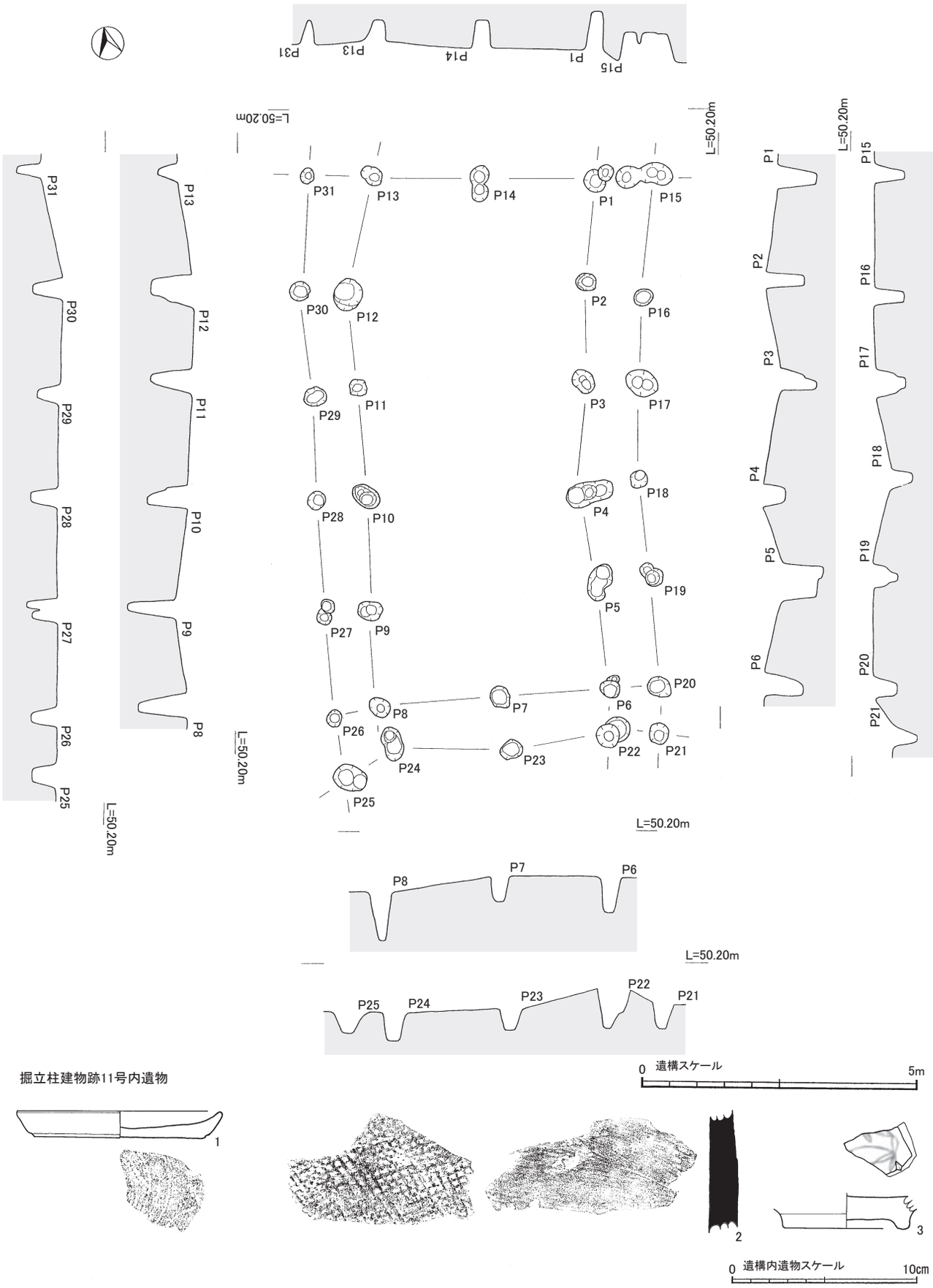
埋土内から，１の糸切り底の土師皿が１点出土した。復元底径が７cmを測り，外面に煤が付着する。

（キ）土坑41号

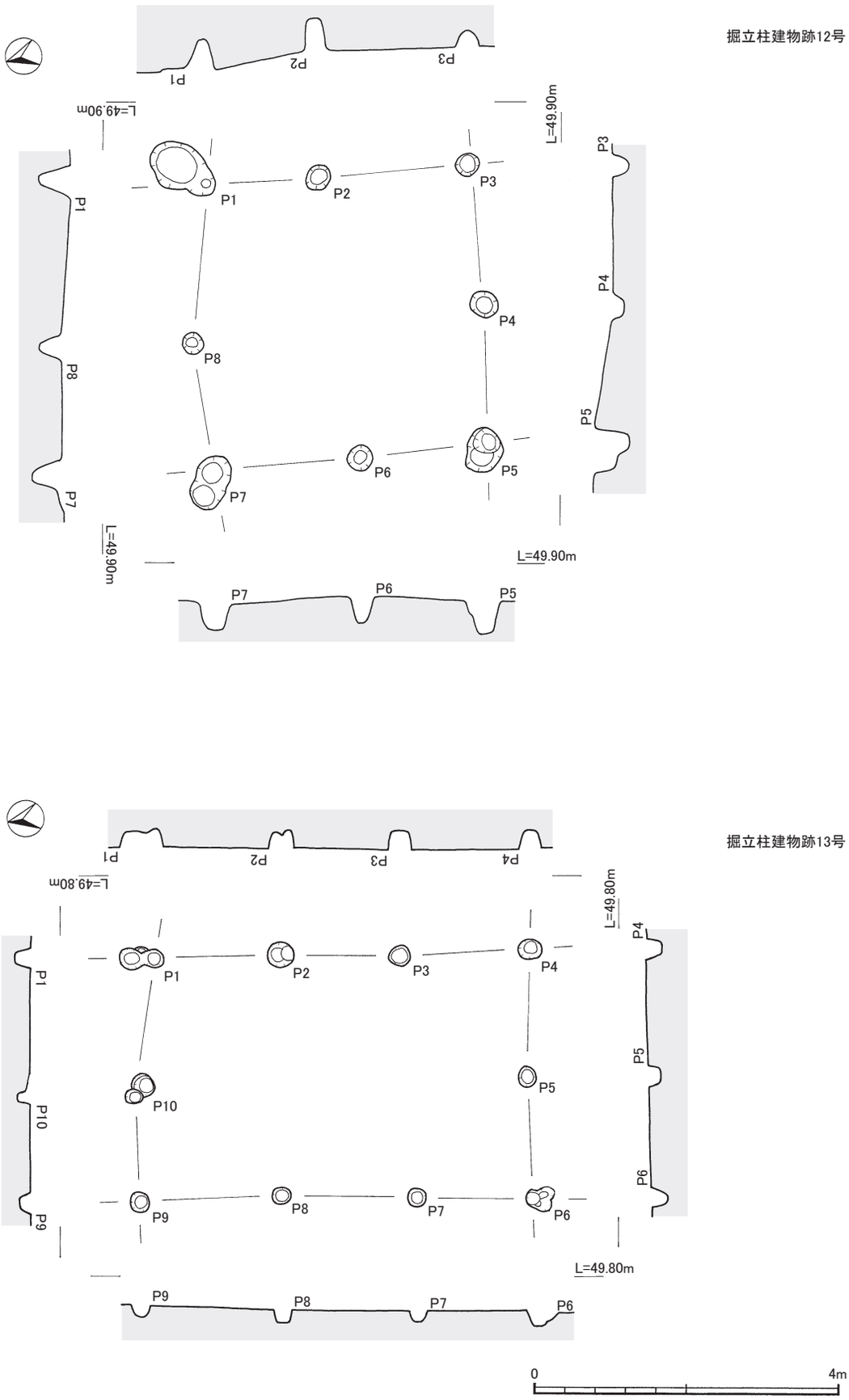
埋土内には，１の口禿口縁の白磁皿Ⅸ類：Ｆ期が1点含まれていた。

（ク）土坑49号

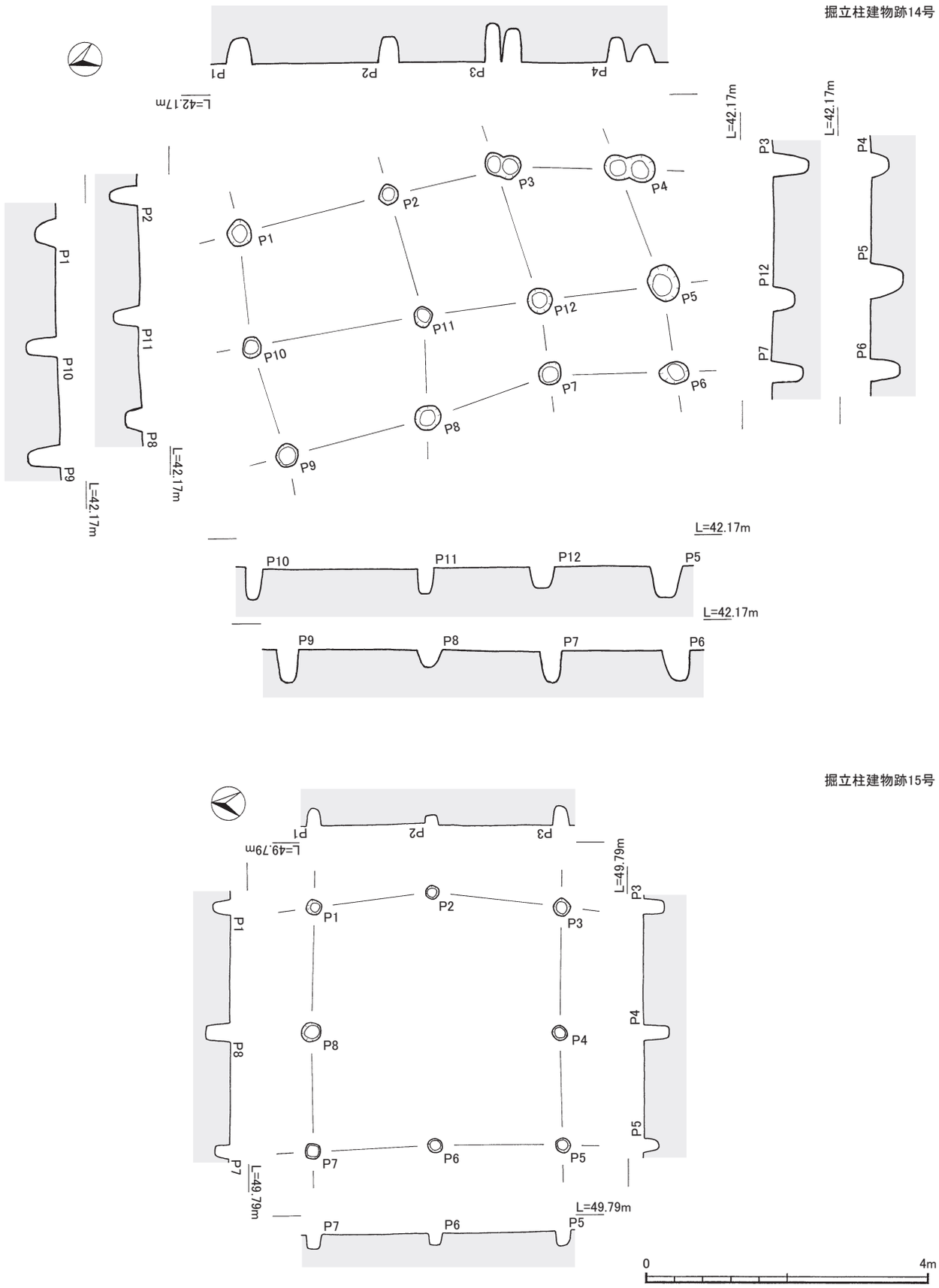
埋土内には，種実等多量に含まれていた。その内，種実26点，炭化物片６点の種実同定を行った。イネ科24



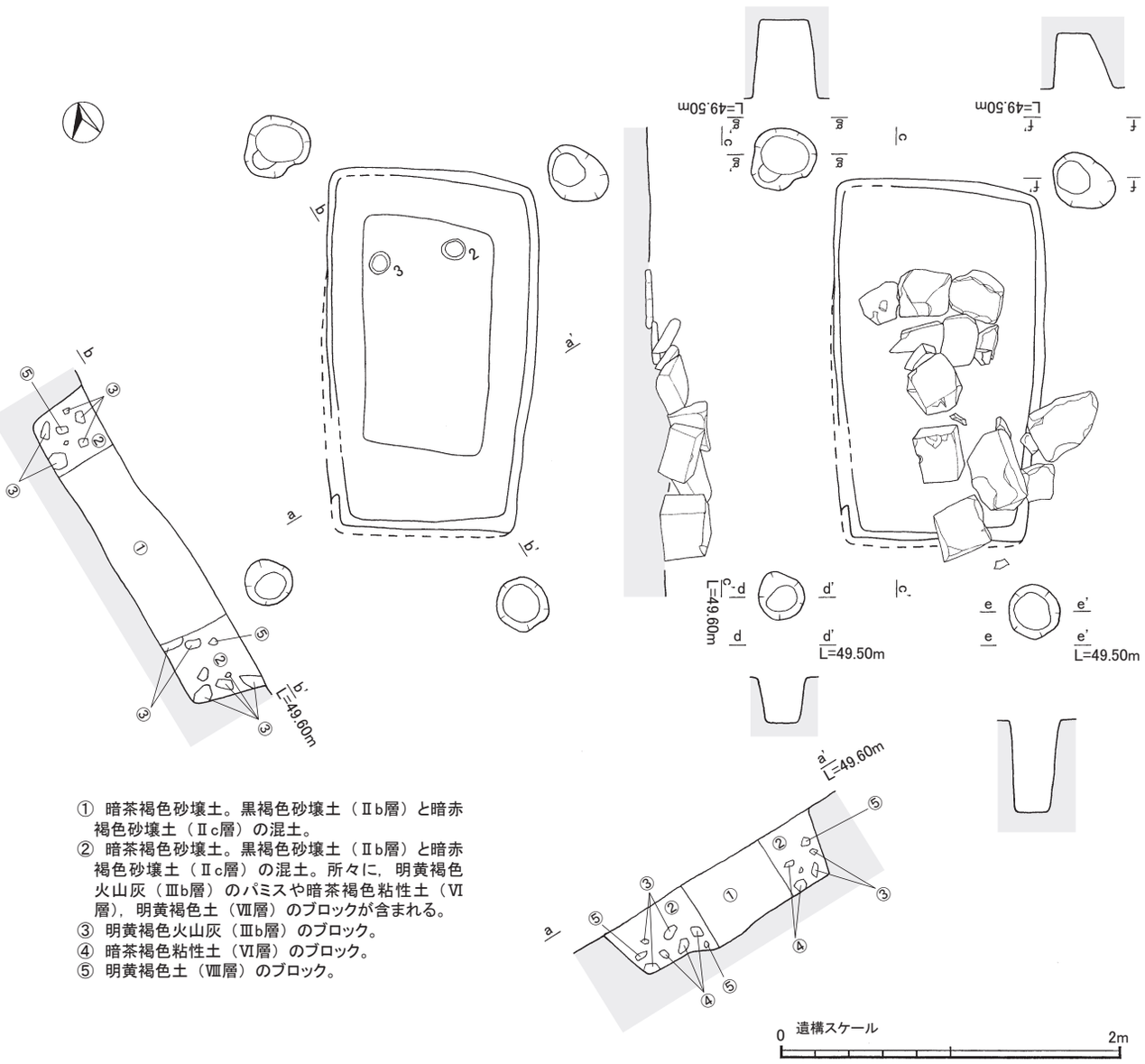
第120図　中世Ａ群Ⅲ期掘立柱建物跡１１号実測図

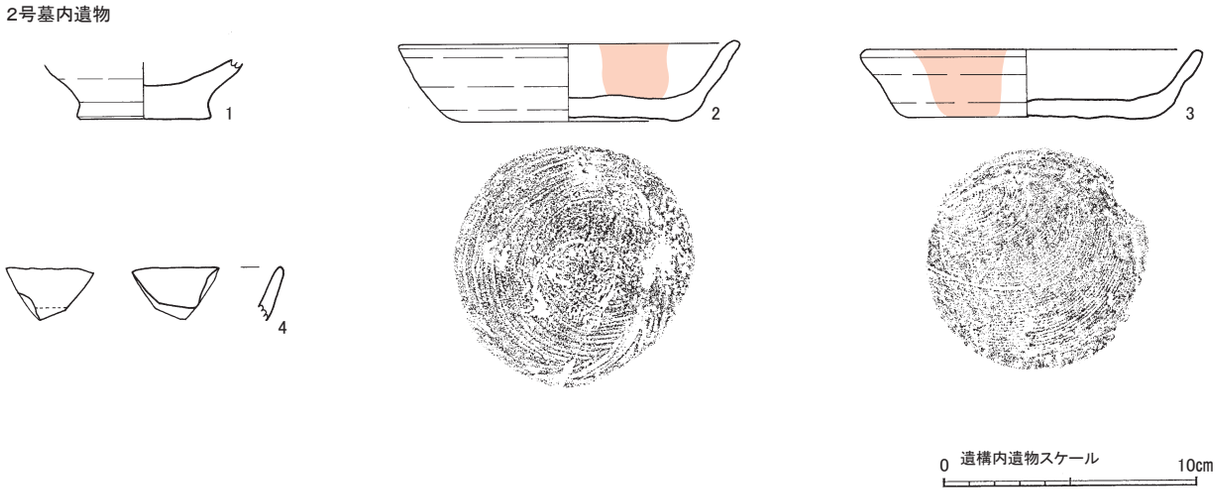


第121図　中世Ａ群Ⅲ期掘立柱建物跡12・13号実測図

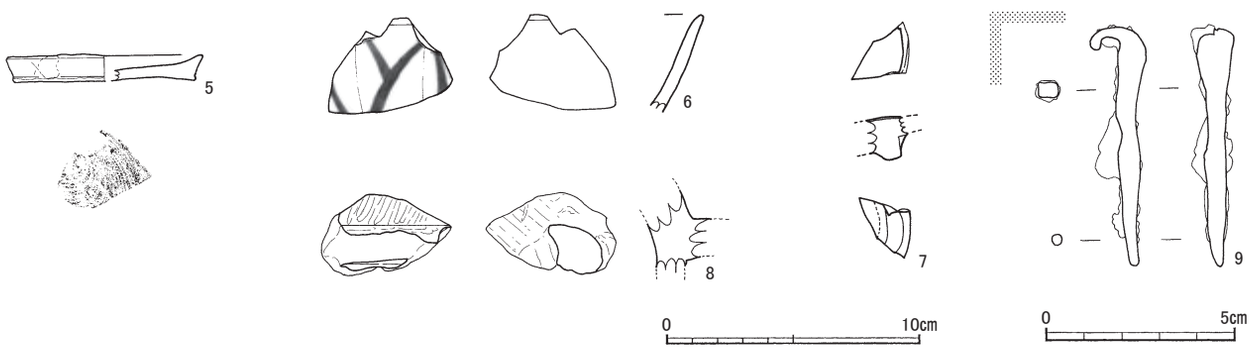


第122図　中世Ａ群Ⅲ期掘立柱建物跡14・15号実測図





第123図　中世Ａ群Ⅲ期２号墓・出土遺物実測図（１）



第124図　中世Ａ群Ⅲ期２号墓出土遺物実測図（２）

点，ブナ科２点と同定され，イネ科は何れも炭化米で，玄米の状態であった。極小で短粒のものが多く，弥生時代から古墳時代のイネ果実（炭化米）と同様の傾向を示す。やや長粒のものも入ることから，他系統のものの混在の可能性も指摘される（P248を参照）。

（ケ）土坑57号

埋土内から，鉄製の釘が１点出土した。鈎状の頭が付く和釘である。

（コ）土坑60号

埋土内遺物１は，口禿口縁の白磁皿IX類：F期である。

（サ）土坑66号

埋土内出土遺物の１は，糸切り底の坏・皿片である。復元底径が6.8cmを測る。底部が僅かに（1mm厚）円盤状を呈し，腰部外面に張り出す。

２は，内黒土師器の埦・坏片で，内面に「"」の墨書が捉えられる。文字の殆どを欠き，文字を判読できない。復元口径は13.6cmを測る。

図化していないが，藁等スサを練り込んだ粘土塊が１点含まれるが，器面に籾痕が４点付着する。竈壁か古代の甑の把手の可能性がある。

埋土内炭化材の一部を放射性炭素年代測定し，1100±30yrBP（898 ～ 983calＡＤ：平安時代）の年代値が得られた。青磁・白磁等の出土遺物から，本遺構の時期を13世紀後半～ 14世紀前半と比定しており，分析結果と300年程の開きがある。本遺跡では，古代の掘立柱建物跡が検出されており，古代の炭化材の紛れ込みの可能性で考えたい。

（シ）土坑74号

埋土内からは，土師器甕の胴部片が３点，土師器皿片１点出土した。

１は，糸切り底の皿である。復元口径が8.0cm，復元底径が6.8cmを測る。

②　柱穴

（ア）柱穴171号

埋土の炭化材の放射性炭素年代測定を行った。掘立柱建物を構成していた木材と考えられる。分析の結果，675±20年BP（AD1270 ～ 1310，1360 ～ 1390）の年代値が得られた。青磁・白磁等の出土遺物の時期比定と概ね時代が符合する。本遺構は，遺構位置図のみに図示した。

（イ）柱穴224号

埋土内遺物１は，土師器坏の底部である。糸切り底で，内外面ともに横ナデを施す。外面のナデは粗雑である。

（ウ）柱穴259号

埋土内遺物１は，白磁皿の底部である。平底で，底部外面には釉たまりが見られる。内面見込みに，浅めの段をもつ。口禿口縁をもつ白磁皿Ⅸ類：Ｆ期に比定される。

（エ）柱穴272号

埋土内遺物１は，口禿口縁をもつ白磁皿である。口縁部の内外面ともに口縁部の釉を掻き取っている。白磁皿Ⅸ類：Ｆ期に比定されるものである。

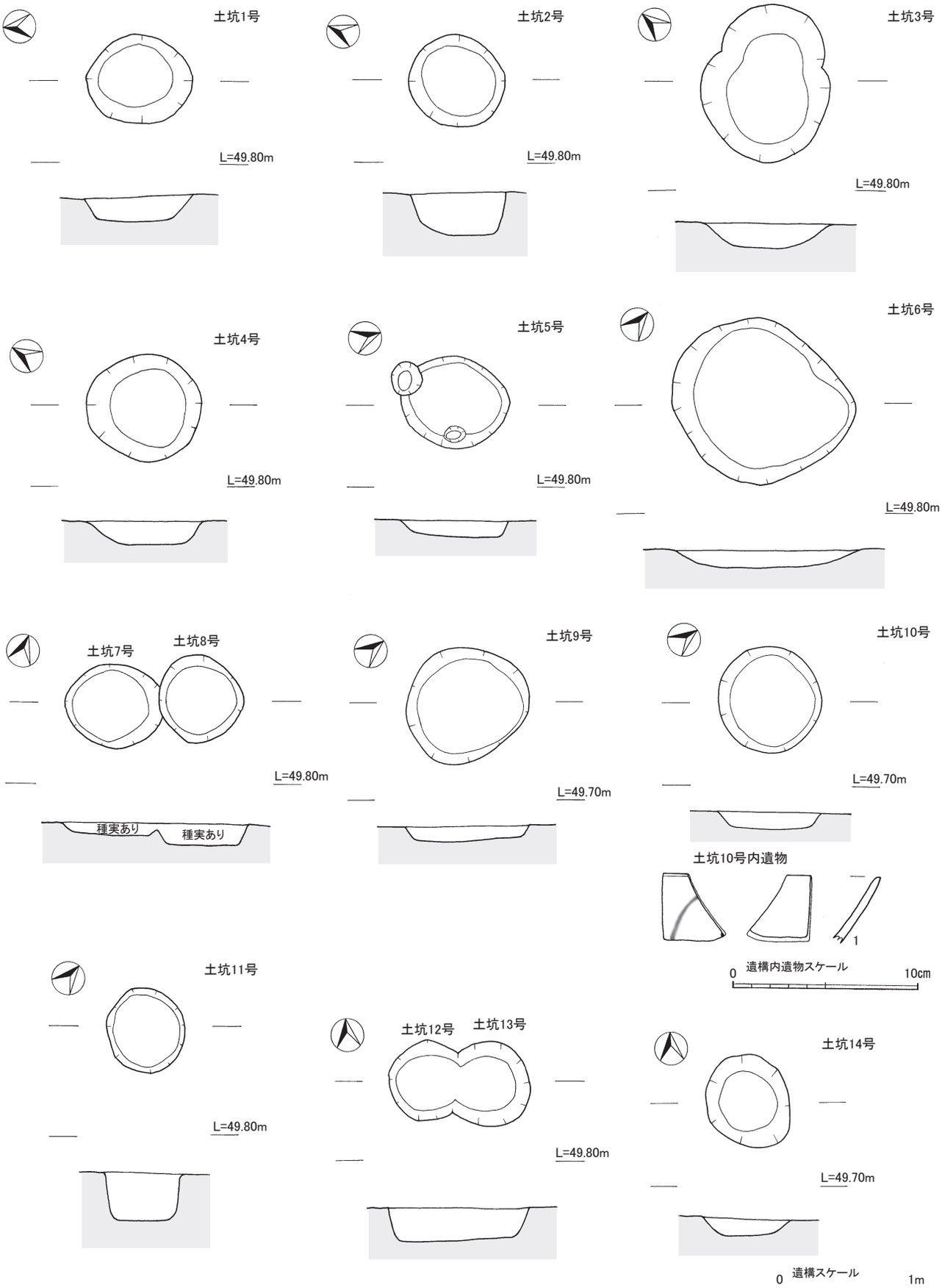
（オ）柱穴386号

埋土内遺物１は白磁の皿である。口縁部に口禿を施す。頴娃部は露胎するが，底部の際から体部下位にかけて釉剥ぎが見られる。大宰府分類白磁皿Ⅸ類：Ｆ期に比定される。

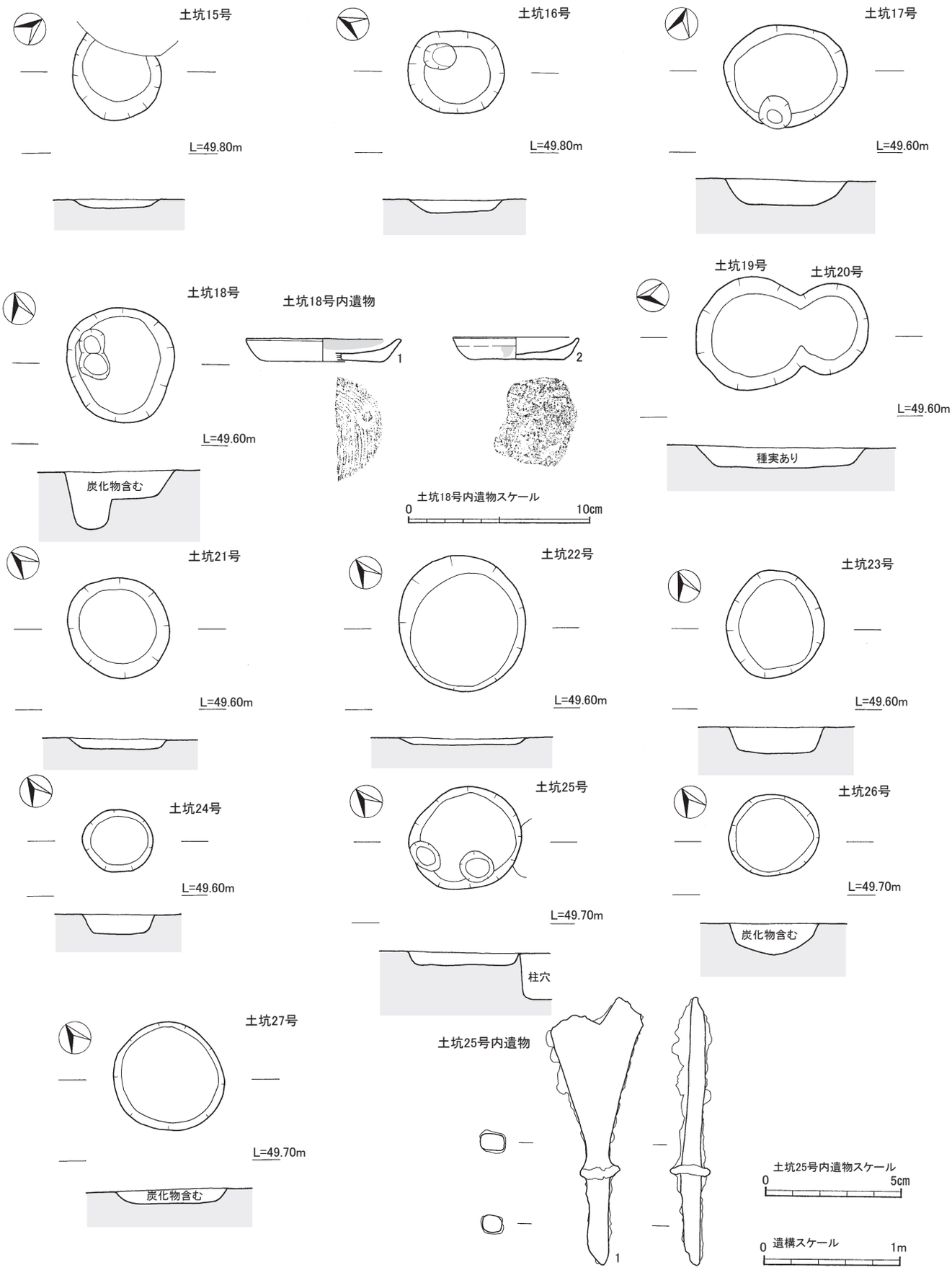
２は，龍泉窯系青磁の碗である。大宰府分類青磁碗Ⅱｂ類：Ｅ期に相当する。

（カ）柱穴414号

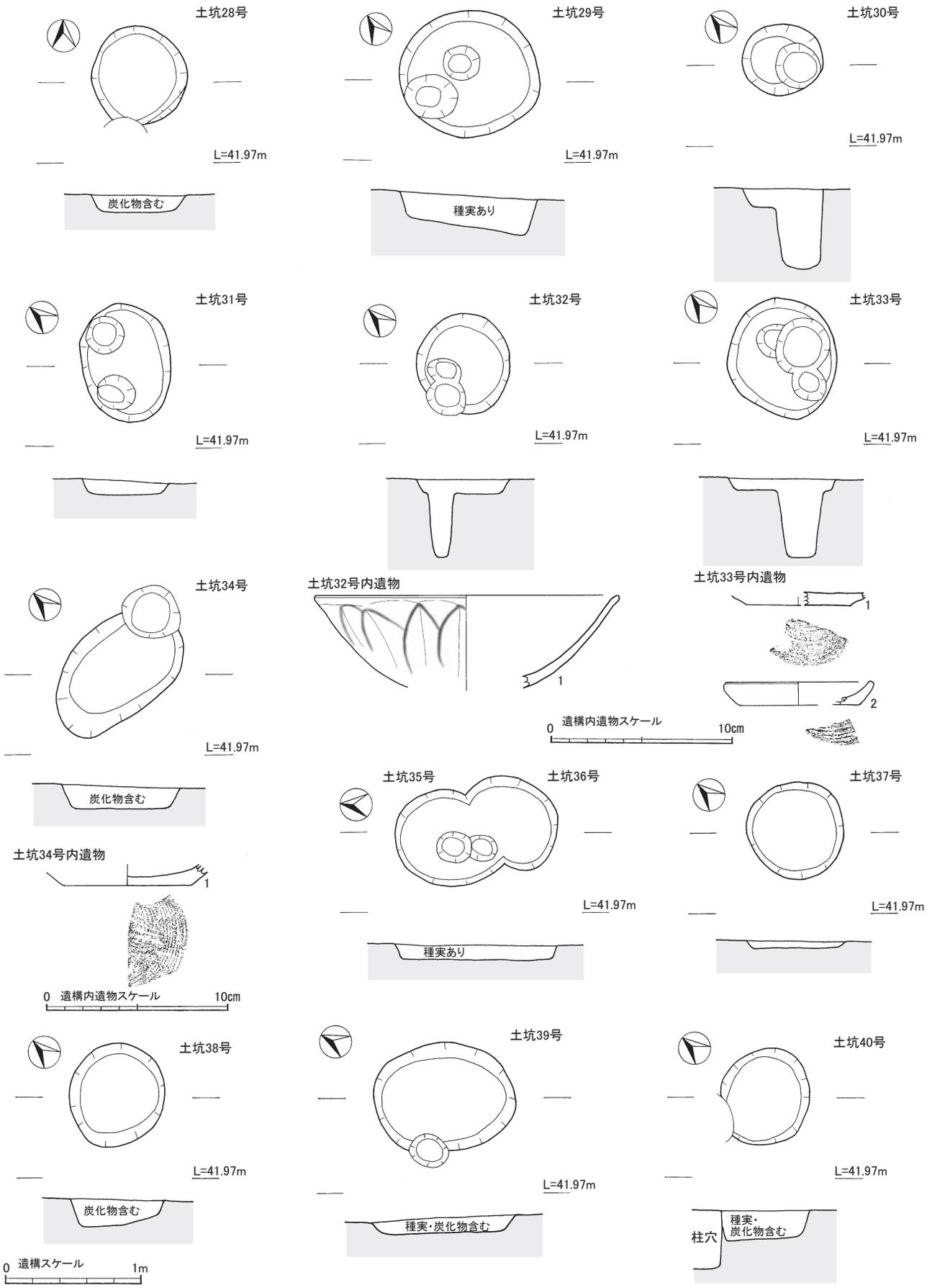
埋土内遺物１は，瓦質土器で，片口の擂鉢である外面には縦位方向の櫛目痕，内面には斜方向の櫛目痕を残す。樺万丈系と考えられる。土坑181号の埋土内遺物と



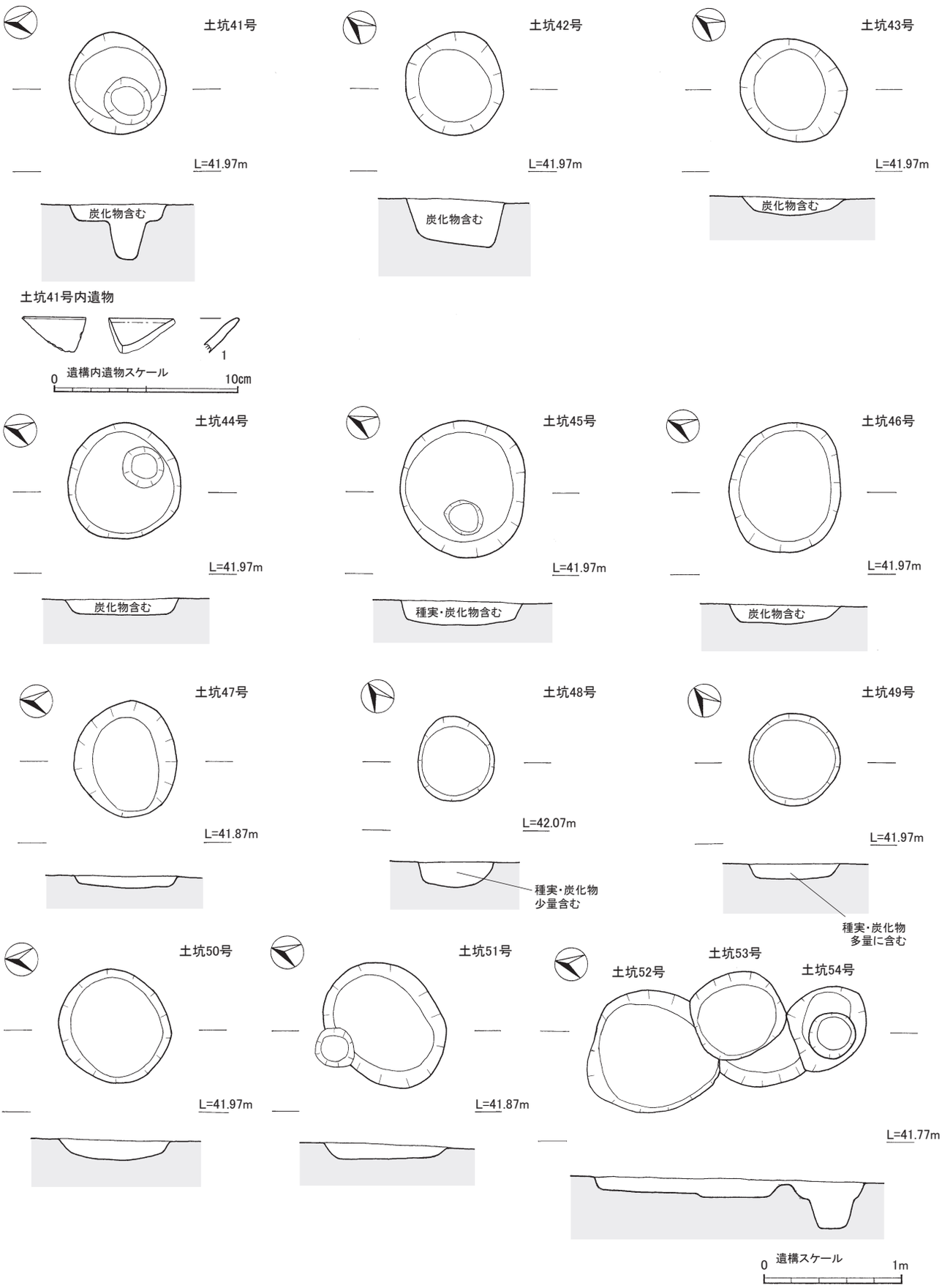
第125図　中世Ａ群土坑１～ 14号実測図



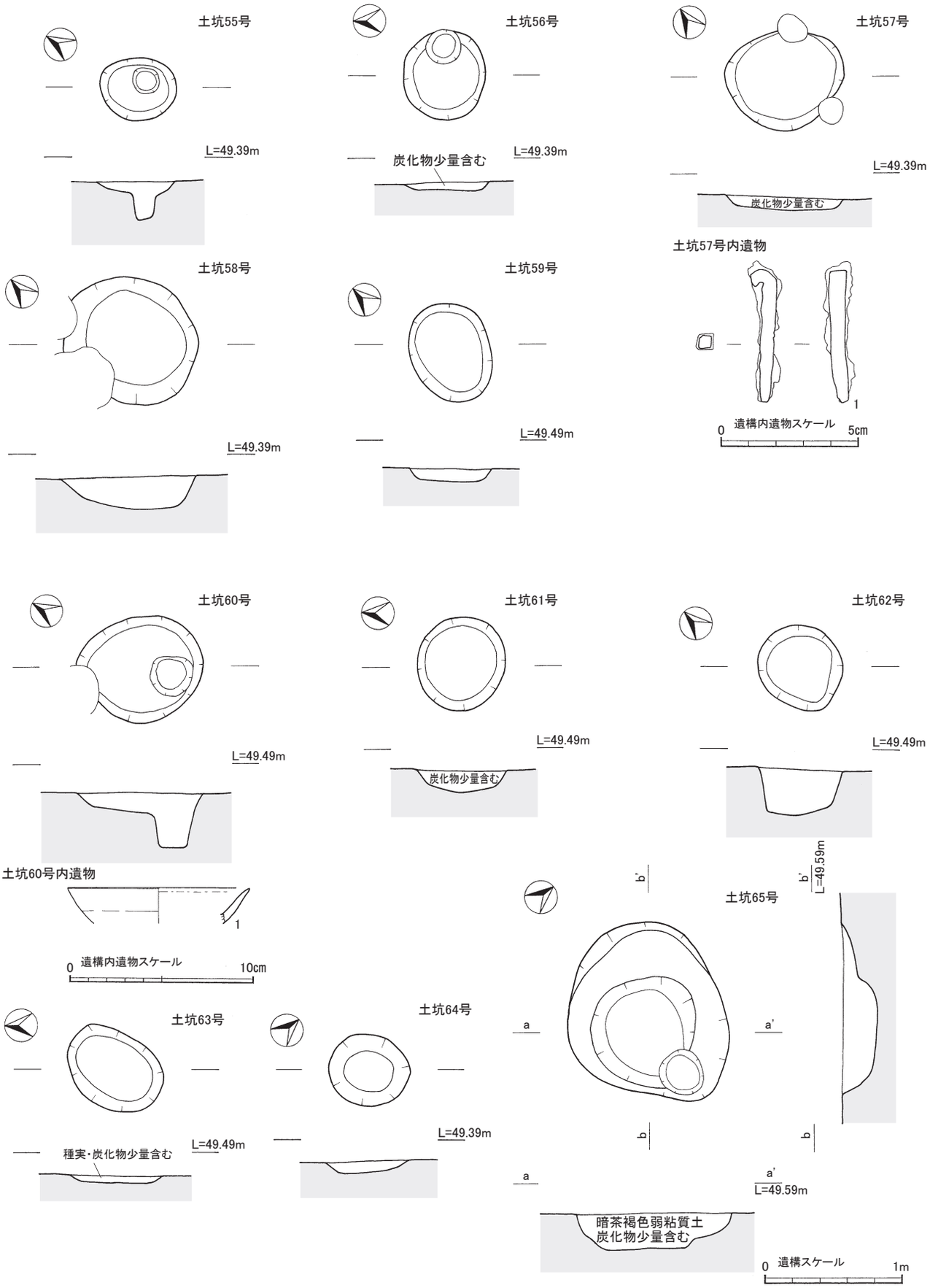
第126図　中世Ａ群土坑15 ～ 27号実測図



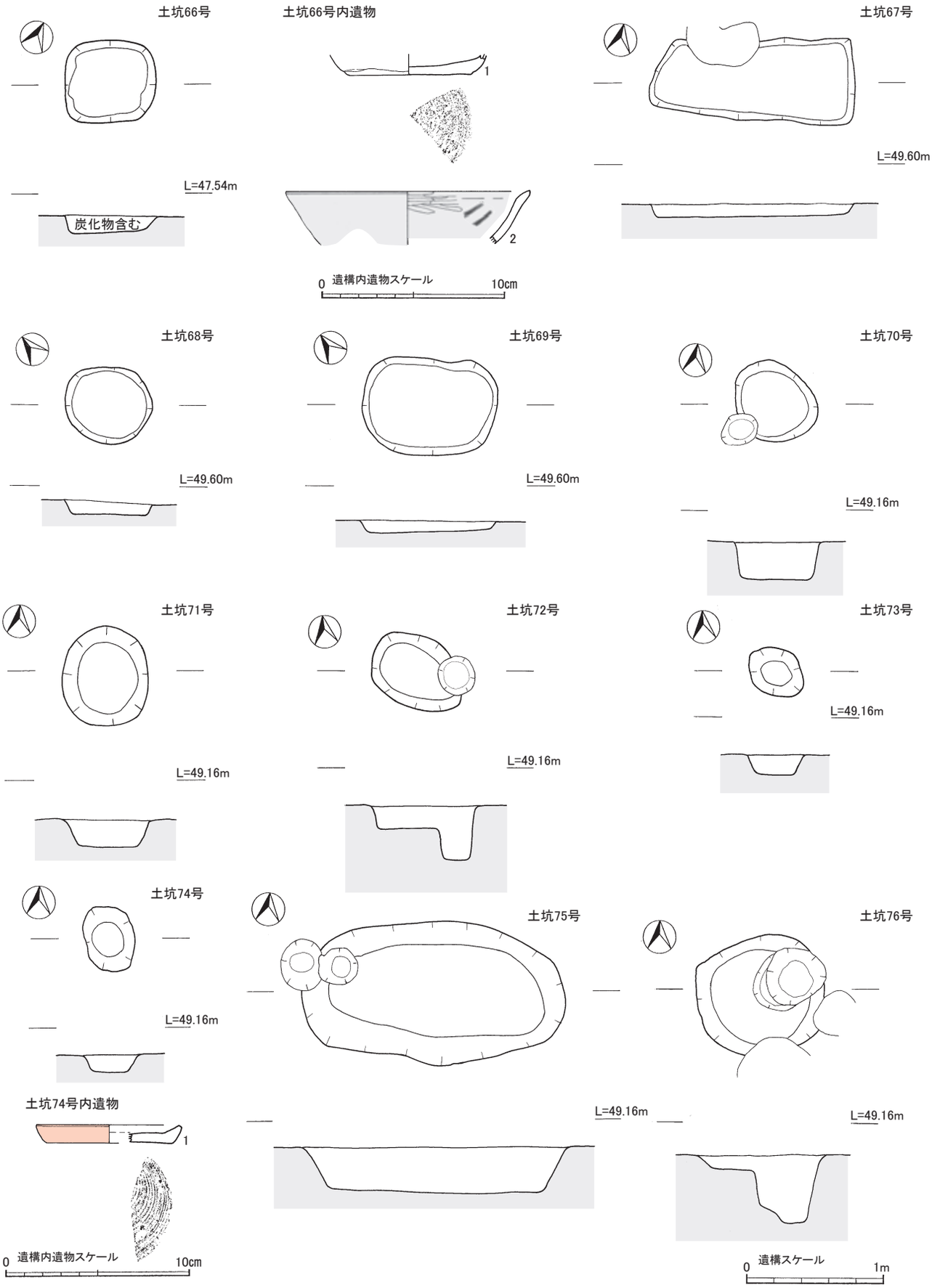
第127図　中世Ａ群土坑28 ～ 40号実測図



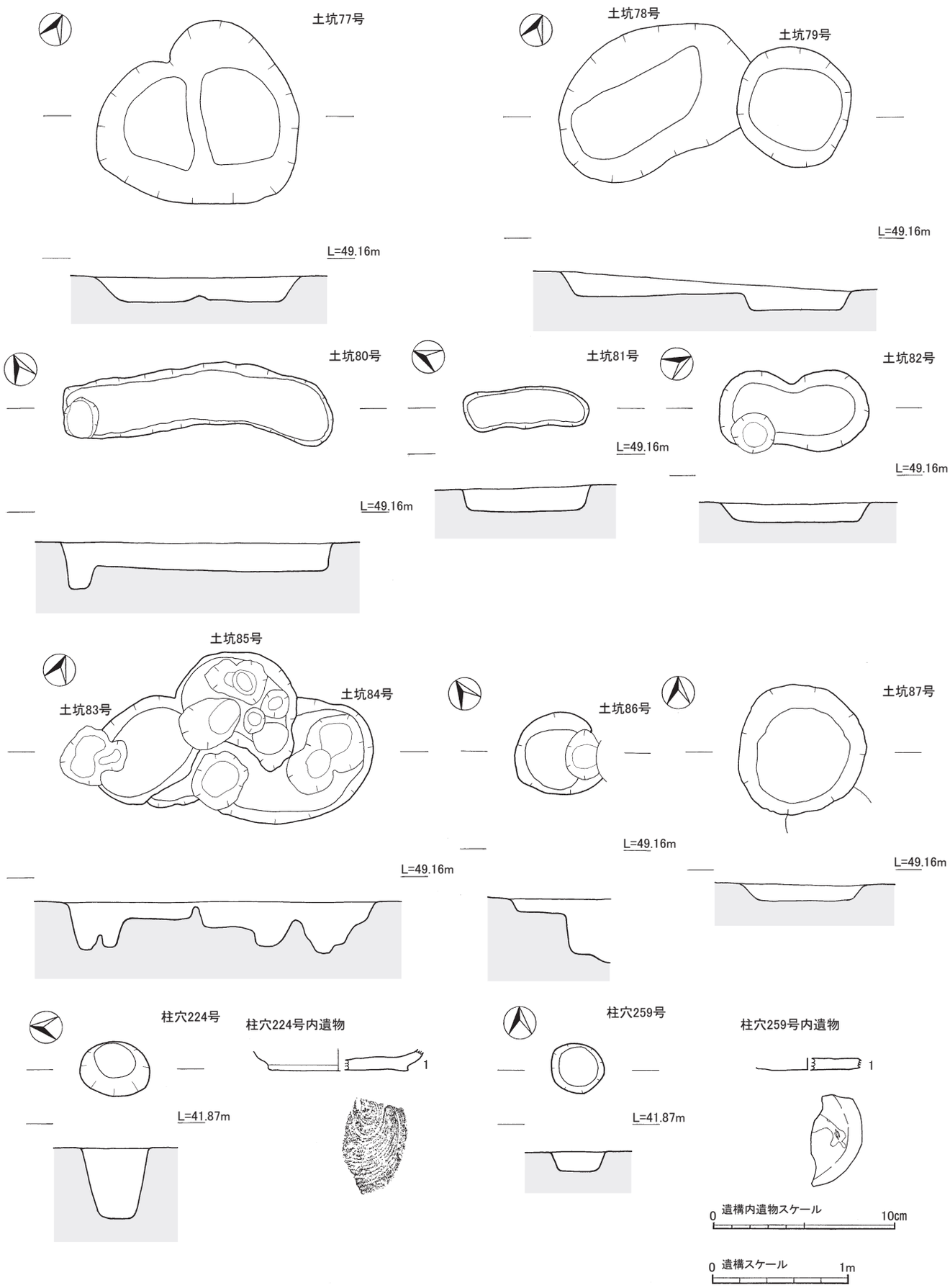
第128図　中世Ａ群土坑41 ～ 54号実測図



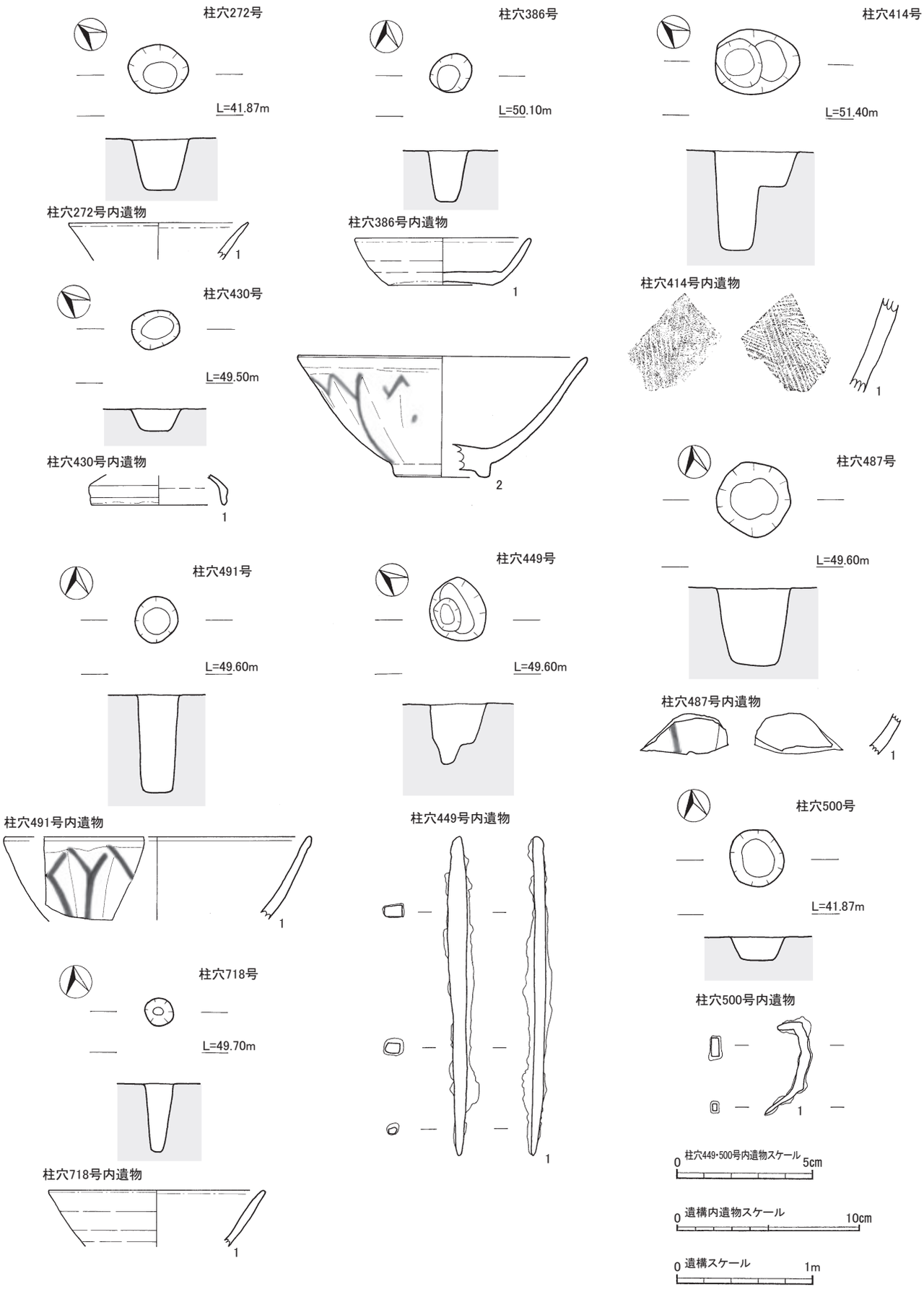
第129図　中世Ａ群土坑55 ～ 65号実測図



第130図　中世Ａ群土坑66 ～ 76号実測図



第131図　中世A群土坑77～87号・柱穴実測図（1）



第132図　中世Ａ群柱穴実測図（２）

非常に類似していることから，同一個体と考えられる。

（キ）柱穴430号

埋土内遺物１は，型造りによる青磁の合子の蓋である。外面端部から内面は露胎する。上面に印花文が施される。

（ク）柱穴449号

埋土内遺物１は，幅広の棒状鉄製品で，中膨れし，両先端に向けて先細りする。特に，片縁端は鋭く尖る。一般的な和釘にしては，最大長が長く，鈎状の釘頭を有しないことから，不明品として報告する。完形品で出土したことから，祭祀的行為に伴う可能性もある。

（ケ）柱穴487号

埋土内遺物１は，龍泉窯系青磁の碗である。大宰府分類青磁碗Ⅱb類：E期に相当する。

（コ）柱穴491号

埋土内遺物１は，龍泉窯系青磁碗である。外面の鎬蓮弁文は明瞭な鎬をもつ。釉は厚く，貫入が多く入る。口唇部にすり減り痕が見られる。太宰府分類青磁碗Ⅱb類：E期に比定される。

（サ）柱穴500号

埋土内遺物１は，上端が鈎状の傘をもつ鉄製の和釘である。弯曲しており，使用によるものと思われる。

（シ）柱穴718号

埋土内遺物１は，口禿口縁の白磁の皿である。内外面共に貫入が見られる。太宰府分類の白磁皿Ⅸ類：F期に比定される。

（５）掘立柱建物跡Ｂ群　Ⅱ期

①　掘立柱建物跡

（ア）掘立柱建物跡16号

B－６・７区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ５° Wを示す。大きさは，4.1m×6.9mである。

埋土は黒褐色砂壌土（Ⅱb層）で，床面が硬化もしくは多少の締まりが捉えられる。P11に土師甕１点が包含されるが，古代の紛れ込みと判断される上，小片のため図化できなかった。

（イ）掘立柱建物跡17号

C－７・８区・D－７区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN10° Wを示す。大きさは，4.7×8.1mである。

埋土内には，Ｐ６に土師器２点（甕），Ｐ８に土師器１点（埦底部か）が包含される。古代の紛れ込みと判断される上，小片のため，図化しなかった。

（ウ）掘立柱建物跡18号

A－７区，B－６・７区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，3.0m×5.2mである。埋土内には，遺物は包含されない。

（エ）掘立柱建物跡19号

B・C－６・７区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，4.2m×6.8mである。

埋土内には，P1に土師器3点（糸切り底のⅢ２点，甕１点）が包含される。内，2点を図化した。

１は，糸切り底の土師器片である。復元底径7.3cmを測る。内外面に，顕著に煤が付着し，二次焼成の可能性が高い。２も底部が糸切り底の土師器片である。復元底径8.6cmを測る。

P1の埋土内に炭化材が含まれており，掘立柱建物の柱材と考えられる。放射性炭素年代測定を実施し，790±20年BP（AD1215 ～ 1270年）の年代値が得られた。青磁・白磁等の遺物の比定年代に概ね符合する。

（オ）掘立柱建物跡20号

B－６・７区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×２間で，主軸はN ２° Wを示す。大きさは，3.1m×3.4mである。埋土内には，遺物は包含されない。

（カ）掘立柱建物跡21号

C－６区・D－６・７区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×２間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，2.8m×2.8mである。

埋土内には，古代の紛れ込みと判断される土師甕片が２点包含されるが，小片のため図化できなかった。

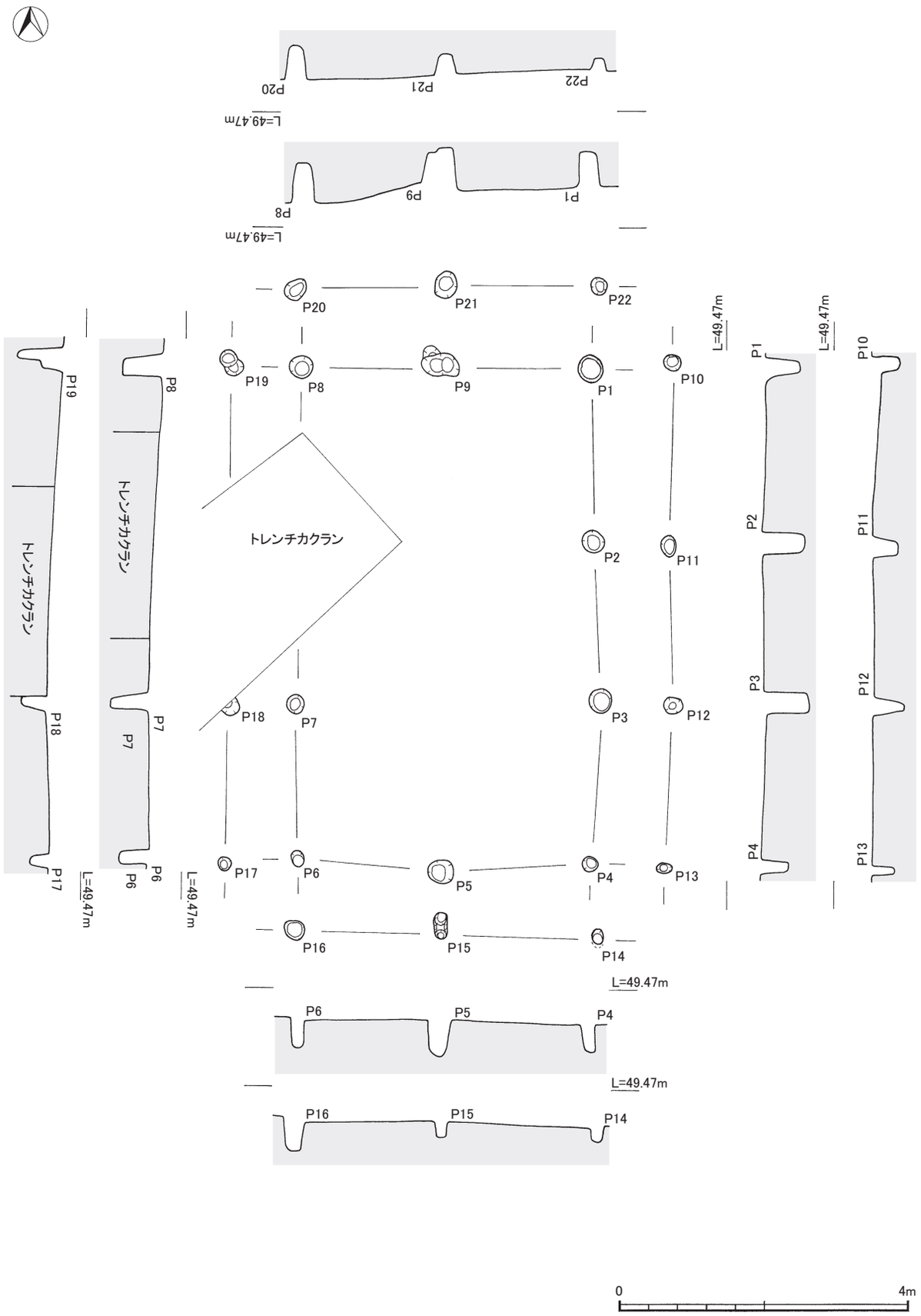
（キ）掘立柱建物跡22号

C・D－５・６区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×２間で，主軸はN15° Wを示す。大きさは，3.1m×3.8mである。埋土内には，遺物は包含されない。

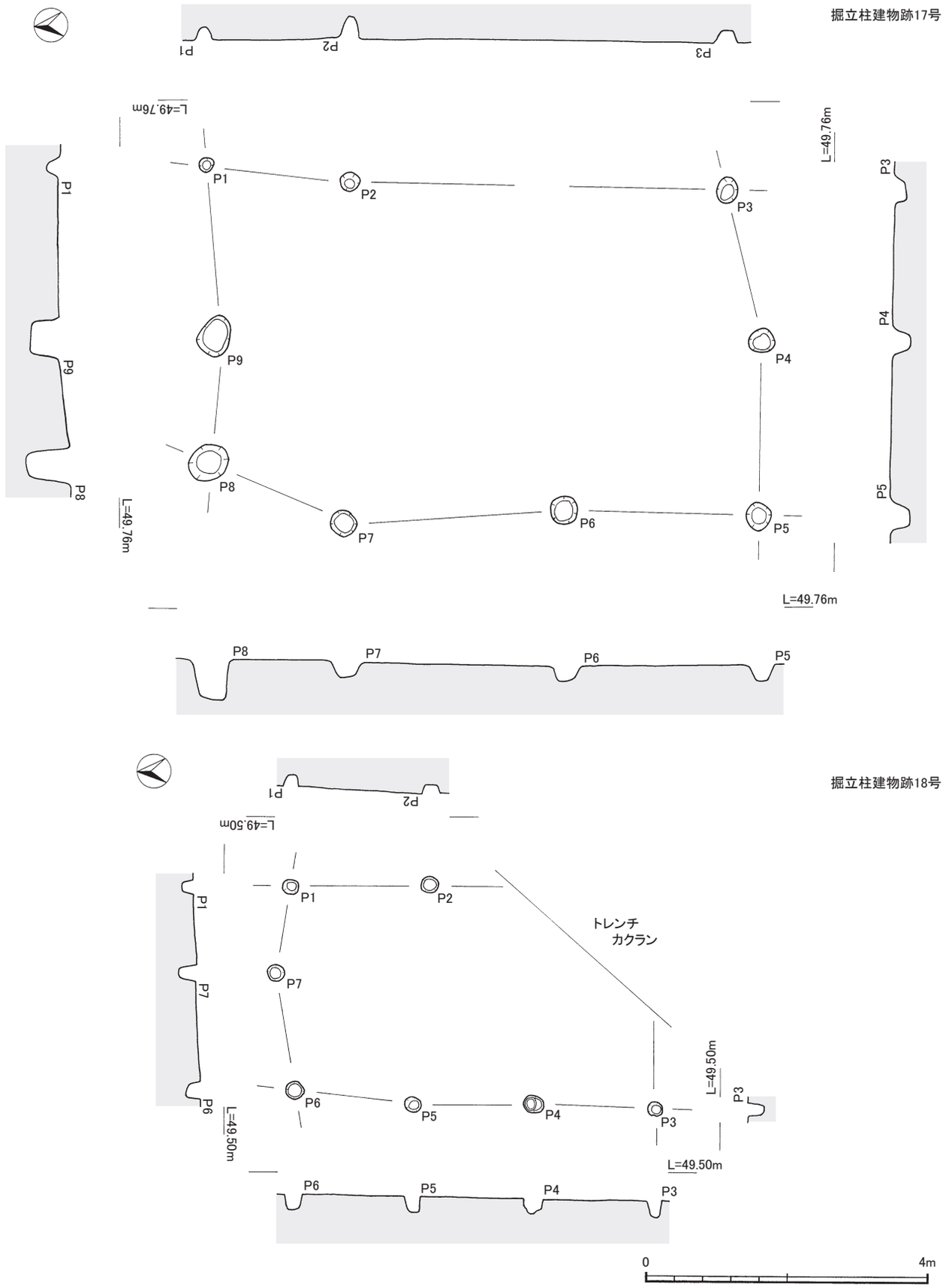
（ク）掘立柱建物跡23号

C－６区・D－６・７区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×２間で，主軸はN10° Wを示す。大きさは，3.0m×3.4mである。

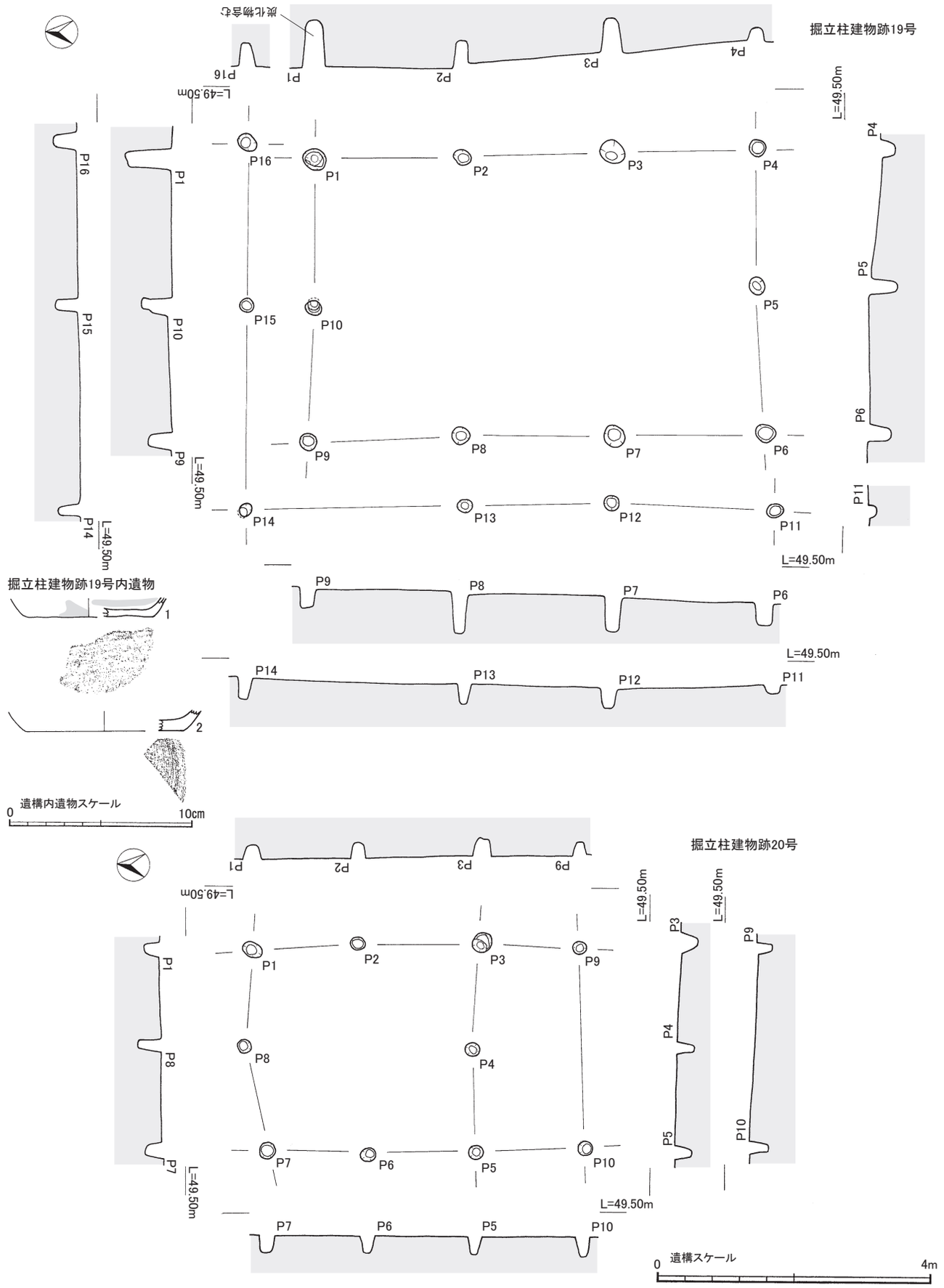
埋土内には，Ｐ６に土師器の坏が１点包含される。１は，糸切り底の坏である。外面の上・下段の２段に回転ナデが施されるため，腰部からの立ち上がりが体部中位



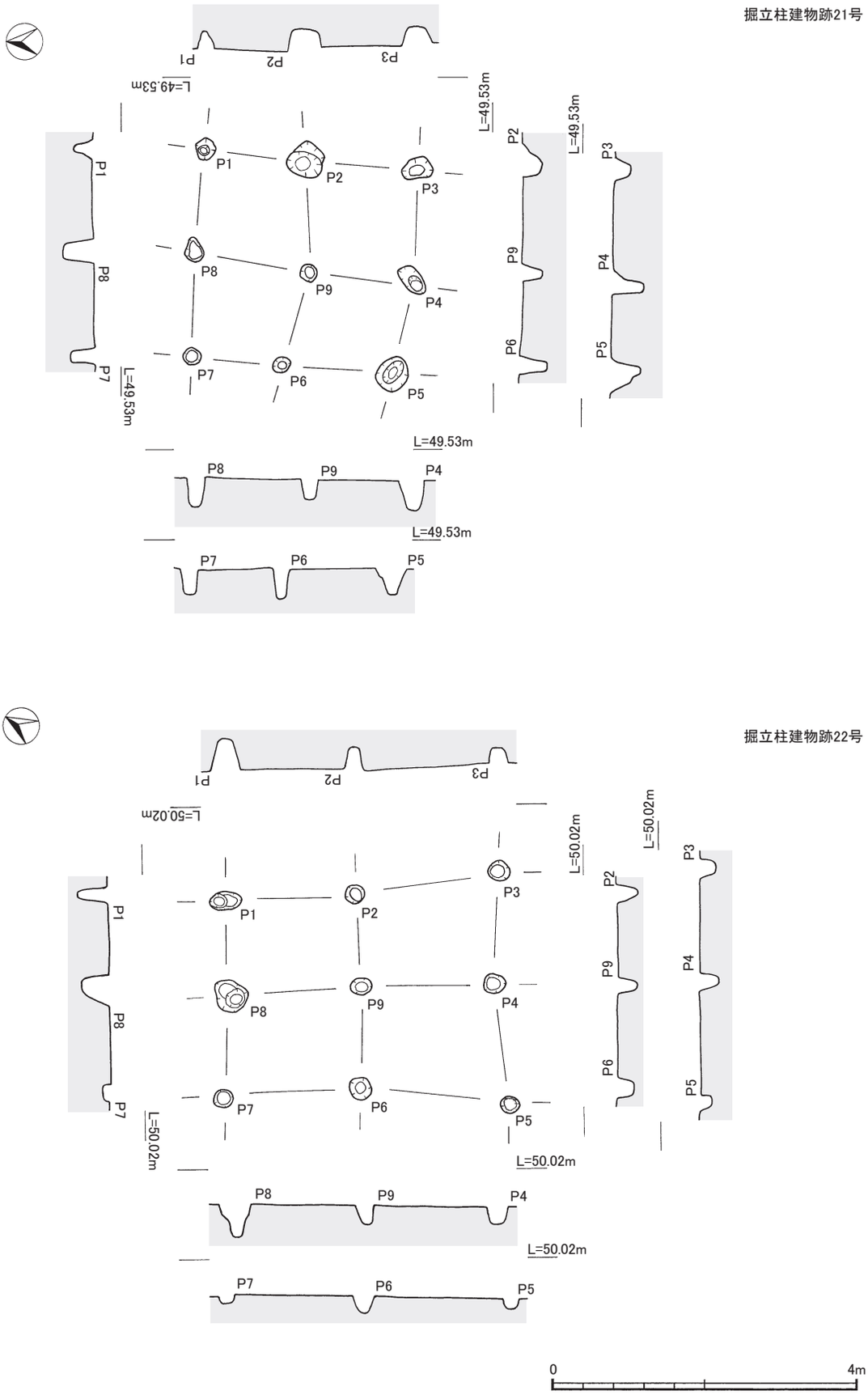
第133図　中世Ｂ群Ⅱ期掘立柱建物跡16号実測図



第134図　中世Ｂ群Ⅱ期掘立柱建物跡17・18号実測図



第135図　中世Ｂ群Ⅱ期掘立柱建物跡19・20号実測図



第136図　中世Ｂ群Ⅱ期掘立柱建物跡21・22号実測図

で屈曲を呈し，口縁部に至る。１／４程が残存する。復元口径12.0cm，復元底径8.3cm，器高2.6cmを測る。

② 墓跡

（ア）３号墓

Ｃ－７区のⅢa層上面で検出された。埋土①に黒褐色砂壌土（Ⅱb層）の混土が含まれることや埋土内に中世相当の遺物が包含されることから，設置時期は中世に比定される。平面観は，やや不定形的な隅丸長方形を呈し，大きさ0.97m×1.61mである。断面観は，床面から壁面に明瞭なエッジを成して，やや広がり気味に立ち上がる。最深で，55cmを測る。主軸は，N32° Wを示す。

床面から南壁面の立ち上がりに土塊が配置され，土塊を浅黄色粘性土で覆いステップが設置される。

床面に接する埋土はレンズ状堆積をせず，埋土③などブロック状を呈することから，埋め戻しによる堆積の可能性が高い。

埋土内には，遺物11点程が包含されるが，古代比定の土師器埦・坏・甕で占められ，前時期の紛れ込みと思われる。比較的大き目の破片が包含されていたことや，計志加里遺跡など，中世相当の墓跡に古代比定の遺物が包含される事例が散見されることから，紛れ込みの遺物であるが，報告することとした。

１は，土師器の埦である。高台が，「ハ」の字状に外に張り出す。畳付外面から腰部にかけて，指頭による回転ナデが巡らされ，凹状の段を成す。腰部から口縁部にかけて，直線的に斜立する。

２は，内黒土師器の埦であり，半分ほど残存する。本稿埦４類に分類される。高台が「ハ」の字状に外に張り出す。腰部からやや弯曲しながら立ち上がり，口縁部縁端で，僅かに端反り気味になる。内面は横ナデの後，見込みから口縁部にかけて菊花状に縦位のミガキをかける。高台の畳付に煤が付着する。

３は，内黒土師器の埦・坏である。本遺跡の内黒土師器の殆どが埦であり，埦の可能性が高い。腰部から口縁部にかけて，僅かに弯曲しながら立ち上がる。内面の体部調整では，作業面の割り付けを行い，一定の範囲を横位のミガキで調整した後，左側の範囲に作業面を移動して，ミガキ調整を行う。

４・５は，土師器の坏である。何れも底部は，円盤状の充実高台である。４の畳付外面には，指頭押圧が捉えられ，焼成前に器体を手にした時の痕跡と思われる。４は，体部から口縁部まで直線的に斜立する。外面には，僅かに煤が付着する。底部外面には，焼成前に切っ先の鋭いヘラ状工具による3.5cm長の線刻が１条施される。５は，畳付の縁端が外に張り出し，特段整形されない。底部外面に，僅かにヘラ状工具痕が，１条捉えられ，切り離し時に伴うものであろう。

６は，土師器の埦・坏の口縁部から体部片である。外面に，回転ナデによる沈線状の工具痕が並行する。

７は，土師器の甕・鉢の底部である。平底を呈し，底部の復元直径は7.0cm程である。底部外面に，竹管状の刺突連点が施される。

８は，土師甕の口縁部から胴部片である。口縁部は，大きく外反する。内面の胴部上位に，僅かな縦位のケズリが見て取れる。

９は，土師甕の胴部片である。胴部外面に，横位の２cm幅のヘラ工具痕がケズリ気味に施される。内面には，斜行するケズリが捉えられる。

10も，土師甕の胴部片である。内面に斜行するナデ気味のケズリが捉えられる。

11は，「L」字状に折れる鉄釘片である。鉄釘は，１点のみの出土である。木棺墓の可能性を示すが，本遺跡では遺構外にも鉄釘が出土するので断定はできない。

（６）掘立柱建物跡Ｂ群　Ⅲ期

① 掘立柱建物跡

（ア）掘立柱建物跡24号

Ｃ－７区，Ｄ－６・７区のⅢa層上面で検出された。規格は３間×４間で，主軸はN ６° Ｅを示す。大きさは，5.9m×8.5mである。柱穴の埋土内に，遺物は包含されない。

（イ）掘立柱建物跡25号

Ｃ・Ｄ－６区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，3.0m×5.0mである。

埋土内には，Ｐ３に土師器片２点（内黒土師器１点，甕１点），Ｐ４に土師器１点（器種等不明），Ｐ８に土師器１点，Ｐ９に内黒土師器１点が包含されるが，古代の紛れ込みと判断される上，小片のため，図化しなかった。

（７）掘立柱建物跡Ｂ群 その他

① 土坑

（ア）土坑90号

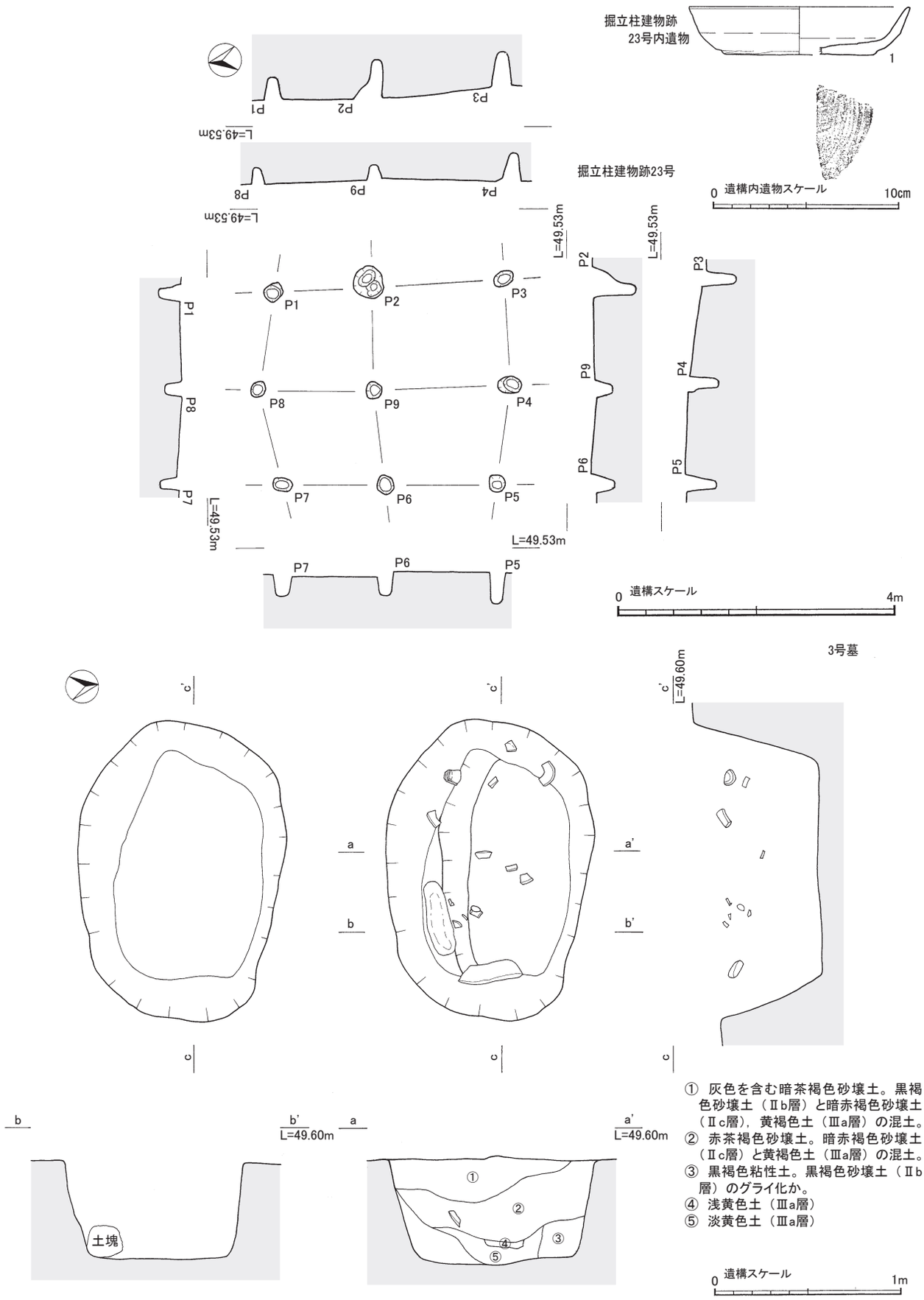
埋土内遺物１は，鏑蓮弁を施し，鏑の形態から大宰府分類青磁Ⅱb類：Ｅ期と判断される。

（イ）土坑106号

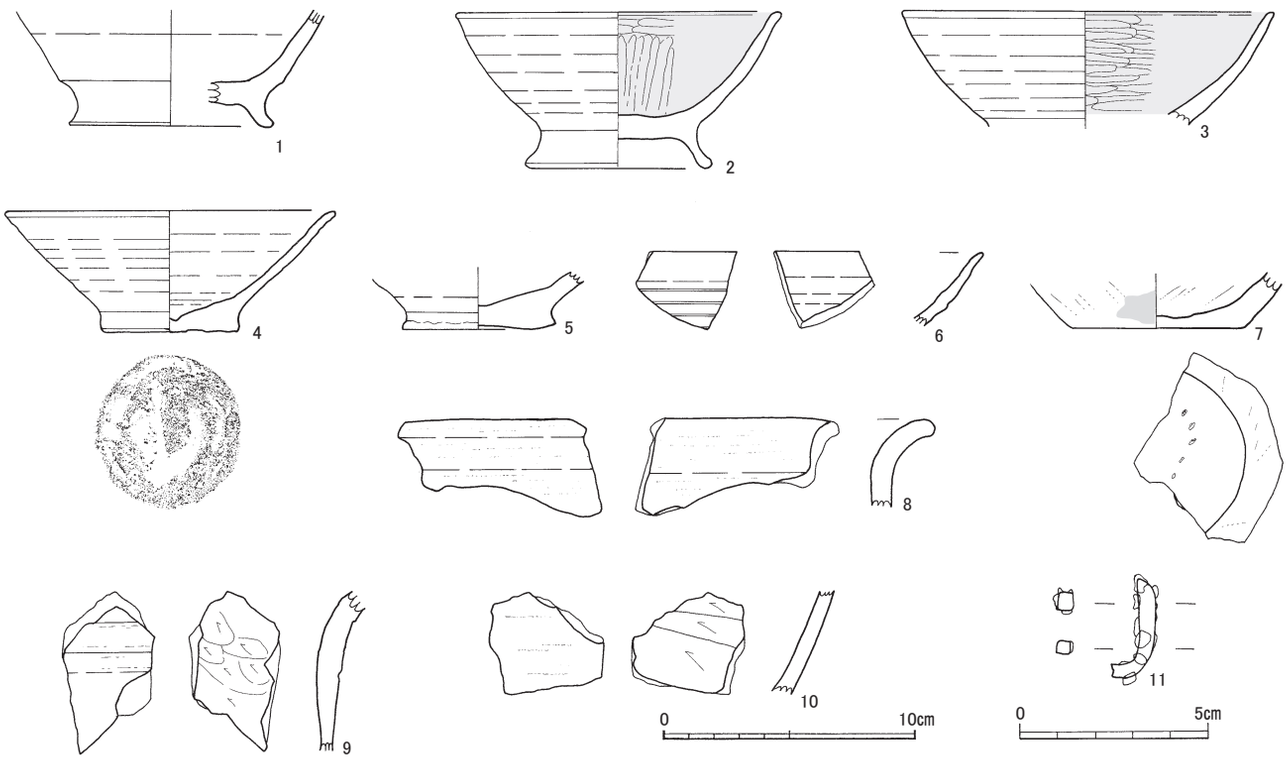
埋土内に炭化種実が含まれており，放射性炭素年代測定を実施した。その結果，745±20年BP（AD1225～1285年）の年代値が得られた。青磁や白磁等出土遺物の年代にほぼ合致する。

（ウ）土坑119号

埋土内遺物１は，鏑蓮弁文を有す龍泉窯系青磁碗Ⅱb



第137図　中世Ｂ群Ⅱ期掘立柱建物跡23号・３号墓実測図



第138図　中世Ｂ群Ⅱ期３号墓出土遺物実測図

類：Ｅ期の体部片である。その他には，土師甕片1点，土師器埦（坏）片３点，糸切り底の坏片1点，粘土塊1点が出土した。

（エ）土坑138号

埋土内には，土師甕２点，須恵器１点が含まれる。内，１点を図化した。１は，須恵器の壺の胴部片である。外面に斜行する平行文タタキを施し，器体を持つ際の指頭痕か斜行するナデ状に捉えられる。内面には，回転ナデが横走する。タタキによる胎土の空気抜けが不十分で，胎土に気泡が内包され，一部に膨らみが見られる。

（オ）土坑156号

埋土内遺物１は，糸切り底の皿である。復元口径8.5cm，復元底径6.6cm，器高1.7cmを測る。底部から腰部にかけて，ナデ等による整形を施さず，底部縁端が，腰部から僅かに張り出す。内外面ともに回転ナデを施すが，内面は回転ナデの後，見込みを左右（上下）方向に指頭によりナデを施す。

（カ）土坑158号

埋土内には，土師器の体部片が１点含まれる。小片の為，図化はしていない。これは，外面に格子目文タタキを施し，内面に縦位のケズリを施す。須恵器と土師器の技法の折衷である（P262参照）。焼成は酸化炎焼成であり，外面に煤が付着する。

（キ）土坑161号

埋土内には，土師埦（坏）１点，土師甕２点が包含される。１は，土師器の甕である。格子目文タタキを外面に施す。内面には，斜位のケズリが施される。外面に格子目文，内面にケズリを施す資料は，本遺跡で数点確認される（P262参照）。煎熬土器の可能性がある。

（ク）土坑175号

埋土内には，土師皿の底部片が１点含まれる。１は，糸切り離し痕を有し，復元底径は6.8cmを測る。

（ケ）土坑179号

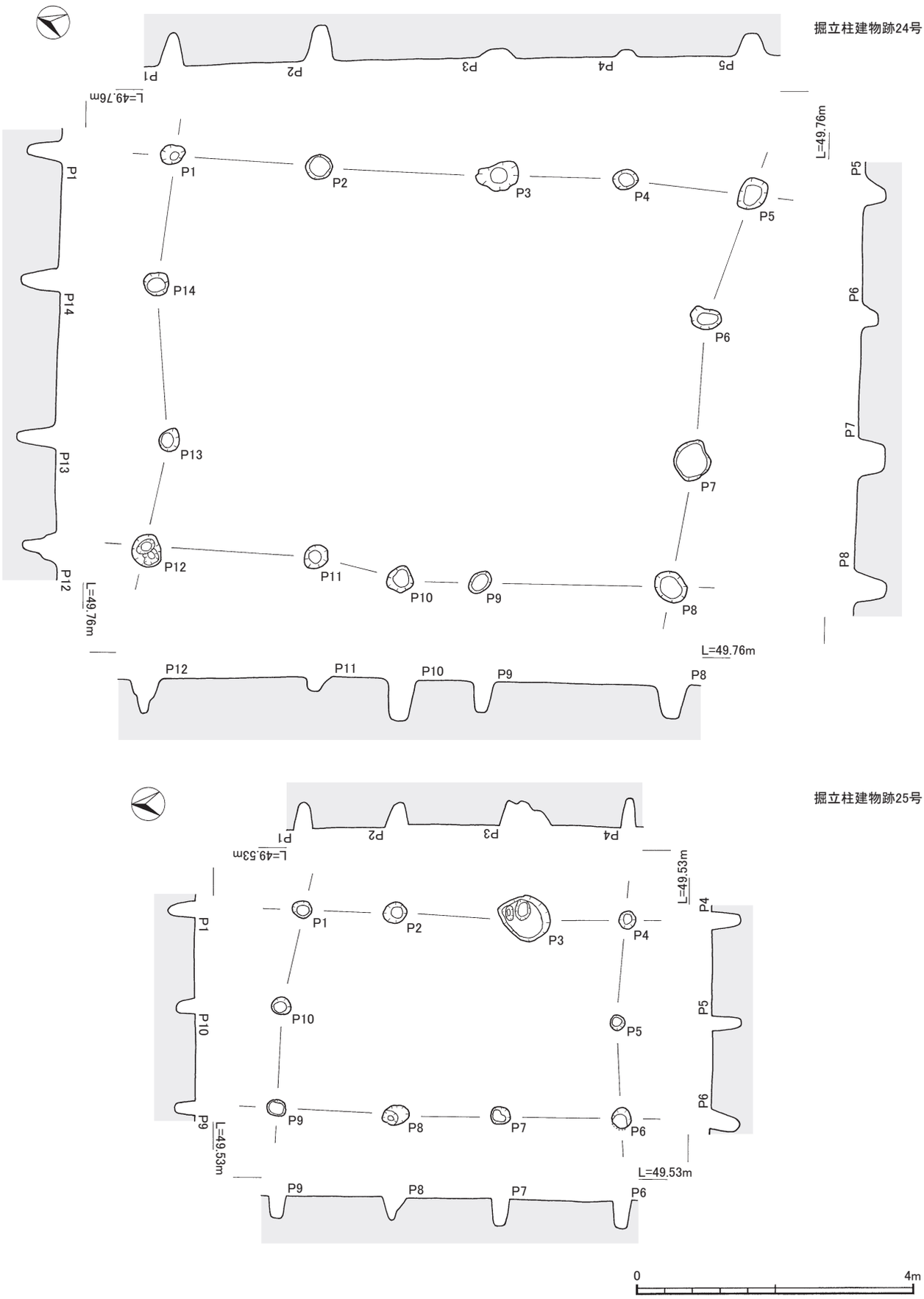
埋土内には，内外面に黒色を呈する黒色Ａ類土器が１点含まれる。１は，古代相当遺物であるが，本遺跡唯一の資料であるので，掲載した。

（コ）土坑181号

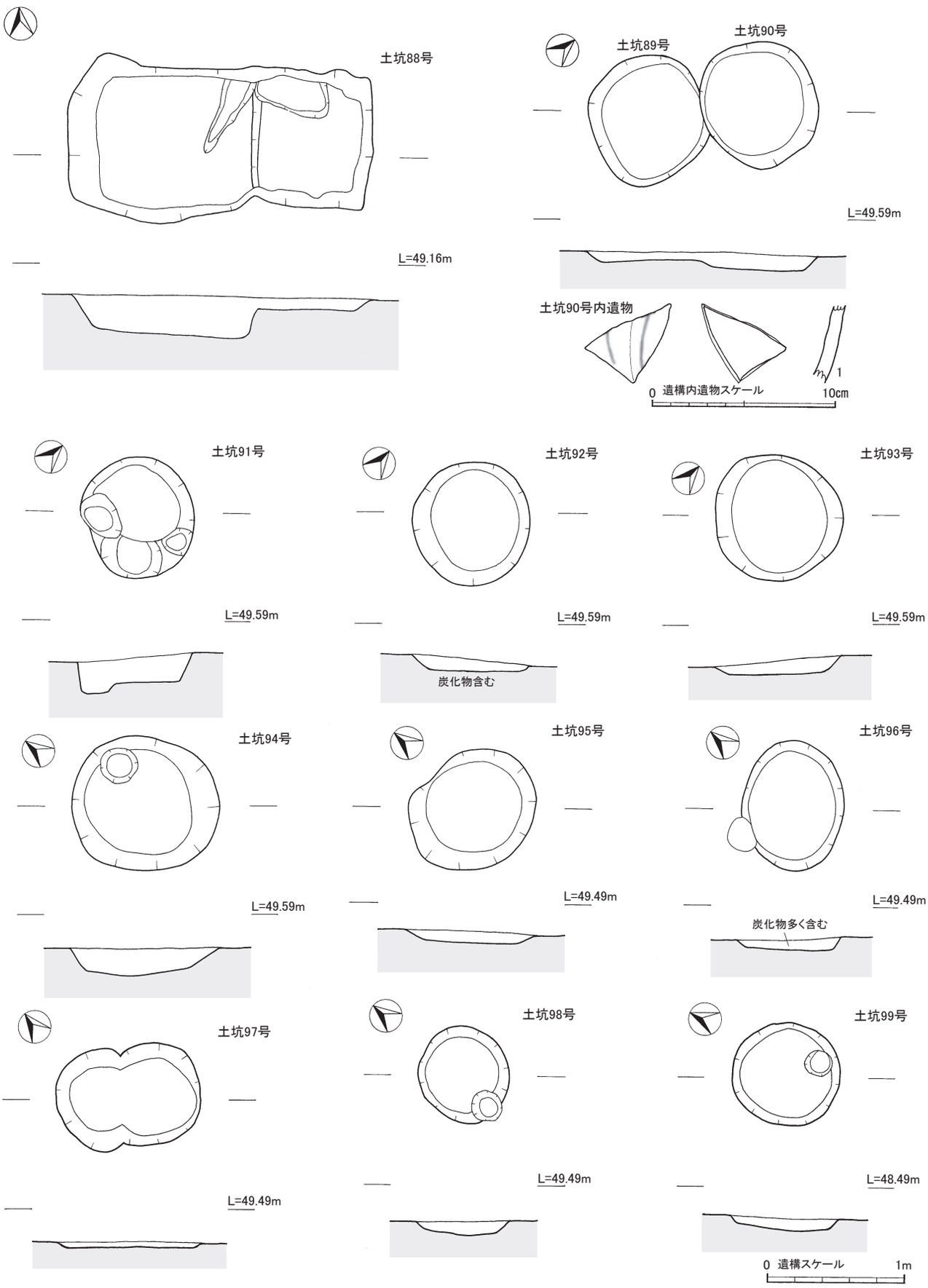
埋土内遺物１は，瓦質土器で，樺万丈系の片口の擂鉢である。直線的に斜め上方へのびる形態を呈し，外面に櫛目状タタキ痕，内面に斜方向の櫛目状ナデを施す。

（サ）土坑209号

埋土内に炭化物が含まれ，放射性炭素年代測定を実施した。その結果，1160±30yrBP（782 ～ 945calAD）の



第139図　中世B群Ⅲ期掘立柱建物跡24・25号実測図



第140図　中世B群土坑88 ～ 99号実測図

年代値が得られた。本遺構は，中世比定であるが，分析結果は古代であり，相違が認められる。本遺跡には，古代比定の掘立柱建物跡が複数検出されたことから，古代の柱材等の紛れ込みの可能性で考えたい。

（シ）土坑210号

埋土内には，藁等スサを練り込んだと思われる粘土塊が１点含まれる。竈や土壁等に使われたと思われる。

（ス）土坑212号

埋土内には，土師坏が３点含まれる。１は復元口径7.6cm，２は復元口径9.6cm，３は復元口径11.0cmを測る。底部が残存しないため，ヘラ切り底の土師器の可能性もあるが，胎土や色調から中世の可能性を考え図化した。

② 柱穴

（ア）柱穴518号

埋土中に，土錘が１点含まれる。１は両口孔の縁端に剥離が見られる。右側面が，意図的に平坦に磨り潰される。

（イ）柱穴619号

完形品の腰刀が１点出土した。１は，茎部と身の境が明瞭であり，刃部幅の広いタイプである。全長21.5cmである。祭祀に伴う可能性がある。

（ウ）柱穴621号

埋土内遺物１は，糸切り底の土師皿である。内面には，僅かだが，煤の付着が見られる。

（エ）柱穴827号

埋土内遺物１は，糸切り底の土師皿である。底径が6.4cmであり，体部が外反気味に立ち上がることから，土師皿1c類に比定されるものである。

（オ）柱穴851号

埋土内遺物１は，口禿口縁の白磁皿である。口縁部の内外面ともに釉剥ぎを施す。大宰府分類白磁皿Ⅸ類：Ｆ期に比定されるものである。

（８）掘立柱建物跡Ｃ群　Ⅱ期

① 掘立柱建物跡

（ア）掘立柱建物跡26号

Ｅ－８・９区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN20° Ｅを示す。大きさは，4.2m×6.3mである。埋土内には，遺物は包含されない。

（イ）掘立柱建物跡27号

Ｆ－８・９区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN12° Ｅを示す。大きさは，2.9m×5.6mである。埋土内には，遺物は包含されない。

（ウ）掘立柱建物跡28号

Ｄ・Ｅ－７区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はＮ ０° Ｗを示す。大きさは，4.2m×（6.0）mである。

埋土内遺物は，以下の２点である。１は，口禿口縁の白磁皿で，大宰府分類白磁皿Ⅸ類：Ｆ期である。

２は，Ｐ３内遺物である。瓦質土器の擂鉢である。外面には，弧状の縦位のハケメが横方向に帯状に施される。横方向の帯状ハケメ間には，１cm幅程度の間隙が空き，ナデが施される。また，体部上位には，指頭押圧が密に入る。腰部には，横位の工具ナデが条線状に巡る。内面の体部中位には斜位のハケメが施され，体部下位には横位のハケメが施される。

なお，Ｐ３に瓦質土器が１点，Ｐ５・６に，土師甕が包含されたが，小片のため図化できなかった。

② 墓跡

（ア）４号墓

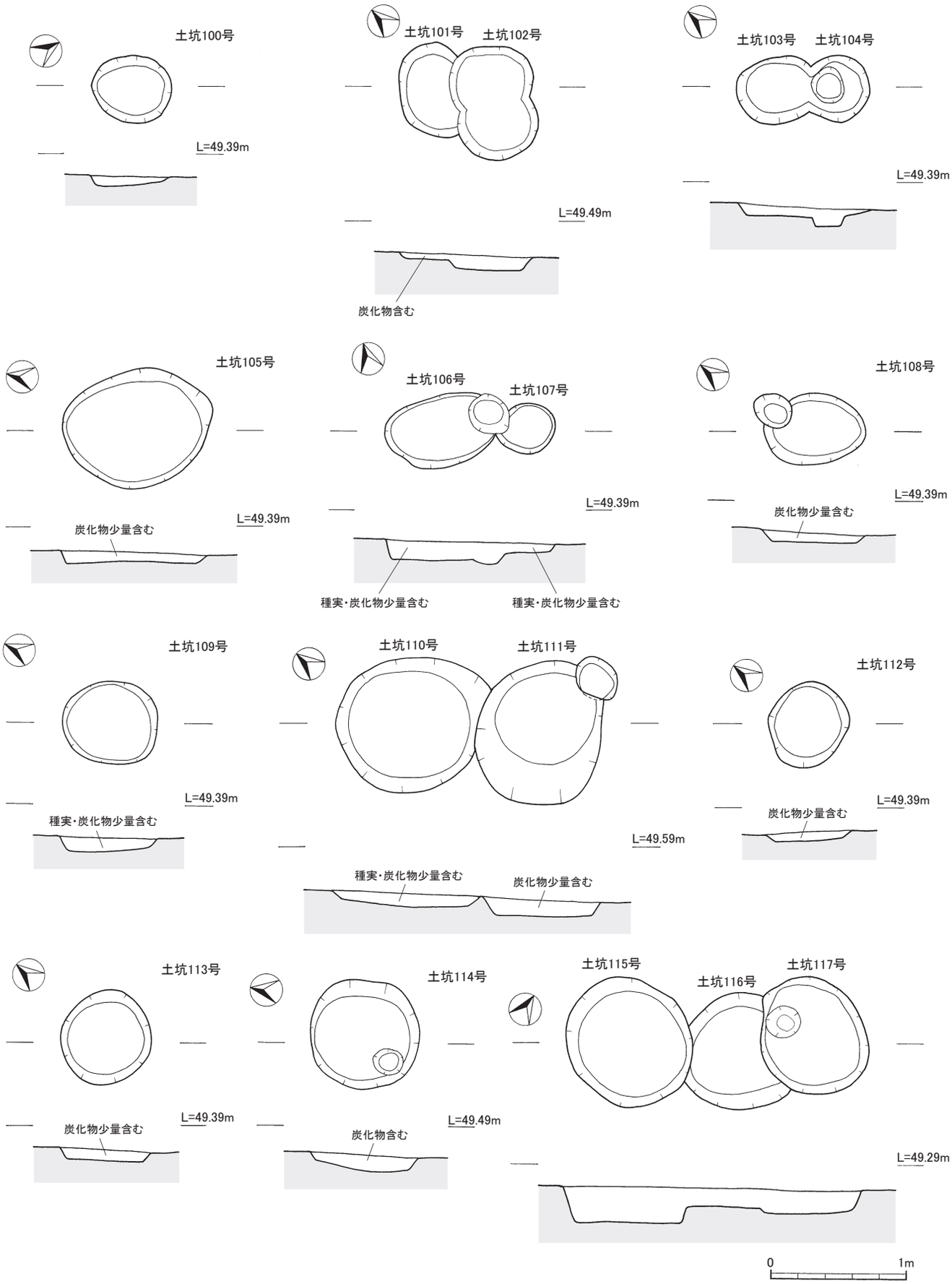
Ｆ－８区のⅢa層上面で検出された。埋土に，黒褐色砂壌土（Ⅱb層）が主として含まれる。近世以降の土壌中に含まれる浮岩の小礫や褐灰色（Ⅱa層）が確認できないことから中世の時期で捉えた。

平面観は，大小二つの隅丸方形が連結した不定形な瓢箪状にも捉えうる。大きさは0.76m×1.16mである。

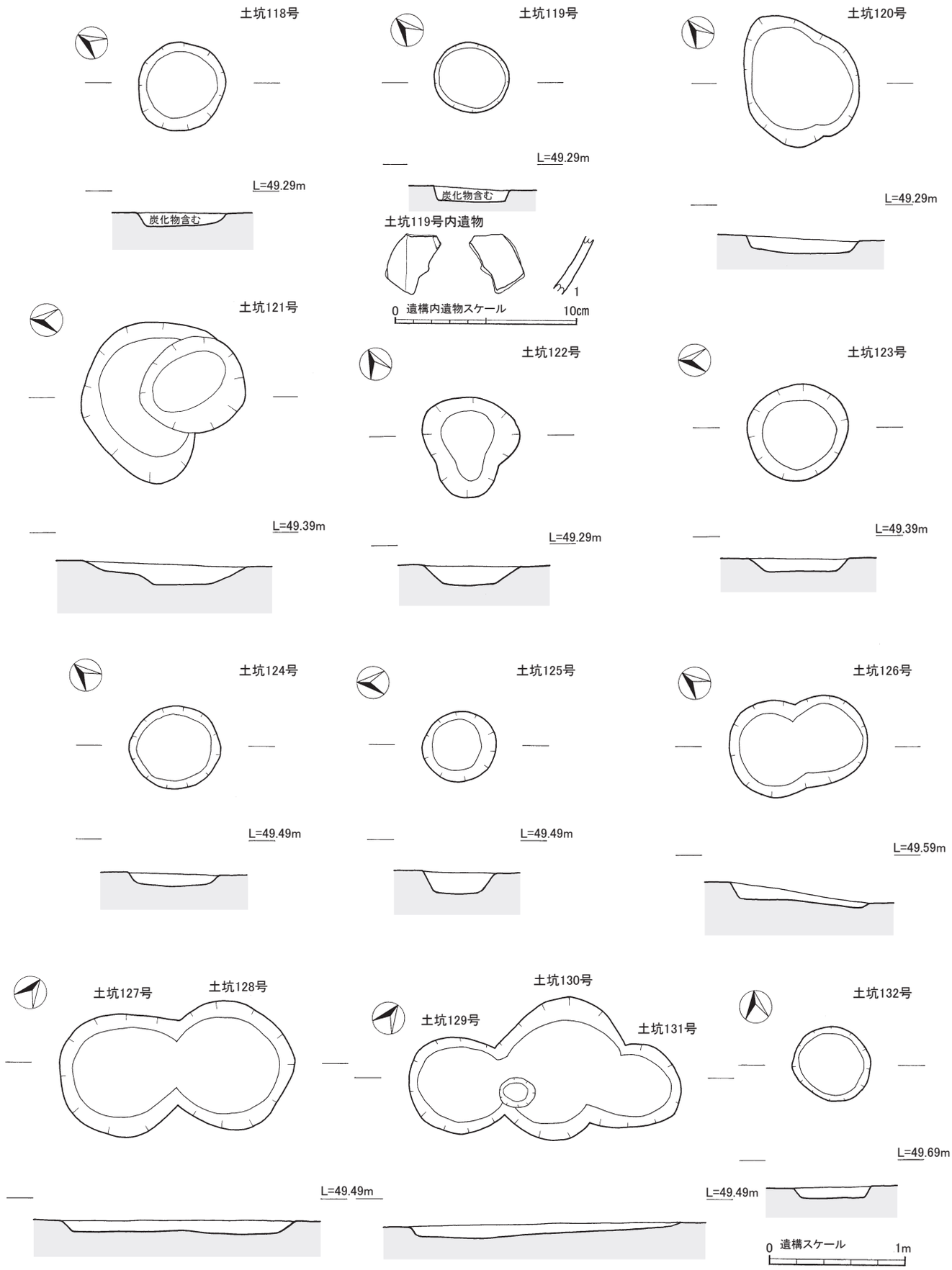
平面観が大小二つの方形に二分割されるように，断面観でも，北側と南側で特徴を異にする。北側壁面が床面から壁面に明瞭なエッジを成して斜立する一方，南側壁面は，エッジが鈍く立ち上がり直立する。また，北側の床面が平坦であるのに対して，南側は凹凸が捉えられる。深さは，北側が最深で31cm，南側が最深32cmを測る。主軸は，Ｎ ０° Ｗを示す。

本遺構には骨片等は検出されないが，土坑の直上に溶結凝灰岩の敷石が載り，その上に同じく溶結凝灰岩製の石塔が載ることから，墓跡であると考えられる。埋土のやや上位辺りに９本の鉄製釘が包含されることから，土坑内に木棺が埋納された可能性を見る。また，鉄製釘が所在する位置が，木棺を想定した場合の木棺の四隅の位置に概ね合致しており，断面観で土坑の上位に位置していることと併せて，ほぼ原位置を留めている可能性を示す。傍証として，鉄製釘や平面観から捉えられる本遺構の木棺の長軸長×短軸長の大きさは，当該期に比定される木棺の類例の規模と概ね符合する。

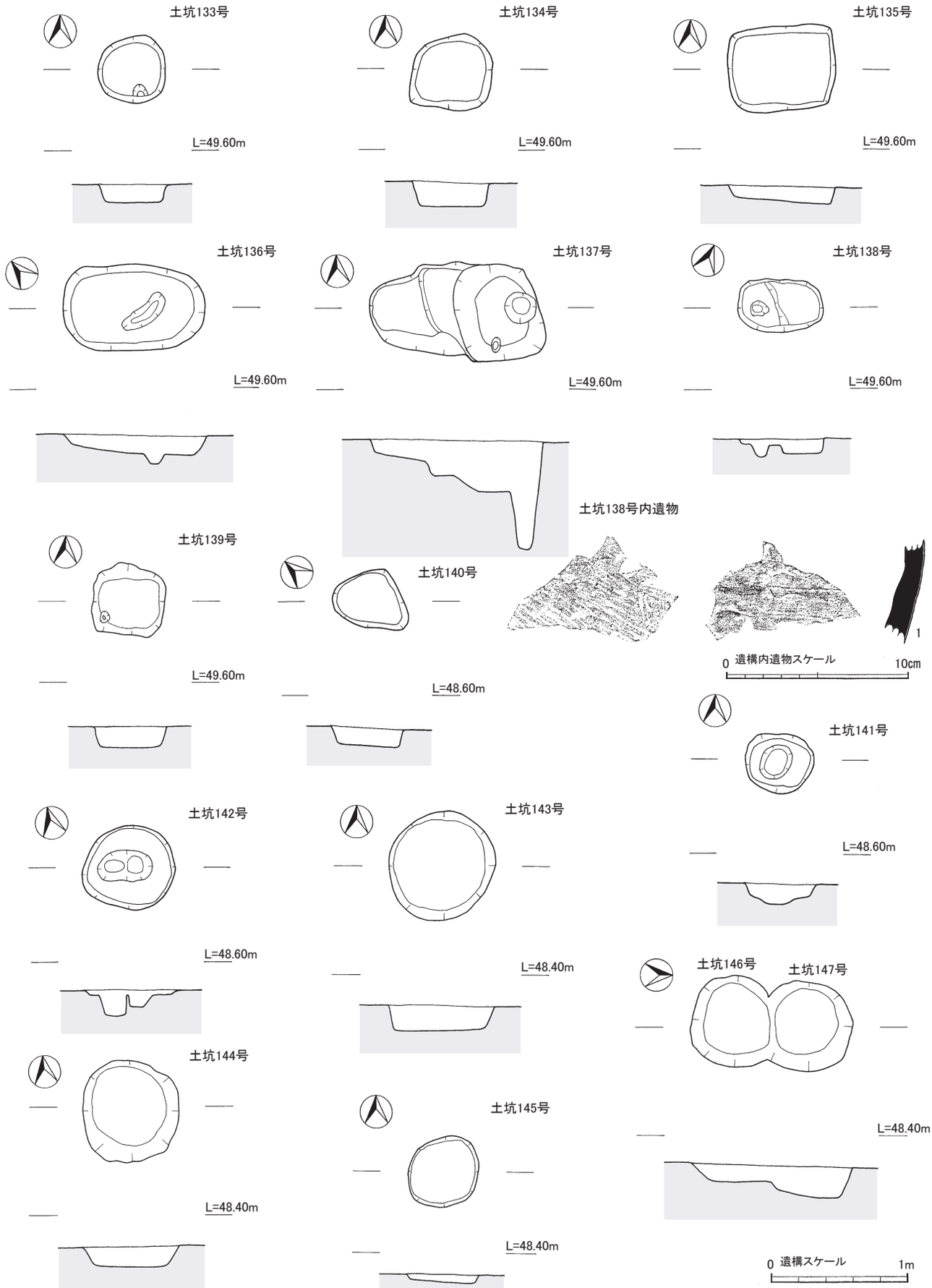
本遺構の平面観は，南北二つの方形が連結する状況が



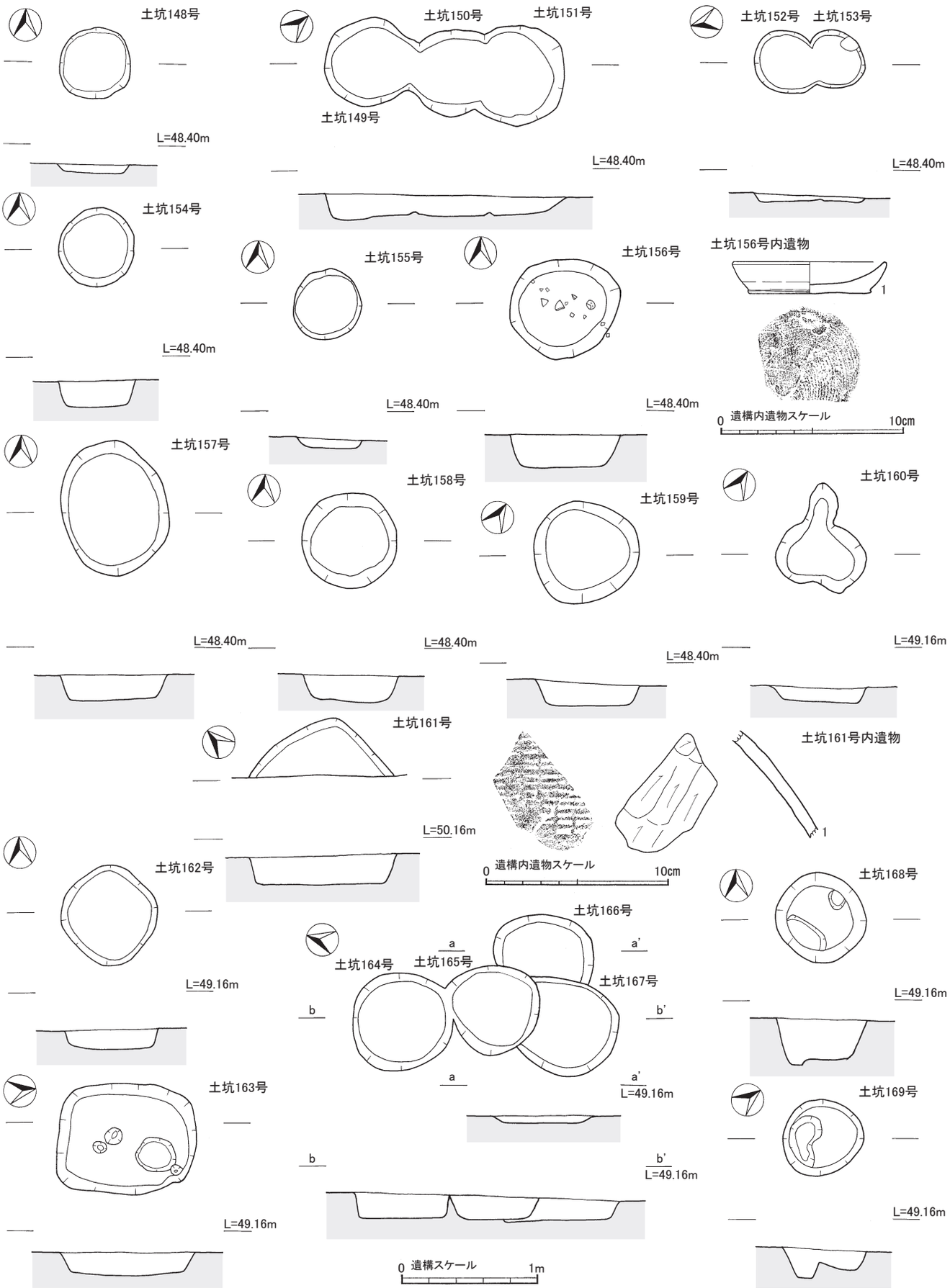
第141図　中世B群土坑100 ～ 117号実測図



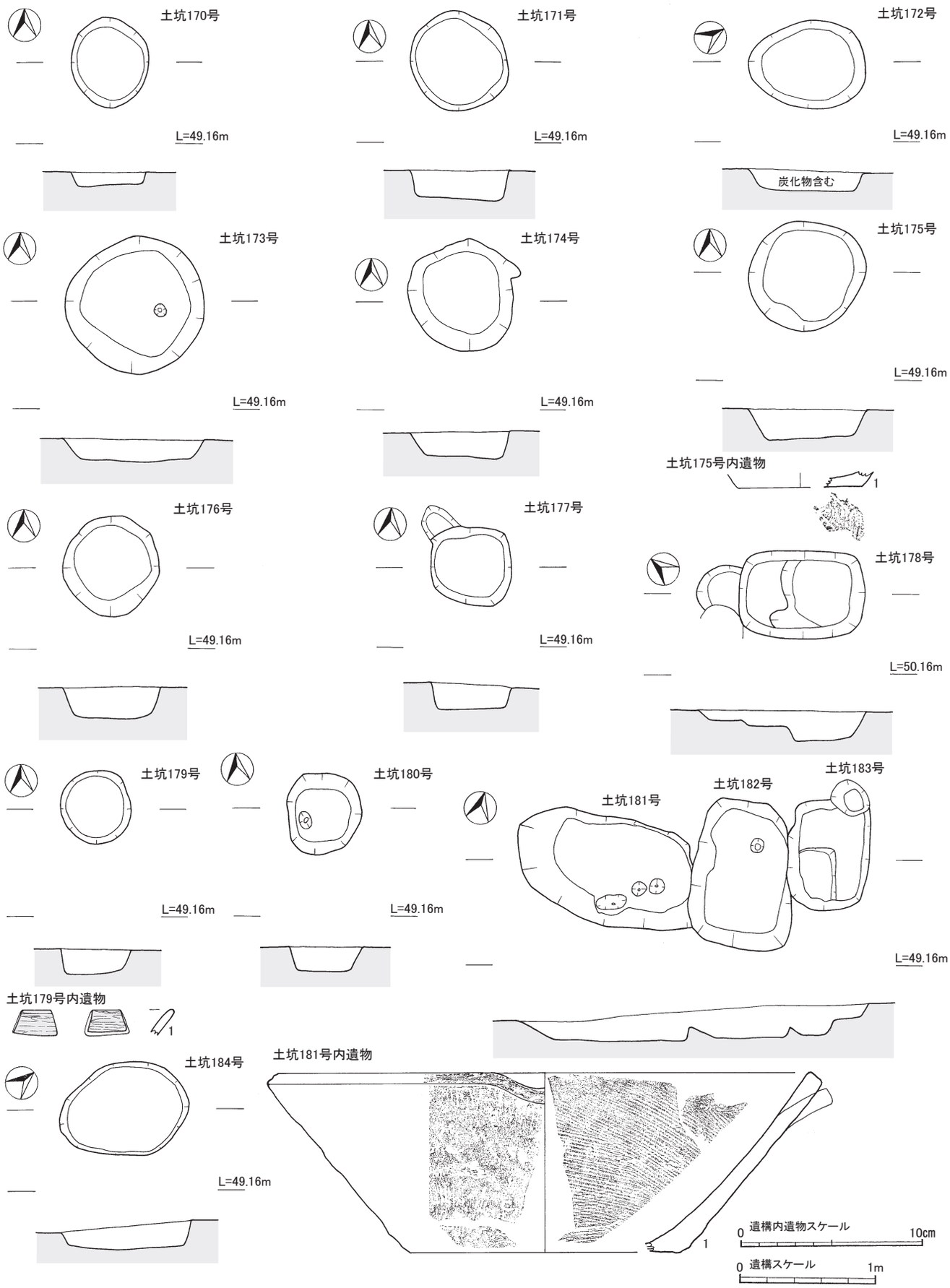
第142図　中世B群土坑118 ～ 132号実測図



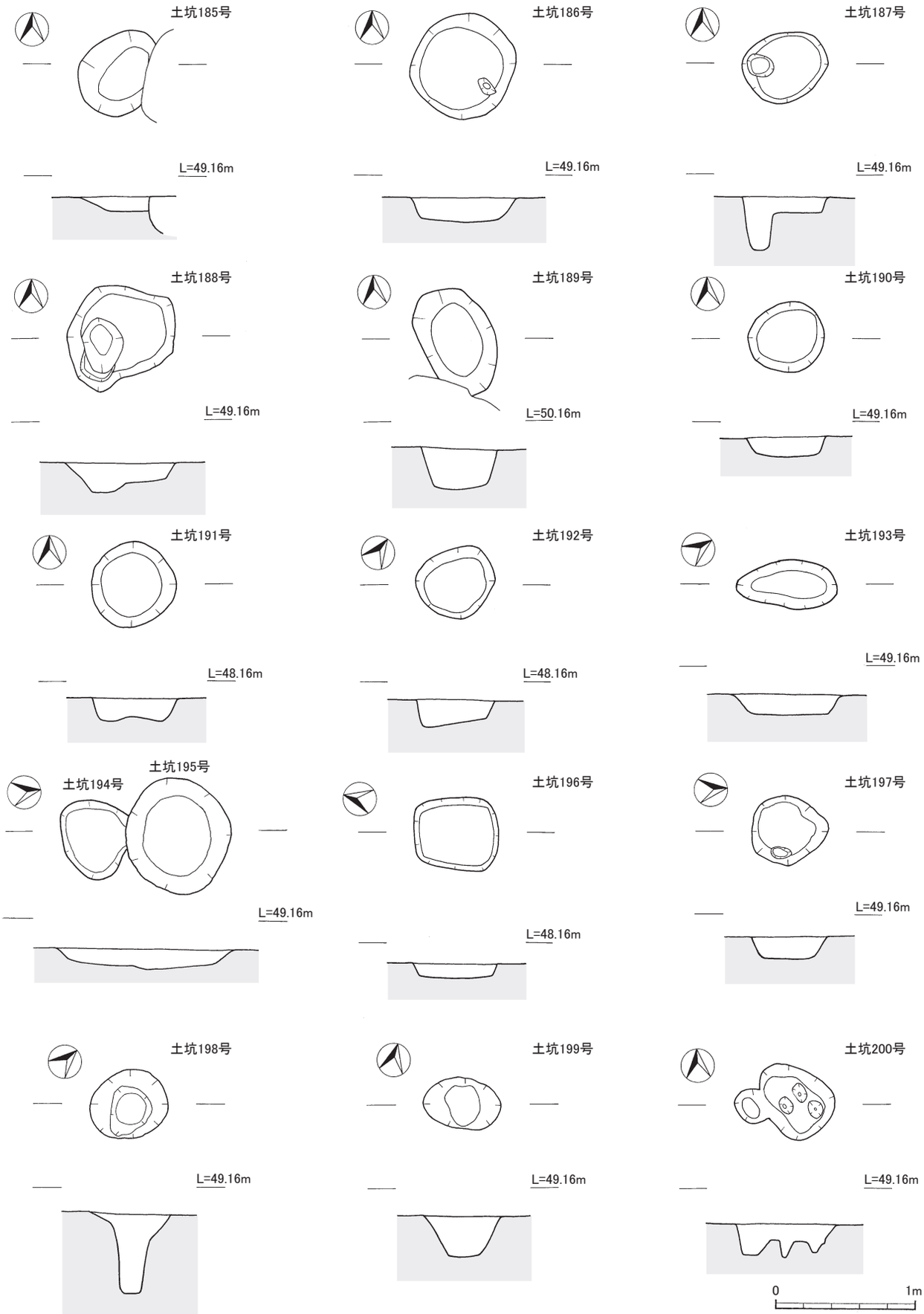
第143図　中世B群土坑133 ～ 147号実測図



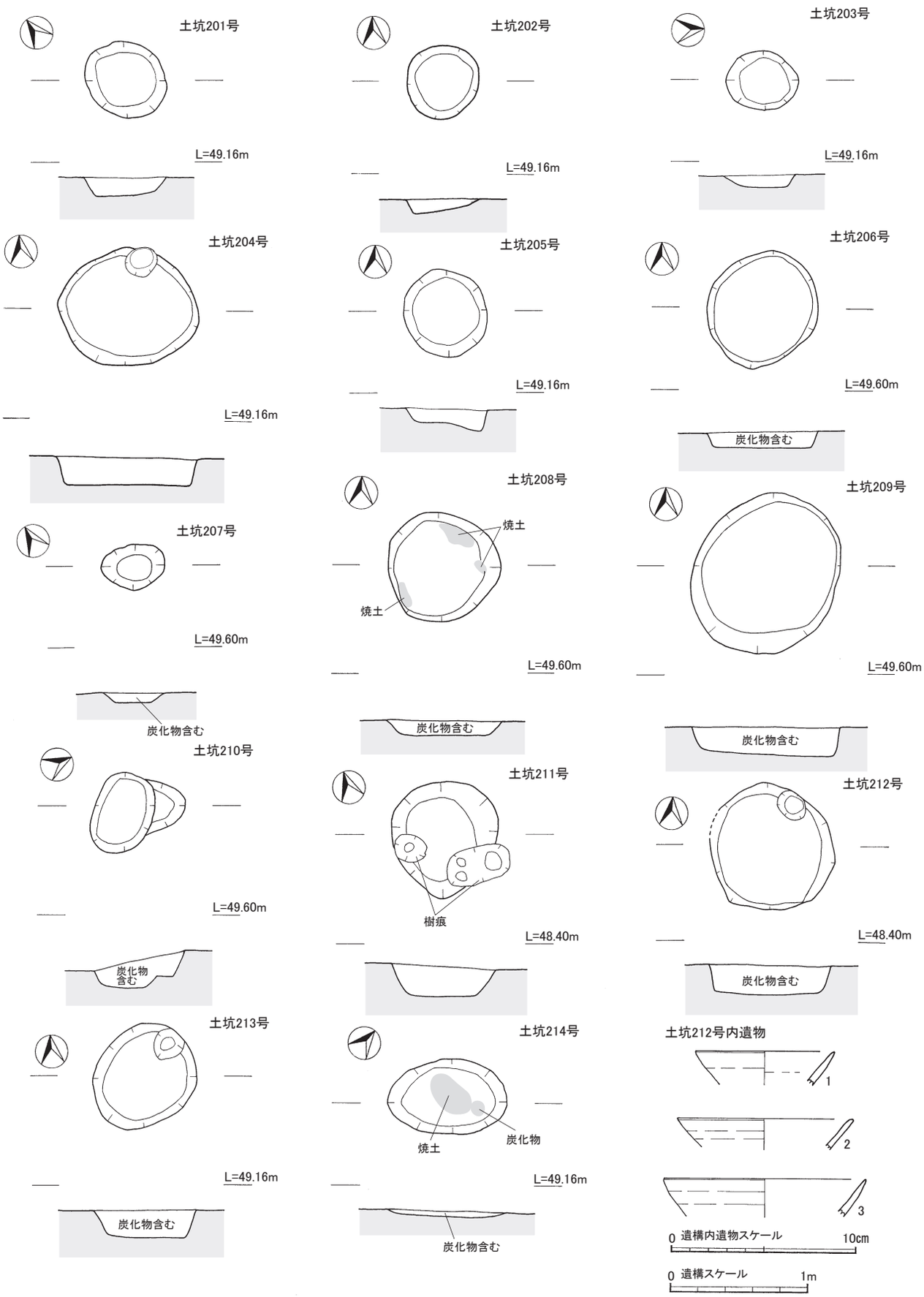
第144図　中世B群土坑148 ～ 169号実測図



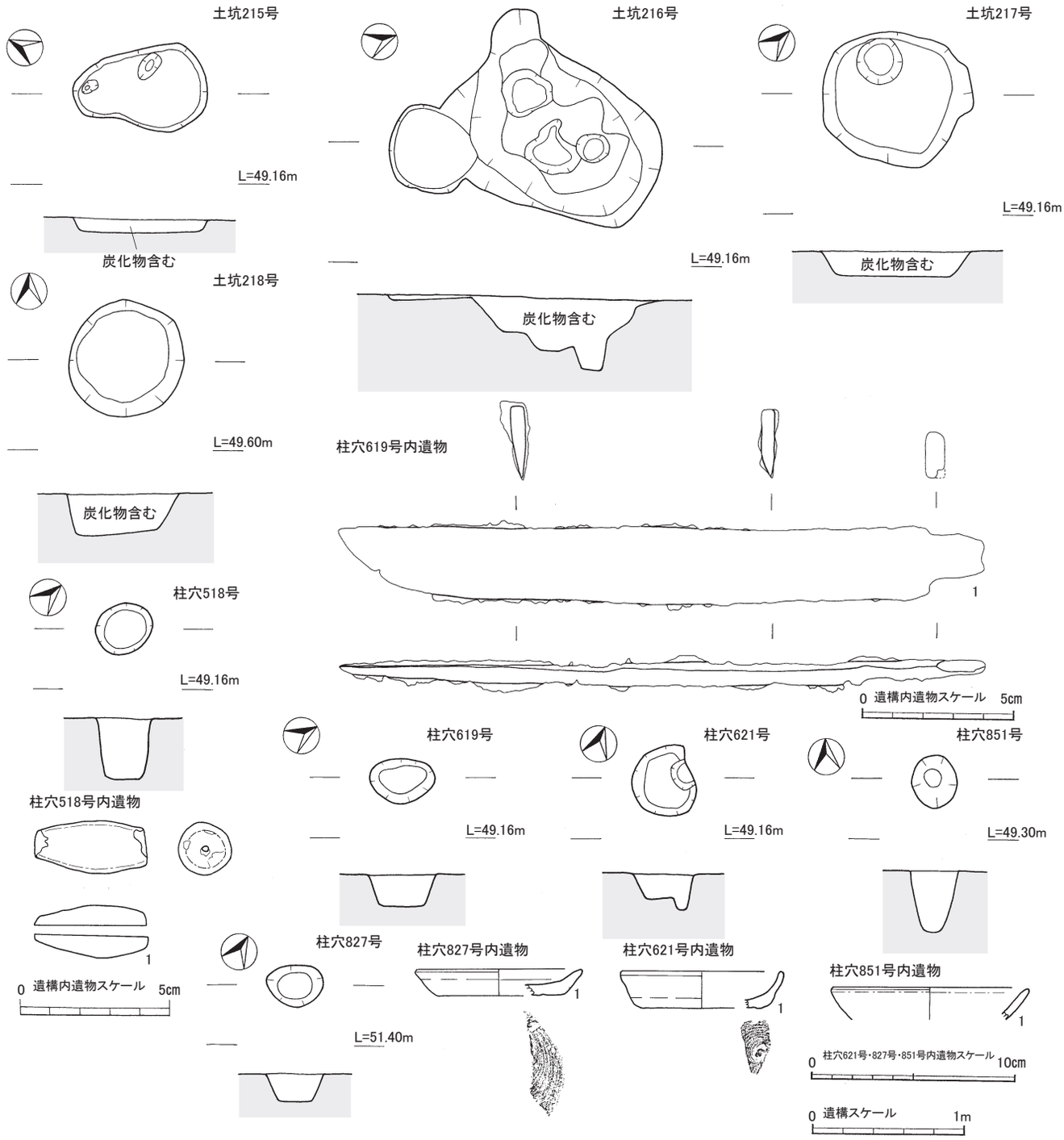
第145図　中世B群土坑170 ～ 184号実測図



第146図　中世B群土坑185 ～ 200号実測図



第147図　中世B群土坑201 ～ 214号実測図

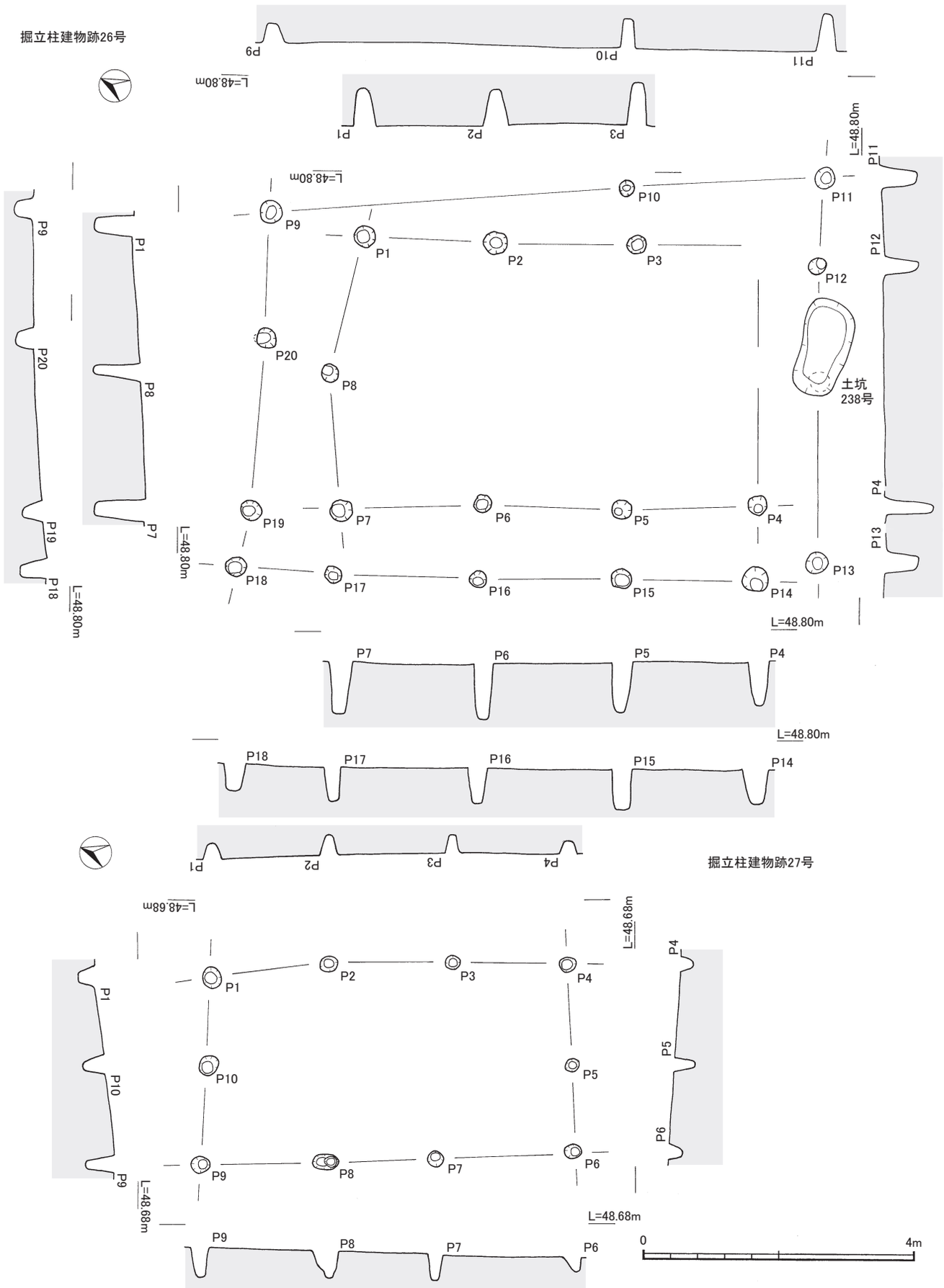


第148図　中世B群土坑215～218号・柱穴実測図

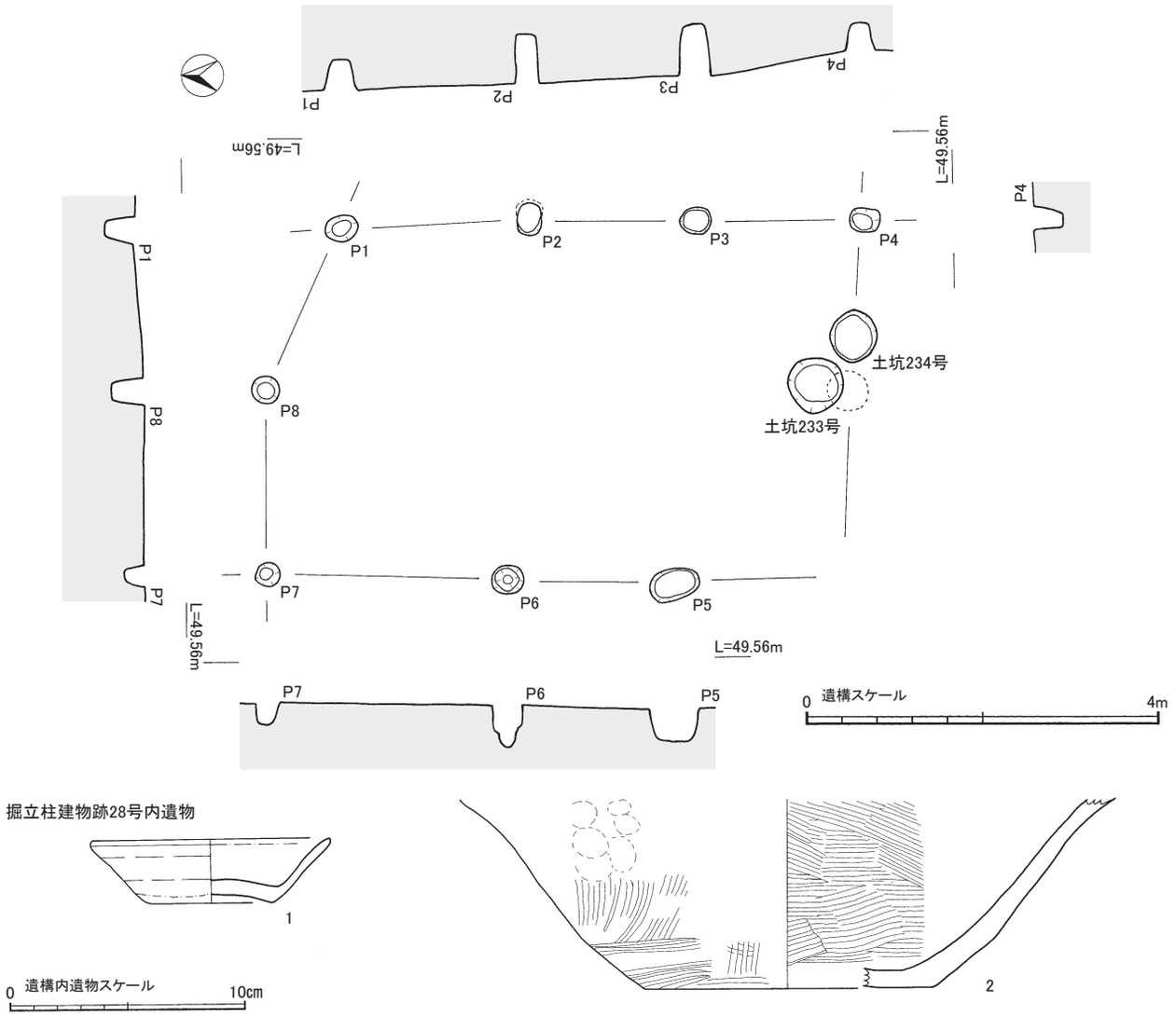
捉えられるが，平面上の連結箇所に合致して，埋土も北側の①～③，⑨～⑮と南側の④～⑧に二分される。埋土が二分される境界直下の床面も，平坦な床面を呈する北側と床面が凹凸を呈する南側とに二分される。埋土を更に細分すると，北側は，①～③，⑨～⑮に二分され，南側は④～⑦と⑧に二分され，計四分に細分され，複雑な様相を呈する。④～⑦は木棺内に陥没した土層状況を示すと想定される。これを，①～③が切ることから，木棺陥没後に土坑の半分強を掘り返していると推察される。

さらに，①～③を⑨～⑬が切っており，その形態は，一辺15cm程の四面を有する立方体状を呈することから，納骨用の木箱を埋葬して埋め戻した可能性を見る。本遺構の埋土状況からは，木棺埋葬→陥没→再葬（木箱埋葬）→石塔建立の一連の過程が捉えられる。

石塔は，下位に溶結凝灰岩の扁平な礫を平坦に敷き詰め，その上に１枚の枕状（上面が凸レンズ状に膨らみ，下面は平坦を呈する）に成形された地輪を載せる。その上に，上・下面が平面を呈する球状の水輪が載る。



第149図　中世C群Ⅱ期掘立柱建物跡26・27号実測図



第150図　中世C群Ⅱ期掘立柱建物跡28号実測図

水輪の四側面には梵字が墨書されるが，剥離等が激しく，文字は判読不可能であった。水輪の上面縁端には「L」字状のホゾが巡らされる。

水輪の上に載るべき火輪等は載らず，また周囲にも確認されなかった。

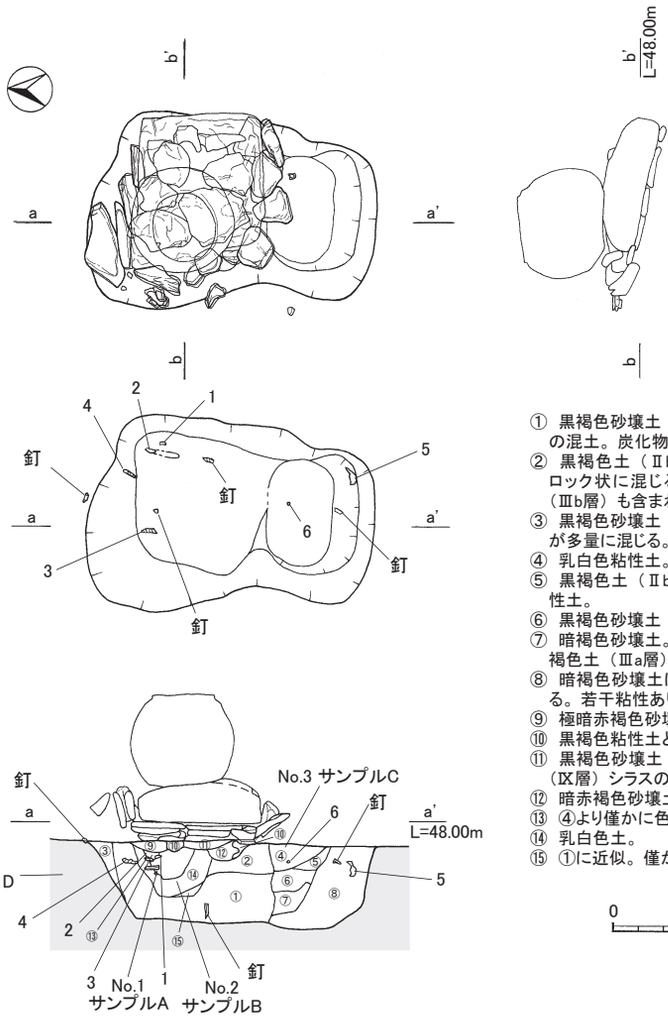
なお，地輪の器面に梵字は確認されないが，器面の摩耗や剥離が激しく，本来は地輪同様に墨書で記載されていたと推察される。

地輪・水輪の器面には，下面を含めてノミ状の剥離が無数に入り，大きな欠損状の剥離も見られる。ノミ状の剥離や欠損状剥離の起因については，後世，本来の位置から離れて所在し，畑作の作業等に伴い鍬や鋤により負傷したと思われる。石塔の形態や意味を知る者によって再度据え付け直された可能性があると見る。なお，E・F－９区等においては，本遺跡の掘立柱建物跡群より後に形成されたと判断される畝溝が検出されており，掘立柱建物放置後，本遺跡は畑として利用されたと考えられる。　石塔の下位に敷き詰めた礫の配置が凹レンズ状に中央が凹む状況が捉えられるが，石塔設置後の地面の沈み込みによるものか，元々中央を凹ませて設置したのか何れかの可能性が考えられる。地面の沈み込みによるものと仮定した場合，最外端に所在する礫の迫り上がりの上端が，本来の設置面と判断される。

小片のため図化できなかったが，石塔の礫の間隙からは，口禿の白磁の口縁部片が出土した。大宰府分類の白磁Ⅲ区類：Ｆ期である。

埋土内に包含された鉄製の釘等の内，以下の６点を図化した。１～５は，鉄製の釘である。一部の釘には，横筋状の繊維が捉えられる木片が付着する。木棺に伴う釘及び木棺の木片を示すと思われ，釘の頭部から木片下端までの幅が２cm程と一定しており，それが木棺の厚さと推察される。

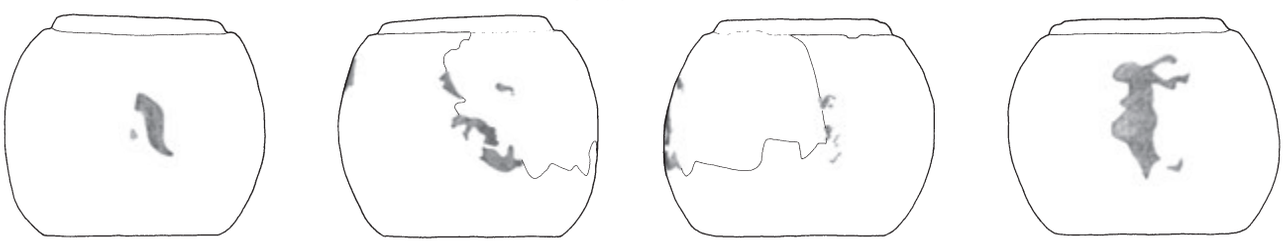
５はＬ字状を呈し，曲がっている。６は鉄製の玉であるが，完全球体でなく，一部直径1.4cm程の平面を有す



① 黒褐色砂壌土（Ⅱb層）と黄褐色土（Ⅲa層）の混土。炭化物が混じる。
② 黒褐色土（Ⅱb）に黄褐色土（Ⅲa層）がブロック状に混じる。明黄褐色火山灰のパミス（Ⅲb層）も含まれる。
③ 黒褐色砂壌土（Ⅱb層）に黄褐色土（Ⅲa層）が多量に混じる。
④ 乳白色粘性土。
⑤ 黒褐色土（Ⅱb層）と乳白色土の混土。弱粘性土。
⑥ 黒褐色砂壌土（Ⅱb層）。炭化物が混じる。
⑦ 暗褐色砂壌土。黒褐色砂壌土（Ⅱb層）に黄褐色土（Ⅲa層）と炭化物が混じる。
⑧ 暗褐色砂壌土に，黄褐色土（Ⅲa層）が混じる。若干粘性あり。
⑨ 極暗赤褐色砂壌土。
⑩ 黒褐色粘性土と暗茶褐色粘性土の混土。
⑪ 黒褐色砂壌土（Ⅱa層）と明黄褐色火山灰土（Ⅸ層）シラスの混土。
⑫ 暗赤褐色砂壌土。
⑬ ④より僅かに色調が明るい。
⑭ 乳白色土。
⑮ ①に近似。僅かに色調が淡い。

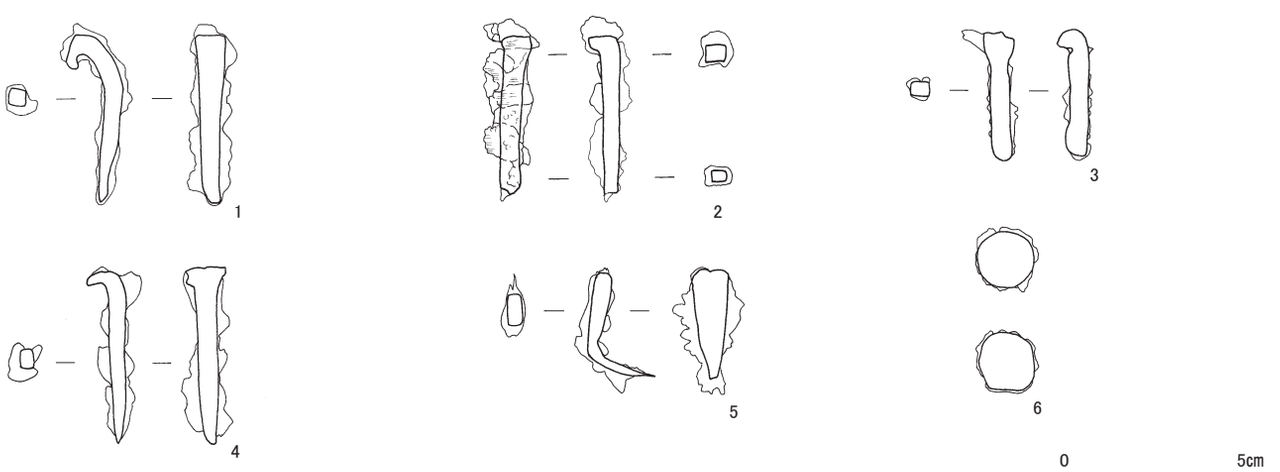
0 1m

水輪実測図



0 30cm

4 号墓内遺物



0 5cm

第151図　中世C群Ⅱ期４号墓実測図

る。器種不明である。

以上のように，石塔の存在，土坑の形態や埋土状況，埋土内遺物（鉄釘）から，墓の可能性が高いと判断し，埋土内土壌のリン・カルシウム分析を実施した。しかし，骨の存在を示すリン・カルシウムの特段のデータを得ることはできなかった。その理由については，木棺を掘り起こし，木棺内の骨を隈無く拾い集め，骨壺に納骨したとの仮説を考えたい。

（9）掘立柱建物跡C群　Ⅲ期

①　掘立柱建物跡

（ア）掘立柱建物跡29号

D-９区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×（３）で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，3.6m ×(5.5) mである。埋土内には，遺物は包含されない。

（イ）掘立柱建物跡30号

E-９区・F-８・９区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，2.8m ×3.8mである。埋土内に，遺物は包含されない。

（ウ）掘立柱建物跡31号

E-８・９区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×４間で，主軸はN13° Eを示す。大きさは，3.8m ×5.5mである。埋土内には，遺物は包含されない。

（エ）掘立柱建物跡32号

F-９区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ４° Wを示す。大きさは，3.6m ×5.2mである。

埋土内には，Ｐ５に１が１点包含され，図化した。龍泉窯系青磁碗の口縁部から体部片である。大宰府分類Ⅱb類：E期に相当する。

（10）掘立柱建物跡C群　その他

①　土坑

（ア）土坑228号

埋土内遺物１は，龍泉窯系青磁碗で，復元口径が15.6cmを測る。大宰府分類Ⅱｂ類：E期に相当する。

（イ）土坑234号

埋土内遺物１は，糸切り底の坏・皿片である。復元底径が10.1cmを測る。

②　柱穴

（ア）柱穴671号

埋土内遺物１は，龍泉窯系青磁碗の高台である。大宰府分類Ⅱb類：E類である。

（イ）柱穴837号

埋土内遺物１は，糸切り痕底の坏（皿）片で，復元底径が7.0cmを測る。

（11）掘立柱建物跡D群　Ⅱ期

①　掘立柱建物跡

（ア）掘立柱建物跡33号

H・I-４区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×４間で，主軸はN24° Eを示す。大きさは，3.7m ×7.2mである。埋土内には，遺物は包含されない。

（イ）掘立柱建物跡34号

H-４区のⅢa層上面で検出された。規格は１間×３間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，1.8m ×3.6mである。埋土内には，遺物は包含されない。

（12）掘立柱建物跡D群　Ⅲ期

①　掘立柱建物跡

（ア）掘立柱建物跡35号

H-４・５区・I-５区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN ０° Wを示す。大きさは，5.0m ×6.6mである。埋土内には，遺物は包含されない。

（イ）掘立柱建物跡36号

I・J-３・４区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN10° Wを示す。大きさは，4.2m ×5.8mである。埋土内には，遺物は包含されない。

（ウ）掘立柱建物跡37号

I-３・４区のⅢa層上面で検出された。規格は２間×３間で，主軸はN10° Wを示す。大きさは，4.8m ×5.7mである。埋土内には，遺物は包含されない。

（13）掘立柱建物跡D群　その他

①　土坑

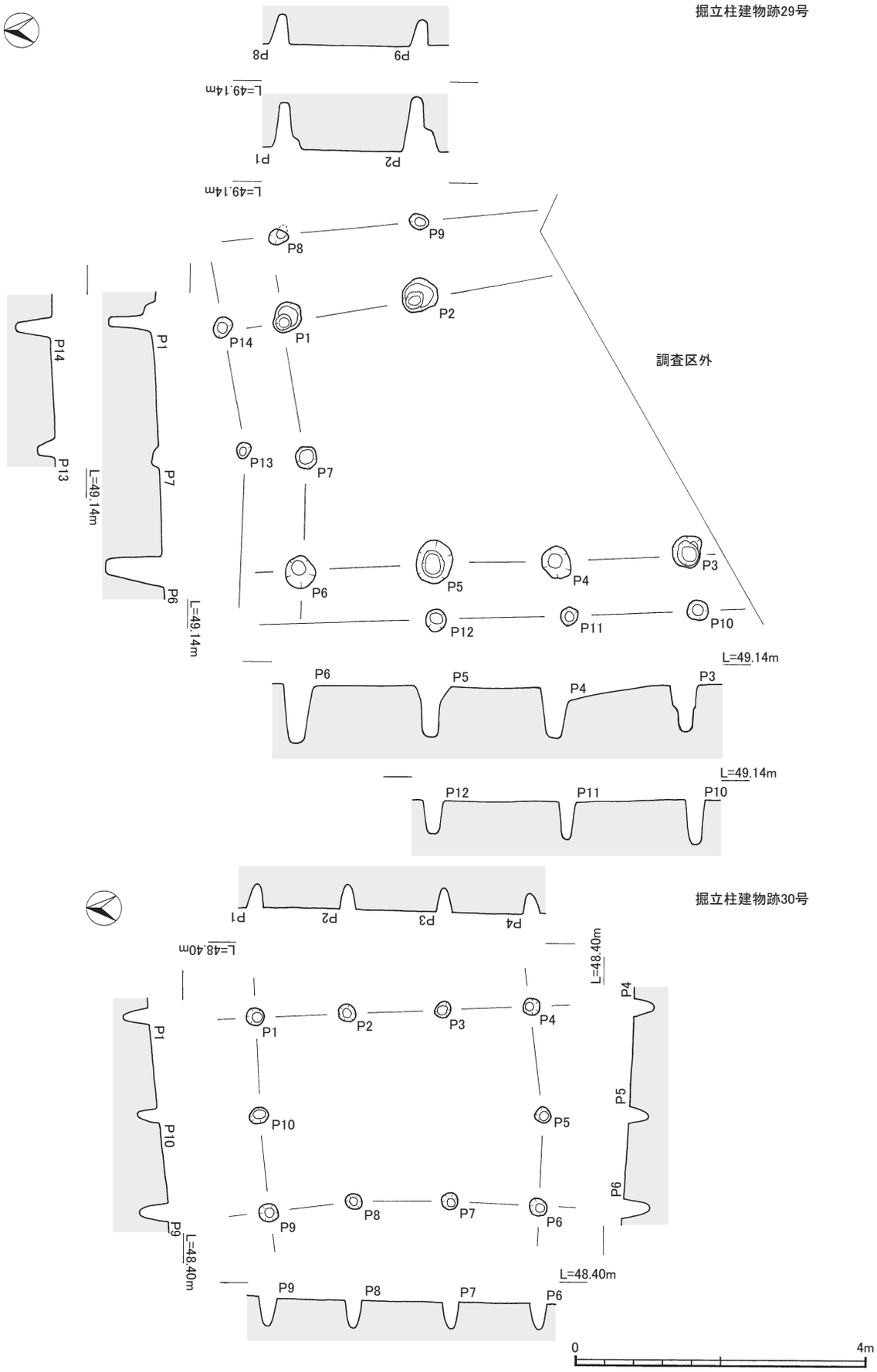
（ア）土坑250号

埋土内には，糸切り底の土師器の坏・皿が５点，口禿の白磁碗１点，龍泉窯系青磁碗１点が含まれる。その内，３点を図化した。

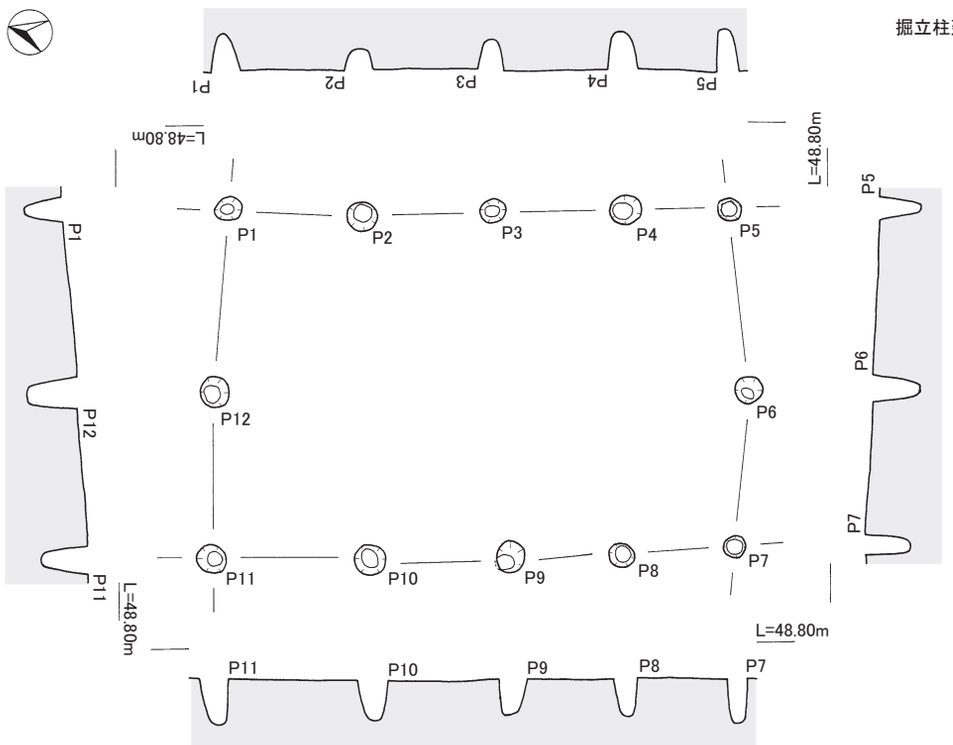
１は，底部が糸切り底の土師器の大型皿である。器厚0.3cm程の円盤を底部に貼付し，底部に厚みを持たせる。底部から腰部にかけて，ナデ等による整形が成されない。復元底径は，9.6cmを測る。

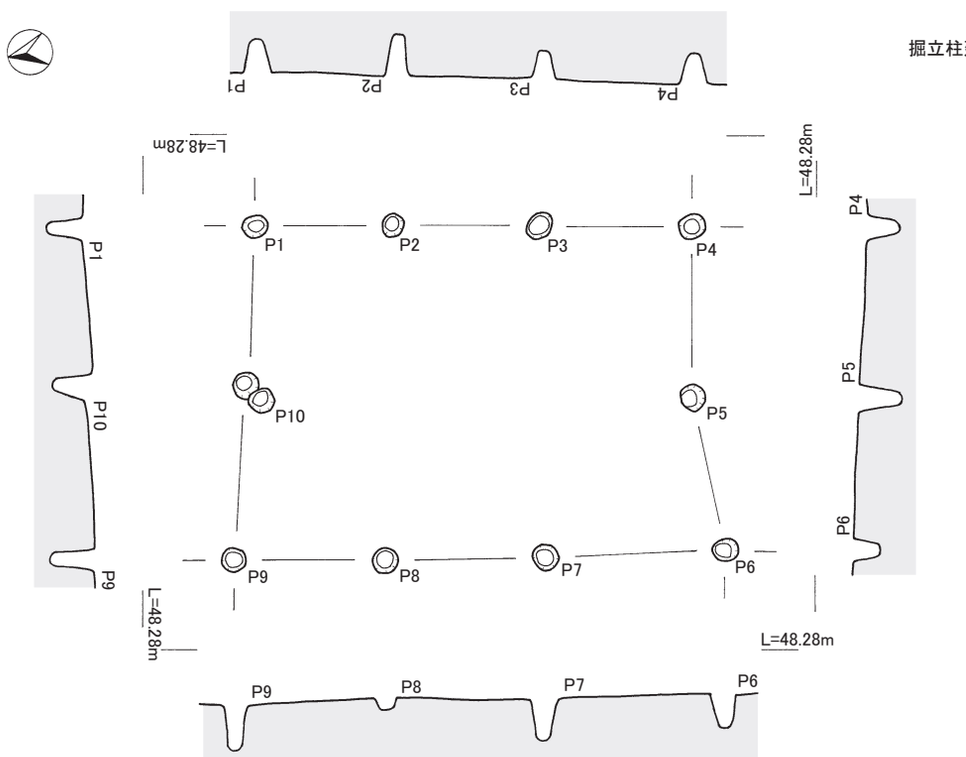
２は，口禿の白磁碗の口縁部片である。大宰府分類白磁ⅢⅨ類：Ｆ期に相当する。

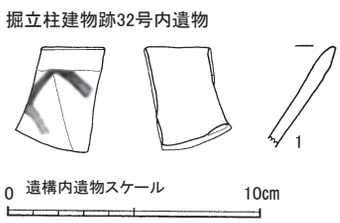
3は，龍泉窯系青磁碗で大宰府分類Ⅱｂ類：E期である。



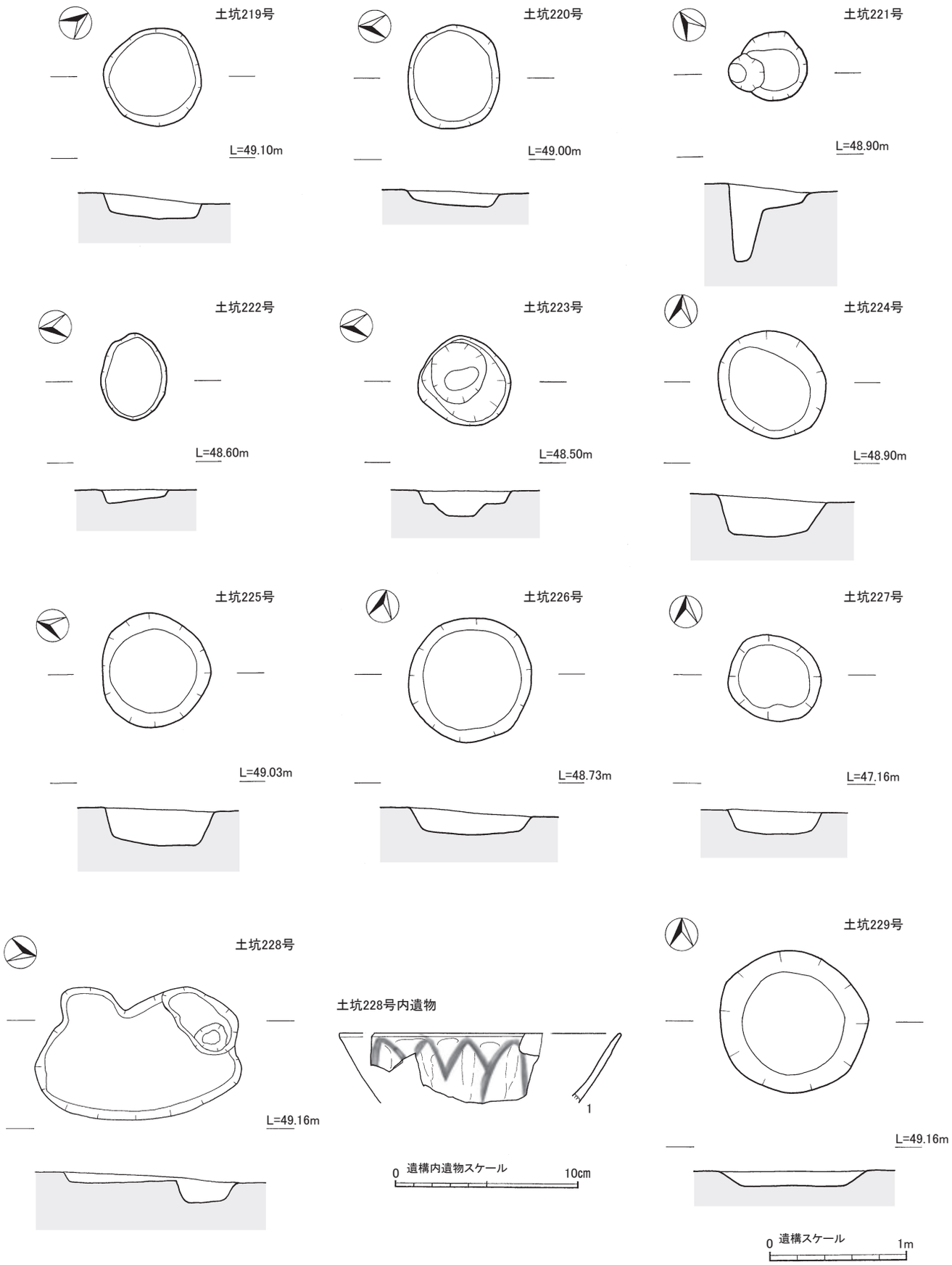
第152図　中世C群Ⅲ期掘立柱建物跡29・30号実測図



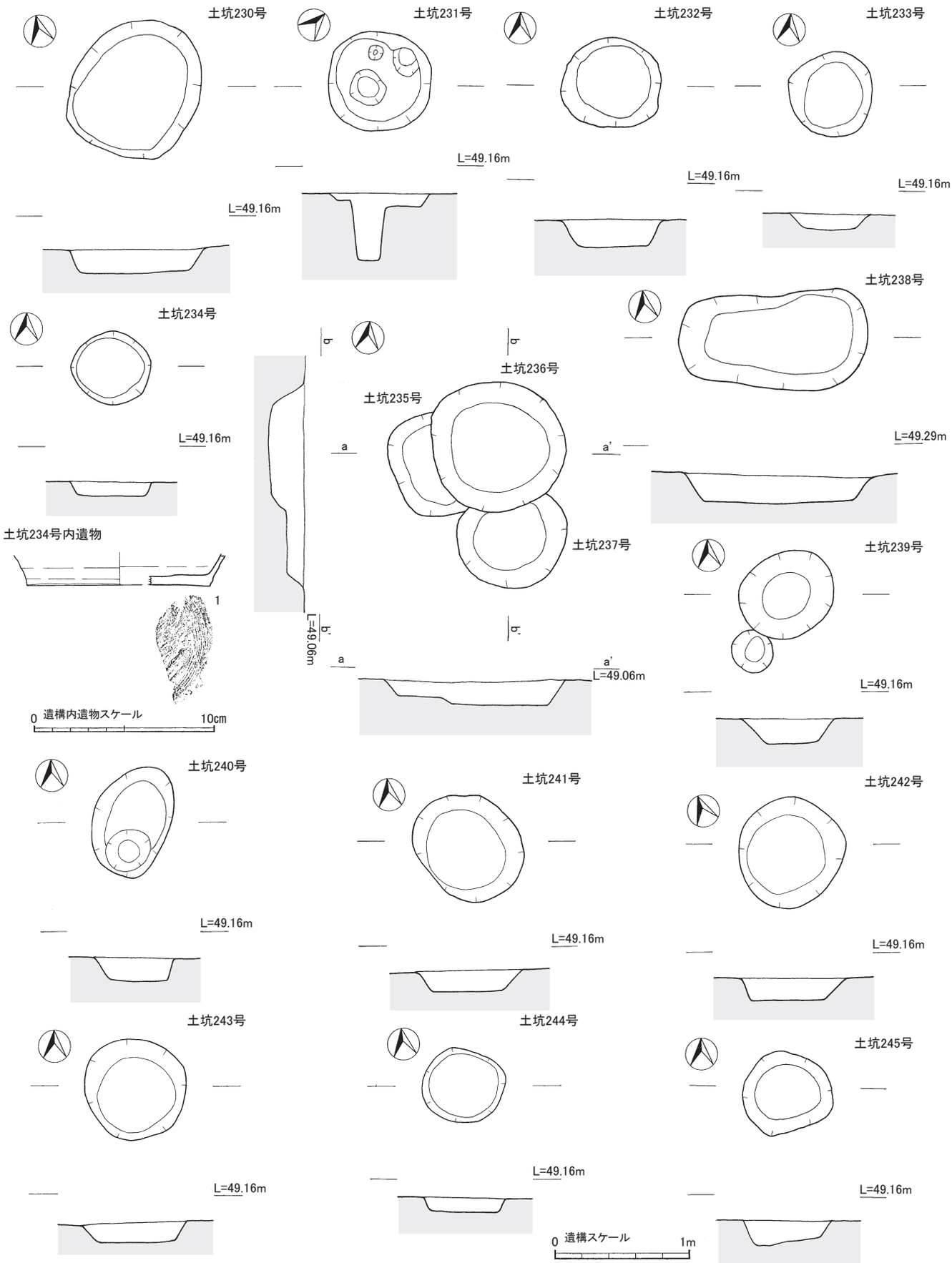




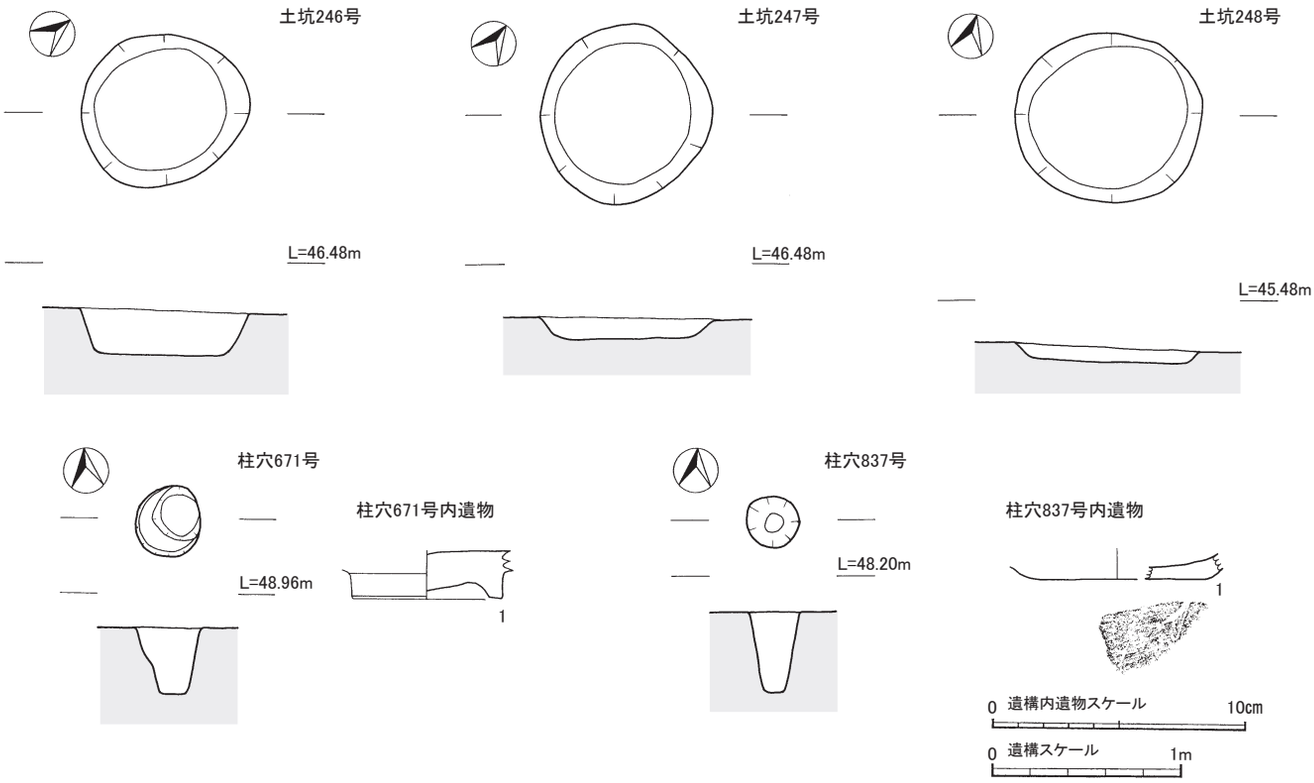
第153図　中世C群Ⅲ期掘立柱建物跡31・32号実測図



第154図　中世C群土坑219 ～ 229号実測図



第155図　中世C群土坑230 ～ 245号実測図



第156図　中世C群土坑246 ～ 248号・柱穴実測図

（イ）土坑255号

埋土内遺物１は，糸切り底の土師器の皿の底部である。

② 柱穴

（ア）柱穴２号

埋土内遺物１は，砂岩製の砥石である。最大長が11.7㎝，最大幅が6.5㎝，厚さ5.8㎝を測る。一端に煤が強く付着し，上面・下面・横２面の４面に使用痕が見られる。

（イ）柱穴６号

埋土内遺物１は，中世須恵器の甕の胴部片である。内面はナデ，外面は格子目タタキを施す。また，外面はタタキ後に横位のケズリが見られることから，樺万丈系の須恵器の可能性が考えられる。

（ウ）柱穴27号

埋土内遺物１は，龍泉窯系青磁碗の口縁部片で，大宰府分類Ⅱｂ類：Ｅ期である。

（エ）柱穴45号

埋土内遺物１は，糸切り底の土師器の坏である。底径8.8㎝，口径11.7㎝，器高2.7㎝を測る。内外面共に横ナデを施す。白味の強い胎土は，他の土師器とは異質である。

（14）溝状遺構

溝状遺構には，床面に硬化面が確認される遺構及び硬化面が確認されない遺構の何れも検出された。規模や方向から同一の溝状遺構と推定される遺構でも，硬化面が検出されるものとされないものが混在して確認されたことから，硬化面のあるものも，呼称上，「道跡」と限定せず「溝状遺構」として報告することとする。

① 溝状遺構１号

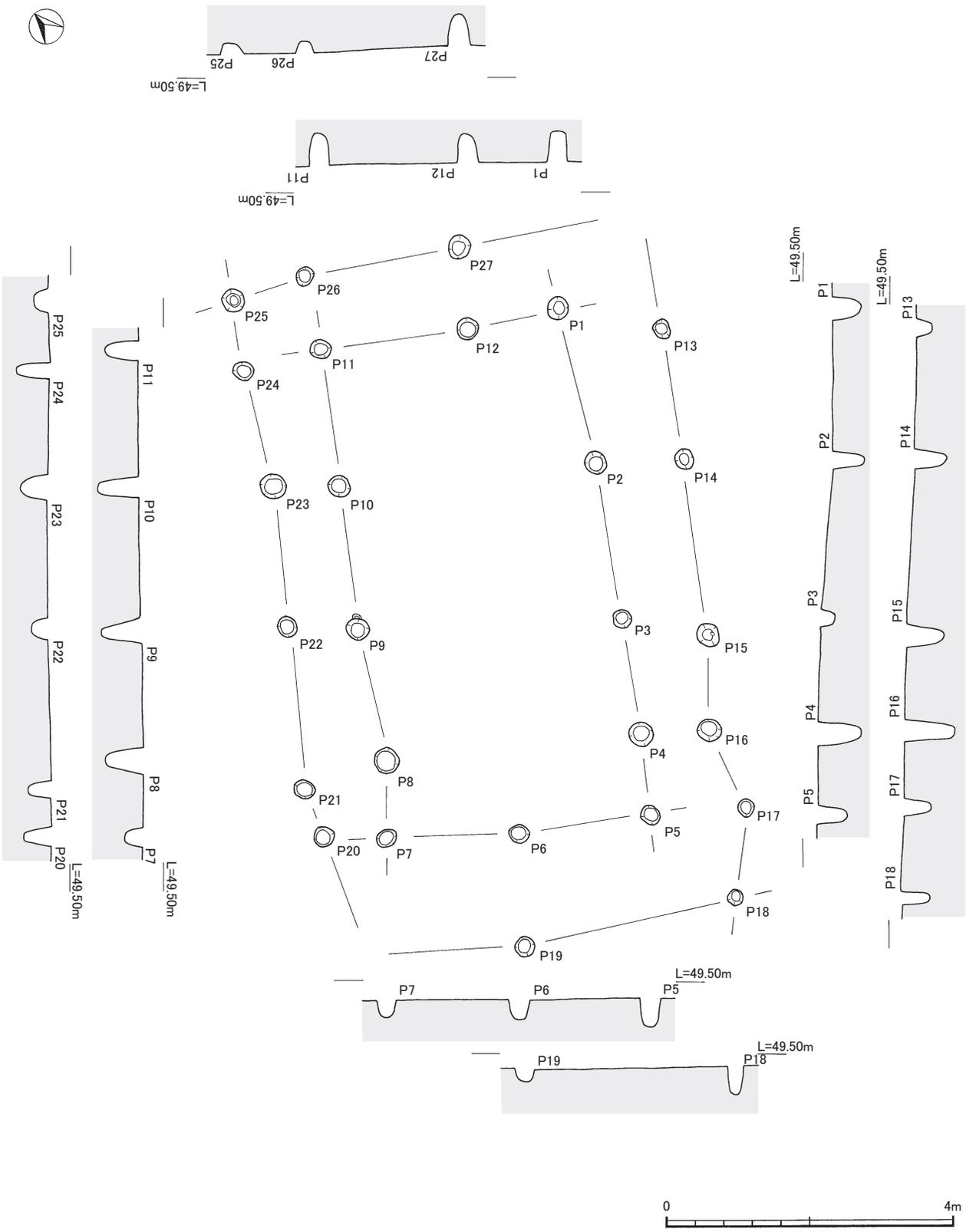
黒褐色砂壌土（Ⅱb層）を埋土とし，G・H-7区のⅢa層上面で検出された。東西方向に延び，東側は調査外であり，西側は削平等を受け，長さ７ｍ程しか確認されなかった。床面には硬化面は捉えられなかった。

帯状プランの中に，柱穴が５基列を成すが，溝内に後世の撹乱が切り込んでおり，更に１基は破壊された可能性もある。周囲に柱穴が捉えられないことから，溝状遺構に伴い設置されたと考えられる。

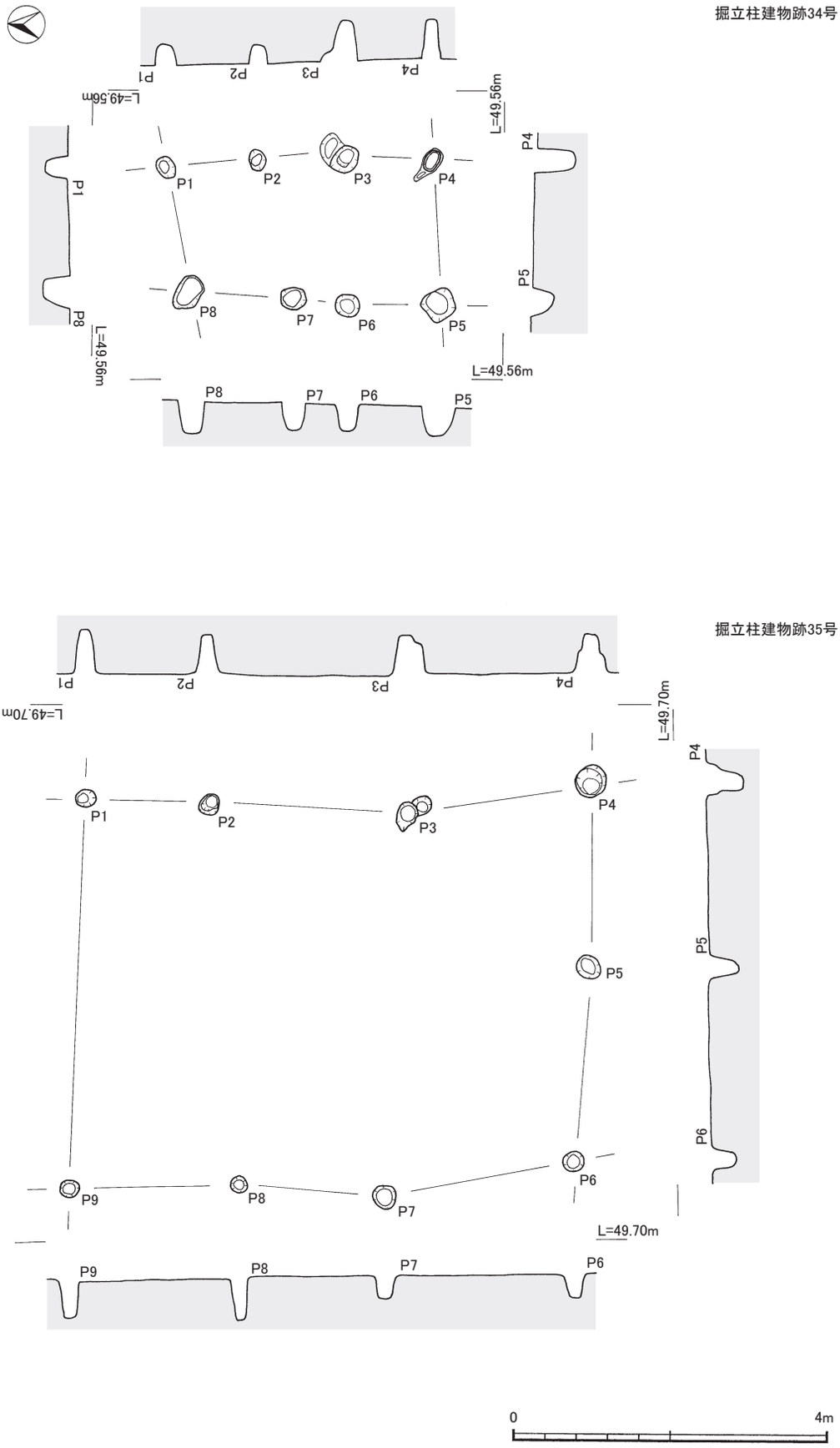
本遺構の南側に５ｍ程離れて「道跡」と思われる溝状遺構２号が１条並行する。道跡に沿って設置されうるものとして，杭が打ち込まれた溝や布基礎により建てられた壁建ちの建物の基礎などが想定しうるが，柱穴の深さが一定せず，建物の可能性は低いと判断される。

② 溝状遺構２号

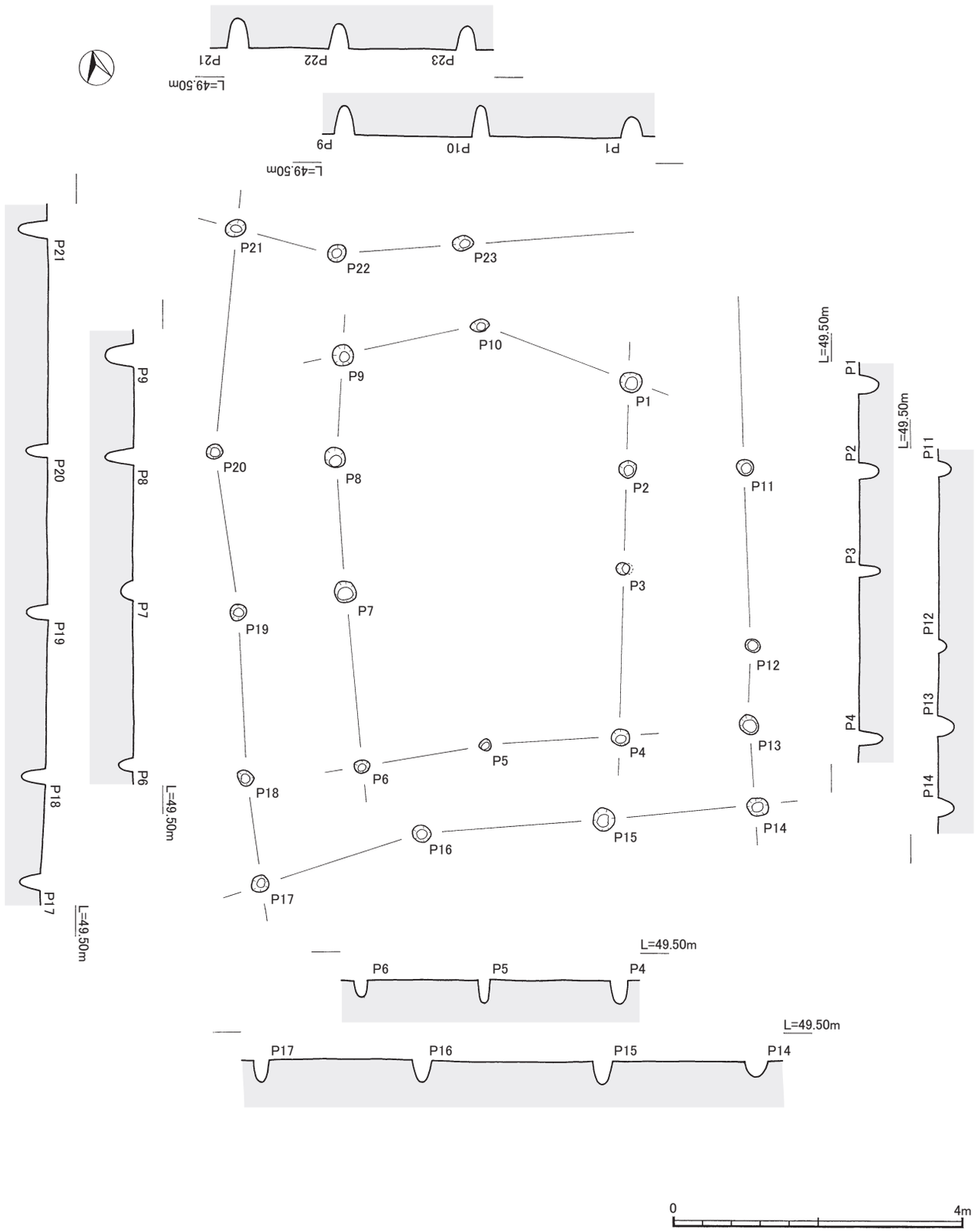
黒褐色砂壌土（Ⅱb層）を埋土とし，G-７・８，H-７区のⅢa層上面で検出された。東西方向に延びる。東



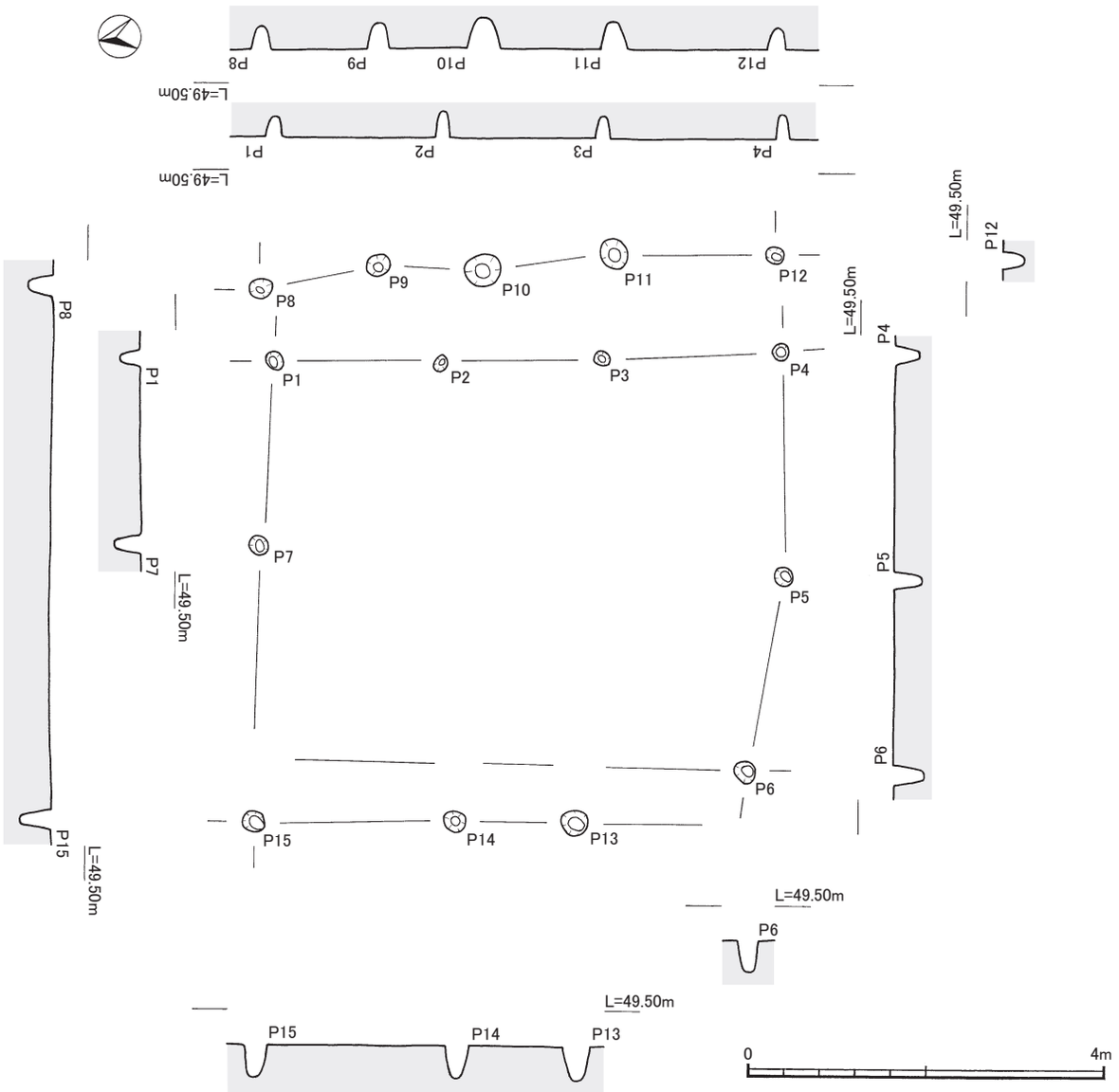
第157図　中世D群Ⅱ期掘立柱建物跡33号実測図



第158図　中世D群Ⅱ期掘立柱建物跡34・35号実測図



第159図　中世Ｄ群Ⅲ期掘立柱建物跡36号実測図



第160図　中世Ｄ群Ⅲ期掘立柱建物跡37号実測図

側は調査区外であり，西側は後世の削平を受け，長さ3.8m程のみ確認された。床面が硬化することから，道跡と思われる。

本遺構の東側は現況では崖状を呈している。本遺構は，沖積平野と本遺跡を直近で結ぶ崖の九十九折り状の道跡に繋がる台地部分の道跡という想定が可能である。本遺構の東側で「T」字もしくは鈎状に左折して，北東に隣接する現都集落と本遺跡をつなぐ道跡の可能性も想定しうる。中世期において，この道跡の東側に台地が広がっていた可能性もあり，この道跡が現都集落と本遺跡とどのように結びつけるものかは不明である。

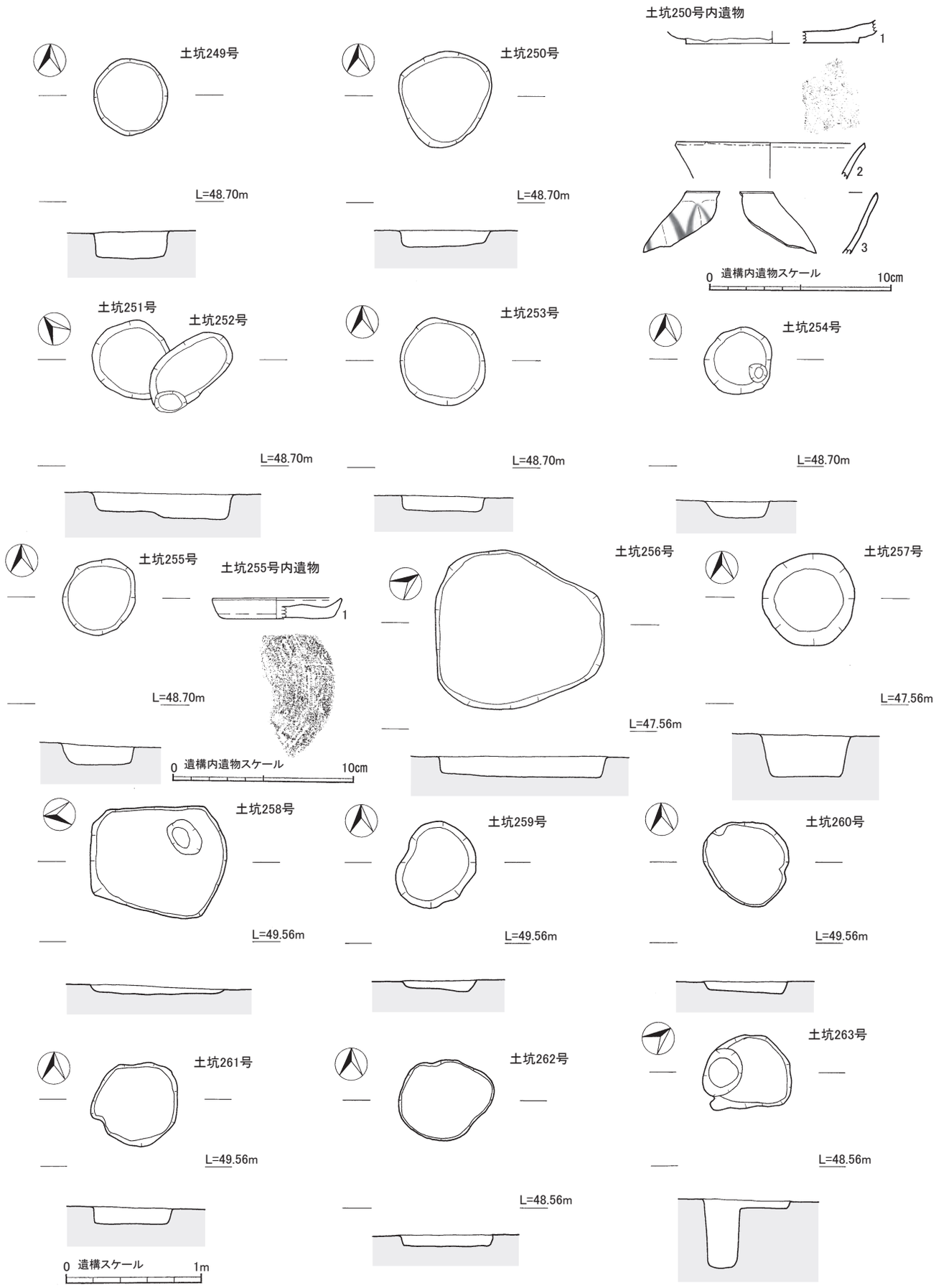
③　溝状遺構３号

黒褐色砂壌土（Ⅱb層）を埋土とし，Ｆ・Ｇ−５・６区のⅢa層上面で検出した。形状は「T」字を呈し，主たる溝は本調査区を南北に分断するような東西方向に延び，中程の位置で，狭い幅の溝が南方向に分岐する。

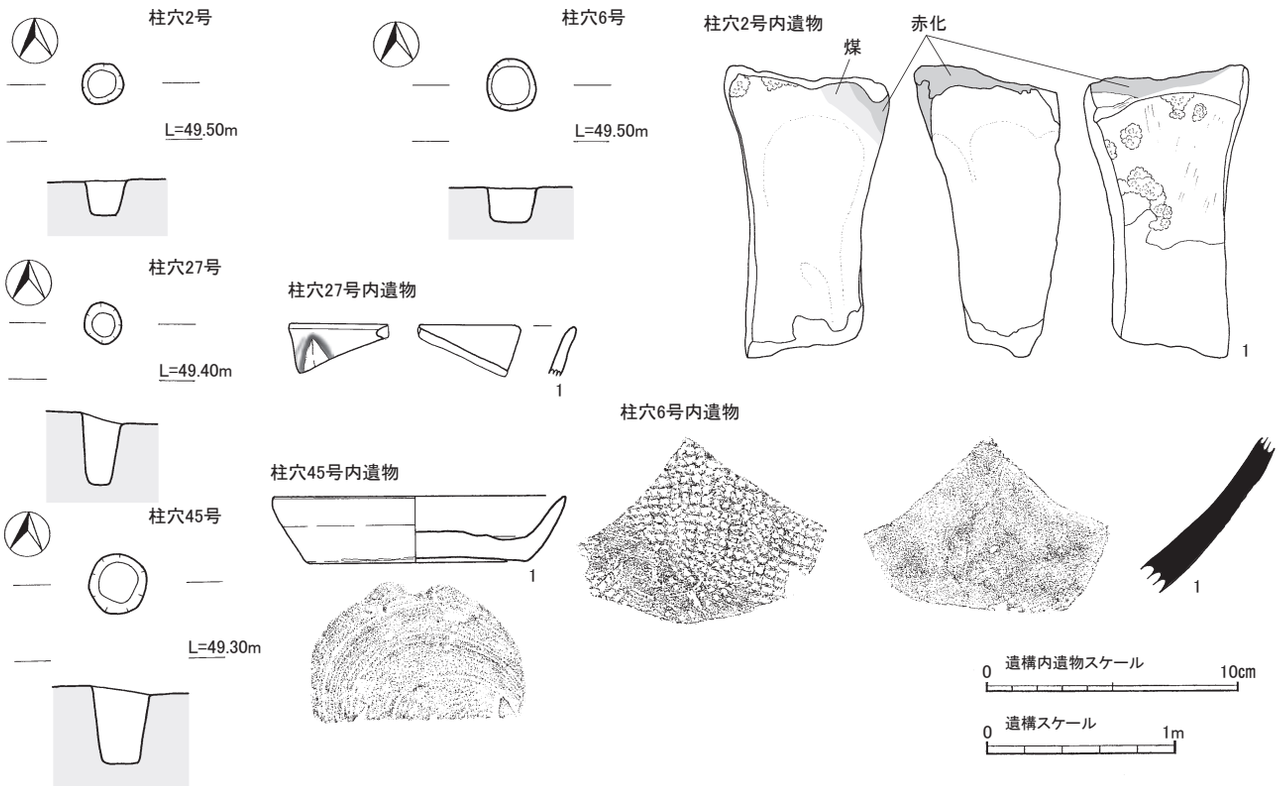
東西方向の溝は，深度は15cm ～ 20cm程と極浅いのに対して，幅は2.2 ～ 3.5m程と比較的広く，南北方向の溝は，幅が0.7 ～ 1.1m程と狭い。

溝の床面には，硬化面や顕著な凹凸は捉えられない。東西方向に延びる溝の西側の先には，後述の溝状遺構４号が所在するが，溝状遺構３号と溝状遺構４号の中間が削平されるのは，この周囲の地形がマウンド状にやや高いことにより削平を受けたためと推察される。

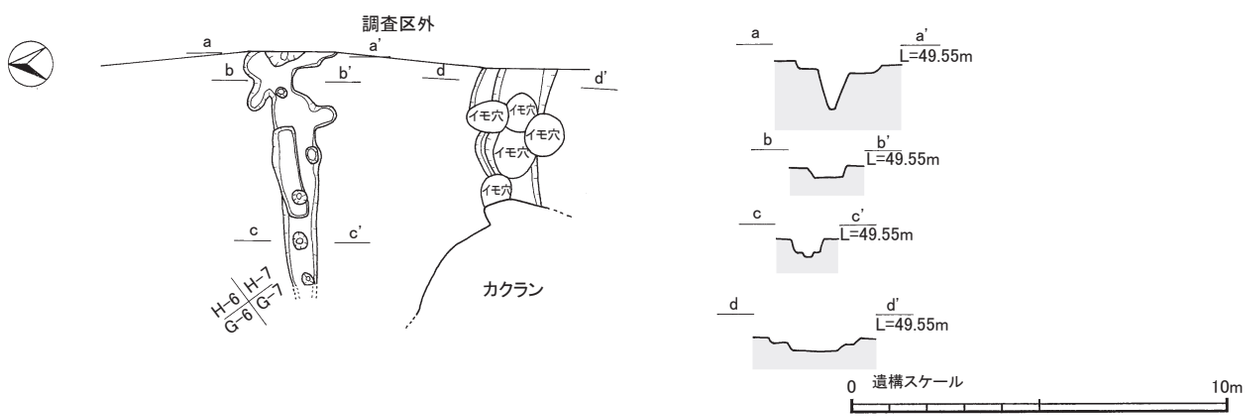
溝状遺構３号と４号の関係については，幅や深さ等の形態的共通性や溝の方向から，同一の溝の可能性もあるが，本遺構の床面には硬化面が確認されないが，溝状遺



第161図　中世D群土坑249 ～ 263号実測図



第162図　中世Ｄ群柱穴実測図



第163図　中世溝状遺構１・２号実測図

構４号には硬化面が明瞭に残される点で相違点もある。

これらの溝状遺構の周辺は，柱穴群や遺物が比較的空疎であることから，人間活動の営みが希薄な場所であると思われ，道跡や水路，建物群の区画を示す標識施設など，建物や庭など直接的な生活空間と異なる場所である可能性が考えられる。

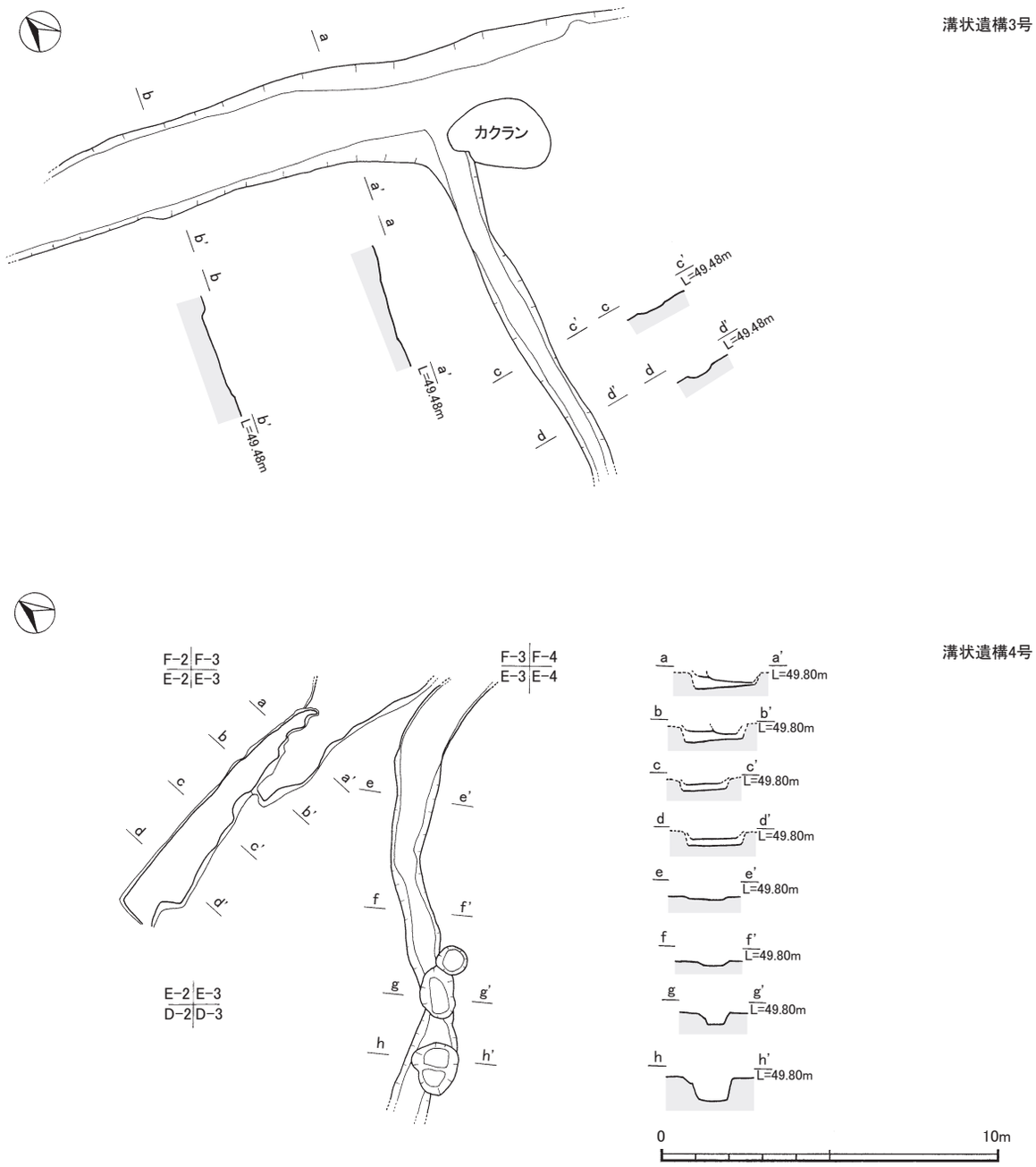
④　溝状遺構４号

黒褐色砂壌土（Ⅱb層）を埋土とし，E－２，D・E－３区のⅢa層上面で検出した。３条の溝状遺構からなる。

何れも床面には，硬化面を有する。硬化面の検出により遺構の存在に気付いたため，掘り込み面や埋土は捉えられていない。硬化面は複数枚捉えられており，幾度の修復を経ていると思われる。

本遺構は，上述の溝状遺構３号の延長上にあることから，溝状遺構３号と同一の可能性が考えられるが，溝状３号に硬化面が確認されない点が相違点として挙げられる。本遺構は床面を有し，道跡の可能性が高い。

現況では，本遺構の西側は崖であるが，平成９年度の大雨により崖が崩落しており，幾度の崩落を経ていると考えられる。このような状況から，中世においては平坦地が更に西側に延びていたと思われ，本遺跡と同様な掘立柱建物跡群が存在していた可能性やそれらをつなぐ道跡であった可能性も想定しうる。



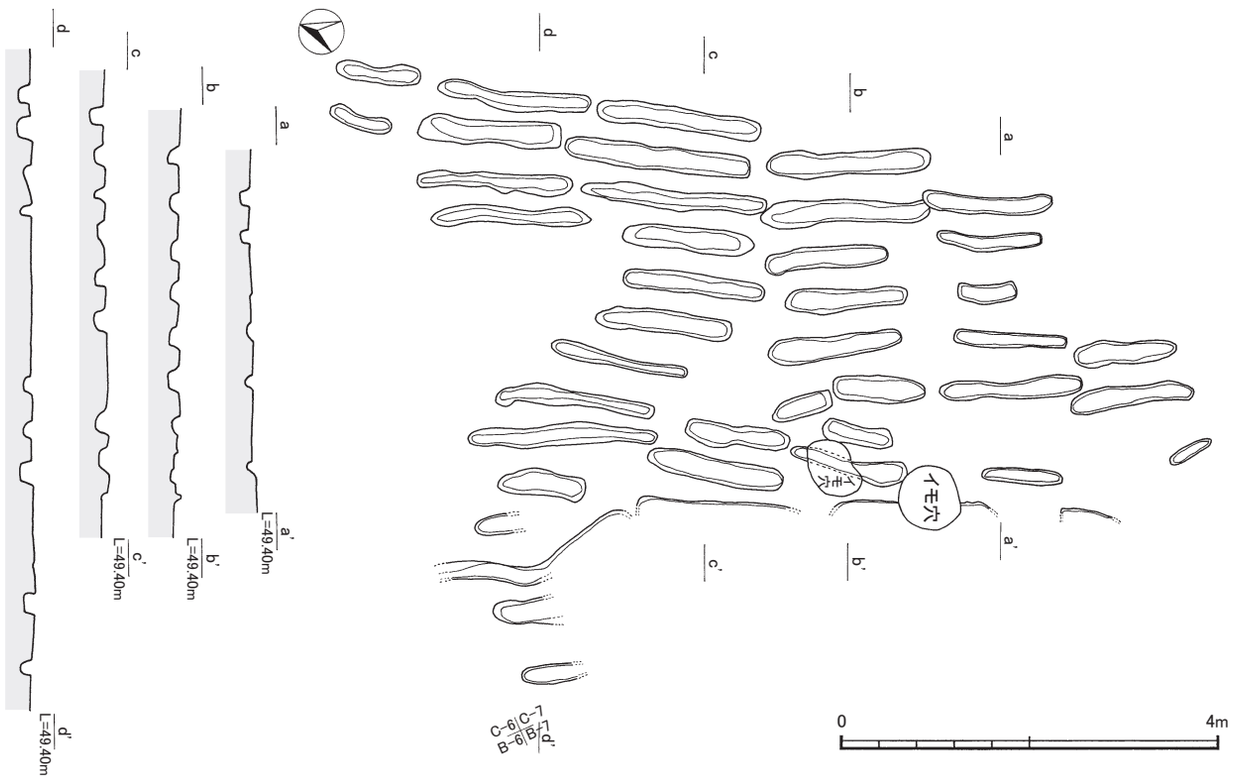
第164図　中世溝状遺構３・４号実測図

本遺構の意義については，溝状遺構３号の項で述べたように，道跡の他に，建物群の区画を示す標識施設の役目も担っていた可能性も考えられる。

（15） 畝溝

C－７区のⅢa層上面で，黒褐色砂壌土（Ⅱb層）を埋土として検出された。畝間の各々は長楕円状の平面観を呈し，主軸がN10° Wを示す。深さは，６cm ～ 16cm程である。

掘立柱建物跡B群に重なるが，本遺構がより上位で検出されたことから，掘立柱建物跡群形成・放置後に，本畝溝は形成されたと判断される。中世の掘立柱建物跡群の消失後，この一帯が畑として利用されたことを示す。



第165図　中世畝溝実測図

第64表　中世遺構内遺物観察表（土師器）（1）

挿図番号	掲載番号	群	遺構名		種別	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃	胎土 雲母	胎土 他	備考
115	1	A群	掘立柱建物6号	P10	土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	8.6	7.7	1.2	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
	2	A群		P10	土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	8.8	7.8	1.2	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
118	1	A群	掘立柱建物10号	P2	土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	灰黄褐色 Hue10YR6/2	8.9	6.9	1.3	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
120	1	A群	掘立柱建物11号	P10	土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue7.5YR 6/6	橙色 Hue7.5YR 6/6	11.2	9.4	1.4	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
	2	A群		P9	須恵器	甕・壺？	胴部	外：格子目タタキ 内：回転	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	－	－	－	－	－	
123	1	A群	2号墓（木棺墓）		土師器	坏	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	淡橙色 Hue5YR8/3	灰白色 Hue2.5Y8/2	－	5.4	－	○	○	○		－	充実高台
	2	A群			土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue7.5YR 7/6	橙色 Hue7.5YR 7/6	12.9	9.4	3.0	○	○	○		－	完形品。底部に糸切り痕。内外面に丹塗。
	3	A群			土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	12.9	9.5	2.6	○	○	○		－	完形品。 底部に糸切り痕。
	4	A群			土師器	埦	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅橙色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3	－	－	－	○	○	○		－	
124	5	A群			土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	8.0	7.2	1.1	○	○	○		赤色砂粒	底部に糸切り痕。
126	1	A群	土坑18		土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue7.5Y7/6	褐灰色 Hue10YR5/1	8.6	6.5	1.2	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
	2	A群			土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄色 Hue2.5YR7/3	にぶい黄色 Hue2.5YR6/3	7.0	5.2	1.2	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
127	1	A群	土坑33		土師器	皿	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR6/4 褐灰色 Hue10YR4/1	にぶい黄褐色 Hue10YR6/4	－	5.8	－	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
	2	A群			土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	8.2	6.6	1.3	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕 内外面・底部に煤付着。

第65表　中世遺構内遺物観察表（土師器）（2）

挿図番号	掲載番号	群	遺構名		種別	器種	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土					備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	雲母	他	
127	1	A群	土坑34		土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	7.0	－	○	○	○		赤色鉱物	底部～外面に煤付着。
130	1	A群	土坑66		土師器	坏？ 皿？	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue7.5Y7/6	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	－	6.8	－	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
	2	A群			土師器	坏？ 埦？	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	浅黄色 Hue2.5YR7/4	13.6	8.0	－	○	○	○		赤色鉱物	墨書。
	1	A群	土坑74		土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue7.5Y7/6	浅黄橙色 Hue10YR8/3	8.0	6.8	1.0	○	○	○		－	底部から外面赤色。糸切り痕。
131	1	A群	柱穴224		土師器	坏	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/6	橙色 Hue7.5Y6/6	－	7.8	－	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
132	1	A群	柱穴414		瓦質土器	擂鉢	体部	外：縦位条線タタキ痕 内：斜位の櫛目状ナデ	灰色 Hue10Y5/1	黒色 Hue10Y2/1	－	－	－	○	○	○		礫	樺万丈系。焼成甘い。
135	1	B群	掘立柱建物19号		土師器	皿	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	－	7.3	－	○	○	○		赤色鉱物	内面煤付着。糸切り底。
	2	B群			土師器	皿	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	－	8.6	－	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
137	1	B群	掘立柱建物23号		土師器	坏	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	12.0	8.3	2.6	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
138	1	B群	3号墓		土師器	埦	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄色 Hue2.5YR8/3	浅黄色 Hue2.5YR8/3	－	8.2	－	○	○	○		－	
	2	B群			内黒土師器	埦	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ後ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	黒色	13.0	7.4	6.2	○	○	○		－	内黒土師器。高台畳付に煤付着。
	3	B群			内黒土師器	碗・坏	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ後ミガキ	淡黄色 Hue2.5YR8/3	黒色	14.8	－	－	○	○	○		－	内黒土師器。
	4	B群			土師器	坏	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	13.2	5.4	4.8	○	○	○		赤色鉱物	底部外面に線刻1条。煤付着。
	5	B群			土師器	坏	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	淡黄色 Hue2.5YR8/3	淡黄色 Hue2.5YR8/3	－	6.2	－	○	○	○		赤色鉱物	
	6	B群			土師器	埦・坏	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	－	－	○	○	○		－	
	7	B群			土師器	甕・鉢	胴部～底部	外：回転ナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	7.0	－	○	○	○		礫・黒色鉱物	底部外面に竹管状刺突連点。外面に煤付着。
	8	B群			土師器	甕	口縁部～胴部	外：回転ナデ，内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	－	－	○	○	○		－	
	9	B群			土師器	甕	胴部	外：回転ナデ，内：口縁部ナデ，胴部ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	－	－	－	○	○	○		礫・黒色鉱物	
	10	B群			土師器	甕	胴部	外：回転ナデ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	－	－	○	○	○		礫	外面煤付着。
143	1	B群	土坑138		須恵器	壺	胴部	外：タタキ 内：ナデ	にぶい赤褐色 Hue10YR4/3	褐灰色 Hue5YR4/3	－	－	－	○	○	○		小礫	樺万丈系。
144	1	B群	土坑156		土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	8.5	6.6	1.7	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
	1	B群	土坑161		土師器	甕	胴部	外：格子目タタキ 内：ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○		－	土師質須恵器。 外面：煤付着。
145	1	B群	土坑175		土師器	皿	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue7.5Y7/6	橙色 Hue7.5Y7/6	－	6.8	－	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
	1	B群	土坑179		土師器	坏	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	黒色 Hue5Y2/1	黒色 Hue5Y2/1	－	－	－	○	○	○		－	両黒土師器。
	1	B群	土坑181		瓦質土器	擂鉢	口縁部～底部	外：縦位櫛目状タタキ痕 内：斜位の櫛目状ナデ	黄灰色 Hue2.5Y6/1	黄灰色 Hue2.5Y6/1	30.6	15	9.9	○	○	○		－	樺万丈系。18019，他と接合。
147	1	B群	土坑212		土師器	坏	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	7.6	－	－	○	○	○		－	
	2	B群			土師器	坏	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	9.6	－	－	○	○	○		－	
	3	B群			土師器	坏	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	11.0	－	－	○	○	○		－	
148	1	B群	柱穴621		土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	橙色 Hue7.5YR7/6	8.1	6.4	1.8	○	○	○		赤色鉱物	煤付着。
	1	B群	柱穴827		土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	8.3	6.4	1.3	○	○	○		赤色鉱物	底部：糸切り痕。
150	2	C群	掘立柱建物28号	P3	瓦質土器	擂鉢	体部～底部	外：縦位条線タタキ痕 内：斜位の櫛目状ナデ	灰色 Hue10Y4/1	灰色 Hue10Y5/1	－	11.8	－	○	○	○		－	樺万丈系。
155	1	C群	土坑234		土師器	坏・皿	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR6/3	にぶい褐色 Hue7.5YR7/3	－	10.1	－	○	○	○			底部：糸切り痕。
156	1	C群	柱穴837		土師器	坏・皿	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄色 Hue2.5YR7/3	－	7.0	－	○	○	○			底部：糸切り痕。
161	1	D群	土坑250		土師器	皿	底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	－	9.6	－	○	○	○			底部：糸切り痕。
	1	D群	土坑255		土師器	皿	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	7.2	6.0	1.2	○	○	○			底部：糸切り痕。
162	1	D群	柱穴6		須恵器	壺？	胴部	外：格子目タタキ 内：ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	灰黄色 Hue2.5Y7/2	－	－	－	○	○	○			
	1	D群	柱穴45		土師器	坏	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白色 Hue10YR8/2	灰白色 Hue10YR8/2	11.7	8.8	2.7	○	○	○			底部：糸切り痕。

第66表　中世遺構内遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	掲載番号	期	遺構名			種別	器種	胎土の色調	施釉	釉薬	法量（cm）			産地	時期	分類	備考
											口径	底径	器高				
112	2	A群	掘立柱建物1号	－	P16	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	透明釉	－	6.2	－		F期	皿Ⅸ類	焼土土坑と接合。
	3	A群		－	P3	青白磁	合子蓋	灰白色Hue10Y7/1	残存部全面施釉	青白磁釉	－	－	－				型押蓮弁文。
118	2	A群	掘立柱建物10号	－	P3	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	透明釉	10.0	－	－		F期	皿Ⅸ類	口禿口縁。
	3	A群		－	P4	青磁	碗	灰白色Hue7.5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	16.0	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。
120	3	A群	掘立柱建物11号	－	P15	青磁	碗	灰黄色Hue2.5Y6/2	畳付～高台内露胎	青磁釉	－	7.0	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-c類	内面見込み：草花文印刻。
124	6	A群	2号墓	－		青磁	碗	灰白色Hue7.5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。
	7	A群		－		青磁	碗	灰白色Hue10Y7/1	畳付～高台内露胎	青磁釉	－		－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ類	鎬蓮弁文。
125	1	A群	土坑10	円形土坑10		青磁	碗	灰白色Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。
127	1	A群	土坑32	円形土坑31		青磁	碗	灰白色Hue10Y8/0	残存部全面施釉	青磁釉	16.9	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。
128	1	A群	土坑41	円形土坑40		白磁	皿	灰白色Hue10Y8/1	口縁部釉掻き取り	透明釉	－	－	－		F期	皿Ⅸ類	口禿口縁。
129	1	A群	土坑60	円形土坑84		白磁	皿	灰白色Hue7.5Y7/1	口縁部釉掻き取り	透明釉	10.0	－	－		F期	皿Ⅸ類	口禿口縁。
131	1	A群	柱穴259	Pit259		白磁	皿	灰白色Hue5Y7/1	底部釉伸ばし	透明釉	－	6.0	－		F期	皿Ⅸ類	
132	1	A群	柱穴272	Pit272		白磁	皿	灰白色Hue5Y8/1	口縁部釉掻き取り	透明釉	10.0	－	－		F期	皿Ⅸ類	口禿口縁。
	1	A群	柱穴386	Pit386		白磁	皿	灰白色Hue7.5Y7/1	口縁部釉掻き取り	透明釉	9.8	5.8	2.6		F期	皿Ⅸ類	口禿口縁。
	2	A群				青磁	碗	灰白色Hue5Y8/1	畳付～高台内露胎	青磁釉	16.1	5.4	6.7	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ類	
	1	A群	柱穴430	Pit430		青磁	合子蓋	浅黄色Hue5Y7/3	内面露胎	青磁釉	7.6	－	－				上面：印花文。
	1	A群	柱穴487	Pit487		青磁	碗	灰白色Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。
	1	A群	柱穴491	Pit491		青磁	碗	にぶい黄色Hue2.5Y6/3	残存部全面施釉	青磁釉	17.0	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。
	1	A群	柱穴718	Pit718		白磁	皿	灰白色Hue10Y7/1	口縁部釉掻き取り	透明釉	12.0	－	－		F期	皿Ⅸ類	口禿口縁。
	1	B群	土坑90	円形土坑55		青磁	碗	灰白色Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。
142	1	B群	土坑119	円形土坑93		青磁	碗	灰白色Hue5Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。
148	1	B群	柱穴851	Pit851		白磁	皿	浅白色Hue7.5Y7/2	口縁部釉掻き取り	透明釉	10.0	－	－		F期	皿Ⅸ類	口禿口縁。
150	1	C群	掘立柱建物28号	－		白磁	皿	浅白色Hue5Y7/2	口縁部釉掻き取り	透明釉	10.4	5.4	2.7		F期	皿Ⅸ類	口禿口縁。
153	1	C群	掘立柱建物32号	－	P5	青磁	碗	灰白色Hue10Y8/0	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。
154	1	C群	土坑228	土坑140		青磁	碗	灰白色Hue10Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	15.6	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。
156	1	C群	柱穴671	Pit671		青磁	碗	褐灰色Hue10YR5/1	畳付～高台内露胎	青磁釉	－	5.4	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
161	2	D群	土坑250	土坑2		白磁	碗	灰白色Hue5Y7/1	口縁部釉掻き取り	透明釉	10.6	－	－		F期	皿Ⅸ類	口禿口縁。
	3	D群				青磁	碗	灰白色Hue5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。
162	1	D群	柱穴27	Pit27		青磁	碗	浅白色Hue5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	鎬蓮弁文。

第67表　中世遺構内遺物観察表（土製品）

挿図番号	掲載番号	群	遺構名	旧遺構名	種別	色調	法量（cm）			胎土					備考
							最大長	最大幅	穿孔径	石英	長石	角閃	雲母	他	
148	1	B群	柱穴518	Pit518	土錘	にぶい褐色Hue7.5YR5/4	3.8	1.8	0.2	○	○	○			

第68表　中世遺構内遺物観察表（滑石製品）

挿図番号	掲載番号	群	遺構名		器種	部位	器面調整	石材	色調	法量（cm）			把手・鍔	備考
										口径	底径	器高		
112	1	A群	掘立柱建物1号	P5	石鍋転用品	胴部	外面：ケズリ	滑石	灰色Hue5Y6/1	－	－	－	－	内面：煤付着
124	8		2号墓		石鍋	胴部	外面：ケズリ	滑石	灰白色Hue7.5Y7/1	－	－	－	鍔	下面：煤付着

第69表　中世遺構内遺物観察表（鉄製品）

挿図番号	掲載番号	群	遺構名	旧遺構名	種別	計測値（cm）			重さ（g）	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
124	9	A群	2号墓	―	釘	6.4	1.2	0.6	8.06	
126	1		土坑25	円形土坑24	雁股鏃	10.0	3.3	0.7	36.3	
129	1		土坑57	円形土坑81	釘	4.8	0.9	0.6	7.3	
132	1		柱穴449	Pit449	棒状鉄製品	11.8	0.7	0.4	17.7	
	1		柱穴500	Pit500	釘	4.2	0.7	0.3	4.0	
138	11	B群	3号墓	－	釘	3.1	0.5	0.4	1.7	
148	1		柱穴619	Pit619	刀子	21.5	2.5	0.6	78.9	
151	1	C群	4号墓	－	釘	4.5	0.9	0.5	6.2	
	2			－	釘	4.4	0.5	0.5	6.1	
	3			－	釘	3.4	0.5	0.6	4.1	
	4			－	釘	4.6	0.5	0.5	6.9	
	5			－	釘	3.9	0.9	0.5	4.7	
	6			－	鉄玉	1.4	1.5	1.5	12.9	

第70表　中世遺構内遺物観察表（砥石）

挿図番号	掲載番号	群	遺構名	旧遺構名	種別	法量（cm）			石材	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
162	1	D群	柱穴2	Pit2	砥石	11.7	6.5	5.8	砂岩	一端に煤付着

第71表　中世掘立柱建物跡計測表A－Ⅰ・Ⅱ期

A-Ⅰ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物1		検出区	D-5・6 E-5		方位	N0° W
112	梁×桁	2×5		種類	1面庇		床面積（㎡）	39.2
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	46	38	53	P1 ～ P6	8.4	P6 ～ P8	4.4	出土遺物
P2	24	20	19	P8 ～ P13	8.7	P13 ～ P1	4.5	滑石製石鍋片1点。
P3	27	24	20	P1 ～ P2	1.7	上屋梁間柱間		白磁1点。
P4	33	28	12	P2 ～ P3	1.9	P6 ～ P7	2.1	青磁合子蓋1点。
P5	38	34	66	P3 ～ P4	1.3	P7 ～ P8	2.3	
P6	32	28	36	P4 ～ P5	1.3	P13 ～ P14	2.5	
P7	36	32	52	P5 ～ P6	2.2	P14 ～ P1	2.0	
P8	40	36	53	P8 ～ P9	1.6	下屋梁間柱間		
P9	28	26	34	P9 ～ P10	1.8	P15 ～ P16	2.2	
P10	40	34	36	P10 ～ P11	1.8	P16 ～ P17	2.2	
P11	26	21	51	P11 ～ P12	1.5			
P12	57	40	79	P12 ～ P13	2.0			
P13	36	34	47					
P14	52	49	54					
下屋柱穴								
P15	36	34	36					
P16	31	24	41					
P17	31	26	26					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物2		検出区	D・E-5・6		方位	N0° W
113	梁×桁	2×3		種類	総柱（4面庇）		床面積（㎡）	28.3
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
上屋柱穴				P1 ～ P4	6.4	P4 ～ P5	4.1	
P1	51	34	70	P5 ～ P8	6.9	P8 ～ P1	3.8	
P2	44	38	62	P1 ～ P2	2.0	上屋梁間柱間		
P3	37	32	70	P2 ～ P3	2.0	P4 ～ P5	4.1	
P4	42	36	50	P3 ～ P4	2.4	P8 ～ P9	1.9	
P5	32	30	50	P5 ～ P6	2.4	P9 ～ P1	1.9	
P6	40	40	52	P6 ～ P7	2.3	下屋梁間柱間		
P7	37	26	50	P7 ～ P8	2.2	P2 ～ P10	2.0	
P8	40	28	56	P9 ～ P10	2.3	P3 ～ P11	2.1	
P9	52	36	38	P10 ～ P11	2.1	P10 ～ P7	2.1	
P10	44	34	32			P11 ～ P6	2.1	
P11	39	26	48					
P12	66	46	47					
P13	80	36	26					
P14	38	32	34					
下屋柱穴								
P15	60	46	26					
P16	26	24	32					
P17	32	22	42					
P18	36	24	34					
P19	58	24	24					
P20	30	32	28					
P21	44	36	50					
P22	26	20	38					
P23	36	22	22					
P24	42	37	32					
P25	32	23	50					
P26	40	30	54					
P27	38	32	42					
P28	36	36	44					
P29	60	42	48					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物3		検出区	F-5・6		方位	N5° W
114	梁×桁	3×4		種類			床面積（㎡）	14.1
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	25	40	P1 ～ P5	4.5	P5 ～ P8	2.7	
P2	33	28	15	P8 ～ P12	4.7	P12 ～ P1	3.0	
P3	22	18	20	P1 ～ P2	1.1	P5 ～ P6	1.0	
P4	25	20	20	P2 ～ P3	1.2	P6 ～ P7	0.8	
P5	30	25	10	P3 ～ P4	1.0	P7 ～ P8	0.9	
P6	15	15	10	P4 ～ P5	1.2	P12 ～ P13	1.1	
P7	24	20	15	P8 ～ P9	1.2	P13 ～ P14	1.2	
P8	30	26	40	P9 ～ P10	1.4	P14 ～ P1	0.7	
P9	28	25	38	P10 ～ P11	1.1			
P10	30	25	20	P11 ～ P12	1.0			
P11	26	25	24	P4 ～ P5	1.2			
P12	28	20	12	P8 ～ P9	1.2			
P13	30	25	15	P9 ～ P10	1.4			
P14	26	24	10	P10 ～ P11	1.1			

挿図番号	遺構名	掘立柱建物4		検出区	F-5		方位	N5° W
114	梁×桁	2×2		種類			床面積（㎡）	12.8
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	25	10	P1 ～ P3	4.0	P3 ～ P5	3.2	
P2	36	34	20	P5 ～ P7	3.8	P7 ～ P1	2.9	
P3	26	23	20	P1 ～ P2	1.9	P3 ～ P4	1.8	
P4	26	20	16	P2 ～ P3	2.1	P4 ～ P5	1.4	
P5	26	10	18	P5 ～ P6	2.0	P7 ～ P8	1.5	
P6	26	25	25	P6 ～ P7	1.8	P8 ～ P1	1.4	
P7	26	25	10					
P8	26	25	18					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物5		検出区	C・D-4		方位	N5° W
115	梁×桁	2×2		種類	掘立柱		床面積（㎡）	14.5
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	30	16	P1 ～ P3	4.4	P3 ～ P5	3.3	
P2	36	34	20	P5 ～ P7	4.2	P7 ～ P1	3.3	
P3	30	28	30	P1 ～ P2	1.9	P3 ～ P4	1.7	
P4	30	30	30	P2 ～ P3	2.5	P4 ～ P5	1.6	
P5	30	25	25	P5 ～ P6	2.2	P7 ～ P8	1.6	
P6	25	24	20	P6 ～ P7	2.0	P8 ～ P1	1.7	
P7	35	30	18					
P8	30	30	23					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物6		検出区	C·D-5		方位	N3° W
115	梁×桁	2×3		種類	総柱		床面積（㎡）	20.3
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	40	40	40	P1 ～ P4	5.2	P4 ～ P6	3.4	出土遺物
P2	40	35	40	P6 ～ P9	5.1	P9 ～ P1	3.9	土師器皿（糸切り）
P3	35	33	45	P1 ～ P2	1.4	P4 ～ P5	1.9	2点。
P4	43	35	20	P2 ～ P3	1.5	P5 ～ P6	1.5	
P5	30	25	30	P3 ～ P4	2.3	P9 ～ P10	2.0	
P6	30	25	45	P6 ～ P7	2.3	P10 ～ P1	1.9	
P7	50	33	45	P7 ～ P8	1.6	P3 ～ P12	1.6	
P8	26	22	10	P8 ～ P9	1.2	P12 ～ P7	1.7	
P9	40	30	45	P10 ～ P11	1.0	P2 ～ P11	1.9	
P10	40	35	45	P11 ～ P12	1.8	P11 ～ P8	1.7	
P11	30	22	15	P12 ～ P5	2.6			
P12	36	25	35					

A-Ⅱ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物7		検出区	D・E-5·6		方位	N0° W
116	梁×桁	2×3		種類	4面庇		床面積（㎡）	27.7
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
上屋柱穴				P1 ～ P4	6.4	P4 ～ P5	4.2	
P1	36	26	62	P5 ～ P8	6.6	P8 ～ P1	3.9	
P2	38	33	70	上屋桁間柱間		上屋梁間柱間		
P3	38	34	58	P1 ～ P2	2.1	P4 ～ P5	4.2	
P4	40	36	74	P2 ～ P3	2.0	P8 ～ P9	2.1	
P5	60	54	42	P3 ～ P4	2.3	P9 ～ P1	1.8	
P6	32	28	41	P5 ～ P6	2.3			
P7	48	44	66	P6 ～ P7	2.1			
P8	38	34	43	P7 ～ P8	2.2			
P9	44	36	68	下屋桁間柱間		下屋梁間柱間		
P10	56	50	52	P10 ～ P11	2.0	P15 ～ P16	1.0	
P11	42	42	38	P11 ～ P12	1.9	P16 ～ P17	1.9	
P12	32	32	52	P12 ～ P13	2.1	P17 ～ P18	2.2	
P13	37	28	22	P13 ～ P14	2.3	P18 ～ P19	1.3	
P14	54	40	34	P14 ～ P15	1.0	P24 ～ P25	0.8	
下屋柱穴				P19 ～ P20	1.0	P25 ～ P26	1.8	
P15	56	44	32	P20 ～ P21	2.3	P26 ～ P27	1.5	
P16	42	22	17	P21 ～ P22	2.1	P27 ～ P10	1.4	
P17	38	32	30	P22 ～ P23	2.2			
P18	40	28	36	P23 ～ P24	1.8			
P19	44	40	52					
P20	42	14	26					
P21	34	30	54					
P22	46	34	22					
P23	36	36	26					
P24	40	30	30					
P25	36	32	32					
P26	42	36	36					
P27	40	32	32					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物8		検出区	D-4, E-4・5		方位	N0° W
117	梁×桁	2×3		種類			床面積（㎡）	13.9
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	24	22	30	P1 ～ P4	4.8	P4 ～ P6	2.9	
P2	26	20	32	P6 ～ P9	4.7	P9 ～ P1	2.9	
P3	28	22	50	P1 ～ P2	1.5	P4 ～ P5	1.5	
P4	30	26	40	P2 ～ P3	1.6	P5 ～ P6	1.4	
P5	30	22	32	P3 ～ P4	1.7	P9 ～ P10	1.5	
P6	28	24	38	P6 ～ P7	1.5	P10 ～ P1	1.4	
P7	26	22	30	P7 ～ P8	1.6			
P8	22	20	28	P8 ～ P9	1.6			
P9	22	22	26					
P10	22	22	24					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物9		検出区	C・D-4・5		方位	N0° W
117	梁×桁	2×3		種類			床面積（㎡）	18.0
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	29	45	P1 ～ P4	5.8	P4 ～ P6	3.1	
P2	28	25	34	P6 ～ P9	5.8	P9 ～ P1	3.1	
P3	28	28	40	P1 ～ P2	2.0	P4 ～ P5	1.7	
P4	30	27	45	P2 ～ P3	2.0	P5 ～ P6	1.4	
P5	30	28	30	P3 ～ P4	1.8	P9 ～ P10	1.7	
P6	30	26	35	P6 ～ P7	1.8	P10 ～ P1	1.4	
P7	25	25	35	P7 ～ P8	2.0			
P8	26	25	28	P8 ～ P9	2.0			
P9	30	26	30					
P10	30	26	50					

第72表　中世掘立柱建物跡計測表A－Ⅱ・Ⅲ期・B－Ⅱ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物10		検出区	D-5･6		方位	N3° W
118	梁×桁	2×3		種類	総柱		床面積（㎡）	30.5
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	65	50	42	P1 ～ P4	6.9	P4 ～ P6	4.3	出土遺物 土師器皿1点。 白磁皿1点。 青磁碗Ⅱ類1点。
P2	70	30	45	P6 ～ P9	7.1	P9 ～ P1	4.3	
P3	45	40	60	P1 ～ P2	2.2	P4 ～ P5	2.0	
P4	45	35	55	P2 ～ P3	2.3	P5 ～ P6	2.3	
P5	33	30	55	P3 ～ P4	2.4	P9 ～ P10	2.0	
P6	50	40	52	P6 ～ P7	2.5	P10 ～ P1	2.3	
P7	72	30	35	P7 ～ P8	1.9	P3 ～ P12	2.0	
P8	34	25	55	P8 ～ P9	2.7	P12 ～ P7	2.2	
P9	51	40	50	P10 ～ P11	2.2	P2 ～ P11	2.0	
P10	50	40	30	P11 ～ P12	2.3	P11 ～ P8	2.2	
P11	40	35	45	P12 ～ P5	2.5			
P12	45	45	40					

A-Ⅲ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物11		検出区	D-5・6　E-5		方位	N10° W
120	梁×桁	2×5		種類	3面庇		床面積（㎡）	41.2
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
上屋柱穴				P1 ～ P6	9.0	P6 ～ P8	4.2	出土遺物 土師器皿1点。 須恵器甕・壺胴部片1点。 青磁碗Ⅱ類高台1点。
P1	60	30	70	P8 ～ P13	9.8	P13 ～ P1	4.0	
P2	38	32	72	上屋桁行柱間		上屋梁間柱間		
P3	30	30	65	P1 ～ P2	1.9	P6 ～ P7	2.0	
P4	40	40	59	P2 ～ P3	1.8	P7 ～ P8	2.2	
P5	70	30	77	P3 ～ P4	2.1	P13 ～ P14	1.9	
P6	42	20	70	P4 ～ P5	1.6	P14 ～ P1	2.1	
P7	42	34	48	P5 ～ P6	1.6			
P8	42	32	90	P8 ～ P9	1.8	下屋梁間柱間		
P9	46	32	88	P9 ～ P10	2.0	P21 ～ P22	0.9	
P10	38	38	74	P10 ～ P11	2.0	P22 ～ P23	1.8	
P11	32	30	73	P11 ～ P12	1.8	P23 ～ P24	2.1	
P12	60	50	78	P12 ～ P13	2.2	P24 ～ P25	1.0	
P13	42	26	38					
P14	66	22	53	下屋桁行柱間				
下屋柱穴				P15 ～ P16	2.3			
P15	104	22	54	P16 ～ P17	1.5			
P16	38	30	54	P17 ～ P18	1.7			
P17	60	40	53	P18 ～ P19	1.8			
P18	33	32	40	P19 ～ P20	2.0			
P19	48	24	47	P20 ～ P21	0.9			
P20	48	34	44	P25 ～ P26	1.1			
P21	40	32	44	P26 ～ P27	1.9			
P22	42	42	72	P27 ～ P28	2.1			
P23	42	32	40	P28 ～ P29	1.9			
P24	64	32	52	P29 ～ P30	2.0			
P25	62	44	42	P30 ～ P31	2.1			
P26	32	30	50					
P27	46	23	54					
P28	32	32	50					
P29	42	34	42					
P30	40	34	54					
P31	30	26	42					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物12		検出区	E-5・6		方位	N15° W
121	梁×桁	2×2		種類			床面積（㎡）	14.4
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	96	65	42	P1 ～ P3	3.3	P3 ～ P5	3.5	
P2	38	32	44	P5 ～ P7	3.7	P7 ～ P1	3.9	
P3	33	28	21	P1 ～ P2	1.5	P3 ～ P4	1.7	
P4	40	34	18	P2 ～ P3	1.8	P4 ～ P5	1.8	
P5	60	48	48	P5 ～ P6	1.7	P7 ～ P8	1.8	
P6	36	35	37	P6 ～ P7	2.0	P8 ～ P1	2.1	
P7	75	42	36					
P8	30	30	31					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物13		検出区	C・D-4		方位	N15° W
121	梁×桁	2×3		種類			床面積（㎡）	17.5
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	25	20	P1 ～ P4	5.0	P4 ～ P6	3.3	
P2	35	35	25	P6 ～ P9	5.3	P9 ～ P1	3.3	
P3	30	30	25	P1 ～ P2	1.7	P4 ～ P5	1.7	
P4	30	26	28	P2 ～ P3	1.6	P5 ～ P6	1.6	
P5	30	25	15	P3 ～ P4	1.7	P9 ～ P10	1.4	
P6	40	25	20	P6 ～ P7	1.6	P10 ～ P1	1.9	
P7	25	25	15	P7 ～ P8	1.8			
P8	25	23	18	P8 ～ P9	1.9			
P9	30	25	15					
P10	25	20	16					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物14		検出区	D-5		方位	N20° W
122	梁×桁	2×3		種類	総柱		床面積（㎡）	19.1
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	38	35	30	P1 ～ P4	5.8	P4 ～ P6	3.0	
P2	30	30	36	P6 ～ P9	5.8	P9 ～ P1	3.3	
P3	50	28	55	P1 ～ P2	2.2	P4 ～ P5	1.7	
P4	72	30	35	P2 ～ P3	1.8	P5 ～ P6	1.3	
P5	53	40	50	P3 ～ P4	1.8	P9 ～ P10	1.6	
P6	42	32	45	P6 ～ P7	1.8	P10 ～ P1	1.7	
P7	35	30	45	P7 ～ P8	1.9	P12 ～ P5	1.7	
P8	40	35	28	P8 ～ P9	2.1	P3 ～ P12	2.0	
P9	35	35	50	P10 ～ P11	2.3	P12 ～ P7	1.1	
P10	33	26	45	P11 ～ P12	1.7	P2 ～ P11	1.8	
P11	30	25	35			P11 ～ P8	1.5	
P12	35	35	35					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物15		検出区	D・E-3・4		方位	N0° W
122	梁×桁	2×2		種類			床面積（㎡）	12.6
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	25	20	25	P1 ～ P3	3.6	P3 ～ P5	3.4	
P2	20	20	15	P5 ～ P7	3.6	P7 ～ P1	3.5	
P3	25	25	25	P1 ～ P2	1.7	P3 ～ P4	1.8	
P4	23	20	36	P2 ～ P3	1.9	P4 ～ P5	1.6	
P5	20	20	20	P5 ～ P6	1.8	P7 ～ P8	1.7	
P6	20	20	16	P6 ～ P7	1.8	P8 ～ P1	1.8	
P7	20	20	20					
P8	30	28	35					

B-Ⅱ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物16		検出区	B-6・7		方位	N5° W
133	梁×桁	2×3		種類	4面庇		床面積（㎡）	28.3
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
上屋柱穴				P1 ～ P4	6.9	P4 ～ P6	4.1	
P1	40	35	56	P6 ～ P8	6.9	P8 ～ P1	4.1	
P2	30	30	60	上屋桁行柱間		上屋梁間柱間		
P3	35	32	65	P1 ～ P2	2.4	P4 ～ P5	2.1	
P4	22	20	40	P2 ～ P3	2.2	P5 ～ P6	2.0	
P5	35	30	55	P3 ～ P4	2.3	P8 ～ P9	2.0	
P6	24	16	42	P6 ～ P7	2.2	P9 ～ P1	2.1	
P7	30	25	55	P7 ～ P8	4.7			
P8	35	32	55	下屋桁行柱間		下屋梁間柱間		
P9	50	30	62	P10 ～ P11	2.6	P14 ～ P15	2.2	
下屋柱穴				P11 ～ P12	2.2	P15 ～ P16	2.0	
P10	25	25	50	P12 ～ P13	2.3	P20 ～ P21	2.1	
P11	30	20	35	P17 ～ P18	2.2	P21 ～ P22	2.2	
P12	25	22	45	P18 ～ P19	4.8			
P13	22	15	30					
P14	20	15	22					
P15	35	20	24					
P16	30	25	50					
P17	20	16	25					
P18	40	25	35					
P19	25	25	65					
P20	35	25	45					
P21	38	30	30					
P22	25	23	18					

第73表　中世掘立柱建物跡計測表Ｂ－Ⅱ・Ⅲ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物17	検出区	C-7・8, D-7	方位	N10° W
134	梁×桁	2×3	種類		床面積（㎡）	38.1

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	29	45	P1 ～ P3	7.5	P3 ～ P5	4.7	
P2	28	25	34	P5 ～ P8	8.1	P8 ～ P1	4.3	
P3	28	28	40	P1 ～ P2	2.1	P3 ～ P4	2.2	
P4	30	27	45	P2 ～ P3	5.4	P4 ～ P5	2.5	
P5	30	28	30	P5 ～ P6	2.8	P8 ～ P9	1.8	
P6	30	26	35	P6 ～ P7	3.2	P9 ～ P1	2.5	
P7	25	25	35	P7 ～ P8	2.1			
P8	26	25	28					
P9	30	26	30					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物18	検出区	A-7　B-6・7	方位	N0° W
134	梁×桁	2×3	種類		床面積（㎡）	15.6

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	25	20	15	P3 ～ P6	(5.2)	P6 ～ P1	3.0	柱間の（ ）は推定値を表す。
P2	25	25	15	P1 ～ P2	2.0	P6 ～ P7	1.7	
P3	25	20	25	P3 ～ P4	1.8	P7 ～ P1	1.3	
P4	30	25	25	P4 ～ P5	1.7			
P5	25	22	25	P5 ～ P6	1.7			
P6	25	25	25					
P7	25	25	25					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物19	検出区	B・C-6・7	方位	N0° W
135	梁×桁	2×3	種類	2面庇	床面積（㎡）	28.6

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
上屋柱穴				P1 ～ P4	6.6	P4 ～ P6	4.2	出土遺物 土師器坏（内外面煤付着・糸切底）2点。
P1	40	35	56	P6 ～ P9	6.8	P9 ～ P1	4.2	
P2	30	30	60	上屋桁行柱間		上屋梁間柱間		
P3	35	32	65	P1 ～ P2	2.2	P4 ～ P5	2.0	
P4	22	20	40	P2 ～ P3	2.2	P5 ～ P6	2.2	
P5	35	30	55	P3 ～ P4	2.2	P9 ～ P10	2.0	
P6	24	16	42	P6 ～ P7	2.2	P10 ～ P1	2.2	
P7	30	25	55	P7 ～ P8	2.3			
P8	35	32	55	P8 ～ P9	2.3			
P9	50	30	62	下屋梁間柱間		下屋梁間柱間		
P10	25	25	50	P11 ～ P12	2.4	P14 ～ P15	3.0	
下屋柱穴				P12 ～ P13	2.2	P15 ～ P16	2.4	
P11	30	20	35	P13 ～ P14	3.3			
P12	25	22	45					
P13	22	15	30					
P14	20	15	22					
P15	35	20	24					
P16	30	25	50					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物20	検出区	B-6･7	方位	N2° W
135	梁×桁	2×3	種類		床面積（㎡）	10.5

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	23	23	P1 ～ P3	3.4	P3 ～ P5	3.1	
P2	24	18	25	P5 ～ P7	3.1	P7 ～ P1	3.0	
P3	30	28	26	P1 ～ P2	1.6	P3 ～ P4	1.6	
P4	20	20	25	P2 ～ P3	1.8	P4 ～ P5	1.5	
P5	22	20	29	P5 ～ P6	1.6	P7 ～ P8	1.6	
P6	25	20	25	P6 ～ P7	1.5	P8 ～ P1	1.4	
P7	25	25	30					
P8	24	20	35					
下層柱穴								
P9	20	20	20					
P10	22	20	30					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物21	検出区	C･D-6　D-7	方位	N0° W
136	梁×桁	2×2	種類	総柱	床面積（㎡）	5.6

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	26	23	P1 ～ P3	2.8	P3 ～ P5	2.7	
P2	50	38	28	P5 ～ P7	2.7	P7 ～ P1	2.8	
P3	42	28	25	P1 ～ P2	1.3	P3 ～ P4	1.5	
P4	46	25	43	P2 ～ P3	1.5	P4 ～ P5	1.2	
P5	47	40	40	P5 ～ P6	1.5	P7 ～ P8	1.4	
P6	25	22	40	P6 ～ P7	1.2	P8 ～ P1	1.4	
P7	24	20	32	P8 ～ P9	1.6	P2 ～ P9	1.4	
P8	34	25	41	P9 ～ P4	1.4	P9 ～ P6	1.3	
P9	26	24	27					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物22	検出区	C・D-5・6	方位	N15° W
136	梁×桁	2×2	種類	総柱	床面積（㎡）	11.8

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	25	40	P1 ～ P3	3.6	P3 ～ P5	3.1	
P2	34	30	25	P5 ～ P7	3.8	P7 ～ P1	2.6	
P3	30	25	35	P1 ～ P2	1.7	P3 ～ P4	1.5	
P4	35	30	40	P2 ～ P3	1.9	P4 ～ P5	1.6	
P5	25	25	49	P5 ～ P6	2.0	P7 ～ P8	1.3	
P6	30	30	52	P6 ～ P7	1.8	P8 ～ P1	1.3	
P7	25	25	50	P8 ～ P9	1.7	P2 ～ P9	1.2	
P8	28	25	40	P9 ～ P4	1.8	P9 ～ P6	1.4	

挿図番号	遺構名	掘立柱建物23	検出区	C-6　D-6・7	方位	N10° W
137	梁×桁	2×2	種類	総柱	床面積（㎡）	10.2

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	25	35	P1 ～ P3	3.4	P3 ～ P5	3.0	出土遺物 土師器坏（糸切底）1点。
P2	50	45	65	P5 ～ P7	3.1	P7 ～ P1	2.8	
P3	30	20	50	P1 ～ P2	1.4	P3 ～ P4	1.5	
P4	35	25	45	P2 ～ P3	2.0	P4 ～ P5	1.5	
P5	25	24	45	P5 ～ P6	1.6	P7 ～ P8	1.4	
P6	30	25	35	P6 ～ P7	1.5	P8 ～ P1	1.4	
P7	30	20	30	P8 ～ P9	1.7	P2 ～ P9	1.6	
P8	25	20	25	P9 ～ P4	2.0	P9 ～ P6	1.4	
P9	25	20	25					

B-Ⅲ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物24	検出区	C-7　D-6・7	方位	N6° E
139	梁×桁	3×4	種類		床面積（㎡）	50.2

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	35	30	50	P1 ～ P5	8.5	P5 ～ P8	5.8	
P2	40	35	54	P8 ～ P12	7.6	P1 ～ P12	5.9	
P3	60	30	15	P1 ～ P2	2.1	P5 ～ P6	1.8	
P4	38	30	12	P2 ～ P3	2.6	P6 ～ P7	2.1	
P5	55	40	35	P3 ～ P4	1.9	P7 ～ P8	1.9	
P6	45	30	25	P4 ～ P5	1.9	P12 ～ P13	1.7	
P7	60	40	40	P8 ～ P9	2.8	P13 ～ P14	2.3	
P8	50	42	50	P9 ～ P10	1.2	P14 ～ P1	1.9	
P9	37	25	50	P10 ～ P11	1.3			
P10	40	35	64	P11 ～ P12	2.3			
P11	40	32	25					
P12	47	30	55					
P13	35	25	60					
P14	35	35	50					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物25	検出区	C・D-6	方位	N0° W
139	梁×桁	2×3	種類		床面積（㎡）	15.0

柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	25	40	P1 ～ P4	4.8	P4 ～ P6	2.9	
P2	35	30	35	P6 ～ P9	5.0	P9 ～ P1	3.0	
P3	80	60	35	P1 ～ P2	1.4	P4 ～ P5	1.5	
P4	25	25	40	P2 ～ P3	1.9	P5 ～ P6	1.4	
P5	25	22	40	P3 ～ P4	1.5	P9 ～ P10	1.5	
P6	30	30	40	P6 ～ P7	1.7	P10 ～ P1	1.5	
P7	30	25	40	P7 ～ P8	1.5			
P8	40	30	35	P8 ～ P9	1.8			
P9	30	20	33					
P10	30	25	26					

第74表　中世掘立柱建物跡計測表C－Ⅱ・Ⅲ期・D－Ⅱ期

C-Ⅱ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物26		検出区	E-8・9		方位	N20° E
149	梁×桁	2×3		種類	4面庇		床面積（㎡）	26.5
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
上屋柱穴				P1 ～ P3	(4.1)	P7 ～ P1	4.2	柱間の（ ）は推定値を表す。
P1	33	30	55	P4 ～ P7	6.3			
P2	35	30	55	上屋桁行柱間		上屋梁間柱間		
P3	30	25	65	P1 ～ P2	2.0	P7 ～ P8	2.1	
P4	30	25	69	P2 ～ P3	2.1	P8 ～ P1	2.1	
P5	30	28	75	P4 ～ P5	2.1			
P6	30	25	83	P5 ～ P6	2.1			
P7	35	33	76	P6 ～ P7	2.1			
P8	25	25	70	下屋桁行柱間		下屋梁間柱間		
下屋柱穴				P9 ～ P10	5.3	P11 ～ P12	1.3	
P9	34	30	30	P10 ～ P11	3.0	P12 ～ P13	4.4	
P10	22	22	43	P13 ～ P14	1.0	P18 ～ P19	0.9	
P11	34	28	52	P14 ～ P15	2.0	P19 ～ P20	2.6	
P12	27	22	50	P15 ～ P16	2.1	P20 ～ P9	1.8	
P13	33	28	48	P16 ～ P17	2.2			
P14	39	38	50	P17 ～ P18	1.5			
P15	30	28	60					
P16	25	25	50					
P17	30	23	50					
P18	33	30	40					
P19	35	30	30					
P20	33	30	27					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物27		検出区	F-8・9		方位	N12° E
149	梁×桁	2×3		種類			床面積（㎡）	16.2
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	28	28	P1 ～ P4	5.3	P4 ～ P6	2.8	
P2	25	24	30	P6 ～ P9	5.6	P9 ～ P1	2.9	
P3	22	20	28	P1 ～ P2	1.8	P4 ～ P5	1.5	
P4	25	20	20	P2 ～ P3	1.9	P5 ～ P6	1.3	
P5	25	20	32	P3 ～ P4	1.7	P9 ～ P10	1.5	
P6	25	20	20	P6 ～ P7	2.1	P10 ～ P1	1.4	
P7	25	25	32	P7 ～ P8	1.7			
P8	40	24	40	P8 ～ P9	1.8			
P9	30	25	45					
P10	30	28	33					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物28		検出区	D・E-7		方位	N0° W
150	梁×桁	2×3		種類			床面積（㎡）	25.6
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	40	30	28	P1 ～ P4	6.1	P7 ～ P1	4.2	出土遺物 白磁皿Ⅸ類1点。 樋万丈系捏鉢1点。 柱間の（ ）は推定値を表す。
P2	37	25	58	P5 ～ P7	(4.7)			
P3	37	32	60	P1 ～ P2	2.2	P7 ～ P8	2.1	
P4	35	28	35	P2 ～ P3	2.0	P8 ～ P1	2.1	
P5	58	36	40	P3 ～ P4	1.9			
P6	38	33	48	P5 ～ P6	1.9			
P7	31	28	25	P6 ～ P7	2.8			
P8	33	32	38					

C-Ⅲ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物29		検出区	D-9		方位	N0° W
152	梁×桁	2×(3)		種類			床面積（㎡）	20.2
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
上屋柱穴				P1 ～ P2	(1.9)	P6 ～ P1	3.6	柱間の（ ）は推定値を表す。
P1	40	35	65	P3 ～ P6	(5.6)			
P2	40	30	75	上屋桁行柱間		上屋梁間柱間		
P3	45	40	65	P1 ～ P2	1.9	P6 ～ P7	1.6	
P4	45	35	70	P3 ～ P4	2.0	P7 ～ P1	2.0	
P5	60	50	70	P4 ～ P5	1.7			
P6	45	40	80	P5 ～ P6	1.9			
P7	33	29	10	下屋桁行柱間		下屋梁間柱間		
下屋柱穴				P8 ～ P9	2.0	P13 ～ P14	1.7	
P8	30	20	45	P10 ～ P11	1.8			
P9	28	20	35	P11 ～ P12	1.9			
P10	30	28	60					
P11	25	25	50					
P12	30	28	45					
P13	20	15	25					
P14	30	20	50					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物30		検出区	E-9　F-8・9		方位	N0° W
152	梁×桁	2×3		種類	3面庇？		床面積（㎡）	10.6
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	28	24	34	P1 ～ P4	3.8	P4 ～ P6	2.8	
P2	28	22	34	P6 ～ P9	3.8	P9 ～ P1	2.8	
P3	24	20	34	P1 ～ P2	1.3	P4 ～ P5	1.5	
P4	26	22	28	P2 ～ P3	1.3	P5 ～ P6	1.3	
P5	22	16	28	P3 ～ P4	1.2	P9 ～ P10	1.4	
P6	28	20	38	P6 ～ P7	1.2	P10 ～ P1	1.4	
P7	26	20	38	P7 ～ P8	1.4			
P8	26	20	38	P8 ～ P9	1.2			
P9	28	24	40					
P10	28	22	30					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物31		検出区	E-8・9		方位	N13° E
153	梁×桁	2×4		種類			床面積（㎡）	20.9
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	25	40	P1 ～ P5	5.5	P5 ～ P7	3.7	
P2	34	30	25	P7 ～ P11	5.4	P11 ～ P1	3.8	
P3	30	25	35	P1 ～ P2	1.5	P5 ～ P6	2.0	
P4	35	30	40	P2 ～ P3	1.4	P6 ～ P7	1.7	
P5	25	25	49	P3 ～ P4	1.4	P11 ～ P12	1.8	
P6	30	30	52	P4 ～ P5	1.2	P12 ～ P1	2.0	
P7	25	25	50	P7 ～ P8	1.2			
P8	28	25	40	P8 ～ P9	1.3			
P9	35	30	40	P9 ～ P10	1.2			
P10	35	35	45	P10 ～ P11	1.7			
P11	34	30	50					
P12	35	30	55					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物32		検出区	F-9		方位	N4° W
153	梁×桁	2×3		種類			床面積（㎡）	18.7
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	25	39	P1 ～ P4	4.7	P4 ～ P6	3.5	出土遺物 青磁碗Ⅱb類（鎬蓮弁文）1点。
P2	25	25	45	P6 ～ P9	5.2	P9 ～ P1	3.6	
P3	34	25	30	P1 ～ P2	1.5	P4 ～ P5	1.8	
P4	30	25	30	P2 ～ P3	1.6	P5 ～ P6	1.7	
P5	30	25	45	P3 ～ P4	1.6	P9 ～ P10	1.9	
P6	28	25	40	P6 ～ P7	1.9	P10 ～ P1	1.7	
P7	30	30	45	P7 ～ P8	1.7			
P8	30	26	12	P8 ～ P9	1.6			
P9	25	25	50					
P10	30	28	42					

D-Ⅱ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物33		検出区	H・I-4		方位	N24° E
157	梁×桁	2×4		種類	4面庇		床面積（㎡）	26.6
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
上屋柱穴				P1 ～ P5	7.2	P5 ～ P7	3.7	
P1	32	29	40	P7 ～ P11	6.9	P11 ～ P1	3.4	
P2	32	26	44	上屋桁行柱間		上屋梁間柱間		
P3	36	22	20	P1 ～ P2	2.2	P5 ～ P6	1.9	
P4	36	30	60	P2 ～ P3	2.2	P6 ～ P7	1.8	
P5	28	26	40	P3 ～ P4	1.6	P11 ～ P12	2.1	
P6	30	22	28	P4 ～ P5	1.2	P12 ～ P1	1.3	
P7	30	22	24	P7 ～ P8	1.1			
P8	38	30	54	P8 ～ P9	1.9			
P9	37	30	54	P9 ～ P10	2.0			
P10	34	28	56	P10 ～ P11	1.9			
P11	30	26	46	下屋桁行柱間		下屋梁間柱間		
P12	32	26	40	P14 ～ P14	2.5	P18 ～ P19	3.0	
下屋柱穴				P15 ～ P16	1.3	P25 ～ P26	1.0	
P13	28	22	22	P16 ～ P17	1.2	P26 ～ P27	2.2	
P14	30	26	44	P17 ～ P18	0.7			
P15	36	30	52	P20 ～ P21	2.3			
P16	38	30	70	P22 ～ P23	2.0			
P17	27	20	38	P23 ～ P24	1.6			
P18	22	22	42	P24 ～ P25	1.0			
P19	30	27	16					
P20	28	26	38					
P21	32	22	32					
P22	30	27	20					
P23	36	30	38					
P24	30	24	48					
P25	30	30	20					
P26	28	24	18					
P27	34	29	44					

第75表　中世掘立柱建物跡計測表D－Ⅱ・Ⅲ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物34		検出区	H-5		方位	N0° W
158	梁×桁	1×3		種類			床面積（㎡）	6.5
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	30	20	28	P1 ～ P4	3.5	P4 ～ P5	1.8	
P2	28	20	24	P5 ～ P8	3.6	P8 ～ P1	1.6	
P3	54	32	50	P1 ～ P2	1.2	P4 ～ P5	1.8	
P4	50	12	501	P2 ～ P3	1.1	P8 ～ P1	1.6	
P5	46	30	38	P3 ～ P4	1.2			
P6	30	28	36	P5 ～ P6	1.1			
P7	36	28	36	P6 ～ P7	1.2			
P8	50	28	44	P7 ～ P8	1.3			

D-Ⅲ期

挿図番号	遺構名	掘立柱建物35		検出区	H-4・5 I-5		方位	N0° W
158	梁×桁	2×3		種類			床面積（㎡）	33.0
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
P1	28	23	58	P1 ～ P4	6.6	P4 ～ P6	4.8	
P2	30	24	50	P6 ～ P9	6.5	P9 ～ P1	5.0	
P3	56	26	50	P1 ～ P2	1.7	P4 ～ P5	2.3	
P4	43	40	50	P2 ～ P3	2.5	P5 ～ P6	2.5	
P5	32	28	40	P3 ～ P4	2.4	P9 ～ P1	5.0	
P6	28	26	32	P6 ～ P7	2.5			
P7	32	30	31	P7 ～ P8	1.8			
P8	22	21	55	P8 ～ P9	2.2			
P9	26	23	50					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物36		検出区	I·J-3·4		方位	N10° W
159	梁×桁	2×3		種類	4面庇		床面積（㎡）	24.4
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
上屋柱穴				P1 ～ P4	5.0	P4 ～ P6	3.7	
P1	40	35	56	P6 ～ P9	5.8	P9 ～ P1	4.2	
P2	30	30	60	上屋桁行柱間		上屋梁間柱間		
P3	35	32	65	P1 ～ P2	1.2	P4 ～ P5	1.9	
P4	22	20	40	P2 ～ P3	1.4	P5 ～ P6	1.8	
P5	35	30	55	P3 ～ P4	2.4	P9 ～ P10	2.0	
P6	24	16	42	P6 ～ P7	2.4	P10 ～ P1	2.2	
P7	30	25	55	P7 ～ P8	1.9			
P8	35	32	55	P8 ～ P9	1.5			
P9	50	30	62	下屋桁行柱間		下屋梁間柱間		
P10	25	25	50	P11 ～ P12	2.5	P14 ～ P15	2.2	
下屋柱穴				P12 ～ P13	1.1	P15 ～ P16	2.5	
P11	30	20	35	P13 ～ P14	1.1	P16 ～ P17	2.3	
P12	25	22	45	P17 ～ P18	1.5	P21 ～ P22	1.4	
P13	22	15	30	P18 ～ P19	2.3	P22 ～ P23	1.8	
P14	20	15	22	P19 ～ P20	2.3			
P15	35	20	24	P20 ～ P21	3.1			
P16	30	25	50					
P17	20	16	25					
P18	40	25	35					
P19	25	25	65					
P20	35	25	45					
P21	38	30	30					
P22	25	23	18					
P23	25	23	18					

挿図番号	遺構名	掘立柱建物37		検出区	I-3·4		方位	N10° W
160	梁×桁	2×3		種類	2面庇		床面積（㎡）	27.4
柱穴番号	柱穴（cm）			柱間計測表				備考
	長径	短径	深さ	桁行（m）		梁間（m）		
上屋柱穴				P1 ～ P4	5.7	P4 ～ P6	4.8	
P1	24	20	25					
P2	20	15	30	上屋桁行柱間		上屋梁間柱間		
P3	20	15	25	P1 ～ P2	1.9	P4 ～ P5	2.5	
P4	20	20	30	P2 ～ P3	1.8	P5 ～ P6	2.3	
P5	24	20	30	P3 ～ P4	2.0	P7 ～ P1	2.1	
P6	25	23	35					
P7	25	20	30					
下屋柱穴				下屋桁行柱間				
P8	28	23	25	P8 ～ P9	1.4			
P9	25	25	30	P9 ～ P10	1.2			
P10	40	35	35	P10 ～ P11	1.5			
P11	35	30	35	P11 ～ P12	1.8			
P12	20	16	25	P13 ～ P14	1.4			
P13	30	28	40	P14 ～ P15	2.3			
P14	25	25	36					
P15	25	23	35					

第76表　中世A群土坑・柱穴計測表

挿図番号	遺構名	旧遺構名	区域	検出面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形態
125	土坑1	円形土坑1	D-3	Ⅲa層	78	64	10	円形
	土坑2	円形土坑2	D-3・4	Ⅲa層	70	68	33	円形
	土坑3	円形土坑3	D-4	Ⅲa層	114	74	10	楕円形
	土坑4	円形土坑4	D-4	Ⅲa層	84	78	16	円形
	土坑5	円形土坑5	D-4	Ⅲa層	80	68	12	円形
	土坑6	円形土坑6	D-4	Ⅲa層	135	112	14	楕円形
	土坑7	円形土坑7	D-4	Ⅲa層	72	60	10	楕円形
	土坑8	円形土坑8	D-4・5	Ⅲa層	64	62	16	円形
	土坑9	円形土坑9	D-5	Ⅲa層	90	80	12	楕円形
	土坑10	円形土坑10	D-5	Ⅲa層	78	76	14	円形
	土坑11	円形土坑11	D-4	Ⅲa層	62	56	36	円形
	土坑12	円形土坑12	E-5	Ⅲa層	58	54	25	円形
	土坑13	円形土坑13	E-5	Ⅲa層	62	60	20	円形
	土坑14	円形土坑14	E-5	Ⅲa層	72	60	14	楕円形
126	土坑15	円形土坑15	E-5	Ⅲa層	70	64	7	楕円形
	土坑16	円形土坑16	E-5	Ⅲa層	72	60	11	楕円形
	土坑17	円形土坑17	E-5	Ⅲa層	92	78	20	楕円形
	土坑18	円形土坑18	E-5	Ⅲa層	88	80	46	楕円形
	土坑19	円形土坑19	E-5	Ⅲa層	84	84	17	円形
	土坑20		E-5	Ⅲa層	68	58	16	楕円形
	土坑21	円形土坑20	E-5	Ⅲa層	78	72	7	円形
	土坑22	円形土坑21	E-5	Ⅲa層	102	94	6	楕円形
	土坑23	円形土坑22	D-5	Ⅲa層	80	72	20	楕円形
	土坑24	円形土坑23	D-5	Ⅲa層	54	48	14	円形
	土坑25	円形土坑24	D-5	Ⅲa層	84	82	10	円形
	土坑26	円形土坑25	D-5	Ⅲa層	68	60	24	円形
	土坑27	円形土坑26	D-5	Ⅲa層	82	82	10	円形
127	土坑28	円形土坑27	D-5	Ⅲa層	74	70	14	円形
	土坑29	円形土坑28	D-5	Ⅲa層	106	94	33	楕円形
	土坑30	円形土坑29	D-6	Ⅲa層	60	52	16	楕円形
	土坑31	円形土坑30	D-5	Ⅲa層	90	66	12	楕円形
	土坑32	円形土坑31	D-5	Ⅲa層	76	70	11	円形
	土坑33	円形土坑32	D-5	Ⅲa層	92	82	10	円形
	土坑34	円形土坑33	D-5	Ⅲa層	86	73	12	円形
	土坑35	円形土坑34	D-5	Ⅲa層	76	52	12	円形
	土坑36	円形土坑35	D-5	Ⅲa層	110	69	19	楕円形
	土坑37	円形土坑36	D-5	Ⅲa層	73	72	6	円形
	土坑38	円形土坑37	D-5	Ⅲa層	78	71	20	円形
	土坑39	円形土坑38	D-5	Ⅲa層	106	80	14	楕円形
	土坑40	円形土坑39	D-5	Ⅲa層	75	66	23	円形
128	土坑41	円形土坑40	D-5	Ⅲa層	74	72	12	円形
	土坑42	円形土坑41	D-5	Ⅲa層	75	72	36	円形
	土坑43	円形土坑42	D-5	Ⅲa層	72	79	14	円形
	土坑44	円形土坑43	C・D-5	Ⅲa層	85	82	13	円形
	土坑45	円形土坑44	C・D-5	Ⅲa層	100	91	18	円形
	土坑46	円形土坑45	C・D-5	Ⅲa層	94	82	13	楕円形
	土坑47	円形土坑46	C-5	Ⅲa層	81	76	10	円形
	土坑48	円形土坑47	C-5	Ⅲa層	61	57	19	円形
	土坑49	円形土坑48	C-4・5	Ⅲa層	68	65	11	円形
	土坑50	円形土坑49	C-4	Ⅲa層	84	80	14	円形
	土坑51	円形土坑50	C-5	Ⅲa層	98	78	11	楕円形
	土坑52	円形土坑51	C-5	Ⅲa層	96	76	12	楕円形
	土坑53	円形土坑52	C-5	Ⅲa層	72	61	12	円形
	土坑54	円形土坑53	C-5	Ⅲa層	68	59	12	楕円形
129	土坑55	円形土坑79	D-6	Ⅲa層	56	46	9	楕円形
	土坑56	円形土坑80	D-6	Ⅲa層	66	60	8	円形
	土坑57	円形土坑81	D-6	Ⅲa層	88	72	12	円形
	土坑58	円形土坑82	D-6	Ⅲa層	102	90	24	円形
	土坑59	円形土坑83	D-6	Ⅲa層	74	59	10	楕円形
	土坑60	円形土坑84	D-6	Ⅲa層	94	78	16	楕円形
	土坑61	円形土坑86	D-6	Ⅲa層	68	64	18	円形
	土坑62	円形土坑87	D-6	Ⅲa層	66	60	36	円形
	土坑63	円形土坑88	D-6	Ⅲa層	74	56	8	楕円形
	土坑64	円形土坑89	E-6	Ⅲa層	60	52	10	楕円形
	土坑65	円形土坑107	E-5	Ⅲa層	140	116	26	楕円形
130	土坑66	土坑8	F-6	Ⅲa層	76	60	13	円形
	土坑67	土坑11	C-5	Ⅲa層	154	58	10	－
	土坑68	土坑12	C-5	Ⅲa層	64	57	10	円形
	土坑69	土坑14	C-5	Ⅲa層	100	70	9	楕円形
	土坑70	土坑67	D-5	Ⅲa層	65	50	27	楕円形
	土坑71	土坑87	D-6	Ⅲa層	74	62	20	円形
	土坑72	土坑93	D-6	Ⅲa層	74	52	17	楕円形
	土坑73	土坑94	E-6	Ⅲa層	45	34	14	楕円形
	土坑74	土坑95	E-5	Ⅲa層	52	36	12	楕円形
	土坑75	土坑96	E-5	Ⅲa層	193	96	32	楕円形
	土坑76	土坑99	E-5	Ⅲa層	92	80	10	円形
131	土坑77	土坑200	D-3	Ⅲa層	150	102	17	楕円形
	土坑78	土坑201	D・E-3	Ⅲa層	150	96	17	楕円形
	土坑79	土坑201	E-3	Ⅲa層	90	83	18	円形
	土坑80	土坑202	E-3・4	Ⅲa層	198	43	20	隅丸方形
	土坑81	土坑203	E-4	Ⅲa層	94	27	17	隅丸方形
	土坑82	土坑212	F・G-5	Ⅲa層	111	44	13	楕円形
131	土坑83	土坑210	E-5	Ⅲa層	83	56	11	楕円形
	土坑84	土坑210	E-5	Ⅲa層	113	(40)	13	楕円形
	土坑85	土坑210	E-5	Ⅲa層	95	35	20	楕円形
	土坑86	土坑211	D-5	Ⅲa層	63	53	10	円形
	土坑87	土坑216	E-5	Ⅲa層	95	93	13	円形
	柱穴224	Pit224	D-5	Ⅲa層	52	40	52	円形
	柱穴259	Pit259	D-5	Ⅲa層	39	37	14	円形
132	柱穴272	Pit272	D-5	Ⅲa層	45	32	36	円形
	柱穴386	Pit386	D-6	Ⅲa層	30	28	36	円形
	柱穴414	Pit414	D-6	Ⅲa層	62	45	73	円形
	柱穴430	Pit430	E-6	Ⅲa層	35	25	16	円形
	柱穴449	Pit449	E-5	Ⅲa層	46	41	43	円形
	柱穴487	Pit487	E-5	Ⅲa層	55	54	56	円形
	柱穴491	Pit491	E-5	Ⅲa層	34	32	71	円形
	柱穴500	Pit500	D-5	Ⅲa層	43	40	16	円形
	柱穴718	Pit718	E-5	Ⅲa層	20	20	50	円形

第77表　中世B群墓跡・土坑・柱穴計測表（1）

挿図番号	遺構名	旧遺構名	区域	検出面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形態
140	土坑88	大型土坑3	C-7南	Ⅲa層	224	96	26	長方形
	土坑89	円形土坑54	C-5	Ⅲa層	98	89	8	円形
	土坑90	円形土坑55	C-5	Ⅲa層	94	84	10	円形
	土坑91	円形土坑56	C-5	Ⅲa層	89	78	22	円形
	土坑92	円形土坑57	C-5・6	Ⅲa層	90	86	12	円形
	土坑93	円形土坑58	C-6	Ⅲa層	96	92	12	円形
	土坑94	円形土坑59	D-6	Ⅲa層	109	100	20	円形
	土坑95	円形土坑60	C-6	Ⅲa層	100	80	10	円形
	土坑96	円形土坑61	C-6	Ⅲa層	96	76	10	楕円形
	土坑97	円形土坑62	C-6	Ⅲa層	106	54	4	楕円形
	土坑98	円形土坑63	C-6	Ⅲa層	73	68	11	円形
	土坑99	円形土坑64	C-6	Ⅲa層	80	76	13	円形
141	土坑100	円形土坑65	C-6	Ⅲa層	60	50	8	楕円形
	土坑101	円形土坑66	C・D-6	Ⅲa層	70	54	4	楕円形
	土坑102	円形土坑67	C・D-6	Ⅲa層	85	52	10	楕円形
	土坑103	円形土坑68	C・D-6	Ⅲa層	58	49	10	楕円形
	土坑104	円形土坑69	C・D-6	Ⅲa層	50	47	10	円形
	土坑105	円形土坑70	D-6	Ⅲa層	112	86	10	楕円形
	土坑106	円形土坑71	D-6・7	Ⅲa層	93	52	14	楕円形
	土坑107	円形土坑72	D-7	Ⅲa層	45	38	8	円形
	土坑108	円形土坑73	D-6・7	Ⅲa層	76	53	10	楕円形
	土坑109	円形土坑74	D-6	Ⅲa層	70	62	12	円形
	土坑110	円形土坑75	D-6	Ⅲa層	118	100	12	楕円形
	土坑111	円形土坑76	D-6	Ⅲa層	112	90	19	円形
	土坑112	円形土坑77	D-6	Ⅲa層	64	56	6	円形
	土坑113	円形土坑78	D-6	Ⅲa層	70	65	9	円形
	土坑114	円形土坑85	D-6	Ⅲa層	83	79	14	円形
	土坑115	円形土坑91	C-6・7	Ⅲa層	100	90	26	楕円形
	土坑116	土坑213	C-6・7	Ⅲa層	(90)	85	13	円形
	土坑117	円形土坑90	C-6・7	Ⅲa層	92	76	20	楕円形
142	土坑118	円形土坑92	C-6	Ⅲa層	66	64	11	円形
	土坑119	円形土坑93	C-7	Ⅲa層	56	54	13	円形
	土坑120	円形土坑94	C-6	Ⅲa層	104	86	12	楕円形
	土坑121	円形土坑95	B-6	Ⅲa層	120	90	10	楕円形
	土坑122	円形土坑96	B-6	Ⅲa層	74	68	16	楕円形
	土坑123	円形土坑97	B-6	Ⅲa層	76	70	10	円形
	土坑124	円形土坑98	C-6	Ⅲa層	68	62	12	円形
	土坑125	円形土坑99	C-5	Ⅲa層	56	52	17	円形
	土坑126	円形土坑100	B-5	Ⅲa層	103	61	10	楕円形
	土坑127	円形土坑102	B-5	Ⅲa層	92	90	10	円形
	土坑128	円形土坑101	B-5	Ⅲa層	98	90	9	円形
	土坑129	円形土坑103	B-5	Ⅲa層	74	70	12	円形
	土坑130	円形土坑104	B-5	Ⅲa層	106	90	9	楕円形
	土坑131	円形土坑105	B-5	Ⅲa層	68	60	5	円形
	土坑132	円形土坑106	C-4	Ⅲa層	58	54	8	円形
143	土坑133	土坑9	B-5	Ⅲa層	52	50	12	円形
	土坑134	土坑10	B-5	Ⅲa層	68	54	18	円形
	土坑135	土坑15	B-5	Ⅲa層	89	62	12	隅丸長方形
	土坑136	土坑16	B-5	Ⅲa層	105	64	17	楕円形
	土坑137	土坑18	B-6	Ⅲa層	132	68	38	楕円形
	土坑138	土坑20	B・C-6	Ⅲa層	64	40	12	楕円形
	土坑139	土坑21	C-6	Ⅲa層	62	53	15	円形
	土坑140	土坑23	B-6	Ⅲa層	60	46	16	楕円形
	土坑141	土坑24	B-6	Ⅲa層	51	44	16	円形
	土坑142	土坑25	B-6	Ⅲa層	70	64	4	円形
	土坑143	土坑26	B-7	Ⅲa層	82	76	20	円形
	土坑144	土坑29	B-7	Ⅲa層	76	71	16	楕円形
	土坑145	土坑30	B-7	Ⅲa層	60	52	8	楕円形
	土坑146	土坑28	B-7	Ⅲa層	71	60	14	円形
	土坑147	土坑27	B-7	Ⅲa層	72	66	28	円形
144	土坑148	土坑31	B-7	Ⅲa層	54	52	7	円形
	土坑149	土坑34	B-8	Ⅲa層	66	64	20	円形
	土坑150	土坑33	B-8	Ⅲa層	68	64	17	円形

第78表　中世B群土坑・柱穴計測表（2）

挿図番号	遺構名	旧遺構名	区域	検出面	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	形態
144	土坑151	土坑32	B-8	Ⅲa層	78	74	15	円形
	土坑152	土坑35	B-7・8	Ⅲa層	52	44	8	楕円形
	土坑153	土坑36	B-8	Ⅲa層	46	40	7	円形
	土坑154	土坑37	B-8	Ⅲa層	58	56	19	円形
	土坑155	土坑38	B-8	Ⅲa層	53	50	8	円形
	土坑156	土坑39	B-8	Ⅲa層	86	76	24	楕円形
	土坑157	土坑40	B-8	Ⅲa層	100	78	20	楕円形
	土坑158	土坑41	B-8	Ⅲa層	72	70	20	円形
	土坑159	土坑42	B-8	Ⅲa層	80	76	20	円形
	土坑160	土坑79	C-6	Ⅲa層	82	18	11	楕円形
	土坑161	土坑100	A-7	Ⅲa層	108	(30)	25	－
	土坑162	土坑101	B-7	Ⅲa層	76	72	14	楕円形
	土坑163	土坑102	C-7	Ⅲa層	112	75	17	隅丸方形
	土坑164	土坑103	B-7	Ⅲa層	78	74	20	円形
	土坑165	土坑104	B-7	Ⅲa層	68	66	20	円形
	土坑166	土坑105	B-7	Ⅲa層	76	60	8	楕円形
	土坑167	土坑106	B-7	Ⅲa層	78	70	20	楕円形
	土坑168	土坑107	B-8	Ⅲa層	68	63	36	円形
	土坑169	土坑108	C-8	Ⅲa層	60	56	22	円形
145	土坑170	土坑109	C-8	Ⅲa層	66	56	11	楕円形
	土坑171	土坑110	B-7	Ⅲa層	74	70	22	円形
	土坑172	土坑111	C-7	Ⅲa層	88	64	16	楕円形
	土坑173	土坑112	C-7	Ⅲa層	104	100	16	円形
	土坑174	土坑113	C-7	Ⅲa層	84	77	20	円形
	土坑175	土坑114	C-7	Ⅲa層	89	80	22	円形
	土坑176	土坑115	C-8	Ⅲa層	74	68	22	円形
	土坑177	土坑116	C-7・8	Ⅲa層	66	50	20	円形
	土坑178	土坑117	C-7・8	Ⅲa層	125	54	22	楕円形
	土坑179	土坑118	C-7	Ⅲa層	54	52	18	円形
	土坑180	土坑122	C-7	Ⅲa層	60	54	18	円形
	土坑181	土坑120	C-7	Ⅲa層	136	82	28	楕円形
	土坑182	土坑119	C-7	Ⅲa層	118	76	26	楕円形
	土坑183	土坑121	C-7	Ⅲa層	82	60	12	楕円形
	土坑184	土坑123	C-7	Ⅲa層	98	69	22	楕円形
146	土坑185	土坑124	C-7	Ⅲa層	66	(53)	10	楕円形
	土坑186	土坑125	C-7	Ⅲa層	78	73	18	円形
	土坑187	土坑126	C-7	Ⅲa層	62	50	11	楕円形
	土坑188	土坑127	C-7	Ⅲa層	86	65	16	楕円形
	土坑189	土坑128	C・D-7	Ⅲa層	82	52	30	楕円形
	土坑190	土坑129	B-8	Ⅲa層	55	50	15	円形
	土坑191	土坑130	B-8	Ⅲa層	62	58	17	円形
	土坑192	土坑131	B-8	Ⅲa層	58	50	20	円形
	土坑193	土坑132	C-9	Ⅲa層	74	22	15	楕円形
	土坑194	土坑133	C-8	Ⅲa層	58	40	12	円形
	土坑195		C-8	Ⅲa層	85	70	12	円形
	土坑196	土坑134	C-8	Ⅲa層	66	52	10	隅丸方形
	土坑197	土坑136	D-7	Ⅲa層	56	50	16	円形
	土坑198	土坑137	D-7	Ⅲa層	56	49	20	円形
	土坑199	土坑138	D-7	Ⅲa層	56	36	30	楕円形
	土坑200	土坑139	D-7	Ⅲa層	72	23	22	楕円形
147	土坑201	土坑144	D-7	Ⅲa層	62	54	14	楕円形
	土坑202	土坑214	C・D-6	Ⅲa層	55	47	10	円形
	土坑203	土坑146	D-7	Ⅲa層	54	42	9	楕円形
	土坑204	土坑215	B-7	Ⅲa層	104	70	20	円形
	土坑205	土坑145	D-7	Ⅲa層	66	60	18	円形
	土坑206	焼土1	B-5	Ⅲa層	88	80	10	円形
	土坑207	焼土3	B-5	Ⅲa層	45	34	9	楕円形
	土坑208	焼土4	B-6	Ⅲa層	80	80	10	円形
	土坑209	焼土5	B-6	Ⅲa層	116	106	23	円形
	土坑210	焼土6	B・C-6	Ⅲa層	75	35	20	楕円形
	土坑211	焼土7	B-7	Ⅲa層	86	77	21	円形
	土坑212	焼土8	B-7	Ⅲa層	93	90	20	円形
	土坑213	焼土18	C-7	Ⅲa層	82	76	18	円形
	土坑214	焼土19	D-7	Ⅲa層	87	54	3	楕円形
148	土坑215	焼土20	C-7	Ⅲa層	90	43	8	楕円形
	土坑216	焼土22	D-7	Ⅲa層	180	100	25	楕円形
	土坑217	焼土23	D-7	Ⅲa層	100	86	17	円形
	土坑218	焼跡2	B-5	Ⅲa層	80	75	28	円形
	柱穴518	Pit518	B-7	Ⅲa層	39	27	40	－
	柱穴619	Pit619	C-8	Ⅲa層	44	26	21	楕円形
	柱穴621	Pit621	C-8	Ⅲa層	49	30	16	楕円形
	柱穴827	Pit827	C・D-7	Ⅲa層	38	25	18	楕円形
	柱穴851	Pit851	D-6	Ⅲa層	35	30	40	円形

第79表　中世C群土坑・柱穴計測表

挿図番号	遺構名	旧遺構名	区域	検出面	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	形態
154	土坑219	円形土坑108	F-7	Ⅲa層	72	70	19	円形
	土坑220	円形土坑109	F-8	Ⅲa層	76	68	14	円形
	土坑221	円形土坑110	F-8	Ⅲa層	52	50	20	円形
	土坑222	円形土坑111	F-8	Ⅲa層	64	48	10	楕円形
	土坑223	円形土坑112	F-8	Ⅲa層	68	62	18	楕円形
	土坑224	円形土坑113	F-8	Ⅲa層	84	76	30	楕円形
	土坑225	円形土坑130	E・F-8	Ⅲa層	84	80	28	円形
	土坑226	円形土坑131	F-8	Ⅲa層	92	90	20	円形
	土坑227	土坑135	D-8	Ⅲa層	70	62	16	円形
	土坑228	土坑140	D-8	Ⅲa層	154	78	7	楕円形
	土坑229	土坑141	D-7	Ⅲa層	110	105	10	円形
155	土坑230	土坑142	D-7	Ⅲa層	110	97	17	円形
	土坑231	土坑143	D-7	Ⅲa層	80	76	10	円形
	土坑232	土坑147	D-7	Ⅲa層	75	60	8	円形
	土坑233	土坑148	D-7	Ⅲa層	65	60	10	円形
	土坑234	土坑149	D・E-7	Ⅲa層	60	50	10	円形
	土坑235	土坑150	E-7	Ⅲa層	78	(60)	10	－
	土坑236		E-7	Ⅲa層	105	90	18	円形
	土坑237		E-7	Ⅲa層	84	70	－	円形
	土坑238	土坑204	E-9	Ⅲa層	92	65	21	隅丸長方形
	土坑239	土坑205	E-9	Ⅲa層	72	55	18	円形
	土坑240	土坑206	E-9	Ⅲa層	85	45	16	楕円形
	土坑241	土坑207	D・E-9・10	Ⅲa層	87	65	15	円形
	土坑242	土坑208	D-9	Ⅲa層	82	65	16	円形
	土坑243	土坑209	D-9	Ⅲa層	79	62	14	円形
	土坑244	土坑217	E・F-9	Ⅲa層	64	43	9	円形
	土坑245	土坑218	D・E-7	Ⅲa層	69	48	18	円形
156	土坑246	土坑A	F-9	Ⅲa層	90	80	24	円形
	土坑247	土坑B	F-9	Ⅲa層	98	90	12	円形
	土坑248	土坑C	F-9	Ⅲa層	100	90	7	円形
	柱穴671	Pit671	E-7	Ⅲa層	40	30	35	円形
	柱穴837	Pit837	F-9	Ⅲa層	30	25	42	円形

第80表　中世D群土坑・柱穴計測表

挿図番号	遺構名	旧遺構名	区域	検出面	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	形態
161	土坑249	土坑1	H-4	Ⅲa層	57	55	20	円形
	土坑250	土坑2	H-4	Ⅲa層	74	66	12	円形
	土坑251	土坑4	H-4	Ⅲa層	60	50	13	円形
	土坑252	土坑3	H-4	Ⅲa層	73	33	18	楕円形
	土坑253	土坑5	H-4	Ⅲa層	66	62	10	円形
	土坑254	土坑6	H-4	Ⅲa層	52	50	13	円形
	土坑255	土坑7	H-4	Ⅲa層	60	52	16	円形
	土坑256	土坑151	I-5	Ⅲa層	135	77	16	楕円形
	土坑257	土坑152	I-5	Ⅲa層	71	68	32	円形
	土坑258	土坑153	H-5	Ⅲa層	104	80	8	隅丸方形
	土坑259	土坑154	H-5	Ⅲa層	66	50	8	楕円形
	土坑260	土坑155	H-5	Ⅲa層	68	60	10	楕円形
	土坑261	土坑156	H-5	Ⅲa層	68	62	12	円形
	土坑262	土坑157	H-5	Ⅲa層	73	60	10	楕円形
	土坑263	土坑158	H-5	Ⅲa層	66	52	8	楕円形
162	柱穴2	Pit2	H-4	Ⅲa層	23	23	18	円形
	柱穴6	Pit6	H-4	Ⅲa層	27	27	18	円形
	柱穴27	Pit27	H-4	Ⅲa層	22	18	36	円形
	柱穴45	Pit45	H-4	Ⅲa層	32	30	40	円形

第81表　中世墓（1～4号）計測表

掲載番号	遺構名	群	区域	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	備考
119	1号墓	A	D-4	162	112	20	土坑墓
123	2号墓	A	D-6	216	126	42	木棺墓
137	3号墓	B	C-7	161	97	55	土坑墓
151	4号墓	C	F-8	116	76	32	古石塔墓

第82表　中世溝状遺構計測表

挿図番号	遺構名	区域	検出面	上面径（cm）長径×短径	底面径（cm）長径×短径	深さ（cm）	備考
163	溝状遺構1号	G・H-7	Ⅲa層	170×75	155×60	30	
	溝状遺構2号	G-7・8, H-7	Ⅲa層	210×140	160×110	38	
164	溝状遺構3号	F・G-5・6	Ⅲa層	350×80	200×20	20	
	溝状遺構4号	E-2, D・E-3	Ⅲa層	170×65	175×100	15	

第83表　中世畝溝計測表

挿図番号	遺構名	区域	検出面	東西（m）	南北（m）	深さ（cm）	方位	面積（㎡）	備考
165	畝溝	C-7	Ⅱ層	6.3	9.4	16	N10° W	59.2	

3　遺物

中世相当の遺物として，土師器の坏・皿が214点，須恵器が９点，瓦質土器が200点，青磁が276点，白磁が162点，陶器が４点，鉄製品が38点出土した。出土区は，遺構同様に，調査区の北側と南側に大分される。掘立柱建物跡や柱穴等数多くの遺構検出数に比して，遺物点数はあまり多くはない。

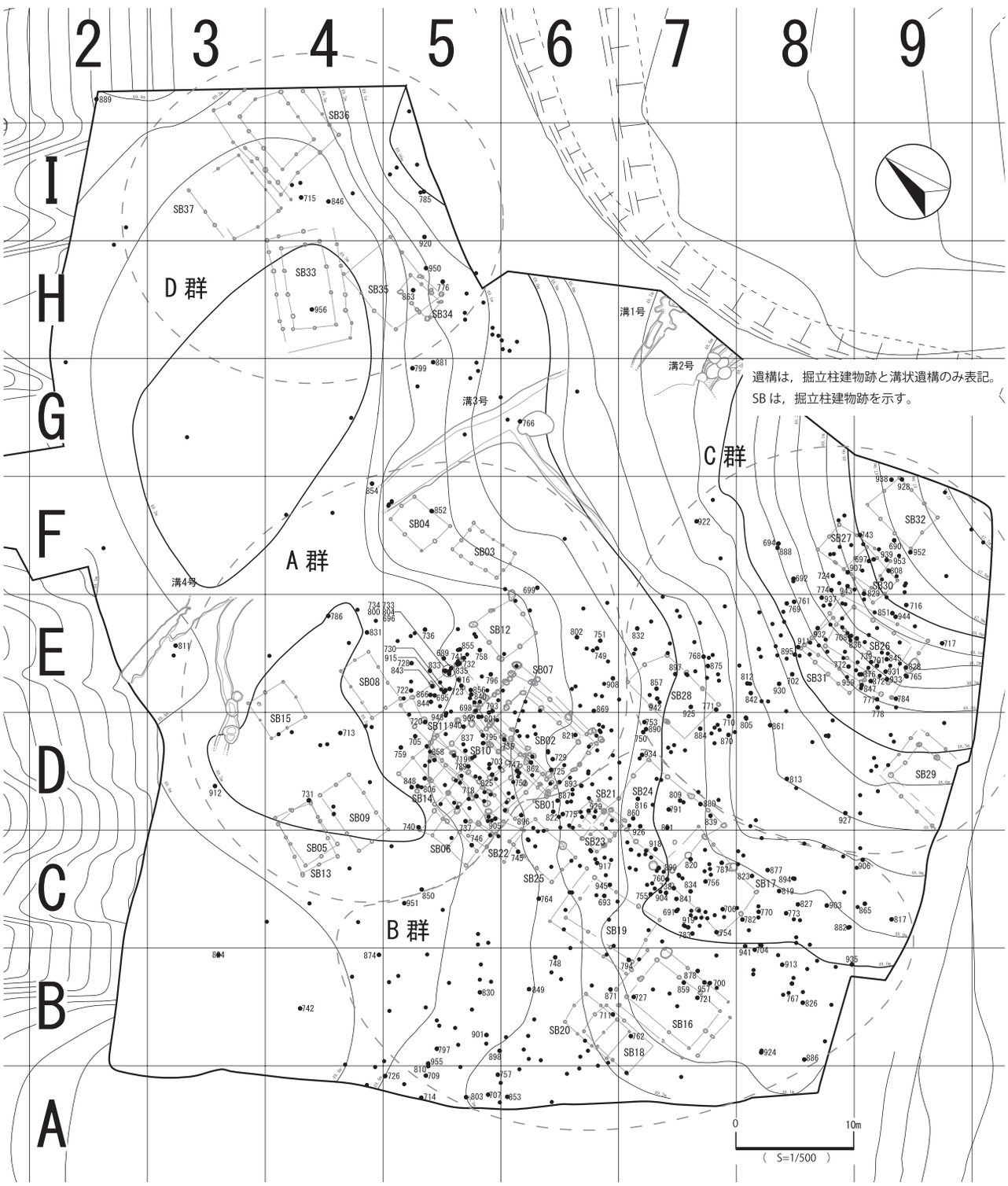
（1）土師器

土師器は坏・皿に器種分類し，基本的に法量で分類を行った。径は全て復元径とする。

坏

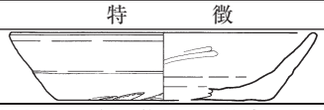
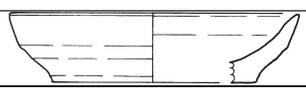
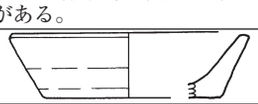
①　坏Ⅰ類　689 ～ 698

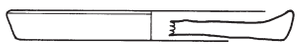
689 ～ 697は何れも底部切り離しが糸切りである。形態の類似性から698も本類に含めた。丁寧な回転ナデで調整する。



第166図　中世遺物出土状況図

第84表　中世土師器分類表

	特　　徴
坏Ⅰ類	 底径：8.0 ～ 11.0㎝，口径：約13㎝，器高：2.5 ～ 4.0㎝のもの。 器形：体部に丸みを持つものと，直線的に立ち上がるものがある。口縁端部は丸くなる。
坏Ⅱ類	 底径：7.0 ～ 9.0㎝，口径：9.0 ～ 13.0㎝，器高：2.0 ～ 3.0㎝のもの。 器形：体部が丸く内弯気味になるものと，直線的に立ち上がるものがある。口縁端部は丸みを帯びるものと，先細りになるものがある。
皿Ⅰ類	 底径：5.0 ～ 7.0cm，口径6.0 ～ 9.0cm，器高0.7 ～ 2.5cmの小型品。器高が高いものと低いものがある。 器形：口縁端部は丸みを帯びるものと，先細りになるものがある。

	特　　徴
皿Ⅱ類	 底径：6.0 ～ 9.0cm，口径8.0 ～ 9.5cm，器高0.5 ～ 1.5cmの中型品。Ⅰ類と比べて器高が低い。 器形：口縁端部は丸みを帯びるものと，先細りになるものがある。
皿Ⅲ類	 底径：8.0 ～ 9.0cm，口径9.0 ～ 11.0cm，器高0.9 ～ 1.5cmの大型品。 器形：口縁端部は丸くなり，体部が大きく外斜する。底部が大きく，器高が低いため，平らな器形を成す。

689は丸みを帯び僅かに内弯する体部形態を持ち，口縁部が丸くなる。体部最下位には切り離しの際の粘土が付着する。外面に赤色顔料が塗布される「外赤（朱）土器」である。

690・692・693は，体部が直線的に立ち上がるが，立ち上がりが立ち気味である。690の内面ナデ方向は反時計回りであり，内面に僅かに煤が付着する。

691は底部片である。表面が焼けており，二次焼成を受けた可能性が高い。外面には煤が付着する。

692は，口縁部の内外面には薄く煤が付着する。

693は内外面に赤色顔料が施され，外面体部下位には煤が付着する。

694は底部片である。表面が赤く発色する。内面体部には煤が付着する。

695・696は，体部が直線的に立ち上がり，外傾する。

697は底部片である。内面に厚く煤が付着し，灯明皿の可能性が高い。

698は，体部が直線的に立ちあがる。全体的に表面が磨滅する。器壁が薄く，口縁部が細く窄まる。

② 坏Ⅱ類　699 ～ 711

699は体部が外傾し，僅かに屈曲する。内面の口縁部から体部にかけて厚く煤が付着し，灯明皿の可能性が高い。

701は底部中心部が薄い。底部の糸切り痕をナデ消す。

702は，底部が厚く，内面が平坦を成す。底部切り離し時の粘土が腰部に付着する。内面には煤が付着する。内外面・底部が二次焼成により，黒色化する。口縁部の内外面に煤が付着し，灯明皿と考えられる。

703 ～ 711は底部片である。底部切り離しの糸切り痕を明瞭に残す。

703は，底部から外面下位にかけて煤が薄く付着し，内面には厚く付着する。，内面は二次焼成を受けており，灯明皿として使用されていた可能性が考えられる。

704の内面のナデの回転方向は反時計回りである。

705は，底部がやや薄い。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整で，内面のナデ方向は反時計回りである。

706の内面のナデ方向は時計回りである。

707は立ち上がりが立ち気味で，底部が薄い。内面には煤が付着し，中央部は煤が厚い。

708は底部，体部の器壁が厚い。底部から外面体部にかけて煤が付着する。

709は，器壁が厚い。底部と体部の境は明瞭であり，外方に立ち上がる。内外面ともに回転ナデ調整であり，内面には薄く煤が付着する。

710は，底部は薄く，体部立ち上がりの器壁は厚い。

711は，底部と体部の境に回転ナデにより僅かに段を成す。表面はやや磨滅する。

皿

① 皿Ⅰ類　712 ～ 727

712 ～ 714は器高が高く，口縁端部が先細りになる。

712・713は外面体部上部と内面に煤が付着する。特に内面は強い二次焼成を受け，灯明皿の可能性が高い。

714は，内面にも煤が薄く付着するが，二次焼成は受けない。

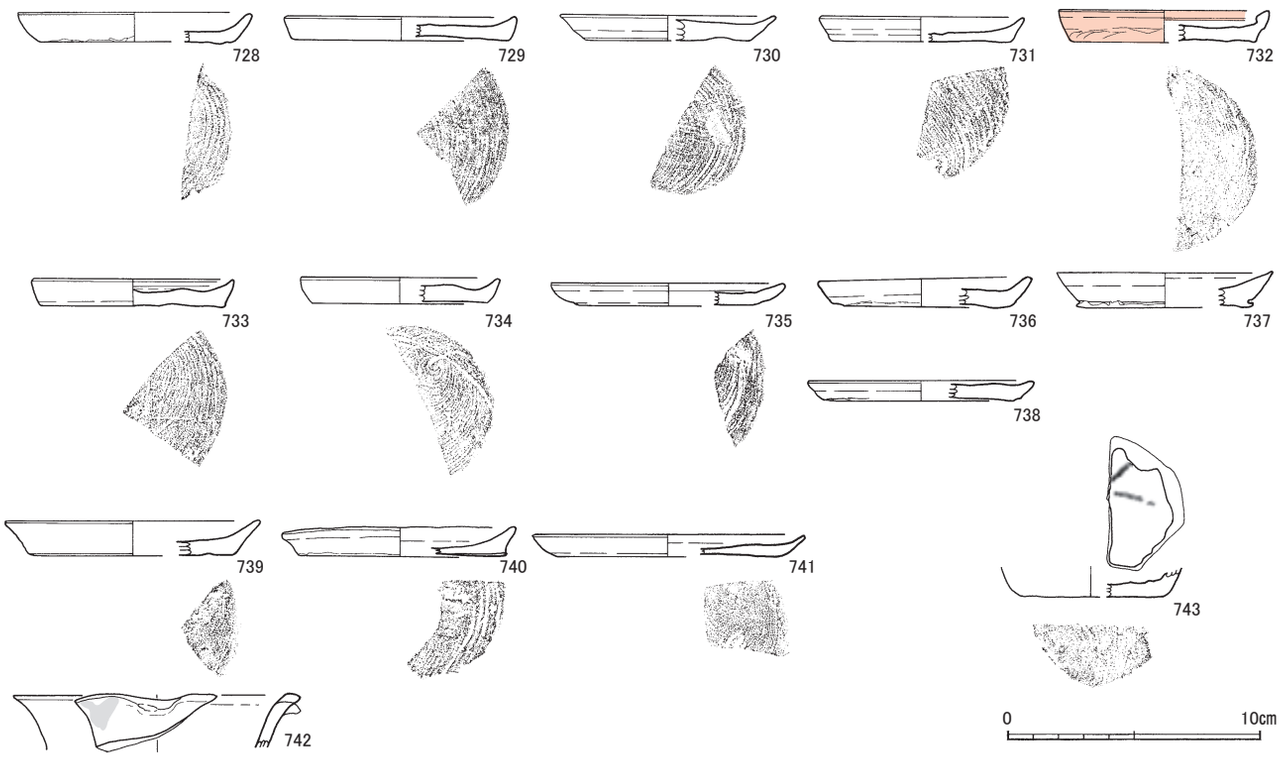
715 ～ 717は，器高が高く，口縁部が丸みをもつ。

715は，胎土が鮮やかな赤色を呈し，二次焼成を受けている。

717は，外方に直線的に立ち上がる。底部切り離し時の粘土が腰部に付着するが，回転ナデで整形を施す。

718 ～ 720・722 ～ 725は器高が低く，口縁部が細く窄

第167図　中世土師器（坏・皿）実測図（1）



第168図　中世土師器（皿）実測図（2）

まる。

718は器壁が薄く，器形が歪む。

719は，完形品である。底部から外面にかけて赤色顔料が塗布される外赤（朱）土器である。

720は口縁部が先細りになり，器壁が極めて薄くなる。外方に大きく外傾し，内面は平坦を成す。内面には切り離し時の粘土が多く付着する。

721・726・727は底部である。721は，口縁部が細く窄まり，外方に立ち上がる。回転ナデ調整により，内面中心部が凸状に張り出す。

722 ～ 725は，底部の糸切り底が僅かに確認できる。

726・727は，底部の糸切り痕を明瞭に残す。器壁が厚く，回転ナデにより内面中心部が凸状に張り出す。726の内面には僅かに煤が付着する。

② ⅢⅡ類　728 ～ 738

口縁部が丸くなるもの（728・729・735・736）と，口縁部が細く窄まる（730～734・737・738）ものがある。

728は器壁が薄く，内面は平坦面を成す。底部には切り離し時に生じた粘土が腰部に付着する。

729は器高が低く，体部は垂直に立ち上がる。内面は稜を持たず，緩やか立ち上がる。

730は底部が厚く，底径が6.6cmとやや小さい。体部は外方大きく開き，口縁端部は先細りになる。

731は，全体的な器壁は薄い。内面のナデ方向は反時計回りである。また回転ナデにより内面中心部が薄い。

732は全面に赤色顔料が塗布される赤色土器である。器形がやや歪み，厚さは疎らで均一ではない。

733は，内面のナデが粗雑である。底部の糸切り痕をナデ消すが，完全にはナデ消さず，糸切り痕が残る。

734は，外方に立ち上がり口縁部が細く窄まる。底部には糸切り痕の上に約4.5cmの線状の工具後が残る。735の器形は平らで，器高も低い。底部と体部の境が明瞭でなく，丸みを帯びて立ち上がる。表面はやや磨滅する。

736は底部がやや厚く，内面中心部が凸状に張り出す。底部は擦り減っており，僅かに糸切り痕を残す。

737は底部切り離しの際の粘土が体部最下位に付着する。底部と体部の境には，沈線状の段があり，切り離しの際のものと考えられる。

738は，器高が低く，平らな器形である。底部の糸切り痕をナデ消す。体部の内外面は回転ナデで調整するが，見込みには横ナデを施す。

③ ⅢⅢ類　739 ～ 741

739は底部が厚く，内面中心部は凸状に盛り上がる。内面のナデ方向は時計回りである。

740は器壁が薄く，内面中心部は僅かに凹む。底部切り離し時の粘土が腰部に付着する。

741は，口縁端部が先細りになり，体部の器壁が薄い。底部と体部の境は不明瞭で，丸みを帯びて立ち上がる形態を持つ。内面は不定方向のナデが施され，煤が僅かに付着する。

（2）墨書土器・その他の遺物　742・743

742は「注ぎ口」を持つ坏である。注ぎ口部分には細かな擦過痕が確認できるため，単なる歪みではないと判断した。外面には煤が付着する。古代の可能性も考えられるが，ここでは中世の土師器として報告する。

743は，坏の底部である。内面に「ハ」の字と思われる墨書がみられるが，文字の全体は判読できない。底部が擦り減っている。

（3）須恵器・瓦質土器

須恵器の甕・壺の口縁部は捉えられず，何れも胴部片である。瓦質土器の分類については，Ⅲ期（13世紀前半から中葉）の時期が与えられる。中世窯業の諸相から生産技術の展開と編年から2005を基に分類した。

甕・壺

①　胴部　744 ～ 749

744は，胴部上位の資料である。外面に平行文タタキを交錯させる。一見，樹枝文に似るが不定形であり，東播磨系須恵器か不確実である。12・13世紀相当の資料と判断される。内面はナデ調整であり，僅かに煤が付着する。

745 ～ 749は，須恵器の胴部片資料である。外面は，格子目文タタキが施される。内面のナデ（櫛目状ナデ）は，横位水平方向に施される。

坏・皿

②　底部　750

底部のみ１点，確認された。坏か皿の可能性で報告したい。にぶい黄橙色の色調を呈し，一見すると土師器に似るが，硬質で須恵器の可能性もある。底部に糸切り痕が明瞭に残される。

鉢

①　鉢１類　751 ～ 759

751 ～ 756は，東播磨系の擂鉢の口縁部片である。口縁部の平坦面に灰色の自然釉がかかる。

751は，片口の部位である。焼成温度が低く瓦質を呈する。

751 ～ 755の口縁端部が，ストレートに屈曲し「L」字状を呈するが，754 ～ 756の口縁端部は，屈曲の下位がやや肥厚拡大する。

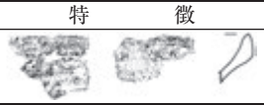
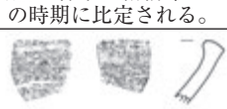
756は，口縁部下端で一旦外反し「L」字の屈曲に転じる。胎土中には，１cmと5mmの小礫が含まれる。

757 ～ 759は，東播磨系の擂鉢の底部片である。何れも平底を呈する。底部の切り離しでは，757・759は判然としないが，758には明瞭に糸切り痕が捉えられる。758には，7mm程の小礫が胎土に含まれる。

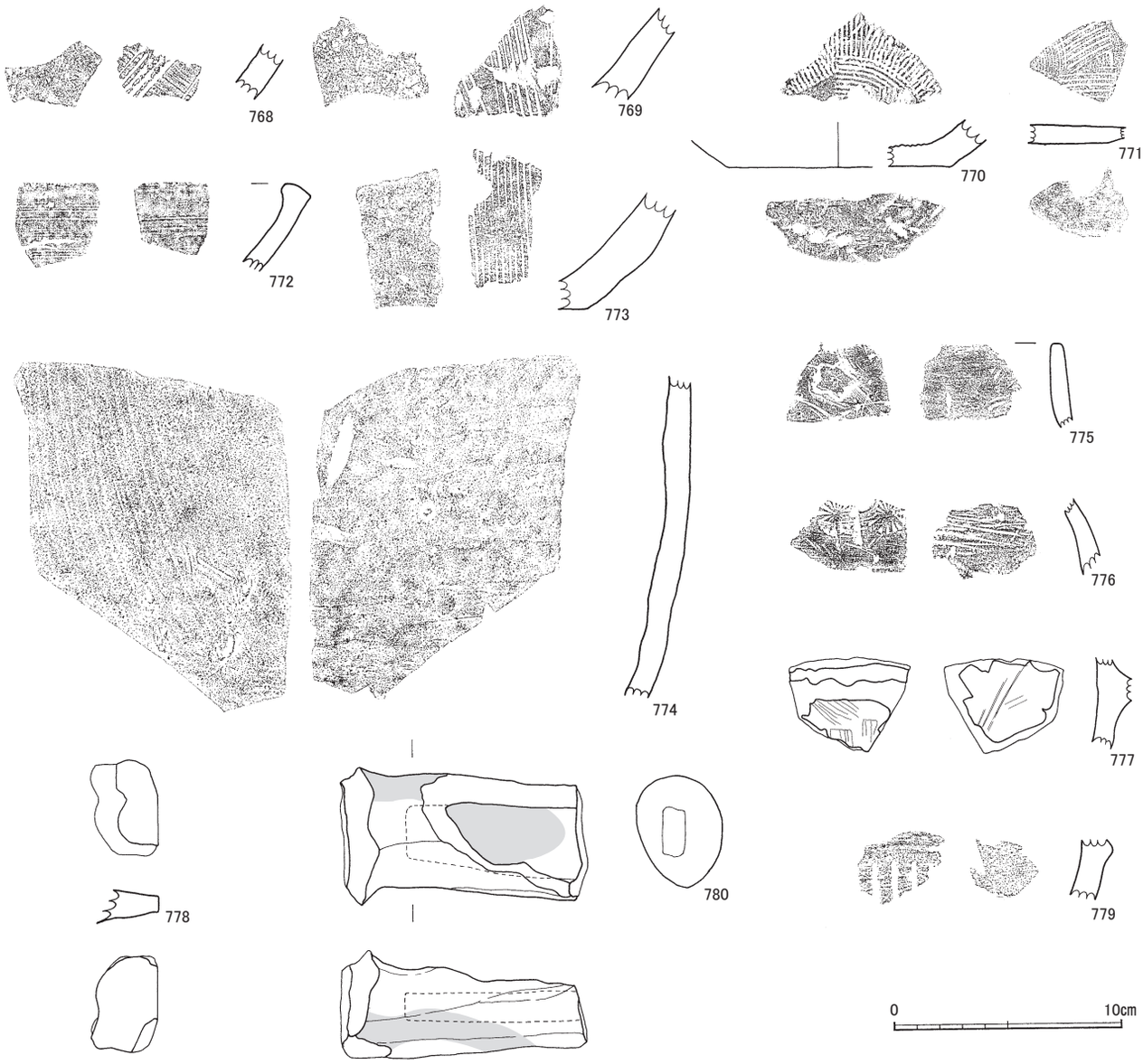
②　鉢２類　760・761

760は，口縁部から胴部の破片であり，761は胴部片である。内面のナデ（櫛目状ナデ）は斜位に施され，横位

第85表　中世瓦質土器分類表

	特　　徴		特　　徴
鉢１類	 擂鉢の一群である。 器形：口縁部が大きく外反し，口縁端部が「L」字状に屈曲し，垂直気味の面を成す。 調整：内外面共に，回転ナデによる調整を行う。胎土に砂味があり，白色の砂粒や小礫を含む。東播磨系の擂鉢と思われる。	鉢４類	 極めて硬質の擂鉢群である。 器形：体部が直線的に斜め上方に伸び，口縁端部は「く」の字状に屈曲し，口縁部は斜行面を成す。 調整：外面は，回転ナデにより調整を行い，内面は，斜行するハケメ調整を行う。備前系のⅤ期（14世紀後半～15世紀前葉）の時期に比定される。
鉢２類	 擂鉢の一群である。 器形：体部が直線的に斜め上方に伸び，口縁端部は「く」の字状の斜行の面を成す。 調整：外面は，回転ナデにより調整を行い，内面は，ハケメ調整を行う。櫨番丈窯系のⅡ期（12世紀中葉～後葉）の時期が与えられる。	鉢５類	 器形：体部から口縁部にかけて直行し，口縁上端部で逆「L」字状に屈曲し，平坦面を成す。口唇内面が鍔状に張り出し内弯する。 調整：内外面ともに，回転によるハケメ状の調整を行う中世の鉢の資料と思われるが，生産地や用途等不明である。
鉢３類	 擂鉢の一群である。 器形：体部から口縁部にかけて，円弧状に立ち上がる。口縁端部が，「く」の字状に内側に屈折する。 調整：内外面共に，回転ナデによる調整を行う。東播磨系のⅤ期（14世紀後半～ 15世紀前葉）の時期に比定される。	羽釜	 器形：鍔が，体部中位に巡らされる。体部中位から頸部にかけて大きく内弯し，頸部で「L」字状に屈曲直行に転じ，口縁部は内傾する。 調整：外面は回転ナデにより調整を施し，内面はナデ調整であるが，部分的に条痕状の工具痕が残される。器種は，羽釜形の煮炊具と思われる。中世後半期に比定される（上床2004）。

第169図　中世須恵器（甕・壺）・瓦質土器（擂鉢）実測図（1）



第170図　中世瓦質土器（擂鉢・鉢）（2）・焙烙把手実測図

に施される甕・壺の胴部資料745 ～ 749の平行文タタキと向きが異なる。760・761の内外面には，青灰色の煤が付着する。

③　鉢３類　762

本類で確認されたのは，この１点のみである。直行する口縁部の縁端に断面三角形状の突帯を貼付するが，対する口縁内面側にも貼付された突帯が鍔状に張り出す。

④　鉢４類　763 ～ 769

何れも，内面に明瞭な擂目が捉えられる。

763の外面には，1.2cm程の粘土接合痕が捉えられる。の斜行する口縁部内面は，指頭により凹みを呈する。

765は，体部から口縁部にかけて器厚が厚くなり，口縁部上端がやや肥厚する。内面の器面が，使用による剥落が顕著で擂目もつぶれ気味である。

766 ～ 769の外面には，ナデ後の指頭押圧が顕著に残される。

⑤　鉢底部　770・771

何れも，見込みから体部にかけて擂目を施した後，見込みを周回する擂目を巡らす。

771の底部外面には，僅かに糸切りによる切り離しが捉えられる。底部外面に顕著に煤が付着する。

⑥　鉢５類　772

本遺跡で，唯一の資料である。暗褐色の色調を呈し，焼成が低温なため焼きも甘く，一見土師器に見まがう。鉢ではあるが，擂鉢・火鉢の何れなのか不明である。

（４）陶器　773・774

773は，備前系陶器の擂鉢の底部から体部の破片資料

である。体部下位を面取様にケズリを施すために，体部下位から中位にかけて，屈曲を呈する。内面には，縦位の擂目が施される。

774は，産地不明の甕・壺の破片資料である。外面には，2.5cm幅の工具によるハケメが横走（一部斜走）する。内面には，ナデ後の指頭押圧が顕著に捉えられる。褐色の色調を呈し，産地不明の資料である。

（5）羽釜　775 ～ 778

775 ～ 777は，内外面共に黒色を呈する。瓦質土器である。胎土や器厚等共通し，同一個体の可能性がある。

775は口縁部片である。口縁部が内傾する。外面に桜形のスタンプが施される。

776は体部中位の部位に相当し，内弯して口縁部に至ると思われる。外面には，菊花形のスタンプが２輪横列に施される。内面には，ナデ後の条痕状のヘラ状工具痕が捉えられる。

777は，体部中位の鍔の部位である。778は，土師質の土器片である。鍔の縁端は「コ」の字状に丁寧な平坦面を成す。鍔の下面には顕著に煤が付着する。弥生時代の甕・壺の口縁部の可能性もあるが，中世の土師質の羽釜の鍔の可能性で報告する。

（6）火鉢・植木鉢　779

１点のみの出土である。胴部片で，外面に突帯が巡り，その下位に簾状に縦位の沈線が施される。暗赤褐色の色調を呈し，火鉢もしくは植木鉢の可能性で報告したい。植木鉢の場合，近世に比定されると思われる。

（7）焙烙　780

焙烙の把手の部位に相当する。本遺跡で，１点のみの出土である。平断面観が長方形状の器形である。中空で，長方形状の筒状を呈する。下面に煤が顕著に付着する。

（8）輸入陶磁器

11世紀後半から16世紀初頭の資料を中世遺物として報告する。越州窯系青磁は，青磁の分類上，本項目で報告するが，時期的には古代に比定される。

輸入陶磁器の分類については，白磁（碗，皿，水注），青磁（碗，皿，浅形碗，小碗，合子，香炉），青白磁（合子），中国陶器，青花（碗，皿等）に大別した。

青花に関しては，16世紀～ 17世紀初頭に相当するものも，分類上，中世の遺物として扱った。

14世紀以前は大宰府分類を，14世紀以降については，白磁：森田分類，青磁：上田分類，青花：小野分類を基本とした。

＜時期区分＞

Ａ期：８世紀末～ 10世紀中頃
Ｂ期：10世紀後半～ 11世紀中頃
Ｃ期：11世紀後半～ 12世紀前半
Ｄ期：12世紀中頃～後半
Ｅ期：13世紀初頭前後～前半
Ｆ期：13世紀中頃～ 14世紀初頭
Ｇ期：14世紀初頭～後半
Ｈ期：14世紀後半～ 15世紀前半
Ⅰ期：15世紀中頃～後半
Ｊ期：15世紀末～ 16世紀前半・中頃
Ｋ期：16世紀中頃・後半～ 17世紀前半

白磁

①　碗　781・786・787

781は，大宰府分類の白磁碗Ⅰ類に比定されるものである。蛇ノ目高台で高台畳付は釉を掻き取る。体部下位から高台にかけて砂目が付着している。外面の釉に化粧土がみられる。

786・787は，大宰府分類の白磁碗Ⅳ類：C期に比定されるものである。肉厚な玉縁状の口縁部であり，786は口縁部から体部中位まで施釉がみられるが，中位以下は露胎する。釉はやや厚い。胎土は灰白色で精緻で，黒色鉱物を多く含む。787は口縁部の折り曲げ痕が確認でき，胎土は粗く，釉も薄い。釉の光沢がなく，全体的に表面が荒れており，二次的な焼成を受けた可能性がある。

②　皿　782 ～ 785・788 ～ 828

782 ～ 785は，大宰府分類の白磁皿XI類に比定される。

782・783は，小拡りの玉縁状口縁で，釉が薄くかかる。

784・785は，高台で体部下位から高台が露胎する。釉は薄くかかり，貫入が目立つ。また，785の内面見込みには，目跡が残る。

788 ～ 791は，白磁皿Ⅴ類：C期に比定される。

788 ～ 790は，口縁部が外反し，体部は丸みを帯びる。器壁はやや薄く，釉は厚くかかる。790には貫入が入る。

791は，碁笥底状を呈する底部で，内面見込みには深い段がある。体部下位から底部は露胎し，底部外面は黒色を帯びている。

792は，白磁皿Ⅵ類もしくはⅦ類：C期に比定される。底部は小さい平底で，僅かに削っている。体部中位で屈曲し，底部と体部の境目が明瞭である。体部下半から底部まで露胎している。

793 ～ 813は，白磁皿IX類・F期，森田分類の白磁A群に比定されるものである。口縁部の釉を掻き取った口禿皿であり，基本的には全面に施釉される（IX-1類）。平底を呈すものでは，底部に釉の焦げつきが残る797と，底部の釉を板状の工具で伸ばす793 ～ 796，812・813の2

種類がある。

体部中位から露胎する805・809は，IX-2類に比定される。793・798・799・801は，口縁部が外反し，808・810は口縁部を朝顔形に外反させる。

814 ～ 823は，森田D群の白磁皿：H期である。814・815は，直口形の口縁部で体部が丸みを帯びる。外面体部中位以下は露胎する。

816は，直口形の口縁部で高台まで残存する。体部は緩く内弯し，全面施釉後に畳付の釉を剥ぎ取っている。

817 ～ 819は白磁皿の割高台である。いずれも，内面見込みに目跡があり，畳付から高台内面は露胎する。819は４箇所の抉りこみがあり，817・818も抉りこみがみられる。

820は体部中位以下が露胎し，高台の抉りこみがみられない。

821 ～ 823は，多角杯である。いずれも胎土が粗く，黒色粒や茶褐色粒を含んでいる。821はやや立ち気味であり，822・823は体部下位の屈曲し，そこから施釉されず露胎する。

824は，森田E群の坏（Ⅰ～ J期）であり，幅広の高台をもつ。全面施釉後に畳付の釉を掻き取っており，畳付がシャープで断面三角形状を呈する。高台内も施釉される。釉が全体的に均一に厚くかかる。

825 ～ 828は，森田E群（Ⅰ～ J期）の白磁皿である。825は口縁部が外反し，高台畳付は露胎する。釉の厚さは均一ではなく，化粧土が施される。

826 ～ 828は高台である。全面施釉後，畳付の釉を掻き取っている。また，826・828は畳付に，827は畳付から胴部下位に多量の砂目の付着がみられる。

③　水注　829

829は水注の口縁部である。釉は厚く，精巧な作りである。D期に該当するものと考えられる。

青磁

①　碗　830 ～ 886

830は，越州窯系青磁碗の口縁部である。直口形で，直線的に開く形態を呈す。釉は浅黄色で，薄くかかる。A期に相当するものである。

831は，龍泉窯系青磁碗Ⅰ類：D期に比定されるものである。無文であり，外面体部下端に浅い沈線がみられる。

832 ～ 857は，龍泉窯系青磁碗II類：E期に比定される。体部外面に蓮弁文を有し，口縁部は直口もしくは僅かに外反する。片彫蓮弁で蓮弁の中心に稜をもつ鎬蓮弁文である。

832は，高台から口縁部まで残存し，畳付から高台内面までは露胎する。釉は全体的に厚い。

854 ～ 857は高台であり，器肉が厚い。いずれも畳付から高台内面まで露胎する。中でも，854は外面に鎬蓮弁，内面見込みに草花文の印刻が施されることから，Ⅱ類の中でも後出するⅡ-c類に比定される。855も同類であり，内面見込みに草花文の印刻を有す。

858は，龍泉窯系青磁碗Ⅲ類：F期，もしくは小碗の高台である。高台径が小さく，全面施釉後，高台端部の釉を掻き取る。

859・860は，青磁碗で上田分類B類：F期に比定される。外面に片彫蓮弁文を施すが，稜はない。E期のⅡ類と比べ，簡略化される。

861・862は口縁部が横方向に外反する，龍泉窯系の青磁浅形碗である。外面に鎬蓮弁文を有すが，碗と同じく簡略化される。

863 ～ 866は，雷文帯を施す青磁碗で，上田C類：G期に比定される。863は，雷文帯の下部に蓮弁文を施しており，866も同様のタイプと考えられる。864・865は口縁部に雷文帯を有す。

867 ～ 869は，上田D類：G・H期に比定される青磁碗である。口縁部が外反し，無文である。

870は口縁部が玉状に丸みもち，口縁部内面には草花文を施す。

871は体部が内弯し，丸みを帯びる。

872は外面の体部に回転ヘラ削り痕がみられ，内面の口縁部下に一条の沈線を有す。

873 ～ 877は，青磁碗の高台である。873は全面施釉後，高台内面の釉を輪状に掻き取り，内面見込みには草花文の印文を施す。874は高台内面が輪状の釉の掻き取りがみられる。875は，高台が低く，断面が逆台形状を成す。また，高台内面の釉を輪状に掻き取る。876は，畳付外面を削り，稜を成す。また，高台と体部の境も削り，稜を成す。高台内面の釉を輪状に掻き取る。877は，高台内面の釉を輪状に掻き取る。

878 ～ 884は，細線蓮弁文を施す青磁碗で，上田B類：H期に比定される。いずれもヘラ先等によって細線を表現しており，文様は平面的である。線描の蓮弁は，剣頭が蓮弁の単位を意識して施文するものが多いが，879のように単位を意識せずに施文するものもある。

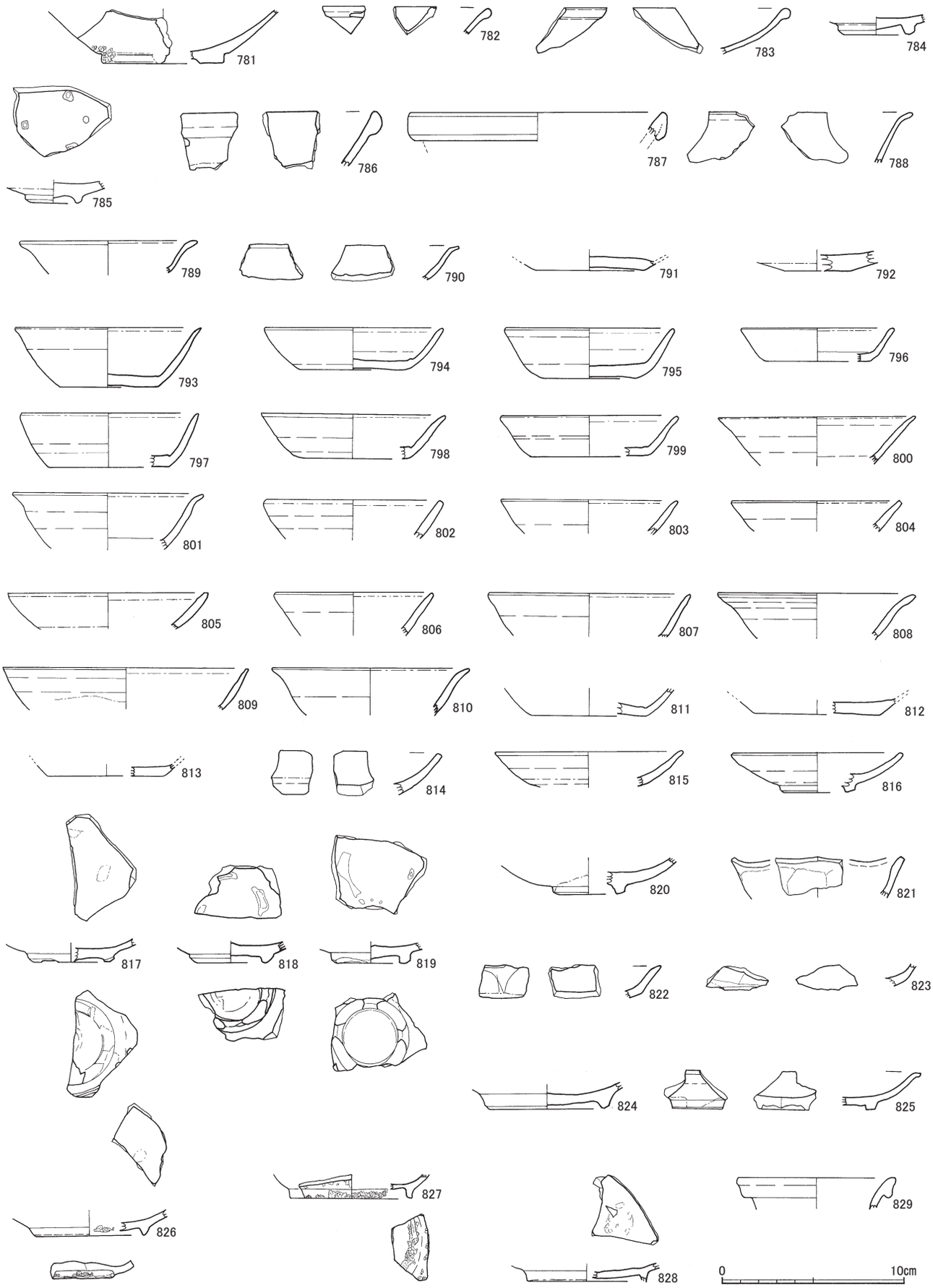
885・886は青磁碗の高台である。

885は胎土が粗く，褐色味を帯びており，畳付から高台内面は露胎する。高台は低く，断面が逆台形状を成す。福建省産の可能性が考えられる。

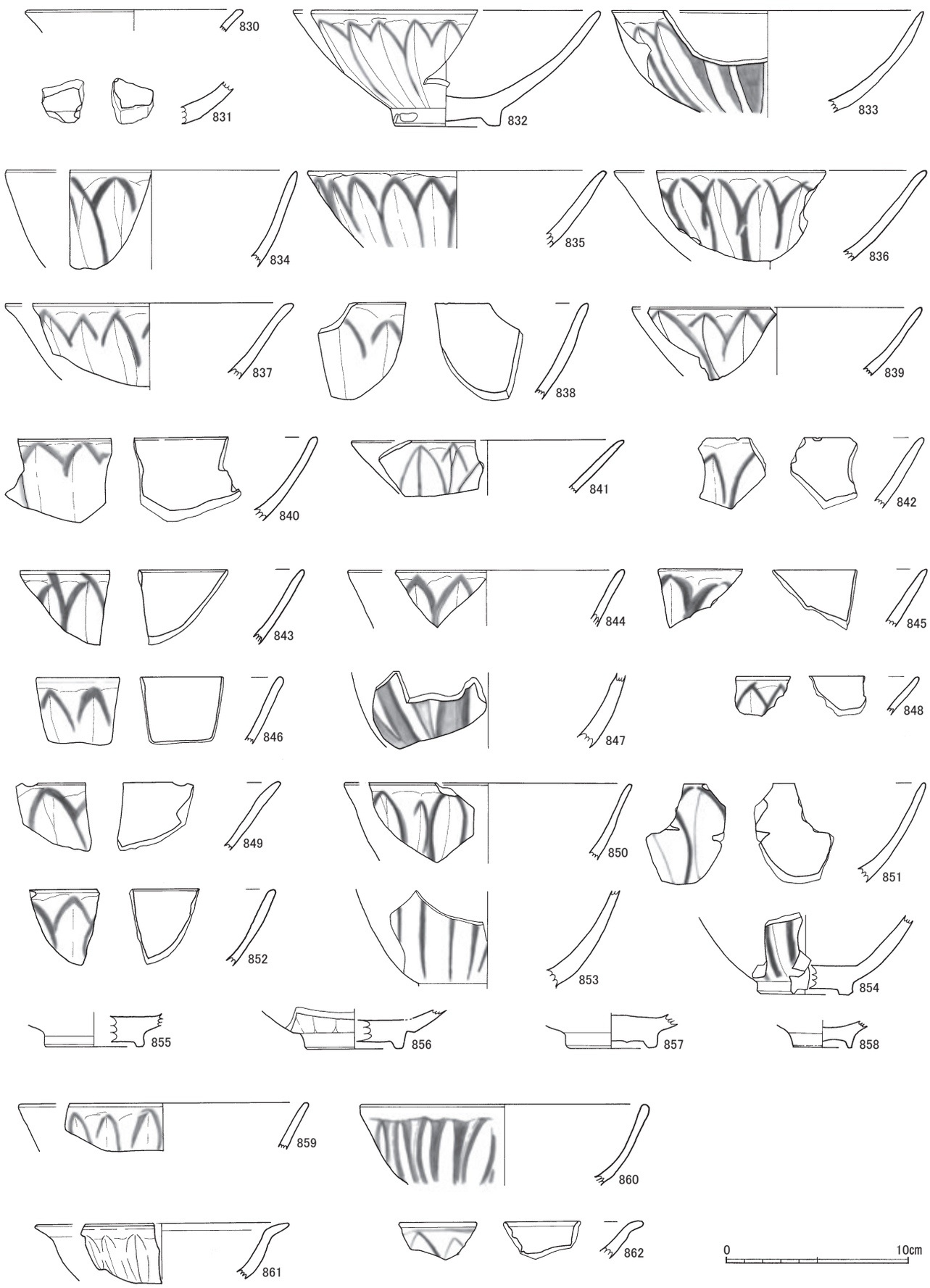
886は釉が厚くかかり，内面見込みに目跡がある。釉を輪状に掻き取る。高台内面の釉は露胎し，畳付に褐色の焦げが残る。胎土も粗く，龍泉窯系ではない可能性が高い。

②　皿・香炉・合子　887 ～ 897

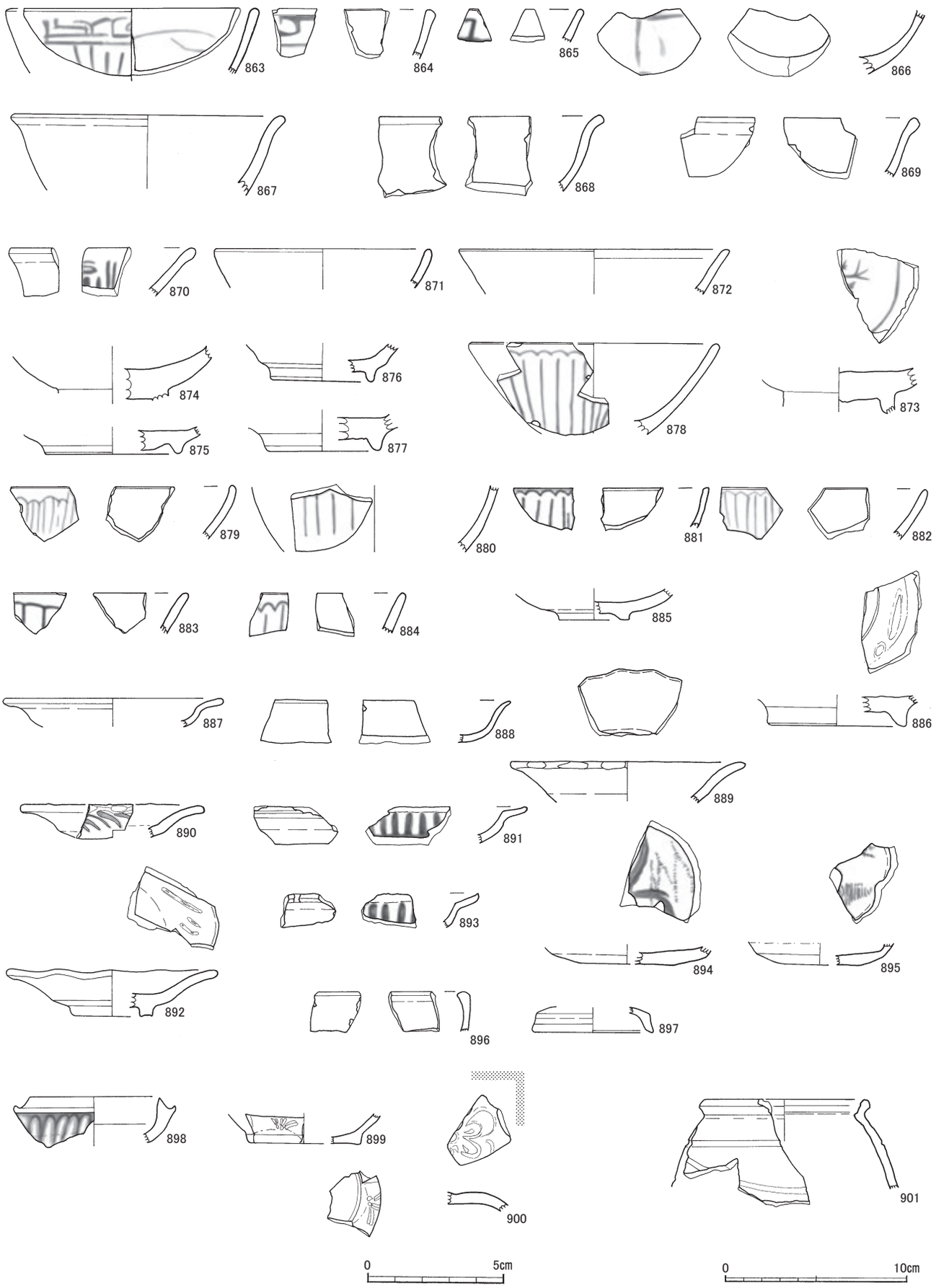
887・888は，青磁皿である。両者とも体部に丸みをも



第171図　中世白磁（碗・坏・皿・水注）実測図（1）



第172図　中世青磁（碗・皿）実測図（1）



第173図　中世青磁（碗・皿・香炉・蓋）（2）・中国陶器他実測図

つが，887は長い口縁部が外反し，888は口縁部が短く緩く外反する。

889 ～ 893は，明代（14世紀以降）の稜花皿である。

890は外面に片彫の草花文の簡略系と思われる文様が施される。

892は，内面に深く刻まれた沈線がみられる。

891・893は内面に蓮弁文を施し，口縁部は緩く外反する。

894・895は，同安窯系青磁皿I類・D期に比定される。

894は，全面施釉後，底部の釉を掻き取り，内面にジグザグな櫛点描文とヘラ描きの文様を施す。

895は，体部外面下半は露胎し，内面に櫛点描文を施す。

896は香炉である。内側に張り出す口縁部を持ち，内面上半以下から露胎する。釉は厚く，発色が良い。

897は，青磁の合子の蓋である。僅かだが，天井部に型押しの草花文が確認できる。内面は露胎する。

青白磁　898 ～ 900

898 ～ 900は，青白磁の合子である。898・899は型造りによる合子の身である。両者とも内外面ともに施釉する。

898は蓮弁文を有し，受身部と胴部上半が露胎する。

899は印花文を有し，胴部下半と内面が露胎する。

900は，蓋で型押しの草花文をもつ。

中国陶器　901

901は，中国陶器の壺である。口縁部が短く，「く」の字に外反し，口が窄まる形態を呈する。器形は，長胴形を呈し，胴部上部に沈線を巡らす。内面は，無釉である。外面は光沢のない釉を施し，茶褐色に発色する。胎土は，黒色粒を含む。E・F期のものである。

青花

①　碗　902 ～ 908

902は，景徳鎮窯系の端反りの碗で，小野分類の碗B群：H期に比定される。内外面に界線があり，界線下に外面には雷文帯，内面には四方襷文が施される。貫入もみられる。

903・904は，小野分類の碗Ｃ群：J期に比定される「蓮子碗」である。903は口縁部の内外面に界線をもち，外面界線下に「雲堂手」文をもつ。904は，草花文をもつ。

905・906は，漳州窯系の碗で，小野分類のＥ群：K期に比定される。胎土は粗く，黄色味を帯び，化粧土を施す。905は，口縁部内外面に界線をもち，906は，口縁部外面に襷文帯，体部に草花文をもつ。

907・908は，碗の高台である。高台内面に粗い砂粒が付着し，畳付の釉は掻き取られる。

907は，内面見込みに文様をもち，見込み中心が丸く盛り上がる「饅頭心」の碗で，小野分類の碗E群：K期に比定される。

908は，内面見込みに文様をもち，高台内に粗い砂目が多量に付着する。漳州窯系のものと考えられ，小野分類の碗C群に比定される。

②　皿　909 ～ 913

909 ～ 913は碁笥底を呈す皿で，小野分類の皿C群：J期に比定される。909 ～ 911は底部の釉を輪状に，912は底部内面の釉を掻き取る。909・910は黒色粒を含む灰白色の精緻な胎土であり，景徳鎮産と考えられる。909は人形化した「寿」を記す。

910は，外面に芭蕉文，内面見込みに捻花文を有す。見込みに目跡，底部の釉剥ぎ部分に砂目が残る。小野Ｃ群皿Ｉ類に比定される。

911・912は，やや粗い胎土であり，漳州窯系のものと考えられる。911は，内面見込みに水仙の花文をもつ。

913は稜花皿で，内面見込みに文様をもつ。

（9）　青釉陶器

①　皿　914

青釉陶器の皿である。翡翠釉で，型押しの蓮弁をもつが，釉の剥げが目立つ。16世紀代のものである。

（10）滑石製品

石鍋

①　口縁部　915 ～ 917

915・916は，鍔を有する。

915は胴部から口縁部にかけて内弯状に立ち上がり，口縁部でやや内弯する。鍔の下位に煤が付着する。

916は体部が残存しないが，915と同様な器形が想定される。口縁部から口唇部に回り込むように煤の付着が捉えられる。

917は，胴部から口縁部にかけて外傾する。口縁部で一旦段差を有し，口縁部は「く」の字に屈曲し内弯する。

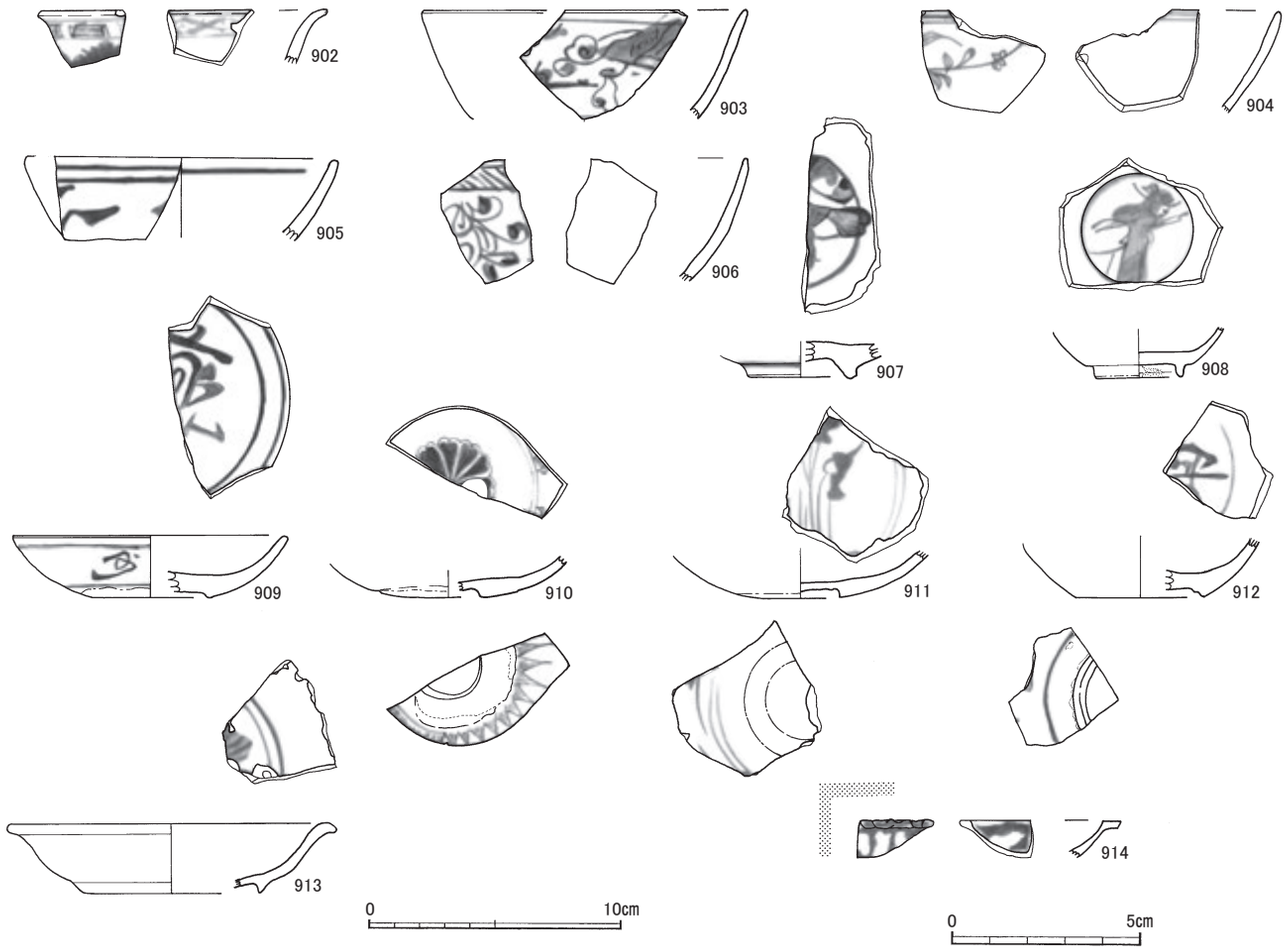
②　胴部　918・919

918は，鍔を有する体部片である。鍔の下位に煤が付着し，煮炊きの使用を窺わせる。915と比べて鍔が華奢で，断面三角形に近い形状である。

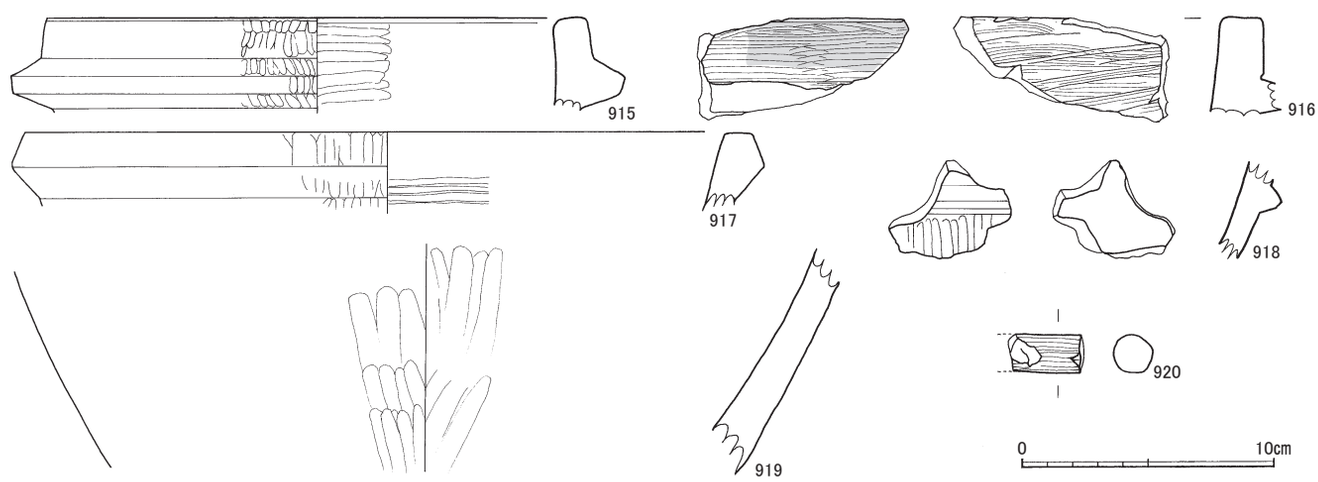
919は，天地等も判然としない小片である。内面側が内弯し元々の石鍋の器形を留めるのに対して，外面は極めて平坦で弯曲を呈さず石鍋の器形を見いだせないため，二次加工品の可能性もある。

（11）その他（器種不明品）　920

920は，長さ3.0cm，断面直径は1.5cmを測るが，欠損



第174図　中世青花実測図



第175図　中世滑石製石鍋他実測図

品である。器種・用途等不明である。長軸方向へのケズリにより整形し，丁寧な仕上がりである。

（12）　鉄製品　921 ～ 945

本遺跡の鉄製品は，Ⅱb層出土を主体とし，古代・中世の何れの時期にも比定しうる。数多く検出される掘立柱建物跡に伴う釘等の可能性が蓋然性が高いと判断し，鉄製品の多くを中世に含めて報告する。

921 ～ 926は，刀子と判断される。921は，身部は14.35cm，茎部は6.75cm，重さ約40.22gである。身部の先端に欠損が見られるが，他は原形を留めている。

922・923は同一個体であり，身部及び茎部がほぼ完形である。身部は5.2cm，茎部は4.9cm，重さ約11.36gである。茎部には，腐食を免れ着柄の状態で柄の一部が残存する。

924は，平面形態が922に似ることから，同様な形態で

の身部の可能性で報告したい。

925は，身部の破片資料である。現況では，身部幅は最大2.0cm程捉えられる。

926には直径4mmの穿孔が穿たれ，茎部と判断される。　927・928は扁平な釘の可能性もあるが，刀子の身部・茎部の欠損品の可能性で報告したい。927は，最大幅８mmから最小幅４mmに先細りする。両縁端が欠損している。928は，幅が6.5mm程と細く，長軸の両縁端が，原形をとどめるか否か判然としない。

929 ～ 931は，扁平な棒状の鉄片が折り畳まれる。加熱により折り畳まれた可能性を見る。

折り曲げられた状態や刀子状の器形等，類例が長田遺跡（長田2003）に出土する（P76遺物番号111）。出土層内には，縄文から近世までの遺物が出土し，時期が特定されない。

茨城県鹿の子遺跡109号住居内遺物に短冊状鉄製品として，図面上は似た形態に捉えうる資料P85の「図33未製品」中の１に確認される（奈文研2011）。小杉山・曾根両氏は，「小札の穿孔前の鉄板の状況のまま廃棄されたもの」と記す（奈文研2011）。

929は，とぐろ状に折り曲げられるが，残存する身の総延長は18cm弱に及ぶ。１箇所は折損し，１箇所は折り曲げられる。長軸の一端は折損するが，片端は舌状の原形をとどめる。特に舌状を呈する切っ先の断面が，僅かに凸面状に膨らむことから，槍ガンナの可能性もある。　最大幅は1.2cm，両縁端にかけて幅１cm程に先細りする。扁平な棒状の鉄製品が折り畳まれて残存する状況は，儀式的行為により折り畳んだものかは不明である。

930も，扁平な棒状を呈する。逆「S」字状に折り畳まれるが，屈折箇所は折損せず連続する。

身の幅が1.0cm ～ 1.3cm程に先細りする点や，長軸の一端は方形を呈し，片端は舌状である点など，929に似る要素が捉えられる。身の総延長は8.5cm程である。

931は，「コ」の字状に折れ曲がる。最大幅1.9cm程の長軸の一端が，最小幅１cmの片端に向けて先細りする三角形状の器形である。２枚重ねに捉えられるが，腐食により２層に分割剥離した可能性もある。

932は，扁平な棒状の器形を呈する鉄製品が90°によじれている。長軸の一端から片端にかけてやや先細りする。一見，長軸の両縁端の形状は方形を呈し，原形をとどめているように見える。

扁平な棒状の鉄製品を折り曲げた類例は，県内では見いだせなかった。刀子を刃部と基部（茎部）を折った状態で出土した例は，山ノ脇遺跡2003（P193　第148図中世期検出土坑39出土遺物実測図）にて，農具埋納土坑内遺物に見いだせる。江南地方青磁碗や古銭，擂鉢や鉄製鋤先，軽石と一緒に埋納された状況で出土したと報告される。

933 ～ 944は，釘である。幅広で扁平な器形を呈する933と，幅狭で断面が方形状を呈するその他の一群に分けられる。

933 ～ 937には，鈎状の頭が付く。934 ～ 936の断面幅は，４mm程でほぼ均一である。

938 ～ 941は，頭が欠損する。939は，断面幅が３mmと他より一段細いが，長さは8.2cmと長目である。

942 ～ 944は，先細りする扁平な棒状製品を「コ」の字状に折り曲げた器形である。釘に類する工具の一種か。　945は中空で，板状の銅板を丸めてパイプ状に仕上げる。器種不明品である。軸長7.2cm，口径0.65cmを測る。片方の先端は塞がれる一方，対する片方の先端には，数mmの穿孔が穿たれる。

（13）　古銭　946 ～ 949

何れも，Ⅱb層の包含層出土である。

946は，「嘉祐元寶」の文字が捉えられる。字体は，真書である。北宋の1056年鋳造の古銭と判断され，本遺跡では，同古銭は，この１点のみの出土である。

947は，「元祐通寶」の文字が捉えられる。篆書の字体である。北宋の1086年鋳造の古銭である。これも，本遺跡では１点のみの出土である。

948は，古銭３枚が青錆びにより密着する。方形の孔の平面観がほぼ一致することから，紐を通していたと思われる。表面には，「元豊通寶」の文字が捉えられる。「元豊通寶」の鋳銭は内郭幅が大きく，肉薄であることから，中世末期～近世初頭における模鋳銭の可能性が高い。

他の２枚は肉薄でなく，裏面の古銭の文字は摩滅や錆びにより判読不能であるが，篆書と思われる字体に捉えられることから，中世の中国製古銭の可能性が高い。

949も字が潰れて判読が不能であるが，字体が篆書であることから，中世の中国製古銭の可能性で報告する。

（14）　坩堝・鞴羽口　950 ～ 952

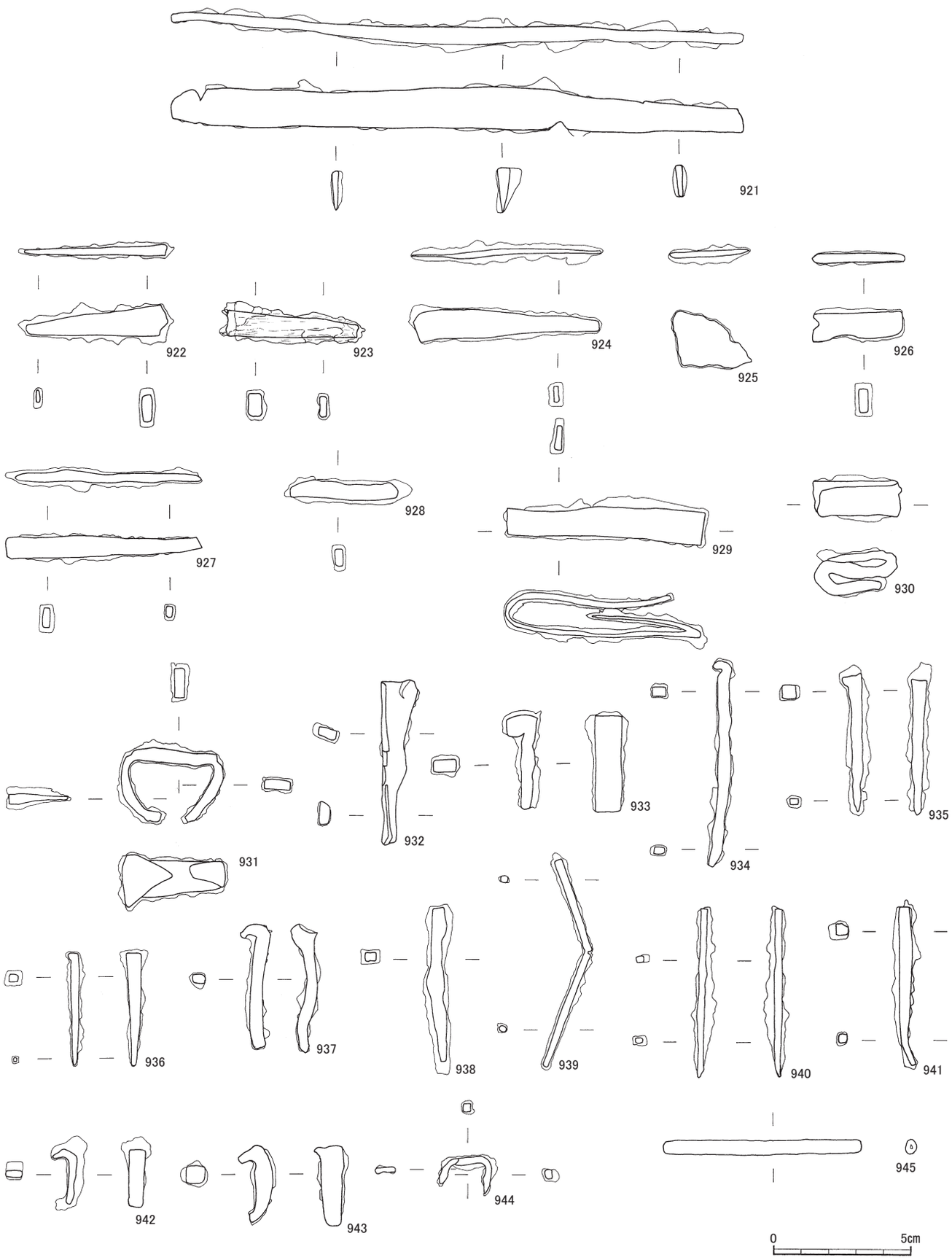
当該期の製鉄に係わる遺物は，以下の通りである。

950・951は坩堝であり，器形や質感などから同一個体の可能性が高い。復元口径は，10.6cmを測る。内外面ともに手捏ねにより成形される。内面には，高熱による赤化や白化，鉄分の熔着が見られる。

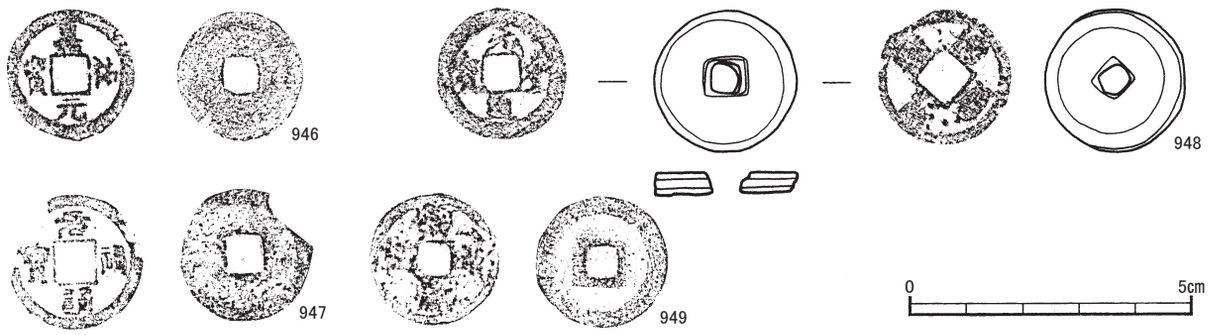
952は，鞴の羽口である。外周の復元直径は9.6cmで，穿孔の復元直径は，5.1cmである。外面には，高熱による器壁の白化や熔鉄の付着が見られる。図化していないが，鉄滓片がF－９区等から出土した。

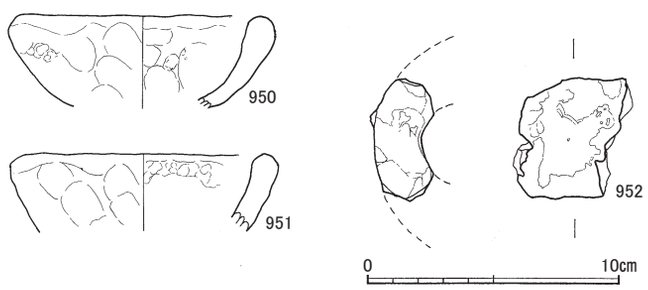
（15）　砥石　953 ～ 959

953は，火山ガラスを含む砂岩製である。４面を使用し，各面が凹みを呈する。一部，面に煤が付着する。

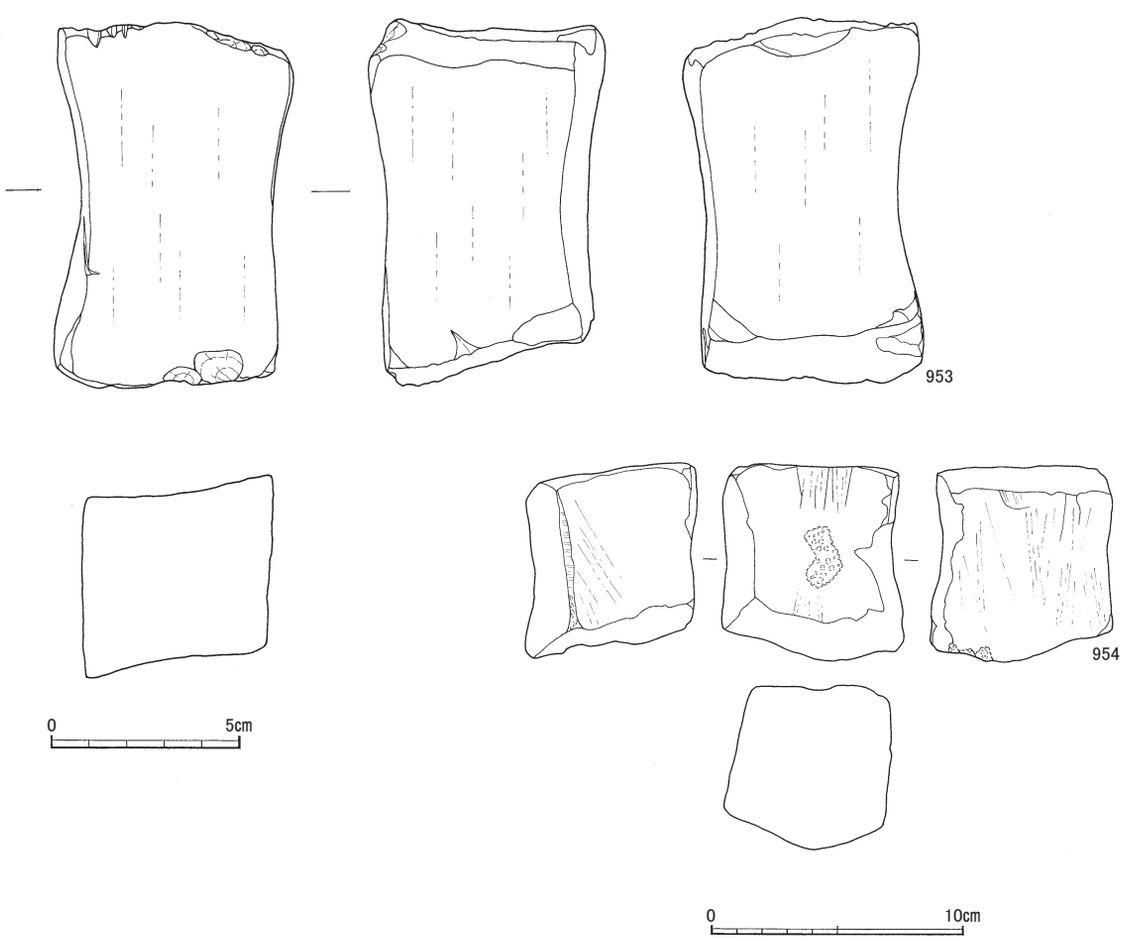


第176図　中世鉄製品他実測図

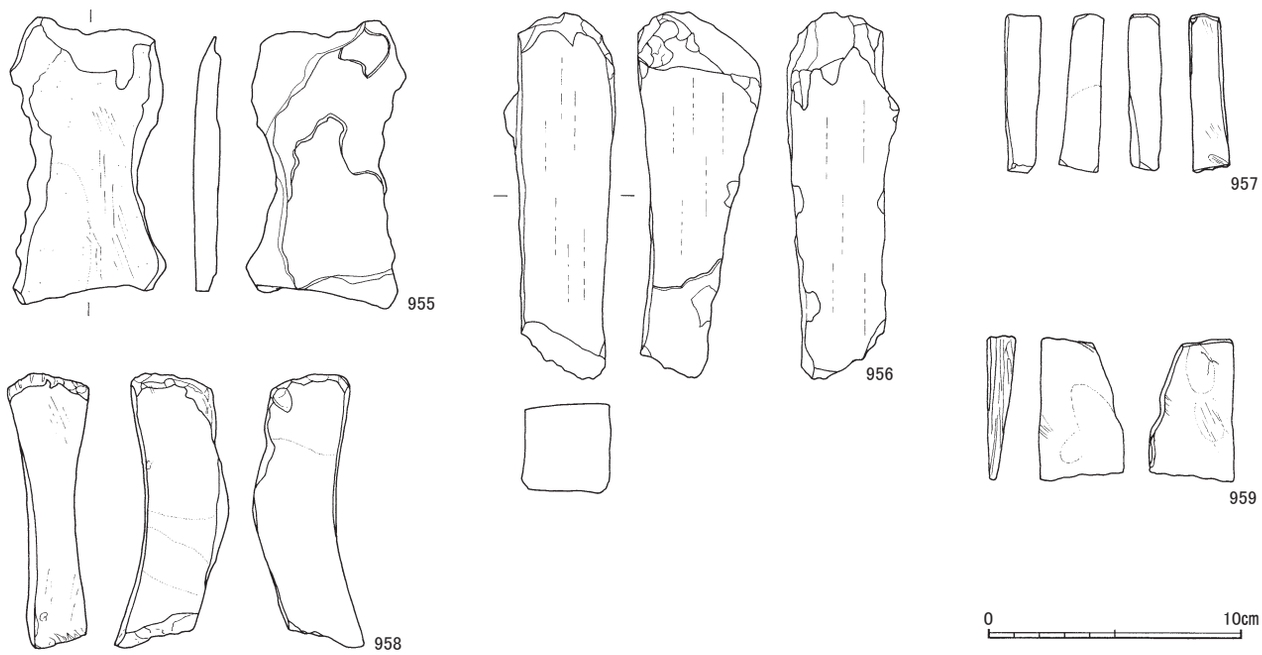




第177図　中世古銭・坩堝・鞴羽口実測図



第178図　中世砥石実測図（1）



第179図　中世砥石実測図（2）

954は，粘板岩製である。天草砥石と思われる。２面の使用が捉えられるが，１面の中央には，敲打痕が残される。

955は，火山ガラスを含む砂岩であり，953と同種の石材である。使用面が凸状を呈する。少なくとも，二つの側縁は，意図的な剥離を受けている。

956・957は，棒状を呈する器形である。何れも，天草砥石と思われる。956は，２面が凹状の面を持ち，１面は平坦である。957は，３面の凹状の使用面をもつ。上記の砥石と比較して，小型である。３面が凹状を呈し，１面は凸状を呈する。携帯用の砥石か。

959は，断面が先細りし扁平である。砥石に一般的に見られる使用面の凹みの中央が欠損したことにより，断面上，先細りを呈すると思われる。

第86表　中世土師器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	出土地点	層	種別	器種	分類	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量（cm） 口径	底径	器高	胎土 石英	長石	角閃	他	備考
167	689	青土59	12954	E-5	Ⅱb	土師器	坏	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	14.0	10.5	3.1	○	○	○	赤色鉱物	外面：赤色顔料。「外赤土器」
	690	黄土50	23098	F-9	Ⅱb	土師器	坏	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	13.2	9.0	2.9	○	○	○	火山ガラス	内面：煤
	691	黄土40	20187	C-7	Ⅱb	土師器	坏	Ⅰ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰黄色 Hue2.5Y7/2	灰黄色 Hue2.5Y7/2	－	10.0	－	○	○	○		二次焼成
	692	黄土48	22698	F-8	Ⅱb	土師器	坏	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	12.5	8.0	3.3	○	○	○	赤色鉱物	
	693	黄土43	9397	C-6	Ⅱb	土師器	坏	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue2.5YR7/6	橙色 Hue2.5YR7/6	12.5	8.7	3.5	○	○	○	赤色鉱物	外面：煤付着。内面：僅かに赤化。
	694	黄土37	22701	F-8	Ⅱb	土師器	坏	Ⅰ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue2.5YR6/6	橙色 Hue2.5YR6/6	－	9.0	－	○	○	○	赤色鉱物	
	695	青土49	15646	E-5	Ⅱb	土師器	坏	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	13.7	11.0	2.8	○	○	○		
	696	黄土63	10132	E-5	Ⅱb	土師器	坏	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	12.8	8.6	2.5	○	○	○	赤色鉱物	
	697	黄内10	22430	F-9	Ⅱb	土師器	坏	Ⅰ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	黒色 Hue10Y2/1	－	10.8	－	○	○	○		内面黒色化。煤付着。灯明皿か。
	698	黄土73	15614	D-5	Ⅱb	土師器	坏	Ⅰ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白色 Hue10YR8/2	灰白色 Hue10YR8/2	13.2	－	－	○	○	○	赤色鉱物	
	699	黄土45	2459	F-6	Ⅱ	土師器	坏	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR6/3	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	12.2	8.6	2.9	○	○	○		内面：煤付着。
	700	黄土57	4941	B-7	Ⅱ	土師器	坏	Ⅱ	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白色 Hue10YR8/2	灰白色 Hue10YR8/2	12.0	－	－	○	○	○	赤色鉱物	
	701	黄土14	17931	E-9	Ⅱb	土師器	坏	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	11.0	7.8	2.5	○	○	○	赤色鉱物	17376, 17932と接合。
	702	黄内8	15130	E-8	Ⅱb	土師器	坏	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	黒褐色 Hue2.5Y3/2	黒褐色 Hue2.5Y3/2	9.6	8.3	2.2	○	○	○		黒色化。灯明皿？

第87表　中世土師器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	出土地点	層	種別	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土				備考
											外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	
	703	黄土34	10620	D-5	Ⅱb	土師器	坏	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue5YR7/4	にぶい橙色 Hue5YR7/3	－	8.0	－	○	○	○		6462と接合。
	704	黄土17	10911	B-8	Ⅱa	土師器	坏	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	－	8.3	－	○	○	○		
	705	黄イ102	5668	D-5	Ⅱa	土師器	坏	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	－	7.6	－	○	○	○		
	706	青土52	12644	C-7	Ⅱb	土師器	坏	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白色 Hue10YR8/2	浅黄橙色 Hue10YR8/4	－	7.4	－	○	○	○		
	707	黄土42	3266	A-5	Ⅱ	土師器	坏	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	－	8.6	－	○	○	○	赤色鉱物	内外面：煤付着。
	708	黄土36	17311	E-8	Ⅱb	土師器	坏	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/2	にぶい黄橙色 Hue10YR7/2	－	8.0	－	○	○	○	赤色鉱物	体部下位に煤付着。
	709	黄土38	2896	A-5	Ⅱ	土師器	坏	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	－	7.0	－	○	○	○		
	710	黄土19	18708	D-7	Ⅱb	土師器	坏	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue5YR6/4	にぶい橙色 Hue5YR6/4	－	8.6	－	○	○	○	赤色鉱物	外面・内面・底面に煤付着。17388と接合。
	711	黄土35	2787	B-6	Ⅱ	土師器	坏	Ⅱ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	－	8.2	－	○	○	○	赤色鉱物	
	712	黄内9	14358	D-8	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	明赤褐色 Hue2.5YR5/6	黒色 Hue10Y2/1	7.1	5.0	2.1	○	○	○		二次焼成。灯明皿？内外面煤付着。
	713	黄土18	6624	D-4	Ⅱa	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR6/3	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	7.6	6.4	2.5	○	○	○	赤色鉱物	内外面：煤付着。
	714	黄土44	3199	A-5	Ⅱ	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	橙色 Hue7.5YR6/6	8.2	6.0	2.4	○	○	○	赤色鉱物	内面：煤付着。
167	715	黄100	612	I-4	Ⅳ	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	赤色 Hue7.5R4/8	赤色 Hue7.5R4/8	8.0	6.2	2.2	○	○	○		二次焼成。
	716	黄土16	19489	E-9	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	明赤褐色 Hue2.5YR5/8	明赤褐色 Hue2.5YR5/8	9.0	6.9	2.0	○	○	○		二次焼成。煤付着。
	717	黄土51	29212	E-9	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue10YR7/3	にぶい橙色 Hue10YR7/4	7.3	6.2	1.5	○	○	○		外面・内面・底面に煤付着。29263と接合。
	718	青土61	14876	D-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	7.8	7.0	0.9	○	○	○	赤色鉱物	
	719	青土76	12910	D-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	7.6	6.4	1.2	○	○	○		完形品。外赤土器。
	720	青土54	19884	D-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	8.0	6.2	1.0	○	○	○		
	721	黄土47	4460	B-7	Ⅱ	土師器	Ⅲ	Ⅰ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	橙色 Hue5YR6/6	－	6.1	－	○	○	○		
	722	赤204	15730	E-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	にぶい黄橙色 Hue7.5YR6/4	7.1	6.0	1.1	○	○	○		外赤土器。
	723	赤205	19859	E-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/5	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	6.2	6.1	0.7	○	○	○		
	724	赤207	22486	F-8	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue5YR7/8	浅黄橙色 Hue7.5YR8/5	6.9	5.6	0.8	○	○	○	赤色鉱物	
	725	赤206	19942	D-6	Ⅱa	土師器	Ⅲ	Ⅰ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	8.1	6.8	1.1	○	○	○	赤色鉱物	
	726	黄112	22556	A-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅰ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue5YR6/7	にぶい橙色 Hue5YR6/7	－	6.6	－	○	○	○		
	727	黄土46	3551	B-7	Ⅱ	土師器	Ⅲ	Ⅰ	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	－	6.2	－	○	○	○	赤色鉱物	
	728	青土56	19847	E-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	9.3	7.6	1.2	○	○	○	火山ガラス	二次焼成。
	729	青土62	14939	D-6	Ⅱ	土師器	Ⅲ	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	9.4	8.8	1.0	○	○	○		
	730	青土55	15637	E-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	8.6	6.6	1.0	○	○	○		
	731	青土63	1066	D-4	Ⅱ	土師器	Ⅲ	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	8.2	7.2	1.0	○	○	○	赤色鉱物	
	732	青土53	19826	E-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	8.4	7.4	1.3	○	○	○	火山ガラス	赤色土器。外面・内面・底面に煤付着。
	733	青土60	19829	E-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	8.0	7.2	1.1	○	○	○		
168	734	青土57	15734	E-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	8.0	7.0	1.0	○	○	○		外面・底面に煤付着。
	735	青土51	19782	D-6	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/3	9.4	7.0	0.9	○	○	○		
	736	黄土13	7275	E-5	Ⅱa	土師器	Ⅲ	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	8.6	6.7	1.4	○	○	○		
	737	黄土20	25445	D-5	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	8.6	7.0	1.4	○	○	○	赤色鉱物	
	738	青土50	18474	C-7	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅱ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	9.0	7.0	0.8	○	○	○	赤色鉱物 黒色鉱物	
	739	青土58	17396	E-9	Ⅱb	土師器	Ⅲ	Ⅲ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	10.2	8.2	1.4	○	○	○		
	740	青土64	19905	D-5	Ⅲb	土師器	Ⅲ	Ⅲ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/4	9.4	8.3	1.2	○	○	○		

第88表　中世土師器観察表（3）

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	出土地点	層	種別	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土				備考
											外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	
168	741	青土65	19825	E-5	Ⅱb	土師器	皿	Ⅲ	口縁部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	11.0	9.0	0.9	○	○	○		内面：煤付着。
	742	黄土70	5030	B-4	Ⅱ	土師器	坏	－	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	灰白色 Hue10YR8/2	11.4	－	－	○	○	○		片口。 外面：煤付着。

第89表　中世墨書土器観察表

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	出土地点	層	種別	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土				備考
											外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	
168	743	黄内35	22293	F-9	Ⅱb	墨書土器	坏	－	体部～底部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	6.2	－	○	○	○		「ハ」の字状の墨書。

第90表　中世須恵器・瓦質土器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	出土地点	層	種別	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量(cm)			胎土				備考
											外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	
169	744	青特23	－	E-5	－	須恵器	甕・壺	－	胴部	外：平行文タタキ 内：ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	浅黄橙色 Hue10YR8/4	－	－	－	○	○	○		樹枝文か？東播磨系か？
	745	青す64	14859	C-6	Ⅱb	須恵器	甕・壺	－	胴部	外：格子目文タタキ 内：平行文タタキ（ハケメ状）	灰色 Hue10Y4/1	灰色 Hue10Y5/1	－	－	－	○	○	○		
	746	青す65	9020	C-5	Ⅱb	須恵器	甕・壺	－	胴部	外：格子目文タタキ 内：平行文タタキ（ハケメ状）	灰黄色 Hue2.5Y7/2	灰黄色 Hue2.5Y7/2	－	－	－	○	○	○		
	747	青す66	12363	D-6	Ⅱb	須恵器	甕・壺	－	胴部	外：格子目文タタキ 内：平行文タタキ（ハケメ状）	灰黄色 Hue2.5Y7/2	灰黄色 Hue2.5Y7/2	－	－	－	○	○	○		
	748	青す43	2097	B-6	Ⅱb	須恵器	甕・壺	－	胴部	外：格子目文タタキ 内：平行文タタキ（ハケメ状）	灰黄色 Hue2.5Y7/2	灰黄色 Hue2.5Y7/2	－	－	－	○	○	○		
	749	青す42	12980	E-6	Ⅱb	須恵器	甕・壺	－	胴部	外：格子目文タタキ 内：平行文タタキ（ハケメ状）	灰黄色 Hue2.5Y7/2	灰黄色 Hue2.5Y7/2	－	－	－	○	○	○		
	750	黄土49	16355	D-7	Ⅱb	須恵器	坏・皿	－	胴部～底部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	17.2	－	○	○	○		底部糸切り痕。
	751	黄瓦100	12970	E-6	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	1	口縁部～胴部	外：回転ナデ 内：ナデ	灰白色 Hue5Y7/2 灰白色 Hue5Y4/1	灰白色 Hue5Y7/2	－	－	－	○	○	○		17763・22110と接合。
	752	青す41	12361	D-6	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	1	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰黄色 Hue2.5Y6/2	灰黄色 Hue2.5Y6/2	－	－	－	○	○	○		
	753	黄瓦い	17733	D-7	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	1	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	青灰色 Hue10BG6/1	灰色 Hue7.5Y5/1	－	－	－	○	○	○		
	754	青す39	18279	C-7	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	1	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰色 Hue7.5Y5/1	灰色 Hue7.5Y5/1	－	－	－	○	○	○		
	755	青す40	18425	C-7	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	1	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰オリーブ灰色 Hue5Y6/2	灰色 Hue5Y6/1	－	－	－	○	○	○		
	756	青す38	19373	C-7	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	1	口縁部～体部	外：回転ナデ 内：回転ナデ	黄灰色 Hue2.5Y6/1	黄灰色 Hue2.5Y6/1	－	－	－	○	○	○		19358と接合。
	757	黄瓦お	2994	A-5	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	1	体部～底部	外：ナデ後指頭押圧 内：ナデ後指頭押圧	灰色 Hue5Y5/1	灰色 Hue5Y5/1	－	7.0	－	○	○	○		
	758	青す47	12957	E-5	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	1	体部～底部	外：ナデ後指頭押圧 内：ナデ後指頭押圧	黄灰色 Hue2.5Y5/1	黄灰色 Hue2.5Y5/1	－	－	－	○	○	○		底部糸切り痕。
	759	黄瓦え	5665	D-5	Ⅱa	瓦質土器	擂鉢	1	体部～底部	外：ナデ 内：指頭押圧後ナデ	灰色 Hue7.5Y5/1	灰色 Hue7.5Y5/1	－	13.6	－	○	○	○		10707と接合。
	760	黄瓦あ	18433	C-7	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	2	口縁部～体部	外：ナデ 内：ナデ（櫛目状ナデ）	黄灰色 Hue2.5Y6/1 にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	黒褐色 Hue2.5Y3/1 黄灰色 Hue2.5Y4/1	－	－	－	○	○	○		内外面：青灰色の煤付着。
	761	青す60 -青す61	15172	E-8	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	2	体部	外：回転ナデ 内：ナデ（櫛目状ナデ）	灰白色 Hue5Y7/1	灰白色 Hue5Y7/2	－	－	－	○	○	○		内外面：青灰色の煤付着。 18923と接合。
	762	青す45	3811	C-7	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	3	口縁部～体部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	－	－	－	○	○	○		4541・21793と接合。
	763	黄瓦か	一括	C・D-8・9	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	4	口縁部～体部	外：ナデ 内：ナデ	灰色 Hue7.5Y6/1	灰色 Hue7.5Y6/1	－	－	－	○	○	○		備前系擂鉢。
	764	黄瓦け	1748	C-6	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	4	口縁部～体部	外：ナデ 内：ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	－	－	－	○	○	○		備前系擂鉢。
	765	黄瓦こ	16876	E-9	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	4	口縁部～体部	外：ナデ後指頭押圧 内：ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	－	－	－	○	○	○		備前系擂鉢。
	766	青す67	4307	G-6	Ⅱa	瓦質土器	擂鉢	4	体部	外：ナデ後指頭押圧 内：ナデ	灰色 Hue7.5Y4/1	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	－	－	－	○	○	○		備前系擂鉢。
	767	青す72	9651	B-8	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	4	体部	外：ナデ後指頭押圧 内：ナデ	黄灰色 Hue2.5Y6/1	灰黄色 Hue2.5Y6/2	－	－	－	○	○	○		備前系擂鉢。
170	768	青す69	16618	E-7	Ⅱa	瓦質土器	擂鉢	4	体部	外：ナデ後指頭押圧 内：ナデ	灰オリーブ灰色 Hue5Y5/2	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	－	－	－	○	○	○		備前系擂鉢。
	769	青す68	11790	E-8	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	4	体部	外：ナデ後指頭押圧 内：ナデ	灰色 Hue10Y4/1	にぶい黄橙色 Hue10YR5/3	－	－	－	○	○	○		備前系擂鉢。

第91表　中世須恵器・瓦質土器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	実測番号	取上番号	出土地点	層	種別	器種	分類	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土				備考
											外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他	
170	770	黄瓦う	13539	C-8	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	－	体部～底部	外：ナデ 内：不明	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4	－	10	－	○	○	○		備前系擂鉢。
	771	青す73	18890	E-7	Ⅱb	瓦質土器	擂鉢	－	底部	外：糸切り 内：不明	灰黄褐色 Hue10YR6/2	灰色 Hue7.5Y5.1	－	－	－	○	○	○		器種・産地不明。
	772	黄中3	8995	E-8	Ⅱa	瓦質土器	鉢	5	口縁部～体部	外：ナデ（櫛目状ナデ） 内：ナデ（櫛目状ナデ）	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	－	－	－	○	○	○		備前系陶器。
	773	青す71	11397	C-8	Ⅱa	陶器	擂鉢	－	体部～底部	外：胴部中位ナデ，体部下位ケズリ 内：不明	灰黄色 Hue2.5Y6/2	灰黄褐色 Hue10YR5/2	－	－	－	○	○	○		備前系陶器。
	774	青ス80	23068	F-8	Ⅱb	陶器	甕・壺	－	胴部	外：回転ナデ（櫛目状ナデ） 内：ナデ後指頭押圧	灰黄褐色 Hue10YR5/2	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	－	－	－	○	○	○		産地不明。
	775	青す74	9214	D-6	Ⅱb	瓦質土器	羽釜	－	口縁部	外：ナデ 内：ナデ	オリーブ黒色 Hue10Y3/2	オリーブ黒色 Hue10Y3/2	－	－	－	○	○	○		桜形。
	776	青す76	20914	H-5	Ⅱb	瓦質土器	羽釜	－	頸部～体部	外：ナデ 内：ナデ後工具ナデ	オリーブ黒色 Hue10Y3/1	灰色 Hue10Y4/1	－	－	－	○	○	○		菊花形。
	777	黄瓦く	9867	E-9	Ⅱa	瓦質土器	羽釜	－	体部	外：ナデ，内：ナデ	灰色Hue10Y4/1	灰色Hue10Y4/1	－	－	－	○	○	○		
	778	黄縄102	17357	E-9	Ⅱb	瓦質土器	羽釜	－	体部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR5/3	灰黄褐色 Hue10YR5/2	－	－	－	○	○	○		鍔下面に煤付着。
	779	青土71	13719	C-9	Ⅱb	瓦質土器	火鉢・植木鉢	－	体部	外：ナデ 内：ナデ	暗褐色 Hue10YR3/3	暗褐色 Hue10YR3/3	－	－	－	○	○	○		植木鉢の場合，近世相当。
	780	青す77	46	D-8	Ⅱ	瓦質土器	焙烙	－	把手	外：ケズリ及び指頭押圧によるナデ，内：工具ナデ	にぶい黄橙色 Hue7.5YR7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/3	－	－	－	○	○	○		把手下面に煤付着。

第92表　中世白磁観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	種別	器種	胎土の色調	施釉	釉薬	法量			産地	時期	分類	備考
										口径	底径	器高				
171	781	表土一括	B-７	表土	白磁	碗	灰白色Hue2.5Y8/2	高台外面～畳付露胎	透明釉	－	6.8	－		A期	碗I類	蛇ノ目高台。胴部下位～高台に砂目。化粧土。
	782	14085	C-8	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/1	残存部全面施釉	透明釉	－	－	－		B期	皿XI類	
	783	29429	C-7	Ⅳ	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/1	残存部全面施釉	透明釉	－	－	－		B期	皿XI類	
	784	8301	E-9	Ⅱa	白磁	皿	灰白色Hue2.5Y8/1	体部下位～高台露胎	透明釉	－	4.2	－		B期	皿XI類	
	785	20423	I-５	Ⅱb	白磁	皿	淡黄色Hue2.5Y8/3	体部下位～高台露胎	透明釉	－	3.1	－		B期	皿XI類	内面見込みに目跡。
	786	6579	E-4	Ⅱa	白磁	碗	灰白色Hue7.5Y8/1	体部中位から露胎	透明釉	－	－	－		C期	碗Ⅳ類	黒色鉱物を含む。
	787	9521	C-7	Ⅱa	白磁	碗	淡黄色Hue2.5Y8/4	残存部全面施釉	透明釉	14.2	－	－		C期	碗Ⅳ類	
	788	一括	B-7	表土	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/2	残存部全面施釉	透明釉	－	－	－		C期	皿V類	
	789	10608	D-5	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue2.5Y8/3	残存部全面施釉	透明釉	9.8	－	－		C期	皿V類	
	790	一括	I・J-3・4	表土	白磁	皿	淡黄色Hue2.5Y8/3	残存部全面施釉	透明釉	－	－	－		C期	皿V類	
	791	19637	D-7	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/1	体部下位～底部外面露胎	透明釉	－	6.0	－		C期	皿V類	底部外面：黒色の焦げ。
	792	一括	E・F-5・6	表土	白磁	皿	灰黄色Hue2.5Y7/2	体部下位～底部外面露胎	透明釉	－	3.6	－		C期	皿Ⅶ類	底部外面：黒色。17536と接合。
	793	19817	E-5	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	10.4	5.4	3.3		F期	皿IX類	
	794	20020	B-7	Ⅲa	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	9.9	5.9	2.3		F期	皿IX類	
	795	15722	D-5	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	9.4	5.4	2.8		F期	皿IX類	615・5775・9014・19913と接合。
	796	5775	E-5	Ⅱa	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y8/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	8.6	5.8	1.9		F期	皿IX類	
	797	417	B-5	Ⅱ	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y8/1	体部中位～露胎，口禿	透明釉	10.0	6.6	3.0		F期	皿IX類	8249・11333と接合。
	798	一括	E・F-5・6	表土	白磁	皿	灰白色Hue2.5Y8/2	残存部全面施釉，口禿	透明釉	10.2	6.1	2.4		F期	皿IX類	
	799	19737	G-5	Ⅱa	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/2	残存部全面施釉，口禿	透明釉	9.8	6.6	2.3		F期	皿IX類	19730と接合。
	800	15733	E-5	Ⅱb	白磁	皿	灰白色7.5Y8/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	10.7	－	－		F期	皿IX類	
	801	28839	E-5	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y8/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	10.6	－	－		F期	皿IX類	28840・19895と接合。
	802	10051	E-6	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	10.0	－	－		F期	皿IX類	
	803	3238	A-5	Ⅱ	白磁	皿	灰黄色Hue2.5Y7/2	残存部全面施釉，口禿	透明釉	9.8	－	－		F期	皿IX類	5871と接合。
	804	12305	E-5	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/2	残存部全面施釉，口禿	透明釉	9.4	－	－		F期	皿IX類	22112と接合。
	805	14366	D-8	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	11.0	－	－		F期	皿IX類	
	806	7401	D-5	Ⅱa	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/2	残存部全面施釉，口禿	透明釉	8.8	－	－		F期	皿IX類	
	807	一括	E・F-5・6	表土	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	11.2	－	－		F期	皿IX類	
	808	22413	F-9	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	11.0	－	－		F期	皿IX類	23748と接合。
	809	17620	D-7	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y8/1	体部中位～露胎，口禿	透明釉	13.6	－	－		F期	皿IX類	17255と接合。
	810	2889	A-5	Ⅱ	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y8/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	11.0	－	－		F期	皿IX類	
	811	7096	E-3	I	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	－	6.6	－		F期	皿IX類	
	812	17242	E-8	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	－	7.0	－		F期	皿IX類	

第93表　中世白磁観察表（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	種別	器種	胎土の色調	施釉	釉薬	法量			産地	時期	分類	備考
										口径	底径	器高				
171	813	8706	D-8	Ⅱa	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y8/1	残存部全面施釉，口禿	透明釉	－	6.4	－		F期	皿Ⅸ類	12430と接合。
	814	一括	D・E-8・9	表土	白磁	皿	淡黄色Hue2.5Y8/3	胴部中位～露胎	透明釉	－	－	－		H期	森田D群	
	815	一括	G・H-4～6	Ⅱ	白磁	皿	淡黄色Hue2.5Y7/3	胴部中位～露胎	透明釉	10.4	－	－		H期	森田D群	
	816	16994	D-7	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/1	全面施釉後畳付釉剥ぎ取り	透明釉	9.6	4.2	2.3		H期	森田D群	
	817	28884	B-9	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue2.5Y8/2	胴部下位～高台露胎	透明釉	－	4.2	－		H期	森田D群	割高台。
	818	一括	C・D-8・9	Ⅱ	白磁	皿	灰白色Hue5GY 8/1	畳付～高台内面露胎	透明釉	－	4.0	－		H期	森田D群	割高台。
	819	12078	C-8	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue7.5Y8/1	畳付～高台内面露胎	透明釉	－	4.4	－		H期	森田D群	割高台。
	820	10331	C-7	Ⅱb	白磁	皿	灰白色Hue2.5Y8/2	胴部下位～高台露胎	透明釉	－	4.0	－		H期	森田D群	
	821	10688	D-6	Ⅱb	白磁	多角杯	灰白色Hue5Y8/1	残存部全面施釉	透明釉	9.6	－	－		H期	森田D群	
	822	10791	D-6	Ⅱb	白磁	多角杯	灰白色Hue5Y8/1	胴部下位～露胎	透明釉	－	－	－		H期	森田D群	
	823	13741	C-8	Ⅱb	白磁	多角杯	灰白色Hue2.5Y8/2	胴部下位～露胎	透明釉	－	－	－		H期	森田D群	
	824	1144	B-3	表土	白磁	坏	灰白色Hue7.5Y8/1	全面施釉後畳付釉掻ぎ取り	透明釉	－	6.5	－		I～J期	森田E群	
	825	6434	D-5	Ⅱa	白磁	皿	灰白色Hue2.5Y8/1	高台・畳付露胎	透明釉	－	－	－		I～J期	森田E群	
	826	11447	B-8	Ⅱa	白磁	皿	灰白色Hue2.5Y8/1	全面施釉後畳付釉剥ぎ取り	透明釉	－	6.0	－		I～J期	森田E群	畳付：砂粒付着。
	827	11388	C-8	Ⅱa	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/1	全面施釉後畳付釉剥ぎ取り	透明釉	－	6.8	－		I～J期	森田E群	畳付：砂粒付着。
	828	16881	E-9	Ⅱa	白磁	皿	灰白色Hue5Y8/1	全面施釉後畳付釉剥ぎ取り	透明釉	－	6.6	－		I～J期	森田E群	畳付～胴部下位：砂粒付着。11137・11878と接合。
	829	22801	F-9	Ⅱb	白磁	水注	灰白色Hue5Y8/1	残存部全面施釉	透明釉	8.8	－	－		D期		

第94表　中世青磁観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	種別	器種	胎土の色調	施釉	釉薬	法量			産地	時期	分類	備考
										口径	底径	器高				
172	830	1496	B-5	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue10YR7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	越州窯系？	A期	碗Ⅰ類？	
	831	6527	E-4	Ⅱa	青磁	碗	灰白色Hue10YR8/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	D期	碗Ⅰ類	
	832	19019	E-7	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue7.5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	17.0	5.6	6.3	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	247と接合。
	833	19839	E-5	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	17.0	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	12955と接合。
	834	19337	C-7	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue10Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	16.0	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	835	7268	E-5	Ⅱa	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	16.4	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	19827と接合。
	836	20559	E-9	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	17.2	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	837	19897	D-5	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	16.0	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	6065と接合。
	838	19791	D-6	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	839	17566	D-7	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	16.0	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	19270と接合。
	840	12926	E-5	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y8/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	841	18752	C-7	Ⅱb	青磁	碗	灰黄色Hue2.5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	15.0	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	842	15075	E-8	Ⅱb	青磁	碗	灰黄色Hue2.5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	843	19833	E-5	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue10Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	844	15648	E-5	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	15.4	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	845	19458	E-9	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	846	626	I-4	Ⅱ	青磁	碗	灰白色HueN 7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	847	16852	E-9	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	15758と接合。
	848	12874	D-5	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	849	2074	B-6	Ⅱ	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	850	1287	C-5	Ⅱ	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	16.0	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	851	17885	E-9	Ⅱb	青磁	碗	灰黄色Hue2.5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	7563と接合。
	852	4256	F-5	Ⅳ	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	
	853	3284	A-6	Ⅱ	青磁	碗	灰白色Hue2.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-b類	2620と接合。

第95表　中世青磁観察表（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	種別	器種	胎土の色調	施釉	釉薬	法量			産地	時期	分類	備考
										口径	底径	器高				
172	854	1251	F-4	表土	青磁	碗	灰白色 Hue7.5Y7/1	畳付～高台内面露胎	青磁釉	－	5.2	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-e類	174と接合。
	855	6253	E-5	Ⅱa	青磁	碗	灰白色 Hue2.5Y7/1	畳付～高台内面露胎	青磁釉	－	5.4	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-e類	内面見込みに草花文の印刻。
	856	7721	E-5	Ⅱa	青磁	碗	灰黄色 Hue2.5Y7/2	畳付～高台内面露胎	青磁釉	－	5.4	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-e類	
	857	17818	E-7	Ⅱb	青磁	碗	灰白色 Hue2.5Y7/1	畳付～高台内面露胎	青磁釉	－	5.0	－	龍泉窯系	E期	碗Ⅱ-e類	2711と接合。
	858	19900	D-5	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue5Y8/1	畳付端部釉掻き取り	青磁釉	－	3.2	－	龍泉窯系	F期	碗Ⅲ類?	
	859	4209	B-7	Ⅲ	青磁	碗	灰白色Hue5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	16.0	－	－	龍泉窯系	F期	上田B類	
	860	16978	D-7	Ⅱb	青磁	碗	灰白色 Hue7.5Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	16.0	－	－	龍泉窯系	F期	上田B類	
	861	14354	D-8	Ⅱb	青磁	浅形碗	灰白色 Hue10Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	14.0	－	－	龍泉窯系	F期		
	862	7557	D-6	Ⅱa	青磁	浅形碗	灰白色 Hue10Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	F期		9280と接合。
173	863	20367	H-5	Ⅱb	青磁	碗	灰白色 Hue10Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	14.0	－	－	龍泉窯系	G期	上田C類	外面：雷文帯＋蓮弁文。
	864	－	G・H-4～6	Ⅱ	青磁	碗	灰白色 Hue7.5Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	G期	上田C類	外面：雷文帯。
	865	11282	C-9	Ⅱa	青磁	碗	灰白色Hue5Y8/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	G期	上田C類	外面：雷文帯。
	866	5790	E-5	Ⅱa	青磁	碗	灰白色 Hue7.5Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	G期	上田C類	
	867	－	G・H-4～6	Ⅱ	青磁	碗	灰白色 Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	15.2	－	－	龍泉窯系	G・H期	上田D類	
	868	－	F-6・7	表土	青磁	碗	灰白色 Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	G・H期	上田D類	
	869	15040	E-6	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	G・H期	上田D類	
	870	17109	D-7	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	G期	上田D類	
	871	2751	B-6	Ⅱ	青磁	碗	灰白色 Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	12.0	－	－	龍泉窯系	G期	上田D類	
	872	9006	E-9	Ⅱa	青磁	碗	灰白色Hue5Y7/1	残存部全面施釉	青磁釉	15.0	－	－	龍泉窯系	G期	上田D類	
	873	－	E・F-4・5	表土	青磁	碗	灰白色HueN 8/1	高台内輪状釉掻き取り	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	G期		内面見込みに草花文の印。
	874	22608	B-4	Ⅱb	青磁	碗	灰白色Hue5Y7/1	高台内輪状釉掻き取り	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	G期		内面見込みに草花文の印刻。18307と接合。
	875	17786	E-7	Ⅱb	青磁	碗	灰白色 Hue2.5Y7/1	高台内輪状釉掻き取り	青磁釉	－	7.6	－	龍泉窯系	G期		
	876	10524	E-9	Ⅱa	青磁	碗	灰黄色 Hue2.5Y7/2	高台内輪状釉掻き取り	青磁釉	－	5.8	－	龍泉窯系	G期		
	877	8600	C-8	Ⅱb	青磁	碗	灰白色 Hue2.5Y8/1	高台内輪状釉掻き取り	青磁釉	－	6.4	－	龍泉窯系	G期		
	878	4237	B-7	Ⅱ	青磁	碗	灰黄色 Hue2.5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	14.0	－	－	龍泉窯系	H期	上田B類	細形蓮弁文。13433・20829・12508と接合。
	879	Pit637	I-2	Ⅱ	青磁	碗	灰黄色Hue2.5Y81	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	H期	上田B類	細線蓮弁文。
	880	17057	D-7	Ⅱb	青磁	碗	灰白色 Hue2.5Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	H期	上田B類	細線蓮弁文。
	881	19744	G-5	Ⅱa	青磁	碗	灰黄色 Hue2.5Y6/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	H期	上田B類	細線蓮弁文。
	882	8244	C-8	Ⅱa	青磁	碗	灰黄色 Hue2.5Y8/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	H期	上田B類	細線蓮弁文。
	883	一括	E-5	Ⅲ	青磁	碗	灰色Hue5Y6/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	H期	上田B類	細線蓮弁文。
	884	17101	D-7	Ⅱb	青磁	碗	灰黄色 Hue2.5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－	龍泉窯系	H期	上田B類	細線蓮弁文。
	885	一括	F-7	Ⅳ	青磁	碗	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	畳付～高台内面露胎	青磁釉	－	4.0	－	福建省	I～J期		胎土粗く，褐色を帯びる。
	886	12759	B-8	Ⅱb	青磁	碗	淡黄色 Hue2.5Y8/3	高台内露胎。内面見込みに目跡，輪状の掻き取り痕	青磁釉	－	8.0	－		I～J期		内面見込みに目跡，円状に露胎。
	887	10792	D-6	Ⅱb	青磁	皿	灰黄色 Hue7.5Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	12.2	－	－		H期以降		
	888	22702	F-8	Ⅱb	青磁	皿	灰白色 Hue7.5Y8/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－		H期以降		
	889	544	J-2	Ⅱ	青磁	稜花皿	灰黄色 Hue2.5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	13.0	－	－		H期以降		
	890	16354	D-7	Ⅱb	青磁	稜花皿	灰黄色 Hue2.5Y7/3	残存部全面施釉	青磁釉	10.2	－	－		H期以降		外面：片彫文様。
	891	17601	D-7	Ⅱb	青磁	稜花皿	灰黄色 Hue2.5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－		H期以降		
	892	－	E・F-4・5	表土	青磁	稜花皿	浅黄色 Hue2.5Y7/3	全面施釉後，高台内釉掻き取り	青磁釉	11.7	4.5	2.6		H期以降		内面：草花文か？
	893	10711	D-6	Ⅱb	青磁	稜花皿	灰黄色 Hue2.5Y7/2	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－		H期以降		
	894	13607	C-8	Ⅱb	青磁	皿	灰白色 Hue2.5Y8/2	全面施釉後，底部釉掻き取り	青磁釉	－	5.2	－	同安窯系	D期	皿Ⅰ-2b類	
	895	15143	E-8	Ⅱb	青磁	皿	灰白色 Hue2.5Y7/1	体部外面下位～底部露胎	青磁釉	－	4.4	－	同安窯系	D期	皿Ⅰ-1b類	
	896	6428	D-6	Ⅱa	青磁	香炉	灰白色 Hue7.5Y8/1	内面上半以下露胎	青磁釉	－	－	－				
	897	17794	E-7	Ⅱb	青磁	合子蓋	灰白色 Hue2.5Y8/2	外：残存部全面施釉内：露胎	青磁釉	6.7	－	－				7970と接合。

第96表　中世青白磁観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層位	種別	器種	胎土の色調	施釉	釉薬	法量 口径	法量 底径	法量 器高	産地	時期	分類	備考
173	898	1575	－	－	青白磁	合子身	灰白色 Hue7.5Y8/1	受身部，体部下位露胎	青磁釉	4.6	－	－				
	899	10377	C-7	Ⅱb	青白磁	合子身	灰白色 Hue7.5Y8/1	内面，底部露胎	青磁釉	－	4.2	－				印花文。
	900	9021	C-5	Ⅱb	青白磁	合子蓋	灰白色 Hue7.5Y8/1	残存部全面施釉	青磁釉	－	－	－				草花文。

第97表　中世中国陶器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層位	種別	器種	胎土の色調	施釉	釉薬	法量 口径	法量 底径	法量 器高	産地	時期	分類	備考
173	901	1586	B-5	Ⅱ	中国陶器	壺	灰白色 Hue7.5Y7/1	残存部全面施釉	茶褐釉	8.6	－	－	中国	E・F期	壺Ⅳ類	1835と接合。

第98表　中世青花観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	色調	釉薬	施釉	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	産地	時期	分類	備考
174	902	9142	D-5	Ⅱb	碗	灰白色 Hue2.5YR8/2	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮	H期	碗B群	
	903	9754	C-8	Ⅱb	碗	灰白色 Hue5Y8/1	透明釉	残存部全面施釉	12.8	－	－	景徳鎮	J期	碗C群	
	904	11631	C-7	Ⅱb	碗	灰白色 Hue7.5YR8/1	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	景徳鎮	J期	碗C群	
	905	8056	D-5	Ⅱa	碗	浅黄橙色 Hue10YR8/3	透明釉	残存部全面施釉	12.5	－	－	漳州窯	K期	碗E群	
	906	13714	C-9	Ⅱb	碗	浅黄橙色 Hue10YR8/3	透明釉	残存部全面施釉	－	－	－	漳州窯	K期	碗E群	
	907	21075	F-8	Ⅱa	碗	灰白色 HueN7/0	透明釉	残存部全面施釉	－	4.4	－	景徳鎮	K期	碗E群	
	908	10036	E-6	Ⅱb	碗	灰白色 Hue7.5Y8/1	透明釉	畳付釉掻き取り	－	3.4	－	漳州窯	J期	碗C群	
	909	一括	－	表土	皿	灰白色 Hue5Y8/1	透明釉	底部輪状の釉掻き取り	11.0	4.6	2.5	景徳鎮	J期	皿C群	内面見込みに人形化した「寿」。
	910	一括	F-9	－	皿	灰白色 Hue10Y8/1	透明釉	底部輪状の釉掻き取り	－	4.5	－	景徳鎮	J期	皿C群	芭蕉文。 内面見込み：捻花文。 釉掻き取り部分に砂目あり。
	911	9931	E-8	Ⅱa	皿	灰白色 Hue5Y8/2	透明釉	底部輪状の釉掻き取り	－	3.2	－	漳州窯	J期	皿C群	内面見込みに水仙文。
	912	1082	D-3	表土	皿	浅黄色 Hue2.5YR8/3	透明釉	高台内釉掻き取り	－	5.1	－	漳州窯	J期	皿C群	
	913	8429	B-8	Ⅱb	稜花皿	灰白色 Hue5Y8/1	透明釉	畳付釉掻き取り	12.8	7.0	2.8	景徳鎮	H期	皿B群	
	914	一括	E-6	Ⅱa	皿	浅黄橙色 Hue10YR8/3	翡翠釉	残存部全面施釉	－	－	－	中国産	J期以降		青釉陶器。

第99表　中世滑石製品観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	部位		器面調整	石材	色調 外面	色調 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	備考
175	915	15638	E-5	Ⅱb	石鍋	口縁部～胴部	鍔	外：縦ケズリ 内：縦ケズリ	滑石	灰黄褐色 Hue10YR6/2	灰褐色 HueEYR4/1	21.4	－	－	外面に煤付着。
	916	22113	E-5	Ⅱb	石鍋	口縁部～胴部	鍔	外：縦ケズリ 内：縦ケズリ	滑石	灰白色 Hue10YR7/1	褐灰色 Hue10YR5/1	－	－	－	外面に煤付着。
	917	12518	C-6	Ⅱb	石鍋	口縁部～胴部	鍔	外：縦ケズリ 内：縦ケズリ	滑石	褐灰色 Hue7.5YR6/1	明褐灰色 Hue7.5YR7/1	29.0	－	－	外面に煤付着。
	918	12213	C-7	Ⅱb	石鍋	胴部	鍔	外：縦ケズリ 内：縦ケズリ	滑石	黄灰色 Hue2.5Y6/1	黄灰色 Hue2.5Y6/1	－	－	－	外面に煤付着。
	919	18769	C-7	Ⅱb	石鍋	胴部	－	外：縦ケズリ 内：縦ケズリ	滑石	褐灰色 Hue7.5YR6/1	灰褐色 Hue7.5YR5/2	－	－	－	外面に煤付着。
	920	20897	I-5	Ⅱb	不明	－	－	外：ケズリ 内：ケズリ	滑石	灰黄褐色 Hue10YR6/2	灰褐色 Hue10YR4/1	－	－	－	長さ3.0cm，直径1.5cm。

第100表　中世鉄製品観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	材質	計測値（cm,g）				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重量	
176	921	4056	B-7	Ⅱ	刀子	鉄	21.1	1.6	0.6	40.22	完形品。
	922	4350	F-7	Ⅲ	刀子	鉄	5.2	1.2	0.5	4.94	茎部に着柄の木片が付着。
	923	4350	F-7	Ⅲ	刀子	鉄	4.7	0.9	0.5	6.42	
	924	9614	B-8	Ⅱb	刀子	鉄	6.8	1.4	0.2	7.79	
	925	16360	E-7	Ⅱb	刀子	鉄	2.9	2.0	0.2	5.24	
	926	13747	D-7	Ⅱb	刀子	鉄	3.1	0.9	0.4	4.63	
	927	14620	D-8	Ⅱb	刀子	鉄	7.2	0.8	0.4	9.93	
	928	29323	F-9	Ⅱb	刀子	鉄	4.0	0.65	0.3	4.49	
	929	12410	D-6	Ⅱb	不明	鉄	17.8	1.2	0.3	24.25	
	930	14439	E-8	Ⅱb	不明	鉄	8.5	1.3	0.5	18.36	
	931	17929	E-9	Ⅱb	不明	鉄	8.5	1.9	0.5	8.92	
	932	14534	E-8	Ⅱb	不明	鉄	6.0	0.9	0.4	8.92	
	933	8960	E-9	Ⅱa	釘	鉄	3.5	0.5	0.5	9.83	
	934	16388	D-7	Ⅱb	釘	鉄	7.5	0.5	0.3	8.01	
	935	8883	B-8	Ⅱb	釘	鉄	5.0	0.4	0.4	7.24	
	936	16870	E-9	Ⅱb	釘	鉄	4.1	0.4	0.3	2.81	
	937	22776	E-8	Ⅱb	釘	鉄	4.6	0.5	0.5	5.73	
	938	29322	F-9	Ⅱb	釘	鉄	5.7	0.6	0.4	7.95	
	939	22431	F-9	Ⅱb	釘	鉄	8.2	0.3	0.3	4.16	
	940	7434	D-5	Ⅱa	釘	鉄	6.1	0.3	0.3	4.04	
	941	11496	C-8	Ⅱb	釘	鉄	5.8	0.7	0.4	5.74	
	942	16339	E-7	Ⅱb	釘	鉄	2.4	0.6	0.3	3.47	
	943	22923	F-8	Ⅱb	釘	鉄	3.1	0.8	0.7	5.39	
	944	17883	E-9	Ⅱb	釘	鉄	3.5	0.5	0.3	2.18	
	945	13455	C-6	Ⅱb	不明	鉄	7.2	0.65	0.4	5.11	

第101表　中世古銭観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	計測値（cm）						分類	備考
						a	b	c	d	e	f		
177	946	116	H-5	Ⅱb	古銭	2.3	2.3	1.8	1.8	0.7	0.7	嘉祐元寶	
	947	12885	E-5	Ⅱb	古銭	2.4	2.4	2.0	2.0	0.7	0.7	元祐通寶	
	948	116	H-5	Ⅱb	古銭	2.3	2.3	2.0	2.0	0.6	0.6	元豊通寶	3枚付着。
	949	一括	C-4・5	Ⅱb	古銭	2.3	2.3	1.8	1.7	0.6	0.6	－	

第102表　中世坩堝・鞴羽口観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃	他		
177	950	20380	H-5	Ⅱb	坩堝	口縁部～体部	外：指頭押圧 内：指頭押圧	暗赤色Hue10R3/4 暗赤褐色Hue10R3/3	暗赤色Hue7.5R3/6 暗赤褐色Hue7.5R3/3 黒色Hue7.5R2/1	10.6	－	－	○	－	－	礫 黒色鉱物	良	
	951	1320	C-5	表土	坩堝	口縁部～体部	外：指頭押圧 内：指頭押圧	暗赤色Hue7.5R3/4 暗赤褐色Hue2.5Y5/2 赤黒色Hue10R10/1	暗赤色Hue10R3/6 暗赤褐色Hue10R1.7/1	10.7	－	－	○	－	－	礫 黒色鉱物	良	
	952	22667	F-9	Ⅱb	吹子	羽口	－	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	黄褐色Hue2.5Y5/3 浅黄橙色Hue10yr8/4	－	－	－	○	－	－	礫 黒色鉱物 赤色鉱物	良	

第103表　中世砥石観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	石材	計測値（cm）				備考
							最大長	最大幅	最大厚	重さ（g）	
178	953	22525	F-9	Ⅱb	砥石	砂岩	9.78	6.42	5.35	530	火山ガラスを含む砂岩。
	954	937-3	I-3	Ⅳ	砥石	粘板岩	7.85	7.3	6.6	500	天草砥石。
179	955	2502	B-5	Ⅱ	砥石	砂岩	11.6	6.3	10.5	100	火山ガラスを含む砂岩。
	956	702	H-4	Ⅳ	砥石	粘板岩	14.6	4.9	3.5	370	天草砥石。
	957	4445	B-7	Ⅱ	砥石	粘板岩	6.4	1.8	1.4	20	天草砥石。
	958	20	J-4	Ⅱ	砥石	粘板岩	11.0	4.5	3.3	160	天草砥石。
	959	19443	E-9	Ⅱb	砥石	粘板岩	5.65	3.35	1.15	20.5	天草砥石。

第９節　近世の調査

１　調査の概要

中世の溝状遺構に重層して，近世埋土の道跡が１条検出された。長軸3.8ｍ程，幅2.1ｍ程で検出され，東西方向に伸びる。現在の都集落と本遺跡をつなぐ道跡の可能性が考えられる。平面状況は，中世の溝状遺構２号に重なり合うため，含めて報告した。主にⅡa層内に，肥前系磁器や薩摩焼，古銭が出土した。

２　遺物

（１）陶磁器　960 ～ 980

960は，肥前系の筒形碗である。外面には格子文をもち，口縁部内面には界線がある。貫入がみられる。

961は，広東碗である。外面に雪持笹文，内面に界文が描かれる。

962は，中皿の高台である。蛇ノ目凹型高台を呈し，高台内の釉を輪状に掻き取る。内面見込みには，草花文が描かれる。平佐系のものと思われる。

963は，碗の高台である。内面見込みには，宝文（巻物）をもち，高台畳付は釉を掻き取る。

964は，16世紀末～ 17世紀前半の肥前系の碗である。口縁部は鐙口で，鉄釉が施され，外面体部下位は露胎する。

965は，肥前系の碗で，鉄釉が厚く施釉される。口縁部は鐙口を呈し，外面体部下半は露胎する。

966は，肥前系の楽茶碗である。鉄釉が施釉され，口縁部は短くわずかに外反する。

967は，肥前系の朝顔碗である。高台脇の稜が明瞭で，高台畳付は釉を掻き取る。白土による内ハケ目を施す。

968は，肥前系の皿である。長い口縁部をもち，緩やかな丸みをもって外反する。透明釉が施され，僅かだが貫入がみられる。

969は，唐津焼の鉢である。全体的に藁灰で施釉され，外面胴部中位以下は露胎する。内面は，鉄絵と緑彩で樹木もしくは草花と思われる文様が施され，「二彩唐津」と思われる。また，白土が装飾的に塗布されている部分がある。

970は，筒形香炉である。口縁端部を内方向に折り返して，断面が丸形を呈する。青磁釉を口縁部から外面体部中位まで施釉し，内面，外面体部下位は露胎する。

971 ～ 979は，薩摩焼である。971・972は，片口鉢であり，口唇部が露胎する。971は，細く丸く下方向に下がる口縁部をもち，972は口縁部が「L」字状を呈す。

973・974は，土瓶の蓋である。外面に鉄釉を施し，内面は露胎する。974は蓋の受け身部分を意図的に打ち欠く。

975は，山茶碗釜の蓋である。外面のみ鉄釉を施釉する。

976は甕の口縁部で，口唇部が露胎し，貝目を残す。

977・978は，甕の胴部である。内面には，あて具痕である青海波を残す。

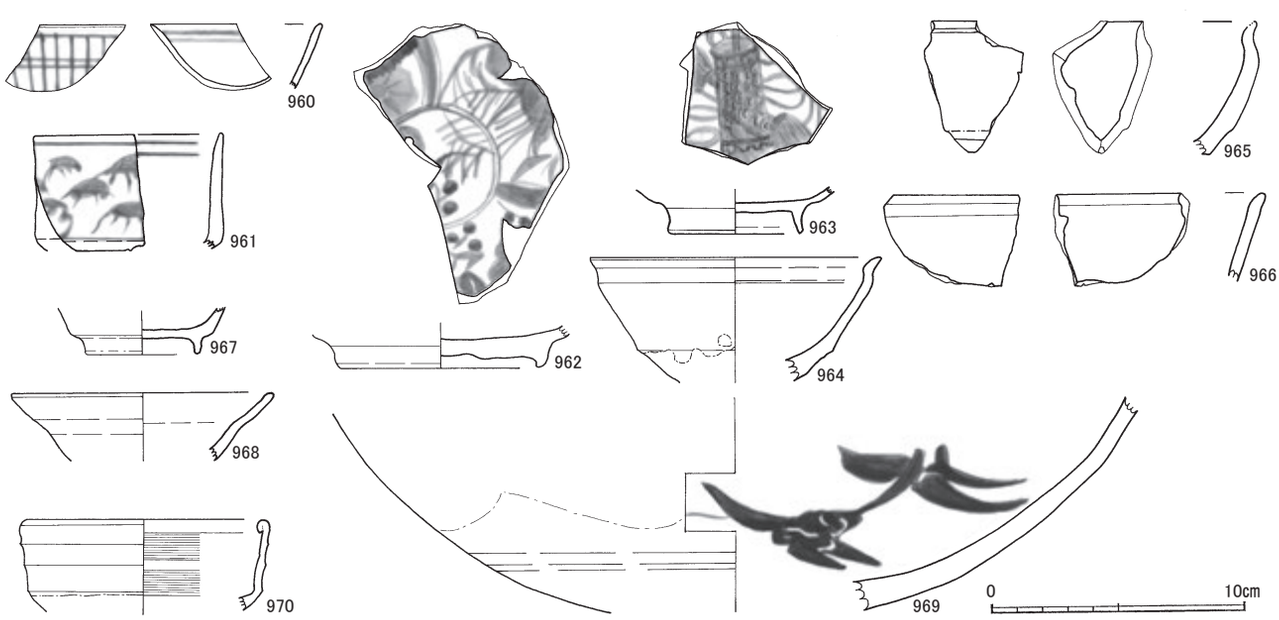
979は，小壺か水注である。肩部が張り，丸みを帯びる。

980は，瀬戸・美濃系の袋物である。外面に網目文をもち，黒釉を施す。

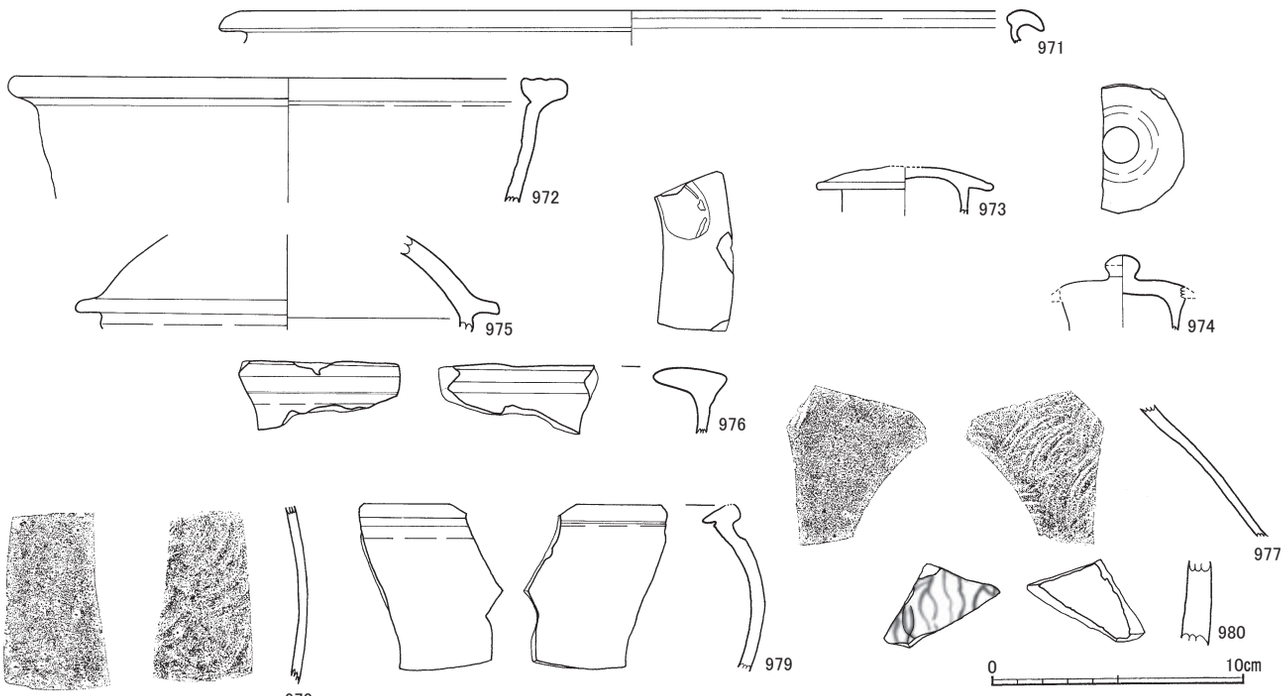
（２）古銭　981 ～ 983

近世相当の古銭，３点を本掲載した。981・982は，「寛永通宝」で，銭文の字体や背面に文字がない点から，1697年～ 1781年間鋳銭の「新寛永」と思われる。

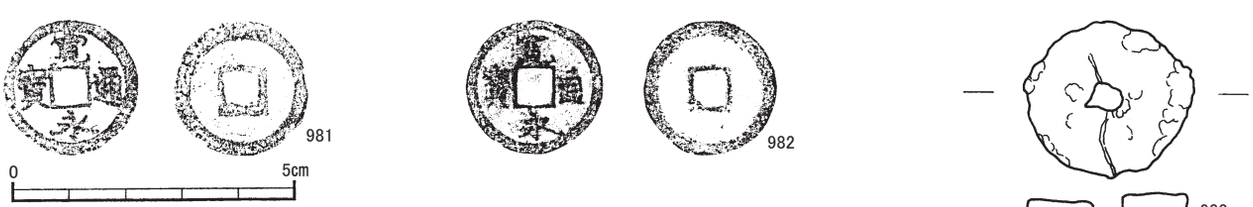
983は，錆び膨れにより古銭より径が大きいが，孔が方形に穿たれることから，古銭の可能性がある。鉄分が一定量以上含まれ，「加治木銭」の可能性も一考である。



第180図　近世陶磁器実測図（１）



第181図　近世陶磁器実測図（2）



第182図　近世古銭実測図

第104表　近世陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	種別	器種	胎土の色調	施釉	釉薬	計測値（cm）			産地	時期	備考
										口径	底径	器高			
180	960	4344	F-7	Ⅱ	磁器	筒型碗	灰白色Hue5Y8/1	残存部全面施釉	透明釉	−	−	−	肥前	18世紀末～19世紀前半	格子文。
	961	2402	F-5	Ⅱ	磁器	広東碗	灰白色Hue5Y8/1	残存部全面施釉	透明釉	7.6	−	−	肥前	18世紀末～19世紀前半	雪持笹文。
	962	5939	D-6	Ⅱa	磁器	中皿	灰白色Hue5Y 8/1	高台内釉輪状掻き取り	透明釉	−	8.0	−	平佐	17世紀末～18世紀末	蛇ノ目凹形高台。草花文。
	963	10694	D-6	Ⅱb	磁器	碗	灰白色Hue5Y8/2	残存部全面施釉	透明釉	−	5.4	−	肥前		
	964	11082	D-6	Ⅱb	陶器	碗	褐灰色Hue5YR5/1	外面体部下位露胎	鉄釉	11.6	−	−	肥前	16世紀末～17世紀前半	江戸初期。11083と接合。
	965	4362	F-7	撹乱	陶器	碗	明黄褐色Hue10YR7/6	外面体部下位露胎	鉄釉	−	−	−	肥前	17世紀前半～後半	
	966	8592	C-8	Ⅱb	陶器	楽茶碗	褐灰色Hue10YR5/1	残存部全面施釉	鉄釉	−	−	−	肥前	17世紀末～18世紀初頭	11085と接合。
	967	5908	D-6	Ⅱa	陶器	朝顔碗	浅黄橙Hue10YR8/4	畳付釉掻き取り	青磁釉	−	4.6	−	肥前	17世紀後半～末	白土による内ハケ目。
	968	7661	D-6	Ⅱa	陶器	皿	にぶい黄橙色Hue10YR7/2	残存部全面施釉	透明釉	10.6	−	−	肥前		
	969	4308	G-6	Ⅱa	唐津焼	鉢	黄灰色Hue2.5Y6/1	外面体部中位以下露胎	藁灰釉	−	−	−	唐津	17世紀前半～中頃	二彩唐津(鉄絵緑彩)白土を塗布。
	970	8957	E-9	Ⅱa	陶器	香炉	にぶい黄橙色Hue10YR7/2	外面体部下位内面露胎	青磁釉	9.9	−	−	肥前	17世紀中頃～後半	
181	971	6437	D-5	Ⅱa	薩摩焼	片口鉢	褐灰色Hue10YR5/1	口唇部露胎	鉄釉	33.0	−	−	苗代川		6483と接合。
	972	20323	G-5	Ⅱb	薩摩焼	片口鉢	にぶい黄橙色Hue7.5YR6/4	口唇部露胎	鉄釉	22.4	−	−	苗代川		
	973	16585	E-7	Ⅱa	薩摩焼	土瓶蓋	にぶい黄橙色Hue10YR6/3	内面露胎	鉄釉	5.0	−	−	苗代川		
	974	7128	E-3	Ⅱa	薩摩焼	土瓶蓋	にぶい赤褐色Hue2.5Y6/4	内面露胎	鉄釉	−	−	−	苗代川		受け身部打ち欠き。
	975	19031	E-8	Ⅱb	薩摩焼	山茶碗釜蓋	灰褐色Hue5YR4/2	内面露胎	鉄釉	−	−	−	苗代川		
	976	2331	G-6	Ⅰ	薩摩焼	甕	にぶい赤褐色Hue2.5YR4/4	口唇部露胎	鉄釉	−	−	−	苗代川	18世紀代	口縁部貝目あり。
	977	5767	E-3	Ⅱa	薩摩焼	甕	褐灰色Hue10YR4/1	残存部全面施釉	鉄釉	−	−	−	島平？		内面青海波。
	978	17065	D-7	Ⅱb	薩摩焼	甕	赤灰色Hue2.5YR4/1	残存部全面施釉	鉄釉	−	−	−	苗代川		内面青海波。
	979	7992	C-6	Ⅱa	薩摩焼	小壺・水注	にぶい黄橙色Hue10YR6/3	口唇部露胎	鉄釉	−	−	−	苗代川		
	980	9355	D-6	Ⅱb	陶器	袋物	灰黄褐色Hue10YR6/2	内面露胎	黒釉	−	−	−	瀬戸美濃？		網目文。

第105表　近世古銭観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	材質	計測値（cm）						重さ（g）	備考
							a	b	c	d	e	f		
182	981	16406	D-7	Ⅱb	寛永通宝	銅	2.4	2.4	2.0	2.0	0.7	0.7	2.85	新寛永。
	982	5897	D-6	Ⅱa	寛永通宝	銅	2.3	2.4	2.0	2.1	0.7	0,7	2.63	新寛永。
	983	16621	E-7	Ⅱa	−	銅＋鉄？	2.8	2.7	−	−	−	−	4.72	鉄さびが顕著に付着。加治木銭か。

第４章　自然科学分析

Ⅰ　山口遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

本遺跡は，鹿児島県薩摩川内市都町（北緯31° 49′，東経130° 19′）に所在する。測定対象試料は，土坑66号出土木片（9：IAAA-102875），土坑１号出土木片（10：IAAA-102876），土坑209号出土木片（11：IAAA-102877）の合計3点である（第106表）。何れの試料も土坑内の焼土付近から出土している。

２　測定の意義

土坑の年代を明らかにする。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常1mol/?（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

（３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

４　測定方法

3MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

（１）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第106表）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第106表に，補正していない値を参考値として第107表に示した。^{14}C年代と誤差は，下1桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を第106表に，補正していない値を参考値として第107表に示した。

（４）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線及び較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として第108表に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

試料の^{14}C年代は，土坑66号出土木片9が1100±30yrBP，土坑１号出土木片10が3780±30yrBP，土坑209号出土木片11が1160±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，9が898 ～ 983cal AD，10が2279 ～ 2143cal BC，11が782 ～ 945cal ADの間に各々複数の範囲で示され，9，11は平安時代，10は縄文時代後期前葉頃に相当する年代値となっている。試料の炭素含有率は，何れも70%程度の十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

第106表　放射性炭素年代測定結果（補正あり）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-102875	9	遺構：土坑66号　層位：Ⅱ	木片	AAA	−27.32 ± 0.38	1,100 ± 30	87.21 ± 0.28
IAAA-102876	10	遺構：古代土坑1号　層位：Ⅱ	木片	AAA	−24.66 ± 0.31	3,780 ± 30	62.47 ± 0.22
IAAA-102877	11	遺構：土坑209号　層位：Ⅱ	木片	AAA	−26.47 ± 0.61	1,160 ± 30	86.56 ± 0.3

第107表　放射性炭素年代測定結果（補正なし）

測定番号	δ13C補正なし		暦年較正用	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC　（%）	（yrBP）		
IAAA-102875	1,140 ± 30	86.8 ± 0.27	1,099 ± 25	898calAD – 920calAD (26.0%) 945calAD – 983calAD (42.2%)	889calAD – 994calAD (95.4%)
IAAA-102876	3,770 ± 30	62.52 ± 0.22	3,779 ± 28	2279calBC – 2251calBC (20.1%) 2229calBC – 2221calBC (5.2%) 2211calBC – 2192calBC (14.0%) 2179calBC – 2143calBC (28.8%)	2293calBC – 2134calBC (93.9%) 2076calBC – 2063calBC (1.5%)
IAAA-102877	1,180 ± 30	86.3 ± 0.28	1,159 ± 28	782calAD – 789calAD (3.5%) 812calAD – 845calAD (18.4%) 857calAD – 898calAD (30.1%) 920calAD – 945calAD (16.3%)	778calAD – 904calAD (68.4%) 915calAD – 969calAD (27.0%)

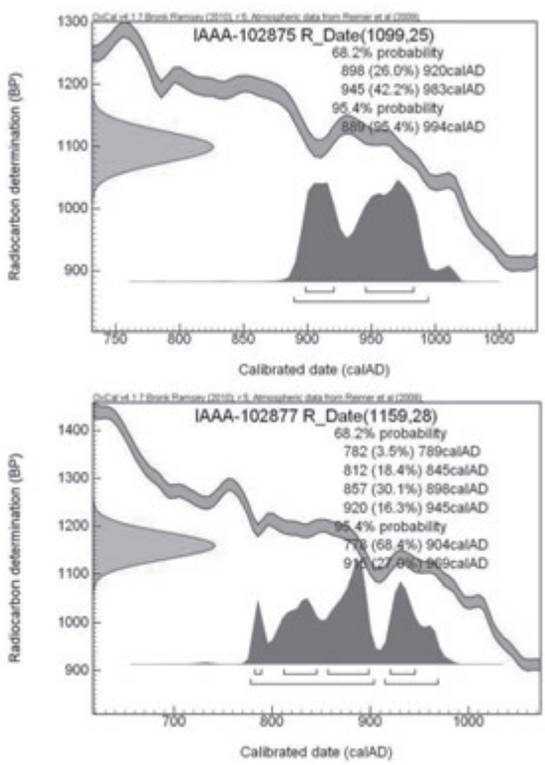
文献

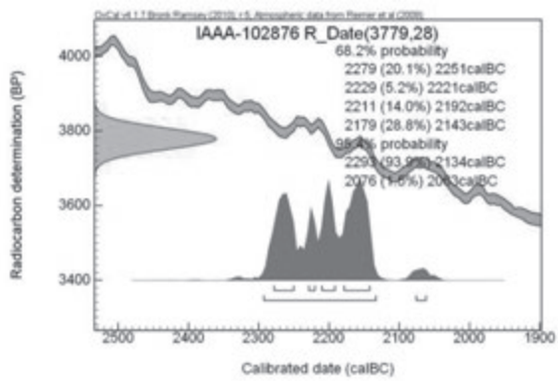
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

第108表　暦年較正結果





Ⅱ　山口遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1　はじめに

放射性炭素年代測定は，光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体，骨，貝殻，土壌，土器付着炭化物などが測定対象となり，約５万年前までの年代測定が可能である。

2　試料と方法

次表に，試料の採取箇所，種類，前処理・調整法及び測定法を示す。

第109表　試料と方法一覧

試料No.	採取箇所	種類	前処理・調整法	測定法
No.1	D-6・7区　土坑106号	炭化種実	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2	C-6区　SB19-P1	炭化材	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.3	柱穴171号	炭化材	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸処理	AMS

3　測定結果

加速器質量分析法（AMS）によって得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行い，放射性炭素（^{14}C）年代及び暦年代（較正年代）を算出した。第106表にこれらの結果を示し，第111表に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

（１）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}C値を-25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正する。

（２）放射性炭素（^{14}C）年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から，現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5730年であるが，国際的慣例によりLibbyの5568年を用いた。統計誤差（±）は１σ（68.2%確率）である。^{14}C年代値は下１桁を丸めて表記するのが慣例であるが，暦年較正曲線が更新された場合のために下１桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

（３）暦年代（Calendar Years）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C濃度の変動及び^{14}Cの半減期の違いを較正することで，放射性炭素（^{14}C）年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には，年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C測定値及びサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 09，較正プログラムはOxCal

3.1である。

暦年代（較正年代）は，^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し，OxCalの確率法により１σ（682％確率）と２σ（954％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では，複数の1σ・２σ値が表記される場合もある。（）内の％表示は，その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４　所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果，№１の炭化種実では745±20年BP（２σの暦年代でAD 1225 ～ 1285年），№２の炭化材では790±20年BP（AD 1215 ～ 1270年），№３の炭化材では675±20年BP（AD 1270 ～ 1310, 1360 ～ 1390年）の年代値が得られた。

＜文献＞

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon,37(2), p.425-430.

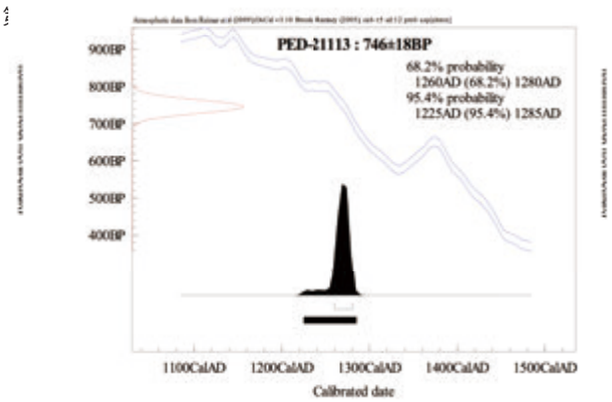
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, p.355-363.

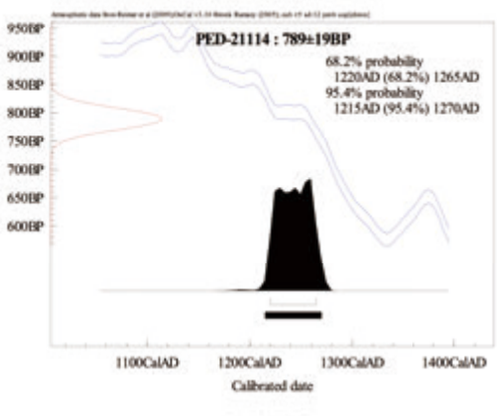
Paula J Reimer et al., (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

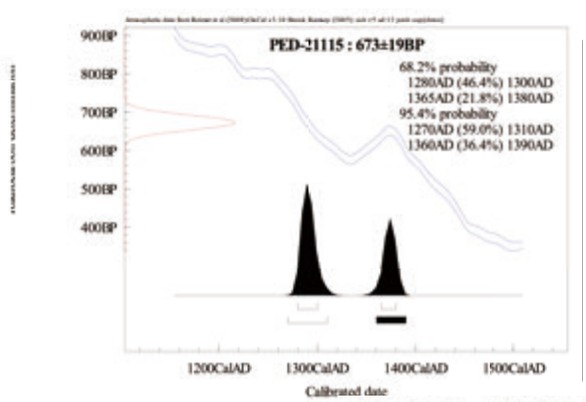
中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正　環境考古学マニュアル　同成社，p.301-322.

第110表　放射性炭素年代測定結果

試料№.	測定番号 PED−	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代(年BP)	^{14}C年代（年BP）	暦年代（較正年代）：cal−	
					１σ（68.2%確率）	２σ（95.4%確率）
1	21113	−25.79±0.11	746±18	745±20	AD1260−1280(68.2%)	AD1225−1285(95.4%)
2	21114	−29.12±0.13	789±19	790±20	AD1220−1265(68.2%)	AD1215−1270(95.4%)
3	21115	−30.49±0.13	673±19	675±20	AD1280−1300(46.4%) AD1365−1380(21.8%)	AD1270−1310(59.0%) AD1360−1390(36.4%)







第 111 表　暦年較正結果

Ⅲ　山口遺跡における種実同定

株式会社 古環境研究所

１　はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く，堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し，その種類や構成を調べることで，過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

２　試料

試料は，土坑49号から採取された炭化種実である。

３　方法

種実類について肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し，形態的特徴及び現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科，属，種の階級で示した。

４　結果

（１）分類群

樹木１，草本１の計２分類群が同定された。分析結果を第112表に示し，第113表にイネの計測値，第114表にイネの粒形とその大きさを示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し，各分類群の写真を示す。

〔樹木〕　ブナ科 Fagaceae 炭化子葉（破片）長さ×幅：7.26㎜×5.86㎜，7.51㎜×5.52㎜

黒褐色で楕円形を呈し，表面は平滑である。炭化した破片のため科レベルの同定にとどめたが，サイズが小さいことからシイ属の可能性がある。

〔草本〕　イネOryza sativa L 炭化果実（完形・破片）イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し，胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。長さ×幅の平均値は4.61㎜×2.40㎜，最大値は5.80㎜×2.67㎜，最小値は3.82㎜×2.18㎜である（第113表）。

（２）種実群集の特徴

樹木種実のブナ科２，草本種実のイネ24が同定され

た。イネについては，佐藤（1988）に従って粒大と粒形を検討した結果，粒大では極小が多く，小もあり，粒形では短粒（S）が多く，長粒（L）も多少みられた（第114表）。

5　考察

種実同定の結果，土坑49号から採取された炭化種実は，イネ24及びブナ科２と同定された。イネ果実は何れも炭化した炭化米であるが，発泡や亀裂はなく，表面の筋が比較的鮮明であり，玄米の状態であったと考えられる。大きさと形は，佐藤（1988）で示される極小で短粒のものが多く，弥生時代から古墳時代のイネ果実（炭化米）と同様の傾向を示す。なお，長粒のものもやや多いことから，他の系統のものが混在している可能性も考えられる。

＜文献＞

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p

笠原安夫（1988）作物及び田畑雑草種類　弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版，p.131-139

佐藤敏也（1988）弥生のイネ　弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版株式会社，p.97-111

南木睦彦（1991）栽培植物　古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165-174

第112表　山口遺跡から採取された炭化種実の同定結果

分類群		部位	土坑
学名	和名		49号内
Arbor	樹木		
Fagaceae	ブナ科	子葉(半形)	2
Herb	草本		
Oryza sativa L.	イネ	果実(炭化)	21
		(破片)	3
Total	合計		26
Charcoal fragments	炭化物片		6

第113表　山口遺跡から採取されたイネ炭化果実の計測値

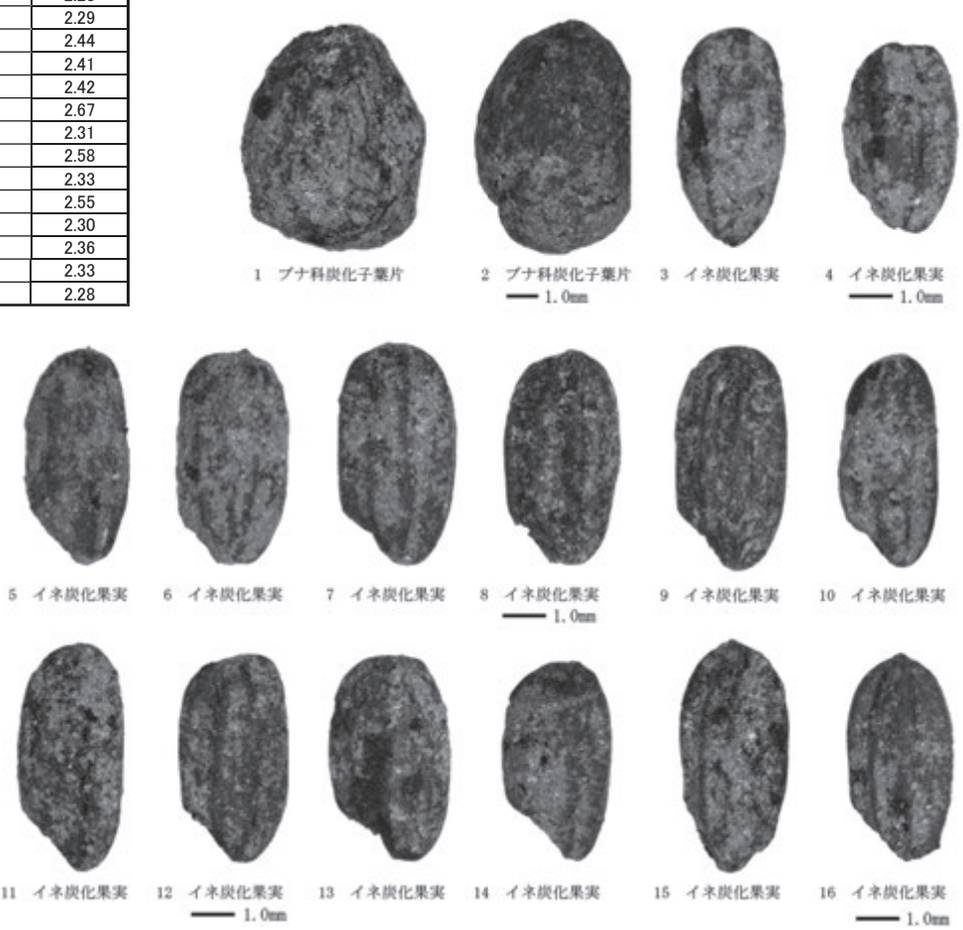
試料	長さ（mm）	幅（mm）
1	3.82	2.26
2	4.64	2.18
3	4.89	2.42
4	4.67	2.47
5	4.15	2.56
6	4.70	2.48
7	4.73	2.55
8	5.00	2.28
9	4.60	2.29
10	4.53	2.44
11	5.80	2.41
12	4.35	2.42
13	4.48	2.67
14	4.57	2.31
15	4.83	2.58
16	4.65	2.33
17	4.64	2.55
18	4.72	2.30
19	4.76	2.36
20	4.46	2.33
21	3.82	2.28

	長さ（mm）	幅（mm）
平均値	4.61	2.40
最大値	5.80	2.67
最小値	3.82	2.18

第114表　山口遺跡から採取されたイネの粒形とその大きさ

粒形＼粒大		極々小 ～ 8	極小 ～ 12	小 ～ 16	中 ～	合計	%
長粒	2.6−3.0 *Ll*						
	2.3−2.6 *Lm*			1		1	4.76
L	2.0−2.3 *Ls*		6			6	28.57
短粒	1.8−2.0 *Sl*		8	2		10	47.62
	1.6−1.8 *Sm*		4			4	19.05
S	1.4−1.6 *Ss*						
円粒	1.2−1.4 *Rl*						
R	1.0−1.2 *Rm*						
合計			18	3		21	
%			85.71	14.29		100	

＊粒長/粒幅で粒形を表し，粒長×粒幅で粒の大きさを表す。



第183図　山口遺跡の種実

Ⅳ　山口遺跡出土炭化材の樹種

株式会社 古環境研究所

1　はじめに

山口遺跡の遺物包含層から出土した木製加工品とされる炭化材を対象として，木材利用を確認するための樹種同定を実施する。

2　試料

試料は，遺物包含層（Ⅱb層）から出土した炭化材3点（試料番号12 ～ 14）である。

第115表　山口遺跡の樹種同定結果

試料番号	グリッド	層位	遺物番号	樹　　種
12	D-9	Ⅱb層	14035	コナラ属アカガシ亜属
13	D-6	Ⅱb層	14901	アワブキ属
14	E-6	Ⅱb層	15670	コナラ属アカガシ亜属

3　分析方法

試料を自然乾燥させた後，木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し，実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

4　結果

樹種同定結果を第115表に示す。炭化材は，広葉樹2分類群（コナラ属アカガシ亜属・アワブキ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属(Quercus subgen Cyclobalanopsis)　ブナ科

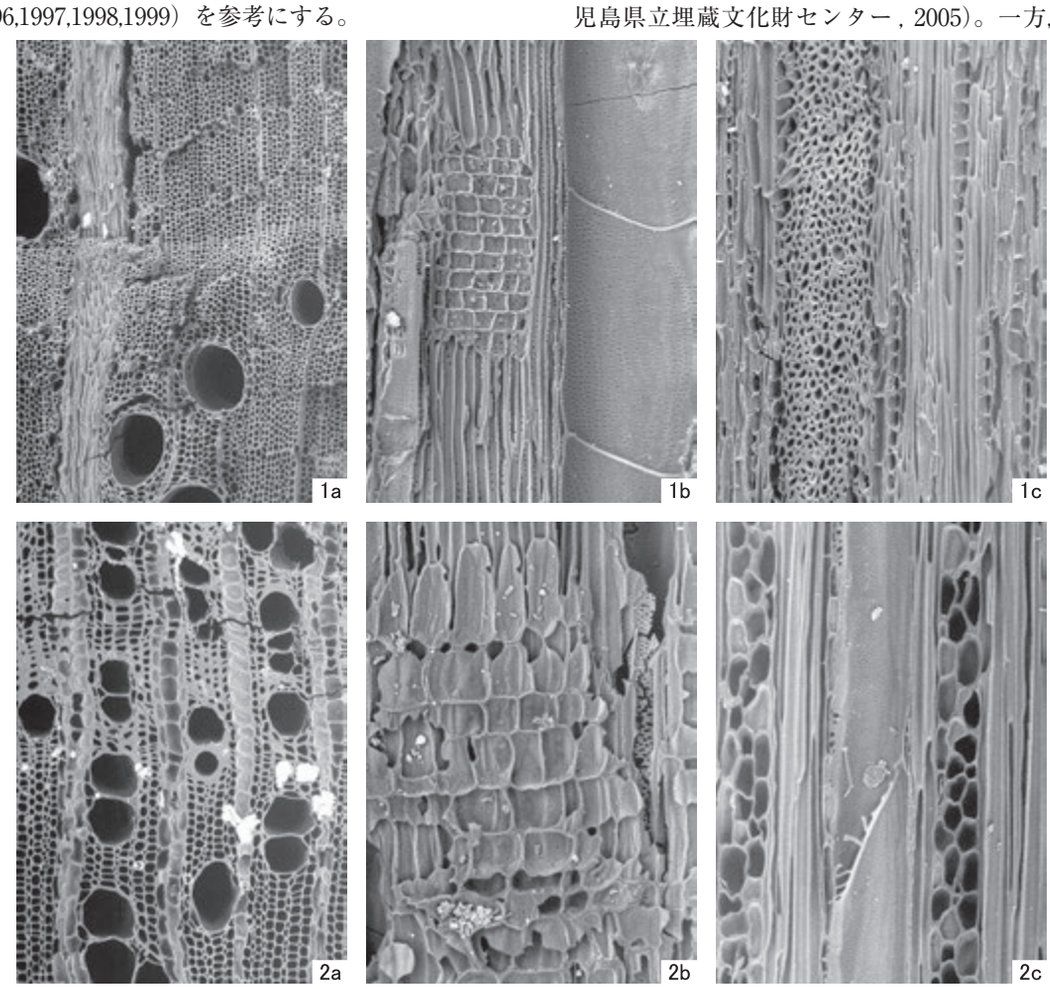
放射孔材で，道管壁は中庸～厚く，横断面では楕円形，単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・アワブキ属（Meliosma）　アワブキ科

散孔材で，管孔は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔及び階段穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型の異性，1-3細胞幅，1-60細胞高。

5　考察

Ⅱb層から出土した木製加工品とされる炭化材には，アカガシ亜属とアワブキ属が認められ，2種類の木材が利用されたことが推定される。アカガシ亜属は，暖温帯常緑広葉樹林を構成する常緑高木であり，木材は重硬で強度が高い。アワブキ属には，落葉性のアワブキやミヤマハハソ，常緑のヤマビワがある。このうち，ヤマビワは，比較的硬く，強度が高い。鹿児島県内の事例では，アカガシ亜属は鍬等の農耕具に多く利用されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター，2005）。一方，アワブキ



1.コナラ属アカガシ亜属(試料番号12)
2.アワブキ属(試料番号13)
a:木口,b:柾目,c:板目

第184図　山口遺跡の炭化材

属は，柄や棒状木製品に確認された例がある（鹿児島県立埋蔵文化財センター,2005）。

<引用文献>
林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ　木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ　木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所　66-176
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ　木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ　木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ　木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216
鹿児島県立埋蔵文化財センター,2005,九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（XIV）　京田遺跡　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（81）,278p
島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織　地球社,176p
Wheeler E A, Bass P and Gasson P E（編）,1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト　伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）,海青社,122p　［Wheeler E A , Bass P and Gasson P E (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］
※）本分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

Ⅴ　山口遺跡におけるリン・カルシウム分析

株式会社 古環境研究所

1　はじめに

土壌中に含まれるリンやカルシウムの起源としては，土壌の母材，動物遺体，植物遺体などがあり，遺跡の生活面や遺構内には遺体，排泄物，代謝物，食物残渣，燃料灰などに由来するリンやカルシウムが蓄積している。人骨など動物の骨はリン酸カルシウムが主成分であるが，貝殻や石灰石は炭酸カルシウムが主成分であり，リンはほとんど含まれていない。カルシウムは一般に水に溶解しやすいが，リンは土壌中の鉄やアルミニウムと強く結合して難溶性の化合物となるため，土壌中における保存性が高い（竹追，1993）。このようなリンやカルシウムの性質を利用して，墓状遺構などにおける生物遺体（人骨など）の確認及び生活面や遺構面の確認などが試みられている。

2　試料

分析試料は，中世の４号墓において，木箱（木質は残存していない）の内外から採取された№１～№４の４点である。このうち，№１は木箱内サンプルＡ（上），№２は木箱内サンプルＢ（下），№３は墓坑埋土（上部），№４は墓坑北側壁Ⅱb層の土壌（比較試料）である。

3　分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（XGT-5000TypeⅡ）を用いて，元素の同定及びファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

１）試料を絶乾（105℃・24時間）

２）試料を粉砕して塩化ビニール製リング枠に入れ，圧力20t/㎠でプレスして錠剤試料を作成

３）測定時間500秒，照射径100μm，電圧50kV，試料室内真空の条件で測定

今回の分析では，まず元素マッピング分析による元素の分布図からリン（P）の輝度の高い箇所を選び，各試料ごとに５ポイント（a～e）についてポイント分析を行った。

4　分析結果

第116表に蛍光Ｘ線分析結果，第185図に試料の元素マッピング図とポイント分析の箇所，第117表にリン（P205）とカルシウム（CaO）の含量を示す。定量分析結果は，慣例により代表的な酸化物名で表記した。

5　考察

分析の結果，リン（P205）の含量は，№１では0.1～0.4％，№２では0～0.2％，№３では0.1～0.6％と何れも比較的低い値であり，№４（比較試料）の0.2～0.7％と同等もしくはそれよりも低い値である。カルシウム（CaO）の含量は，№１では0.7～4.2％，№２では0.7～1.3％，№３では0.6～1.1％と比較的低い値であり，№４（比較試料）の0.4～2.3％と同等もしくはそれよりも低い値である。№１のポイントaではカルシウムの含量が最大値の4.2％を示すが，リンの含量は0.1％と低い値である。

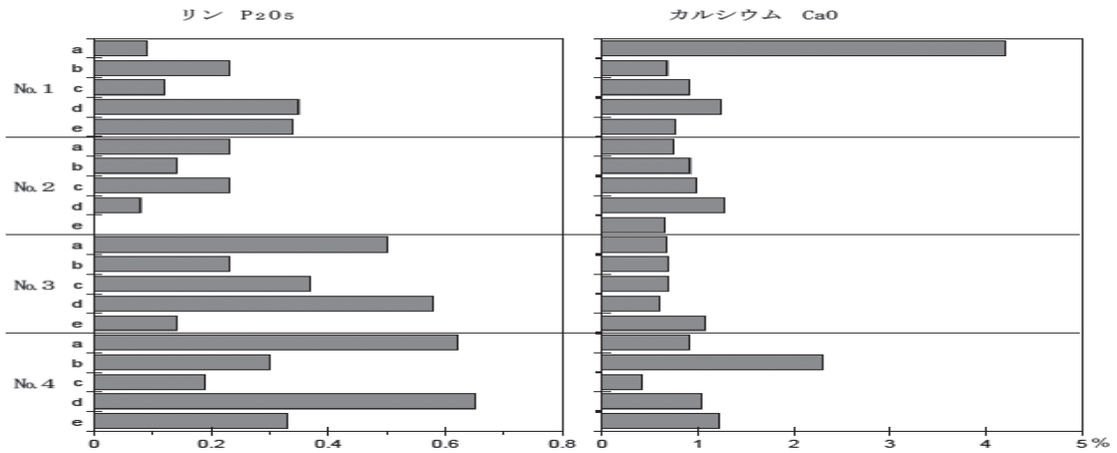
以上の結果から，石塔墓の木箱内や墓坑内にリンやカルシウムを多く含む人骨などの生物遺体が存在していた可能性は低いと考えられる。

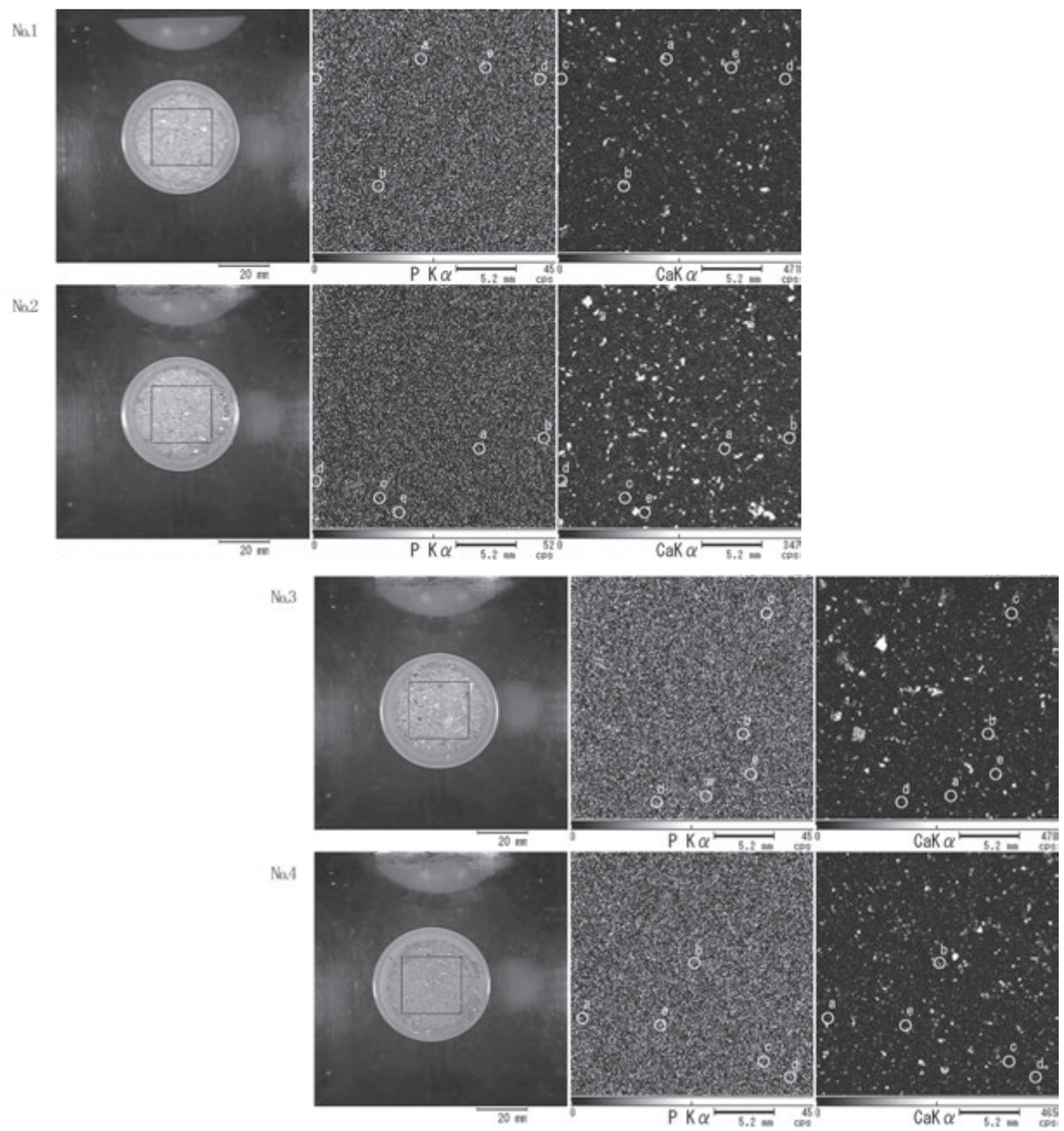
<文献>
竹迫 紘（1993）リン分析法　第四紀試料分析法２，研究対象別分析法　日本第四紀学会編　東京大学出版会，p　38-45
藤根久・佐々木由香・中村賢太郎（2008）蛍光Ｘ線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析　日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集，p　108-109

第116表　山口遺跡４号墓から採取された試料の蛍Ｘ線分析結果　　単位：wt%

試料№	ポイント	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO_2	Fe_2O_3	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2
1	a	0.68	27.39	59.81	0.09	0.50	0.93	4.21	0.65	0.25	5.38	0.01	0.04	0.02	0.06
	b	0.25	24.21	61.27	0.23	0.47	1.24	0.68	1.34	0.40	9.81	0.01	0.01	0.01	0.07
	c	0.80	20.69	66.97	0.12	0.33	1.58	0.91	0.76	0.28	7.48	0.02	0.01	0.02	0.05
	d	0.66	27.85	56.41	0.35	0.45	1.12	1.24	1.22	0.34	10.26	0.02	0.02	0.01	0.06
	e	0.72	25.72	61.98	0.34	0.42	1.53	0.77	0.95	0.32	7.18	0.02	0.02	0.01	0.04
2	a	0.78	24.30	63.71	0.23	0.32	1.18	0.74	0.95	0.53	7.16	0.01	0.04	0.02	0.03
	b	0.72	26.98	59.83	0.14	0.32	1.39	0.92	1.09	0.39	8.14	0.01	0.03	0.01	0.05
	c	0.80	23.27	64.32	0.23	0.30	0.99	0.98	0.82	0.43	7.80	0.01	0.01	0.02	0.04
	d	0.75	27.16	63.64	0.08	0.38	1.44	1.28	0.69	0.20	4.30	0.00	0.04	0.01	0.03
	e	0.69	29.04	59.28	0.00	0.38	0.99	0.65	0.90	0.33	7.66	0.01	0.01	0.02	0.04
3	a	0.77	24.11	64.45	0.50	0.47	1.14	0.67	0.88	0.21	6.71	0.01	0.03	0.01	0.03
	b	0.89	19.81	69.85	0.23	0.20	2.03	0.70	0.58	0.09	5.56	0.01	0.01	0.01	0.03
	c	0.65	31.37	57.19	0.37	0.52	1.66	0.69	0.85	0.16	6.44	0.01	0.05	0.01	0.04
	d	0.58	32.78	52.50	0.58	0.58	1.15	0.60	1.08	0.40	9.65	0.02	0.02	0.02	0.05
	e	0.55	14.13	75.07	0.14	0.20	2.75	1.08	0.40	0.20	5.35	0.01	0.01	0.01	0.09
4	a	3.00	26.45	58.09	0.62	0.65	0.99	0.91	0.92	0.51	7.76	0.02	0.02	0.02	0.04
	b	0.87	19.72	68.24	0.30	0.55	1.03	2.30	0.80	0.36	5.72	0.01	0.04	0.01	0.03
	c	0.86	21.93	68.51	0.19	0.58	0.88	0.42	0.55	0.47	5.54	0.01	0.01	0.01	0.03
	d	2.52	23.33	63.18	0.65	0.55	1.74	1.03	0.70	0.37	5.86	0.01	0.01	0.02	0.03
	e	3.31	26.33	56.86	0.33	0.62	1.19	1.22	0.96	0.44	8.64	0.02	0.01	0.02	0.05

第117表　山口遺跡４号墓から採取された試料のリン・カルシウム含量





第185図　プレス試料と元素マッピング図およびポイント分析箇所

第５章　総括

第１節　遺構・遺物から捉えた本遺跡の様相

（１）旧石器時代～縄文時代草創期

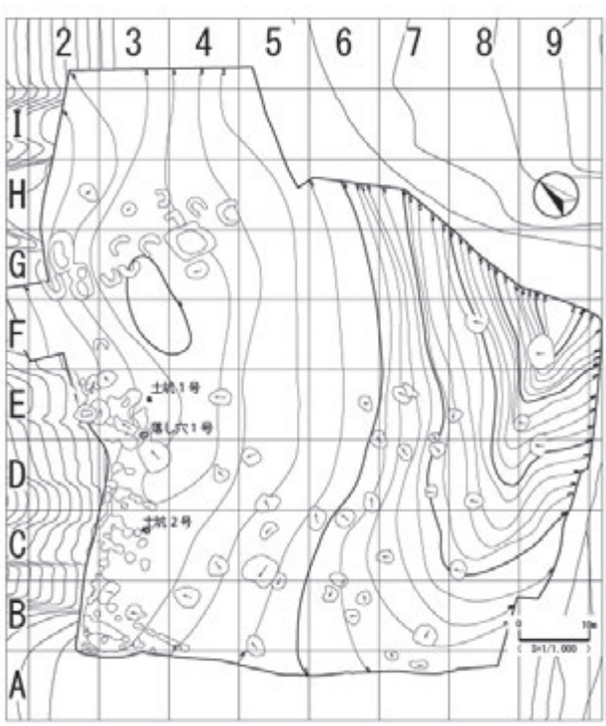
旧石器時代～縄文時代草創期では，落し穴が５基，礫群が５基，細石刃製作に伴う石器ブロックが11基検出された。

一般的に，九州島は，落葉広葉樹と草原性の植生であったと考えられ，落し穴や細石刃・石鏃を利用した狩猟が行われていたと推察される。礫が赤化し煤が顕著に付着する礫群も検出され，調理施設の可能性を含め，当該地はキャンプサイトであったと位置付けられる。なお，細石刃（チップ等を含む）の多くは，僅かに不純物を含むものの，在地産としてはガラス質が強く良質な霧島系黒曜石を石材として利用していることから，良質の石材選定に拘る集団の意思が垣間見える。

ブロック及びその周辺には土器片が５点出土し，草創期比定の西北九州出土土器の胎土に似るとの言[(2)]もあり，僅かに針尾産黒曜石や西北九州産の可能性をもつ黒色安山岩が含まれることと併せて，黒曜石を巡る遠隔地交流の中に当地の集団も属していたことが捉えられる。南九州の東シナ海側の縄文時代萌芽における様相の一端が顕現した貴重な成果である。

（２）縄文時代早期

縄文時代早期では，落し穴が６基，土坑が８基，集石が８基，石器ブロックが４基検出された。土器では，１類（志風頭式土器），２類（吉田式土器），３類（押型文土器），４類（変形撚糸文土器），５類（手向山式土器），６類（平栫式土器），７類（塞ノ神式土器）が出土した。



第186図　縄文時代後・晩期の遺構位置図と樹木横転図

量的には７類（塞ノ神式土器）が殆どを占め，落し穴の埋土内や集石の構成礫の間隙に，７－１類が包含されたことから，縄文時代早期に位置づけられる多くの遺構は，７類に伴う遺構であると考えられる。この７類については，ゆるやかに立ち上がる胴部から，口縁部で屈曲し大きく外反する一般的な器形と異なり，口縁部で一旦外反するが，口縁部中位で「く」の字状に屈曲・内傾する特徴的な器形を呈するタイプ（７-１～７-５類）が，一定量出土した。本稿では，このタイプを含めた塞ノ神式土器に比定される土器群を，施文形態毎に細分（７-１～７-９類）し，報告することとした。詳細は，後述を参照していただきたい。

６基検出された落し穴は，Ｆ・Ｇ-３・４区を最高地とする微高地を取り巻く様に位置し，遺跡東側の急激に下り傾斜地には落し穴が形成されないことから，微高地を取りまく緩傾斜地の意図的選択を見いだす。また，微高地の南側に落し穴が集中するのも，傾向として見いだせる。第186図は，当該期の遺構位置図に樹木横転位置を重ねた図である。樹木横転には，当時の地層の堆積状況が平面観で捉えられる。樹木横転には，Ⅷ～Ⅲb層迄の堆積が捉えられる横転が2 ／ 3程度，Ⅷ～Ⅳ層迄の堆積が認められる横転が1 ／ 3程度は確認されることから，Ⅳ層（縄文時代早期の生活面）の時期にも樹木横転が生じた可能性がある。当該期には，樹木の覆い茂る森林であった様相を示す傍証にもなると思われ，樹林の中に，落し穴が設置された蓋然性が高い。

土坑については，断面形がハイヒール形を呈する土坑床面に柱穴状のピットをもつタイプが６基検出された点が注目される。本稿では，山イモ等根菜類の採取痕跡の可能性をふまえて遺構として報告した。

石器では，打製石鏃や削器，掻器，石匙，異形石器，礫器，磨石・敲石，石皿等が出土した。打製石鏃が25点と比較的多く出土していることから，当地は狩猟サイトと見なしうる。４基の石器ブロックは，打製石鏃と同材の上牛鼻産黒曜石を主体とするブロックの他，たんぱく石を主とするブロックが２基検出される。同材の石鏃が出土することから，石鏃製作に伴う可能性が高い。なお，石鏃の一部には未製品も出土し，製作失敗で放棄されたと見る。８基検出された集石の礫は，多くが赤化や煤付着を伴い，旧石器～縄文時代草創期の本遺跡の礫群同様に，調理施設の可能性を含め，キャンプサイト内の一施設と考えたい。

遺跡内に竪穴住居等は検出されなかった。しかし，塞ノ神式土器の出土量が53点と一定量出土したことや，接合作業による復元率が高かったこと，台地上の立地で余

所からの紛れ込みが想定されないことから，本遺跡から比較的近い近接地に当該期の集落が存在した可能性が予想される。

また，石器の中に１点出土した西北九州系サヌカイト製異形石器が注目される。西北九州系サヌカイト製異形石器や石匙は，平栫式土器や塞ノ神式土器に共伴する事例が多く見られるが，本遺跡でも同様な傾向が捉えられたことで，当該地の集団も西北九州との活発な交流の中に位置付けられる。

（３）縄文時代後・晩期

遺構としては，落し穴が１基，土坑が２基検出された。単独の落し穴であるが，位置的には細石刃期～縄文時代草創期や縄文時代早期同様に，微高地の周辺（E-３区）に築かれ，落し穴敷設の定石の一つと思われる。なお，この平面観が隅丸方形を呈する落し穴には，床面に小ピットが７基放射状に設けられる。落し穴の形態分類上，典型的な形態の一つである。

２基検出される土坑は，本項で土坑２類に分類した，断面観がハイヒール形を呈するタイプである。不定形な平面観を有し，壁面側に偏在して床面に設けられる小ピットが特徴的である。根菜類を採集するために掘られた土坑とする説もある。落し穴の近隣（C-３区・E-３区）に位置する。第186図の様に，図示した樹木横転中，２／３程度はⅢb層が横転層に確認されたことから，縄文時代早期同様に，前期から後・晩期の間，森林であった可能性が高く，森林内に設けられた落し穴や根菜採集土坑の姿が再現されうる。

遺物は，落し穴や土坑が所在する位置から南側の緩傾斜地に偏在する。一部，東側の急傾斜地に散在する遺物は，流れ込みの可能性で捉えてよい。土器は，後期に比定される８類（市来式土器）や晩期に比定される９類（粗製深鉢形土器）が出土したが，出土点数は８点と，比較的少量である。石器は，磨製石斧，打製石鏃，掻器，削器，礫器，楔形石器，磨石・敲石，石核が出土したが，出土土器数に比較して，石器数が多い印象であり，樹木横転が多く絡んでいることもあり，縄文時代早期の紛れ込みの可能性も否定できない。

（４）弥生・古墳時代

遺構は検出されなかった。遺物は，弥生時代中期相当の壺形土器が１点のみ出土した。1.4km程北西に離れて所在する上新田遺跡においては，弥生時代中期中葉を主体とする遺物と，同時代比定の竪穴住居跡が５軒検出された。出土する既知の土器形式としては，入来Ⅱ式土器，黒髪Ⅰ～Ⅱ式土器，須玖Ⅰ～Ⅱ式土器等である。本遺跡の土器片も，それらの何れかの時期に該当する可能性があると推察する。本遺跡で，磨製石鏃及びその未製品が出土したが，上新田遺跡でも，弥生中期の竪穴住居跡から磨製石鏃（P35　遺物番号122，P41　遺物番号154）が出土しており，同時期の可能性を見る。

古墳時代相当では，東原式土器の甕形土器を中心に，ミニチュア土器が１個体出土した。甕形土器は，器面に丁寧なハケメ調整を行い，胴部から口縁部にかけて明瞭なカキアゲを施す。何れも器壁が薄く，色調や胎土も共通することから，接合はしなかったが，同一個体もしくは，製作者等近似性の高い土器である。甕形土器に共出するミニチュア土器も，共伴関係にあると判断される。

小玉と穿孔を１孔穿つ頁岩製磨製石製品が，各１点ずつ出土した。小玉については，石材の蛍光X線分析を行っておらず，時代判定の根拠を持たない。古代に含まれる可能性もある。

（５）古代

古代における本地域周辺は，大宝元年（701年）大宝律令制定を受けて，翌702年には御領下町・国分寺町に広がる台地上に薩摩国府が置かれ，薩摩国が設置された。奈良時代末には，薩摩国府に隣接地に薩摩国分寺が建立され，薩摩国における政治，文化の拠点となっている。

大島遺跡では，高城郡の中心的な集落跡が発見され，越州窯系青磁や緑釉陶器，風字二面硯，石帯等の特殊な地位にある者の所有物と思われる遺物が出土している。

西ノ平遺跡では多数の掘立柱建物跡が検出され，土師器や須恵器の他に硯，墨書土器，刻書土器，焼塩土器，帯金具，輸入陶磁器（越州窯系青磁，荊州窯系白磁）などが出土し，薩摩郡の郡衙の可能性が指摘されている。

本遺跡では，畝溝が２面，掘立柱建物跡が４棟，土坑が５基検出された。

土坑１～５号は，４基の掘立柱建物跡の間隙に所在し，掘立柱建物跡に全く係わらないことから，掘立柱建物跡より後の形成の可能性を見る。掘立柱建物跡の柱穴内には遺物が全く包含されない。柱穴の表面積は小さく，遺物が包含されにくい可能性もあるが，掘立柱建物建築時には，多量の遺物が散乱する状況にはなかったと見なしうる。一方，土坑内には遺物が多数包含される。掘立柱建物に住まう生活の中で，多量の遺物が散乱する状況が生じ，焼土を伴う土坑（ゴミ捨て場）が形成され，遺物が包含されたと推定される。

古代の総遺物数は8,699点にのぼり，畝溝や掘立柱建物跡の検出区に多量に出土するが，畝溝の埋土内に数点しか包含されないことから，周囲に遺物が多量に散乱される状況下－即ち土坑が形成される時点－では，畝溝は存在しない可能性が考えられる。出土区の遺物量と畝溝の表面積の広さを考慮に入れると，畝溝は掘立柱建物跡及び土坑形成時より古い遺構である可能性が推定される。

掘立柱建物跡１号は東西方向に，２・３号は南北方向

に異なる軸方向を示す。２号と３号は切り合うことから，建て替えを伴う２時期に分けられると考えられる。掘立柱建物跡は，明確に復元できたのは４棟であるが，他にも規則的な柱穴の配列が窺える様相も捉えられ，２棟程追加される可能性もある。

遺構で注目されるのが，建物群の西側で検出された深さ１ｍ超の柱穴２基（土坑５号）である。本遺跡で，深さ１ｍ超の柱穴は他に無いことから，隣接する柱穴２基でセットとなると考えられる。２基の柱穴は埋め戻されるが，完全に埋め戻す直前の柱穴の最上位（擂鉢状に残された坑）には，カワニナ180点とマツカサガイ294点の２種類の貝が置かれる。貝が意図的に置かれたか廃棄されたかは他に検討材料を持たないが，カワニナ及びマツカサガイの何れも成長した貝であり，大きさもそれぞれ同程度であることから，食した後に一度に柱穴に置いた（廃棄した）と考えられる。祭祀的行為に伴う可能性があり，１ｍ超の深さの柱穴及び貝殻が埋まるという２つの特殊性から，この建築物が宗教的色彩を持つ可能性も一考である。２つの柱穴を伴う建築物と言えば，櫓や門柱，鳥居等が念頭に浮かぶが，どのような建物が想定しうるのか，より広範囲な検討が必要と思われる。

なお，マツカサガイについては，現況では本県ではいちき串木野市の高松川の一部にしか生存しない。極めて良好な水質の環境でしか生存しない貝である。本遺跡の近隣には，台地の北側・西側に木場谷川が流れるが，それらの川の当時の水質環境の良さを示す傍証となる。

次は，遺物について考察を進めたい。第118表は，古代遺物の器種組成比率を示す。古代遺物中，甕が約50％程と過半を占め，土師器の坏が25％程，土師器の埦が15％程と続く。須恵器は8％と比較的少ない。本来の器体の大きさがあるとは言え，比較的土師甕の比率が高い。坏の殆どは内黒を有さず，埦の殆どは内黒土師器で占められ，明確に使い分けが成されている。出土する土師碗の形態は，口縁部がやや内弯して立ち上がり，高台が「ハ」の字状を呈するⅣ・Ⅴ類がタイプが殆どである。時期的には，10世紀前半代に収まるのが大半である。

これらの遺物を所有する人々の素性について，特殊な遺物から考察を進めたい。９世紀代に遡る越州窯系青磁碗Ⅰ類が見られる。高城郡の中心地と考えられる大島遺跡や，薩摩郡衙比定地の西ノ平遺跡でも出土する。東シナ海沿岸や川内川沿岸には，越州窯系青磁が出土する遺跡が複数散見される。周辺の大島遺跡や西ノ平遺跡の他，東シナ海沿岸万之瀬川の渡畑遺跡，川内川沿岸の坂ノ下遺跡，二渡船渡ノ上遺跡他等が挙げられる。博多から南九州，南島との交易ルートの流れの中で，この特殊な遺物が，大島遺跡や西ノ平遺跡を介した可能性も含めて，本遺跡に持ち込まれたと見られる。

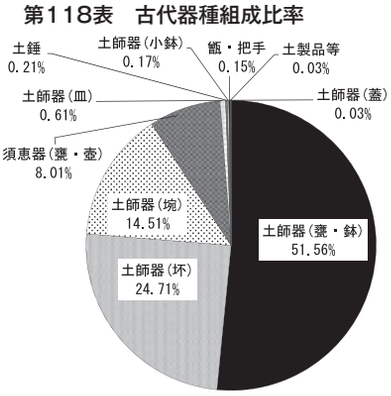
また，外面に格子目文タタキを施す一方，内面に縦位のケズリを施す土師器が３点出土している。同様な資料が，近隣の西ノ平遺跡や，南九州市芝原遺跡（芝原2012）や金峰町筆付遺跡（筆付2004）など東シナ海沿岸地域で出土している。後述するが，甑や製塩土器の可能性がある資料である。

他に，墨書土器が３点，唐國通寶という唐の時代の古銭が１点出土する。なお，墨書土器は，西ノ平遺跡で100点出土している。遺物の共通性から，近隣の西ノ平遺跡とのつながりが垣間見える。越州窯系青磁や墨書土器，唐銭など特殊な私財を有する立場・地位にある一族の屋敷跡ということになる。

生産活動については，土錘が18点と比較的多数出土しており，近隣の河川（直近で300m程）や海岸（直近で約10km）で魚介類採取の形跡が捉えられる。特殊な私財を有する集団ながらも，同時に魚介採取等自給自足的生活の中にある当時の様相が捉えられる。

この屋敷を築く集団は，本遺跡に９世紀～10世紀前半期に現れ，屋敷を形成し，一度の建て替えを経て半世紀程で，当地から姿を消すこととなる。

第118表　古代器種組成比率



（６）中世前半（12世紀後半～ 14世紀前半）

近隣には，大型掘立柱建物跡群が検出されたことにより郡衙の可能性が指摘される西ノ平遺跡や同遺跡との関係性が指摘される成岡遺跡といった当該地域の代表的な遺跡が所在する。

本遺跡を含む北薩地域には，当該期に碇山城や二福城（隈之城），高江城，百次城（上野城）等の多くの山城が築かれる。本遺跡の近隣には都城の伝説地が存在する。当時の本遺跡を含む隈之城一帯は，伊作平氏流薩摩氏一族の国司成枝薩摩太郎忠友の系統が分領し，成枝・成岡等を名乗る在地領主として隈之城・都城等に居城したとされる（川内市史1976）。

本遺跡の当該期の遺構には，多数の柱穴の他，墓跡，土坑，溝状遺構，畝溝などが検出された。

遺構検討の最大の課題は，掘立柱建物跡の復元であった。掘立柱建物跡５・13・16・19号等，柱穴が比較的疎で復元錯誤の可能性が低い地点での柱穴の検出状況から，建物の規模や軸の方向等の本遺跡の掘立柱建物跡の規則性を探った。その結果，南北方向の主軸と２軒×３軒（一部２軒×２軒）の傾向を見いだした。柱穴が密に集中する地点での建物の復元については，これらの傾向を念頭に，柱穴の切り合い関係を見ながら，復元作業を

進めた。なお，版築や床面の硬化が認められる柱穴も多く検出され，現地での復元作業過程での手がかりと見なしたが，有意義な結果は見いだせなかった。現地での復元作業の結果，掘立柱建物跡を中心に，周囲に墓跡や土坑が集中するエリアが４分割されることを見いだし，遺構が集中するA群～D群に細分した。遺跡の中央を「T」字状に南北・東西を分断して延びる溝状遺構が，建物跡4群をA・B，C，D群の３群に分断することから，少なくとも３群の細分には蓋然性があると思われる。

掘立柱建物跡は，庇を有しないタイプ，庇付きのタイプ，総柱のタイプの3種類から構成される。４群中，柱穴や土坑が集中し，柱穴の切り合い関係から３期に亘る建物群の復元が可能だったA群が主体であり，本遺跡では最長期に亘って存在したと考えられる。他の３群は，１度の建て替えによる２期の可能性を捉えた。近隣の西ノ平遺跡は，古代～中世において，14棟の掘立柱建物跡を３時期に分けており，Ⅰ期（平安時代前期）は，「主軸方向が一定しない」が，Ⅱ期（平安時代後期）は「主軸方向が西へ30度～ 40度ぶれる」とし，Ⅲ期（鎌倉時代）は「主軸方向は磁北周辺にある」と報告する（西ノ平1983）。柱穴や土坑の中央付近には「弧状に巡る溝状遺構」もある等，古代から中世における本遺跡の遺構群の特徴に共通する点が注目される。なお，市ノ原遺跡３地点でも，東西方向を主軸とする古代と南北を主軸とする中世の掘立柱建物跡の規則性の変化が指摘されている（市ノ原2008）。

本遺跡は，墓跡の可能性がある土坑が４基検出された。内訳は，A群に２基（１・２号墓），B・C群にそれぞれ１基ずつ（３・４号墓）の計４基である。なお，D群は墓跡の可能性がある土坑が検出されなかった。本群は調査区北側縁端に位置し，墓跡は調査区外に存する可能性がある。４基の土坑の何れにも，骨片等は検出されなかった。C群の４号墓は，埋土のリン・カルシウム分析を試みたが，墓の存在を示すデータは得られなかった。

各土坑を，墓跡の可能性で報告した理由と共に，その形態的特徴や，推定される埋葬形態等を述べたい。

４号墓は，土坑の上部に石塔を有し，埋土の堆積状況から墓跡の蓋然性が最も高く[3]，５点の鉄釘が出土した。埋土状況から，木棺埋葬の後，一旦掘り起こし，木質の箱に納骨する再葬墓の可能性がある[4]と推察した。

上部に直方体状の角礫を載せる２号墓は，埋土断面観から，木棺の可能性を見出し，土坑に載る複数の扁平や直方体状の角礫は，墓の上部に敷設する標識施設と見なした。また，墓坑の外側４隅に４基の柱穴が検出されたことから，屋根で覆うタイプと推定した[5]。なお，２号墓は糸切りの切り離し痕を有する坏の完形品が２点，床面から出土した。敷設時期（13世紀後半～ 14世紀前半）において一般的に使用された白磁・青磁でなく，当該期には希少性の増す土師器を埋納する点は，当該期の南九州における墓の供献土器と同様な傾向を見る。

１・３号墓は，上部構造を持たず，墓跡である傍証が少ない。１号墓は，埋土の断面観から，木棺墓の可能性を見い出した。床面直上に木炭層が堆積し，埋土中に木炭が検出されたが，床面・壁面に赤化等捉えられなかったことから，火葬の可能性は捉えにくい[6]。とりあえず木簡の痕跡で捉えたい。なお，西ノ平遺跡では，室町・安土桃山時代比定の火葬遺構が検出されている。「木炭が並んだ状態で50cm四方に残っており，周囲に炭・灰が点在していた。人骨は，木炭の間に小片となって多数散乱していた」と報告される（西ノ平1983）。

３号墓は，墓跡の証拠が希少である。墓跡の埋め戻しの可能性を示す埋土堆積状況や平・断面形，大きさ，深さが他の３基とほぼ一致することから，墓跡の可能性で捉えた。本遺構のみ，木棺を示す傍証は皆無であり，木棺を伴わない土坑墓の可能性もある。

埋葬形態は，４基とも木棺墓（３号墓のみ伴わない可能性があるが）で共通するものの，石塔を有するタイプ，角礫の標識を敷設し，覆屋根をもつタイプ，床面に炭化木を敷くタイプ，特別な付帯施設を持たないタイプと，４基とも異なる特徴を示す。

遺構を含めた周辺区から口禿口縁の白磁皿（大宰府分類Ⅸ類）や龍泉窯系青磁碗（大宰府分類Ⅱ類）が主に出土することから，埋葬時期は13世紀後半～ 14世紀前半に収まると判断される。なお，他の土坑内からは当該期の遺物が出土するにも係わらず，墓坑から白磁や青磁が全く出土しない点が注目される。本遺跡で生活が営まれ始める初期の，遺物が周囲に散乱しない状況下で墓坑が掘られた可能性を示す。何れの墓坑も，掘立柱建物跡との重複関係がなく，意識的に独立して存在すると考えられ，「屋敷群の中に１基を単位として営まれた墓であり，その構成風景はいわゆる屋敷墓に通じる[7]」と捉えられる。

屋敷墓が「最も普及するのは12世紀後半～ 13世紀中頃」で「近畿以西に広く分布し，九州では福岡県に多数の事例が確認されているが，南九州でその確認は未だ多くな」いことが指摘されている[7]。南九州での希少性も然ることながら，西九州での屋敷墓の最盛期から１世紀程遅れて13世紀後半～ 14世紀前半の時期に後出することの意義について，「薩摩に遅れて入ってくることは重要な視点になる」と考えられる。４号墓の改葬の事例についても，「発掘調査で改葬を実施したことを把握できる事例はきわまて少ない」との指摘がある[7]。

他に，「いずれも土葬で基本的には木棺等に納めて埋葬されるまでの工程は同じだが，最終的な姿が異なっている[7]」ことの意味等，13世紀後半～ 14世紀前半に於ける南九州の集落史や鎌倉武士の流入と在地勢力との関係性等を探る上で，貴重な資料となる。

本稿では，時間的不足もあり，掘立柱建物跡と土坑の共伴性の検討は行わなかったが，掘立柱建物跡と，それに係わらない土坑が共伴する可能性があると見なされる。土坑の目的・性格については，生ゴミ等の捨て場の可能性を見る。一部の土坑に，床・壁面に赤化が認められること，埋土上面に焼土が見られること，埋土に炭化物が包含されること，埋土内炭化物の種実同定の結果，籾や桃の種が含まれたことによる（P247・248参照）。検出された籾については，短米・長米が混在しており（P248参照），当該地の食生活や稲作生産の様相が捉えられる。

他に注目される遺物に，A群の土坑25号内に，雁股鏃が１点出土する。先端が残存しないが，人為欠損によるか腐食による自然剥離かは不明である。

B群の柱穴619号内に，懐刀の完形品が１点出土した。刃部尖端が，天地の何れに位置したかは不明である。何れも祭祀的行為に伴う遺物と捉えられる。特に，619号内刀剣は，懐刀に類するタイプで，祭祀利用の類例が散見される刀剣であり，祭祀の蓋然性が強い。掘立柱建物跡群の家人が，武士集団である可能性を示す。なお，ピット内出土の刀剣の類例には，竈跡の近隣３ｍ程の土坑埋土内に，刀子が刃部を欠く状態で出土する事例が確認される（辻町２1996）。埋土がⅠ・Ⅱ層となっており，周囲には，瓦質擂鉢や龍泉窯系青磁碗の他，近世陶磁器も出土しており，本遺跡との時期的な照合が不可能である。他に，宮崎県都城市鶴喰遺跡（鶴喰2007）の敷石状遺構内において，土師器の皿や鞴の羽口等と共伴して短刀の出土が確認される（P171遺物番号894）。

遺物に関しては，青磁・白磁・青花などの中国製貿易陶磁器や，東播磨系擂鉢など国内の広域流通品，長崎県西彼杵半島産の滑石製石鍋など，当時の一般的な流通品を中心とした出土品が大半を占める。これは，周辺遺跡の城下遺跡や成岡遺跡，西ノ平遺跡などに同様である。

一般包含層から出土した炭化材の樹種同定を行った結果，アカガシ亜属とアワブキ属が認められた。アワブキ属のヤマビワなどは比較的硬く，強度が高く，県内の事例では鍬等の農耕具に多く利用される。一方，アワブキ属は，柄や棒状木製品に確認された事例があり，何れも農耕具の可能性を示すと認められた。

当該期の出土遺物は，いわゆる玉縁口縁を呈する白磁碗・皿（大宰府分類Ⅺ類：11世紀後半～ 12世紀前半相当）を初源とし，いわゆる口禿を呈する白磁皿（大宰府分類Ⅸ類：13世紀後半～ 14世紀前半）や龍泉窯系青磁碗（大宰府分類Ⅱ類：13世紀後半～ 14世紀前半）が大半を占める。柱穴や土坑，墓跡等の埋土内遺物も，同時期の遺物に限定されることから，遺構群はこれらの時期のものと判断される。土坑の埋土内炭化物のC14年代測定結果も，暦年較正年代AD1225 ～ 1285年を示し，出土遺物の比定年代とほぼ一致する。なお，玉縁口縁の白磁碗・皿（12世紀後半～ 13世紀前半）と口禿白磁皿，龍泉窯系青磁碗（13世紀後半～ 14世紀前半）の出土状況に偏在や集中が無いか確認したが，何れも分布状況に差異を見いだすことはできなかった。

（７）中世後半（14世紀中頃）以降

鎌倉末期から南北朝期にかけて，川内川南部を支配していた薩摩氏一族の成岡氏系統と大蔵流延時氏が結合し，延時氏が薩摩氏成枝一族の代表者格となる。その後，薩摩氏等在地領主と，島津氏や渋谷氏等鎌倉から下向してきた武士集団との領地争いは激烈を極める。当地を支配していたと考えられる薩摩氏一族は，島津・渋谷の勢力に圧迫されて次第に没落していく（川内市史1976）。

なお，百次城（上野城）には，薩摩氏一族の上野氏の墓が現存する（写真①左参照）。宝塔の一つには，1324年の銘記があり，本遺跡の石塔とほぼ同時期である可能性がある。本遺跡を含む旧川内市南部の古塔婆類は薩摩氏一族類縁のものが多い（川内市史1974）とされ，本遺跡の石塔も薩摩氏一族との関連性が考えられる。

在地領主と鎌倉武士団との争いが激化する時代の中，本遺跡の掘立柱建物群は放棄され，本遺跡の集落は消滅したと推察される。

その後における遺構としてＢ・Ｃ－７区に畝溝が１基検出されたことから，本遺跡一帯は，14世紀中頃から畑として利用されたと思われる。４号墓の石塔の地輪・水輪にノミ状の傷が無数に刻まれるのは，耕作に伴う農具による負傷の可能性を見る。火輪等は紛失するが，地輪に水輪が載っていたことから，当時の人が据え直したとみられ，建物群や墓の放棄後しばらくは，当該地の人々に墓の認識があったと推察される。なお，本遺跡の北東に所在する都八幡神社前の畑内には，４号墓の石塔に似た形状のやや小振りな石塔が現存する（写真①右参照）。

本遺跡内には，Ⅱb層を埋土とする樹痕が確認されないことから，中世以降，大木が覆い茂る森林になった状況になく，畑地や荒れ地であった可能性がある。人的痕跡として，遺跡内から，14世紀以降18世紀頃までの遺物（龍泉窯系青磁碗Ⅲ類，青白磁，青花，寛永通宝等）が出土した。Ｈ・Ｇ－７区に道跡と思われる溝状遺構が２条検出されたことと併せて，その道跡の行く先に集落が存在したと推察される。

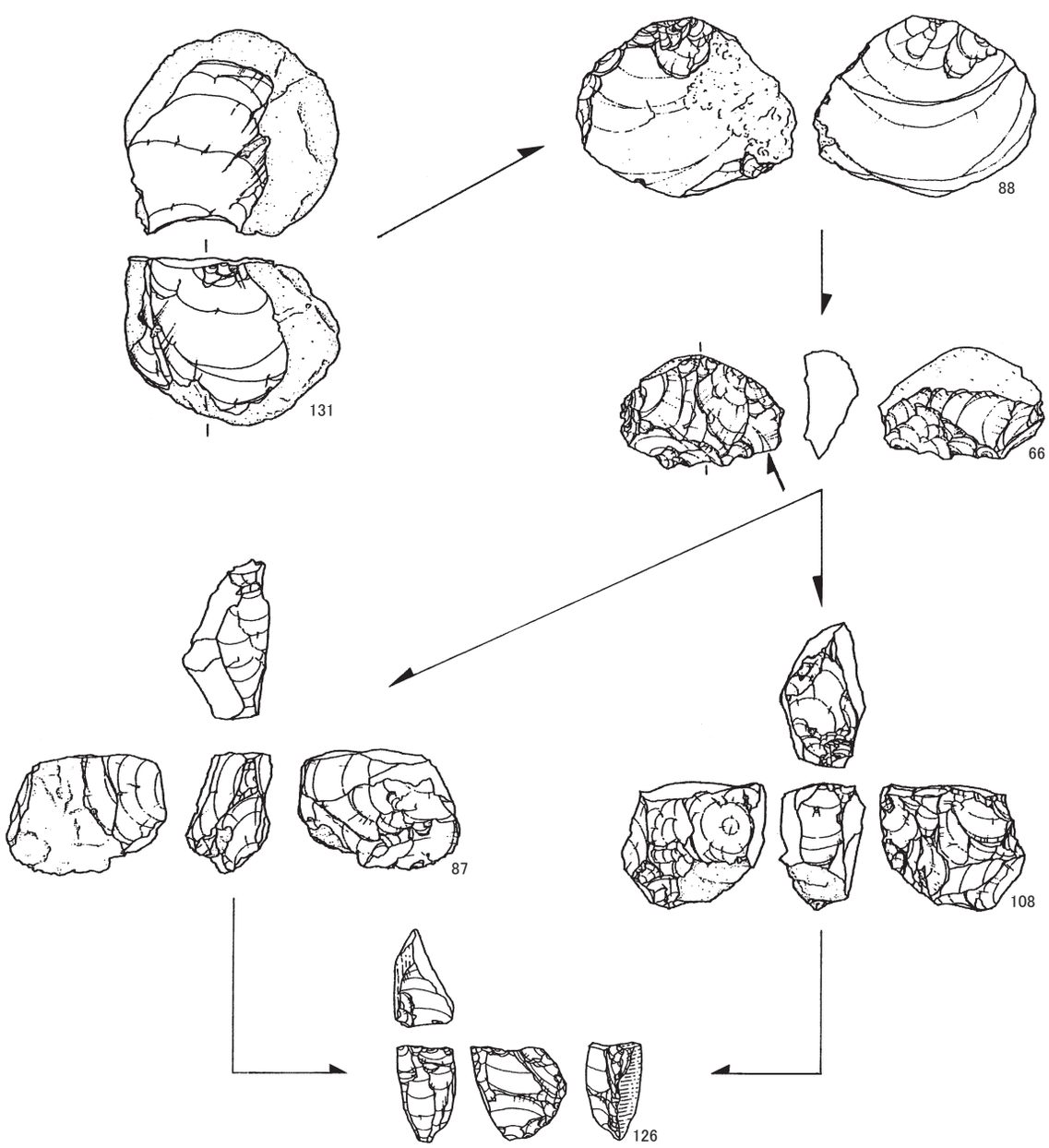
写真①　上野氏の墓（左）と都八幡神社前石塔（右）

第２節　土器・石器についての本遺跡の特徴

（１）縄文時代草創期の石器群

第３章で述べたように，本遺跡では，Ⅵ層からⅧ層にかけて細石刃や土器片，石鏃などがまとまって出土した。これらは，その平面分布と垂直分布から11のブロックに分けられることを確認したところである。それぞれのブロックにおける遺物の出土状況は，複数の層位にまたがる垂直分布を示すものの平面分布において分離できないことから，各ブロックは単一時期の所産であると判断している。これは，本遺跡を含めた北薩地域の当該期における土層堆積が薄いうえに不安定であることの裏返しであり，埋没中の遺物の上下移動が影響するものと想像される。自然層位を超えた遺物の垂直分布のメカニズムについては今後の重要な課題である。

この五つのブロックの時期幅については，ブロック間の接合ができなかったため同一時期と確言できないが，個々のブロックの平面分布や土器と石鏃の分布を合わせ考えると，ほぼ同一時期の所産であろうと思われ，細石刃と土器・石鏃を伴う縄文時代草創期に位置づけられる。土器がいずれも微少な大きさであり，その形式が不明であるが，１に僅かに微隆起線文を想起させるような痕跡があり，そうであるならば，南九州にはまれな細石



第187図　剝片素材細石刃核の製作工程

刃を伴う微隆起線文土器期の一群と位置づけられる。

その細石刃核の特徴をここで再度整理しておきたい。出土した細石刃核は母核を含めて総数37個あり，ブロックごとの内訳は，第３ブロックが９個，第４ブロックが14個，第５ブロックが１個，第７ブロックが５個，第８ブロックが２個，ブロック外が６個となる。第４ブロックが卓越している。

これらの技術的な特徴は第３章でも述べたが，再度整理しておきたい。

① 礫もしくは分割礫素材で，礫皮面・分割面を打面とし，側面調整等の石核整形が施されない一群があること。

② 石核調整を施さない一群にも，素材形状を生かして断面楔形に作るものがあること。

③ 分割礫素材で，その打面から側面調整を施し，断面台形に作る船野型細石刃核に類するものがあること。

④ 剥片素材で両面調整もしくは片面調整の母核を作ったうえで細石刃核に仕上げる福井・泉福寺型に類するものが僅かながら存在すること。

本遺跡の細石刃核には以上のような技術的バリエーションがある。これらの技術的バリエーションは素材形状とその大きさに規制されるものであり，ピンポン球大の礫やそれよりも小さな礫を利用する際は①②のように作られ，それよりもやや大きい礫を利用する際は③のように作られ，両面素材の母核を作成できる剥片が得られるような剥片石核を作れる原材礫を入手できれば④のように作られる。なお，本遺跡における④の製作工程については，第187図に図示するように，次のように推定できる。

鶏卵大の礫を採集できた場合，131のような剥片石核に利用して88のような素材剥片を剥出する。この場合，打面作出の際に得られた剥片も素材剥片となりうる。

次に，その素材剥片の周縁から調整剥離を施し66のような母核を作成し，打面を設定する。本遺跡の資料では，66に付加した矢印方向の，つまり長軸に対して斜め方向にスポールを剥離して打面形成を行うのではないかと思われる。次に108のように作業面作出が施され，細石刃核としての形態が整う。

次の段階で細石刃剥離が開始され，頭部調整を施しながら細石刃剥離を進行させる。頭部調整に応じて打面調整が施される結果，下縁・背縁の再調整が施され細石刃核はさらに小さくなり，126のような段階に至るものと思われる。126はこの段階で放棄されたもののようであるが，打面左下隅の調整を見ると細石刃剥離を左側面でも行おうとした意志が窺えるが，その細石刃剥離が階段状剥離になってしまい断念したものか。

本遺跡では細石刃核の他に石鏃，削器，掻器，拇指状掻器，礫器，剥片石核，敲石が出土しており，これらで本遺跡の縄文時代草創期の石器群は器種構成される。

（２）縄文時代早期の石器群

本遺跡では縄文時代早期の土器は塞ノ神式が主体であり，石器群もそれに伴うものであろうと思われる。

この石器群について主な器種ごとに特徴を整理する。

初めに石斧であるが，磨製石斧の頭部片が1点出土しているのみで極めて少ない。このことは本遺跡石器群の最大の特徴であり，類例に乏しいものである。

次に石匙である。これも4点と数が少なく，その細分類でも縦型が3点，上野原型が1点であり，横型が見られないという特徴がある。

次に石鏃であるが，これは塞ノ神式期特有の極めて多彩な形式の石鏃が出土している。小型剥片鏃・凸基式・浅い抉りの凹基式・抉りの深い凹基式・鍬形鏃・鋸歯縁鏃・有肩鏃等であり，有茎鏃を欠くもののそのバラエティの豊富さは上野原遺跡を代表とする南九州早期後葉段階の特徴をよく示す。

削器も小型・粗製大型ともに数が少ない。不定形剥片を用いて作られていることは他遺跡と共通するが，数の少なさとともに，刃部加工の丁寧なものは見られないという特徴がある。

掻器は上野原石器群によく似ており，拇指状掻器が2点含まれているのが特徴的であり，南九州早期後葉段階の特徴と一致する。

異形石器が1点出土している。残欠であるため断言できないが，形態的には他遺跡例と同様のものであると思われる。しかしながら，本文中で述べたように他遺跡例と異なってタンパク石製であり，早期後葉段階では異質の例である。異形石器と黒色安山岩の強い相関が想定されていたが，今後，異形石器の石材利用について再度検討の必要が生じた。なお，石材の問題を除くと，上野原型石匙の出土と併せ考えれば，早期後葉段階，塞ノ神式期の石器組成の在り方と良く一致するものである。

礫器の数量的多さも早期後葉段階の特徴と良く一致する。また，そのバラエティーの多彩さも同様である。

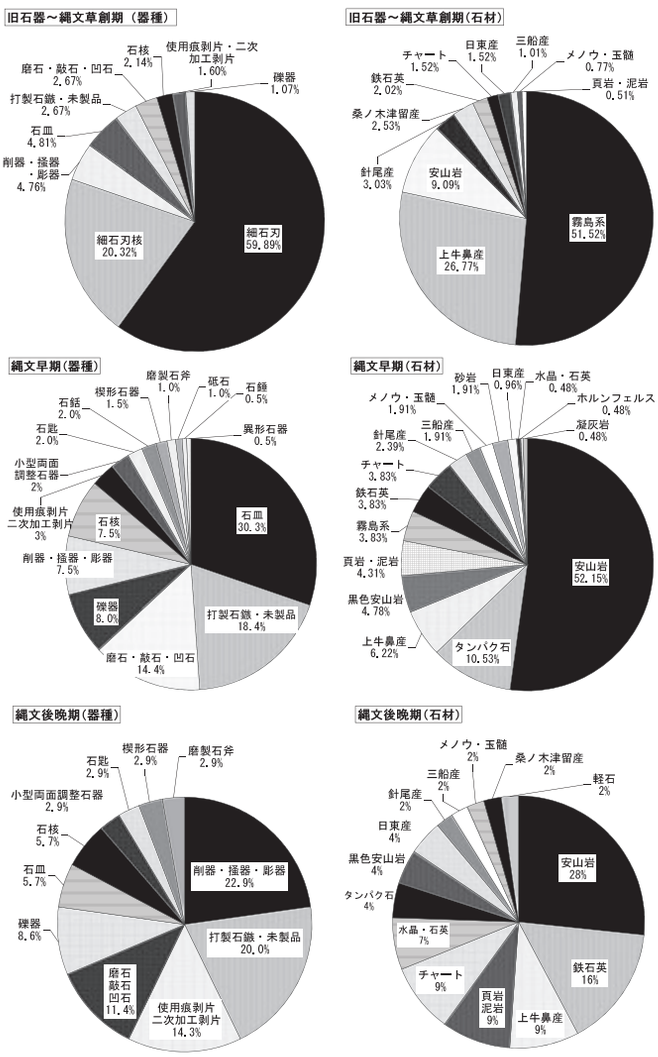
磨石や石皿の数量的，形態的特徴は南九州早期後葉段階の通有のものであり，特に他遺跡と異なる特徴は見いだせない。

石核と剥片から見た剥片剥離の在り方には，寸詰まりの縦長剥片剥離の存在が目を引く。309がその石核でありチャート製である。しかし，チャートのこのような剥片を用いた石器や剥片は出土していない。また，318・319・321は寸詰まりの縦長剥片であるがそれを剥離したであろう石核は出土していない。石核は遺跡外への搬出されたもので，剥片は持ち込まれたものであろうか。このような石核の存在と考え合わせると，極めて特徴的であるとともに，新たな課題が見えてきたように思われる。

※１本文中では，「スクレイパーに分類するのを躊躇する」と述べたが，やはり母核と分類する方が妥当であろう。

（3） 旧石器時代～縄文時代後・晩期の器種・石材組成比率について

第119表　旧石器時代～縄文時代後・晩期の器種・石材組成比率



旧石器～縄文時代草創期の器種は，細石刃の59.89%を始め，細石刃核等，細石刃に係る遺物が80％程を占め，狩猟具が本遺跡の当該期の主体を成すと言える。打製石鏃が一部（2.67%）含まれ，縄文時代の萌芽を特徴づける。石材では，80%以上と多くを黒曜石が占め，細石刃や打製石鏃に利用される。内訳は，霧島系の51.52%を始め，在地産が殆どである。一部に，外来の針尾産が含まれる。狩猟具に対して，石皿等の植物加工具が7%程と少量なのは，本遺跡内での植物採集が貧弱であったか，滞在期間が比較的短期間であった可能性を示す。

縄文時代早期の器種は，石皿や磨石等植物加工具が44%と半数程度を占め，狩猟具の打製石鏃が18.4%と続く。旧石器時代～縄文時代草創期と比較して，植物加工具の比率が多いのは，植物資源の豊富さや食物素材の変化もあろうが，共伴土器の量が比較的多く，遺構数も多いことから，本遺跡での人的活動の活発さに起因すると考えられる。滞在期間が長い可能性の他，本遺跡の近在に集落が存在した可能性を示すと思われる。礫器の用途については，当該期に落し穴や土坑が多数検出されることから，土掘り具の可能性も考えられる。

石材は，安山岩が52.15%と過半を占めるのは，石皿・磨石や礫器等礫石器が多いためである。タンパク石の10.53%や黒曜石（上牛鼻産・霧島系，針尾産が含まれる）は，打製石鏃や削器・掻器等に利用される石材である。

旧石器～縄文時代草創期は，霧島系黒曜石が過半を占め，上牛鼻産が続くのに対して，縄文時代早期では，上牛鼻産6.22%，霧島系3.83%と石材や産地に大きな差異がある。集団の違いによる石材入手ルートの違いと見なされる。

針尾産黒曜石は，両時代において少量ながら一定量出土し，西北九州とのつながりが続いていたと捉えられる。

縄文時代後・晩期においては，削器・掻器等の加工具及び打製石鏃の狩猟具が各20%程を占める。石皿・磨石等植物加工具は17%程と縄文時代早期と比較して割合が低く，本遺跡での人的活動期間が比較的短期間であったためと考える。土坑が検出されているが，礫器の8.6%は，土掘り具の可能性も考えられる。

石材では，鉄石英の16%を始め，チャート，水晶・石英，タンパク石等が目を引く。黒曜石は，霧島系が皆無で，産地が近隣の上牛鼻産，日東産と続く。

（4）７類（塞ノ神式土器）の分類について

７類土器は，塞ノ神式土器に比定できる。この土器型式は，現在も，「遺跡ごとにわずかに特色を変えており，多彩な特色の組み合わせのためか系統をめぐって様々な主張があり混乱が続いている」（中村2000）状況にある。

本遺跡出土の塞ノ神式土器は，河口貞徳氏の分類では，その多くが塞ノ神Aa式土器（器面全体に幾何学文を施し，このうえに重ねて間隔をおきながら縦位の撚糸文系の文様を回転押捺したもの）に相当し，７－８類が塞ノ神Ab式土器（器面に篦描きの幾何学文的な区画を施文し，この区画内に撚糸文系の文様を回転押捺したもの）に相当する（河口1972）。本遺跡の７－１～７－８類の塞ノ神式Aa式土器の内，「ラッパ状の口縁部が付」（河口1972）かず，円筒形の胴部が，口縁部で大きく外反するが，口縁部中位で「く」の字状に屈曲・内傾する土器群（いわゆる二重口縁土器）が出土し，特筆される。本稿では，７－１～７－５類に相当する。

河口氏の塞ノ神式土器の器形の定義に触れられないように，二重口縁資料は出土量が少なく，塞ノ神式土器の中では傍流と言ってよい。しかし，本遺跡では，その二重口縁が主流を成す点で注目される。二重口縁土器（７－１～７－５類）を含めた７類土器の分類基準である器形や文様・施文形態と他の遺跡の資料の器形等との類似

性・近似性を明らかにすることで，７類土器が，平栫式・塞ノ神式土器の既研究の編年上，どこに位置付けられるか検討することとする。

「研究者間の意見の相違も大きく混乱した状況がうかがえ」（中村2000）る中で，塞ノ神様式・平栫式様式二系統論を提唱する新東晃一氏の編年案においては，７類土器は以下のように位置付けられる。新東氏は，「形態上，平栫式土器→石坂上式土器→栫ノ原式土器に推移が想定」（新東1998）されるとする。二重口縁土器（７-１～７-５類）は，器形的に，石坂上式土器の中の「口縁部は，大きく外反し，中には－中略－キャリパー状に端部を内傾させるものもある」（新東1998）と指摘される一群に相当すると判断される。

また，「幅２cm程度の撚糸文帯を縦位に，無文部と交互に施文している。そして，３本を基本とする凹線文を，撚糸文帯の上から頸部，同中央部，胴部下端に横位に巡らせている。この３本の凹線文は上と下の凹線文を弧状に結んでいるのも特徴的である」（新東1998）と栫ノ原式土器を設定するが，これは，胴部に網目撚糸文帯及び横位沈線を施す本稿7-７・８類土器に該当する。つまり，７類を新東編年に当てはめれば，7-１～7-５類の二重口縁に後続して，7-７・８類が位置付けられる。

一方，一系統論には，貝殻文系塞ノ神式土器と平栫式土器・撚糸文系塞ノ神式土器の何れを前形式とするかで２通りの一系統論が存在する。平栫式土器→貝殻文系塞ノ神式土器→貝殻文系土器の一系統論を唱える八木澤一郎氏の編年観に，本稿7-１～7-８類土器を当てはめてみることとする。

塞ノ神式土器の二重口縁（7-１～7-５類土器）は，一般的な平栫式・塞ノ神式土器には見られない器形で特異である。そのため，八木澤氏の編年には特記されないが，積極的に捉えれば，編年細別模式図（八木澤2008）で「見かけの外反肥厚（屈曲）（第４群・第５群）」する一群に収められるところか。施文形態に着目すると，７類の口縁部文様帯から頸部文様帯にかけての施文的特徴としては，沈線文＋刺突連点文＋微粒帯文（第５群）・沈線文（＋刺突連点文）（第６・７群）の範囲に該当する。７類の胴部施文形態は，網目撚糸文（第６群）そのものであり，八木澤編年において，７類土器は，器形や文様形態上，塞ノ神式土器の古手に位置付けられる。

一系統論ながら，塞ノ神Aa式の長期存続を唱える高橋信武氏の編年案が知られるが，塞ノ神Aa式内の編年は，八木澤編年に基本的に共通するので，割愛する。

他に，多々良友博氏の「撚糸文系塞ノ神式と貝殻文系塞ノ神式土器およびその融合型式が若干の時期差をもちながら併行して変遷」（多々良1998）の数系列説も知られる。多々良氏は，各型式関係や型式内組列については，「高橋（高橋1997）の型式細別案を手掛かりとして構築している」（多々良1998）こともあり，平栫式土器・撚糸文系塞ノ神式土器・貝殻文系塞ノ神式土器の各型式内編年は高橋信武氏の編年案に共通する。

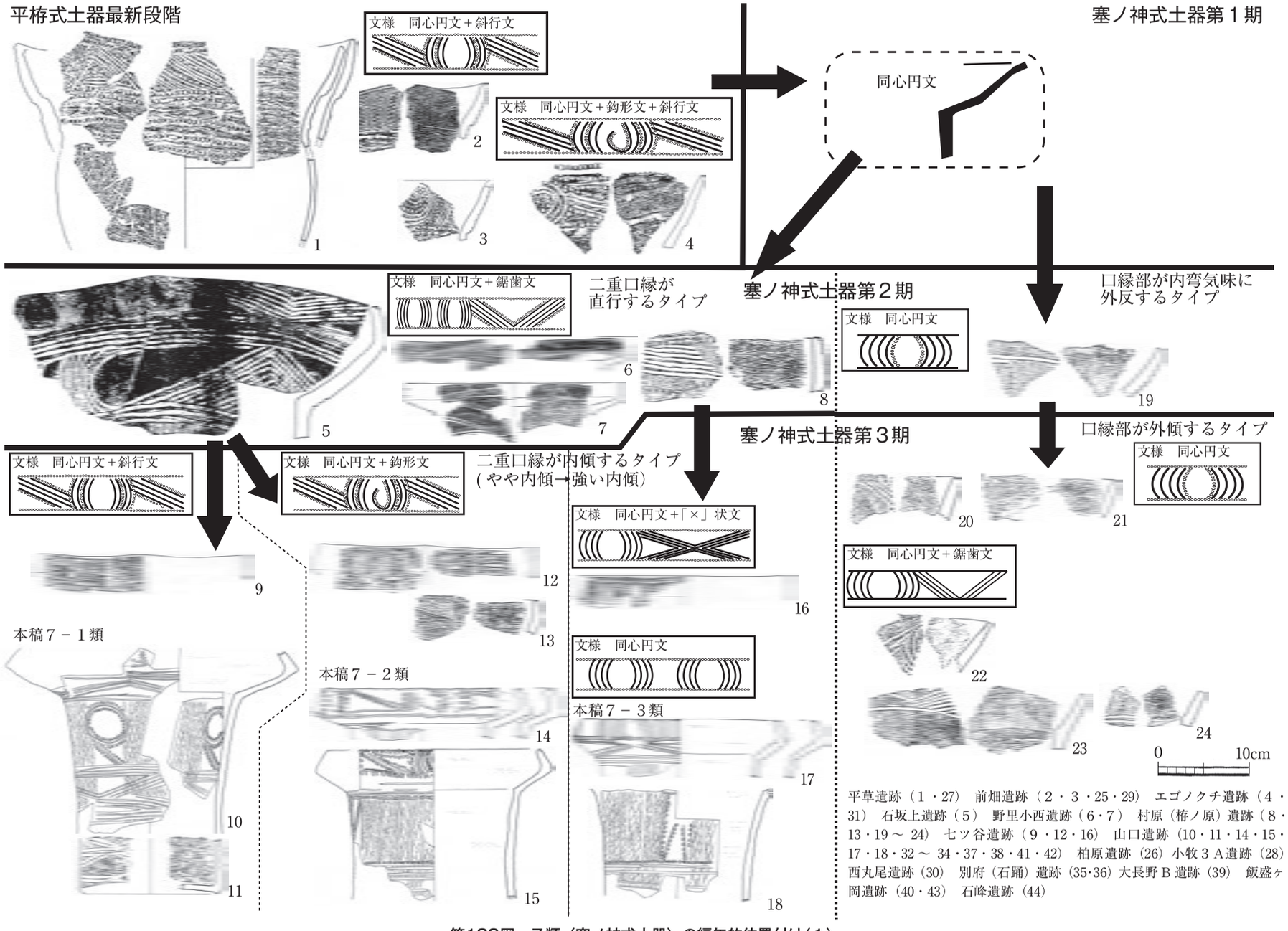
以上の各編年案と照らし合わせると，二重口縁土器（7-１～7-５類）は，新東氏の編年案では，平栫式土器に続く石坂上式土器に位置づけられ，八木澤氏の編年案では塞ノ神式土器の古手に属する一群に位置付けられる。高橋氏の編年案では，特段の説明はないものの，段階毎に図示された分類の中に，二重口縁資料が塞ノ神Ⅰ式古段階や中段階に含めて報告されて（高橋1998）いる。

一系統論・二系統論・数系列説の相違なく，二重口縁や胴部の網目撚糸文のメルクマールに関しては，平栫式土器の特徴を色濃く残す属性と捉え，少なくとも四者においては，平栫式土器に後続する一群と見なしている点で共通する。

さらに，口縁部の文様形態に注目して－口縁部から胴部至る資料が少ないためであるが－7-１～7-５類の口縁部に特徴的に施される「同心円文」や「半円弧文」，「鋸歯文（山形文）」，「玉縁状の文様」が，平栫式土器や塞ノ神式土器のどのタイプに特徴的に捉えられるのか，具体的には，平栫式土器に後続する一群と見なしうるのかを，八木澤氏や高橋氏の編年案を基に，類例をあたり検討することとした。

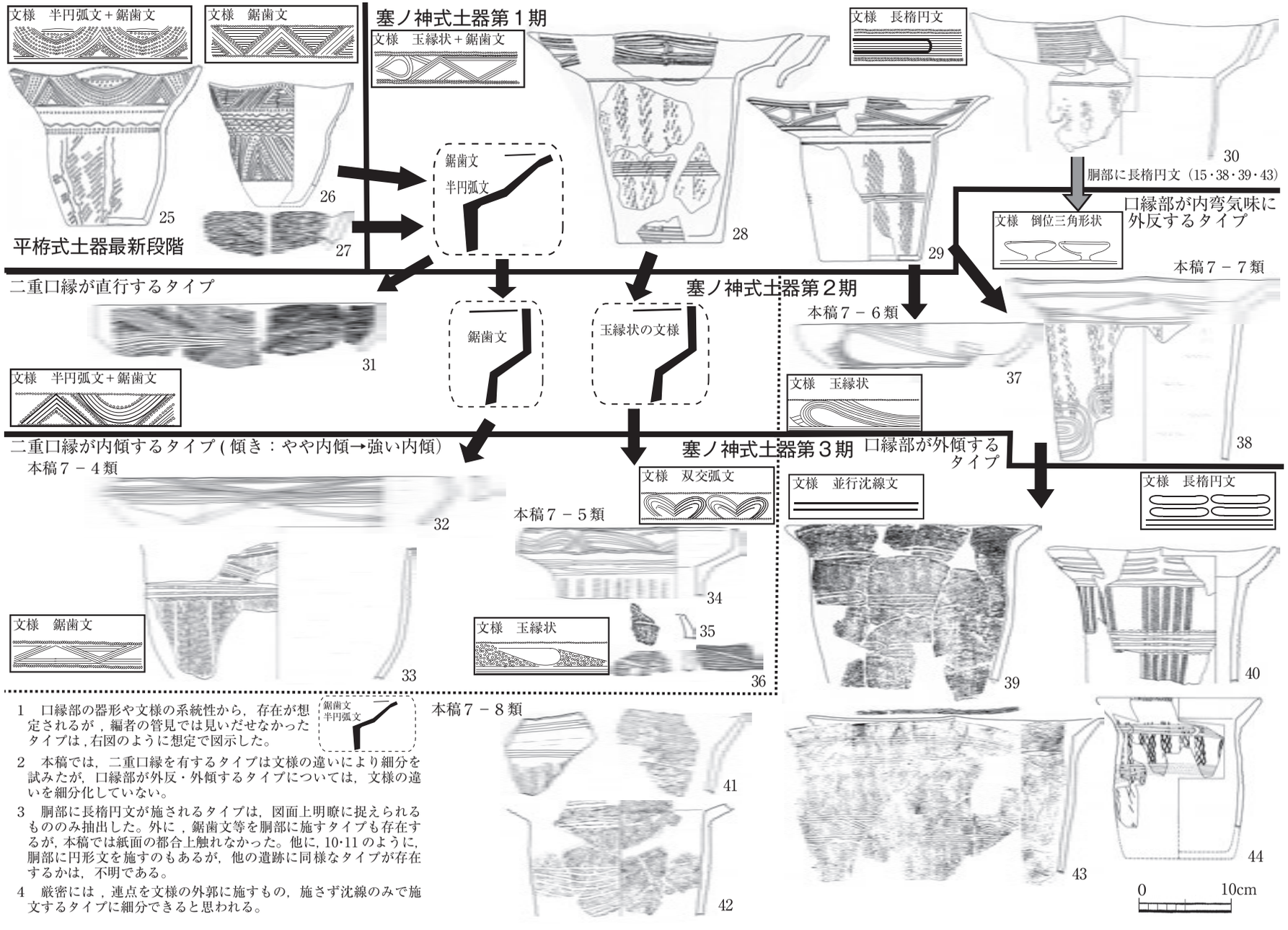
八木澤編年や高橋編年の塞ノ神式土器の編年上の重要な観点は，胴部の文様形態（網目撚糸文か貝殻押引文か，篦枠文の有無等）であり，口縁部の文様形態は，文述上は，編年の観点に位置付けられない。しかし，塞ノ神式土器の詳細な分類が成される高橋編年では，段階毎の図示上，口縁部の文様形態がどの段階に位置付けられているかを捉えることが可能である。その結果，二重口縁土器の口縁部に施される「同心円文」や「半円弧文」，「鋸歯文（山形文）」，「玉縁状の文様」は，高橋編年では，平栫Ⅲ式土器・塞ノ神Ⅰ式土器古段階・Ⅰ式土器中段階・Ⅰ式土器新段階に施されるのが，確かめられた。口縁部の文様形態上も，平栫式土器最新段階から塞ノ神式土器の古手の中に位置付けられると見なされる（高橋1998）。

八木澤氏は，平栫式土器の口縁部の器形的変化を，「外反→外反肥厚→見かけの外反肥厚（屈曲）→外反」（八木澤2008）と捉えている。高橋氏も平栫式土器については，同様な器形変化を捉えており，塞ノ神式土器の古手についても，平栫式土器からの系統的変化で編年を示している（高橋1998）。この案を基に，平栫式土器の最新段階と塞ノ神式土器の古手の器形的特徴を見出すことが可能であり，平栫式土器から塞ノ神式土器への口縁部の器形変化（見かけの外反肥厚（屈曲）→外反）に，口縁部の文様形態の関連性を組み合わせることで，７類土器の詳細な編年を示すことが可能と判断した。なお，本遺跡出土



平草遺跡（１・27） 前畑遺跡（２・３・25・29） エゴノクチ遺跡（４・31） 石坂上遺跡（５） 野里小西遺跡（６・７） 村原（椈ノ原）遺跡（８・13・19～24） 七ツ谷遺跡（９・12・16） 山口遺跡（10・11・14・15・17・18・32～34・37・38・41・42） 柏原遺跡（26） 小牧３Ａ遺跡（28） 西丸尾遺跡（30） 別府（石踊）遺跡（35･36） 大長野Ｂ遺跡（39） 飯盛ヶ岡遺跡（40・43） 石峰遺跡（44）

第188図　７類（塞ノ神式土器）の編年的位置付け（１）



1　口縁部の器形や文様の系統性から，存在が想定されるが，編者の管見では見いだせなかったタイプは，右図のように想定で図示した。

2　本稿では，二重口縁を有するタイプは文様の違いにより細分を試みたが，口縁部が外反・外傾するタイプについては，文様の違いを細分化していない。

3　胴部に長楕円文が施されるタイプは，図面上明瞭に捉えられるもののみ抽出した。外に，鋸歯文等を胴部に施すタイプも存在するが，本稿では紙面の都合上触れなかった。他に，10･11のように，胴部に円形文を施すのもあるが，他の遺跡に同様なタイプが存在するかは，不明である。

4　厳密には，連点を文様の外郭に施すもの，施さず沈線のみで施文するタイプに細分できると思われる。

第189図　７類（塞ノ神式土器）の編年的位置付け（２）

の土器だけで，器形・文様形態の変化を説明できないものに関しては，他遺跡の遺物も検討した（第188・189図）。

口縁部が，削りや屈曲により見かけ上，外反肥厚するタイプ（高橋編年：平栫Ⅲ式土器　平栫式土器最新段階）が，口縁部中位の屈曲に変化すると見なした（高橋編年：塞ノ神式Ⅰ式古段階　塞ノ神式土器第１期）。

その後，より屈曲が強まる二重口縁タイプと，内弯気味に立ち上がるタイプに分化する（高橋編年：塞ノ神式Ⅰ式土器中段階　塞ノ神式土器第２期）。

二重口縁は，口縁部が直行するタイプが内傾に変化する一方，内弯気味に膨らみながら立ち上がるタイプは，直線的に斜立するタイプに移行する（高橋編年：塞ノ神式Ⅰ式土器中段階　塞ノ神式土器第３期）。二重口縁土器は，内弯気味に立ち上がる（直線的に斜立する）タイプと共伴する事例が殆どであり，両タイプは，第２・３期段階では，同時期の可能性が高いと判断した。

後続すると考えられる塞ノ神式Ⅱ・Ⅲ式（高橋1998）や塞ノ神式第７群（八木澤2008）に二重口縁の塞ノ神式土器が見いだせないことから，二重口縁タイプはその後に消滅し，口縁部が外傾・斜立するタイプのみ存続すると推察する。

なお，口縁部が直立・内傾する二重口縁の塞ノ神式土器が出土する九州内の遺跡の集成を行いたいところであったが，時間不足もあり，本県のみの集成に留まった（第120表参照）。漏れがある可能性もあるが，その際はご容赦頂けると有難い次第である。

第120表　二重口縁を呈する塞ノ神式土器出土一覧（鹿児島県内）

遺跡名	所在地	掲載頁	掲載番号
稲荷上遺跡	曽於郡志布志町	19	14 ～ 20・22・23
夏井土光遺跡	曽於郡志布志町	97・98	279・285 ～ 288
別府（石踊）遺跡	曽於郡志布志町	55	433 ～ 435・456
大長野B遺跡	曽於郡志布志町	58	187
道下段遺跡	出水郡高尾野町	34	1・2
村原(椎ノ原）遺跡	加世田市	39	67 ～ 76
七ツ谷遺跡	姶良郡吉松町	55・56	14 ～ 35
石坂上遺跡	川辺郡知覧町	40	1
野里小西遺跡	鹿屋市	30	128・129

（５）外面に格子目文タタキを施す土師器について

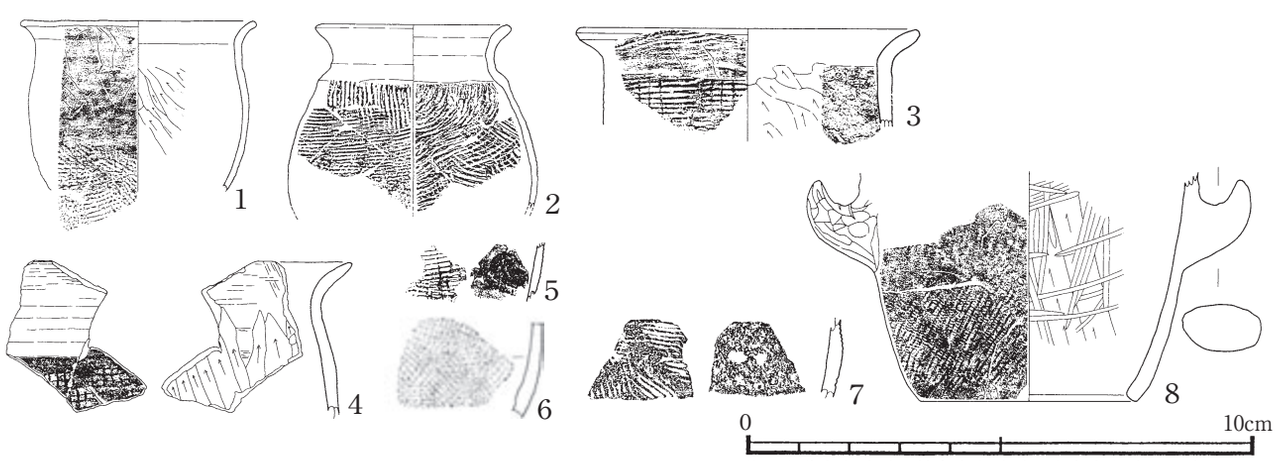
本遺跡では，外面に格子目文タタキを施す土師器が３点出土した（P131-遺物番号629，P187-144図土坑161内遺物参照）。大島遺跡では，外面に格子目文タタキを施し，内面にヘラケズリ後ヘラミガキを施す甑が出土（大島2005：遺物番号275）する他，外面に格子目文タタキを施し，内面にケズリを施す「暗紫色から黒褐色」の色調の「通常の土師甕とは全く異なる」資料が報告される（大島2005：遺物番号820）。

外面に格子目文タタキを施す土師器は，８世紀～ 10世紀比定の福岡県海の中道遺跡の製塩土器（海の中道1982）が著名であり，「内面に布目痕をもつ円筒形土器（Ⅱ類）」の他，「叩き目を有する土師質の甕形土器（Ⅰ類）」として報告される（海の中道1982）。

大島遺跡・海の中道遺跡の出土例から，外面に格子目文タタキを施す土師質の甕形土器の一部には，甑や製塩土器（煎熬土器）が含まれる可能性があると推察される。

南九州における「叩き目を有する土師質の甕形土器（Ⅰ類）」（海の中道1982）に類似する資料は，以下第190図に示す。なお，大島遺跡や西ノ平遺跡では，「内面に布目痕をもつ円筒形土器」（海の中道1982）の製塩土器の他，甑が共伴する例が見られ，甑を利用する生活文化の中に，製塩土器が利用される生活形態が垣間見える。

「内面に布目痕をもつ円筒形土器」は，布目が極めて特徴的であり，小片でも認識されやすい。一方，タタキ成形の土師器は，外面は須恵器に似ており，内面はタタキ痕やケズリ等須恵器や土師甕に同様である。小片であれば，須恵器や土師甕との峻別が困難であり，認識されない事例もあると推察され，注意を喚起する必要があると捉え，本稿で特記して報告することとした。



第190図　外面にタタキ痕をもつ土師器

海の中道遺跡（１）　外畠遺跡（２）　大島遺跡（３・８）
筆付遺跡（４）　堀川遺跡（５）　西ノ平遺跡（６）　小薗遺跡（７）

第121表　器面に敲き痕を有する土師器出土一覧（鹿児島県内）

遺跡名	所在地	器種	部位	掲載頁	掲載番号	文章記載	備考
筆付遺跡	日置郡金峰町	煎熬土器	口縁部～胴部	90	51		外面に煤付着。
小薗遺跡	日置郡金峰町	土師甕	胴部	108	34	外面に平行タタキ痕があるもので，内面はやや摩滅しているがケズリによって仕上げる。	布目圧痕土器が共伴する。
堀川遺跡	揖宿郡頴娃町	土師器	胴部	23	7	外面に敲きのみられる土師器。	トレンチ内一括。
大島遺跡	川内市	甑	胴部～底部	176	275	つつぬけタイプの蒸気孔をもつ。	カマド形土器や把手付土師甕，布目圧痕の焼塩土器が共伴する。
大島遺跡	川内市	土師甕	口縁部～胴部	238	820	甕形を呈する土器の口縁部であるが，通常の土師甕とは全く異なる。色調は暗紫色から黒褐色を呈し，器面にはたたき痕が残り，内面はヘラケズリが行われている。	
外畠遺跡	出水市	土師甕	口縁部～底部	91	443	胎土はにぶい黄橙色を呈する。器壁は薄く仕上げられる。胴部外面の下半にタタキの痕跡を明瞭に残す。胴部上半から口縁部内面にかけては，横方向のハケ目の後に，丁寧なナデが施される。胴部内面は，左上方向のケズリが施された後に，ミガキ様のナデが施される。	土坑内出土。焼塩土器が，包含層内から1点出土。
外畠遺跡	出水市	土師甕	完形品	93	455	外面：底部～胴部下半にタタキ痕。上半～口縁は横方向のハケ目→丁寧なナデ。内面：底部～口縁は左上方向のケズリ。	土坑内に整置。共伴遺物は，上に同じ。
外畠遺跡	出水市	土師甕	口縁部～胴部	96	474		土坑内出土。共伴遺物は，上に同じ。
西ノ平遺跡	川内市	土師器	胴部	278	1837	格子目文の叩き痕をもつ。淡赤褐色。	甑や布目圧痕土器が共伴する。
西ノ平遺跡	川内市	土師器	胴部	278	1838	格子目の叩き痕をもつ。暗黄灰色を呈し，内面は双方ともヘラケズリされ，胎土には砂粒を多く含んでいる。	〃
西ノ平遺跡	川内市	土師器	胴部	278	1839	平行叩きを施す。淡赤褐色で胎土に砂粒を多く含んでいる。	〃
西ノ平遺跡	川内市	土師器	口縁部	278	1840	平行叩きを縦位に施した口縁部である。	〃

（6）火打ち石について

本遺跡のⅡb層（古代・中世）において，石核状や剥片状の鉄石英やメノウが多数出土した。鋭い稜に「V」字状や「U」字状の抉りを呈する剥離痕を有し，また微細剥離痕が捉えられるものもある。他に，稜の一部が刃潰し状に潰れを呈するのもある。

「稜線の磨耗（小林・松崎2001）・石器の刃部相当部分以外に残された微細剥離（水野1992）」（藤木2001A）を特徴とする火打ち石の特徴に類似する。また，火打ち石の石材として，「鉄と打ちあわせて火花が出る硬い石（小林・松崎2001）」（藤木2011A）との指摘があり，本遺跡出土の鉄石英やメノウなどの硬質の石材に合致する。

以上のことから，Ⅱb層出土の鉄石英やメノウは火打石の可能性が高いと判断する(8)。鉄石英が217点，メノウが268点出土し，19点を以下に紹介する。２・３・５・６・15・16は接合したので，接合した状況で図化した。

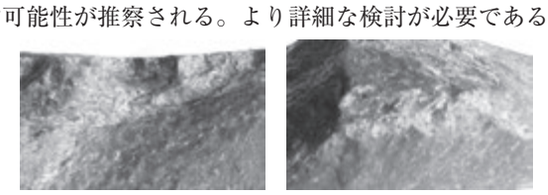
火打石の出土地点を遺構位置と比較し，出土状況を検証したが，遺構との関連性は捉えられなかった。

第191図より，１～14は鉄石英である。４は，微細剥離のみ捉えられ，他は微細剥離痕の上に，潰れが見られる。15～19は，メノウである。15は，微細剥離のみ捉えられ，他は微細剥離痕の上に，潰れがある。

火打石は，礫→分割礫→火打石使用第１段階→第２段階・・・→破砕礫（破片）の変化過程が想定される。火打石使用第１段階→第２段階とは，火打金を鋭利な稜線に打ち付け，稜線が潰れて火花が出なくなった際に，敲打・剥離により，新たな稜線を再生する過程を示す。２・５・16の接合資料には，敲打・剥離により再生された稜線に，新たな微細剥離や潰れが見られ，上述の作業過程を証拠づけている。

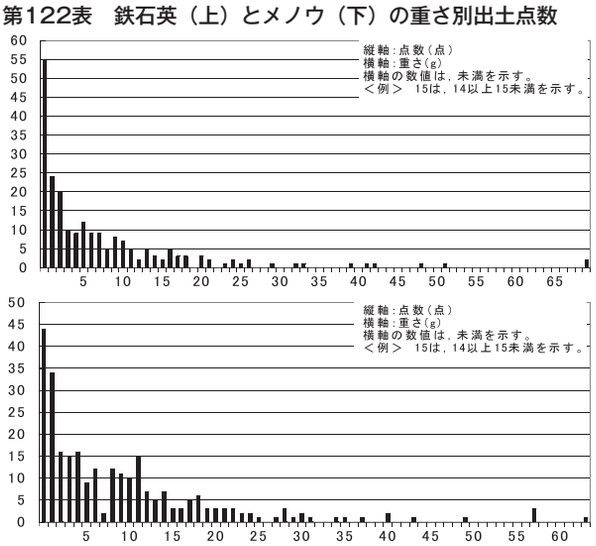
概括的には，１や２・15等の大きいものほど，使用過程が浅く，小さいものほど使用が進んだものと理解される。鉄石英では，12が最も使用が進んだ最小の火打石と思われる。13・14も，12同様の廃棄前の火打石の可能性もあるが，砕片の可能性を含み，断定できない。メノウでは，19が最も使用が進んだ最小の火打石であると考えられ，12同様に小指大の大きさである。

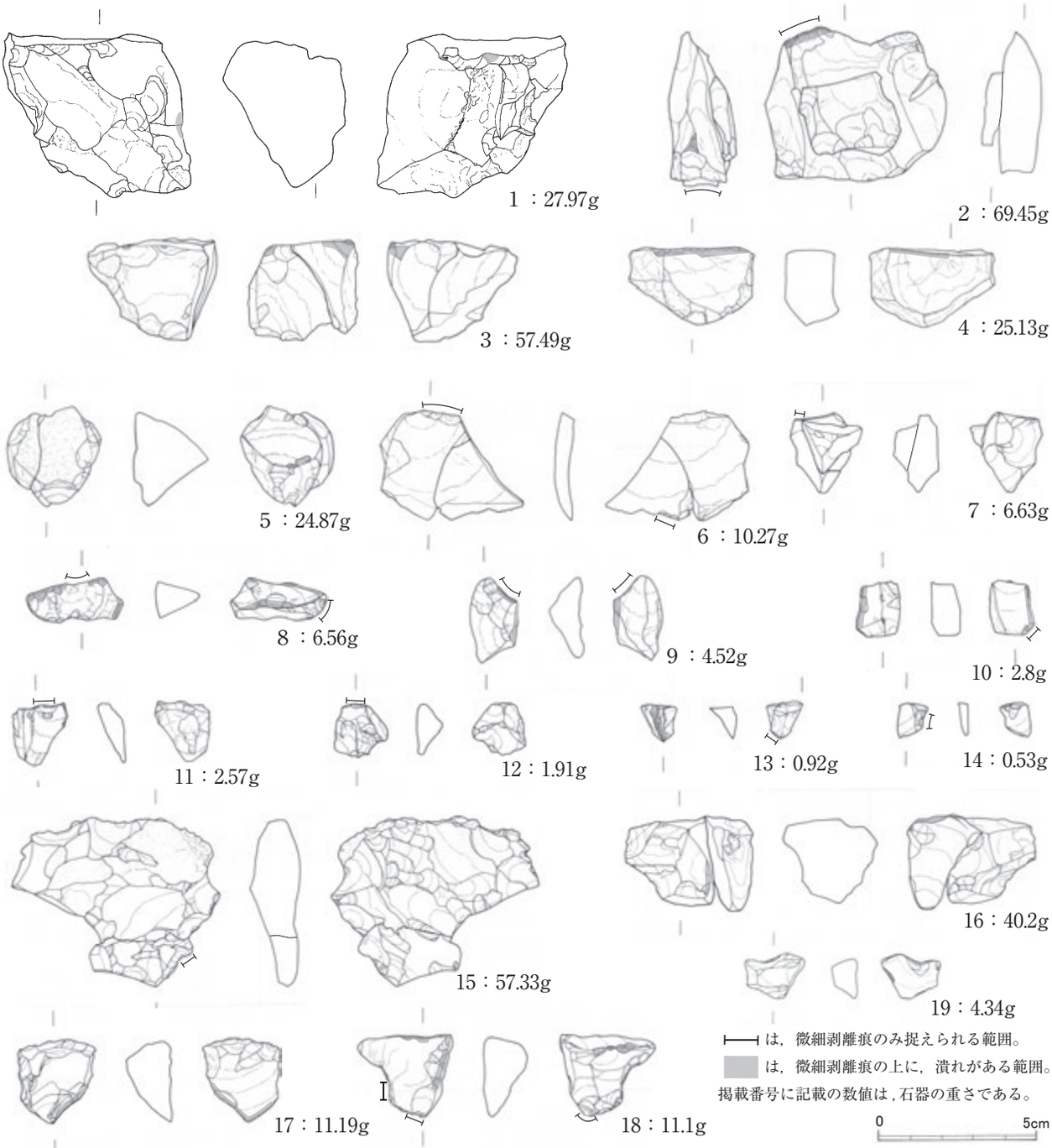
本来，１点ずつを廃棄品（製品）と砕片に分類し，どの段階の遺物かを当たり，量的頻度を示し検討・解釈を加えるべきであるが，時間不足もありできなかった。第122表は，重量別の遺物点数を示したもので，火打石の変化過程を量的に示す可能性があると捉え，データ的解釈を行うこととした。第122表（上）では，２g未満と３g以上の間に，第122表（下）では，１g未満と２g以上で，大きな量的差異が見られる。この差異は，度数分布的に，砕片の大小を分ける可能性が考えられる。また，15g程を境に，15g未満はより小さいものほど数を増すが，15g～25g間は量的に安定しており，25g以上は少量である。15g未満は砕片の主たる分布を示し，15g～25g間は，火打石としての機能を失い破棄されるものの主たる分布を示す可能性が推察される。より詳細な検討が必要である。



写真②　微細剥離痕（左）と潰れ（右）

第122表　鉄石英（上）とメノウ（下）の重さ別出土点数





第191図　山口遺跡出土の火打石

＜註＞

（1） 水輪の表面に僅かに梵字の痕跡が確認されることから，石塔墓に造詣の深い狭川真一氏に所見を頂いた。以下，原文のままを紹介する。「ひとつは，「𑖀／ビ」の異体字「𑖁」と見られ，もう一字は，「𑖭／ラ」の可能性がある。他の２文字は不明である。水輪に両梵字が入る例は，大日如来の三種悉地真言＋金剛界または，胎蔵界の五仏を配する例が該当する。類例は，平安時代後期から鎌倉時代末期にかけて存在するが決して多くはない。今回の事例は鎌倉時代末期に近い事例と思われる。」

（2） 小畑弘己氏の実見による。

（3） 狭川氏教示によると，類例としては，九州内では，大分県野津町八里合五輪塔（弘安八年銘）とその直下から出土した土葬墓が挙げられる。

（4） 改葬は，熊本県玉名市伊倉本堂山所在の石塔銘に「伊倉本地主／宇佐公満墓／（中略）／先承久元年／五月十六日死／今文應元年／秋彼岸改葬」（承久元年＝1219年，文應元年＝1260年）と見え，死亡後41年を経て改葬されたことがわかる。鹿児島県喜界島の城久遺跡群の事例が，改葬の珍しい事例である。これに類する確実な事例は，未だ他の地点・地域では発見されていない。

（5） 覆屋の本来の形態である墳墓堂は，12世紀に高階層者（天皇や貴族）に最も普及する。13世紀頃までに，武士の最上階層が採用するようになる。13世紀後半には，石塔に墳墓堂を意識した覆屋が付帯する例が，奈良県称名寺の文献等に残される。狭川氏教示による。

（6） 福岡県大宰府市宮ノ本遺跡（太安万侶の墓推定地）に，木簡墓で木炭を敷き詰めた事例があるが，9世紀代であり，時期差があり類例には該当しない。狭川氏教示による。

（7） 狭川氏教示による。

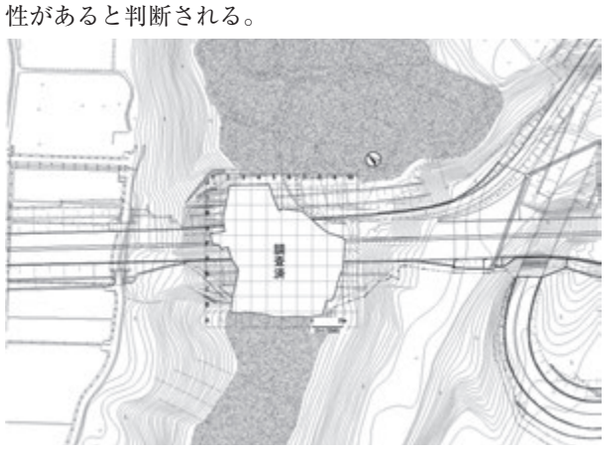
（8） 九州内の火打石に関し，精力的に研究を行っている藤木聡氏に実見して頂き，火打石の可能性が高いとの言を得た。また，同氏は，その著「九州における火打石・火打金」で，宮田栄二氏の論として「坊津町には，鉄石英の原産地が確認されており，それが火打石であった可能性が高い」という。「串木野市には串木野金山があり，金山付近に多く認められる玉髄が火打石であった可能性を想定されている。（宮田2003）」と紹介している。

＜引用・参考文献＞
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006「野里小西遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（100）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「安茶ヶ原遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（118）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「大島遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003「楠元・城下遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（57）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012「外畠遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（175）
鹿児島県教育委員会1992「西丸尾遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（64）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993「飯盛ヶ岡遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（3）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996「小松３A遺跡・岩本遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書15
鹿児島県埋蔵文化財センター 2008「市ノ原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（13）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012「上新田遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（166）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004「九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（71）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「持躰松遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（120）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002「山ノ脇遺跡、石坂遺跡、西原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（58）
鹿児島県教育委員会1990「前畑遺跡（第６分冊）」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（52）
鹿児島県教育委員会1980「石峰遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（12）
鹿児島県教育委員会1983「成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（28）
頴娃町教育委員会1994「砂田遺跡・堀川遺跡」頴娃町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
大口市教育員会1996「馬場A遺跡・辻町１遺跡・辻町２遺跡」大口埋蔵文化財発掘調査報告書（15）
金峰町教育委員会2000「小薗遺跡」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
金峰町教育委員会2004「筆付遺跡」金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)
牧園町教育委員会1989「界子仏遺跡・高天原遺跡」牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
高尾野町教育委員会2005「下柊迫Ⅱ遺跡・道下段遺跡」高尾野町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
加世田市教育委員会1977「村原（椎ノ原）遺跡」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書
吉松町教育委員会1999「七ッ谷遺跡・石打遺跡」吉松町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
志布志町教育委員会1979「別府（石踊）遺跡」志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書
志布志町教育委員会2003「稲荷上遺跡」志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（32）
夏井土光遺跡発掘調査会1991「夏井土光遺跡」志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（21）
志布志町教育委員会1996「大長野B遺跡・白木八重遺跡・丸岡遺跡」志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（25）
有明町教育委員会2003「長田遺跡」有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
都城市教育委員会2007「鶴喰遺跡（中世編）」都城市文化財調査報告書第79集
大分県教育委員会1993「広谷遺跡・日野尾遺跡・目久保第１遺跡・目久保第２遺跡・須久保遺跡・尾形第１遺跡・エゴノクチ遺跡」宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書
福岡市教育委員会1982「海の中道遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集
福岡市教育委員会1988「柏原遺跡群Ⅴ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第190集
天瀬教育委員会1982「平草遺跡」大分県日田郡天瀬地区遺跡群発掘調査報告書
河口貞徳1972「塞ノ神式土器」『鹿児島考古№６』鹿児島県考古学会
中村五郎2000「平椿・塞ノ神型式土器について」『古代第108号』
新東晃一1998「塞ノ神式土器再考」『九州縄文土器編年の諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―九州縄文研究会鹿児島資料集』南九州縄文研究会
八木澤一郎2008「平椿式・塞ノ神式土器」『小林達雄先生古希記念企画 総覧縄文土器』「総覧　縄文土器」刊行委員会
多々良友博1998「平椿・塞ノ神式土器再論」『九州縄文土器編年の諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―九州縄文研究会鹿児島資料集』南九州縄文研究会
高橋信武1998「縄文早期後葉の九州」『九州縄文土器編年の諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―九州縄文研究会鹿児島資料集』南九州縄文研究会
松永幸男1998「塞ノ神式土器小考」『九州縄文土器編年の諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―九州縄文研究会鹿児島資料集』南九州縄文研究会
藤木聡2011A「縄文時代に火打石はあるか」『南九州縄文通信』№21
藤木聡2011B「最古の火打ち石をまぐる諸問題」『古文化談叢第65集』九集古文化研究会
藤木聡2004「九州における火打石・火打金」『古文化談叢第51集』九集古文化研究会
中世墓資料集成研究会2004「墳墓遺跡及び葬送墓制研究の観点からみた中世　中世墓資料集成―九州・沖縄編（２）―」
上床真2004「鹿児島県における中世煮炊具の一様相」『縄文の森から第2号』鹿児島県立埋蔵文化財センター
兵庫埋蔵銭調査会1996「日本出土銭総覧1996年版」
太宰府市教育委員会2000「太宰府条坊跡XV―陶磁器分類編―」
森田勉1982「14-16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』vol, 2
上田秀夫1982.「14 ～ 16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』vol, 2
小野正敏1982「15 ～ 16世紀の染付椀・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』vol, 2
横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」『九州歴史資料館研究論集』4
田中克子・佐藤一郎2008「貿易陶磁器の推移」『中世都市　博多を掘る』,海鳴社
山本信夫1988「北宋後半期の貿易陶磁」『貿易陶磁研究』vol, 8
山本信夫・山村信榮1997「10. 九州・南西諸島　中世食器の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』71集
太宰府市教育委員会1983「付編　土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第7集
山本信夫1988「北宋期貿易陶磁器の編年―大宰府出土例を中心として―」『貿易陶磁研究』№８
中村和美1994「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の土器―土師器の変遷を中心に―」『中近世土器の基礎研究Ⅹ』
中村和美1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号
中村和美2007「南九州の土器・陶器」『中世窯業の諸相―生産技術の展開と編年―』補遺編
森　隆1989「九州系黒色土器の器形的系譜に関する若干の覚書」『古文化談叢』第21集
松田朝由2004「土器の製作技術と土器の様相」『高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（71）
荻野繁春1985「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』3
美濃口雅朗1997「樺番城窯跡の中世須恵器（1）」『肥後考古』10
狭川真一2009「日本の中世墓」高志書院
狭川真一2011「中世墓の考古学」高志書院
東京都江戸東京博物館2002「火打ち道具の製作調査と映像記録」東京都江戸博物館調査報告書第14集
川内市史1976「川内市史上巻」川内郷土史編さん委員会
川内市史1974「川内市史石塔編」川内郷土史編さん委員会

第３節　遺跡周辺の包含層の残存状況

今回の発掘調査により，本遺跡が所在する台地上は，旧石器時代から中近世に至るまで，連綿と人々の生活が営まれてきたことが明らかになった。このことから，調査区周辺も，当該期に人々の生活がなされていた蓋然性が高い。

今回の調査結果や周辺の地形状況から，調査区の隣接地の第192図のアミの部分には，包含層が残存する可能性があると推定される。特に，本調査区と地形が平坦に続く台地南西側においては，今回の調査結果同様に，旧石器時代・縄文時代，古代・中世の遺構が残存する可能性があると判断される。



第192図　山口遺跡周辺の包含層の残存状況

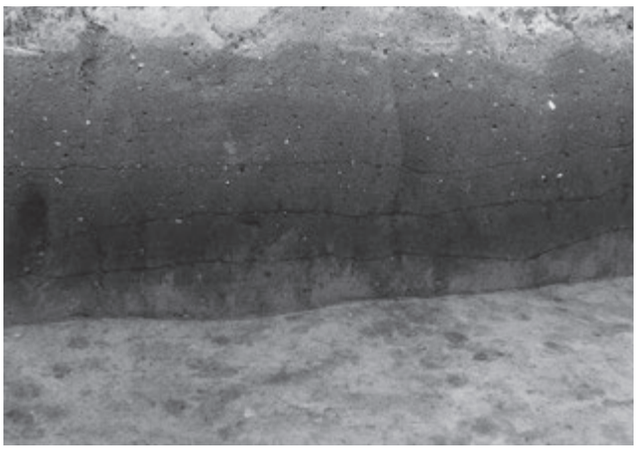
写　真　図　版

遠景（北から）

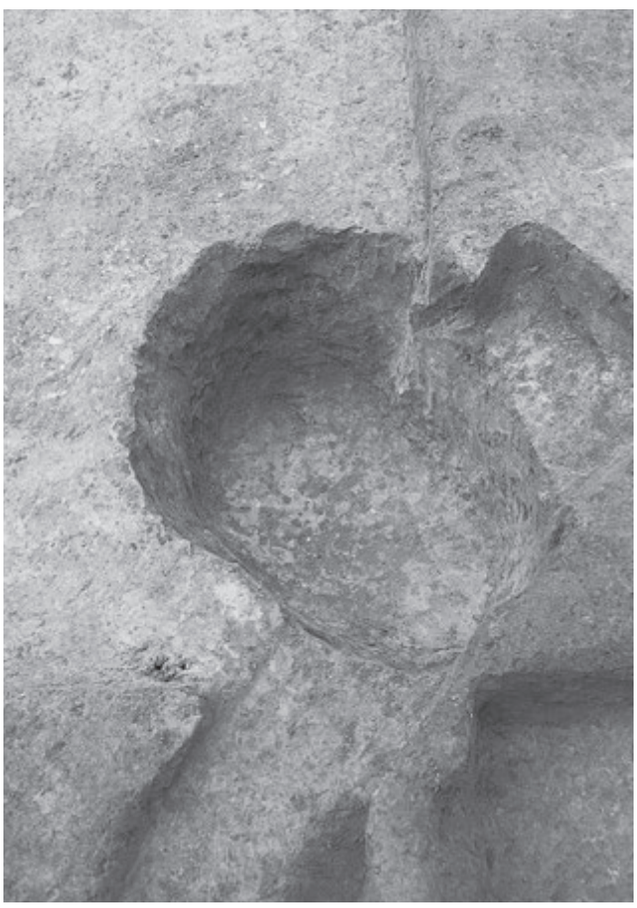
遠景（東から）

遠景

図版2

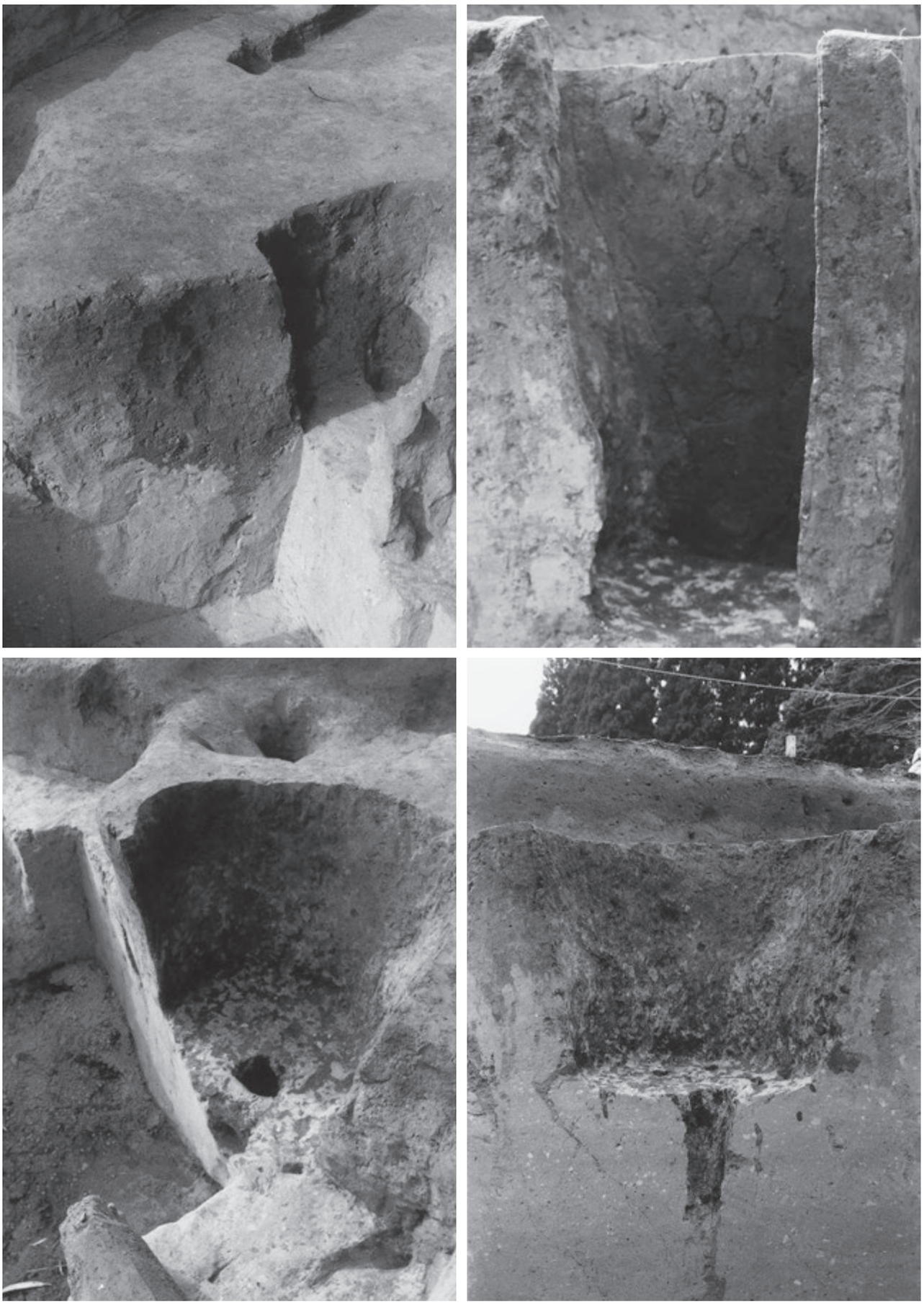


土層

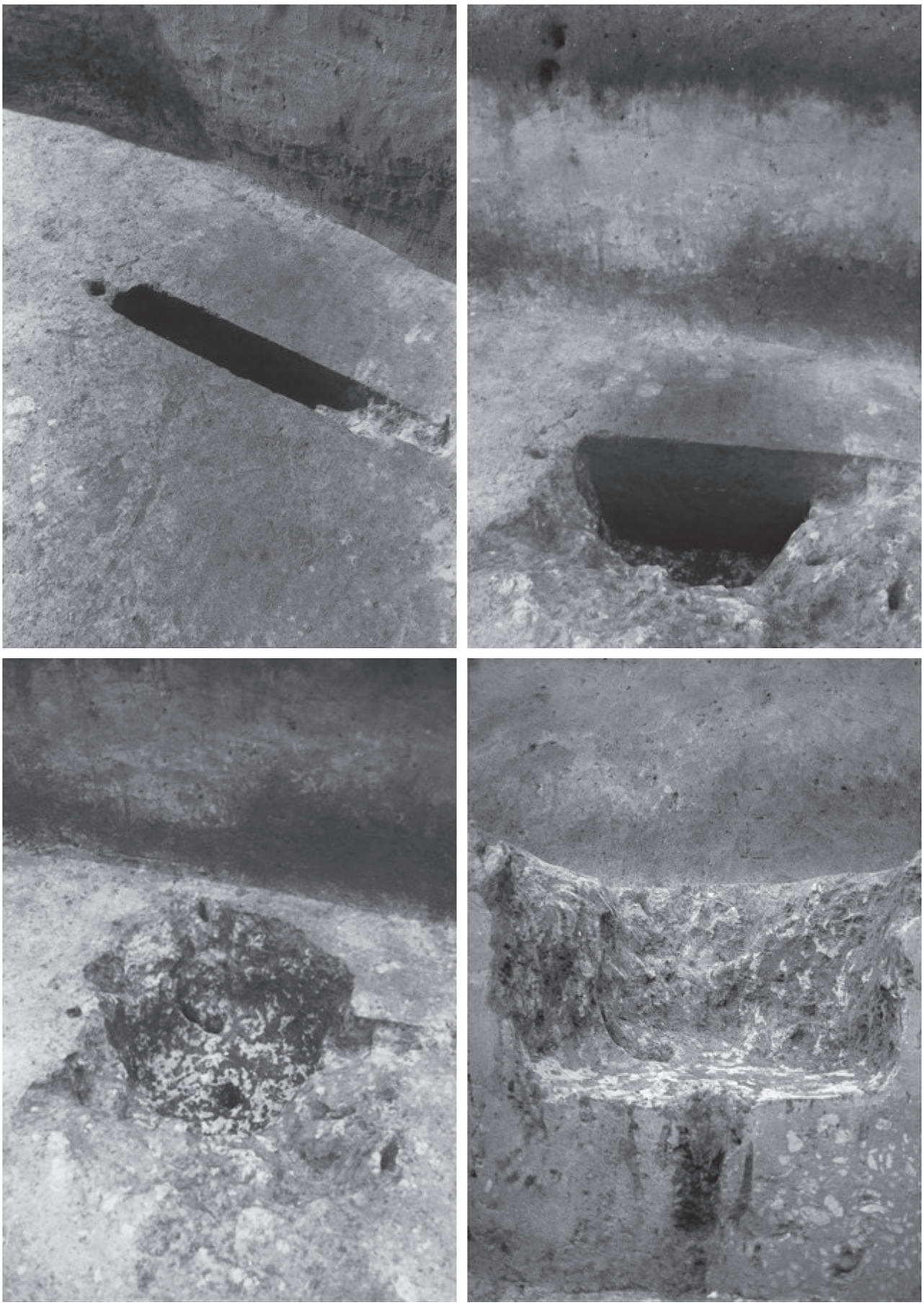


旧石器時代～縄文草創期　落し穴１号

図版４

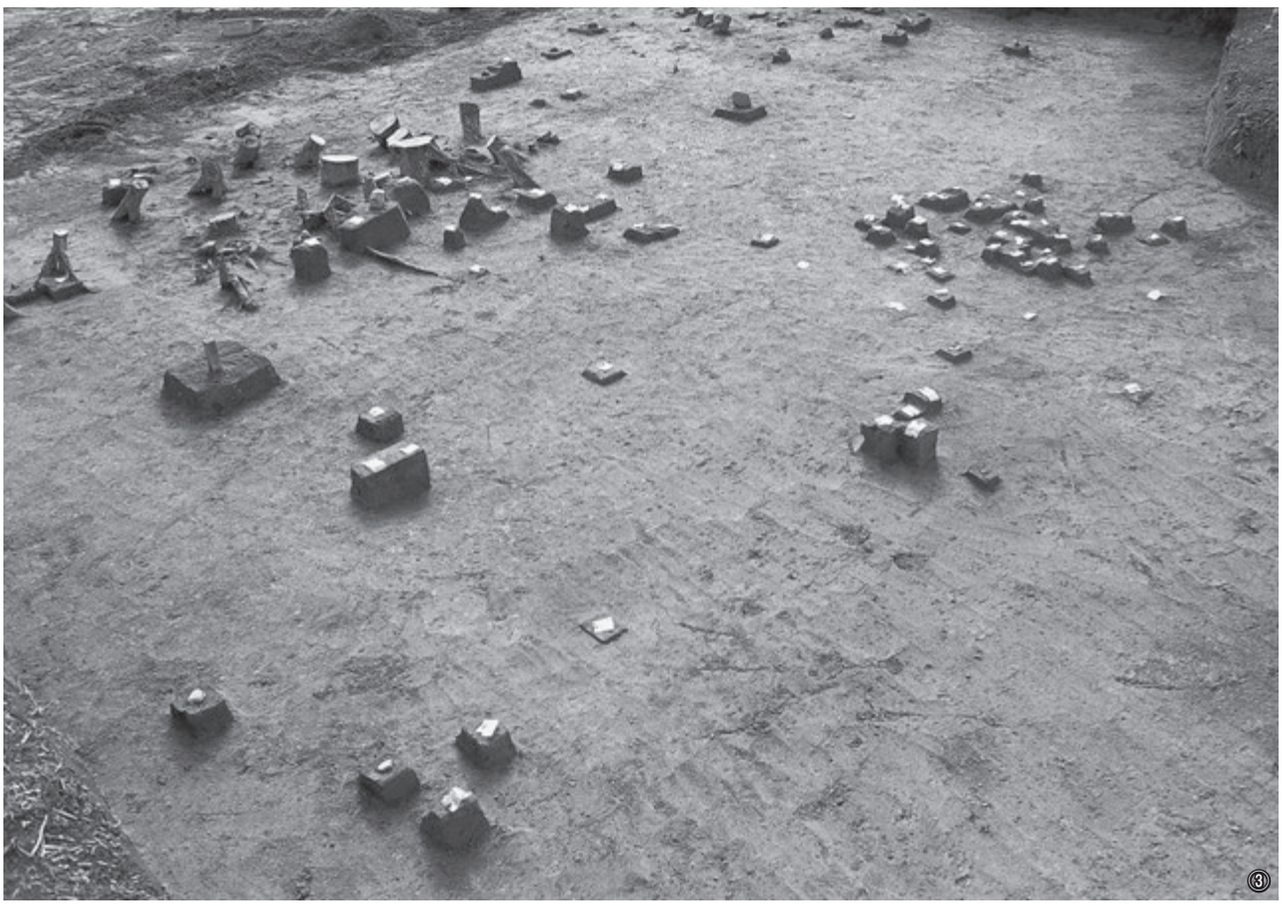


旧石器時代～縄文草創期　落し穴４号（１）



旧石器時代～縄文草創期　落し穴４号（２）

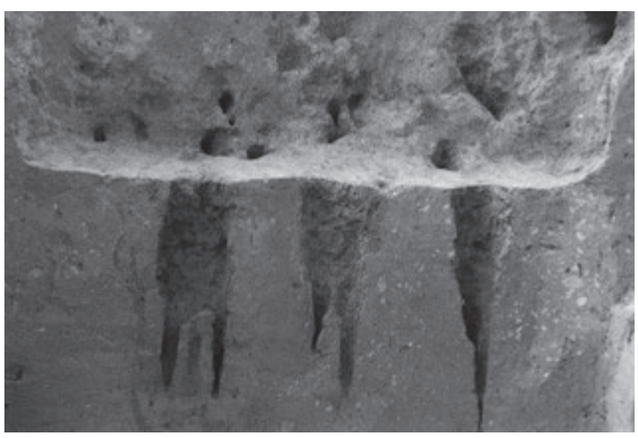
図版6



①礫群１号　②礫群２号　③第８号ブロック

縄文早期　落し穴２号

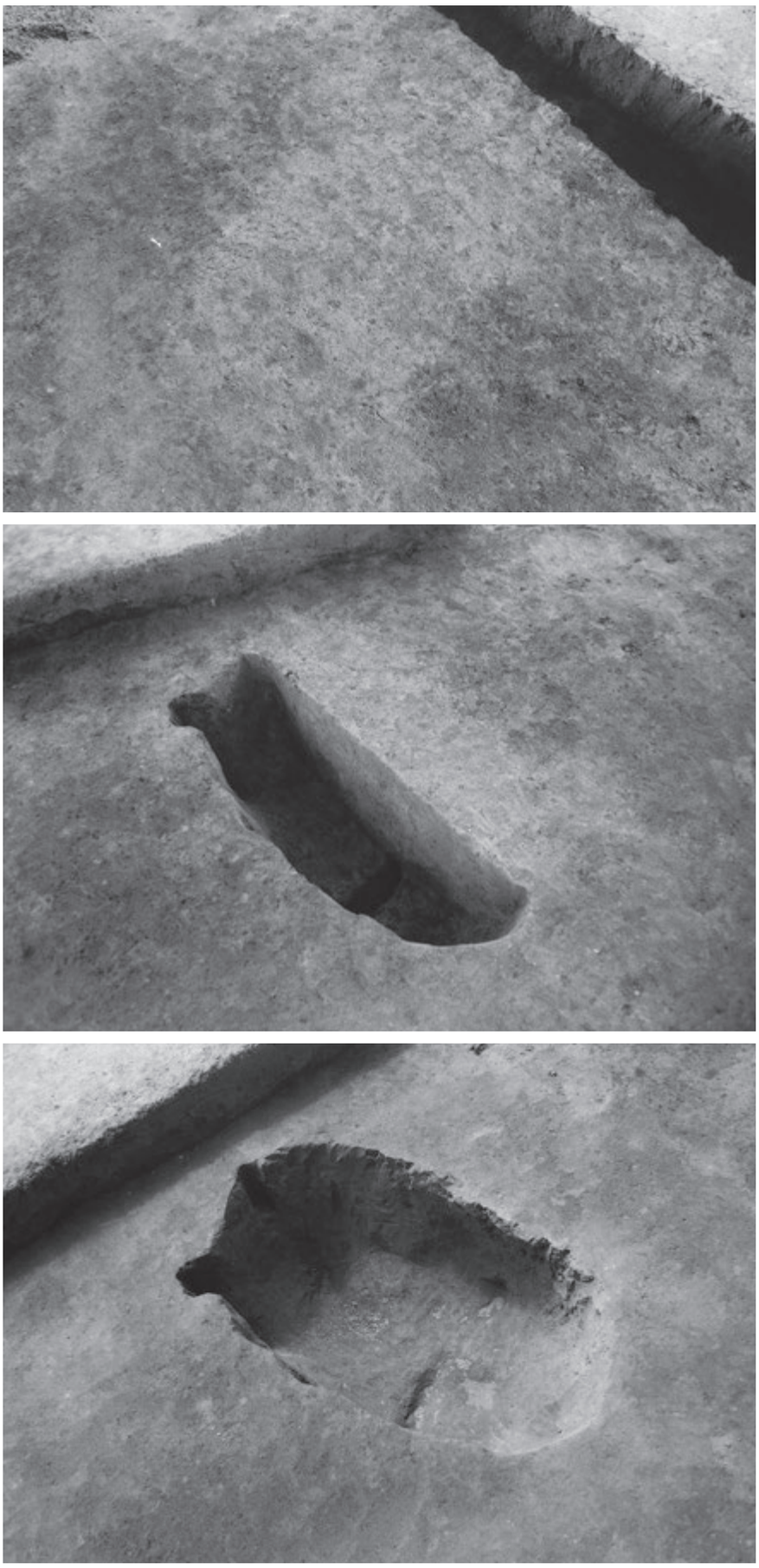
図版８



縄文早期　落し穴４号

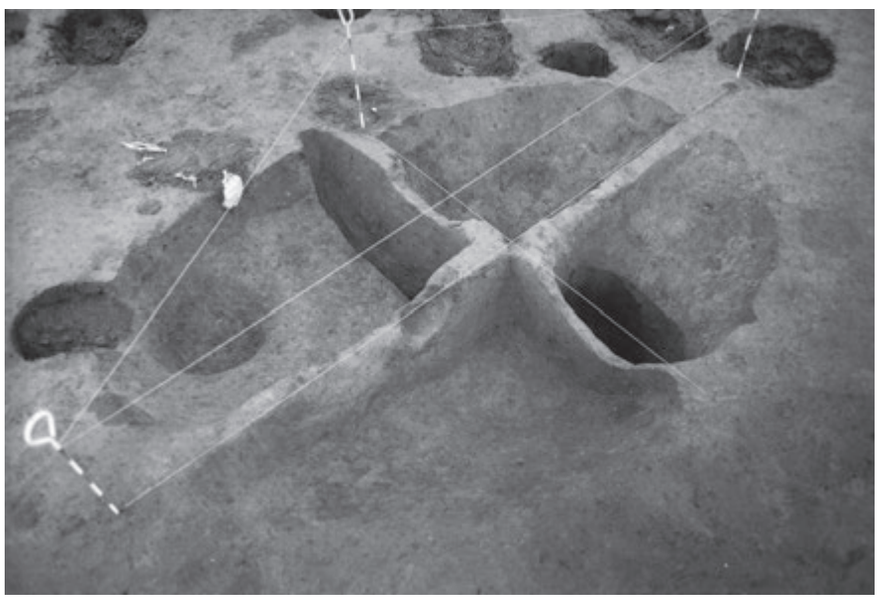
縄文早期　落し穴６号

図版10

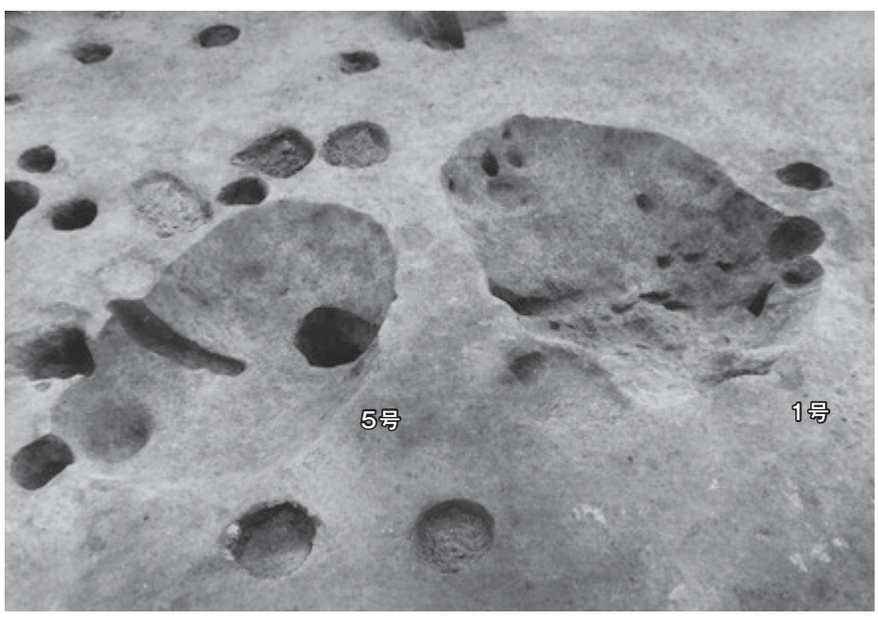


縄文早期　土坑２号

縄文早期土坑１号



縄文早期土坑５号



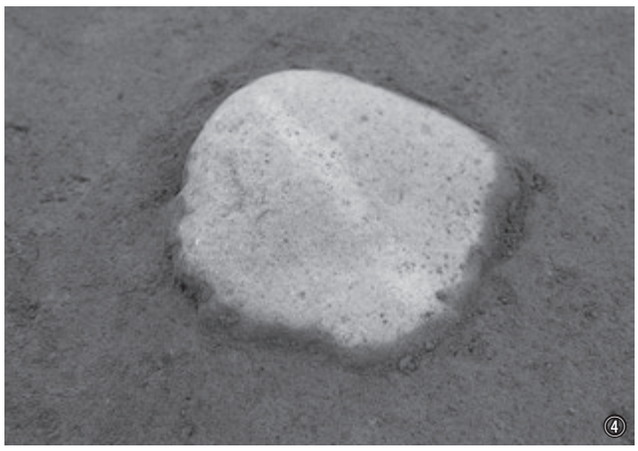
縄文早期土坑５号と土坑１号

縄文早期　土坑１・５号

①縄文早期土坑７号　②土坑４号　③土坑８号　④土坑３号　⑤土坑４号　⑥土坑８号

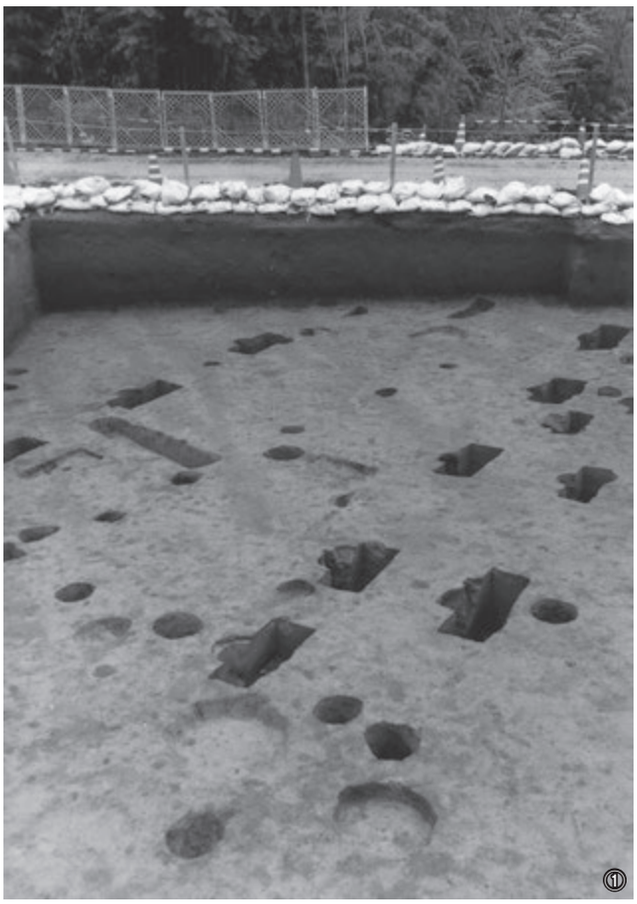
①縄文時代早期土坑７号　②土坑３号　③遺構検出風景

①縄文早期集石２号　②同断面

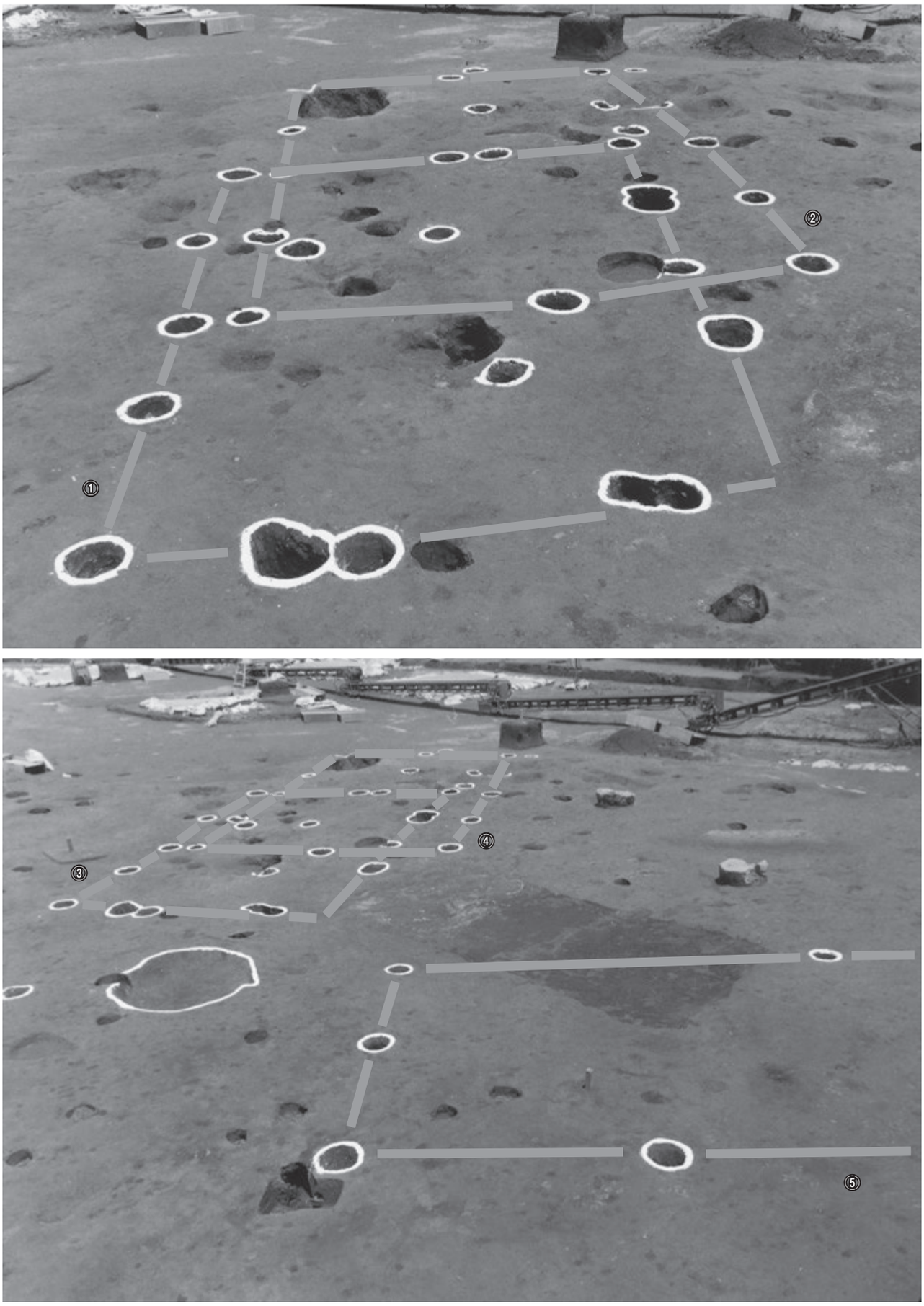


①②縄文早期ブロック　③④⑤⑥石皿出土状況

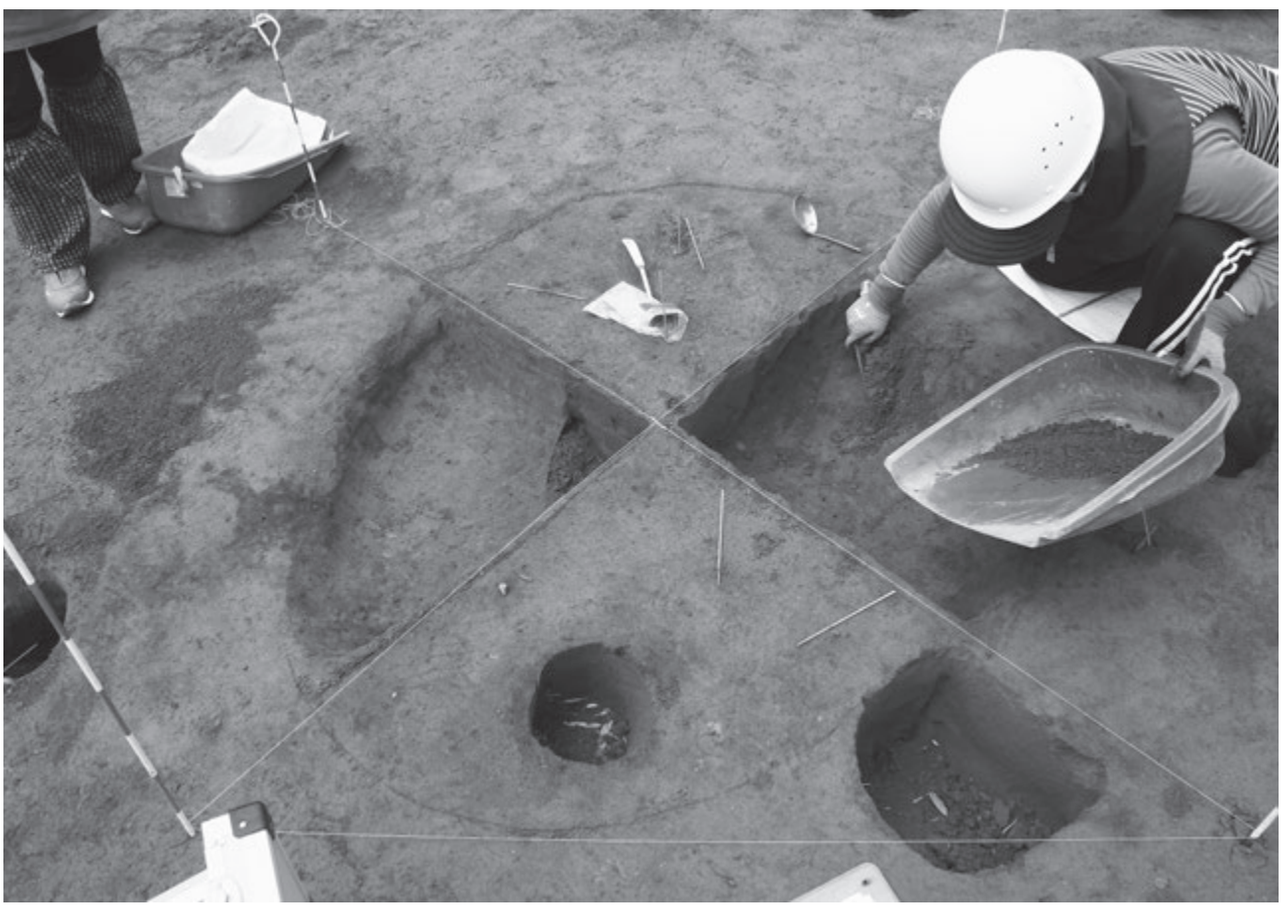
図版16



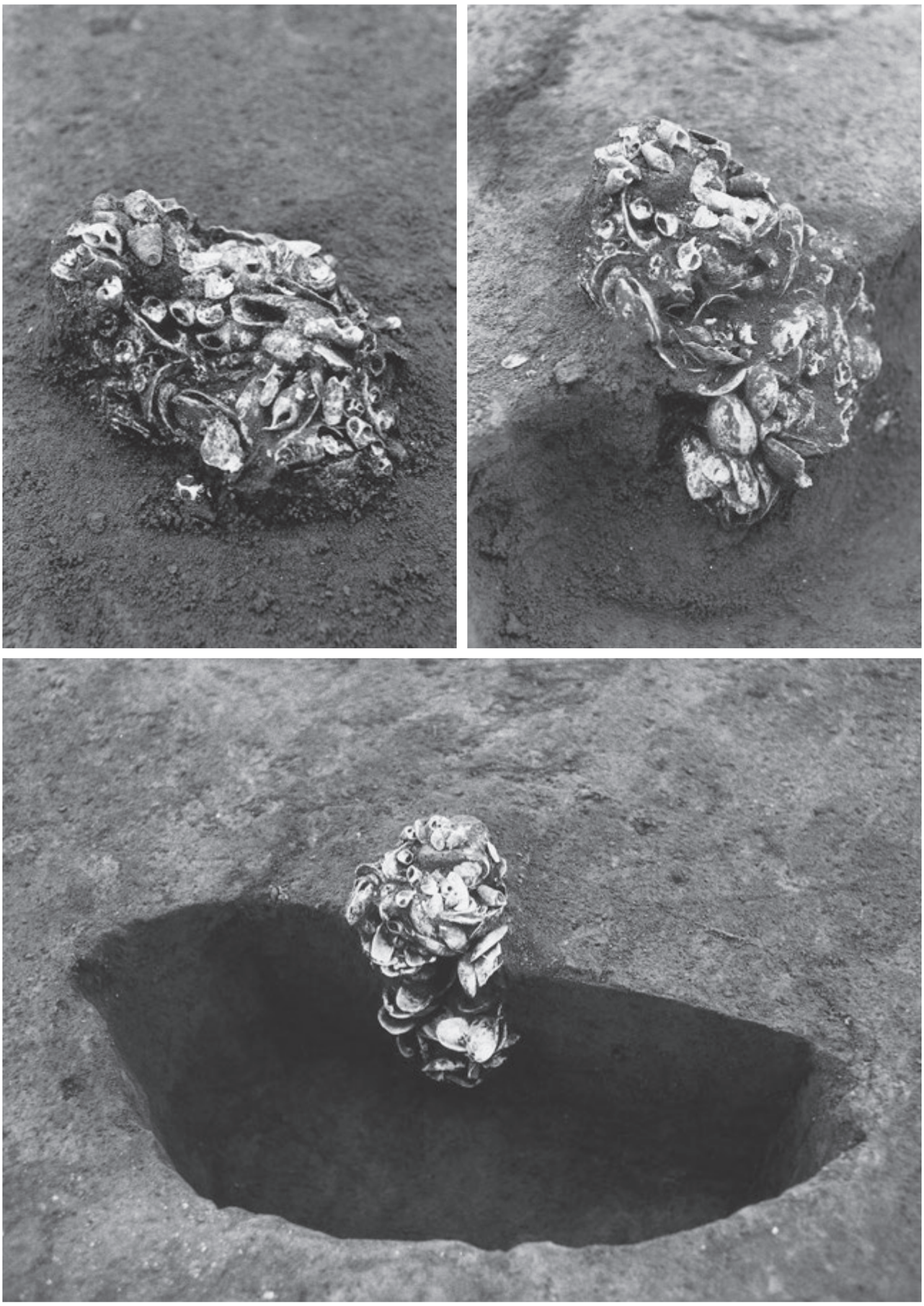
①古代畝溝上面プラン検出状況　②③検出状況



①③古代掘立柱建物跡２号　②④同２号　⑤同３号



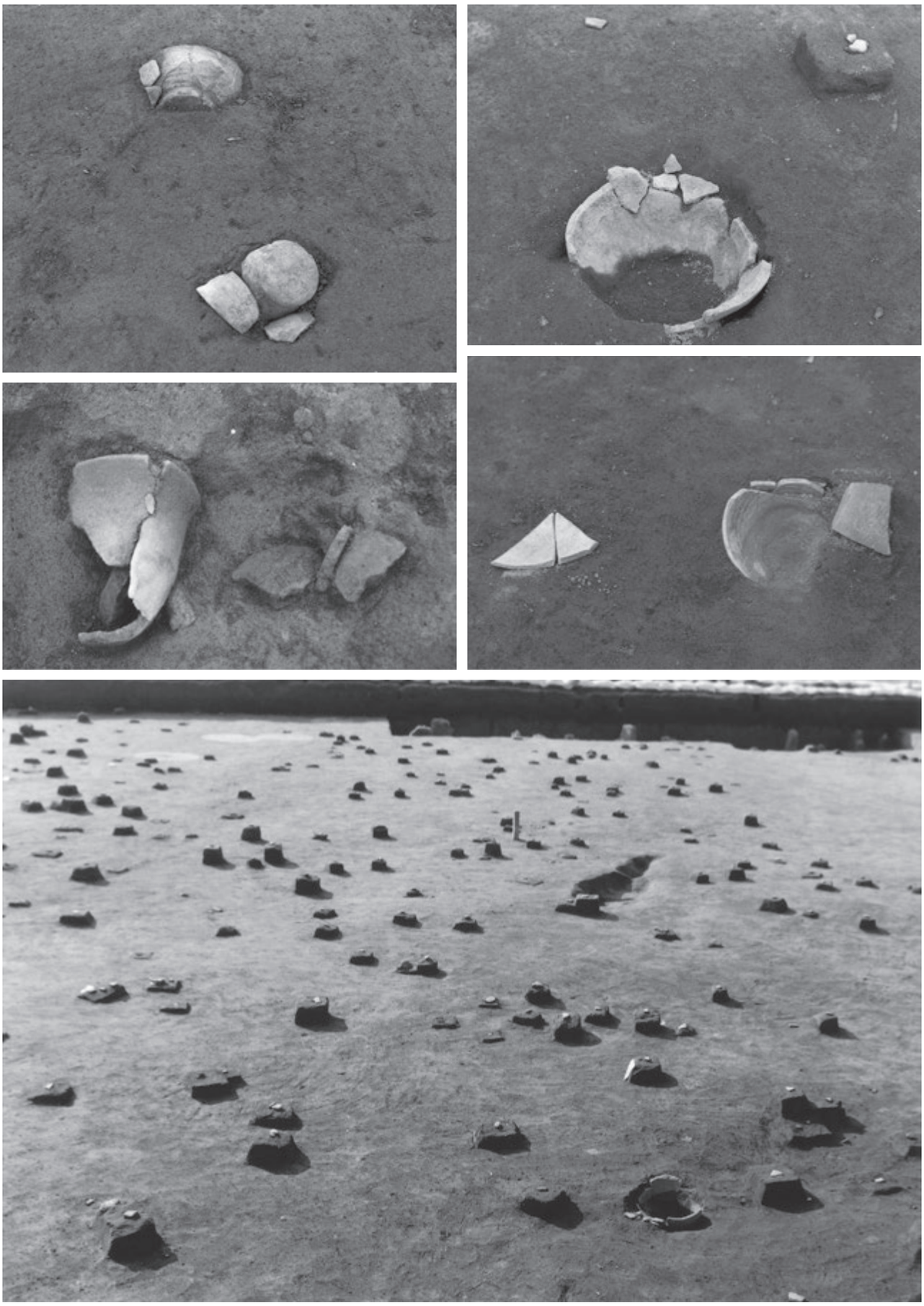
古代焼土遺構及び検出風景



古代土坑５号（貝殻検出状況）

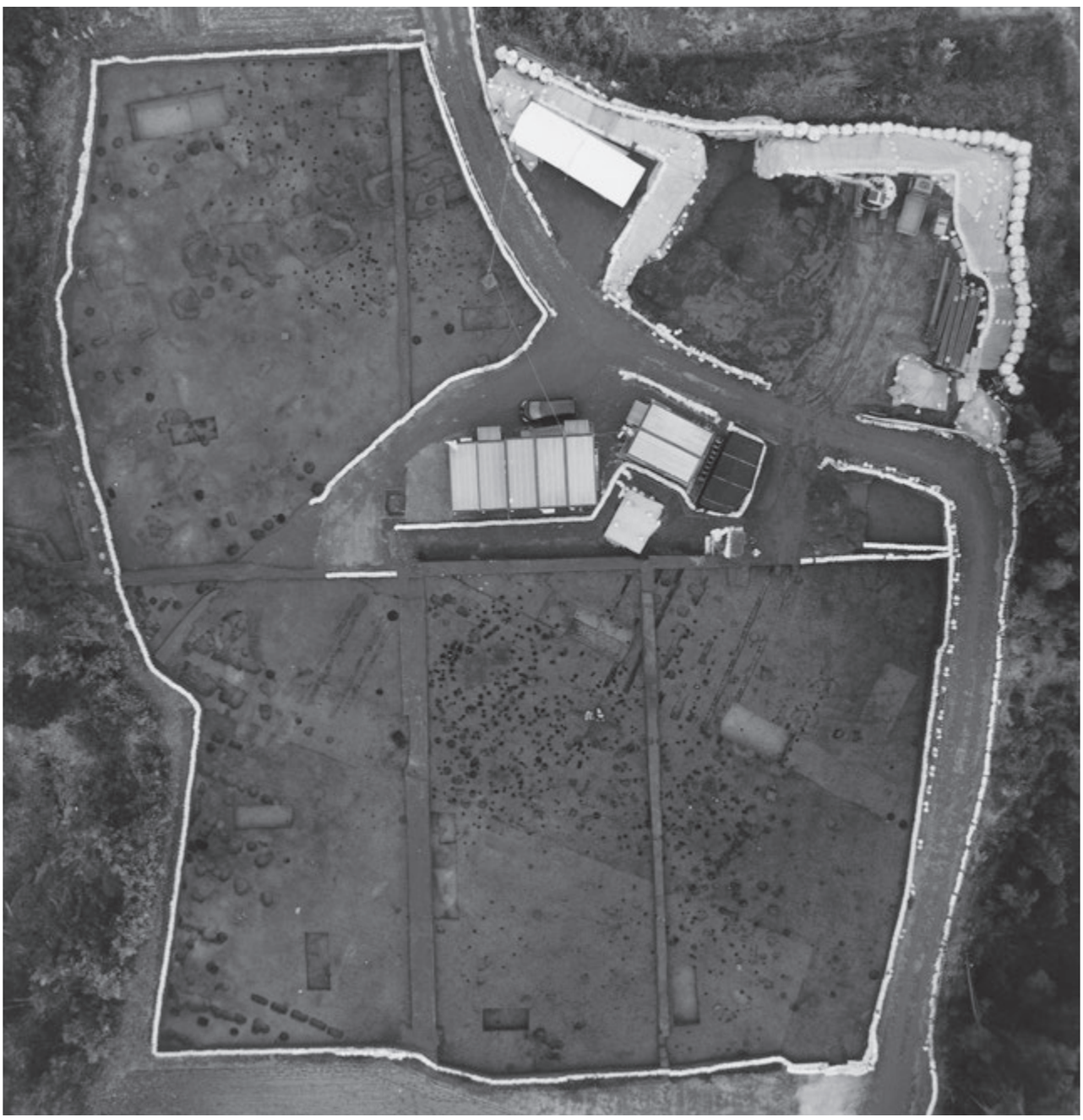
図版20

古代土坑５号完掘状況及び検出風景

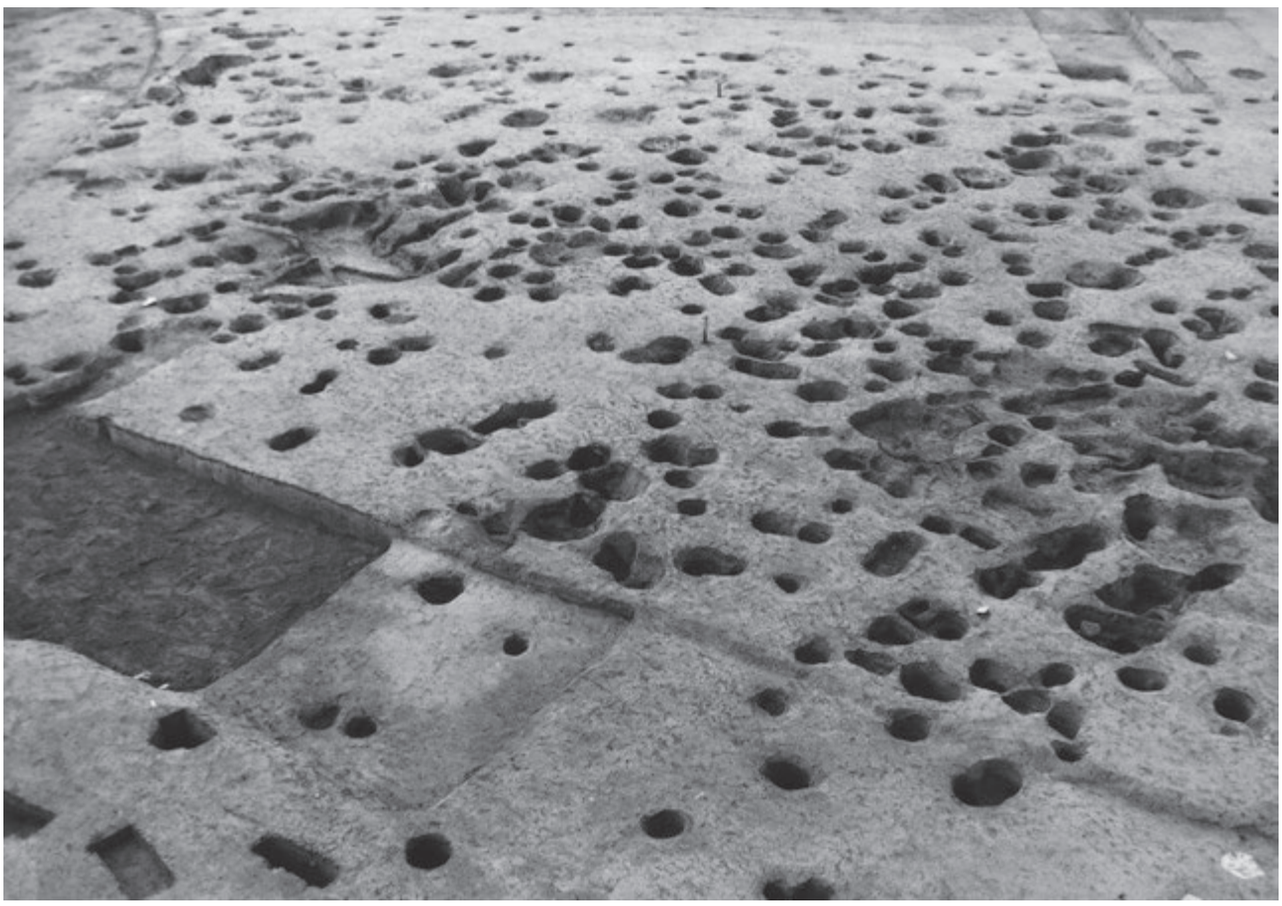


古代遺物出土状況

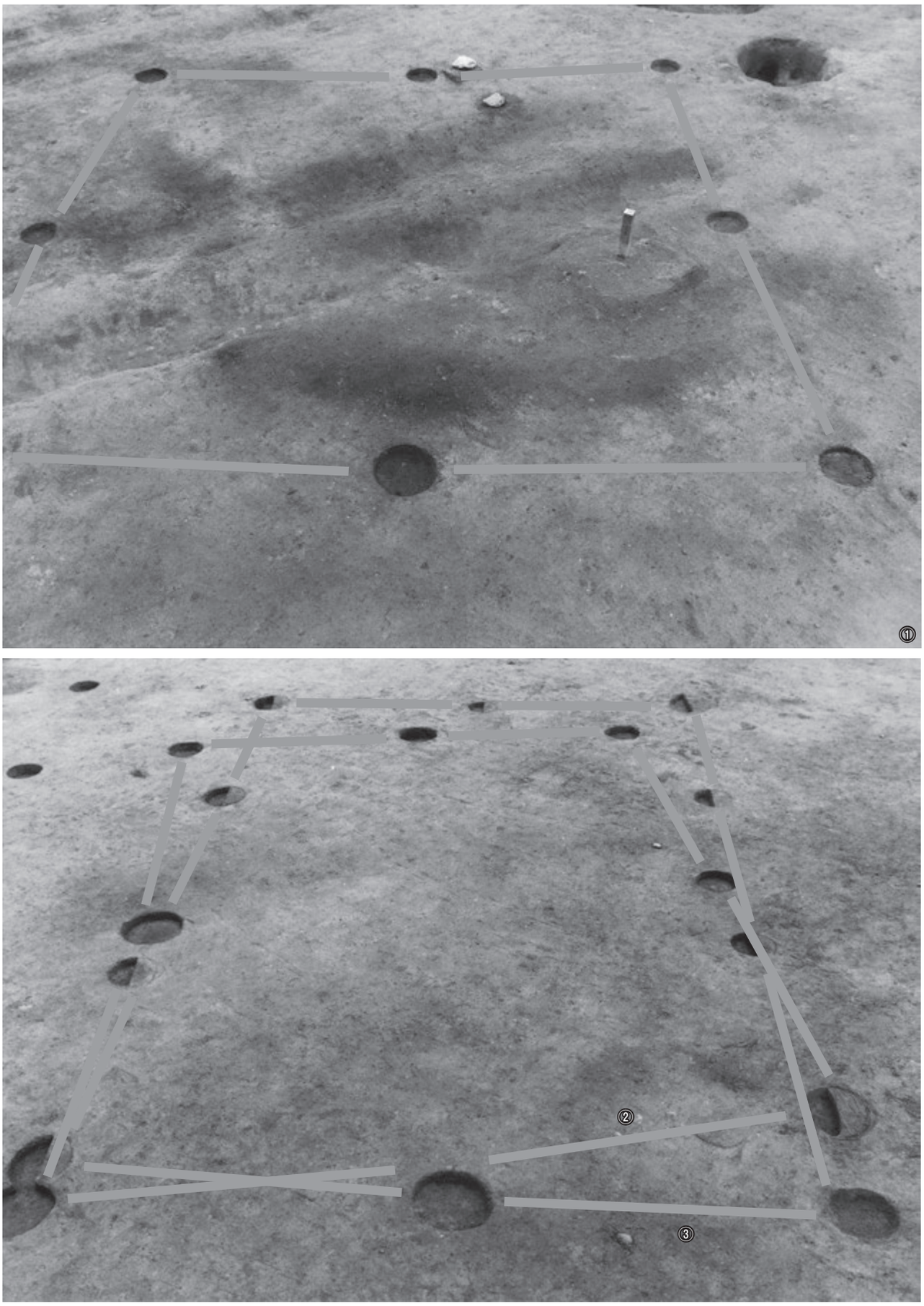
図版22



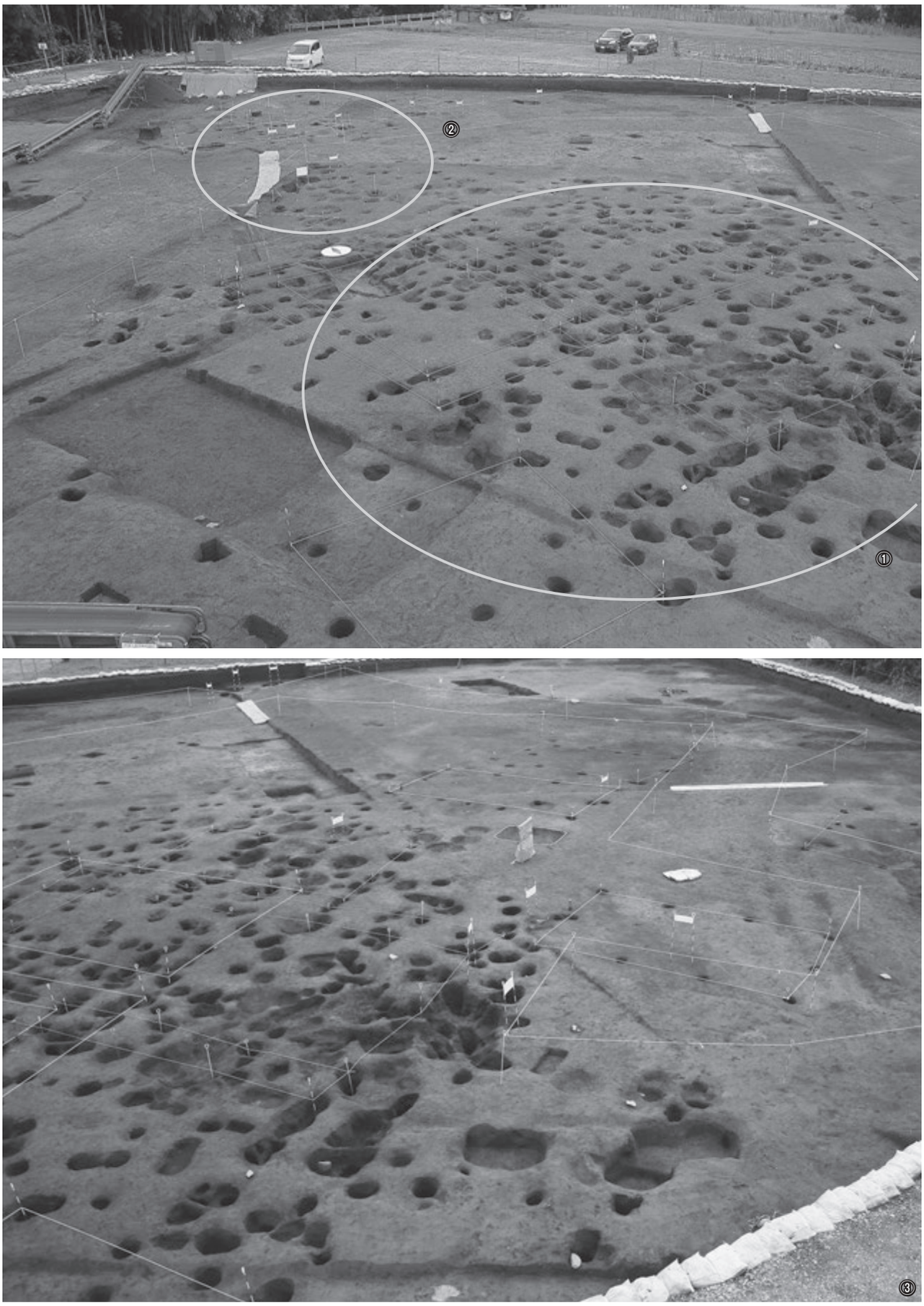
中世ピット検出風景及びピット検出状況



中世ピット検出状況

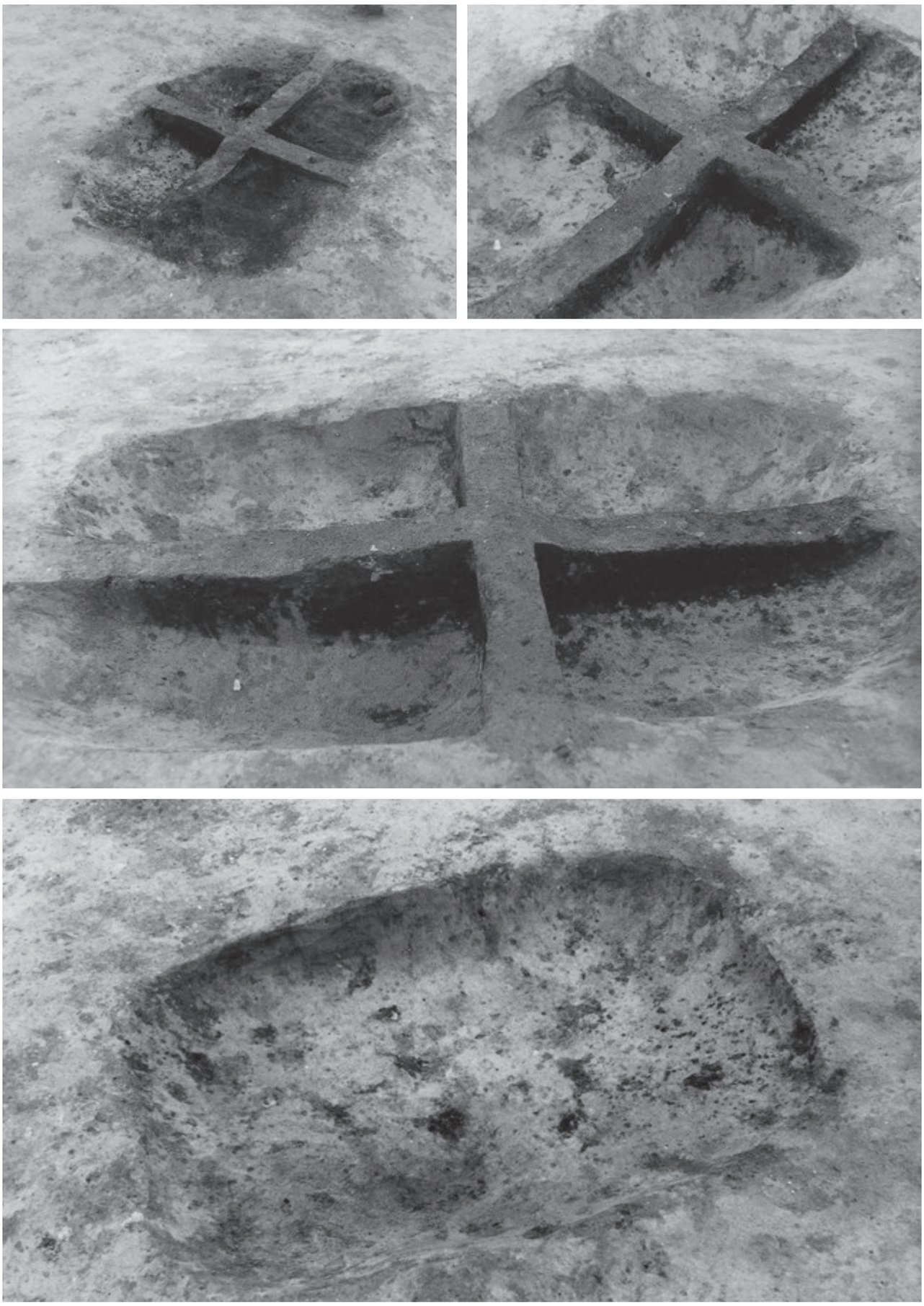


①中世掘立柱建物跡15号　②同５号　③同13号



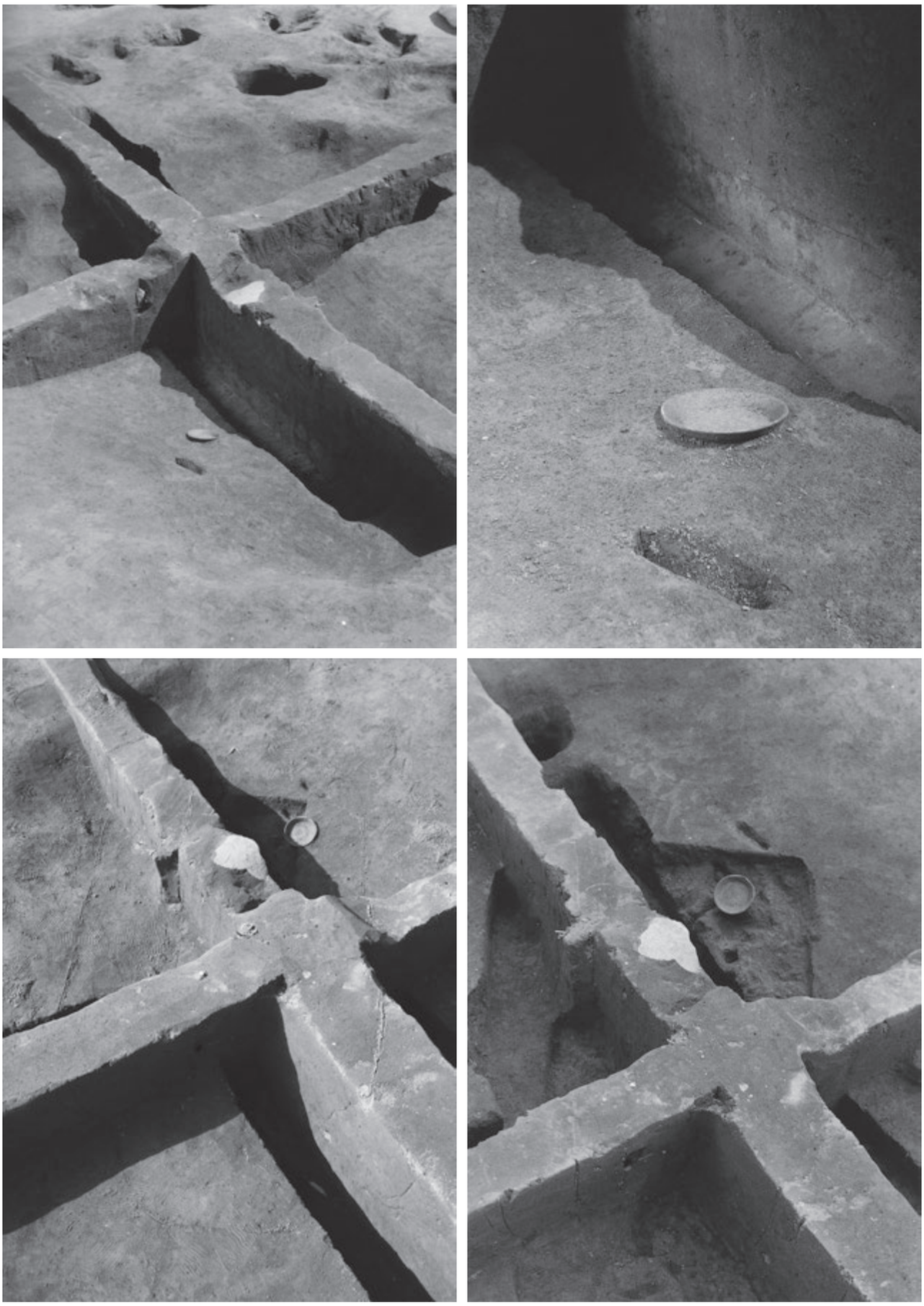
①中世掘立柱建物跡Ａ群　②同Ｂ群　③同Ａ群

図版26

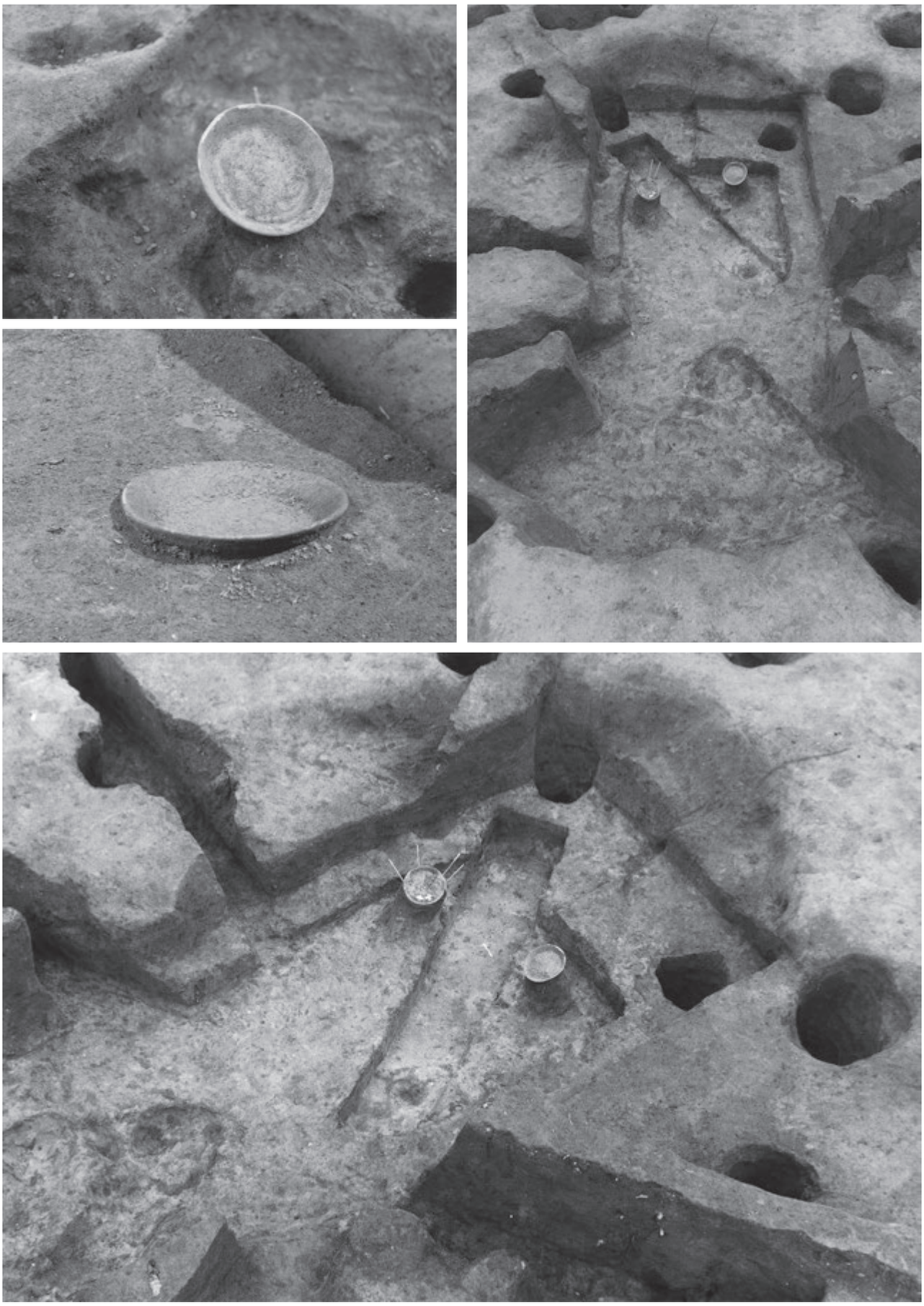


1号墓

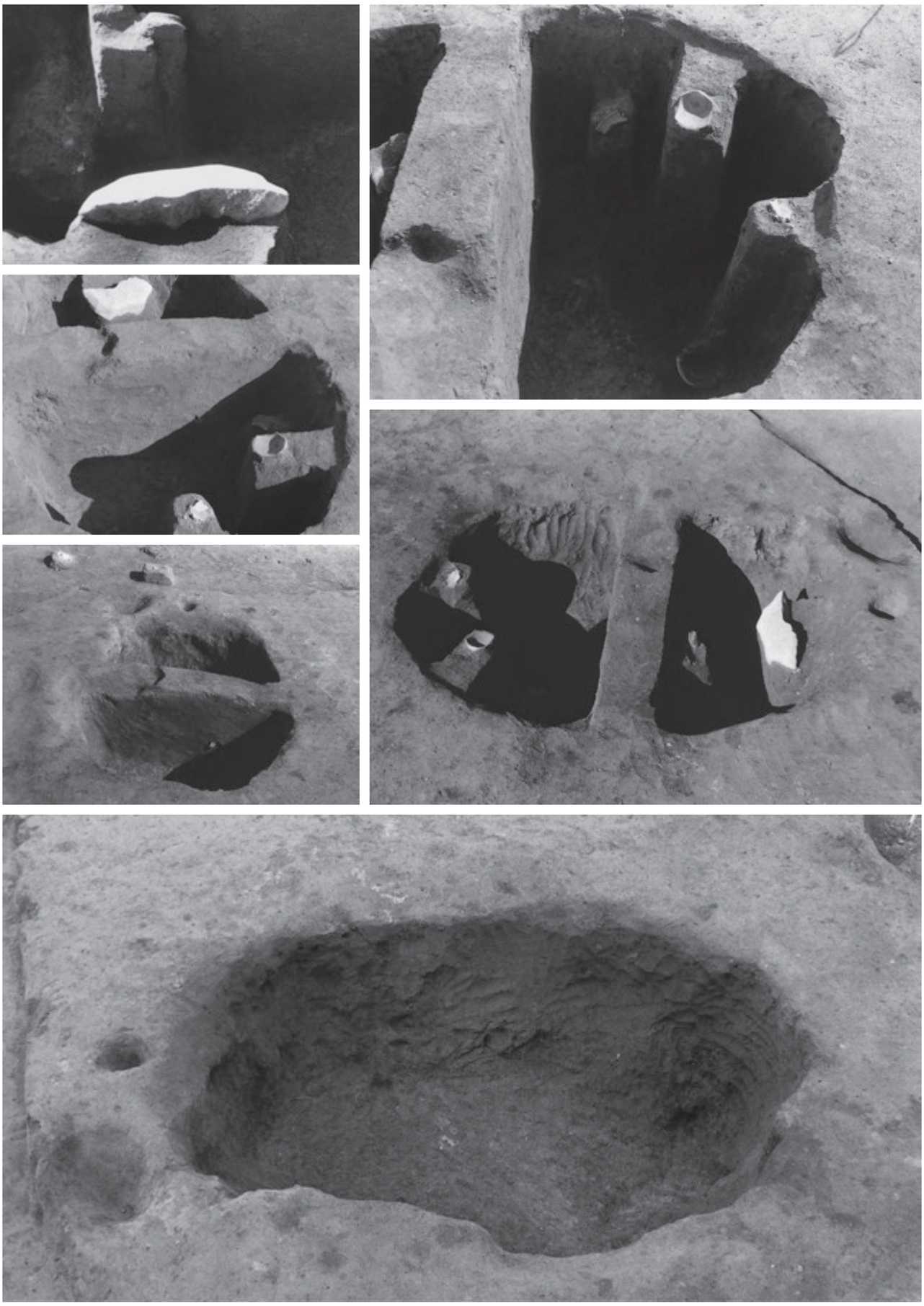
2号墓（1）



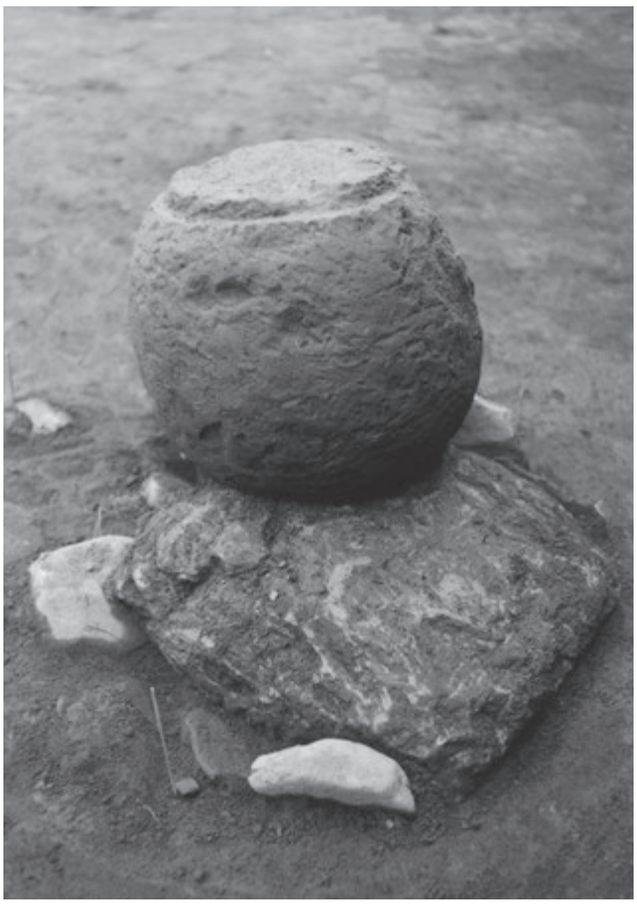
2号墓（2）



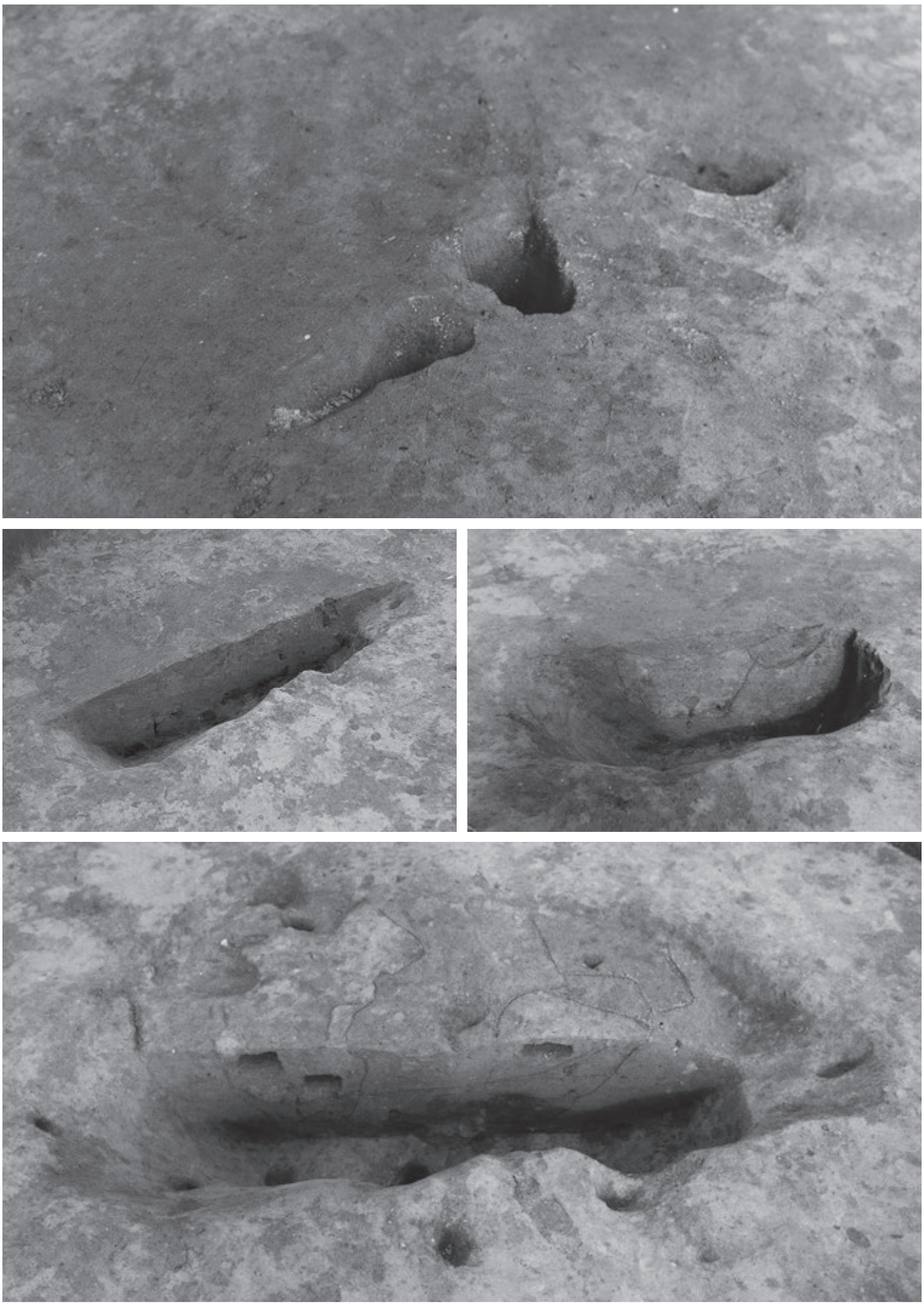
2号墓（3）



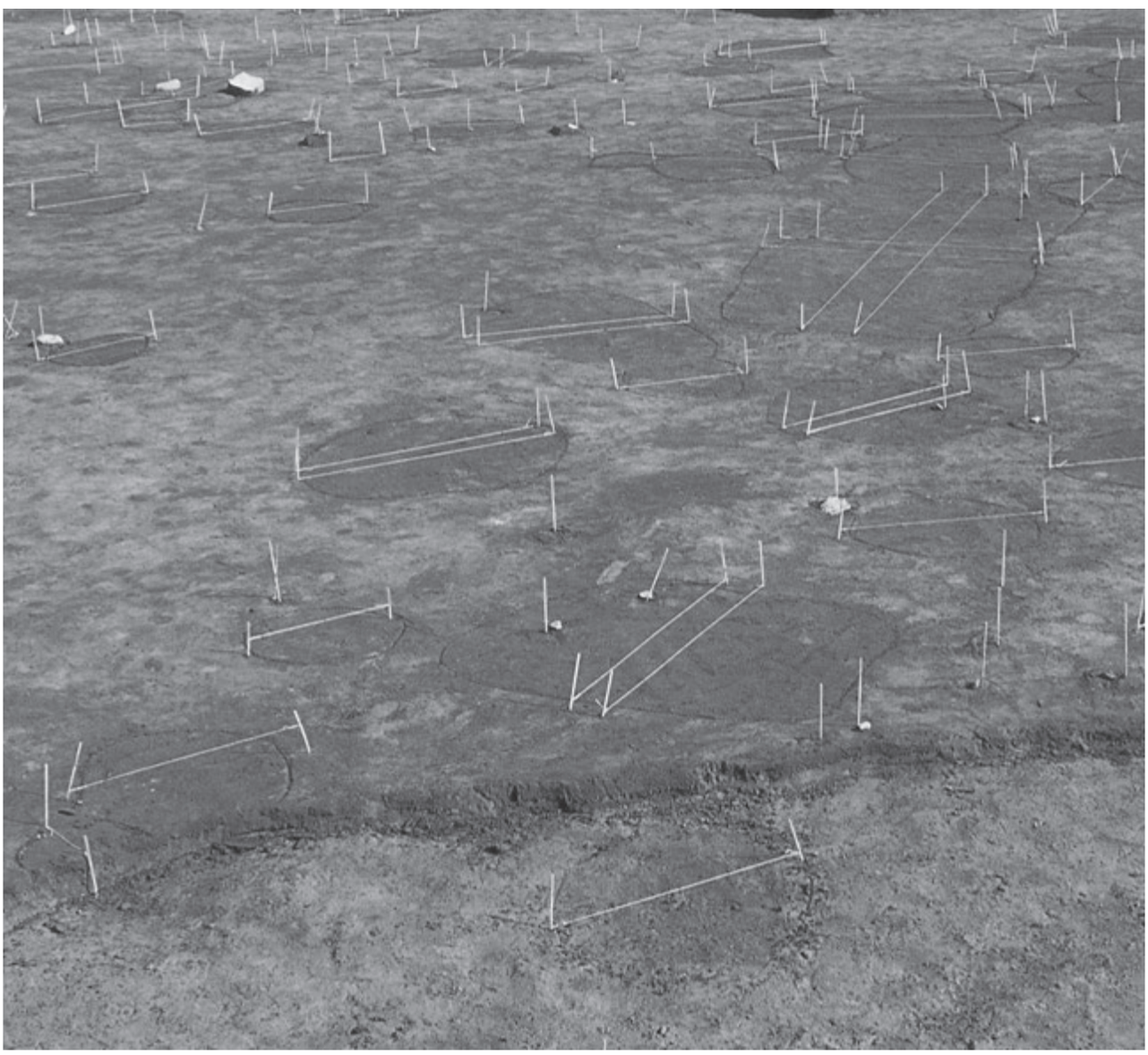
3号墓



4号墓



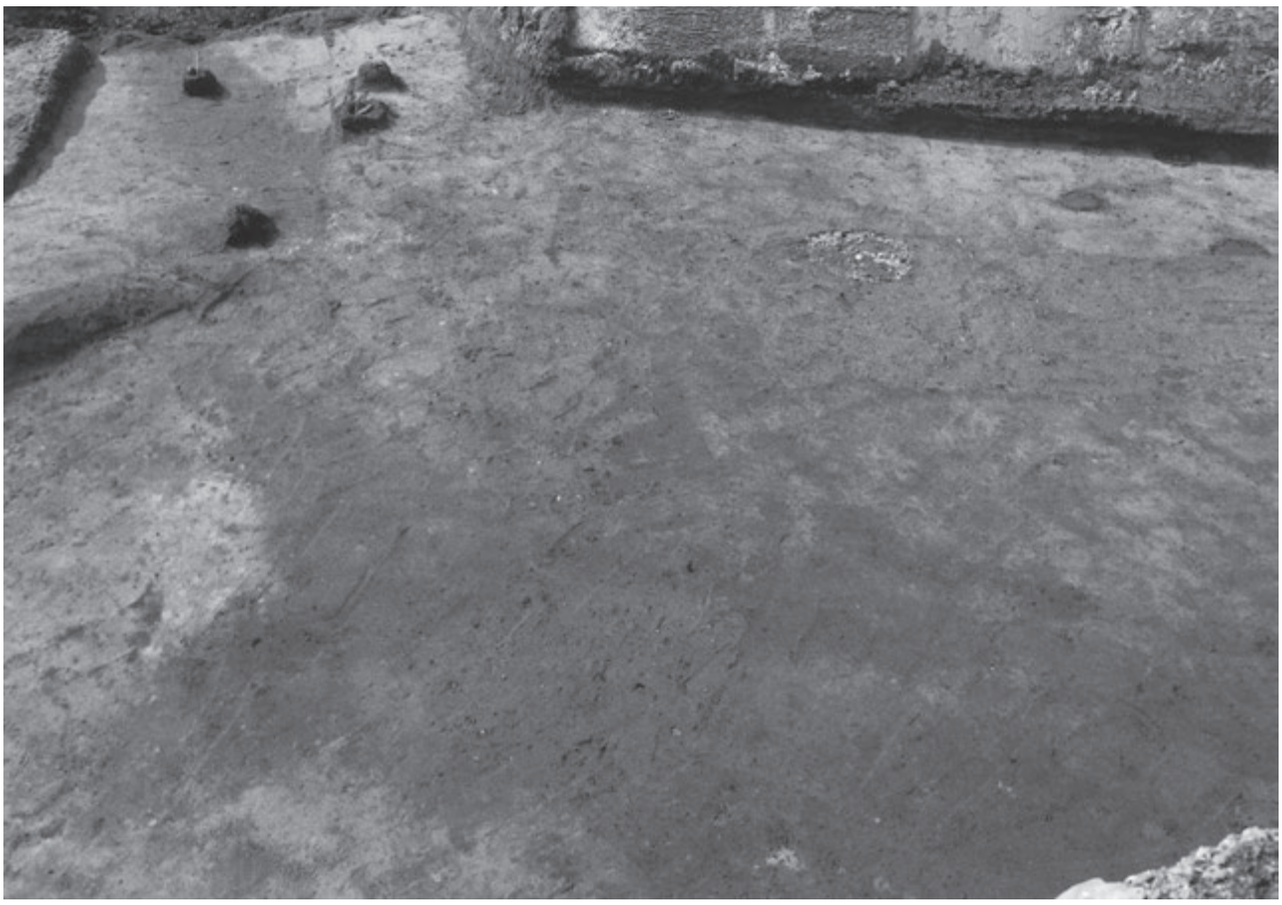
４号墓平面プランと断面



中世土坑群（1）

図版34

中世土坑群（2）

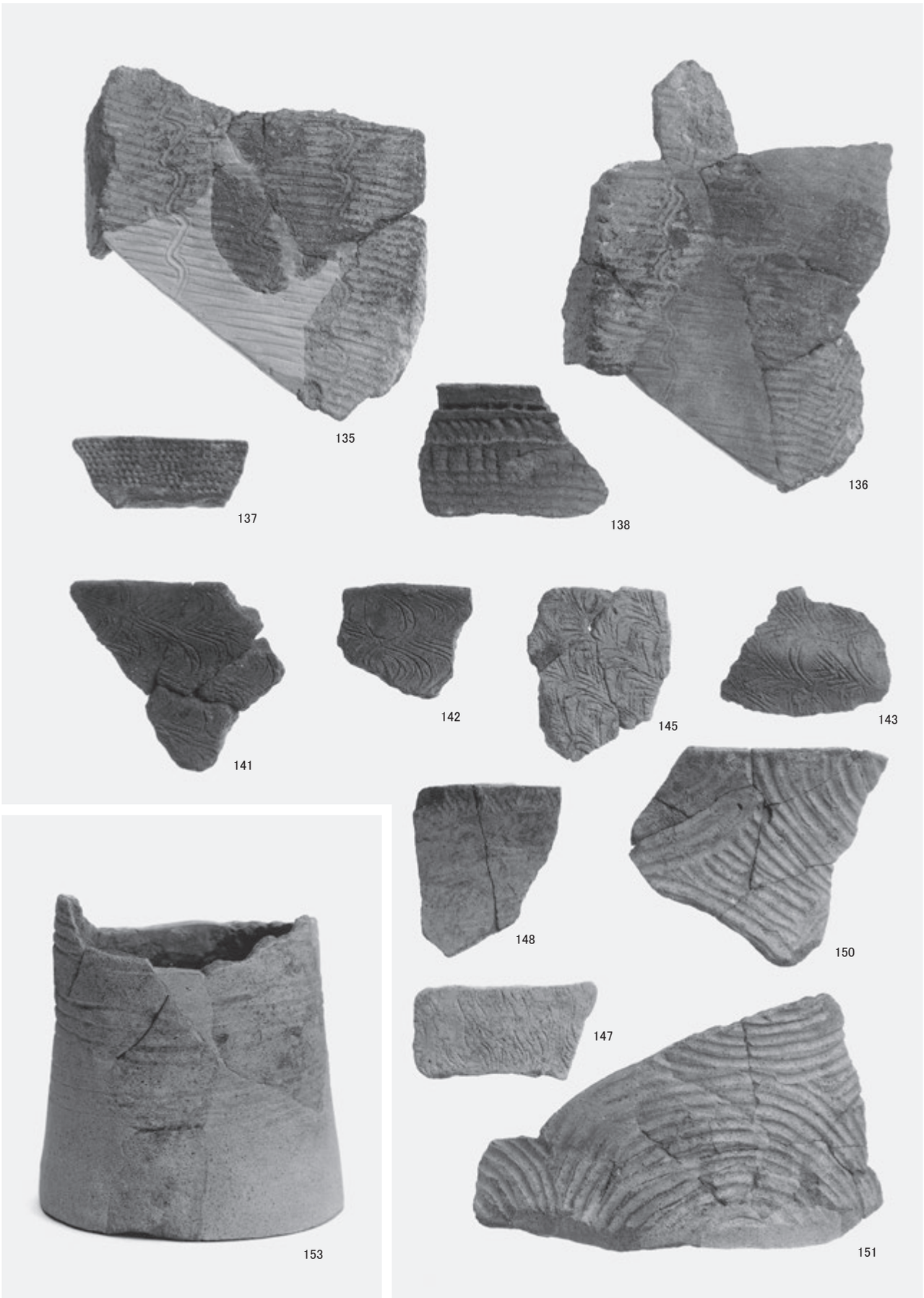


中世溝状遺構平面プランと完掘状況

現地説明会（1）

現地説明会（2）

旧石器時代～縄文時代草創期遺物



縄文時代早期の遺物（１）

183

184

土坑8号1

192

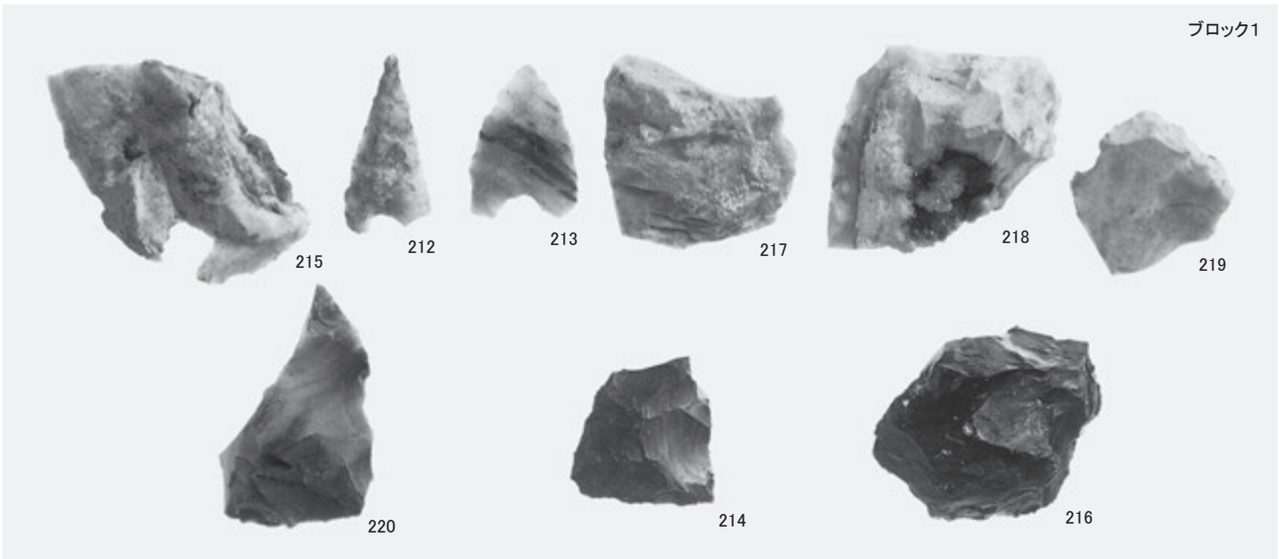
縄文時代早期の遺物（２）

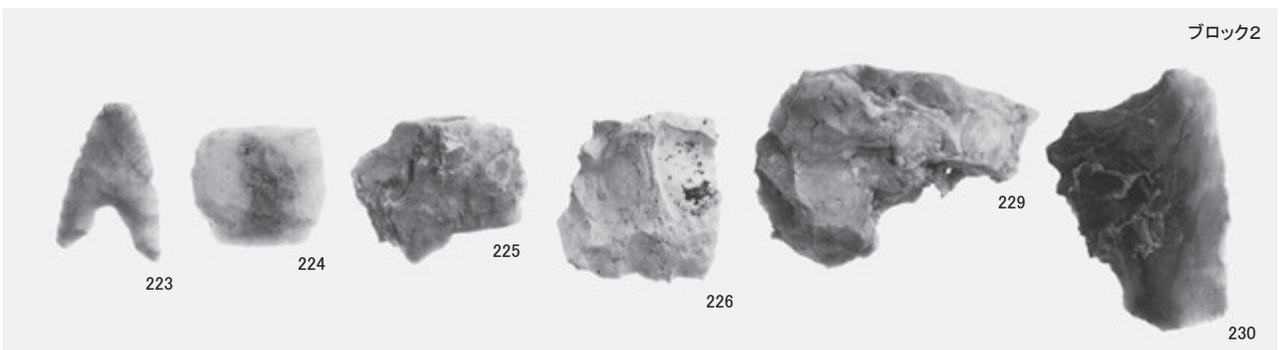
縄文時代早期の遺物（３）

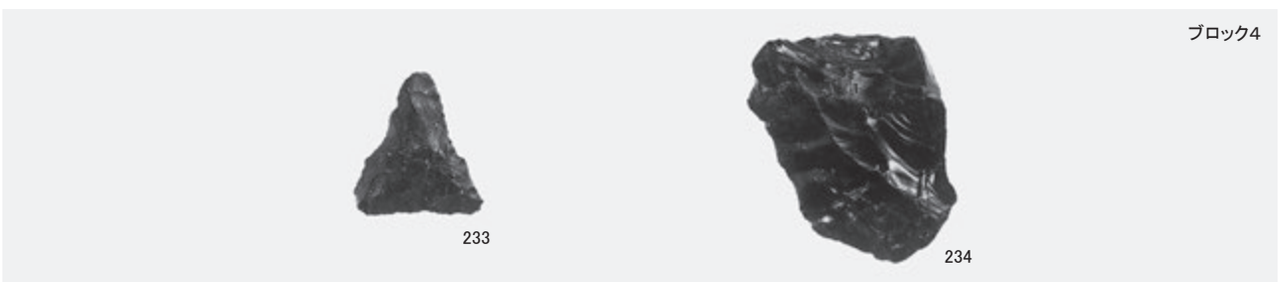
縄文時代早期の遺物（４）

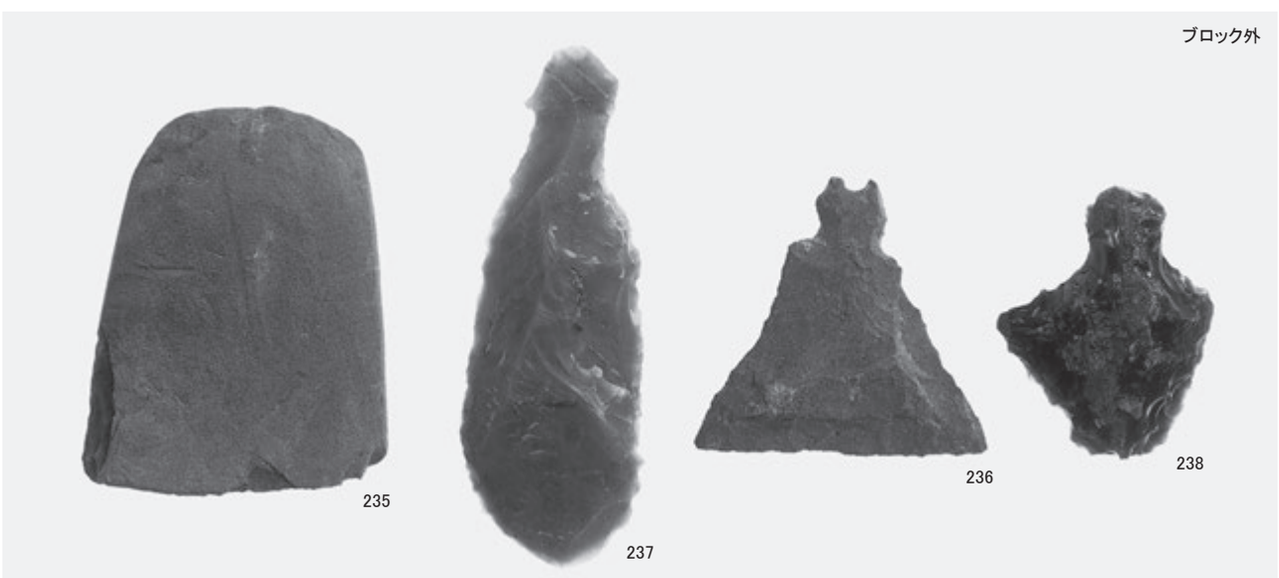
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
210
211

縄文時代早期の遺物（５）

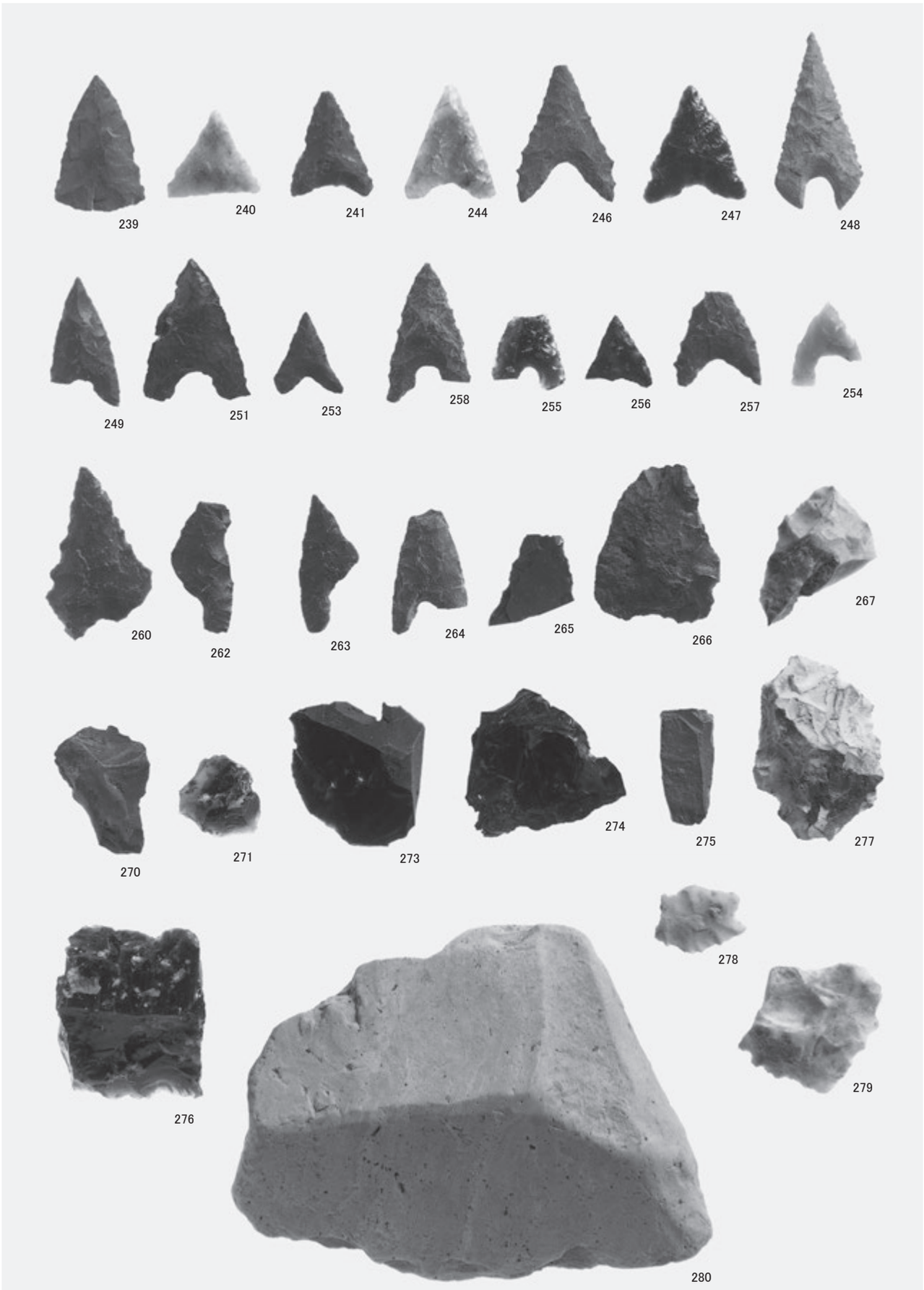

ブロック1
215
212
213
217
218
219
220
214
216


ブロック2
223
224
225
226
229
230

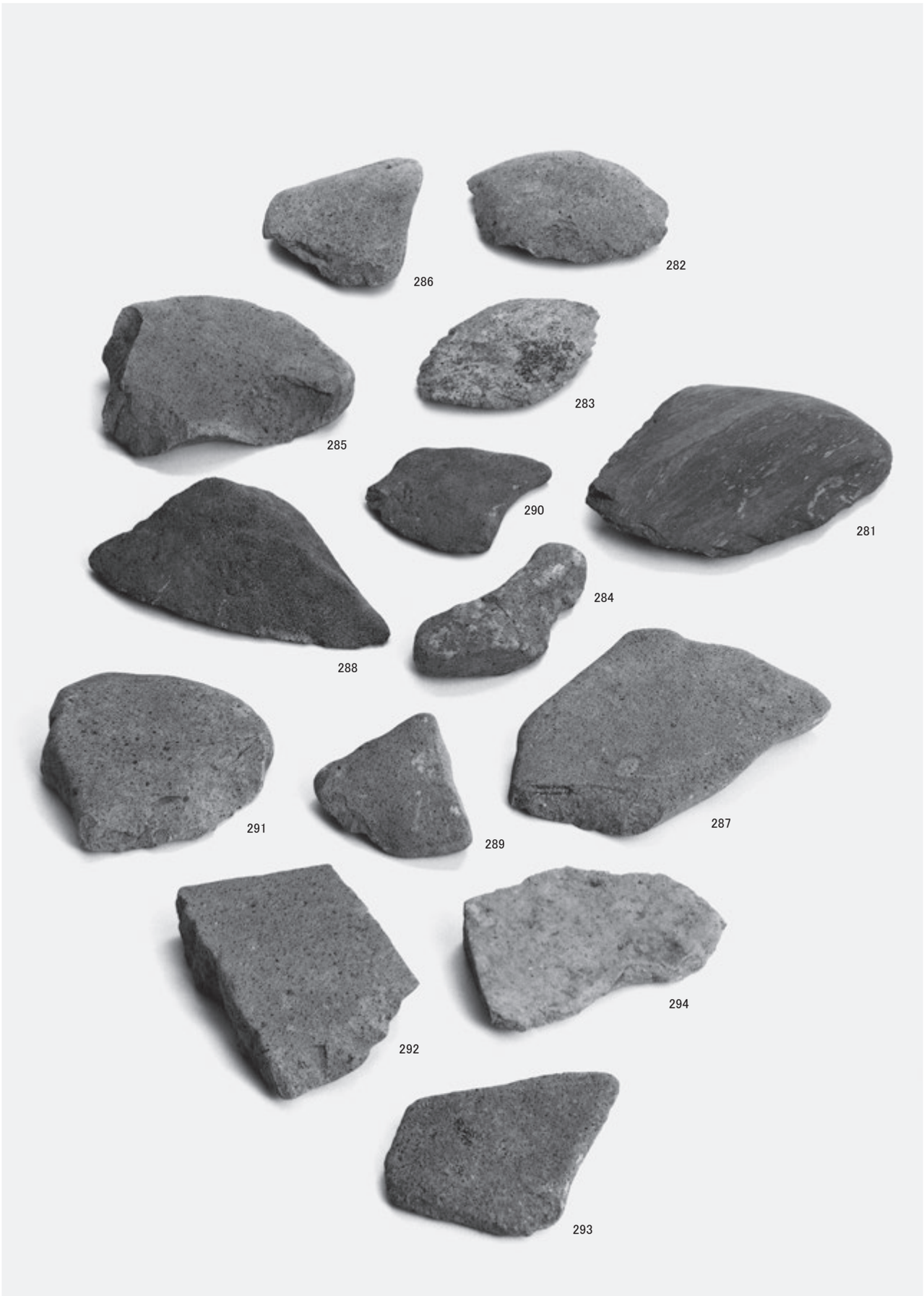

ブロック4
233
234


ブロック外
235
237
236
238

縄文時代早期石器（１）

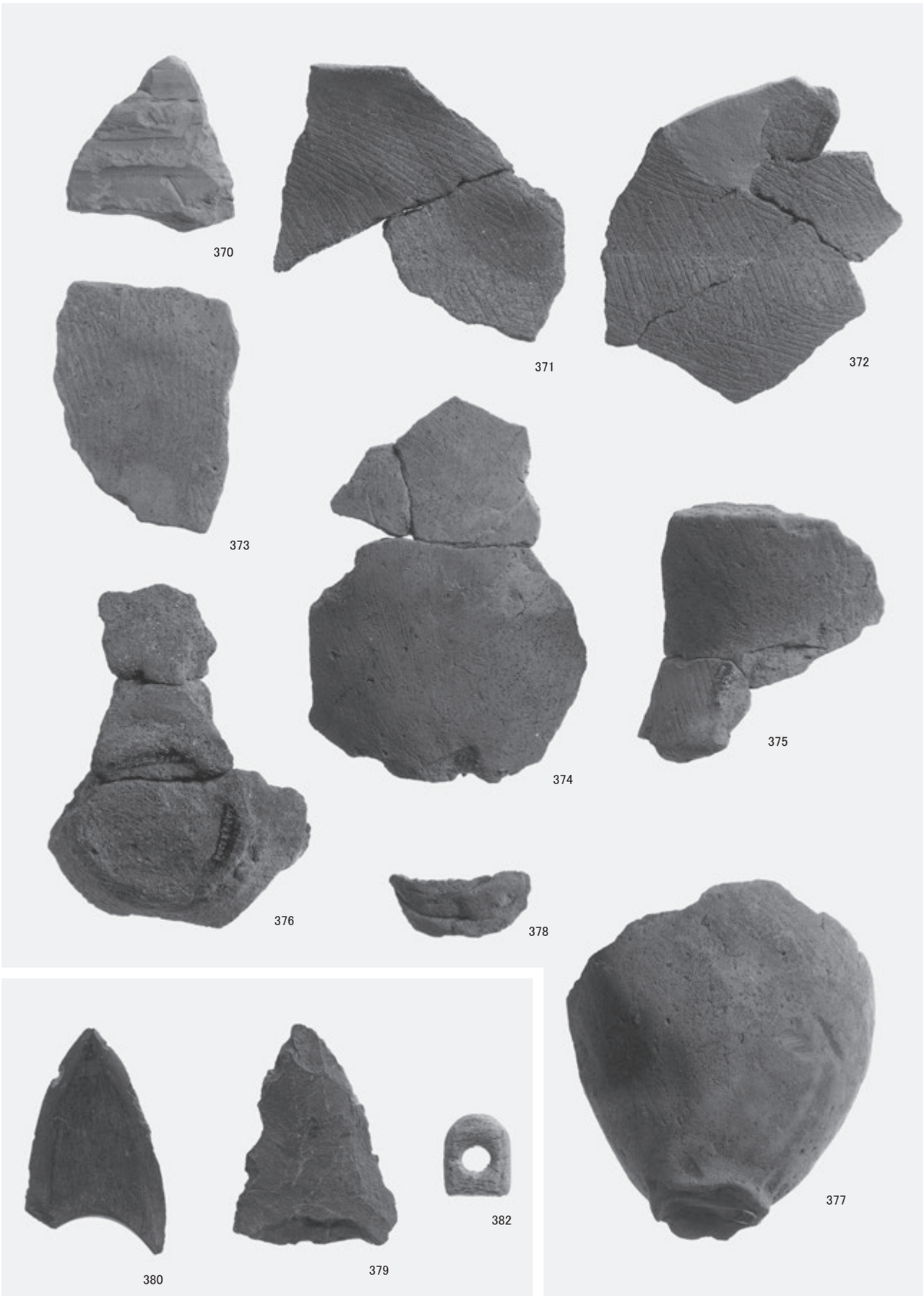

239
240
241
244
246
247
248
249
251
253
258
255
256
257
254
260
262
263
264
265
266
267
270
271
273
274
275
277
278
279
276
280

縄文時代早期石器（２）

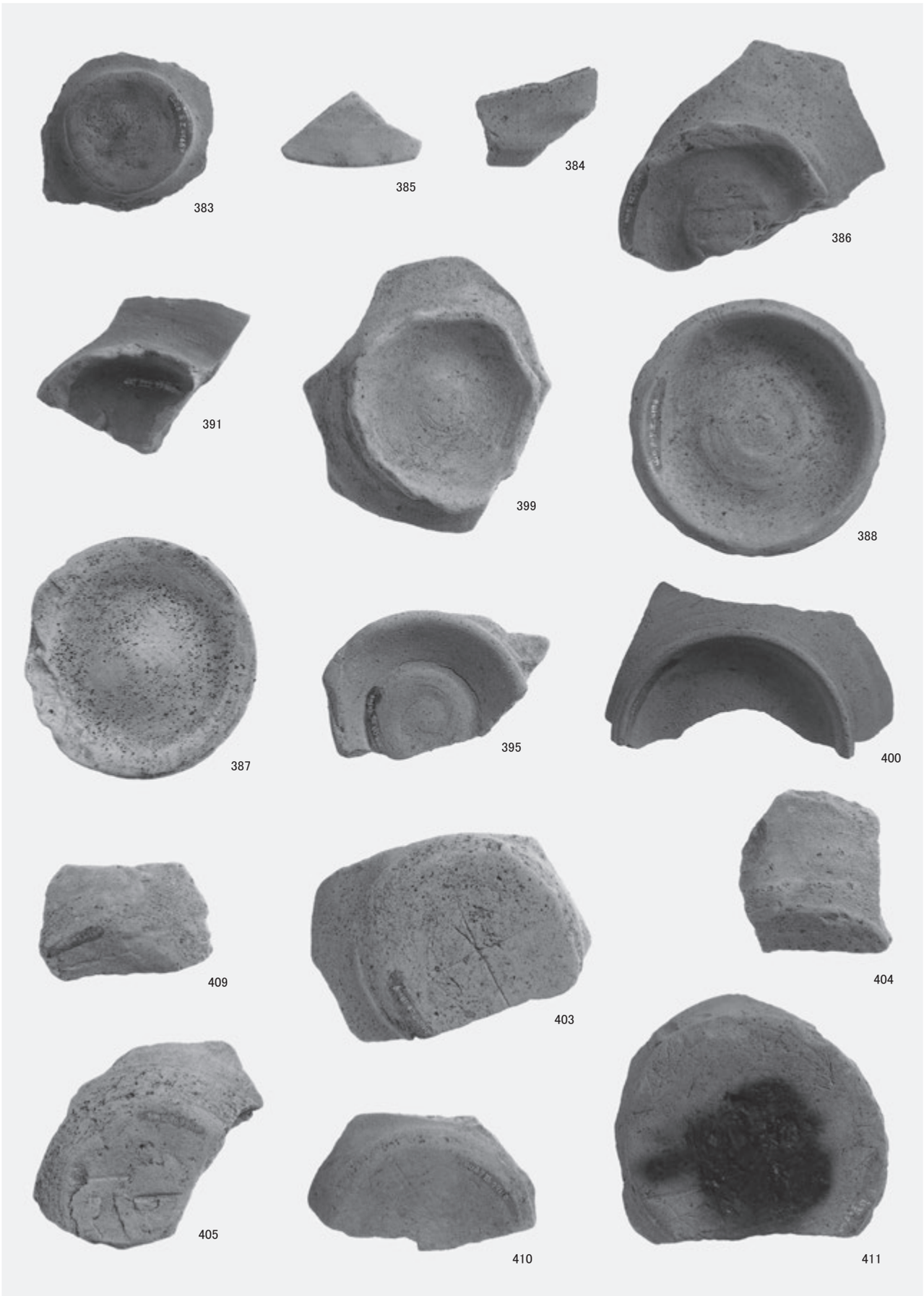


縄文時代早期石器（3）

縄文時代早期石器（4）



古墳時代の土器・弥生時代の石器



古代土師器（1）

図版50

421

414

415

430

431

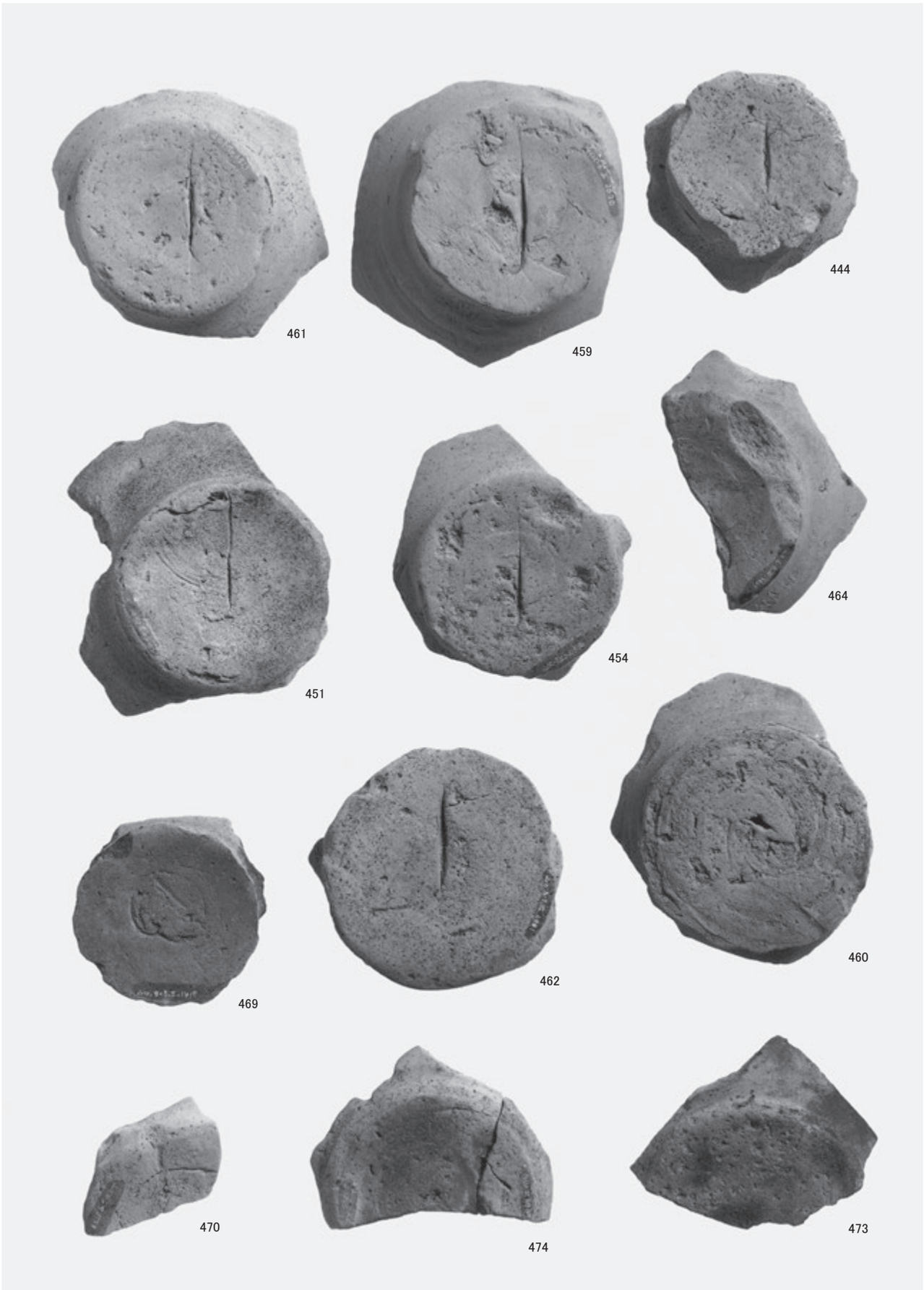
432

443

463

472

古代土師器（2）

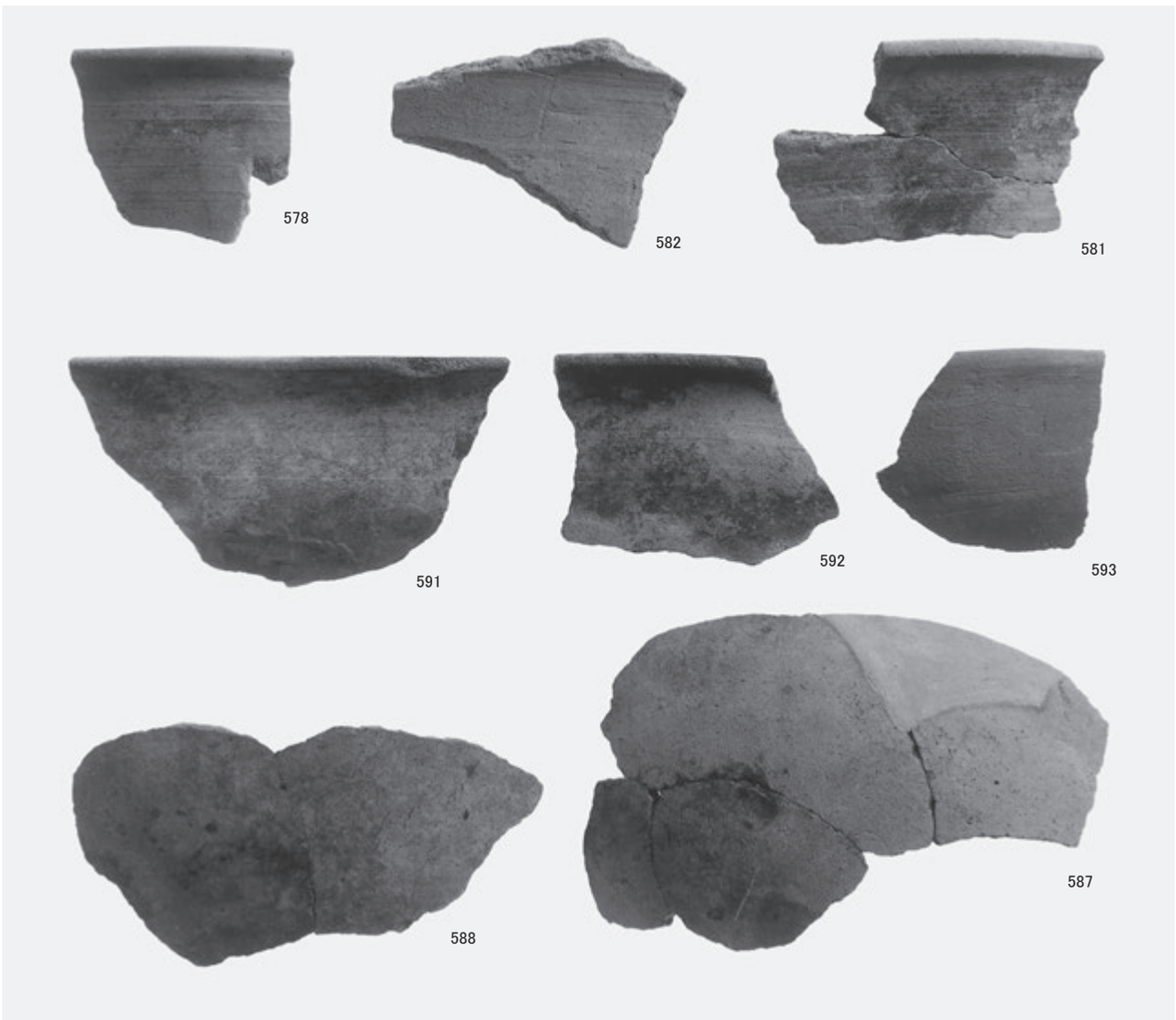


古代土師器（3）

古代土師器（4）

古代土師器（5）

土坑1号1



578

582

581

591

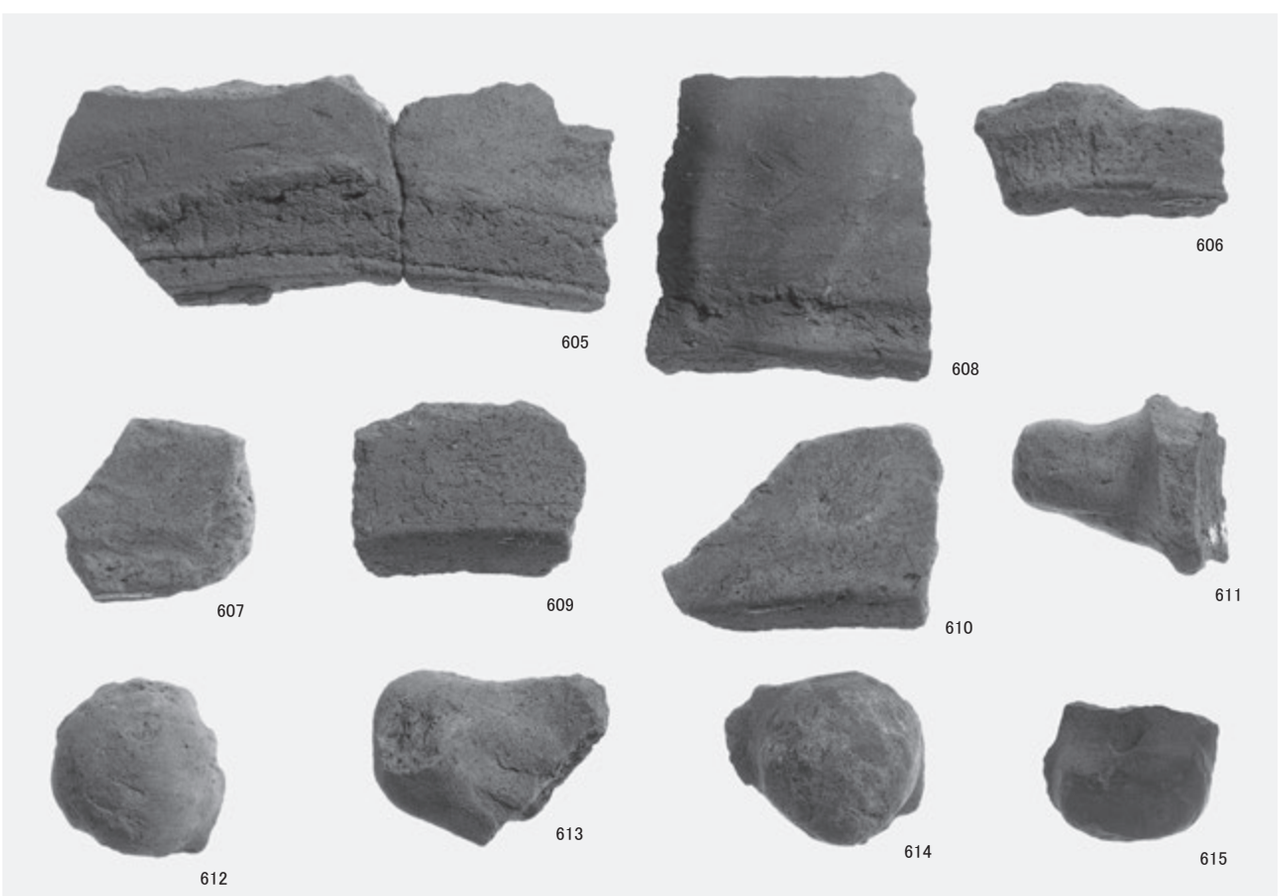
592

593

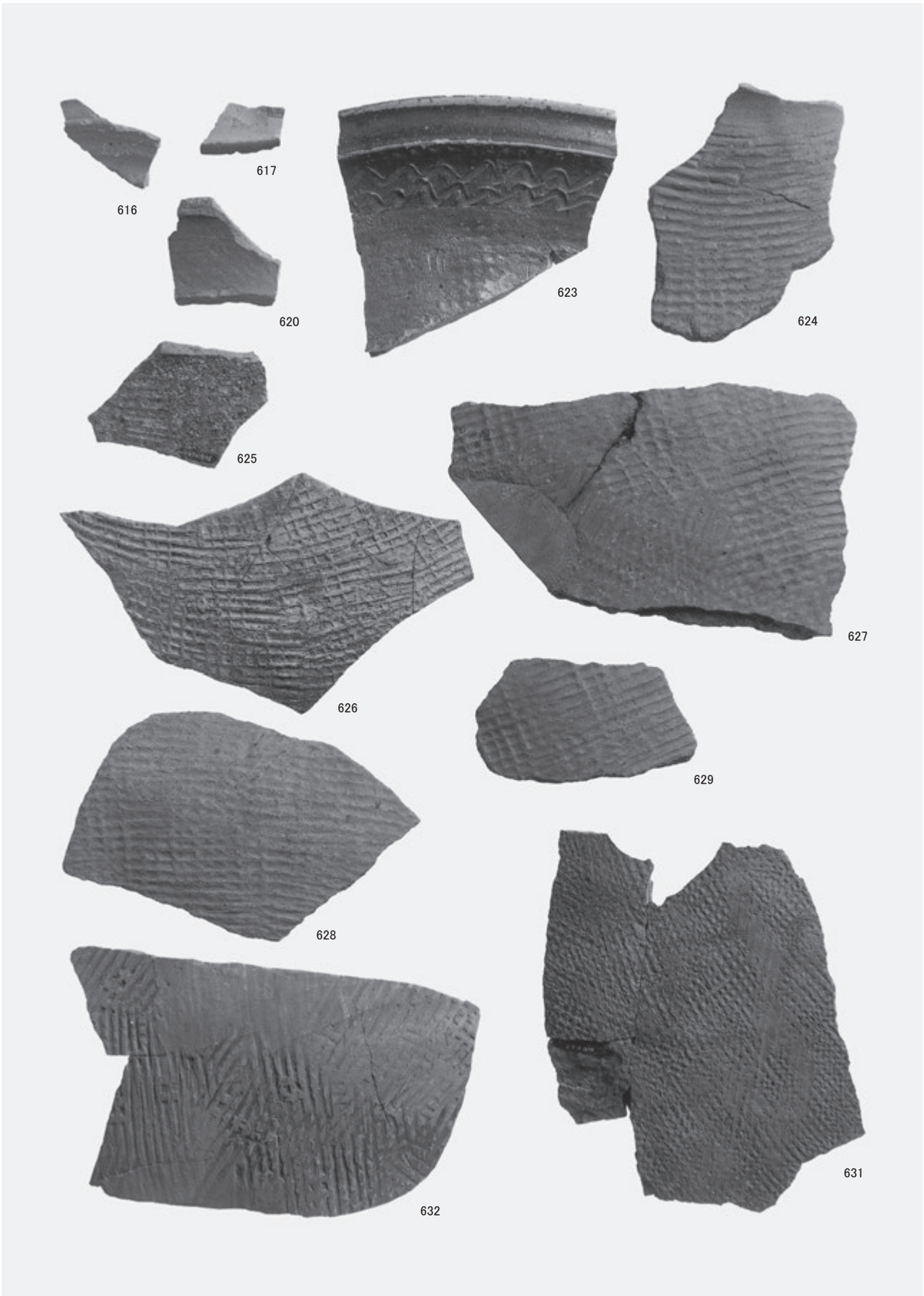
588

587

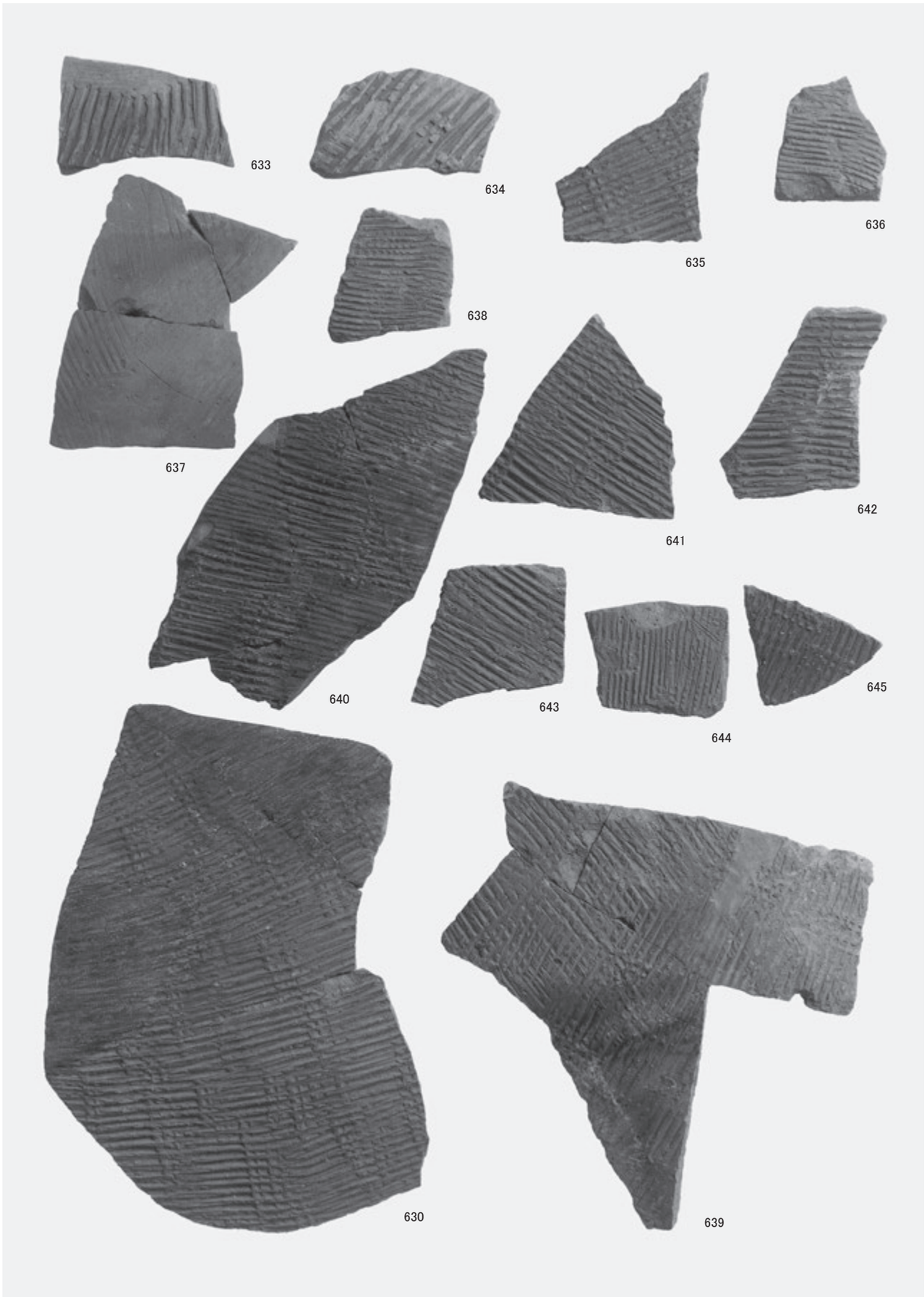
古代土師器（6）



古代土師器・その他

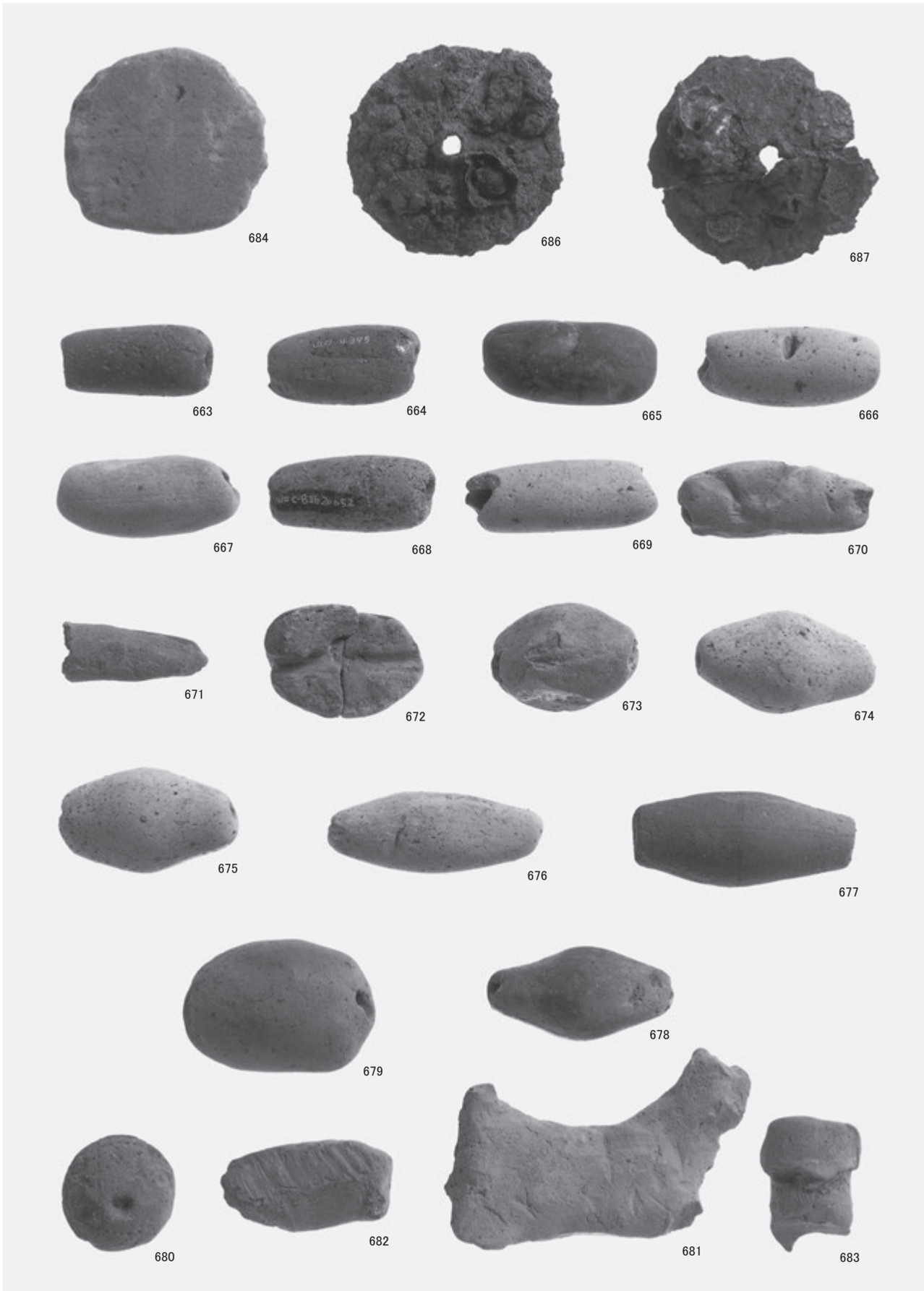


古代須恵器（1）

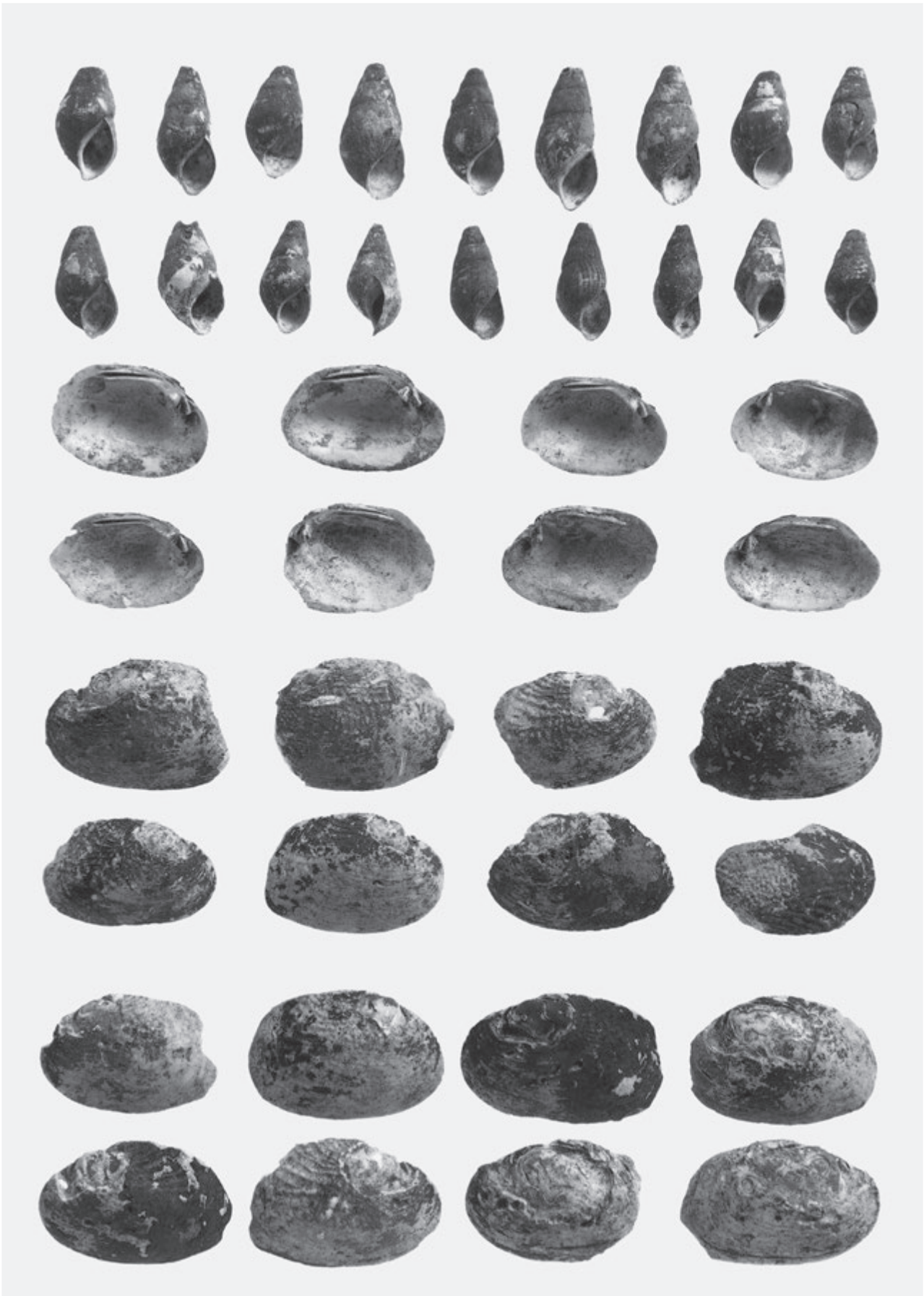


古代須恵器（2）

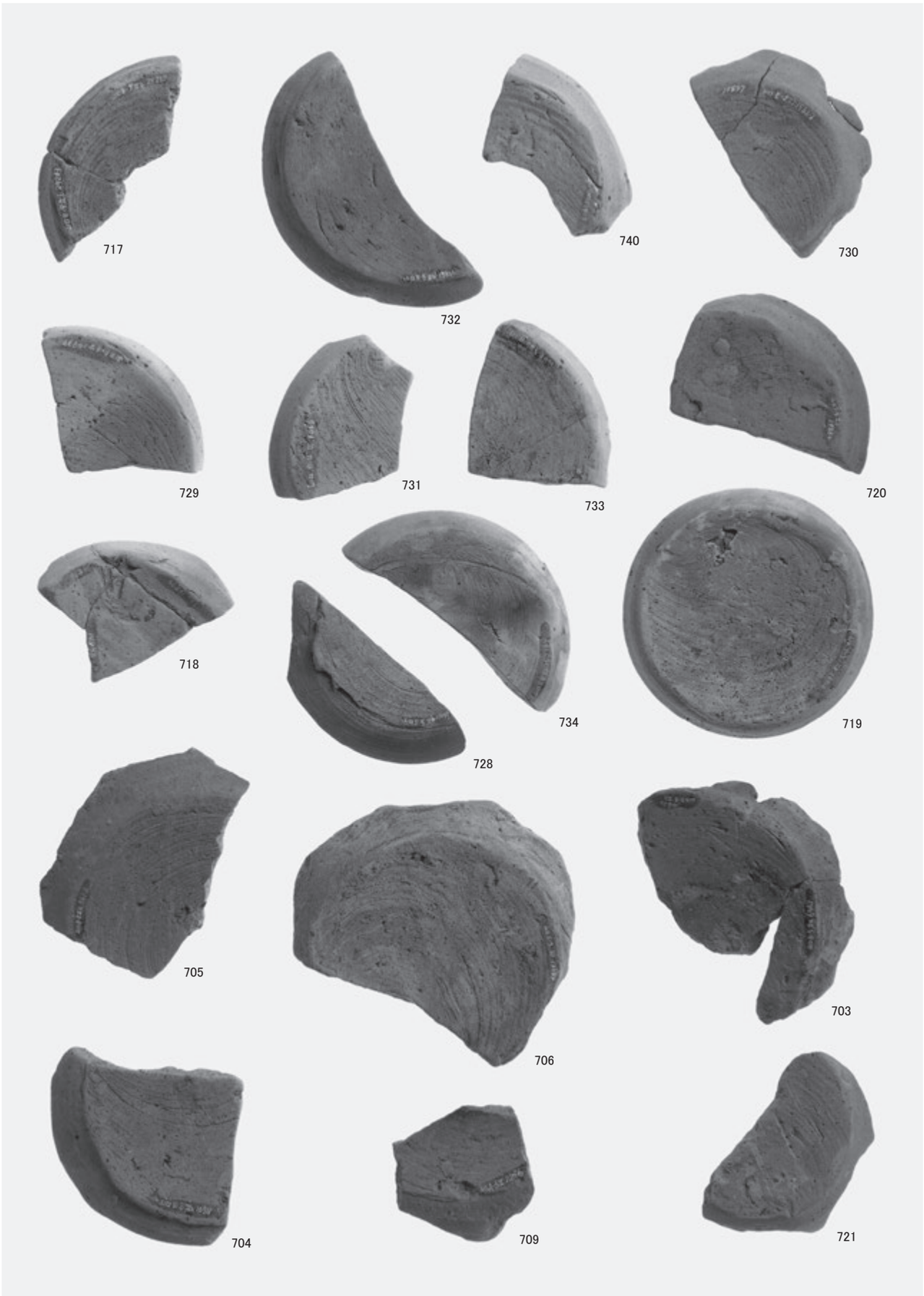
古代須恵器（3）



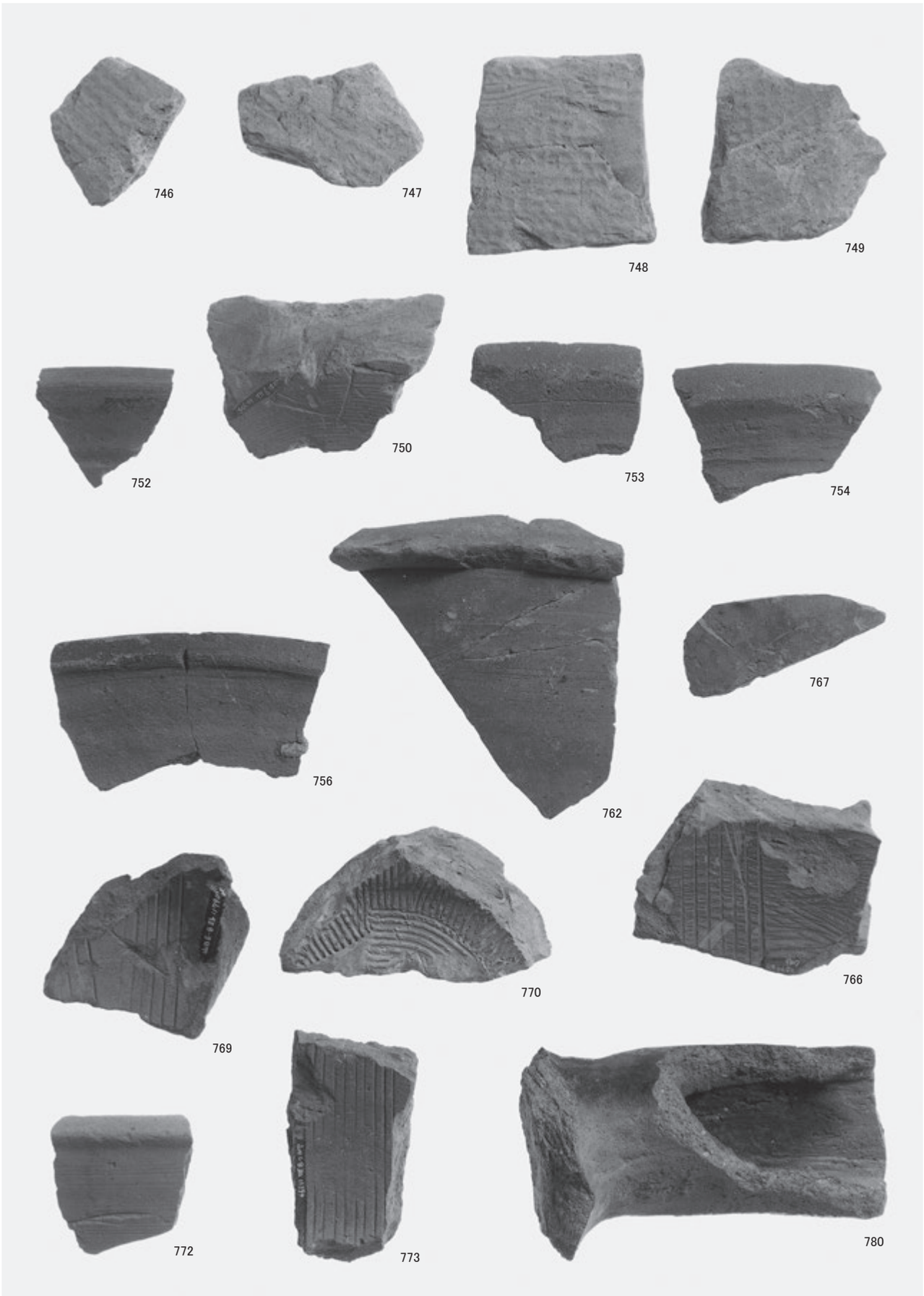
古代円盤状土製品・紡錘車・その他



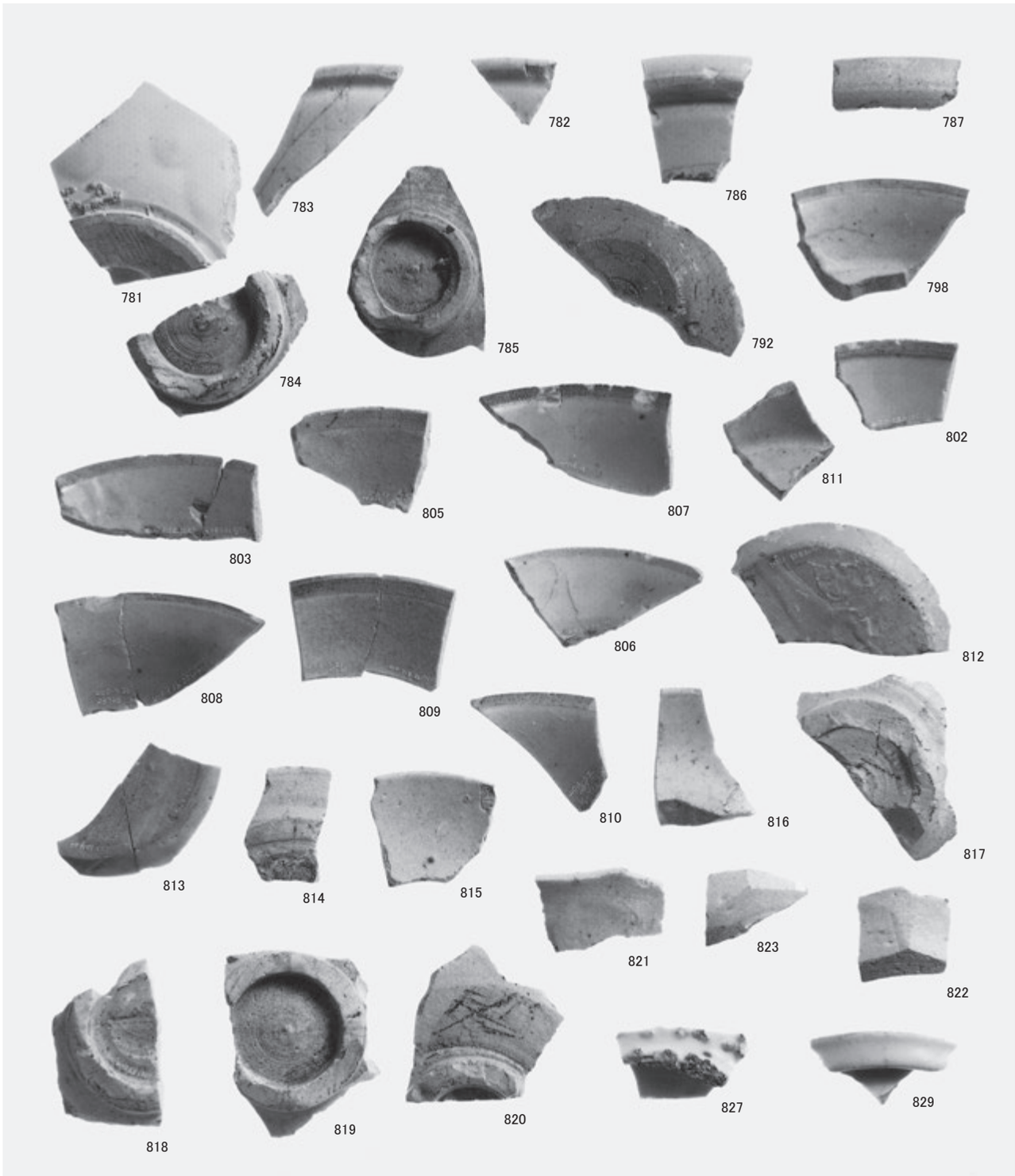
古代土坑５号出土貝殻


717
732
740
730
729
731
733
720
718
734
719
728
705
706
703
704
709
721

中世出土遺物（1）

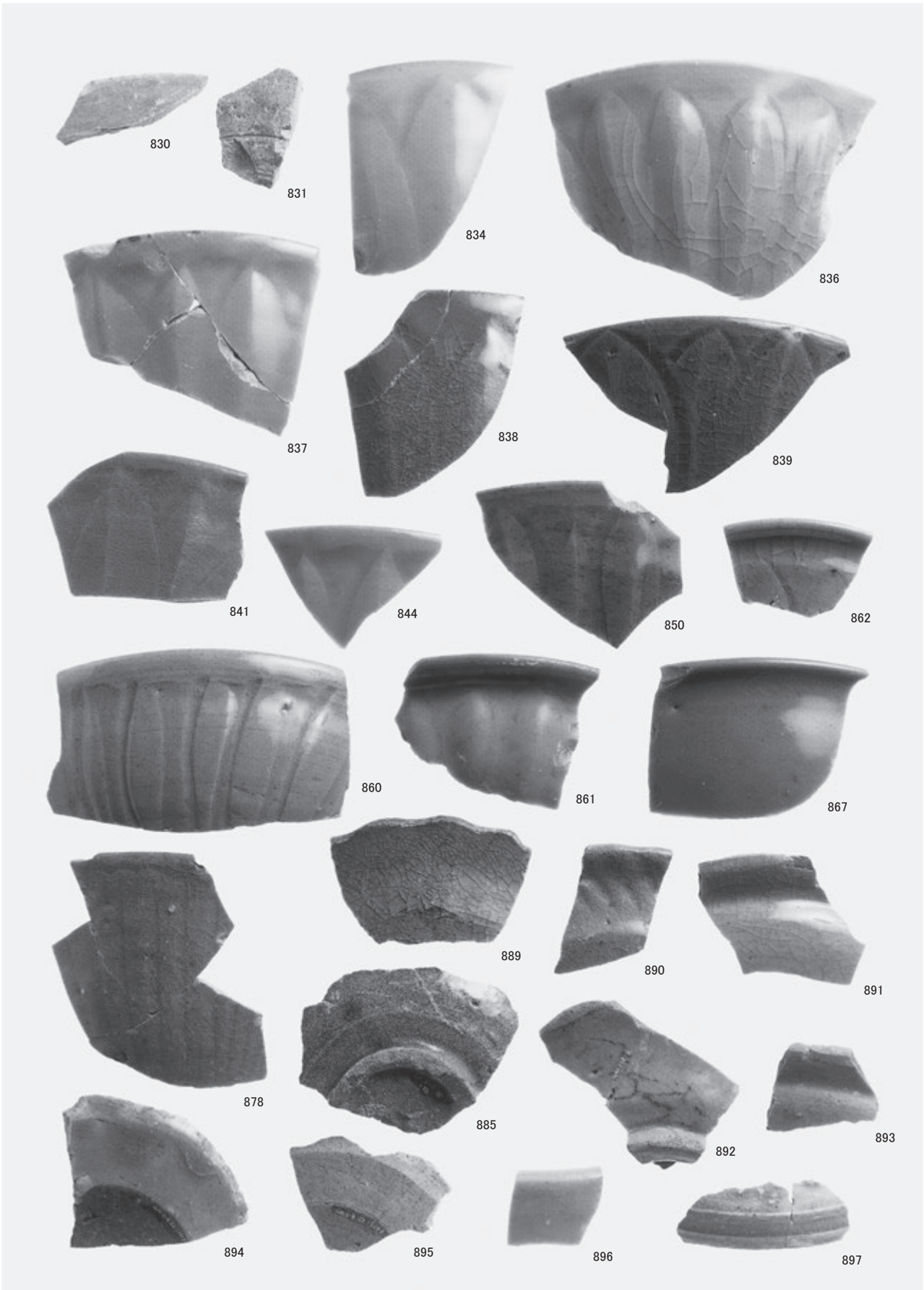

746
747
748
749
750
752
753
754
756
762
767
766
769
770
772
773
780

中世出土遺物（2）

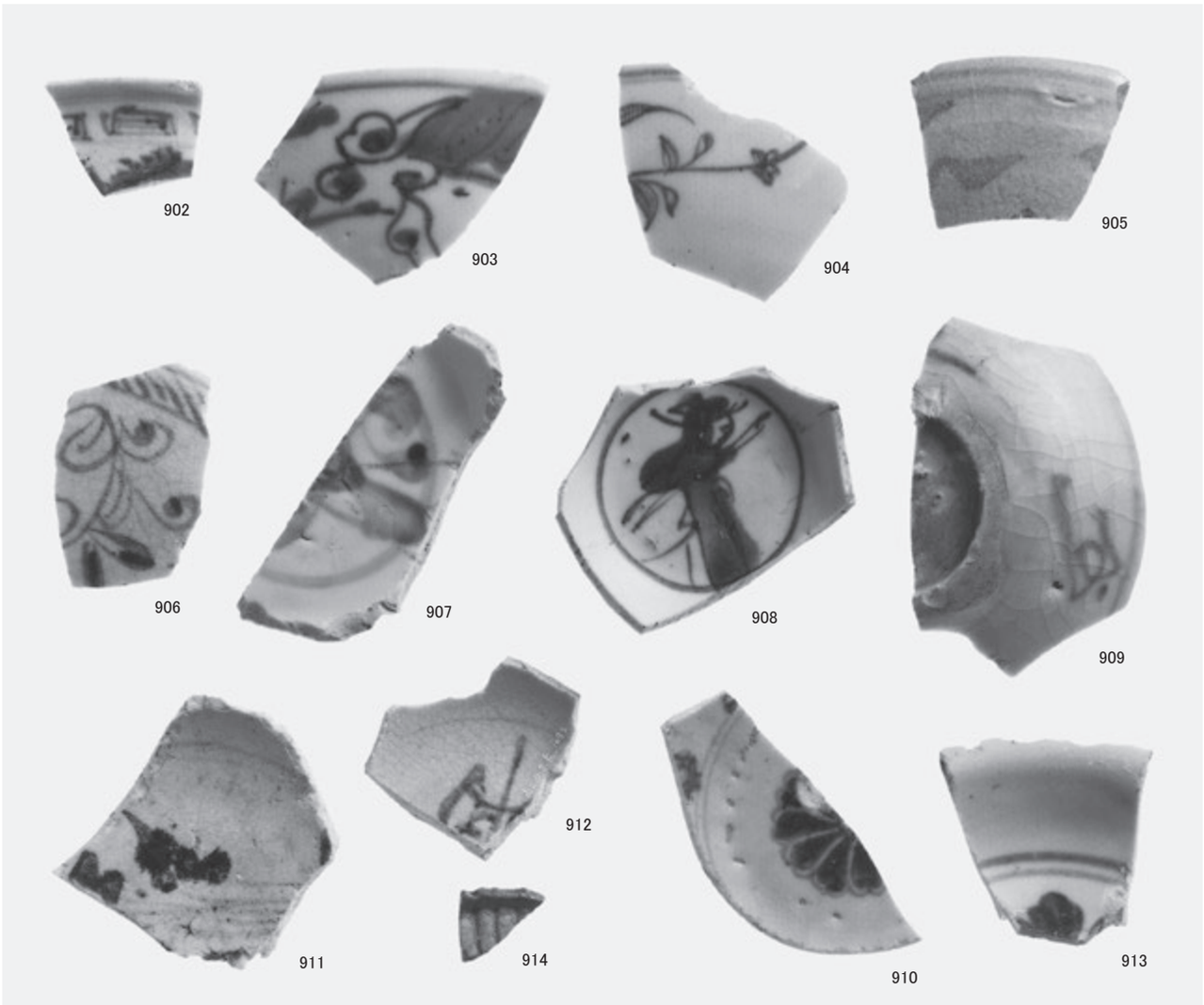

782
787
783
786
781
798
785
792
784
802
805
811
807
803
806
812
808
809
810
816
817
813
814
815
821
823
822
818
819
820
827
829

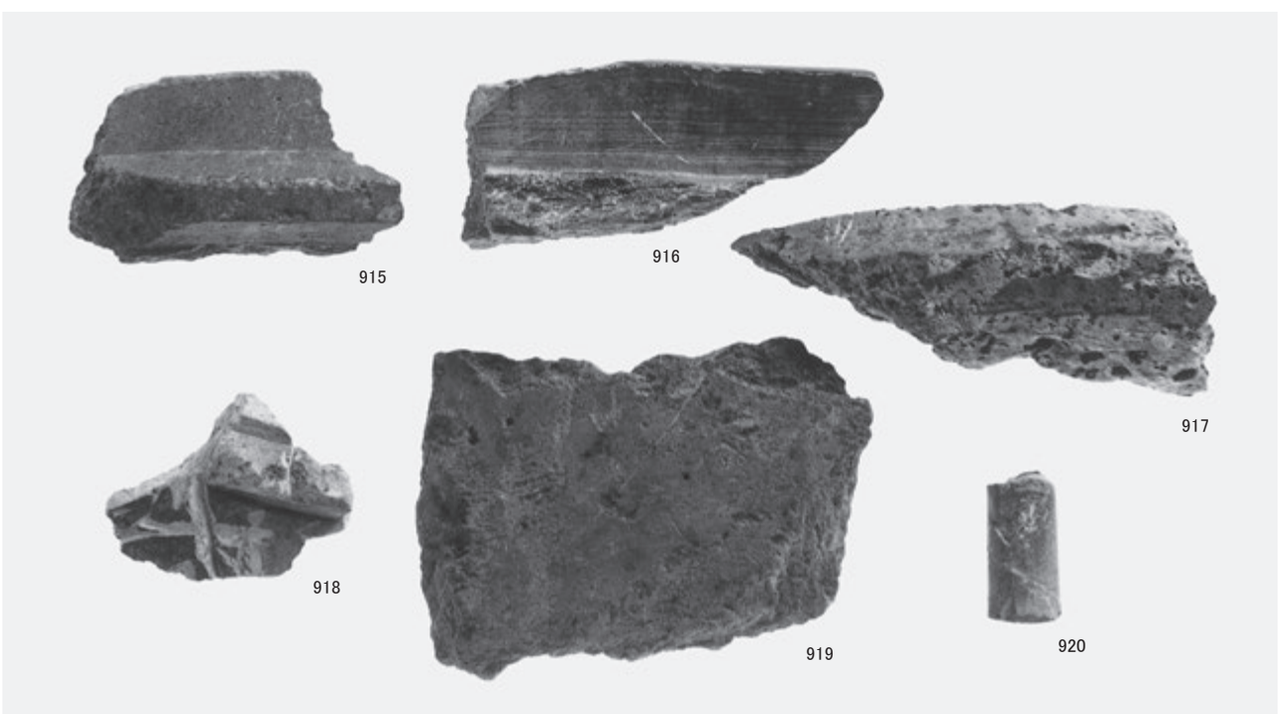
794
793
795

中世出土遺物（3）

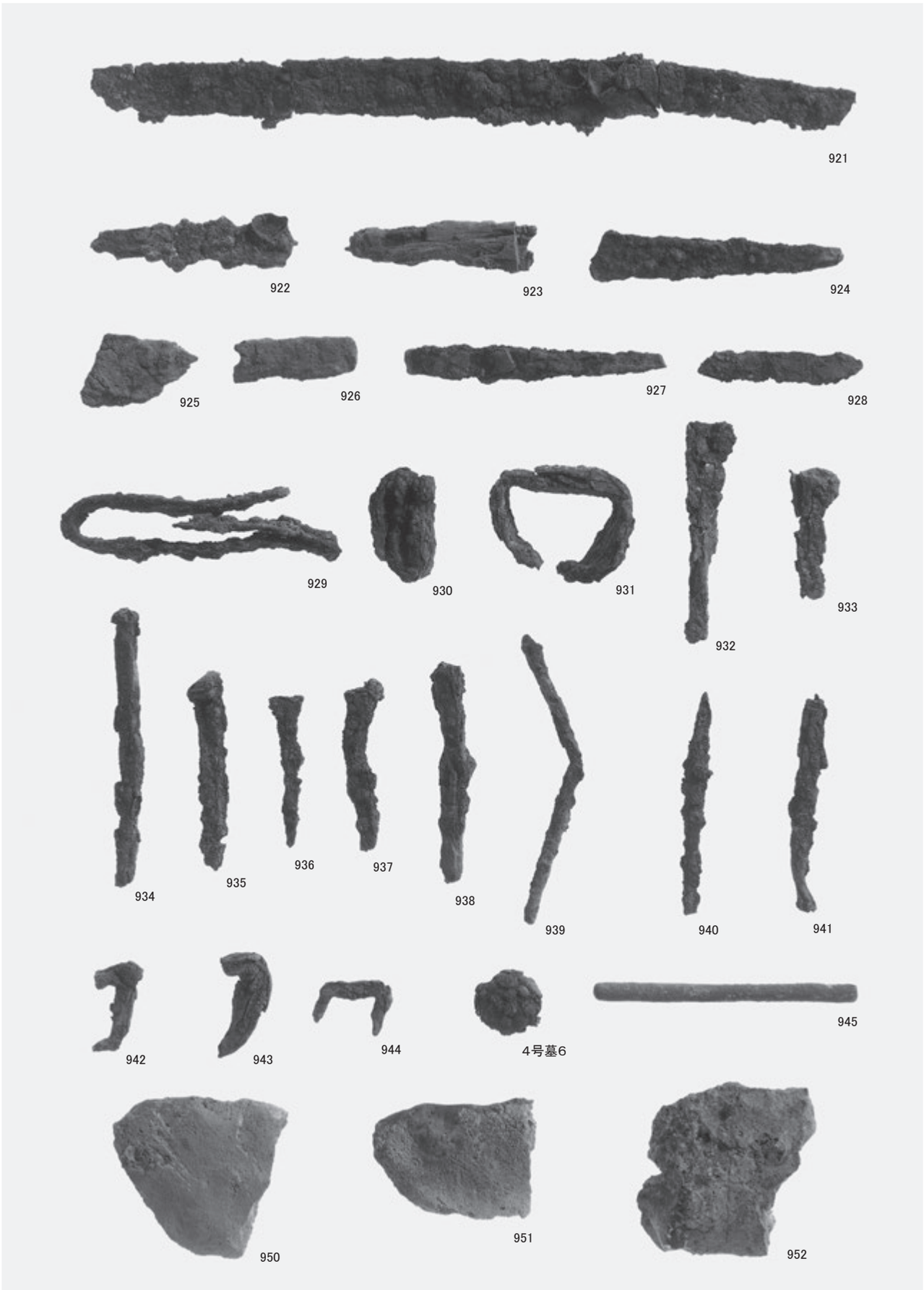

830
831
834
836
837
838
839
841
844
850
862
860
861
867
889
890
891
878
885
892
893
894
895
896
897

中世出土遺物（4）

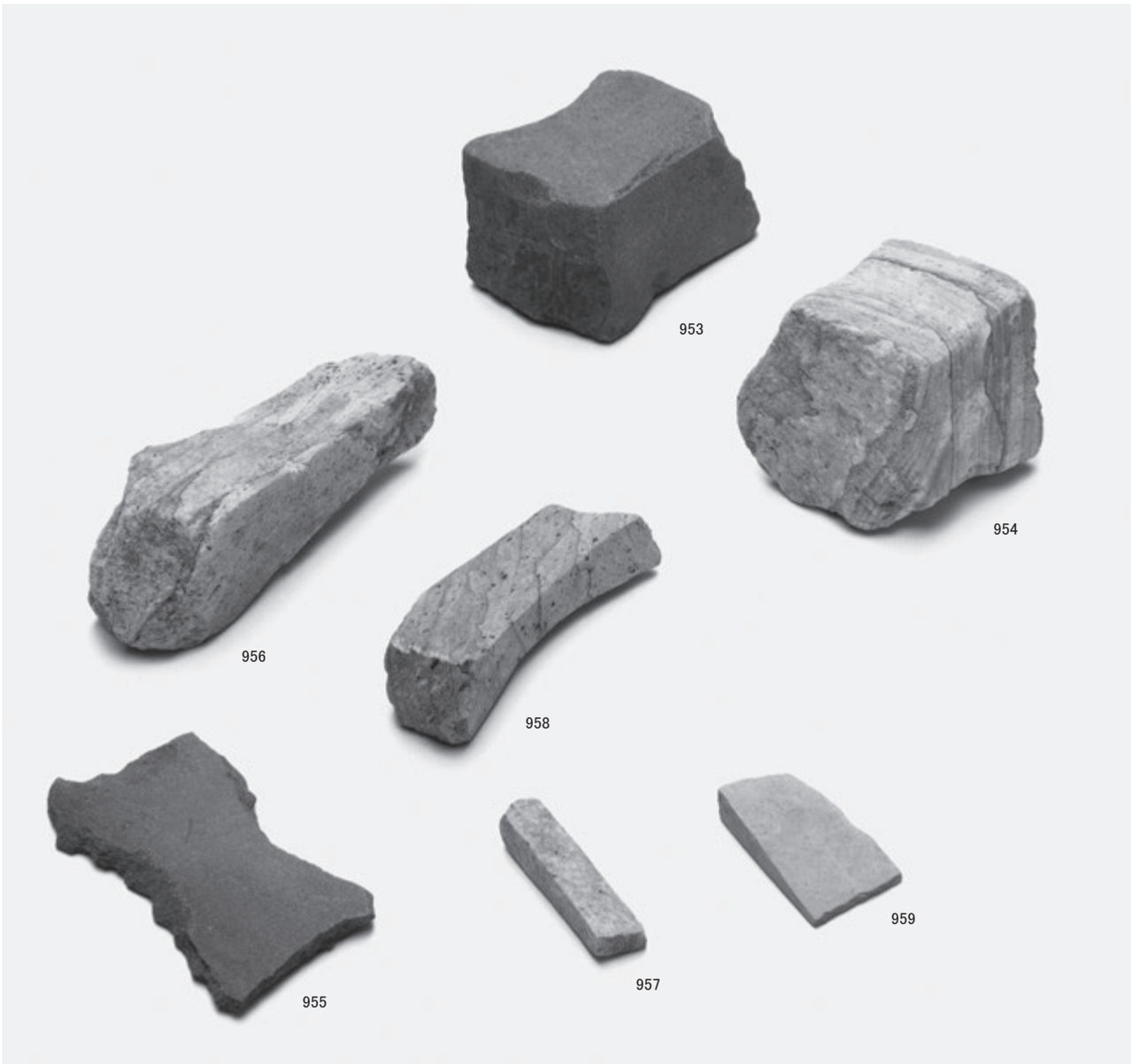

902
903
904
905
906
907
908
909
911
912
914
910
913


915
916
917
918
919
920

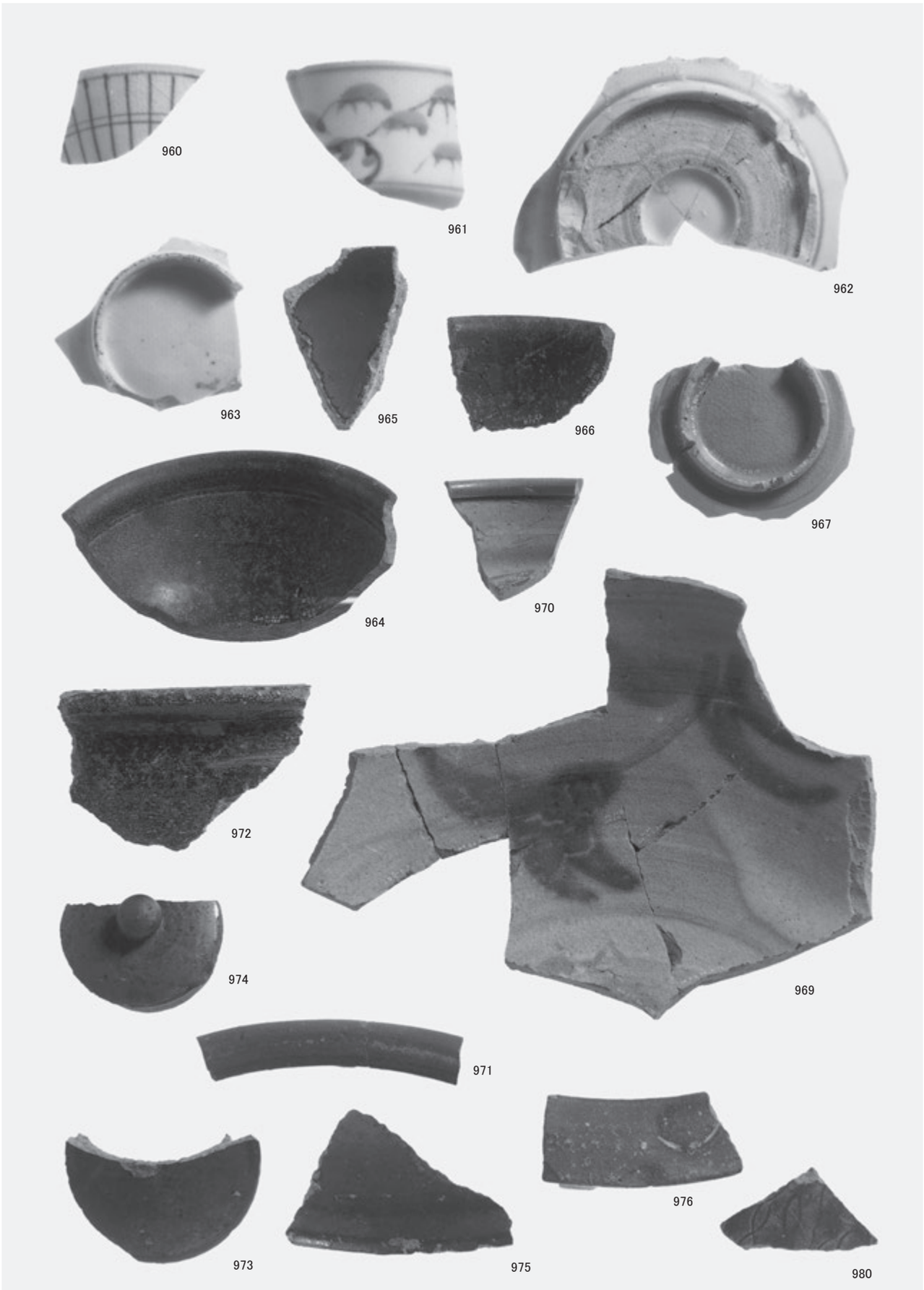
中世出土遺物（５）


921
922
923
924
925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
941
942
943
944
4号墓6
945
950
951
952

中世出土遺物（6）



中世出土遺物（7）・２号墓出土遺物


960
961
962
963
965
966
967
964
970
972
969
974
971
973
975
976
980

近世出土遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（179）

南九州西回り自動車道建設（薩摩川内都IC～高江IC間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（ＸＸＸⅥ）

山口遺跡

発行年月　2013年３月

編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-48-5811　　FAX　0995-48-5821

印　　刷　㈱イースト朝日
〒891-0122　鹿児島県鹿児島市南栄３丁目30-7
TEL　099-266-5522　　FAX　099-266-5523